

東方新抗禍 ～A new Fantasy destroys devious vice～

ねっふう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

く第一部く

我々の知る時より100年の年月が経った幻想郷。突如として妖怪の山の向こうから「禍王」なる強大な存在が来たりて幻想郷を攻撃した。幻想郷の民たちは結集し、これを迎え撃った。

永きにわたる死闘の末に、禍王は幻想郷から追放された。

しかし、この時から不思議なことに幻想郷の大地は魔の力に毒され荒野と化し、未曾有の大飢餓に襲われてしまう。これにより自然と幻想郷に住む人ならざる者たちは姿を消していき、代わりに隣にある禍王が治める「マガノ国」に支配され、荒廃した魔の世界と化してしまっただのだ。

それから更に200年後。鈴奈庵の店主の娘、本居新子は驚愕の事実を知るのだった。

く第二部く

もう一度平和の訪れた幻想郷。人々は技術や文化を発展させ、優雅に暮らしているが、多くの幻想郷の民は、マガノ国へ連れ去られたままだ。友人や家族を失った人々は嘆き、悲しみに沈んでいた…。

ある日、本居新子は何でも願いを叶えるという鬼の秘宝、「打ち出の小槌」を知る。解決の糸口を見出した新子たちは、再び冒険の旅へと出るのだった。

目次

第一部 四人の歌姫 〈Rebellion trigger〉

第1話	「鈴奈庵のヤンキーガール」	1
第2話	「東西南北の歌姫」	8
第3話	「旅立ちと洗礼」	16
第4話	「不思議な香霖堂」	24
第5話	「魔法の森の罨」	32
第6話	「赤い砂丘」	40
第7話	「南の歌姫」	48
第8話	「妖怪兎救出」	57
第9話	「竜の墓場」	66
第10話	「竜」	75
第11話	「西の歌姫」	83
第12話	「包囲網」	93
第13話	「夢見の泉」	101
第14話	「ケチャルコチル兄弟」	110
第15話	「仮面の人」	120
第16話	「強襲、怪物スラッグ」	128
第17話	「反逆の引き金」	137
第18話	「北の歌姫」	146
第19話	「帰還」	155
第20話	「哀しみに唾をかけろ」	163
第21話	「博麗神社」	171
第22話	「女はそれを我慢できない」	180
第23話	「東の歌姫」	189

第24話 「穴底の戦い」 197

第25話 「箱の仕掛け」 206

第26話 「恐ろしい真実」 214

第27話 「大切な名前」 222

第28話 「無限の闇を光に変えて」 230

外伝 幻想郷縁起

第一章 ヤクモユカリの話 243

第二章 禍の引き金 250

第三章 煮えたぎる禍 261

第四章 マガノ国 268

第五章 幻想郷の戦い 277

第六章 新たな危機 287

第二部 新たな幻想は禍に抗う Last Rebellion

第1話 「独白」 301

第2話 「新たな幕開け」 309

第3話 「破魔師シャム」 317

第4話 「紅魔の呪い」 326

第5話 「呪いの正体」 336

第6話 「新レジスタンス」 347

第7話 「語られし怪力の末裔」 357

第8話 「新地獄街道に行く」 367

第9話 「打ち出の小槌」 377

第10話 「迫りくる悪意」 386

第11話 「不死の少女」 397

第12話	”freedom” From Hell	406
第13話	「湯煙と火光獣」	421
第14話	「月の民」	431
第15話	「叛逆爪」	440
第16話	「ワイルドバレット」	450
第17話	「カイブツと潜入」	459
第18話	「疑問」	467
第19話	「思惑」	475
第20話	「究極の魔獣」	483
第21話	「空へ」	492
第22話	「蛇の試練」	501
第23話	「誤算」	510
第24話	「成長」	519
第25話	「ダイヤサカ奪還戦」	530
第26話	「知らない言葉」	543
第27話	「アンタの遺志は受け取った」	553
第28話	「転換計画」	562
第29話	「遠く群衆を離れて」	571
第30話	「イミテーションズゴールド」	582
第31話	「東方新抗禍」	594
第32話	「私達の真実」	602
最終話	「これからと未来」	611

第一部 四人の歌姫 　　Rebellion 　　tr

igger

第1話 「鈴奈庵のヤンキーガール」

幻想郷。人間と妖怪が絶妙なバランスで共存し合う、古き良き自然に囲まれた美しい土地。ある場所では妖精が楽しげな声をあげながらはしゃぎまわり、ある場所では吸血鬼が優雅に紅茶を飲み、またある場所では天狗が新聞のネタを求めて飛び回っている。妖怪にとつては、まさに楽園と呼ぶにふさわしい、素晴らしい世界だったのだ。

だが：

ある時、幻想郷の北西の方角、山の向こうより現れし「禍王^{まがおう}」が軍隊を率いて出現した。禍王は幻想郷の土地を勝手に拡大し、その範囲に自らが治める「マガノ国^{こく}」を作っていたのだ。禍王やマガノ国について、初めのうちは研究しその実態を探ろうとする妖怪もあり、その正体は幻想郷という枠内に収まりきらなかつた外の世界で否定され忘れ去られた物の集合体とか、外で存在を否定された大魔王だとか様々な考察がなされたが、彼らも結論を出す前にマガノ国軍によって滅ぼされてしまった。

マガノ国の軍隊の前には、幻想郷に棲む如何な妖怪も人ならざる者たちも、全く太刀打ちできなかつたのだ。だがある時、無差別に滅ぼされる理不尽さに、ついに妖怪たちは異例の団結を果たしたのだ。一丸となり反撃する幻想郷の民に、さしもの禍王もたまらずに軍を引き上げ、マガノ国へ戻っていった。

我々は戦いに勝利したのだ、この美しい大地を守り抜いたのだ、と騒ぎたて、しばらくはお祭り状態が続いたという。

しかし、喜ぶ間もなく、幻想郷に新たな危機が訪れた。急激に大地が痩せ細り、未曾有の大飢餓が襲ったのだ。自然は破壊され、妖精などと言った自然に依存する種族は次々と滅び、それに伴って幻想郷を見限った妖怪たちも、徐々にその姿を消していった。

邪魔な妖怪の居なくなつた幻想郷に、待つてましたといわんばかりにマガノ国の魔の手が忍び寄つた。それから、そう長くない時の間に幻想郷は禍王に支配され、残された人間たちが住む人間の里もやがて禍王の手に落ちた。最早、楽園と呼ばれていたころの面影は全くない。荒廃しきつた、魔の世界と成り果ててしまつたのだ。

それから、さらに200年の年月が経過した。

本居新子^{もとおりにいしこ}は走つていた。腰まで下げて履いたジーンズに入れずにだらしなく垂れているシャツの裾が揺れる。狭い路地の左右には崩された家の壁が点在しており、雑草以外の植物は皆、もう春も終わりだというのに葉も何も付けておらず寂れた雰囲気とする。だが新子にとつてはこれが普通であり、またこの人間の里の住民にとつても当たり前前の光景であつた。いや、里の一番の年長者から見れば、子供の頃はいくらかマシだつた、と言うかもしれない。とにかく、作物もろくに育たない、建物を直せる人も居ないので、ずっと里は荒れ果ててしまつていたのである。

といつても、もう見るに堪えない程荒れに荒れまくつてまさに廃墟の町と化しているのは里の中心の土地だけであり、里の外側に行くほど廃墟から貧民街になつてきていくらかマシになつてくる。新子の父親が代々経営している、貸本屋^{すずなあん}鈴奈庵はそんな廃墟の地域と貧民街の地域の境目にあり、今は廃墟の町の路地を自宅に向かつてただひたすらに走つていなのだ。

こう走つているのは何故かという、ただ単に早く帰りたいがためである。いわゆる、不良娘としてそこそこ名の知れている新子は、毎日のように里のゴロツキとの喧嘩に明け暮れている。小さいころから背も高くても強く、男勝りで喧嘩っ早い新子は自然とそういった、不良娘となつていったのだろう。学校を出てからは家の鈴奈庵の仕事の手伝いをしながら、暇があれば里をほつき歩く毎日だ。さつきも自分と同一年ほどの少年グループを軽く叩きのめしてきたとこ

ろで、少し汗をかいたから早く家に帰って風呂にでも入りたい、という訳だ。

と、そこで果樹園の横を通りかかった。ここは小さい時からよく来てリンゴを盗んでたっけ。丁度良い具合に腹も空いていたのでこれを食べながら帰ろう。

それにしても、いつ見ても美味そうなりんごだ。まあ実際に美味しいんだけど。この果樹園をやってるじいさんとばあさんは大変なお人好しで、昔りんごを盗もうとしてるのがバレってしまった時もとくに怒られる事なく、快くりんごを一つ分けてくれたっけ。この里じゃ出荷するところが少ないから毎年りんごが余ってしまうようで、そういったのを里の貧しい人にタダで配っていたんだっけか。

柵を超えて果樹園の中に侵入し、背の低い木になっっている実を掴もうと手を伸ばした瞬間、あるものに目がいった。それは木にひもで結び付けられた看板だった。そしてその看板にはよく見ると、「禍」という字の焼き印が押されている。里中で知らない者はいない、その名を聞けば誰もが震えあがる、北にあるでつかい山の向こうのマガノ国に棲む禍王の刻印だ。その「禍」のマークが印されたものは全てマガノ国および禍王の所有物であり、一般の人間には近寄る事すら許されない。

しかし、何という事だ。この果樹園まで禍王の手に落ちていたなんて。あの老夫婦は死んでしまったのだろうか、それとも殺されてしまったのだろうか？だが、ここのりんごが全て禍王の所有物になったということは、逆に盗むのに抵抗が無くなったとも思う。私だって禍王は大嫌いだ、だから嫌いな奴の物を盗んだって罪悪感も何もありませんいだろう。遠慮なくいくらでも盗める。

気を取り直して、木になっっている真っ赤なりんごを掴む。蜜が皮の外にまで染みていてちよつとべたべたする。そしていよいよもぎ取ろうと力を込めた瞬間、背後から怒号が飛んできた。一瞬、あの老夫婦か？と思ったが、やけに声に張りがある。まさか…。

「貴様、それを禍王様の果物と知っての事か!？」

後ろにいたのは、灰色の軍服に身を包んだやたら血色の悪い男たち

だった。マガノ憲兵団だ。その名の通りマガノ国から派遣された憲兵団で、通常3人から10人ほどの小隊で行動している。少なくとも里には常に必ず5つほどの隊が滞在しており、里の見回りや住人に対しての暴行行為、そして飲食店や雑貨屋にマガノ国を非難するようなものがないかチェックをしに押し入ってくることもある。新子の実家の鈴奈庵にも、何年か前までは年に一度、置いてある本のチェックをしに来ていた。そのたびに、憲兵の意にそぐわなかった本が回収されてしまっていたが、最近はこんなボロい貸本屋に大層な本があるわけがない、と判断したのかめつきり来なくなっている。まあ、来ないほうがこつちとしてはいちいちむかつ腹を立てることもなくて良いのだが。

「ちつ、憲兵かよ……」

舌打ちをしてぼそりと呟く。

「お前、今そのリングゴを盗もうとしたな？この印の押された看板が目に入らなかつたはずがない……」

「随分余裕だな、これからお前を大通りまで引きずって大衆の前で処刑されるのが……わかつているのか？」

よく何かをやらかした人が、大勢の前で憲兵に痛めつけられてから拳句に見せしめとして殺されるのを何度も見てきた。里に侵入してきた有象無象の妖怪も憲兵団の前には成す術もなく残虐に滅されるもの何回か目撃した。里の人々はそれを見るたびにマガノ国に対する恐怖をより一層強められ、生活を脅かされる。だが、新子はそれに對していつも怒りを覚えていた。

「憲兵サン、アタシはおめえらみたいのは大好きだぜ？」

「なめてんのか、殺してしまうぞ！」

新子をとつ捕まえようと両腕を広げながら走って来る憲兵。憲兵団は隊ごとに皆そっくりな顔にそこそこの体格をもっており、組み伏せられれば一般の人間であれば逃げ出すことは不可能だろう。そう、一般の人間であれば。

柵の上に足をかけ、そのまま高く飛びあがる新子。予想外の動きを見せた小娘に対して驚きの表情を浮かべながら上を見上げる憲兵の

顔面に、思い切り拳を叩きつけてやる。ドイツもコイツもそうだ、アタシを女だからってナメてかかってきて結局殴られる。次に向かってくる憲兵の顎を踵で蹴り上げ、胸ぐらを掴んで後ろの憲兵共に向かつて振り回しながら投げつける。

「この……」

憲兵の一人の声と共に、背後から新子の頭に火花が散ったような衝撃が走った。額に温かい液体がツツ、と流れて来るのが分かる。憲兵団の各々に所持している武器の一つ、電気棒だ。名前の通り簡単な道具で、グリッブ部分にあるボタンを押すと電流が流れる警棒。主に対象の意識を奪うための無難な手段として使用される。

いつも通り、これで生意気にも歯向かってくる愚かな里の人間を動けなくさせた気になったのだろう、薄ら笑いを浮かべる憲兵。

「おー、効くねえ……」

しかし、さらに不気味に微笑みながら、何ともないように言葉を発する新子。ありえない、打った強さが足りなかったか？ならばもう一度殴ってやる。それでも気を失わなかったら、何度でも、死ぬまで殴ってやる。憲兵は手に持った電気棒を強く握りなおし、怒りに目を見開いて声をあげながら新子に殴りかかった。

「おめえら、他の隊に聞かなかったんかよ？このアタシ、本居新子にや手を出すなつてよ……！」

ブウン、と小気味の良い音を立てて空振りされた電気棒。憲兵はすぐにまた棒を振り上げようとするが、既に目前まで迫っていた新子の肘が鼻を押しつぶしながら顔にめり込んだ。鼻血を吹きながら後ろへ倒れ込もうとする憲兵に、ダメ押しと言わんばかりにもう一発殴りつける。

「な……貴様、何者だ……!?!」

「知らねえのか、じゃあお前らに教えてやるからよ、他の隊の奴にアタシの事を伝えてくれや」

3人いた憲兵のうち、最後の一人の頬を殴り、よろめいたところに股間を思い切り蹴り上げてやった。体が一瞬宙に浮かぶほどの威力の蹴りは憲兵をまるで転んだ幼子のように地面に這いつくばらせ、悶

絶させた。憲兵はたまに女性だけで構成された隊も見かけるが、基本的には男性で構成されている。トドメにはこういう攻撃が一番効果的なかもしれない。

「玉一回蹴られたくらいで泣いてんじゃねえよ。さてと…」

目の前に倒れていた憲兵の頭を蹴ってどかし、もう一度柵を乗り越えて木になっているリンゴに手をかける。4つほど貰っておこう。リンゴを4つもぎ取り、腕で抱え込んでからまた柵を越えて戻って来る。

「じゃあな！禍王のヤロウによろしく言つといてね」

新子は相変わらず倒れたままの憲兵をまたいで、その場を後にした。

と、この通り、あれぐらいの人数の憲兵団ならば新子の敵では無い。流石に10人ぐらいの多めの隊で向かってこられると一筋縄じゃいかなくなるが。それに、里中の人間が恐れる憲兵どもを叩きのめすのは非常に気持ちがよく、愉悦にひたることができる。アタシにボコボコにされた隊は二度と姿を現さないしな。

やっと自宅が見えてきた。亀裂の入っている壁に、大きく「鈴奈庵」と書かれた看板。父親から聞くに、300年も前からずっと続いている貸本屋だ。何度も舗装を施し、時には再建しながらも何とか細々とこの場に留まり続けている。このご時世でも意外と客はちゃんといて、よく貧しくて子供を学校に通わせられない親が訪れて、何冊か本を借りていく。本当に貧しくて代金も払えない客には、ツケという形で代金を免除したりもする。ちゃんと金を取ればうちだつてもつと楽になるだろ、と何度店主である父に言っても、父はいずれ返してもらう、と言うばかりで結局ツケをきちんを回収したことは数えるほどしかない。

「よつ、イバラちゃん、死んでねえか？」

鈴奈庵の裏に回り込み、自宅の玄関へ向かう。玄関の側に敷かれた莫塵の上に座り込んでいる、ボロ布を纏い、布をターバンのように頭に被せた女性にそう話しかける。彼女はイバラ。新子からはイバラ

ちゃんと呼ばれている。ぎっくりと言ってしまえば彼女は物乞いの女で、新子が産まれる少し前からここに住んでいるらしい。基本的に口数が少なく、こちらから話しかけたりしない限り喋ることはない。昔に、両親が死にかけたこの人を見つけて家で匿おうとしたが、彼女は断固として家に上がることは無かった。結局イバラは新子の両親と話し合った末に、この玄関の横に居座るようになったのだ。別に、新子もその両親も特に迷惑になど思っていない。言っちゃ悪いかもしれないが、流石は物乞いと言うべきか、勝手に自分で食べ物を見つけてきてそれで生き長らえているようだ。だが運悪く何日も何も食べれなかった時は、見かねた新子たちが何か食べ物と渡してやる。そういう関係築いているのだ。

色が落ちて薄くなったようなぼさぼさの髪が揺れ、イバラはゆつくりと顔を上げて新子を見上げた。

「これやるよ」

新子はイバラに向かって軽くリンゴを投げて渡した。さつき4つ採ったのは、自分と両親の分、そしてこのイバラの分だったのだ。イバラは慌てたように両手を出してリンゴをキャッチして、ぺこりと頭を下げた。

それを見てからにっこりと少し笑ってから、新子は玄関の戸を開けて家に入ってしまった。これから、驚愕の事実を教えられるとは夢にも思わずに…。

第2話 「東西南北の歌姫」

「あら、新子。おかえりなさい」

木製の安楽椅子に座りながら前後に揺れている、母親が帰宅した新子に向かつてそう言った。薄い着物の上に黄色いエプロンを着ており、綺麗な真っ黒い髪の毛を後ろで結んでいる。

今は座っているのでわかりにくいだが、新子の母親は女性としてはかなり身長の高い部類に入る。新子の長身も、きつと母親譲りなのだろう。

「うん、ただいま…母さん」

新子はそのつけない態度でズカズカと台所の水道まで歩き、ステンレスの大きめのタライに張つてある水を手ですくい、顔の汗を流す。タオルで顔を拭いて、そのままタオルを首にかける。ほのかに洗剤の匂いがした。

「シャワー浴びたいんだけど」

今日はけっこう汗をかいてしまった。腋や首元が汗でべたべたしているというのは気持ちのいい感覚ではないので、すぐにでもこの汗を洗い流したいところだ。母さんは浴びてくればいいじゃない、と言つてまた膝の上に置いてあつた本を読み始めた。たぶん店で新しく入荷した本を念のために見ているのだろうか？

新子は台所から続く洗面所で服を脱ぎ、浴室へ入つていった。新子の母は、シャワーが流れる音がし始めたのを確認すると、また台所から続く別の戸を開けた。この戸は鈴奈庵の店内に繋がつていて、ここを通ると支払い時のカウンターの中に出る。

「新子が…帰つたのか？」

新子の母親はカウンターの途中で椅子に座っている、肩幅の広い痩せた男の肩に手を置いた。すると男はゆっくりと振り向いて、開いているのか閉じているのかよくわからない、半分まぶたを下げた目を向けてそう言った。

「ええ、さつき。今はシャワーを浴びていますわ」

「…今日は、あの子の18歳の誕生日だ。私たちは…この日を、ずっと

待ち望んできた」

そう、この男は新子の父親であり、今の鈴奈庵の店主である。もう50歳を超えていて、まだ働ける年齢ではあるが、生憎このあまり力のない体系のせいで力仕事もあまりできなくなってきた。だから、本を仕入れたり、そして仕入れた本を置いたりするのは新子に任せてしまっている。自分はこうしてカウンターに座って、事務の作業に徹している。

「禍王の計画を…挫く日を…」

「ふう」

シャワーを浴び終わった新子は、まだ強く握れば水が滴り落ちそうなくらい濡れている茶色い髪を揺らしながら、台所に両親が二人とも居ないのに気が付いた。二人とも、店の方に居るのだろうか？

新子が店の方に出ると、思った通り両親がカウンターの前に座っていた。今日はもう店を閉めたのか、いつもより早いな…。

新子は暇つぶしに、と適当に本棚から一冊の本を取り出し、椅子に座ってパラパラと流し読みする。内容は理解する気もないが、一応貸本屋の娘なのでこうやって本を読む素振りだけはしておくことにしている。

「てゆうかさア…さつきから辛気クセー雰囲気で固まってよ、何なんだよ父さんも母さんも!」

両親に指を差しながらそう怒鳴った。

「今日は、お前の誕生日だったな」

「あ?そうだけど、今さら親に祝ってもらうような歳じゃねーだろ…」
新子は持っていた本を棚に戻し、父親の顔を見る。いつになく真剣な顔だ、何かヤバいことを言われるのではないかと一瞬ドキッとした。

「…確かに、娘の誕生日はめでたい事だ。しかし、私は新子にあることを頼みたい」

「あることオ?」

「お前は…『幻想郷縁起』、を何度も読んだな…」

幻想郷縁起。人間の生活の安全を確保するために妖怪等の能力や実態、または幻想郷における危険地区を記録し、理解や対策の啓蒙、準備のための知識を伝授するために、かつての稗田一族が著した書物だ。この幻想郷縁起だけはアタシにとつて、とても面白く、今までで唯一何度も読み返して熟読した本なのだ。

「ああ…」

「マガノ憲兵团ですら見つけれなかった、この床下のさらにもう一つ下のスペースに今も隠してある。最後に幻想郷縁起を記した13代目の稗田家当主が居た。その13代目は、幻想郷を脅かす、禍王のある恐ろしい計画を知ってしまった。それから数日と経たないうちに13代目は殺され、それきり稗田の転生も途絶えてしまい、彼女の遺した遺言書に従って私は幻想郷縁起を回収し、この鈴奈庵に隠した」

父さんは、カウンターの内側にある引き出しを開け、そして中にしまつてあつた物を全て出し、引き出しの底の板を外した。板を外すと、黄ばんだ紙切れが一枚置かれていた。引き出しの底にもう一枚板を置くことでこれを隠していたのだろうか。

「これが、13代目の遺した遺言書だ」

“ 禍王の恐ろしい計画を決して——はいけない。そうすればこの幻想郷に、もう一度——訪れるだろう。禍王の計画は——だ。だから”

自分の血を指に付けて、ペンの代わりにして書いたのだろうか、赤黒い文字で書かれており、ところどころ掠れてしまつて読めない箇所がある。紙の裏には、さつき父さんが言つた通り、幻想郷縁起を回収して隠してくれといった内容の文章が書かれていた。

「恐らく、言いたかつたことはこうだろう」

父さんはもう一枚、それほど古くない紙を机の上に置いた。

“ 禍王の恐ろしい計画は決して放置してはいけない。そうすればこの幻想郷に、もう一度美しい平和が訪れるだろう。禍王の計画は最悪だ。だから”

「恐ろしい…計画…?」

「そうだ。イバラ、入ってきていいぞ」

店の方の入り口から、ボロ布を纏った姿勢の悪い女性が片手に食べかけのリンゴを持って姿を現した。…え？イバラ？

そう、その人物はいつも家の玄関の横で生活している、物乞いの女イバラだった。

「イバラ…何だよ？」

イバラは残ったリンゴの芯まで平らげる。そしてゆっくりと新子らのところへ歩み寄ってきて、言った。

「この格好は何かと役に立ったわ。この姿なら、簡単にマガノ憲兵団に近づくこともできた。おかげで奴らの計画を調べることができたわ。憲兵も、私のような不潔な物乞いの女の前じゃ、重要な話もペラペラしゃべってくれる。どうせこんな奴に聞かれてしまったところで何になる、とでも思っていたのでしようね…」

「ちよつと待てや…どういふことなんだよ、父さん…」

新子は困惑しながら父親に尋ねる。あのただ力なく家の横に座ったきりだった物乞いの女が突然活気よく喋り始めたのだ。それに、奴らの計画を調べることができた？その紙に書いてある禍王の計画の事か？

「イバラのその姿は仮の姿。かつて仙人として山で暮らしていた茨歌仙なのだ」

「な…仙人だと？そんな偉い御身分のヤツが、ずっと物乞いのフリして情報を集めてたって言うのかよ？」

イバラは再び口を開いた。

「そう、本当の名前は茨木華扇、18年前まで仙人をやっていました。すべてはこの日のため…」

イバラの正体は仙人だった。仙人とは、長い鍛錬や秘術によって寿命を何百年も伸ばした不老長寿の人間の事を指す。超人的な力を身に付けており、妖怪に匹敵するかそれ以上の力を持っている。

「その仙人が、そんな格好してこの日のため…父さんが言っていた頼みたい事つてもまだ聞いてねえだろうがよ！」

いろいろな事を告げられたことにより、新子は少し苛立ちながら足

を床に叩きつけて大きな音を立てながら踏み出し、イバラ：いや、茨木華扇の右腕を掴んで引き寄せ、下から睨みつけた。だがその時、華扇の腕を掴んでいた手に違和感を覚えた。

「おっと…」

確かに、今、華扇の包帯にグルグル巻きにされた腕がぐにやつと潰れたような、おかしな手ごたえを感じた。だがそれが何だったのかを確かめる前に、華扇はするりと掴まれていた腕を抜いて後ろへ下がった。

「それを今から華扇に話してもらおうのだ」

華扇はコホン、と咳ばらいをしてから人差し指を上に向けながら何か喋り出そうとする。

「ちよ、ちよと待ってくれ…」

だがそれを新子が止める。

「なんですか?」

「言いくいんだけど…できれば先に風呂に入ってくれ!」

新子に鼻をつままれ、手で匂いはらわれながらそう言われた華扇は恥ずかしいような腹が立っているような表情の顔を赤くした。

「18年ぶりとなると、何やら気恥ずかしいものがありますが…」

風呂で体を洗い終え、本来の普段あるべき清潔な服装に身を包んだ華扇は再び新子たちの前に現れた。今までの薄汚れた幸の薄そうな顔つきとは打って変わった、キリツと整った顔立ちに、綺麗な艶のあるピンク色の髪の毛。頭の両サイドにシニヨンキャップを被っている。

「まあ」

「確かに、説教臭そうだけど仙人っぽい感じはするな…」

「ふふふ、これなら文句はないでしょう」

花のブローチをつけた胸元に手を当て、くるくると回りながら茨模様の書かれた前掛けと白いスカートを見せびらかす。

「…コホン、それでは本題に入りますが…。禍王の計画であり、今この幻想郷を蝕み続けている原因。それは…」
“東西南北の歌姫”、
“四人

の歌姫”」

新子は何だそれは、と言ったように目を細める。

「呼び名は今の二つあるようですが、面倒臭いので歌姫計画と呼ぶことにします。その歌姫計画とは幻想郷の東西南北の最端に歌姫と呼ばれる、大地や自然を蝕む歌声を発する存在を設置する事です。これは200年前、禍王が激闘の末に撤退した時、敗北の原因となった妖怪たちを滅ぼすために設置されたそうね」

200年前、禍王はマガノ国の軍隊を引き連れて幻想郷を我が物にしようと侵攻してきた。初めは有利に戦いを進めていた禍王だったが、ついに団結して一つとなった妖怪たちの前にたまらずに撤退していった。だが、それは仮の敗北に過ぎなかった。撤退すると見せかけて、実は幻想郷の東西南北の最端に歌姫と呼ばれる邪悪な魔力を放ち大地を蝕む存在を隠していたのだ。結果として、幻想郷から美しさは失われ、妖怪たちは唯一の楽園であった幻想郷を捨て、どこかへ消えてしまった。邪魔な妖怪を追い出し幻想郷をいつでも手籠めに出来る状態にするのが、禍王の“歌姫計画”なのだ。その計画は功を成しているといつていいだろう。

「これが物乞いのフリをして里中を駆け回り、時には幻想郷を回って仕入れた情報の全てです」

「このためだけに、さっきの物乞いの姿に耐えてたつていうのかよ…」

新子は若干震える声で華扇にそう尋ねた。

「耐えていた？私が耐えていたのは身なりの貧しさではないわ！この幻想郷を我が物顔で歩き回るマガノ国の者ども！焼かれる里の家々！荒廃する大地！殺されていく罪のない人間！それらを、ただおとなしく我慢して見ていなければならぬ自分に耐えていたのよ！！全ては、全部を貴女に打ち明ける、この日の為だね」

その強い口調で語る華扇は、その様子から本当に今までやる場のない怒りを感じていたことが伝わってくる。仙人という高貴な者が、理不尽な暴力にさらされる様子をただ見ているだけというのは自分の身なりよりも辛かったのだろう。

「その歌姫つてのは分かったよ。だけど、まさか…頼みたい事つて

のァ、アタシにそれをどうにかしてくれって事がよ？」

「そうだ。華扇と共に、4人の歌姫を退治してもらいたい」

「ムリムリムリ！流石にそんなん、アタシでも何とかできるわけねーだろー！大体、華扇一人でも充分なんじゃねえのか？」

新子は手を顔の前でブンブン振りながら拒否しようとする。流石に憲兵団くらいの相手ならいつものように何とかできるかもしれないが、幻想郷を蝕むような邪悪な魔力を絶えず発している奴を倒せと言うのはハッキリいつてできる気がしない。

「確かに、私一人でも行けるところまで行くつもりでした。でも、新子…貴女は憲兵と何度も戦ううちにある能力に目覚めているの」

「ああ？アタシが能力…？」

「そうです、貴女は気付いてないみたいだけど。何故、新子はいくら喧嘩が強いとはいえあんな簡単にマガノ憲兵団を倒せるかわかる？」

「知らねえよ…」

「それこそが新子の能力！」魔に対して力を発揮する”能力の所為なのよ”

華扇の指がびしつと新子を指した。

「その能力があるから、貴女は他の喧嘩相手や憲兵に対して力を発揮できるの」

“魔に対して力を発揮する程度の能力”。華扇のかつての知り合い風に言えばそんな能力名になるらしい。ここでいう魔、とは人間の持つ悪意や妖怪、マガノ国に関する敵の事である。述べた通り、悪意ある人間や妖怪に対しても能力は発揮されるが、それ以上にマガノ国の者に対してはさらなる効果が期待できるのだ。

「そして、この能力が大変貴重であり、四人の歌姫を倒すには必要不可欠であると考えた私と貴女の両親は、私が新子のお守りをすることに決めたの。生まれつき気も強く喧嘩っ早い新子では憲兵団とのトラブルが起こるだろうと思ったからね」

「な…アタシのお守りをしてだだとオ？」

「そうです。新子が外出するときはいつもね。ちなみに、貴女が叩きのめした憲兵団が二度と姿を現さないのは何故だかわかる？」

「お守りをしてたんだろ…まさか…」

「それはその憲兵を一人残らず始末していたからです」

華扇は包帯に巻かれた右手で何かを握りつぶすように拳を固めた。確かに、華扇の言う事が本当なら新子が相手をした憲兵にいくら本居新子に手を出すなど他の隊に伝えておけ、と言っても一向に新子の事を知る憲兵が現れなかったのも合点がいく。

仲間にそれを伝える前に、華扇に存在を抹消されていたのだから。

しかし、何という事だ…。今まで、一度喧嘩をした憲兵が二度と現れないのはアタシに恐れをなしているからと思つて天狗になつていたのが、実は華扇がやっていたからだつたなんて。これではプライドが大いに傷ついてしまう。

「まあ、つまり！貴女の能力は幻想郷をマガノ国の魔の手から救う希望となるかもしれないということですよ!!」

「…そうかよ、だったらやってやろうじゃないか。憎たらしい禍王の計画を、このアタシが挫いてぎゃふんと言わせてやる」

第3話 「旅立ちと洗礼」

「まあ、つまり！貴女 능력は幻想郷をマガノ国の魔の手から救う希望となるかもしれないということですよ!!」

「…そうかよ、だったらやってやろうじやんか。憎たらしい禍王の計画を、このアタシが挫いてぎゃふんと言わせてやる」

本居新子の能力、“魔に対して力を発揮する程度の能力”は悪意ある者、中でも特にマガノ国に関連した者に対しては絶大な効力を発揮する能力なのだ。相手が持つ性質や意志が邪悪であれば邪悪であるほど、それに比例して新子自身も強くなる、というわけだ。

「私と共に、禍王の歌姫計画を打ち砕く！それでいいのですね？」

「ああ…」

鈴奈庵の娘、本居新子は、仙人である茨木華扇と共に禍王の歌姫計画を挫くことを決めた。

「そして、私が調べ上げた、四人の歌姫が居るといふ場所です」

華扇は旅人から聞いたり、自らで幻想郷を旅しながら書きあげた、四人の歌姫が設置されている場所の書かれた幻想郷の地図を机の上に広げた。

まず東西南北の順に、最東端にある、小高い丘の上に建っている博麗神社。最西端にある、外の世界から流れ着いた物が溜まり、強力な妖怪や魔物、更には竜までもが住まっているという竜の墓場。幻想郷の北に位置する巨大な山であり、マガノ国との国境に最も近い妖怪の山。そしてここ人間の里から南に行くとも広がっている広大な魔法の森、そのさらに奥に広がる砂漠の赤い砂丘。それどころも誰からも怖れられる魔境ばかりだ。

「約200年前、マガノ国の怪鳥が幻想郷の東西南北の端を巡回していたそうです。この魔境に…歌姫は隠されている!」

華扇曰く、マガノ国からやってきた怪鳥が歌姫を東西南北の魔境に隠したのだという。

「えっ、ちよつと待てよ…竜の墓場ってあの…!」

そう、この中で最も危険であり怖れられているのは西の竜の墓場だ。ここにはその名の通り、かつて竜であったものが肉塊や骨となって鎮座しており、それと同時に強大な妖怪やマガノ国からやってきた魔物の生息地でもある。竜と言えば、幻想郷縁起に書いてあった記述によれば300年前から200年前かけての100年間で栄えた、幻想郷最強と謳われた種族だ。だが200年前の禍王との決戦を境にマガノ国の放った怪鳥によってその姿を次々と消し、今や絶滅したと伝えられている。それが竜の墓場と呼ばれる所以なのだ。

「そうだ。マガノ憲兵团ですら近付かないという…」

新子の父親がそう呟いた。

次に恐ろしいとされるのは、南の赤い砂丘。ここへ行くには紅い砂丘と同程度に危険な魔法の森を抜けなければならない。何故なら森に囲まれるように、森の南奥に砂丘があるためだ。

「新子、まずどここの歌姫から…倒しますか?」

華扇はそう新子に質問をした。それは少し新子を試しているかのような口ぶりだ。

新子は少し考えてから言った。

「…赤い砂丘、だな」

「ほう、それはどうして?」

「半分は気分だ。もう半分は、一番危険だつていう竜の墓場があるだろ?アタシらは密かに事をすすめなきゃいけない…でもいつかは禍王に知られるはず。だから時間が経つほど追っ手や刺客は増えて強くなる。だから先に困難な竜の墓場から始めてえが、どっちにしろ西の竜の墓場に行くにやあ広大な魔法の森の一部を跨がなきゃならない。だから…どうせなら先に赤い砂丘と竜の墓場から攻略したい」

残りの博麗神社は里から最も近く、道中も安全だ。妖怪の山も、その名前の割には妖怪はマガノ国によって追い出されているからほとんど居ないし、何より華扇はかつてその妖怪の山で暮らしていたと言っていた。だから比較的簡単な魔境の歌姫は後に回すことにしたい、というのが新子の考えだ。

「…そうですか、私も同じことを考えていました」

「新子、先に南と西の歌姫を倒したら、一旦ここへ戻りなさい。戻ってまた一休みしたら次の歌姫を倒し、倒したらまたここへ戻って休み、最後の歌姫を倒す…。いいわね？」

と、母親が言った。要はヒットアンドアウェイだ。禍王が、南と西の歌姫が順番に倒されたと知ったら、次の歌姫の場所に厳重な警備を置くだろう。だがいくら嚴重にしてもその時には新子たちは里で休んでおり、警戒を解いた頃合いを見てその魔境へ突入する、という訳だ。

ちなみに、東の歌姫が居るといふ博麗神社だが、ここは魔境というよりもただ人が寄らない場所で気味悪がられているだけだ。里の東の方に行けば神社を遠目に見ることはできるのだが、ここだけは真っ白な霧に包まれており、時折姿を見せる建物はきれいに残っている。おそらく、神社としての神聖な何らかの力が働いていて憲兵団や魔物も寄せ付けないのか、それとも歌姫の魔力か…。

「どうする、今すぐ行くのか？」

「いえ、今日はゆっくり休みましょう。旅立つのは、それからでも遅くはない」

新子と華扇は明日の朝、四人の歌姫討伐に赴くこととなった。

夜。新子は自宅の屋根の上に登って、そこに座り込んで五月の満月を眺めていた。視線を下にずらせば、見えるのは荒んだスラム街だ。丁度、この鈴奈庵は廃墟区域と貧民街の境目に建っており、北を見れば廃墟、南を見ればいくらかマシな街並みが広がっている。鈴奈庵自体は比較的まともな建物の部類に入るだろう。

にしても、この幻想郷を蝕み続けて荒廃させているのが、東西南北の魔境に置かれた、四人の歌姫。それが居たから妖怪はここを追われ、幻想郷は禍王の手に落ちた、か。さつきは言われた事全部を信じてしまったが、今思うと…。

「調子はどうですか？」

とその時、後ろからそう声を掛けられた。茨木華扇だ。つい今日の夕方まで家の横に物乞いとして居着いてたが、実は仙女だった…らし

い。雰囲気からして説教臭そうだし、とてもうさんくさい感じがする。

「どうって…別にイ」

新子はそう素っ気ない態度で返した。

「怖く、ないのでですか?」

「ばっ…馬鹿言え、この新子にこええモンなんてあるかよ」

「新子はいつの間にか強くなっていましたのですね。…私は、禍王が来る前の幻想郷を知っています。そこはまさに樂園と呼ぶべきに相応しい、楽しくて美しい場所でした」

そう言いながら在りし日の思い出を懐かしむように、風に揺れる髪の毛に触れる華扇。その仕草は、同性である新子でさえ思わず見惚れてしまうような、色気と艶やかさがあつた。

「でも…禍王の侵略によって私は住処を追い出され、戦うことを余儀なくされた。何とか戦いには勝利したものの、次に襲って来たのは異常なほどの大飢餓。次々と滅んだりこの地を去ってゆく仲間の中で、私だけはここに残り続けました。あの最悪な禍王を…いつの日か懲らしめ、あわよくば打ち倒すために」

少し怒りをまじえて強めに呟く華扇を黙って見上げる新子。だがそれと同時に、かつての仲間を失った悲しみや、禍王に対する憎しみと恐怖も感じ取れた。200年もの間、この女性は事を荒げることもしせず、ただ静かに反撃の機会を待ち続けていたんだ…。

「わりい、さつきこええものなんてないって言ったけど、やっぱありや嘘だ。里でゴロツキやチンピラの相手をしたり、憲兵団をのしたりするのとは訳が違うんだろ」

「ええ。私だって死ぬかもしれないね」

「まあそんな時は…そんな時だ」

二人は声を上げて笑った。明日はいよいよ旅立ちの日、お互いに不安な気持ちはある。だがそんな事など忘れて、二人は夜の暖かい風の中で、ただ談笑しあっていた。

新子は後ろ髪を頭の後ろにまとめ上げ、シャツの袖を二の腕までま

くる。そして家の外を出ると、自分よりも先に支度を終えた華扇が待っていた。

「準備できましたか」

華扇は微笑みながらそう言うと、指を口に当てて口笛を吹いて見せた。綺麗に遠くまで届くような音が響いた十数秒後、突然新子の上に何かが見れ、地面が暗くなった。驚いて上を見上げると、大きな鷲が頭上から降りて来たではないか。

「で、でけえ……」

こんなデカい鷲は見たことが無い。地面に降り立つ際に発生する風圧を腕で防ぎながら新子はそう思った。

「私が飼っている大鷲、〃竿打〃といいます」

そう、これは華扇が飼っている大鷲だ。普段は里のはずれの林で華扇からの命令があるまで待機しているのだ。白い顔に黄色い湾曲した立派な嘴、鋭い目つき。地面に食い込む脚の爪はいかにも危なそうな雰囲気醸し出している。若いころは命令した物を間違って持つて来たり、道に迷ったりすることもあったそうだが、今では立派に仕事をこなせるまでに成長しているらしい。

「これで森の上を越えてしまおうかと思っています」

「新子：行って来い。そして生きて帰ってきなさい」

父親が新子の肩に手を置いてから、静かにそう言った。

「大丈夫だ、まずは南と西の歌姫を倒したらいったん戻って来るんだろ……心配するなよ」

低く飛び上がった大鷲の両足に華扇が掴まり、その華扇の背中におぶられるようにしがみつく新子。そのまま大鷲は翼をはためかせ、空高く舞い上がりいよいよ飛び立っていった。今、本居新子と茨木華扇は禍王の計画を挫くための旅に出たのだ。

大鷲に運ばれながら手を振る新子と華扇を、両親はただ無事を祈りながら手を振り返していた。

「さて、ルートですが、このまま森を飛び越えて砂丘まで一気に行きましょう」

「それなら簡単だな」

魔法の森は砂丘と同程度に危険な場所だ。わざわざ森に入って危険をおかすよりも、上からスルーして行ったほうが安全だろう。と、いよいよ濃い緑に包まれた森が見えてきた。

「ですが、空を移動するには一つ問題が……。あら……！」

華扇はそう言いかけたところで、背後から聞こえた甲高い音を聞いて後ろを振り向いた。北の方角から、何やら大きなものがこちらへ飛んでくる。

「言った傍から来たわね。怪鳥ガルルガ……！」

「ああ？ガルルガだつて？」

怪鳥ガルルガ。山の向こうのマガノ国に棲み、全部で七羽存在するという戦闘を好む巨大な怪鳥だ。幻想郷縁起の挿絵にそっくりなガルルガの姿は、実際に見ると感情の無い残酷な目が恐怖を掻き立てて来る。ガルルガは禍王の命令で時折幻想郷を空を監視していて、不審な動きを見せる飛行物体があればすぐさま飛んできて叩き落とすか、殺してでもそれを排除しようとする。かつて幻想郷に生息していた竜と戦い、滅ぼしていき、東西南北に歌姫を運んで隠したという怪鳥の正体も、このガルルガだ。

「危ない！」

猛スピードで迫って来るガルルガを、竿打は回転しながら間一髪で避ける。だがガルルガも甲高い叫び声を轟かせながらも一度向きを変えて攻撃をしようと戻って来る。嘴の下顎はシャベルのように大きく前方にせり出し、その顎の下から後頭部にかけて生えているたてがみ、ピンと斜めに立っている大きな耳。七羽いるうちのこの個体は片目が傷ついて潰れており、今までどれほどの敵と戦ってきたかがわかる。棘だらけの紫色の甲殻は、怒りや興奮に合わせて強度を増すらしい。さらに翼は翼膜が分厚く発達してして、ガルルガの巨大な体躯があそこまで空中で俊敏に動くのも納得がいく。

「やはり空を飛ぶのは厳しかったか……。このガルルガに発見される前に砂丘までたどり着きたかったが、こうも早く見つかるとは……」

薄い羽毛の生えた腹を見せながら頭上すれすれを飛行するガルル

ガ。そして長い首を曲げ、尖った嘴を竿打に向けて叩きつけるように真つすぐに繰り出してきた。初めて見た時はなんてでかい鳥なんだ、と思った大鷲の竿打も、この巨大な怪鳥ガルガの前にはまるで大人と幼児の如き体躯の大きさの違いと、圧倒的な力量の差がある。一度目のついでには避けられたものの、その後すぐに放たれた体当たりにより激突した竿打はバランスを崩し、宙を不安定に舞いながら下へ落下していく。

「デメエ、この…！」

竿打の背中を蹴って飛び上がり、ガルガの顔のすぐ前までジャンプする新子。拳を振り上げ、対象を殴る構えをとる。今の新子には、
“魔に対して力を発揮する程度の能力”が働いている。

「いくら能力が発動しているとしても、そのガルガには…！」

その能力は対象の魔が強ければ強いほどそれに比例して新子の力も上がるが、華扇の言う通り、所詮人間の力ではガルガに痛手を負わせ、追い払う事はできなかった。確かに振り下ろされた鈍器の如きパンチはガルガの頭をわずかに移動させるほどの威力を持っていたが、それまでだったのだ。微かな鈍い痛みに苛立ったガルガは甲高い奇声とともに細長い鞭のような尾をしならせ、新子に叩きつけた。

「うぐ…！」

落下する新子に追撃を加えようとするガルガ。

だが、華扇は左腕の包帯をほどきながら伸ばし、大きく広げた手で新子を掴む。そのままこちらへ引き寄せ、ガルガの追撃を回避し、新子を抱きかかえながら竿打とともに下へ落下していった。まだ森ではない、森の近くの林の中に、木の枝をへし折りながら一羽と二人は地面に到達した。

「いてて…！」

「ここでもやり過ぎでしょう。ガルガは好戦的な性格で知られるけど、人間のようないさぎよい者は相手にしないし、今は禍王の命令で無駄な戦闘は避けると言われているはず…！」

華扇は竿打に音を立てないようにといい聞かせ、新子と共に林の中

に身を潜めた。ガールガはしばらく鳴き声をあげながら頭上を旋回し、翼による風圧で林を揺らす。それでも姿を現さないターゲットを諦めて、やがて北の方角へ戻っていった。

第4話 「不思議な香霖堂」

鈴奈庵の娘、本居新子は両親から、禍王の“四人の歌姫計画”を知らされる。新子は仲間の茨木華扇と共に、歌姫計画を打ち破るために旅立った。

まず最初に、南の歌姫が隠されている赤い砂丘へと進み始めるのだった…。

第4話 「不思議な香霖堂」

ガルルガは未だに頭上を旋回している。翼を振るうたびに風圧で林が揺れ、新子も木の根元に掴まっているが風で吹き飛ばされそうになっってしまう。

「うおあーっ！」

「しっかりして」

飛ばされる新子の腕を掴む華扇。しゅるりと伸ばした包帯の大きな手はしっかりと新子をつかんで離さない。きつと注意深く下を睨んでいるガルルガの無機質な目が飛ばされる新子か華扇を捉えれば、すぐさま物凄い勢いで降下してきてあの大木の幹のような足で掴まれて連れ去られるか、あの先端が槍のように鋭利なしゃくれた嘴によつて瞬時に引き裂かれるか…。考えるだけでなかなかぞつとする。

だがその時、突然ガルルガは風を起こすのを止め、甲高い叫び声を発した。新子と華扇は何事かと思つて上を見上げる。その光景を見て、二人は思わず息を呑んだ。

今まで風を起こしていたガルルガのもとへ、他の二羽のガルルガが姿を現したのだ。翼膜や背中の中身の甲殻の一部がまるで苔でも生えているように緑色に変色し、顔の右半分が痛々しくえぐれている。先に新子を襲ったガルルガよりも傷は大きい、体の大きさはすこし小さいようにも見える。もう一羽のガルルガは、他の二羽よりも一回りほど大きく、身体には外傷一つ見当たらない、ガルルガ本来の美しさや気品のある様が見て取れる。もともと戦闘を好まない個体なのか、それ

とも強すぎるがゆえに傷を負うような戦いをしていないだけなのだろうか。

新たに出現した二羽のガルルガは最初のガルルガを同じく無機質な目で睨みつけると、合計三羽の怪鳥は向きを変えて再び北の方角へと飛び去っていった。華扇が言っていた通り、禍王かその周辺の者から無駄な戦いは避けろと伝えに来たのか。大体、通常別々で行動すると幻想郷縁起に記されているとおり、こうして二羽以上のガルルガが一か所に姿を現すのは滅多にないらしい。

「行つたの…か？」

既に空の彼方に黒い点となっている三羽のガルルガを見ながら服にくつついた葉を払い落としながら新子がつぶやいた。

「やっぱり、森を超えるのは危ないみたいね。仕方ないわ、森を通ることにはしましょう」

また竿打に乗って飛んでいけばいつガルルガが目ざとく発見して襲ってくるか分からない。もし次見つければ、さすがに見逃してはもらえないだろう。上は危険すぎる。

「貴方はこの林に居なさい。もし私たちが貴方の力を借りたいときは呼ぶから…」

そう言われた竿打は、翼を広げて軽く飛び上がると、林の中の木の枝にとまった。爪を枝に食い込ませ、凜々しい顔つきでピクリとも動かないその姿は、あんなガルルガたちよりもよほど気高く、利口そうに見える。

もし森の中で新子と華扇に何かが起こり、竿打が呼ばれば彼はすぐさま駆けつけてくれるだろう。

「マジか…結局森を歩いて渡るのか…」

ぶつぶつと悪態をつきながら重く足を動かす新子に、この旅がどれほど大変でそれだけ幻想郷にとって重要なことなのかを言い聞かせながら、華扇は背の高い草が生い茂る草原を歩いた。

1時間は歩いただろうか。いよいよ森の入り口が見えてきた。深すぎる緑に生い茂った魔法の森は、真つ黒に見えて、まるで暗黒の空

間の入り口であるかのようにも見えた。

と、その時、草に隠れるように立てられた古臭い木の板でできた看板を発見した。草をかき分けて、その看板に書かれた文字を読む。里に学校は一つだけあり、そこそこの金が有れば最低限の読み書きや計算、その他歴史や科学も教えてもらえる。その学校も、半分がマガノ国の管理で動いているのだが…。

『古道具屋 香霖堂 何でもあります、買います』

「え〜…古道具屋…かおる…ここう、きりって読むのかこれ？どう？」

「こーりんどう、ね。へえ、まだこんな店あつたのかあ…」

華扇は看板の裏側に書かれた赤い矢印に気付き、それが示す方向を見た。森の入り口とは少し右側に離れたところに、小さな建物が見えた。遠くからなのでよくわからないが、薄茶色の壁に、黒い瓦の屋根があるのがわかる。

そして、二人は一気に走って店の前に駆け寄った。店の横には変な埃まみれの機械や、赤い線の入った小さなボールなど、色々なガラクタが山のように積まれていた。小さな窓の付いたドアの上には、「香霖堂」と書かれた看板がある。少し緊張しながらドアを開けて店の中に入ると、ドアの内側に付けられていたベルの音が、静かで埃っぽい嫌な空気が広がる店内に響き渡った。

「まあ、思ってた通りというか…」

壁に所狭しと並べられた棚、店の中央に置かれた3つの丸いテーブル。棚にはおかしな形をした壺や食器類、動物の置物などのガラクタが置かれ、テーブルの上には見たこともないような、使い方さえ分からない機械が並べられている。

「懐かしいわね」

華扇は店の棚をじっくりと眺め始める。懐かしい、と言っていたか？ではアイツは以前にもここに来たか、それともここを知っていたのだろうか。

新子も華扇のマネをして、棚をざっと見渡すように店内をぶらぶらと歩く。と、そこで本棚が置いてある場所で足を止めた。表紙を見せるように置かれている本は、どれも里じゃ見かけないようなものばかり

りだ。これが、父親が言っていた外来本というやつだな。不思議と直感で分かった。何でも禍王が現れる前は鈴奈庵でも外来本を取り扱っていたらしいのだが、そういった本や、また妖力の込められた妖魔本…とやらは大変貴重だったらしいので、マガノ国に奪われてしまいう前に先祖がどこかに隠してしまったらしい。父親も子供の頃に探し回ったそうだが、結局見つかる事は無かったらしい。その外来本が、こんな店に置いてあるなんて。

その本をもっとよく見ようと手に取ろうとした瞬間。新子は異変に気付いた。

「あれ？」

本を持ち上げようとどんなに力を込めても、柵から本が持ち上がらない。

「何をしてるんですか？」

「ふん、どうやらこりゃサンプルだったらしい。柵に固定されて持ち上げられねえや」

手を離して本を手放そうとしたとき、またもや新子の動きがとまった。

今度は手が本から離れなくなっている。まるで超強力な接着剤でも塗られていたかのようだ。だが流石にそこまではしないだろう。触る前に気付くはずだし。何か魔法の類の不思議な力が働いているかのようだ。

「その商品が…お気に召したのかな？」

その時、カウンターの奥の部屋から声が響いてきた。続いて姿を現したのは、白髪で、青と黒を基調とした柄のシャツを着て眼鏡をかけた背の高い中年の男だった。

「テメエ、どういうつもりだ！こりゃ魔法か何かだろ？さっさと解きやがれ…！」

新子は柵の段に足をかけてそのまま引っ張る。が、本とくつついた手はやはりビクともしなかった。

「まあ、このご時世だからねえ。一度触った商品は必ず購入してもらう事にしてるのさ」

薄いくちびるを曲げながら、男はそう言った。

どうせこんな魔法の森のそばに建ってる店なんかには、普通の客も盗人も来ねえんじゃないか？

「私からもお願いしますわ。私たちは大事な用事の途中…急がないといけませんの」

「おお、君は確か…仙人の…。ほうほう、まだ僕のように…おっと、これ以上はいけないか、危ない危ない…」

眼鏡の位置を直しながら、ブツブツと独り言を言っている。そしてカウンターの机の裏側に手をつ突っ込み、何かを探るように身をかがめた。その拍子に、新子の手が本から離れ、勢い余ってバランスを崩し、床を転がってしまった。机の裏に、何かボタンがレバーのようなものが設置してあって、それを使って解除したのだろう。これには新子ももともと短気な性格であることも相まって、怒りが有頂天にまで達した。怒りに目つきを変えながら、店主の男の胸ぐらを掴んで持ち上げ、椅子から立たせる。

「デメエ…!!」

「新子、落ち着いて」

そのまま握った拳を振り上げる新子の腕を掴み、もう片方の腕を胸に回して押さえ込み、落ち着くようにさとす華扇。新子はため息をつくと、華扇の腕を振りほどいた。どうやら落ち着いたようだが、その長いまつげに囲まれた目はいまだに店主の男を睨みつけている。

「すまないねえ。僕はこの香霖堂の店主、霖之助っていうんだ。君ら、用があるって言ってたけど、一体何かな？」

新子と華扇は互いに目を合わせた。自分らの四人の歌姫討伐は、誰にも気づかれず、もちろんできれば禍王にも知られる事なく進めた。ここで喋ってしまったべきではないだろう。

「…まあいいけどね。さて、ここも一応店だ、何か買いたいものはあるかな？」

先ほどの無愛想な態度とは打って変わった、突然商売人らしく気さくに、下から出てきた。

華扇はふらりと店の中を見渡しながら歩き回り始める。それをマ

ネして、新子もぎつと商品を見ることにした。

「これ、お願いします」

華扇は中からじやらじやらと音がする小さな缶の箱、ビニール袋に入れられたお菓子のようなもの、そして腰から下げれるウエストポーチを触れないように、慎重に指さした。

「ええと、火炎玉に、アツプルブレッド…それにウエストポーチだね」

割るとそこから火を起こす事が出来るビー玉、火炎玉。少量の水を加えるとリンゴ味のパンに変化するアツプルブレッド、それらを携帯できるようにとウエストポーチを選んだのだ。霖之助はマジックアイテム、魔法の道具の作成技術を持っており、たまにそれらを作っては店に置いておくらしい。華扇の選んだ火炎玉やアツプルブレッドも、そういった魔法の類のアイテムである。

「新子はどうしますか？」

「ん、そうだなあ…これといって特には…」

最後にもう一度店内を見渡す新子だが、その時、あるモノが目に入った。銀色に塗装され、グリップ部分を黒いテープで巻かれた、金属製の棍棒のようなものだ。

「こりや何だ？」

「ああそれはねえ…ベースボールっていうスポーツでボールを打つのに使う、バット…っていう道具だね」

新子はそのバットを手を取った。今回はちゃんとこれを買う、という明確な意思が有ったので、手が離れなくなる魔法は発動しなかったらしい。

「それにするんだね？」

「ああ」

「それと、この二本の水筒と、これに入るだけの水をくれないかしら？」

華扇はもう二つ、棚から何かを選んで指差した。その先にあったのは、二つの円柱の形をした水筒だった。ピンク色に塗られたステンレ

ス製の水筒だ。確かに、新子がカバンに入れて持ってきていた、二人分の水筒は先ほどの怪鳥ガルルガの奇襲によってボコボコにへこんで形が悪くなってしまうた。変形したおかげで蓋も上手く閉まらないようになっていいる。新しい水筒と、水を買うことにしたのだ。

「毎度あり」

店主の霖之助は、満足そうに代金を受け取り、水筒がいっぱいになるまで水を入れた。

「新子、本当にそれでいいのですか？」

「ああ。何か一目見た時にピーンと来た…これなら妖怪だろうが禍王の手下だろうが何でもぶっ倒せる気がするー！」

新子はブンブンと銀色に光るバットを振り回した。振るうたびに風を切る音が鳴り、バットの重さと勢いによって足が少しよろめく。これならマガノ憲兵団にばったり出くわしてしまっても、すぐに撃退できるだろう。今、自分の横には華扇も居る。華扇は自分が相手をした憲兵を口封じとして、一人残らず始末していた。それほどの実力がある仙人と旅をするのだ、何が来ても負ける気がしない。

「こら、危ないですよ…」

負けん気に溢れる新子を心配そうになだめながら、華扇はふと上を見た。もう太陽がほとんど沈みかけ、空は薄暗くなってきた。

「ガルルガの所為で思ったより時間を喰ってしまったようですね」

「ああ…これから森を渡るんだろ、もつとかかるぜ…」

二人は、香霖堂の有った場所から、森と草原の境を沿って歩いていいた。そして、空が真つ暗になり、夜のとばりが訪れた頃、突然森の中で何かが遠吠えを上げた。森のどこで叫んだのか分からないが、声は木々の間を反響しながらこの森の外まで届いた。上には、先ほど華扇が待っているのと命令したはずの竿打が低く飛んでいる。よくよく考えれば、幻想郷にも鳥は居るし、空飛ぶ普通の生き物も居る。あの時ガルルガが目ざとく襲い掛かって来たのは、鳥に人影が乗っていたから。

今、新子はあの恐ろしい魔法の森のすぐそばに居る。夜の暗闇を感

じたとたん、今まで気にしていなかったことがしつこく頭の中に浮か
んでは消える。心臓の鼓動がいつもより早く動いているのが分かる。
突然、横に生い茂っていた森に、開けた場所が現れた。魔法の森が、
ぽっかりと真っ黒い口を開けて二人を待っていた。

第5話 「魔法の森の罠」

鈴奈庵の娘、本居新子は両親から、禍王の“四人の歌姫計画”を知らされる。新子は仲間の茨木華扇と共に、歌姫計画を打ち破るために旅立った。

まず最初に、南の歌姫が隠されている赤い砂丘へと進み始めるのだった…。

第5話 「魔法の森の罠」

数時間も歩くと、新子の気もいくらか落ち着いてきた。魔法の森の入り口から続いている獣道は曲がりくねり、獣の視線や唸り声が容赦なくこちらへ向けられ、木々は下草に覆われていたが、いま二人が進んでいるのは、フクロウの鳴き声に満ちた涼しげな場所。月の光が葉の隙間を通り、地面にまだら模様を描いており、巨木の足元にはシダときのこが生い茂っている。それでも二人は神経をとがらせ、黙々と夜の魔法の森を歩き続けた。魔法の森は評判通り恐ろしい場所だ。この美しい森の風景にも、危険が手ぐすねひいて待っていることはわかっていった。

華扇は懐中時計を見ると、夜を寝て過ごすための大きな木を選んだ。二人は木の横に伸びる太い枝の上に上った。

「新子、お腹もすいたでしょう、少し遅めの晩ご飯にしましょうか？」
ウエストポーチを腰から外し、中からピンで口をとめられたビニール袋を取り出した。さらにその袋から小さなビスケットのような小さいおはじきのような物体を取り出し、ハンカチの上に置く。昼間に香霖堂で購入した、アップルブレッドだ。店主の霖之助という男によれば、少し水を吸わせるだけでみるみる膨らんで、リング風味のパンに変わるらしい。果たして、それは本当なのか…。

「あら」

水筒の水を少しだけ、一粒をアップルブレッドに垂らす。すると小さな小麦色の粒はむくむくと膨らみ始めた。かと思えば、ボン、と音を立てて一気に大きくなった。

「すげえ！一粒でこんなでかいパンになるたあ思わなかった！」

「ふふ、そうですね…」

「あの男も、商売人としてはなかなかいいらしいな」

どうせ食パン一枚分か、普通のパン一個分くらいかと思ったが、こりや切り分ける前の食パンと同じくらいある。しかも、リンゴの果実の良い香りが漂ってくる。

新子と華扇は、出来上がったアップルブレッドにかじりついた。表面はパリパリと硬く、中はふんわりとしていてリンゴの風味が口いっぱいに広がる。二人は、里に居た頃よりもちよつと豪勢な食事を楽しんだ。

「奴ら、何故襲って来ねえ？」

新子は、自分らが座っている大きな木の下を、何かの影が闇に紛れて動き回っているのを指差して、華扇にそう尋ねた。

「多分…襲いたくてうずうずしているはずよ。だって滅多に見ない人間がすぐ近くにいるんですもの。でも…きつと新子の持つ能力を感じ取っているのでしょう。どうやら低級な獣や魑魅魍魎の方が、敏感に貴方の能力を察知できるようです」

「ふうん…」

「さて、今日はもう疲れたでしょう。私が見張ってますから、新子は安心して寝てください」

「お前は寝なくていいのか？」

「私くらいになれば一週間は寝ずとも平気ですよ」

不思議と、こんな時でもすぐに寝付くことができた。華扇がいる安心感からか、疲れ切った身体には耐えきれず、新子は木の上で死んだように眠った。

翌朝、華扇と新子は南に向かって歩みを進めた。華扇は慎重に木々に触れながら進む。頭上の枝から枝へと飛び移るように移動する大鷲の竿打が、木々の緑と金色の木漏れ日のなかに映える。

しばらく行くと、突然華扇が早足になった。新子は必死に後を追う

が、寝起きのこわばった身体がうまく動いてくれない。

「はええな…なんかあるのか？」

華扇は何も言わずに振り向くと、遠くを指差した。

やがて新子の耳にも、鳥の声に混じって別の音が聞こえてきた。水の流れる音だ…近くに小川がある。そう思うと急に、のどのかわきが気になりはじめた。でも、水筒を開けているひまはない。華扇はほぼ駆け足になっていて、新子はそれを追うしかなかった。

二人はようやく立ち止まった。二人の視界に浅い幅広の小川が行く手を横切っているのが見える。川向うには木が一本もないが、かわりに大きなシダと巨大なキノコがその奥を隠す幕のように生い茂っている。

竿打が木の上から颯爽と降り立って、嘴を小川に突っ込んで水を飲み始めた。だがその黄色い鋭い目はしきりに動いて辺りを警戒している。

「…誰か後を付いてきてるな」

「みたいですね。憲兵かしら？」

「憲兵は森に足を踏み入れない。もっと違う、妖怪か魔物か」

新子の能力を妖怪や獣が察知できるように、逆に新子も獣や妖怪の存在を感じ取ることができるようらしい。

「それは今どこら辺まで来ているのです？」

「それはわからん」

二人は小川の水で顔を洗って口をゆすいだ。そして南に向かって川の浅いところを歩き始めた。

湿った土と、腐食した葉のにおい。動物の声も、鳥の鳴く声さえも聞こえない。二人は息を殺して歩き続けた。新子はふと、足元の石を見つめた。さつきからどうも変な気がしてならない。小川の底石にしては大きすぎるし、綺麗に並び過ぎている。

まるで何者かがここに集めてきて、一つずつ並べたようだ。

でも、誰がそんな事を？こんな森の奥で、いったい何の為に？

「あー」

華扇の声に、反射的に新子は身構えた。華扇は目の前を指差してい

る。

新子が肩越しに覗き込むと、そこにはまさにおとぎ話のような光景が広がっていた。数え切れないほどの木がピンク色の実を実らせて、川岸の土手に並んでいる。細長い幹、細長い形の葉を綺麗に透き通る水面が映し出す。新子は思わず華扇の後ろから飛び出し、実がなっている真下まで駆け出した。

「あ、待って…何かあるか…！」

そんな華扇の忠告もお構いなしに、新子は桃のような実をひとつもぎ取ってそのままかじりついた。甘い汁が水面にしたたり落ちて、波紋が広がり、実の香りがあたりに漂い始める。

「うげ…皮だけめっちゃ不味いぞ！」

最初の内は、うっとりするような甘さが口の中に広がったが、皮を噛んだとたん、何とも形容しがたいしづさと苦さに実の甘さを上書きされてしまった。

「ふふ、毒見をありがとう、新子」

華扇は少しからかうようにそう言うと、実をもぎとって皮を剥き始めた。そして、ピンク色の細い筋が見える金色の果肉にかじりつく。なるほど、と新子もそれにならって、皮を剥いて食べることにした。

「竿打は皮も平気らしいな」

「それほど味にうるさくないのかもしれないかもしれませんね」

竿打は実を皮や種ごと突っついて食べていた。

二人と一羽は黙々とふってわいたような幸運を味わった。桃のような実の川と丸い種が山のように積もっていく。

かなりの時間が過ぎた。太陽がほぼ真上に上り、遅めの朝食を腹いっぱい楽しむことができた。疲れた足を休めようと、新子は浅い水面にしゃがみ込む。

飢えに苦しむ皆の顔がぼんやり浮かんでくる。あとで奴らにも教えてやろう…魔法の森のこんなところに美味しい食べ物があるんだ。しっかり森に安全な道を切り開いて、年に一度でも収穫すればいい。それか、ここの種を持ち帰ってしっかりした畑を作って種をまけば、この実を育てられるかもしれない。そうなったら…どんなにいいだ

ろう。

新子は目を開けた。おかしいな、アタシは水の上に座っていたはずなのに、いつの間にか寝そべっている。

何かおかしいと思いつながら、新子は笑みを浮かべたまま身体を動かそうとはしなかった。水は温かいし、川底に並べられた丸い石が背中に当たって気持ちがいい。きつと、この丸い石は、誰かが置いたのだろう。ここへ来たあらゆる生き物が、この綺麗な景色と美味しい実を食べられるように、誰かが気をきかせて並べたんだ。そう、誰かが…。そのとき、ふいに新子の心に暗い影がさした。だが、あまりに眠いせいでそれにとりあうことはなかった。

横でパシヤン、と音がした。重たい体にむちうってそちらへ顔を向けると、華扇も自分と同じようにあおむけで寝そべっていた。両手を胸の上で組み合わせ、呼吸に合わせて胸が上下に揺らしてぐつすりと眠っている。

ふと、新子は目線を上にあげた。向こうの林から何かがやって来る。それは巨大な、木と同じくらい背の高い鳥であった。翼と顔に黒い模様が有り、そこ以外は真っ白な羽毛に覆われている。その鳥は急ぐことなく、オレンジ色の細長い脚を慎重に一步、また一步と進み、水面を波立たせることなく静かに近寄って来る。長くなめらかな首に、黄色い嘴は鎌のように湾曲し、先は針のようにとがっている。

新子は思わず声を上げて起き上がろうとするが、体があまりにも重い。鳥は水の上にしゃがみ込み、眼を瞑ったまま動かない竿打をまたぎ、華扇に近寄った。鳥の化け物は動かない華扇を無表情な目で見つめると、剣のようなくちばしを水に浸して洗い始めた。

どうにかして腕は動かせる、そうだ…石を投げよう。まだあまり力の入らない指で川底をさぐり、底に有る丸い石の一つを地引つ張った。ポコツと音を立てて、石が底の泥から抜けた。水の上まで引き上げると、石についていた泥が流れ落ちた。

それは、人間の頭蓋骨だった。わらったような顎に泥が詰まっている。新子はぞつとして手を引っ込めると、頭蓋骨は再び川の中に落ちた。そこで新子は全てを理解した。この川は、あの鳥の狩場だったの

だ。ここへ迷い込んだ者は、あの甘いにおいを放つ桃のような実を食べて眠りに落ちる。すると、あの鳥が忍び足でやってくるのだ。あの鳥が一羽しかいないのか、それとも林の向こうに群れがいるのかは知らないが、とにかく鳥は眠った獲物を食べ、食べ残された骨は川底に沈む。旅の最中にここへ来てしまった旅人、動物、マガノ憲兵団の骨もここに混じっているかもしれない。川底の骨は長い時間をかけて流れに運ばれて綺麗に並べられる。

鳥は水面からクチバシを上げた。頭を少しでも下へ動かせば、剣のように鋭いクチバシが華扇の心臓に突き刺さってしまうというところまで近づいている。新子は体にありつたけの力を込め、横に起こすと渾身の力で拾い上げた頭蓋骨を鳥の化け物に向けて投げつけた。頭蓋骨は鳥の白い胸に当たり、鳥は動きを止めて首を傾げた。無表情な目が新子を見つめる。普通は動けないハズの獲物が動いたことに驚いているのか、それとも何とも思っていないのか。

と、その時、別の大きな茶色い翼が白い鳥の化け物をはたいた。竿打だ、何故か竿打だけが目を覚まし、新子と華扇を守るため果敢に攻撃を仕掛けている。体の大きさも似通った二匹の鳥が水をバシバシやと跳ねさせながら爪を振り回し、切っ先の鋭いクチバシを向ける。

「…そ、そうか…！」

竿打もあの実をいくつも食べたはずなのにすぐに目を覚まし、こうして動きまわっている。自分もまだ体に力が入りにくい、しっかりと意識はある。しかし華扇はこの騒ぎにも気を止めることなく静かに眠り続けている。アタシの見立てでは、恐らく、さつき食べた桃のような実は果肉に眠らせる効果が有り、その実の皮がそれを緩和させる解毒剤なのだ。皮と果肉をいっしょに食べた竿打は睡眠効果が全くと言っていいほど訪れず、少しだけ皮を食べてしまったアタシは、果肉だけを食べ続けた華扇よりはマシな状態になっているだろう。もしも竿打もアタシも果肉だけを食べていたら…。想像したくはない。

この果実と地面に埋まっている無数の骨の秘密を理解して気持ち

的に余裕ができた今、だんだんと体に活力が湧いてきて力が入るようになってきた。それと、鳥に対して発揮されている新子の能力のおかげでもあるかもしれない。

新子は上体を起こすと、華扇のウエストポーチの中身を探った。そして銀色の缶ケースを取り出し、中に赤い粒の入ったビー玉のようなものを一粒、手の上に落とした。よかった、缶の中に水は入り込んでいない。

昨日、香霖堂で買った火炎玉だ。その火炎玉を、ケースの缶の角で潰して割った。その瞬間、パツと炎が燃え上がり、新子は火を放つ赤い粒を白い鳥に向かって投げつけた。

火は鳥の化け物の翼に当たって燃え移った。驚いた鳥はクチバシを大きく開けて、足を水面でバタバタさせながら高い声で鳴きわめいた。そして、水の中に倒れ込むようにして身体を濡らし、ゴロゴロと転がって火を消そうと暴れまわっている。

新子はやつとの思いで立ち上がると、金属のバットを汗ばむ手で握りしめ、今にも振り下ろしてしまおうかという勢いで白い鳥に向かって歩み寄っていく。こちらを睨む鳥の目には、先ほどの無感情な目とは違い、明らかな焦りや恐怖が混じっている。鳥は水の上で暴れて自身の身体に燃え移った火を完全に消火し終えたあと、焦げ臭いにおいをその場に残留して元来た林の中へ逃げ込んでいった。

「ぎゃーみる…！」

口元をぬぐいながら、立ち去っていく鳥にそう言い捨てる新子。その時、鳥が戻っていった林とは反対側、新子の背後の林から、何かがその場を離れる音がした。あの鳥の仲間がずっと隠れていたのだろうか。

「むぐ…!？」

何やら、突然口の中に苦味と渋味がごっちゃんになったような、なんとも言えない不味さが広がった。驚いてその味のする平べったい物体をせき込みながら吐き出そうとする。

「駄目だ、噛んで飲み込め！」

新子が華扇の口をふさいだ。

「さっきの實の果肉が毒で、この川が解毒剤なんだと。竿打は皮ごと食べて、アタシは少し齧ったからこうして回復したが…アタシが起こさなきや…アンタ永遠に眠ってたぜ？」

顔をしかめながら不味い皮を飲み込む。

「やはり魔法の森…噂以上に恐ろしいところだな。こんなような、甘い誘惑と死の罠がいたるところにあるんだろうな」

「…不覚」

新子から全てを聞いた華扇は、まだ力の入らない身体を新子に支えてもらいながら、そう呟いた。

第6話 「赤い砂丘」

鈴奈庵の娘、本居新子は両親から、禍王の“四人の歌姫計画”を知らされる。新子は仲間の茨木華扇と共に、歌姫計画を打ち破るために旅立った。

まず最初に、南の歌姫が隠されている赤い砂丘へと進み始めるのだった…。

第6話 「赤い砂丘」

華扇と新子がようやく元通り動けるようになったところには、すでに日が傾いていた。だが、華扇は今夜中にでも赤い砂丘へたどり着くために進むべき、と提案した。あの果樹の小川の、魔法のトラップにかかってあやうく死にかけるところだったのだ、すぐにこんな森など出たいに決まってる。

「それに、森と砂漠の境目まで行けばここよりは安全になります。砂漠に棲む生き物は森へは行けないし、森に棲む生き物は砂漠には行けませんから」

それから、二人は休むことなく夜の森を歩き続けた。時折、今日の昼間に自分らがかかってしまったような魔法の罫らしきものをいくつも見かけたが、決して誘惑に惑わされる事なく、すぐにその場を立ち去っていった。

それを繰り返しているうちに、だんだんと頭上を覆っていた深い緑の葉が薄くなり、苔生したりキノコが生え放題だった湿った地面に乾いた砂が混じるようになってきた。いよいよ、赤い砂丘に近づいているのだ。さらに足元の地面は砂に変わり、赤い砂粒が多くなっていく。砂漠特有の夜の寒さが容赦なく二人に突き刺さる。

そして、砂まみれの枯れた木の横を通り過ぎると同時に、月の光に照らされて赤く光る、広大な砂漠が視界に広がった。砂丘がまるで波のように高く重なっていて、乾いた砂を踏む足が滑る。

「アタシら、行かなくちゃ」

新子は感じ取っていた。この広大な砂漠の中心にある、とてつもな

く邪悪な存在を。こんな力を放ち続けている。南の歌姫”をのさばらせてはいけない。必ずアタシが始末しなければならぬ。いや、始末してやる。許せるものか。

「待ちなさいー」

華扇は、何かに駆られたように駆け足で進みだす新子を追いかけた。だが、新子は一つ目の砂丘を上りきったところで立ち止まった。

目の前に広がるのが、真っ赤に輝く、今昇った砂丘よりも高い次の砂丘だった。新子は危なっかしく砂の斜面を駆け下りると、次の砂丘も勢いよく昇りきった。砂丘、また砂丘。ちつとも代わり映えの無い景色が、新子の気力をどんどんそぎ落としていく。

「危ない、頭を下げて」

突然新子は頭を砂の上に押し付けられた。驚いて隣にいる華扇の見つめる先を追う。今居る砂丘の下に、何やら太い植物のような物が風に揺れている。あれがどうしたというんだ？

「もっとよく見て」

新子も目を凝らしてみると、動いている植物のようなものは、大きなミミズのような生物だと気付いた。頭部らしき部位からピンク色の管が飛び出していて、それをしきりに動かして辺りを見渡している。

「確かに歌姫は一刻も早く始末しなければならぬけど、焦ってはダメ。このまま進んでたらあの化け物にやられてたわ」

さいわいにも、あのミミズの化け物はまだこっちに気付いていないようだ。

「避けて通りましょう」

二人は、化け物に気付かれないように大きく回って、その場を離れた。

そうして歩いている間に、日が昇り始めた。日の光が赤い砂を照らすと同時に一気に気温が上がり、靴越しでも分かるくらい砂が熱せられている。日差しとやわらかい砂は、砂漠の中心へ向かう新子と華扇の体力を確実に奪って行った。

それだけではない、新子はもちろんのこと、華扇でさえも赤い砂丘に隠されている。南の歌姫の放つ魔の歌声を感じ取っている。きつと、この砂漠もとはあの魔法の森の一部だったに違いない。だが、200年前、禍王の命令でガルルガが森の南の方に歌姫を隠したとたん、そこを中心に森の植物は枯れて、長い年月の間にここに棲む全ての妖怪はここを離れ、ここは歌姫の邪悪な歌声に毒された砂漠と化してしまったのだろう。ところどころに転がっている、朽ちて乾いた大木の残骸がそれを物語っている。

新子はふと後ろを振り向いた。

丁度さつき超えたばかりの砂丘の頂上で、小さな恐竜のような生き物がちよろちよろと動きまわっていた。薄い赤色の地に、黄色の模様が走っている。一見すると、その恐竜たちは座り込み、爪や胸元を舐めてくつろいでいるように見えるが、その鋭い捕食者の目はたびたび新子と華扇を見つめていた。

「昔は深い森だったようだけど、今じゃならず者の巣窟ね」

今じゃ、妖怪でもないただの怪物や珍獣の根城か…。

砂漠を歩くにつれ、あたりに漂う歌姫の邪悪な力は強くなっていく。ついには、新子は膝を地面に付いて倒れ込んでしまう。すると待ってましたと言わんばかりに、ずっと後ろから狙っていた恐竜が走り寄ってきた。後ろ足のカギ爪を伸ばし、今にも新子に飛びかかろうという態勢だ。

「離れなさいー!」

華扇は新子の前に立ち、飛びかかる恐竜を跳ね除ける。新子も背中のカバンに入れていた、香霖堂で買った金属のバットを抜こうと手をかける。だが、まるで風邪で熱でも出した時のような気持ち悪い感覚のせいでうまく力が入らない。

華扇も同じだった。じわじわと砂丘に染み込んだ邪悪の力が、足から体中へと流れ込んでくる。

突然、地面の砂が大きく揺れた。砂の間から灰色の鋭い棘が飛び出し、瞬く間に恐竜の一匹を掴み上げた。なんと、地中から巨大な怪物

が現れたのだ。砂からその全貌を見せた怪物は、虫のような外見であった。小さな頭、恐竜を掴んだまま離さない鋭い棘の生えた鎌の腕、でっぷりと膨らんだ柔らかかそうな腹、細長い4本の脚。

「な……でけえ……」

虫の怪物は別の恐竜をもう一方の腕ですばやく掴む。仲間を救おうと飛びかかってくる仲間をよそに、ゆつくりと掴んだ獲物に口を近づけ、目いっぱい開いた牙を突き立てた。鮮血が飛び散り、赤い砂に染み込んでいく。

更には、騒ぎを聞きつけて、夜に見かけた巨大なミミズのような生き物までもが出現した。ブヨブヨした身体に電気を纏わせながら新子に噛みつきかかる。思わず、新子は叫びながらミミズの喉元を掴んで自分から離らかそうとする。と、その瞬間、バチツと電気が走った。ミミズが電撃を流したのだ。

憲兵団の電気棒よりも何倍も強い衝撃によって新子は倒れ込んでしまう。ふと横を見ると、華扇の両足にもミミズが巻き付いている。そして捕らえた恐竜を食べ終えた虫の怪物が素早く歩み寄って来る。口からはみ出した恐竜の尻尾をぶらぶらさせながら。最悪だ、虫の目は明らかにミミズではなく、新子と華扇を見ている。

虫は鎌を二人に伸ばし、それと同時にミミズは大きく開いたぬるぬるした口をガツと開く。

しかし、突然、空が急に暗くなり、周囲でうろろしていた恐竜たちがけたたましい鳴き声を上げながら四方八方へ散っていく。

雷鳴のような金切り声が響き渡る。巨大な影が舞い降りてきた。ミミズはその場でぐねぐねと動き回り、虫の怪物は上を見上げる。大きな翼が羽ばたく音と共に、新子の視界に大きな黄金色のカギ爪が飛び込んできた。次の瞬間、虫の怪物はひよいとその爪に抱きかかえられ、空へと連れ去られた。

新子はよろよろと立ち上がった。ミミズはとつくに砂の中に潜って遠くへ逃げていた。強風に足をすくわれ、新子は砂の上を転がってしまう。何かが裂ける音や、殴るような鈍い音が聞こえる。

風がやみ、あたりがしんと静まり返る。新子はやつの思いであた

りを見渡すと、ぎよつとした。目の前の低い砂丘のてっぺんで、巨大な毛むくじやらの鳥が虫を食べていた。いや、それはよく見ると鳥とは違った。鷹のような大きく鋭い目、湾曲した黄色いクチバシのある頭や白と茶の羽毛の生えた体と翼は鳥のものであったが、黄色い鱗が並んだ、4本のカギ爪のある指の脚が前足となっており、下半身は獣のような強靱な太い腰と後ろ足になっている。頭から胴体までが鷹のような鳥と、獅子になっている下半身が合体したような大きな動物だ。

「この砂丘の食物連鎖ね。恐らく、あれがこの砂丘の頂点。見つからないうちに逃げましょう」

華扇が新子の腕を掴んでそこから立ち去ろうとするが、新子はあの動物を見つめたまま動かない。

当然だ：あれを見て驚けないわけがない。新子が何度も読み返した、幻想郷縁起に記述されていた、今は絶滅した伝説の生物。見間違うはずもはずもない：「グリフォン」だ。

「やあ、小さな旅の者よ」

新子が見ていることに気付くと、陽気な調子で、そのグリフォンは声を発した。黄金色の目がじつと新子を見据える。

「…ふうく…。不思議だ、お前の身体からほとばしる力が、私の身体に流れ込んでくる。お前が予言された女だな」

予言された女？アタシが？誰がそんな予言を？それに、幻想郷縁起では既に絶滅した伝説の存在として描かれていたグリフォンが、なぜここにいる？

言いたいことが頭の中に浮かんでは消え、新子はオーバーヒート寸前になる。

「あ、えと…あの…」

口ごもる新子と、驚きに動けない華扇を遮って、再びグリフォンは口を開いた。

「私は…夢を見ていた。良き時代の夢だった。私は仲間と共に森の上を自由に舞い、空は甘い空気に満ちていた。だがこれは何だ…？美しかった森が、こんな醜い砂漠と化しているではないか!!私には邪悪の

存在が分かる。この砂漠の中心に存在する邪悪から、波紋のように毒が漏れ出している！私が眠っている間に、誰がこのような事を？」

グリフォンはあたりを見渡し、怒りを露わにして叫んだ。

「マガノ国の禍王です」

華扇がそう言った。

「そうか、やはり…」神の友”の予言通りか。私が今、寝起きと空腹で弱っている。この虫一匹では足りない、もっと食べて体力が戻ったら、つぼみに巣くう害虫のように南に潜む邪悪を、探し出して滅ぼしてくれよう」

それを聞いた新子は、ようやく口を開いた。

「幻想郷にある邪悪は一つじゃないんだ。東西北に4つある。禍王はそれを”四人の歌姫”と呼んでやがる。そのうちの一つは、今は赤い砂丘と呼ばれているこの砂漠の中央にある」

「そうか、東西北に4つか。だがな、教えてやろう、不思議な力を持つ予言された女よ。私はこの自分の南のなわばりを愛している。だから、私は南の邪悪さえ始末できればそれでいい」

「だけど、結局は4つ全てを滅ぼさなければ本当の安らぎは訪れないわ！」

「他のなわばりには行きたくても行けないのだ。昔にたてた”神の友”との誓いを破ってしまうからな」

「あのよ、さつきから言ってる予言の女とか、神の友とか一体何のことだ？」

新子は思い切って疑問をグリフォンに尋ねた。グリフォンは前足の爪で首をかくと、大きなあくびをした。

「300年ほど昔、まだ若かった私のもとにある女が現れた。赤と白の装束に身を包んだ女だ。女は不思議な技能を多く持っていて、ある予言を私に聞かせた。今から100年後、山の向こうより憎しみと支配に燃える赤い目をした邪悪が、大量の怪物と共に幻想郷を攻撃してしてくると。だから、その時には私たちにも戦ってほしい、と懇願してきたのだ。もちろん、私を含めたグリフォン全てがヨタ話だと言って信じず、女をあざけった。だが私だけは…何故だかその女を信

じてみる気になったのだよ」

グリフォンは続ける。

「それからほどなくして、神の友は生涯を終えた。さらに時が経ち、私が神の友と出会ってから、実に100年が経った時の事だ。本当に北の山脈の向こうから邪悪の軍隊が現れた。私たちの決死の努力も甲斐あつて、邪悪は引き返していきおつた。だがな、神の友の予言にはまだ続きが有つた。もし邪悪が撤退しても、まだ刺客を送って来るかもしれない。そうなれば確実にグリフォンは滅んでしまう、だから100年後の戦いが終わったら、すぐにひたすた身を隠して眠りにつけ、とな。やはりここでも予言は当たつた。七羽の邪悪な鳥が私たちの空をうろつき始めたのだ。奴らはまとまって、一匹ずつ仲間を殺していった。だが私だけは滅ばなかつた。私だけは神の友の予言を信じ、隠れていたからだ」

では、幻想郷縁起にかかれていた、既にグリフォンは絶滅したというのも、七羽のガルルガの所為だったのだ。二つ目の歌姫が隠されている、西で竜がガルルガに滅ぼされたのと同じように。奴らの手口が分かつた。普段は別々で行動して、纏まって行動することはないと思わせておいて、いざという時に全員でまとまって奇襲をかける。そうして、如何な強力な存在も殺してきたのだ。

「だが…ふふっ。目覚めてみれば、森は消え失せ、生き残つたのが私だけだとは…思わなかつたがな」

そう呟くグリフォンの表情や声色は、どこかもの悲しそうに見えた。

「グリフォンよ、それは悲しいでしょう…私も、昔の仲間はまだ居ない。どうか、その怒りを…この砂漠に巣くう歌姫にぶつけてはくれな
いだらうか？」

「神の友が告げたことはまだある。何百年も経つたある時、邪悪に打ち克てるチカラを持つ者が現れた時、その者に従えと。私は友の言葉に従い、ここに巣くう歌姫とやらを滅してくれよう」

「悪いな、グリフォン。そうと決まりや、一刻も早く歌姫を探そう。ア
タシには分かるんだ、歌姫に近づくほど、何かが身体に滾って来る」

二人と一匹は、灼熱の砂漠の上を歩いて進んだ。華扇とグリフォンは徐々に強まる歌姫の魔力によって飛ぶことも走ることもままならない。邪悪な敵の力に比例して強くなる新子でさえも、膨大な魔力の前には徐々に気分が悪くなるのを感じた。

そして、見つけた。砂漠にポツンとある、屋根が吹き飛び壁もボロボロに崩れた煉瓦の建物を。いや、中も赤い砂に満たされ、外壁しか残されていないあれを建物と言えるのかどうかはわからないが。あの建物の中に、きつと南の歌姫が隠されているとすぐに理解した。

「…立ち去れ」

何故なら、その崩れた建物を守るように、巨大な槍を持った人形が立っていたからだ。

第7話 「南の歌姫」

鈴奈庵の娘、本居新子は両親から、禍王の“四人の歌姫計画”を知らされる。新子は仲間の茨木華扇と共に、歌姫計画を打ち破るために旅立った。

まず最初に、南の歌姫が隠されている赤い砂丘へと進み始めるのだった…。

第7話 「南の歌姫」

「立ち去れ」

崩れた建物の前に、背の高い何かが立っていた。3メートルを越えようかというほど大きな、女の人形だった。赤いリボンで後ろにまとめた金髪の髪を陽光にきらめかせ、黒いワンピース服に肩には白いケープをかけている。腕や指に丸い関節があり、目も綺麗な青いガラス玉らしかったので、すぐに人形だと分かったのだ。

そして最も目が行くのが、その人形本体よりも更に長く、巨大な槍だ。刃物が付いているタイプではなく、円錐型で先端がとがっているタイプのようだ。

「アイツア何だ？」

新子は隣の華扇に耳打ちする。

「分からないわ。ただ、あの建物の中に南の歌姫が隠されていて、あの人形がそれを守る番人といったところかしら…？」

「どちらにせよ、邪悪もろとも消し飛ばしてくれるわ」

後ろにいたグリフォンがそう言った。

直後、突風と共に空中へ舞い上がり、滑空しながら前足の黄金色のカギ爪を振り下ろした。しかし、巨大なカギ爪の一撃は、人形が掲げた槍さばきではじき返されてしまう。

「シテ、オ前達は何者ダ？」

「アタシらは里から来たんだ。テメエこそ何だ？まさか歌姫を守つてるとか言わねえよな？」

「ソウダ、我ハ…」ゴリアテ”。南ノ歌姫ヲ守ル番人デアル！」
ギチギチと音を立てながら、首の関節が曲がる。

「ココニ近付ク者ハ全テ、敵トミナス…！」

ゴリアテと名乗った巨大人形は、腕を前へ伸ばし、そして自分の方へ引き寄せるように曲げると、グリフォンは何かにつ張られるように落下していく。

そして、巨大な槍を勢いよく上へ突き上げた。

「け…ッ！」

槍の先端がグリフォンの左肩に深く突き刺さる。槍に血が伝っていく。そのまま槍を振るい、突き刺さったままのグリフォンを砂の上に捨て置いた。

それを見た華扇が、ゴリアテとの距離を素早く詰め、右腕に巻かれた包帯を広げて敵の腕を掴んで見せる。

「離セ！我が主人、禍王様ノ命令ハ絶対ダ…！何故ナラ、”アノヒト”

ヲ…守ルノダ…」

「…あの人？」

華扇がゴリアテのいう事に違和感を感じ、少し力が緩んでしまったわずかな隙を突いて、ゴリアテは腕を振り回して華扇を地面に叩きつけた。

「次ハ、オ前ダナ」

「…テメエ、ワケ聞かせろや」

新子がそう言った途端、ゴリアテの動きがとまった。

「悪いな、アタシはそういううちよつとした事が気になってよ…禍王の事となりやなおさらだ。”あの人”って誰だ？」

槍を持った手がだらんと下に下がり、うなだれながら、ゴリアテは表情の変わらない顔を片手で覆った。

「モウ…アマリ覚エテイナイガナ。アノヒトハ、我ノ本来ノ主人ダ。我ハアノヒトニ作ラレタノダカラ。ダガナ、アル日…我トアノヒトノ前ニ、禍王ガ現レタ。禍王ハ我トアノヒトヲ引キ離シ、コウ言ツタ…」

『お前は南の歌姫を守る番人となれ。近づく者は全て敵だ、殺しても

よい。さもなければお前の主人を殺す』

「ソレ以来、我ハコウシテココニ立ち、歌姫ヲ守リ続ケテイル」

ゴリアテはうなだれたまま動かない。これはチャンスだ、と互いに目を合わせた。新子はゴリアテの背後にじりじりと迫り、華扇は下を見ているゴリアテの視界から素早く抜け、横から攻撃の構えを取る。そして、二人は一気に地面を蹴った。

「ウグ……」

飛び上がった新子のパンチがゴリアテの側頭部を殴り、華扇は包帯をほだいてドリル状に組みなおした腕を回転させながら横つ腹に突き刺した。顔にひびが入り、胴体の一部が碎けて吹き飛んでいく。

「我ハ……ゴリアテ！歌姫ヲ守ル番人ナリ！禍王カラ授カツタ魔力ハ、才前達デハ打チ碎ケン」

「そんな……」

ゴリアテは胴体と顔が破損しても、まったく弱る気配を見せなかった。それどころか、ひびの入った箇所や壊れた箇所から暗黒の魔力が漏れ出し、歌姫の力と合わさって周囲を汚染していく。

「我ニ敵スル者ニハ、死ヲ!!」

右手に構えた槍をぐつと後ろに引き、そのまま勢いを付けて、華扇を貫かんとばかりに打ち出した。

だがその時、槍は華扇の前に出された何かに突き刺さり、そこで止められた。新子が華扇の前に腕を伸ばし、手の平で遮ったのだ。槍は新子の手の平を貫通し、赤い砂の上に吹き出した血が染み込んでいるが、槍は新子に握られたまま動かなくなっていた。

「ナンダト……動力ヌ!?……ア」

さらに、ゴリアテの顔面の右半分が吹っ飛んだ。新子がゴリアテをもう一度殴ったのだ。傷口から漏れる暗黒の魔力が新子の拳に吸い込まれていくように感じる。

怒ったゴリアテは槍を振り回して新子を振り落としてやろうとして槍を持ち上げるが、その瞬間を狙っていたように、新子の踵がゴリアテの顎を蹴り上げた。

「ウゲ：何故ダ、何故我が人間如キに：！！我ハゴリアテ、最強ノ人形ノハズー！」

「馬鹿が。禍王なんかの脅しに屈して主人を変えちまうような人形野郎に：アタシが負けるわけねえだろう！！」

「仕方ガ無カツタノダ！禍王ノ強大スギルチカラノ前二ハ、我モ主人ノ人形遣イモ：！」

「だけど、いくらでも手はあつたはずだ！逃げることで、立ち向かうことだって、助けを求めることだってできたはずだろ？テメエは心のどこかで、歌姫の番人となることで授かることができる魔力を欲しいと思つちまつたんだろ!?テメエは誘惑に負けたんだ！」

ちようど、新子と華扇が砂漠に向かう途中、森の中で黄金の桃のような木の実の甘い罠に誘われてしまったように。その先にどんな悲劇が待っているのかも考えず、目先の欲に目がくらんでしまったのだ。

「理不尽なことに怒る心、それがお前には無かつたんだ。ま、人形が心を持つてるなんてこと自体がおかしいのかもしれないけどな…」

ゴリアテにあつた心は、最初の主人であつた人形遣いに仕えるという忠誠心と、強大な力への憧れと、それを求める欲求だけだった。

「…!!」

ゴリアテは息を詰まらせた。腹と砕けた頭部から絶えず魔力が逃げている。最後、槍を新子の手の平から引き抜くと、渾身の力で槍を新子に向けて放った。

「…やはり、神の友の予言の通りだ。あの女は：邪悪を討つ力を持っている」

「昔からそうなんですよ。ちよつとでも気に入らない事があると、あやつて暴力を振るつちやうんです。でも新子は：勝てない喧嘩はしませんから！」

華扇はグリフォンの肩の傷の具合を見ながら、そう言った。

「ヌアア！」

ゴリアテの渾身の突きも、虚しく空を貫いた。直後、感じたこともない強い衝撃が背中に走り、そこでゴリアテは敗北を悟った。ガクリと膝をつき、壊れた頭部が砂の上に転がり落ちる。続いて脚や腕も関節から崩れ、最後には装甲の一部と、人形の髪の毛や衣服がその場に残った。そして青い綺麗なガラスの目玉が、ころんと砂の上を転がった。

「ふう」

新子は風穴の開いた手の甲をもう片方の手で押さえる。もう血はほとんど止まっている。どうやら、新子の能力は戦闘能力を上げるだけでなく、治癒力も底上げしてくれているようだ。

「さて…次は、私の番だ」

グリフォンが四本の脚でのそりと歩いてきた。彼もまた同じく、肩の傷口はふさがっていた。

「お前から漏れ出でる力が私の傷の治りを早くしたのだ。番人はお前が倒したようだ、ならば約束通り、私は歌姫とやらを始末してやろう」
グリフォンはそう言いながら前足で二人を自分の腹の下に押し込むと、翼を広げて思いきり振るった。新子と華扇が簡単に吹き飛んでしまうような豪風が、崩れた建物を容赦なく襲う。建物の中の赤い砂が大量に舞い上がり、どんどん地面の砂が浅くなっていく。

そして、砂の中に隠されていた邪悪が、ひよつこりと頭を出した。赤い砂の中に、ついに姿を現したのは、クリーム色のゼリーのような、卵型の物体だった。表面にはピンク色の筋が血管のように走り、物体そのものがさざなみを立てながら揺れている。それは、何とも形容しがたいものであった。新子はどんな怪物が歌姫と呼ばれ、邪悪な力を流し続けていたのだろうと考えていたが、そこに有ったのは、醜悪な塊だけだった。その卵のような物体から、悪意がとめどなく流れて来る。全ての者を毒すその歌声は、憎しみに溢れ、絶望と破滅を思わせる。

南の歌姫が、全貌を露わにした。

仲間を失った哀しみ、愛していた土地を無残な荒野に変えられた怒

り、そして禍王への憎しみ。そのすべての感情を込めて、グリフォンは吠えた。轟音が雷の如く響き渡る。その直後、グリフォンは大きく開いたクチバシから、黄金色の炎を吐き出した。グリフォンの吐く黄金色の炎に包まれて、南の歌姫は身もだえして縮こまった。

グリフォンの前足を片腕で抱きしめながら、必死で自分の中に湧き上がる力を流し続けた。新子の力がグリフォンの身体へと流れ、邪悪の力を打ち消している。熱でもうろうとしながらも、新子にはそれが分かった。

グリフォンがまた息継ぎした後にもまた炎を吐いた。これでもかこれでもかと、周りの建物の崩れた壁が黄金色の炎の海と成るまで吐き続ける。物体は邪悪な歌声をしきりに発しながら、炎の中で形を変え、徐々に黒くなり、煙を上げ始めた。血管のような筋が太く脈打ち、くつきりと浮かび上がる。耳の奥に響いていた低い歌声が、哀れな耳をつんざく悲鳴に変わる。

新子はぎゅつと目を閉じて、熱で痛む顔を前足の硬い鱗に押し付けた。その時、唐突に、歌声が止んだ。グリフォンも動きを止める。砂漠全体が急に静まり返った。静寂という名の音がこだましているように、返って恐ろしい。グリフォンが大きく息をついた。すると、シューシューと音が聞こえてきた。続いて、物凄い熱風が吹き、新子と華扇は膝をついた。

ピシツと何かが割れるような音が響く。シューシューという音が痩せ細り、やがて消えてしまうと、新子は目を開けた。南の歌姫が有った場所には、ただ砂に灰色のシミがこびりついているだけだった。

「これでよし」

グリフォンが、疲れたような荒い息を吐きながら呟いた。

「何か、不思議な感じだわ。今までずっと、いつからか、常に聞こえていた音が消えた。知らず知らずのうちに耳に慣れていた音が無くなって、少し違和感を感じるわね」

「だがよ、これで南の地は救われた」

「その通りだ、予言の女、旅の女の二人よ。邪悪が消え去った今、じき

に砂漠には緑が点々と生い茂るようになり、まずは草原と成るだろう。さらに時が経てば、木が生え、林と成り、林は集まって再び森と成る。時間はかかるだろうが、そうなればどんなにいいだろう」

新子は思った。もしもこの砂漠が再び魔法の森に戻るのなら、砂漠に棲んでいたあの怪物どもはどうなってしまうのだろうか？

華扇は森の生き物は砂漠へは行けないし、砂漠の生き物は森へは行かないと言っていた。だったら、砂漠の怪物は滅んでしまうのだろうか？ いや、もとは砂漠の怪物も森出身だったのかもしれない。とにかく、彼らも禍王の歌姫計画の犠牲者だったのだ。そう…犠牲者…

「あ、ゴリアテ…」

新子は後ろを振り向いて、ゴリアテの残骸の方を見た。歌姫が消えても、その残骸は虚しく砂の上に転がっていた。

「そういえば、ゴリアテと引き離されたという人形遣いは、今どうしているのかしらね」

華扇もそちらに目を向けながら言った。

そうだ、もしかすれば主人の人形遣いとやらも、禍王の手によって殺されているかもしれない。まさか、歌姫が人形遣いの成れの果てだったとか…。いや、それは無いか。

その時、ガラン、とゴリアテの残骸の一つが動いた。華扇と新子、グリフォンまでがそこに目線が釘付けになる。そして残骸の下から現れたのは…ゴリアテをそのまま人間サイズに小さくしたような、一見すると人形に見えてしまうような、金髪の女の人だった。

「私は…一体何を…」

青いワンピースだけを着ていて、足は裸足だ。

「あ、貴女は！」

華扇が驚いて声をあげ、その女の人の元へ駆け寄る。

「何が有ったと聞きたいのはこつちです、何故ゴリアテの骸の中から…アリス・マーガトロイド、貴女が…！」

「確か、仙人とか言ってた…茨歌仙！貴女が、私を禍王の呪縛から？」

ゴリアテの残骸から姿の現した女の人は、アリス・マーガトロイド

と言う名前らしい。魔法使いであり人形遣いでもある。

200年前、禍王との戦争が終わった直後、急に巨大な怪鳥の攻撃を受け、怪鳥と一緒にいた禍王の手下に、お前の住んでいる場所を歌姫の配置場所に使うのでここから出ていけ、と言われた。アリスとその使いである人形たちは再び戦ったが、最期にはアリスと人形一人しか残らなかった。その時、禍王自らの手でアリスはその人形の中に封印され、ゴリアテという人形は自分の中に主人が居ることも知らず、禍王の手下に成り下がってしまったようだ。

「ゴリアテはああして壊れてしまったけど、場所と時間さえあればまた作り直せるはずよ。今度は：新子さんの言う通り、禍王の脅しにも屈せず、私たちに抵抗し続けて見せるわ」

アリスは、華扇の勧めで香霖堂に匿われることになった。あそこなら、人形を作りなおす環境も整えられるし、禍王の目からも逃れられるかもしれない。

もつとも、店主の霖之助は迷惑だと嫌がっていたが。

「して、予言の女よ。お前には話しておこうか、神の友と私たちの誓いを」

―神獣。それは、幻想郷で最も気高く、強大で、それと同時に恐ろしくもある、神に等しき最強の妖獣。300年前から200年前にかけてに最も繁栄した。南にはグリフォン、西には竜^{ドラゴン}、北には麒麟、東には天狐、中央にはケツアールという種族がそれぞれ生息している。どの神獣も強力な力を持っている。だから、敗北を味わった禍王は、じわじわと邪魔な神獣を滅ぼしていくことにした。邪魔な七羽の怪鳥を使って。

そこで神の友が現れた。神の友はグリフォンの元へ来る前に、他の4つの種族のところにも行っていった。神の友は警告をしに来たのだ、禍王が神獣を絶滅させようとしている、すぐに隠れてやり過ごせと。それも、神の友が予言した、邪悪に打ち克てる力を持つ女が現れるまで。

「私がお前達の味方をできるのは、南の領域だけだ。次は何処の歌姫を倒す?」

「西、かな」

「西か。西と言えば、竜どもの領域か。他の神獣も、私と同じように予言を教えられているはずだ、きっと手を貸してくれるだろう」

「だけど、もし竜が見つからなかったら?見つかったとしても、お前のように手を貸してくれないとしたら?既に息絶えていたら...どうしたらいい?」

「もし息絶えていたら、その時は...その時だ」

「そうか...。教えてくれてサンキューな、私の名前は...」

「それともう一つ、私たち神獣と接するときには絶対にしてはいけないことを教えてやる。それは、本当の名前を教えてしまう事だ、本名を名乗ってはいけない。神獣は、名前を知った相手を支配することができるのだ。神獣側から名乗って来た時だけ、名乗り返すがいい」

これで、まず南の歌姫を倒す事が出来た。これで、南の地は肥え、見る見るうちに以前のような美しさを取り戻すだろう。人間の里の南側も、これからは米のついていない稲を担いでとぼとぼ戻ってくるようなこともなくなるはずだ。

だが、まだ新子たちの旅は始まったばかりに過ぎない。まだ、歌姫は3人も残っているのだから。

第8話 「妖怪兔救出」

鈴奈庵の娘、本居新子は両親から、禍王の“四人の歌姫計画”を知らされる。新子は仲間の茨木華扇と共に、歌姫計画を打ち破るために旅立った。

グリフォンの協力を得て、一人目の歌姫、“南の歌姫”を討伐することに成功した。

一行は次なる歌姫が隠されている“竜の墓場”を目指して、西へと歩みを進めるのだった。

第8話 「妖怪兔救出」

ここはどこだ？見覚えがある町並みだ…。

視界に映っているのは、昔から見慣れているような、人間の里の町並み。小さな雑草の生えた石ころだらけの路地裏、ボロボロののぼり旗が並んでいる商店通りだ。

あーん… あーん…

誰かが…泣いてるな。ああ、こりやアタシの声か…。

なんで泣いているんだ？それに、誰かと手をつないで歩いているな…。誰だ…？背の高い…

「…あ」

目を覚ました。砂の上でたき火がぱちぱちと音を立てて燃え上がっており、近くに“火炎玉”の缶ケースが置かれている。空には雲一つなく、月の光がうつすらとあたりを照らしている。

「夢か…」

変な夢を見た。そうか…思い出した、夢で見た光景は…もう十何年も前の事だ。確か、一人で遊んでて、迷子になって…泣いているところに男の人が来たんだっけ…それで、家まで…。

「どうしました？」

横から声が聞こえた。そちらに振り向くと、座ったまま眠っていた華扇がこちらを見ていた。

「いや別に……。グリフォンは？」

「彼なら狩りに出かけましたよ。いつもこの時間に行ってます」
「そうか……」

既に、南の歌姫を討伐してから3日が経っていた。新子の手の傷も、邪悪を前にすると力を増すという能力によって治癒を速める事ができるが、生憎にその邪悪はもう近くにいないのだ。確かに今すぐにも出発したいが、傷がある程度治るまで、ここで様子を見ることにしたのだ。

グリフォンの協力有って、ついに南の土地から魔の根源を葬り去った、この次に行く西の“竜の墓場”に隠されているという西の歌姫も、同じように退治してやる。何としても、絶対に……。

その時突然、新子の背中に何か冷たいものが流れた。冷たい指でスーッと撫でられたような感覚に、震えがくる。新子は戸惑いながら、自分に言い聞かせた。夜の砂漠は寒い、だから体が冷えたんだ。ただそれだけだ。

新子は毛布にくるまると、再び目を閉じた。視界の端に、遠くから、捕まえた虫の怪物を抱えながらこちらへ飛んでくるグリフォンの姿が見えた。

南の歌姫が消え失せた影響は、既に砂漠からはるか遠く、人間の里の南地区にも訪れていた。これまで、どんなに耕してもだめだった不毛の大地と、魚一匹捕れなかった川が、突然息を吹き返したのだ。釣り用のかごは魚で埋め尽くされ、狩人は毎晩、肉を土産に帰って来る。

長い飢えの時代が終わりをつげ、その上南の空に伝説の獣が目撃されたという。いったいどうしてこうなったのか皆目見当もつかないだろう。しかし、いくら食料が多く取れても、里にはびこるマガノ国の者どもには怯えなければならない。その事が禍王の耳に届くのも、時間の問題だ。

次の日、新子と華扇はいよいよ、西にある次なる目的地、竜の墓場へと向けて出発した。まず、汚れた毛布をマントのように体に巻き、これでただの旅人を装う事にした。これならば、多少は身を隠すことができるだろう。

砂丘を西へ向かい、ついに森の入り口が見えてきた。今居る赤い砂丘は、魔法の森の南部に円形に広がっている。西の竜の墓場へ向かうには森の一部を通過しなければならない。森を通過すれば、あとは岩の荒野をただ突き進むだけだ。

「ようやく、この砂丘ともおさらばか」

新子は後ろを振り返りながらそう言った。前に襲われた時よりもやや元気な様子の恐竜が、ぴったりとあとを付けてきている。

「急ぎましょう」

二人は、赤い砂丘を抜け、再び森へと入っていった。

「西には、竜か。竜もグリフォンみてえにアタシらに協力してくれるかな?」

「分からないわ。そもそも、いくら身を隠して眠りにつけと言われても、そこが見つかっていないという保証はないし。それに、聞く話では竜の墓場は無縁塚の上にガルルガに殺された仲間の竜たちの死体がゴロゴロ転がっていることからそう呼ばれ始めた場所…。そんな場所に何百年も眠っていたんじや、少しくらい体や頭がおかしくなっていないでも不思議じゃないわ」

—もし息絶えていたら、その時は…その時だ—

グリフォンに言われた言葉が頭に蘇る。

竜と言えば、里の人間のほとんどが知っている種族だ。他の神獣はあくまで自分らの領域だけで暮らしていたのに対し、竜だけは自分の領域を超えて幻想郷中の空を飛びまわっていたのだ、だから知名度は高い。グリフォン、麒麟、天狐は今や幻想郷縁起にしかその存在が記されていないので、全くと言っていいほど知名度が無い。

いやいや、元から華扇と自分の二人でどうにかするつもりだったんだ。あまり他に頼ろうとするのはよそう。

陽光が頭上の葉の隙間から差し込み、赤い砂の混じっている地面に

模様を映し出す。

そして、歩いているとじきに、森はだんだんと開けた場所が多くなり、林へと変わっていた。魔法の森を抜けようとしているのだ。その時、上空から何かが羽ばたく音が聞こえた。

華扇があつと声を出す。

「竿打！」

頭上からやって来たのは、大鷲の竿打だった。森を抜けて砂丘へ入るときに、いつの間にか居なくなっていた。その時は、ただこの場を離れているだけだと思つたし、砂丘のような開けた場所で竿打が飛んでいればまたすぐにガルルガに見つかつてしまうと考えたからあまり気に留めていなかったが…。

「お前、一体どこにいたの？」

華扇の横に降り立った竿打。

「怪我をしてるじゃない」

華扇は、竿打の背中に固まった血が付着しているのに気付いた。周囲の羽毛の中をのぞくと、小さいが深くできた切り傷のような跡があった。傷は血こそ出ていないものの、まだ全然治っていないかった。竿打はその傷口に触られると、少し嫌がるように体を震わせた。

「え？ 私たちと別れている間に敵に襲われた？」

「何だと？」

「…憲兵団ではないみたいだわ。こう、背の高い男だつて」

「…背の高い男…？」

「その男に襲われたそうよ。きつとマガノ国の奴に違いないわ」

新子は少し考え込んだ。

「どうしました？」

「い、いや…何でもない。先を急ごうぜ」

変な感覚に囚われながらも、新子と華扇、そして頭上の木々の枝を渡るように飛んでいる竿打と共に目的地へと急いだ。

そしてかなり歩いた。日も暮れようかという頃だった。続いている獣道の遠くの方から、何やらガヤガヤと騒ぐ声が聞こえてくる。二

人はとっさに太い木の後ろに隠れた。

「あの声は憲兵の野郎どもだな…」

「上へ登って様子を見ましようか？」

そう言っている間にも、聞こえてくる憲兵たちの声は大きくなる。そしてついに、道の向こうからやってくる、灰色の軍服に身を包んだ憲兵団が見えた。

「まさか、禍王は既に南の歌姫が倒されたことを知ったのかしら？」

「それに半端じゃねえ数だ…30人は居るぜ」

二人は木の太い枝の上からじつとそれを見ていた。

たのむ、このまま通り過ぎてくれ…！

「総員、止まれ！…ここですってたん休憩を取る！」

部隊の隊長らしき、角のついた仮面をかぶった憲兵が片手を上げてそう呼びかけた。すると他の隊員も続々とその場で止まり、座り込んだり背負っていた荷物を置いていく。

「かあ、最悪だ！奴ら当分動かねえぜ、飯の準備始めたし…」

憲兵は置いたかごの中からパンや肉、果物をそれぞれ取り出して、また地面に座り込んで騒ぎながら食事を始めた。無邪気に大笑いしながらものを食べる姿は、里で威張り散らしている時と違って何か違った印象を感じる。

「おや？」

肉をかじっていた憲兵がふと後ろを振り返り、そばの木の根元を見た。その木の根元に太い鎖で縛りつけられていたのは、へんてこな姿をしている生き物だった。背格好は人間の少女のように見えるが、頭の黒い髪の毛の間から兎の耳が伸び、白いワンピースのスカート部分からは、丸っこいふさふさした兎の足がぐったりと伸びている。

その兎のような少女は、俯いて腹をさすっている。

「おい、あのチビも腹が減ってるらしいぜ！」

その憲兵がからかうようにそう言った。それにつられて、他の憲兵もそちらへ振り向く。

「あれは？」

「妖怪兎…かしら。おかしいわね、迷いの竹林の最果てでひっそりと

暮らしていると聞いたけど…。でもあの様子じゃ、憲兵団に捕まっただどこかに護送される途中みたい」

怯えた目でひたすらに地面を見つめている。

「囚人の癖に飯が食いたいだど？生意気な！」

「まあそう言っつてやるなよ」

「ああ、これだけ歩かされりや腹も減るさ！」

憲兵の一人が立ち上がり、食べかけの骨付き肉を持ってその兎に歩み寄り、しゃがみ込んで肉を差し出した。

「ほらよ、食え」

憲兵の食べかけではあるが、肉汁がしたたり落ちそうな肉を見て、兎は喉をぐくりと鳴らした。そして目を輝かせながら、差し出された肉を受け取ろうと手を伸ばす。

その時…

「バア~~~~カー！」

その憲兵は足を振り上げると、思い切り兎の頭を蹴りつけた。あまりの力に、兎の軽く小さな体は簡単に吹っ飛び、首に付けられた鎖によつて引き寄せられる。

兎は首を押さえてゴホゴホとせき込み、木にもたれかかった。

「オメーに喰わせる飯はねえ！」

「ガハハハハハ!!」

「家畜以下だぜ、コイツ」

憲兵は肉を一気に食べきると、残された骨を兎に投げつけた。地面に落ちる骨に振り向いた兎の片耳は千切れかかってしまっており、血が流れている。

「アイツら…!もう我慢ならん!」

そう声を上げた新子は、カバンからバットを抜くと、それを持って木の枝から飛び降りた。そして着地ざまに最初に兎を蹴った憲兵の頭を踏みつける。

「な、何だお前は!」

驚く憲兵の一人を、近くの石を拾い上げてそれで思い切り殴りつけてやった。憲兵は頭を押さえてよろめき、他の憲兵が怒号を上げて新

子に襲い掛かる。

「あちやー…」

すぐに乱闘が始まった。向かってくる憲兵の腕をすり抜け、顔面をバットで殴る。そして投げ飛ばしては地面に叩きつけ、蹴っては殴り、片っ端からねじ伏せていく。

その様子を、兎はただ驚きながら見つめていた。

「オラオラー！」

電気棒を振り回す憲兵の腕を殴り、痛みに声を上げて電気棒を落とすしてしまう。チャンスだと思い、再び殴りかかったその時、突如新子の横で爆発が起こった。

「な……！」

「驚いたか？ついこの前、俺達憲兵に支給された新しい武器だ。まだ試作段階だし、数も少ないので隊長でしか使えないのだがな」

仮面をかぶった隊長らしき憲兵が、右腕をこちらへ突き出すように向けていた。よく見ると、その右手にはカタパルトのようなものが搭載された手甲をはめている。そして、そのカタパルトを引き、そこに小さな爆弾を置いて、一気にカタパルトを離れた。

勢いよく射出された爆弾を、新子はギリギリで避けた。自分が立っていた場所で爆発が起こり、やけに臭い爆風と煙が広がる。しかも、着弾した場所に生えていた草が燃えてなくなるのではなく、溶けていた。毒薬のような物が混ざった火薬だったのだ。

「次は外さん」

隊長はもう一度カタパルトに毒爆弾をセットする。

と、その時、突然周りの憲兵が倒れ始めた。隊長も何事だと辺りを見渡す。気づけば、木に鎖で縛りつけていたはずの囚人が居なくなっている。

新子は見えていた、隊長の背後に、華扇が近づいていた。その少し上にいる竿打の足には、さっきの妖怪兎がしがみ付いている。

「あ……お前達、聞いているぞ……例の二人組か！」

隊長は腰に下げた短剣を抜き、華扇に向けた。そして素早く間合いを詰めると、一気に斬りかかる。しかし、隊長は後ろから軍服の襟を

引っ張られた。

「ゴラ、テメエの相手はアタシだろ」

後ろにいた新子のパンチを間一髪で避け、地面を転がるように距離を取った。様子を伺うように、短剣を構えたままじりじりと後ろに下がりがり、勝ち目がないと分かると、一目散に逃げだした。逃げる隊長を、その場から起き上がった数名の憲兵が追いかけていく。

「さあ、早くこの場を離れましょう」

二人と、兔を足で掴んだ竿打はすぐにその場から離れた。

「酷いわね…。片耳も千切れかけ、ほぼ全身が打撲…」

華扇は毛布の上に寝かせた妖怪兔の身体を調べながらそう言った。兔の身体はかたかたと震え、包帯を巻かれた頭を押さえている。首に付けられた首輪と鎖を、軽く切断する。

「た、助けてくれてありがとう…。私は…見て分かると思うけど、妖怪兔なの。〃コト〃って名前よ」

「なあ、何が有ったか聞かせてくれねえか？そもそもよ、華扇から聞くにや、妖怪兔ってのは東の竹林にしか住んでいないみたいじゃねえか」

「私は一月前に、仲間と一緒に新しく住める場所を求めて旅に出たの。最初は7人だった。でも、恐ろしい魔獣に襲われたり、事故で死んじゃったり、マガノ国の憲兵団に殺されたり…。私だけは何とか生き延びられたんだけど、丁度そこで憲兵に掴まっちゃって…」

そう話す〃コト〃は膝の中に顔をうずめてしくしく泣きだした。余程恐ろしい目に遭ったのだろう。見たところ幼いので、トラウマになってもおかしくはない。

コトは、華扇の持っていたアップルブレッドをひとつぺろりと平らげると、安心したからかすぐに眠ってしまった。

「もう日は遅い。進むのは明日だな」

「そうですね。でもこの子はどうするの？当然、この先連れて旅ができる訳じゃないし…」

「しょうがねえな、朝になったら一人で帰らせるしかねえ」

「帰らせるなら、ここはまだ危ない場所…。林を出てから、森の外側を回って竹林へ向かうように教えましょうか」

華扇は、ポケットから、何やらカラフルな柄の小さな木箱を取り出した。それを片手で持つと、真剣な顔でそれを弄り始める。

「何だそりゃ?」

「さっきの憲兵の落とし物よ。何やらからくり箱のようだけど…どうすれば開くのかしら?」

その時、華扇の指が箱のどこかに触れた時、カチツと小さな音がした。直後、箱の蓋らしき面の横から木の棒が一本飛び出した。華扇は慌てて箱の蓋を開けようとするが、まだからくり箱は開く気配を見せない。

「二本だけじゃだめみたいね。何か別の仕掛けがあるのね」

二人は、竿打を見張りにつけて今日は休むことにした。新子は背の高い男についての違和感、そして西の歌姫への不安を抱いて、眠りに落ちた。

第9話 「竜の墓場」

鈴奈庵の娘、本居新子は両親から、禍王の“四人の歌姫計画”を知らされる。新子は仲間の茨木華扇と共に、歌姫計画を打ち破るために旅立った。

グリフォンの協力を得て、一人目の歌姫、“南の歌姫”を討伐することに成功した。

一行は次なる歌姫が隠されている“竜の墓場”を目指して、西へと歩みを進めるのだった。

第9話 「竜の墓場」

「じゃあな、もう憲兵に捕まるなよっ」

「うん…ありがとう」

次の日の昼頃。昼食を済ませた3人は林を抜け、背の高い茨だけが点々と生い茂る湿地帯にいた。傷の手当ても終えた妖怪鬼のコトを、竹林まで帰るように説得した。

始めは一人で帰ることを怖がっていたが、何とか決心がついたようだ。というのも、正直に言ってしまうとこれからの旅、なるべく荷物が増やしたくない。だが他人を自分らの危ない旅に巻き込みたくないという意思もある。

「それじゃあねー」

コトはこちらに手を振ると、そのまま地面に手をついて駆け出して行った。

「無事に竹林まで帰れるといいけど…」

二人は岩と砂利の荒野をひたすら西に向かって歩いた。岩に囲まれた一本道だったのが、だんだんと岩の配置がまばらになり、やがて完全に岩石地帯に変わった。

目の前に現れたのは、切り立った崖だ。深い崖の下を見ながら、その崖をなぞるように歩いていく。こんな危ない道を通っていても、何故だか新子に不安感や恐怖は無かった。昨日までの心にひつかかる違和感もない。

もう西の領域、竜のなわばりにはとつくに入っているはずだ。グリフオンの言っていた“神の友”の予言を聞いているならば、それに気付いた竜が姿を現しても不思議ではない。

試しに呼んでみるか。

—西に住む竜、私が予言の女だ、聞こえてるんならすぐに出てきてくれ—

しかし、何も起こらない。右手の岩山にも、左の谷にも、動くものはない。空には、竿打以外に鳥が一羽も居なかった。

だめか…。

だんだんと谷が狭まり、曲がり角が現れた。一番狭まっている場所に、対岸に向けて粗末な木の橋がかけられている。

そばに標識が立っていた。ペンキのような塗料で雑に書かれている。

『安全な橋』

命が大切ならここで渡る

注意！

無縁塚までに谷を渡れる最後の橋』

黒い文字同士の隙間に白いペンキで塗りつぶされている箇所がある。二人はだまって標識を見つめ、そして顔を合わせた。

「この橋は無縁塚には行かねえな」

「ええ、この橋が証拠ですね」

華扇は腰に付けたウエストポーチの中からナイフを取り出した。そして慎重に、だが力を込めて標識の表面を削り始めた。白いペンキが粉となって落ちる。

『安全な橋』

にあらす

命が大切ならここで渡る

べからず！

注意！

次の橋が

無縁塚までに谷を渡れる最後の橋』

「しかし、こんな幼稚な手段でワタシらの邪魔をしようとするたあなあ」

新子は顔をしかめて近くにあつた大きな石を拾いあげると、橋の上に投げて見せた。橋の床板はギィ…と音を立てて揺れたが、何とか持ちこたえた。

さらにもう一つ、さっきのと同じくらいの大きさの石を拾い、今度はおもつと遠くまで投げた。石が橋の中ほどに落ちたその瞬間、いともたやすく床板が抜けた。くさつていたのだ。

橋が上下に大きく揺れて石は真つ逆さまに落ち、はるか下の谷底に碎け散った。

「…うわあ」

新子が声を漏らす。

「次の橋…を渡ろうとすると目的地の竜の墓場までかなり遠回りをすることになるでしょう。仕方ない、竿打に対岸まで連れて行ってもらいましょうか」

丁度そのころ、新子たちと別れた妖怪兔のコトは、東の竹林を目指して魔法の森沿いの林の中を進んでいた。

と、そこに、突然木の影から数人の人影が現れ、コトの行く手を塞いだ。

「あ、貴方たちは…！」

「見つけたぜ、兎野郎…お前は何としてもマガノ国へ連れて行つてやる…そう命令が出ているんだ」

出会ったのは昨日の憲兵団だった。角のある仮面をかぶった隊長と、普通の憲兵が7人。どの憲兵も手に電気棒や短剣を握っている。

「…え…あ…」

「どうやら昨日の二人組とは別れたようだな…」

「また怯えてやがるぜ、このチビはよ」

震えるコトを見て憲兵が笑った。だがコトの視線は憲兵ではない、その背後に向いていたのだ。それに気づいた憲兵が、おそるおそる後ろを振り返った。

竿打の足に掴まって、谷の反対側まで移動している新子と華扇。下には真つ暗な谷底が待ち構えている。

「谷を越えるだけなら、飛んでいても見つからないでしょう…」

幻想郷の空はよくガルルガが監視しており、その目を盗んで空を移動することは難しい。だが谷を越えるだけ、谷の間ならばそうそう見つかることはないだろう。

その時だった。新子たちのはるか後方から雷鳴のような轟音が響いた。直後に聞こえる、身も凍るような雄叫びと悲鳴。遠くからの恐ろしい悲鳴は数十秒続いて、ぱったりと止んだ。

二人は動きを止めた。竿打だけが、はやく谷を渡り終えて安全な場所にとどり着きたいとでも言うように飛ぶ速度を速める。

しかし、突如として上から吹いてきた猛烈な風によって谷底に向けて竿打は大きく下に押し込められた。

「な…!」

頭上を覆い隠す巨体、そしてそれを悠然と持ち上げる巨大すぎる翼のシルエット。そのシルエットは物凄い風圧を放つと同時に、真つ赤な血や灰色の布きれ、そして白いふさふさした毛を落としながら、頭上を越えていった。

西へ飛んでいく、その影はまさに…。

—竜!

影が過ぎ去ると同時に、上からの風圧も止んだ。新子は竿打の後頭部を毛を掴み、上へと飛んでいかせる。そして下の岩場、竜が向かってきた方向にある林までを見渡せる場所まで来たが、既にどこを見ても竜の姿は無かった。

さつき落ちてきた血にまみれた灰色の布切れは、憲兵団の軍服だ。

きつと、アタシの呼びかけで竜は目を覚ましていたんだ。

目を覚ました竜は、たまたま目に入った例の憲兵団を食べた。そして…コトも。

布と一緒に落ちてきた白い毛の束、あれはコトのものに違いない。おそらく、またコトはあの憲兵団に捕まった。そこに運悪く竜が現れて襲われたんだ。

だが、何故竜はアタシらを見殺しにして飛び去っていったんだろう？神の友の予言を聞いているなら、アタシの元へ来るはずだ。

いや、真つ先に来てくれたのはグリフォンだけで、竜は目覚めたところでアタシなんか目にもくれないつもりなのかもしれない。

—じゃあな、もう憲兵に捕まるなよ？

—見つかったとしても、お前のように手を貸してくれないとしたら？

自分の言葉が頭に浮かんで消える。アタシが竜を呼び起こしたから、コトは無残に…。

一時は消えていた不安感が、どつと蘇る。

「新子！」

耳元で怒鳴った華扇の声にふと我に返った。

「な、なんでえうるさいな…」

「竜の協力も駄目、コトも竜に…。気持ちには分かるけど、今は早く下に降りて竜の墓場へ向かいましょう」

竿打は谷を渡った地面に降り立ち、二人を降ろした。

暑い日差しの中、雑草しか伸びていない不毛の砂利道をただひたすらに歩いた。だが、星が見える夜になり、また夜が明けても、新子は気分的に調子が良くなかった。目を覚ました竜は、憲兵団と兎を喰い殺した。その正気を失っている竜を呼び覚ましてしまったのは自分だ。自分のせいで、危険な竜が幻想郷の空に放たれたのだ。

やはり華扇の言う通り、永い眠りの間に竜は気がふれてしまったのだろうか？

新子たちは平原を抜け、小高い丘を登り始めた。遙か北には、マガ

ノ国との国境の山脈が見える。華扇の描いた地図を見た限り、丘の頂上につけば、無縁塚、そして竜の墓場が一望できるようだ。

そしていよいよ丘の上に登りついた。目に入ったのは、岩と寂れたガラクタの山だった。全く手入れの行き届いていない、古の骸が眠る墓、そして外の世界から流れ着きここへたどり着いた今では二度と人の手に触れることはないであろう道具たち。

そしてその無縁塚の中央に見える、巨大な骨と腐った死骸が積み重ねられて構成されている、真ん中がくぼんだすり鉢状の場所。遠くに見えるあそこそが、竜の墓場に違いない。

「この石碑は何かしら？」

丘の上の岩に隠れている石碑を指差した華扇。上手く岩に溶け込んでいる石碑はふつうにここを通るだけなら絶対に気付けないだろう。

「どうやら文字が書いてあるようで、石碑にはこう書いてあった。

「ひめやかに流れる川の如き歌声。その危うきは、数多もの竜の骸が礎となった『竜の墓場』の暗きに潜む

アキラメロ、ドウセシヌ」

「気味がワリイな。誰だ、こんなのを作ったのは？」

新子はズボンのポケットに手をつ突っ込みながら思い切り石碑を蹴飛ばした。石碑はゆっくりと倒れ、岩の上に転がった。華扇が目凝らして掠れかけた石碑の文字を読み上げる。

「諦めろ、どうせ死ぬ…ね。これは多分歌姫が隠されたと同時に作られたんだわ。ここを通る旅人や妖怪を、ここから追い払うと同時に石碑から漏れ出る憎しみの力によって生きる気力を根こそぎそぎ落とす。そうやって禍王はこの幻想郷から妖怪を

消していったのかもしれないわ」

周囲に生き物の気配はない。全てが冷たく死に絶えていた。しかも歩きたびに、今は初夏のはずなのに気温がどんどん下がっているように感じられ、指がかじかんでくる。

ふと下げていた顔を上げると、目の前に巨大な骨が横たわってい

た。竜の骨だ。檻のような肋骨の前で腕を組み、頭蓋骨の顎は大きく開かれたままだ。そこから続く斜面を登れば、いよいよ竜の墓場のすり鉢状の窪みに到達する。

「ここが竜の墓場か」

新子にはこの場所に西の歌姫が居ることを既に感じ取っていた。邪悪な影がひんやりと霧の如く纏わりつき、全身に鳥肌が立つ。影は新子と華扇の心と肉体にまで染み込んだ。こんなに寒いというのに玉のような汗が額ににじんでいる。

だがすぐに新子の鳥肌はおさまった。纏わりつく歌姫の魔力を前に、新子の力はどんどん強まっていく。湧き上がる力は新子の体を温め、熱を発し始める。

凍えてふるえていた華扇も、新子から伝わる熱気によって徐々に温まってきた。

「温かい……」

「ああ……竜が来ずとも、相手が歌姫だろうとその番人だろうとよ、アタシらでぶつちめようぜ！」

「ええー！」

二人は一気に竜の墓場の淵を駆け下りようと踏み出した。

中を覗き込んだ新子たちは息を呑んだ。予想もつかなかった光景がそこに有った。竜の頭骨が転がっている中に、弱弱しい白い生き物が一匹、体を丸めて横たわっていた。

新子は目を凝らした。クセのついた黒い髪からのぞく長い耳、細い腕、白い毛におおわれた足。

「ゴト……。きつと竜が林からここまで連れて来たのよ。でもなぜ……？」

「わかんねえよ……やっぱり憲兵よりも美味いから楽しみにとってあるとか？」

「静かにした方がいいわ……竜が近くにいるかもしれない、気付かれるかも」

だが新子はすぐに斜面を駆け下りて行こうとする。その身体を華扇がつかんで引き戻した。

「駄目よ、新子：あのコトの場所まで行ってしまつたらもしも竜が襲つてきた時、ひとたまりもない。それにコトが本当に竜によつてここまで連れて来られたのか、まだ分からないんだから。私は、コトがおとりのようにしか見えない」

「おとりだと？何のためだ？」

「コトを狙つた他の妖怪をおびき寄せるためか、それとも私たちをおびきよせるためか…。たとえ竜でなくとも、ずっと前から邪魔をしている、標識に手を加えた奴かもしれない」

新子は黙り込んだ。

「もしも目覚めた竜の最初に目に入ったものが敵だつたとしたら？目覚めて初めて聞いた音が敵の声だつたとしたら？竜が禍王と：手を組んだとしたら？」

ありえるか？

黙つたままそう思つた新子。

忘れるはずのない、幻想郷縁起の竜の項目を思い出す。竜は誰とも手を組まない。それがたとえ同族同士でも。

「きつと邪魔しているヤツが竜に話を持ち掛けたんだわ。あの谷の時だつてそうだわ、きつと邪魔者が標識に手を加えて私たちを罠にはめ、私たちが死んだかどうか竜が確認しに来た…。それでも私たちは生きていたため、コトを使って私たちをおびき寄せようとしている…。まだまだ私たちを始末する策はいくらでもあるんだわ：禍王は手下の失敗を絶対に許さないから」

すり鉢状の底で、コトがもぞもぞと動いた。よかつた、彼女は生きています。

「：分かつた分かつた、でもごちやごちや言つてもしょうがねえ。アタシらは西の歌姫を倒しに来たんだ、一刻も早く歌姫を探し出すべきだ」

周囲の岩、積み重なつた竜の骨の隙間、窪みの中心の土の中、このような場所に歌姫は隠されているはずだ。歌姫に近づけば、自ずと新子には場所が分かるだろう。

「ひっ……！」

急に肩を掴まれたコトは悲鳴を上げた。その小さな体が持ち上げられ、誰かにおぶられる。

「あなたは……この前の旅の人？」

「ああ。悪いな、アタシらは今から大仕事をしなくちゃいけないんでな、お前には退いていてもらう」

新子はコトを後ろにいた華扇に引き渡した。華扇はコトをわきに抱えると、窪みの斜面を飛ぶように登っていく。

それを見た新子は、いよいよ歌姫を掘り出すことにした。

「私、怖かったよ……。帰る途中でまた同じ憲兵に襲われて……そこに竜がやってきて、血が……炎が……目に焼き付いて忘れられないよ……」

「……そうね、もう大丈夫だから……この竜の墓場の外の岩場に隠れていなさい」

「もうすぐ竜が戻って来る！はやくして……！」

コトは泣きわめきながら華扇の腕の中で暴れまわる。華扇は窪みの縁まで登りきると、コトをその場に降ろす。どつと座り込んだコトは、汗と涙で濡れた顔を、窪みの中心に居る新子に向けた。

おそろしく厚い土の層だ……。どれぐらいの深さに歌姫は隠されているんだろう。それを考えたたん、新子の心は一気に暗くなった。ここは邪悪の力が強すぎる。もはや、アタシの能力の範囲をも超えた、異常なほどの魔力。南の歌姫よりもずっと強力だ。ここで息絶えた竜の絶望、後悔、怒り、憎しみを全て吸収しているかのようだ。

土を掘ろうにも、五分と持たないだろう。頼む、せめて……華扇！はやく戻ってきてくれ！

「きやああああ!!」

その瞬間、聞こえたのは聞きなれた声の悲鳴。目だけを動かしてその先を見る。華扇がその場で立ち尽くしている。

直後に響く、雷鳴のような轟音。そして近くに有った竜の頭骨が何かに押しつぶされて砕け散った。

第10話 「竜」

鈴奈庵の娘、本居新子は両親から、禍王の“四人の歌姫計画”を知らされる。新子は仲間の茨木華扇と共に、歌姫計画を打ち破るために旅立った。

グリフォンの協力を得て、一人目の歌姫、“南の歌姫”を討伐することに成功した。

一行は次なる歌姫が隠されている“竜の墓場”を目指して、西へと歩みを進めるのだった。

第10話 「竜」

「旅の仙人様、また私に…一人で帰れというの？また…襲われてしまうかもしれないの？」

コトが横でキーキー喚いている。しかし、今はそれどころではなかった。巨大な窪みの縁でへたりこんだまま、声も出せない。吐き気がして、体に力が入らないのだ。

私は何か重い病気にでもかかってしまったのだろうか？コトはこんなにも元気に喚いているのに。

「仙人様」

とうとうコトの声もふるえだした。華扇の肩を掴み、大きく揺らす。なんて冷え切った手…服越しでも素肌が凍ってしまいそうだ。

「触らないで…」

「え？」

「今はそれどころじゃないの…」

華扇はコトの手を振り払い、脅すように睨みつけた。

「貴方は私の小指程の力もない。邪魔なのよ…そんなに怖かったらどこかに隠れていて！」

何故だか異常なほどの苛立ちを感じる。こんな純粋な妖怪に？ただ、この子は私に助けを求めているだけなのに？

窪みの中心から波のように押し寄せる歌姫の邪悪な力、そして新子から伝わってくる温かい力が私の中で戦っている。その温かい力が

言っているんだわ、今やることは…すぐに新子に寄り添い、共に歌姫を倒す事！

コトはぐつと涙をこらえ、最後にすがるように下に居る新子を見ると、走り出した。窪みとは反対側の斜面を駆け下り、やがて大きな岩の後ろに姿を隠した。

華扇は窪みの中心へ向かおうとする。だがめまいが酷く、前に倒れ込んでしまった。そのまま斜面を滑り落ち、途中で石につっかかって止まった。

さつと舞い降りてきた竿打が心配そうに首をかしげる。起き上がろうとするが、視界に映る竿打の顔はぐるぐると歪んでいる。

「イバラー！」

突然大声が耳に届いた。新子だ。新子が私を呼んでいる。

コトの声、歌姫の声よりもずっと耳障りが良く、心にかかった霧が払われたようだ。

氣力を振り絞って立ち上がると、一気に新子の元へ駆け寄った。

「どうすればいいかわからねえ…。この中心のずっと深いところに歌姫はあるんだ。だがな…どうにもよ、私の能力もこれ以上通用しねえ…この竜の墓場の歌姫の力は赤い砂丘の歌姫よりも何倍も強力だ…。邪悪な力が四方八方から襲い掛かって来る…」

「そんなに喋れる余裕があるのよ、きつと大丈夫…ほら、私が一気に土を削って…！」

華扇の包帯の腕がねじれてドリルのように変形し、そのまま回転しながら地面に突き刺さる。

「…きやああああああ!!！」

その時、華扇が悲鳴を上げた。身を斬るように冷たい突風が岩に吹き付ける。暗い影が頭上を走り、太陽を覆い隠した。

新子は華扇と同じく、頭上に恐ろしい姿を見た。でっぷり太った真紅の巨体が空からドスン、と降りてきた。転がっていた竜の頭骨が巨体に押しつぶされて粉々に碎ける。棘のある翼がナイフのように空を斬る。先端に鱗と棘の塊がついた細い尾。

赤い巨体はこちらへ振り向いた。太った胴体から不格好に伸びた

長い首、そして兜を被ったような頭殻の隙間からのぞいている黄色い目は殺意に狂っている。

華扇の言葉が新子の頭の中に蘇った。

—そんな場所に何百年も眠っていたんじゃ、少しくらい体や頭がおかしくなっても不思議じゃないわ—

短い腕にはとても釣り合わない程大きく長い鉤爪が素早く振り下ろされた。二人は転がるようにそれを躲した。今まで二人の居た場所に爪が命中し、地面がえぐれる。

竜は怒りの雄叫びをあげた。ガラスを砕いたような甲高い声。鼻先がいびつに変形した顔の口を大きく開き、液体に近い炎を吐き出す。泡立つ真つ赤な粘液が牙の隙間からしたたり落ち、岩を溶かした。

視界は蒸気で全く見えない。新子はすぐにカバンからバットを取り出し、カバンを遠くへ投げる。

「竜！アタシが神の友の予言した女だア！」

しかし、竜は怒りに我を忘れていた。雄叫びを上げてふたたび新子に襲い掛かって来る。血のように赤い体に怒りをたぎらせて。

「言ったでしょう、もう竜は歌姫の番人に成り下がったのよ！戦うしかないわ！」

華扇のドリル状の腕を突き立てるように竜に向けて攻撃する。しかし、竜は頭を振り回し、その一撃をはじき返す。華扇も負けじともう一度攻撃を仕掛け、振り回される爪の猛攻をかくぐって白くやわらかい胸に腕を突き刺した。

竜が悲鳴を上げる。胸にくっついた華扇を爪で払いのけると、喉を鳴らしながらその場で足を踏み鳴らす。また足元にあつた竜の骨が踏まれてへし折れた。

綺麗に地面に着地した華扇が、笑顔で新子に向き直る。

「新子、今よ！」

新子は持ったバットを握りなおすと、大きく振り回す構えをとる。

竜がこちらへ振り向いた瞬間、一気に地面を蹴って竜に近づき、小さな丸っこい脚に一撃を叩きつけた。

「オンギヤアア……」

小さく唸ると同時に、竜はバランスを崩してしまふ。短い片足が浮き、当然もう片方の足でその太った巨体を支えられるわけはなく、後ろ向きに倒れ込んだ。

「やったー！」

だが、竜はすぐに黄色い目を新子へ向け、身体を転がして四つん這いのような体勢になった。細長い尻尾を振り回し、先端部分の鱗と棘の塊のコブを新子に叩きつけようとする。

新子はとっさに前にバットを構えてコブの一撃をガードする。流石の衝撃によつて新子は後ろに吹き飛ばされてしまふ。

起き上がった新子は絶句した。四つん這いになり、腹を地面に密着させながら吠える竜の翼の下で、尻尾に殴られた華扇が鉤爪に押さえつけられている。

竜の頭がふくれた首のさきでぐるりと回り、身動きの取れない華扇を睨みつけた。そして一声吠えると、口から炎を吐きつけた。

華扇の服が炎に包まれる。竿打も主を助けるために竜の首や頭をつついたり引つ掻いたりするが、竜は気にも留めずに勝ち誇った雄叫びを上げる。

新子が怒りに我を忘れかける。腕の筋肉が痙攣し、内に湧き上がっていた温かい力がどす黒く増大していく。

ふいに竜が唸った。蒸気で曇った視界をはっきりさせるかのように、首を振っている。空を見上げ、渦巻く蒸気にじつと目を凝らす。そして潰れたような鳴き声を上げた。ガツと開いた口からギザギザな舌がしきりに覗く。厚ぼつたい翼をばたつかせ、棘のある短い尾を近くに有る竜骨に乱暴に打ち付ける。

その時、まるで一陣の風に吹かれたかのように辺りに立ち込めていた渦巻く蒸気がさつと吹き飛んだ。華扇を包んでいた炎も瞬時にしてかき消される。

空に目をやった新子の心は踊った。

彼女は見た。颯爽と舞い降りて来る巨大な姿を。夕日のように真っ赤に輝く身体、燃える石炭のような赤い目。真紅の帆のような鋭い形状の翼、炎が一筋なびくようにすらりとした尾！

「竜……竜が二匹も生き残っていた……!?!」

華扇がそう言った。よかった、命に別状は無さそうだ。

そうか、こういうことだったのか！どうして今まで気付かなかったんだ？

「違うぜ、華扇！竜が二匹いるんじゃない……あれこそが竜なんだ！本物の竜が、ついに目覚めたんだぜ！」

幻想郷の神獣が許すはずのない禍王の歌姫計画……。だから禍王は神獣を一匹ずつ確実に殺していった。その真つ先の被害者、西に棲んでいた竜の生き残りが、ついに姿を現した！

岩場の不細工な竜は針のような歯を剥き出して唸り、身構えた。鉤爪で宙を搔き、口から炎を吐く。

だがその時、空からもう一匹の竜が襲い掛かった。勝負は一瞬でついた。

実際、それは戦いですらなかった。新子の願いによって現れた竜は真の竜の心を持っており、地面に転がるニセモノには、それが無かった。ニセモノはか弱い人間や力のない妖怪を切り刻んで焼くことはできて、その力は幻想郷最強の種族と謳われた神獣に及ぶはずもなかったのだ。

たった数秒の内に、ニセモノの竜は喉から血を流してあおむけに転がっていた。痙攣する尻尾を闇雲に振り回して、そのひと振りがまた地面にあつた竜の頭骨を砕いた。

ホンモノの竜はそれを見ると、長い筋肉質な腕でニセモノの頭を殴りつけた。ニセモノは顔を岩にぶつけ、そのままピクリとも動かなくなつた。

ホンモノは頭をもたげ翼を広げると、荒々しい勝利の咆哮を轟かせた。空気の味を確かめるように口の周りを舐めると、まだ咆哮が周囲にこだまする中、空に舞い上がり、飛び去った。

新子は華扇の方に向かって岩場を歩き出した。ニセモノの身体が

行く手を塞いでいる。

真紅だった鱗は乾いたように黒ずんでいるが、まだ確かに息はある。新子が用心深く近づくと、ニセモノは小さな目を開け、憎しみを込めて睨みつけた。

だが新子も臆することなく、ニセモノの竜を睨み返す。しばらくの睨み合いが続いたのち、次の瞬間、ぶくぶくと膨れた醜い体が波のようになねり始めた。鱗が暗い水面のごとくチラチラ光る。

新子は飛びのいた。信じられないことが目の前で起こっている。波打つ竜の身体が溶け始めたのだ。

やがて竜の姿はすっかり消えた。その場に残されたのは、深手を負ってぐったりと横たわる…妖怪兎のコトだった。

「コト…お前だったのか」

その瞬間、新子の頭の中でいくつもの謎が解けていった。

コトを助けた日の晩、新子の心にずっと暗い不安感が射していたのも、次の日にコトと別れてからそれが消え失せ、谷でコトが変身していた竜が頭上を通り過ぎてからまた暗い気持ちになったのも、コトが禍王の手下だったと考えれば説明がつく。そして竜の墓場の中心にいても、コトが毒にやられることはなかった。だからあんなにうるさく喚いていられたのだ。

そして何より、あの竜の不格好な姿。コトが竜に化けていたのだ！

血の気の無いコトの唇に不敵な笑みが浮かんだ。

「馬鹿め、あんなに簡単にだまされるとはね。耳の一つくらい、そして憲兵団のカス共も、お前たちの信用を買う為なら安いものだったよ…。新子、お前の忌々しい能力さえなければ、すぐにでも竜に変身してバラバラに引き裂いてやったのに！」

「アタシと華扇が最初に魔法の森を通った時、ずっとこそそと後を付いてきて邪魔をしていたのはお前だな？」

「けけけ、そうよ。ガルルガの報告を受けて、お前達をずっと見ていた。赤い砂丘にいる間はずっと森で待って、砂丘から出たらまた後をつけた。橋にも細工してやったね、失敗に終わったけど…」

「あんな幼稚な方法でか？」

新子がしやがんでコトの顔を覗き込みながら挑発的に言う。コトはそれを無視して続けた。

「私は、お前たちがこの竜の墓場にやってくるのをひたすら待った！西の歌姫は私の力の源、近付けば近づくほど私の力は増す…。お前たちは私の事を少しも疑わなかった、私の方が一枚上手だったのさ！」
「いや、そうは思えないけどね」

左腕を包帯の右腕で押さえながら、煤まみれの華扇がふらふらと歩み寄ってきた。そしてコトを見下ろしたままそう言った。

「ふん…。あの竜に私はやられたけど、まだ他にもいるんだよ…。私が死んだことは禍王様もすぐお気づきになる！私が西の番人だからね！そうなればお前たちに生き残るすべはない、他の手下がお前たちを殺そうと手ぐすね引いて準備を始める、お前たちを殺そうと襲い掛かるでしょう…。そして残る北と東の番人も、報告を受けさらに力を蓄え始める…。そうなればお前たちと幻想郷に未来はないわね…。」
「禍王は、一体あなたに何を約束したの？」

「偉そうに口をきくな、茨木華扇！私がお前が一番嫌いなんだ！林で憲兵団に掴まったふりをしていた私を見るまで、私の事など知らなかったくせに！この私、竹林の兎のリーダーである因幡、その子息の因幡コトのことを何か知っていたとでもいうのか！」

「いや、知らなかったわ。知ってる訳ないじゃない、あなたはずっと身を潜めてたんだから」

「こいつと話しても無駄だぜ」

新子が立ち上がりながら言った。

「こいつにあるのはウヌボレと怒りだけだ」

「そうね、私は故郷の竹林の外じゃ誰にも知られてない…。だけど、ご主人様は私の存在を認め、価値をわかってくださったのよ。ご主人様はある日の夕暮れ、話しかけてこられた。あれは、仲間と新天地を求めて登った妖怪の山で、仲間をすべて失って、ただ寂しさのままにうずくまって景色を一望していた時の事だ。ご主人様はこの私のすばらしさをわかってくださった…。お仕えすれば、たくさんのご褒美でこたえてくださった。それがずっと続くはずだったのに…。ずっと…」

コトの息が浅くなり、黄色い目に涙が溜まり始める。

「私は禍王様のしもべ。だからご主人様の為に、西の歌姫を守ることにした。その見返りに私を偉大な魔法使いにしてください。私には、他の塵兎共が夢にも思わなかったことができる。変身して空を飛べる、敵の身体を切り刻み、炎で焼き払い、悲鳴に酔いしれるのも思うがままよ」

口元に再び笑みが浮かぶ。

「禍王様のモノと成れば、もうマガノ国を恐怖しなくて済む：禍王様が勝利をおさめた暁には、私が竹林の……」

その目は虚空を睨んだかと思うと、絶え間なく痙攣していた両腕がぴたりと動かなくなった。

コトは息絶えた。二人はコトに背を向け、次なるやるべきことの為に窪みの中央へ歩き始めた。だが、華扇は空を見ていた。その顔に緊張が走る。

「竜が戻って来るわ！」

新子もその方向を見た。本当に竜が戻って来る。真紅の身体を大空にきらめかせて飛んでいる。竿打が地面に降り、身を固くする。二人は突風から逃れようと近くの岩にへばりついた。巨大な影が頭上を覆う。

風が突然止んだ。おそろおそろ二人は顔を上げた。竜が窪みの縁に降り立ち、おだやかに二人を見つめている。

第11話 「西の歌姫」

鈴奈庵の娘、本居新子は両親から、禍王の“四人の歌姫計画”を知らされる。新子は仲間の茨木華扇と共に、歌姫計画を打ち破るために旅立った。

グリフォンの協力を得て、一人目の歌姫、“南の歌姫”を討伐することに成功した。

一行は次なる歌姫が隠されている“竜の墓場”を目指して、西へと歩みを進めるのだった。

第11話 「西の歌姫」

今だ、話しかけるんだ！

西の領域に住む神獣、“竜”の一匹がすぐそこでこちらを見つめている。真紅の身体に、真つすぐ伸びた筋肉質な長い前足、すらりとした後ろ足、大きく広がった翼。綺麗な赤い鋭い目、歯茎と唇が一体化した口元に生えた牙。

新子は生唾を飲み込むと、一歩踏み出した。

竜が新子と華扇を見下ろす。厳しい顔つきに笑みが浮かんだように見えた。

「待ちかねたぞ」

竜の声は優しく、ささやくようだった。

「ようやくやってきたな、予言の女よ。まさに神の友が言った通りだ…」

「長い事探してた…ようやくアタシはお前を見つけた」

「いや、私のほうがお前を見つけたのだ」

竜は目を輝かせ、二股に分かれた尾をくねらせた。

「ここには邪悪が潜んでいる。邪悪と毒を感じるぞ。私が眠っている間に、お前たち…我がなわばりに侵入者を許したな」

「私達ではありません。邪悪が侵入したのは、200年前の事なのです。竜よ、私は貴方に、ここに巣くう邪悪を退治していただきたい。その番人を倒したように」

華扇は遠くに転がるコトを目で指しながらそう言った。

「さて、どうするか」

竜は答えた。

「予言の女、そばに來い」

新子は言われるがまま、竜に近寄った。歌姫の邪悪な力と、緊張とで膝がガクガクし、立っているのもやっとだ。

「隣のお前もだ、もっとそばに」

竜の声が響く。新子と華扇は竜の目の前まで来た。手を伸ばせば、赤くきらめく竜の鱗にとどきそうだった。竜の匂いが二人の鼻を満たす。熱い鉄と、燃える木の葉を混ぜたような匂いだった。

直後、新子の身体が光り出す。

「これは…!？」

「私とお前の力が共鳴している。このまま待ってくれ」

竜は翼を広げると目を閉じた。新子の光を全身で味わうように。

何分も経った。竜が目を開いた。二つの目が、さつきよりも深く濃い赤に輝いている。

「よし、行こう」

竜はさらに翼を大きく広げると、竜の墓場の窪みの中央に飛び込み、頑丈なカギ爪で底を掘り始めた。何百、何千という石が、窪みの周りに降り積もっていく。

飛び散る石が大粒のひょうのように降りかかる。腕で頭を庇いながら、新子たちはよろよろと窪みの縁から離れた。

充分な距離を取ると、二人は、おののきながら竜の仕事を見守った。穴から石が勢いよく飛び出しては、縁に積もっていく。

四人はしばらく固唾を呑んで見つめていたが、やがて不安に囚われ始めた。

穴が深くなるにつれて、空気がねつとりと重くなる。息が苦しい。辺りは薄暗くなった。ふいに、得体の知れない低い音が穴の底から響いてきた。音はどんどん大きくなっていく。

それは恐ろしい歌声だった。歌声にのせられてくるのは、絶望、かなしみ、疲れ、そして死。低く不気味な旋律は耳を塞いでも頭の奥に

流れ込み、ふりはらおうにもはらえない。

もつとおそろしいことがある。この歌声に聞き覚えがあるのだ。

「これも、南の歌姫と同様に：ずっと聞いていたんだわ。しーんと静かだからって、全く音が無いわけじゃない：不安になるような静寂こそが、この歌声なんだわ」

華扇が口を開いた。

その時二人は、石の雨がやんでいることに気付いた。石を掘る音も聞こえない。

「どこにいる？二人とも、そばに来い！」

突然、竜の声が響いた。直接声を発したのか、二人の心に語りかけて来たのかはわからない。

でもどつちでもいい、とにかく行かなければ！

ねつとりと重い空気の中、二人はやつとのことと足を踏み出し、穴の入り口に積もった石の山を上り始めた。登りつめると、二人は中を覗き込んだ。

さつきまで平らだった窪みの中心が大きな穴をあけている。厚く積もった土や石、そして骨が退けられ、底岩が露わになっていた。竜はその底岩の中心にしゃがみ込んで、掘りあてた物体をじっと見つめている。

それは、卵のように見えた。卵のような物体が、ドクドクと脈打ちながら光を放っている。燃える炎のような毒々しい黄色で、あまりのまぶしさに目が焼けるようだ。

途切れることのない低い歌声が二人の頭を貫く。むき出しの邪悪にさらされて肌がひりひり痛み、息もできない。

「私のそばへ。でなければ私は負けてしまう」

竜の声はひどく弱弱しかった。新子は目を見張った。竜の真紅の鱗がじわじわと色あせていく。

二人は一気に竜がうずくまる穴の底へと、石の斜面を滑って降りていく。新子は竜の後ろ脚のそばに落ち、華扇は反対側の足のそばに落ちた。崩れた石が雪崩のように降りかかって竜の翼をうち、尾が石に埋もれていく。それでも竜は声を出さず、鱗も爪も動かさない。巨体

はピクリともしなかった。

新子は立ち上がるうとしたが、できなかつた。西の歌姫の歌声が新子の頭のなかでこだまする。その邪悪な力に打ちのめされ、新子は体の自由を失っていた。

立てない。歩けない。もがく新子の目の前で、竜はじつと横たわつたまま、どんどん弱っていく。

西の歌姫は歌い続ける。絶望と恐怖をまき散らしながら。

新子は竜の体に触れないように地面を這い始めた。毒をまき散らす黄色い塊に向かい、あえぎながら進む。

なんとかして、この悪の源をなきものにしなければ…そうしなければ、全てが終わりだ。

だが、刻一刻と、全身から力が抜けていく。凍えるほど寒いのに、手足がまるで高熱にでもおかされたようにわなわなと震える。だめだ、もう動けなくなる…。

朦朧とする頭で、新子は無意識に竜の足首に触れた。温もりが指先から流れ込んでくる。と同時に、耳に何かが聞こえてきた。西の歌姫の低い歌声に、別の音が混じる。

ドン…ドン…

大きな太鼓をたたくような、ゆっくりと重たい音。聞いているうちに、新子は音の正体が分かった。これは竜の心臓の音だ。

新子は触れるだけでなく、足首を両腕でしっかりと掴んだ。

その瞬間、驚くべきことが起こった。竜の足首を掴む手が、まばゆいばかりの光を発した。

(今、お前と私は繋がっている。私の力がお前に流れ、お前の力が私に流れる)

竜が身を震わせた。新子の手が触れていた箇所がポツと真紅に染まり、真紅はどんどん面積を広げていく。ふと竜が頭をもたげた。赤い目に鋭い光が宿り、鼓動が雷のようにうちはじめた。竜と新子の力が合わさり、それが新子の腕を通して竜の体へと流れ続けている。

竜が目の前で脈打つ黄色い卵を、赤い目でじつと見つめる。それから一声吠えると、口から真っ赤な長い炎を吐いた。卵が炎に包まれ

る。竜は何度も炎を吐いた。炎に包まれた卵は燃え上がり、次の瞬間、真っ白に変わった。

ピシッ

だがその瞬間、目もくらむ閃光と共に邪悪の力を爆発させた。長年にかけて蓄積された、この地で死んだ竜たちの負のエネルギー。溜めこんでいたそれを、一気に放出したのだ。

あまりの邪悪にさらされ、炎を吐いていた竜は前足で両目を覆いながら雄叫びを上げ、横に倒れ込む。華扇と新子は、邪悪の爆発に吹き飛ばされないように竜の足に掴まっていた。その様子を前にした西の歌姫が、勝ち誇ったように笑い声をあげた。

竜と新子、お互いに力の供給源が断たれてしまった。白熱する歌姫はまだ燃えているが、歌声の力は衰える気配はない。

だが、華扇はその場で立ち上がった。竜の太ももの上に立ち、汗だくの真剣な顔で歌姫を見下ろしている。それに驚いたのか、歌姫の声が一瞬止まった。だが、何事もなかったように再び邪悪な力を放ち始める。

華扇の包帯の腕が解け、歌姫に向かって伸びていく。包帯は歌姫に巻き付き、絞めて潰そうと力を強める。燃える歌姫に触れた包帯がじりじりと焦げ、歌姫はそれでも歌い続ける。

それを見た新子は上体を起こした。

—ああ…竜が来ずとも、相手が歌姫だろうとその番人だろうとよ、アタシらでぶつちめようぜ！—

そうだ…敵が歌姫でも、竜が戦えなくとも、アタシらだけででも…！

新子は華扇の後ろから、歌姫に向かって飛びかかった。しかし、放たれる邪悪な波動によって跳ね返されてしまう。新子の“魔”に対し力を発揮する程度の能力”を持つてしても、この歌姫にはいまひとつ通用しないようだ。

「新子、でも二人なら…！」

そう、新子と華扇の二人ならどうだろうか。

華扇の腕の包帯がほどけ、新子に巻き付きながら、その身体を持ち

上げていく。

ある程度持ち上がると、華扇は勢いに任せて包帯をバネのように使い、新子をミサイルのように発射した。華扇の本気の力で撃ちだされた新子は真つすぐに歌姫に向かって行く。それを歌姫は迎え撃つようにさらに声を張り上げる。

そして右腕を大きく振り上げ、歌姫と激突すると同時に、その拳をぼつかりと空いた邪悪な口に突き刺した。バキリ、と音を立てて卵の表面がひび割れた。低く轟いていた笑い声が、突然耳をつんざく悲鳴に変わる。悲鳴は、まるで時がとまったかのように、だらだらと尾を引いた。後ろで起き上がった竜が口の端に二人を引っ掻け、その場から離らかす。そしてトドメの一撃と言わんばかりに真紅の炎を吐いた。余りの高温にさらされて、新子の体も溶けだしそうだった。

その時だった。卵のような西の歌姫が真つ白い炎を吹き出したかと思うと、次の瞬間、くしゃつとしぼんで炎の中に崩れ落ちた。その場には、南の歌姫を倒したときと同じように、灰色のシミがこびりついているだけだった。

新子の耳に届くのは、華扇が自分を呼ぶ声と、近くでゆっくりとリズムを刻む、竜の鼓動の音…。

…ふたたび目をあけた時、新子は自分がどこに居るのか分からなかった。

ここは竜の墓場の窪みの中心でも、縁でもない。新子は燃えるたき火の前で、毛布を掛けて寝かされていた。たき火の向こうで華扇と、竜が大きな頭を地面に付けて何やら話し合っている。2人の体は影に包まれていて、顔だけが揺れる炎に浮かび上がる。背後は薄暗いが、ぼうつとピンク色に光っている。

アタシの目は竜の炎の熱でおかしくなってしまったのか？

新子は慌てて視線をうつした。竿打が見える。そこで新子は自分がどこに居るのか分かった。ここは竜の墓場へ向かう時に通った、あの邪悪な石碑があった丘の上だ。竿打がとまっているのは、自分が蹴倒した石碑の上だったのだ。もう歌姫が滅んだあとでは、あの気味悪

い石碑もただの石同然のようだ。

そうか、竜の墓場の西の歌姫は完全に滅んだのか…。安心が全身に広がる。火照った身体に冷水を浴びたように心地いい。

竿打は赤とオレンジに染まる空を背に、黒い影となっている。新子はほつと溜息をついた。アタシの目がおかしくなつたんじゃない。なかつた。いまは、夕暮れ時なんだ。

新子はおそろるおそろる体を起こした。体中が痛む。

「ずいぶんお休みだったわね」

華扇が言った。

「もう何時間も経ったわよ、穴から助け出して、竜にここまで運んでもらってから」

声はいつもと変わらなかつたが、顔はよろこびに輝いていた。

「竜…」

言いかけて、新子は口を閉じた。喉が焼け付くようだ。華扇が差し出した水筒を受け取ると、夢中でぐくぐくと飲む。

「目が覚めたか、予言の女よ。私も今さつき、仮眠から覚めたところだ」

竜は牙だらけの口の端を少し曲げた。どうやら笑ったらしい。

「竜…ありがとうよ。見つけてくれて」

「神の友は、私の一番の親友だ。あの言葉を忘れようはずがない。たとえ…我が仲間の死骸の中で眠っていたとしても」

ゆっくりと新子の方に巨大な体を向けると、足を折りたたんでうづくまつた。

「さて、話でもしようか。他の神獣は？」

「南のグリフォンが一匹生き残ってる…南の歌姫を倒してもらったな」

「そうか。珍しいな…グリフォンは仲間意識と縄張り意識が強く、よそ者を歓迎しないと神の友に聞いたが。対して、私たち竜は仲間意識も縄張り意識もなく、よそ者を持って成す。だから私は、神の友に興味津々だった」

目を閉じて、囁くように二人に語り始めた。新子は竜を見つめなが

ら黙って聞き、華扇は例の憲兵が落としからくり小箱を弄りながら聞いている。

「不思議な女だったよ。奴は自分一人でも飛べるくせに、私の背に乗って飛ぶことを楽しんでた。私は、神の友から唯一文字の読み書きを習ったのだ」

「あの」

華扇が小箱を弄っていた手を止め、目線を上にあげてそう言った。

「貴方の話を聞いてもしやと思いましたが、その神の友とは…まさか…」

「ほう、生前の神の友を知っている者がいるとは。そうだ、神の友の名は、レイムという」

新子には、その時の竜と華扇の言っている人物の事がよくわからなかった。ただ、二人が話しているのを黙って聞いているしかなかった。

「…今、この西の毒の根源が消え去っても、まだ根源は残されているな。この西の領域よりも外に。他の神獣がお前に手を貸してくれる、そうであろう？次は何処へ行くのだ？」

その時に感じた、溢れ出る安堵感を新子はこれから忘れることは無かった。竜はおだやかな口調で、気品に満ちていた。

「あ、ああ…この後、いったん里に戻るんだ。そこで休んでから、北の妖怪の山へ向かう」

「妖怪の山か。あそこは麒麟の領域だ。奴らは凶暴で怒りっぽい、私でも手が付けられないだろう。名誉と力の象徴の麒麟がお前たちに協力することを祈ろう。大丈夫だとは思うが。だが、万が一、お前たちを見捨てるようなことが有れば、その時は私を呼ぶが良い。我が力の及ぶ限り、私は行く。これも神の友を愛するが故。生きていれば、彼女はそう願っただろうから」

「ありがとうな」

「ありがとうございます」

余りの感動に、新子と華扇はそう言うのがやつとだった。

「私を呼ぶならば、予言の女よ。お前の声を聞き逃さぬために、私の本

当を名前を呼ぶが良い」

竜は爪の先で、地面に文字を書いた。神の友に文字を習ったのは彼だけだった。そしてそのカタカナで書かれた文字を、自慢げに二人に見せた。

「我が名は…… ロック」

その時、赤い砂丘でグリフォンに言われた言葉を思い出した。

神獣は名前を知った者の事を支配することができる。それは自分の名前を知られた時も同じこと。神獣であるこの竜が自ら名乗ったという事は、支配されても構わないという二人への強い信頼が込められている。

「ありがとう、ロック。お前の名前をむやみに呼ばない事、そしてその名を大切にすることを誓うよ。アタシの名前は……本居新子。人間の里の鈴奈庵の娘、本居新子だ」

「私は茨木華扇」

ロックは頷いたが何も言わず、眼を閉じて身体をもぞもぞと動かしただ。まるで、聞いた言葉を一字一句覚え込むように。

「まあでも、今夜はそれだけで十分だ。西の歌姫は死んで、アタシらは生き残った」

「そうね、先の事を心配して何になるの？ どうせ未来なんてすぐにやってくるのに」

「確かに……」

「さあ、明日になったらすぐに里へ帰りましょう！ 温かいお風呂とからいスープ、おいしいお酒に、それに背中を叩いて喜んでくれる家族と友人。それ以上のものがあるかしら？」

その時、カチツと小さな音がした。華扇があつと叫ぶ。指が何かのはずみで小箱の秘密の仕掛けに触れたのだ。小箱の上部からツルツルした木の棒がもう一本飛び出した。

これで蓋の側面から二本の棒が飛び出している。華扇はさっそくふたを開けようとしたが、箱はまだ固く閉じたままだった。華扇がむっとして顔を上げる。

「うーん、まだ開かないわ！ ただのガラクタのくせに……！」

「ははは、諦めろ、仙人よ。お前にはからくりが解けないのではないか？」

竜がからかうように言う。

「いいや、解くわ。いつか解いて見せる、何としてもね」

新子の心は和んだ。華扇の言葉が蘇る。

—先の事を心配して何になるの？どうせ未来なんてすぐにやってくるのに—

満天の星空に、オレンジ色の月が一つ、まるで空を舞う竜のようにぽつんと浮かんでいた。

第12話 「包囲網」

鈴奈庵の娘、本居新子は両親から、禍王の“四人の歌姫計画”を知らされる。新子は仲間の茨木華扇と共に、歌姫計画を打ち破るために旅立った。

赤い砂丘で南の歌姫を倒し、竜の墓場で西の歌姫を倒した一行は、一時里へ帰還するのだが…。

第12話 「包囲網」

しわしわの小さな雑草だけが伸び放題の砂利道。その道の脇には粗末な小屋が点々と建てられており、そこにやつれきった顔の人々が身を寄せ合って座り込んでいる。

場所は新子たちの旅から移り、帰還する場所である人間の里。その中央は、里の外側の方と比べて貧困化がかなり進んでいる。臭い空気が立ち込め、憲兵団を初めとしたマガノ国の者が多く闊歩する原因は、昔からある工場だと、皆が思っている。

マガノ国の工場。人間の里の中心部に建てられており、ここでは奴隷として捕まった人間や、マガノ国から派遣された従業員が働いている。この、見ただけで気分が悪くなるような灰色の工場がどかんと建てられているから、ここら一帯は他と比べて不毛なのだ、とほとんどの方が考えている。

その工場の中、とある一室に、ある男が居た。暗い部屋の中で赤い煉瓦の壁をじっと見つめており、何かを待つような、または何かを怖がっているかのように身構えている。

「こつちへい、虫けらめ」

壁の煉瓦の隙間から真っ黒い霧のようなものが滲み出す。霧はどんどんと集まり、まるで二つの目玉のように渦を巻き始める。その目玉から、ひどく邪な声が響いた。

男は声に驚き、体をびくつと震わす。だがすぐに前に進み出て、目玉の前に膝まづいた。目玉から発せられる赤い光に照らされて、よう

やく男の姿が見えるようになった。

背の高い、色黒の男だ。顔立ちは整ってこそいるが、邪悪さにおいてはひどく歪んでいた。紫色のマントを羽織り、オールバックにした髪が揺れている。男は怯えたような表情で顔の汗をぬぐった。

「はい、ご主人様。この私、“熱風”はここにおります。何をおぼしめしでしょうか？」

かぼそく、消えいってしまいそうな声。

「…四人の歌姫。東西南北に設置させた、幻想郷を腐らせる魔力の産物。あれは？」

「はい、ご主人様。今も、邪悪な力でこの地を蝕み続けております。それぞれが番人に守られており、皆、あなた様のお越しを待っております」

「ようしようし、そうか。では、人間の里の南と西で起きた変化に気付いているか？」

「変化…ですか？いえ、私もつい昨日、北口から里に入りましたので何とも…」

「まあいい。四人の歌姫はいい仕事をしてきているぞ…。幻想郷の莫迦共は、死して愛する土地を捨て去るまで、何故大地が不毛の地となったのか分からなかったな！」

「そうでございますね」

男はごくりと唾をのむと、手を地面に付きながら細かい声で喋った。

「変化と言いますと…南及び西に恵みが戻り始めた、事でございませるか？」

「そうだ。何故こうなった？幻想郷に不穏な風を感じるぞ」

「非常に言いにくいのですが、南と西の歌姫が…始末されたようです！番人とも連絡が付きません！」

渦巻いていた二つの目玉がさらに大きく膨れ上がる。目玉は男を睨みつけ、赤い閃光が部屋を包み込む。

「何だと、虫けら。それは本当か？」

目玉の声は明らかに怒りに震えていた。

さつきまでの嘯き声ではなく、怒鳴り声に変わった。

「一体誰が？どんな塵が？私に牙を剥くようなことを？」

「ガルルガの報告によれば、大鷲を連れた二人の女のようにです…」

「大鷲を連れた…二人？」

「ですが、ご安心ください！ご主人様。ご覧ください、奴らの居場所は手に取るようにわかるのです」

「ほう」

「これを楽しむことができるのは、この熱風めとご主人様だけでございます…」

「お前もだど？虫けらよ」

低い笑い声が響いた。

「はっ、笑わせるな。奴らがどうしたにしろ、この歌姫計画は実を結ぶのだ。そうなればもうお前など用済みだ。お前のご機嫌取りにはあきあきだからな」

熱風は頭を下げてのまま、何も言わなかった。

「私にはたくさんの計画が有るのだ、熱風よ。幾重にも張り巡らせた計画がな。すべては、たった一つの目的のためだ。それは、幻想郷を我が手におさめること。全てを見渡せる山、豊富な地下鉱物資源、私には幻想郷が必要なのだ」

「わ、わかっております。ご主人様。幻想郷は、必ず貴方様の物になりましょう。四人の歌姫さえあれば…」

「お前は何もわかっていない！他の計画がうまくいけば、四人の歌姫がなくとも幻想郷は私のモノとなるのだ。もうすでにあの地から邪魔な妖怪は消え失せ、残った人間どもも、殺すも生かすも滅ぼすも私の思うがまま」

大きく渦巻いていた目玉は、再びしずまった。

「ふう…だが万が一だ。罰として舌を引っこ抜いてやった、あの忌々しい妖怪の予言が当たったら…。人間の中から誰かが立ち上がり、私の計画を踏みにじる時が来たら…」

「しかしながら、ご主人様。予言が当たるとは断じて有り得ないと思います、もしやこの二人の女こそが、あの妖怪の予言なのでは？」

「もう手を打ってある。この身の程知らずの女共には、お似合いの運命を用意してやろう。わざと捜させて、はやく死に追いやってやるのも一興だがな」

「それでございますね」

「…では！その女共を一刻も早く見つけるために、幻想郷に手下を放つ！人間の里も完全に包囲してやる！人はもちろん、鼠一匹、風に転がる枯草さえも出入りさせん！お前から里の全ての憲兵に伝えろ」

「はー！」

人間の里。新子と華扇が旅に出てから、実に一月近くが経っていた。

「なあ、あの本居新子、最近見ないな」

「家にも居ないらしいぞ。それに、いつも家の横に座ってる乞食の女も一緒に消えたらしい」

そう建物の影に座り込んでいるのは、チンピラ風の青年二人組。どうやら話しているのは、新子の話題らしい。

「まさか、とうとう憲兵にやられたとか？」

「まあ、俺らからしちや、どっちにしろアイツが居なくて困ることはねえ…」

「おい、本居新子が…どうしたって？」

悠々と、2人の背後から話しかけた男。

2人はびくつとして振り向いた。

「ゲ…あ、アンタは！」

赤毛のモヒカン頭の巨漢だった。筋骨隆々の身体に圧倒される2人を、鋭い眼光で見下ろす。

「だ、誰だア…コラ…！」

「お前、バカ！知らないのか、この人はなあ…」ツムグ“さん”っていうのよ」

「ツ、ツムグ…！聞いた事あるぜ、憲兵でさえも関わろうとしないって…しかも、唯一、一人だけで本居新子をコテンパンにしたっていう、あの…」

その時、空に耳をつんざくような金切り声が轟いた。この声は聞けば誰でもわかる、ガルルガの鳴き声だ。ガルルガが里の上空にやってくるのは、そう珍しくはない。

「ああ…またガルルガか。最近多くね」

「いや、今日は絶対おかしいぞ…!」

だが、この青年が思った通り、今日は明らかにいつもとは違った。里の上空に現れたのは、七羽のガルルガ。どれもけたたましく叫び声をあげ、空を旋回している。

更には、赤黒い雲が空に立ち込め始めた。ゴロゴロと雷のような音を轟かす、邪悪な雲だ。

—…では!その女共を一刻も早く見つけるために、幻想郷に手下を放つ!人間の里も完全に包囲してやる!人はもちろん、鼠一匹、風に転がる枯草さえも出入りさせん!お前からも里の全ての憲兵に伝えろ—

禍王が新子と華扇を里に入れなかったために、完全な包囲網を作った。

新子たちが西の歌姫を倒した次の日の昼頃。歌姫が隠されていた場所に、コトの小さな亡骸を埋葬した。

幻想郷の西の地から毒は消え去った。ここ、竜の墓場を形成している竜の骸たちも、供養された事だろう。

その後、二人は竜に別れを告げ、当初の予定通り、人間の里へ戻るために歩みを進めるのだった。

「さて、これでいったん里に戻ります。そこで少し休んでから、再び出発…」

「次は北の歌姫が隠されている、妖怪の山へ向けてだな」

西の番人であったコトが言った通り、もう禍王は南と西の歌姫が倒されたことに感じているかもしれない。南から西と来れば、次はきっと北にやって来るはず、と敵は思うだろう。しかし、すぐには北へ行かない。しばらく経ってから、敵の警戒が少し解けたところを突いて、一気に北の歌姫を攻め込む。それが最初に決めた予定だ。

竜に別れを告げた時、竜は里まで自分が運んでやろうと言ってきた。だが、いつガルルガが襲ってくるか分からないし、竜が生きていたとなれば、禍王はきつと必死になって竜の生き残りを始末しようとするだろう。だからそれを断り、歩いて里まで向かう事にした。

ここから里への道は今までの道に比べれば比較的安全だ。帰つたらまず何をしよう。久々にまともな風呂に入りたいし、それよりも両親の顔が見たい。

だがしかし、新子のそんな願いは、敵わなかった。

まず異変に気付いたのは、華扇だった。里に近づくとつれ、だんだんと空が曇ってきた。さらに歩くにつれ、雲は赤くなり、ようやく視線の先に里の周りを囲っている外壁や水路が見えた頃には、空は真っ赤な雲で覆い隠されていた。

さらには、地上を無機質な目で注意深く監視しながら上空を旋回する七羽のガルルガ。外壁の周りに並んで立っている憲兵団、その近くの杭に鎖で繋がれた、涎を垂らしながら敵と戦いたくてうずうずしている恐ろしい緑の怪物。

それらを見ただけで、今は里への帰還は不可能だと悟った。

その日の夜。里からかなり離れた林の中でたき火を囲う二人。

「…まるでアタシらの行き先が分かってたみたいに…」

「だとしたら、どうやって奴らは行き先を知ったの？追っ手が居るなら、すぐに竿打が気付いてくれるはずだし…」

近くの木の枝にとまっている竿打に目を向ける華扇。

「これからはもつと慎重に進むべきか」

そう話しているうちに、喉が渴いてきた。水筒も空っぽだし、朝から何も飲んでいない。そういえば、この林の奥に湖があったはずだ。昔から存在だけを幻想郷縁起に記してあったので知っていた湖。その幻想郷縁起にはただの湖、昼間であれば妖怪も居ないのでここまで立ち寄っても余程の限りは安全だと書いてあったが、今はどうかはわからない。慎重にいかなければ。

新子はたき火の前で例の小箱をいじる華扇を尻目に見ると、湖が有った方へ歩いていった。

草むらを抜けると、まず無数に転がった岩が目に入った。その岩に囲まれるように、透き通るような水の小さな泉が湧いていた。

さつそく泉に駆け寄り、手で水をすくう。水はとても冷たく、口にいれると少し甘い味がした。

それを飲むと、たき火の場所へ戻り、そこで夜を過ごした。

また夢か…。

新子はそう思った。新子は自宅の鈴奈庵の前に居た。暖簾とこのドアは間違いなく鈴奈庵だ。ドアを開け、中に入る。

中は真つ暗だったが、カウンターの途中でこちらに背を向け、机に覆いかぶさるようにして、ロウソクの明かりで何かをしている人影が有った。

「父さんー」

父親の横には、ひもで束ねられた紙束と、黄ばんだ紙切れ、数冊の幻想郷縁起が置かれていた。秘密の隠し場所から持ってきたのだろうか。手元に何が有るのかは、体が邪魔になっついて見えない。

父親の事と呼んでも、全く気付く気配はない。姿も足音も悟られることはなかった。これは夢の世界だ。丁度今日、里にも帰れなかったから、こうして家族が夢に出てきているんだ。寝ている間は記憶の整理をしているともいうし…。

部屋の奥、カウンターの方へ進むごとに新子の鼓動は激しくなった。夢だと分かっているのに、何故だが周りの風景がリアルすぎる。一歩進むたびに、足が重くなる。父親は後ろからでもわかるほどめつきり老け込んでいた。

父親は先ほどから使っていた竹の物差しをわきへ置いた。物差しを握る手は痩せこけていて、静脈がくつきりと浮かんでいた。

新子は愕然とした。アタシらが鈴奈庵を発った時、父さんはこんなだったのだろうか？アタシが居ない間に苦勞事が続いて精神的にも参ってしまったのだろうか？

その時、父親が突然うめき、新子は飛び上がった。

「やはりそうなのか。間違いない…ああ…何て恐ろしい策略なんだ…もっと早く気づいていれば！もっと前に思い出していれば…くそつ、俺は馬鹿だ…！」

机を叩きながら、そう震える声で静かに声を漏らす。

「一刻も早く伝えなければ…新子たちはまだか？まだ帰ってこないのか？伝えたいことが山ほどあるのに…！」

「父さん！アタシだ、新子だよ…こつちを向いてくれ！」

新子是我慢できずに、後ろから叫びかけた。

父親がはっとして顔を上げる。そして、おそろおそろこちらに顔を向ける。

その時だった。背後でドア勢いよくドアが開け放たれた。

父親がさらに驚いたように体を震わせ、そちらの方に顔を向けてしまった。新子もそれにつられてそちらを見る。

ドアに立っていたのは、背の高い色黒の男だった。口を曲げて微笑みながら父親を見ていた。

第13話 「夢見の泉」

鈴奈庵の娘、本居新子は両親から、禍王の“四人の歌姫計画”を知らされる。新子は仲間の茨木華扇と共に、歌姫計画を打ち破るために旅立った。

当初の予定通り南と西の歌姫を退治した二人は一時里へ帰還しようとするのだが、里は禍王の手によって封鎖されてしまっていた。その日の晩、新子は不思議な夢を見たのだった。

第13話 「夢見の泉」

「お前は…熱風…！」

「くくく、久しぶりだな、鈴奈庵の男…」

「何をしに来た…」

父親は机の上に広げていた紙束を乱暴に引き出しにしまい、幻想郷縁起を抱え込んだ。

「ん？今何を隠した？見せて見ろ！」

熱風はずかずかと歩み寄り、背中を丸める父親の肩を引っ張る。

「これは…この本は何だ？」

引き出しには気付かず、父親がとっさに抱え込んだ本を取り上げた。

「ふっ…。幻想郷縁起」か。私がいくら稗田のもとを捜しても見つからなかった本が、こんなところにあつたとは…」

熱風がパチンと指を鳴らすと、彼の背後に10人ほどの憲兵団が現れる。そして憲兵は鈴奈庵に入り込み、一斉に父親に向かって行く。

「デメエゴルア！どういふつもりだア!？」

新子は自分に向かってきた憲兵に、思い切り殴りかかった。

しかし、新子の拳は憲兵の体をすり抜けた。それどころか、自分自身の体までもがまるで実体が無いように、やはり憲兵に触れることはできなかった。他の憲兵も自分に気付くことなく、通り抜ける。

憲兵の二人が父親を取り押さえる。非力な体格の父親では到底、抵抗できるはずもなかった。

「私が稗田を殺したとき、ご主人様の命令で稗田に幻想郷縁起の在り処を聞き出してから火を放った。後日、稗田が吐いた幻想郷縁起の隠し場所を捜したが、そこには何もなかった。その幻想郷縁起が…なア~~~~ぜ貴様の家にある!?!本居!!」

その声と同時に、熱風は父親を思いきり蹴り飛ばした。父親は吹っ飛び、本棚にぶつかつた。本がバラバラと崩れ落ち、上に覆いかぶさつていく。

「この本は私がもらおう」

「…新子よ、私は信じているぞ、お前がいつか必ず帰ってくることを…!」

「なんだア、その反抗的な目は?」

熱風が父親を睨みつける。

「もっと痛めつけてやれ」

熱風からの命令を聞いた憲兵は本に埋もれている父親を引きずり出し、胸を蹴りつける。

「やめろオ!」

新子も、熱風の不気味に微笑む顔に向かって何度も拳を振り下ろすが、触れられることはなかった——

…

「やめ…!」

そこで目を覚ました。背中と額は汗でぐっしよりぬれ、息も苦しい。

燃え尽きたたき火の反対側で、華扇が仰向けで涎を垂らしながらぐっすりと眠っていた。近くの木の上で、竿打が首をかしげてこちらを見ていた。

「夢か…。今度のは前のよりも、ずっとハッキリした嫌な夢だったな…」

新子は起き上がると、昨夜の泉の方へと向かって行った。

泉まで来ると、金属でできた看板が有った。昨日は暗くて気付かなかったらしい。

『夢見の泉』

「夢見の泉……よくわからんな……」

そう言いながら、泉に足を突っ込むと、服を脱いでほとりの草むらに置く。

「ろくに風呂も入れやしねえ……これで我慢するしかないか……」

泉の水を手ですくって裸体にかける。泉には魚はおろか虫などの生き物が一匹も居る気配はなかった。底も泥ではなく平な石がタイルのように敷き詰められていた。

その石を見て、新子は顔をしかめた。前にも、魔法の森を通った時にこんなような風景を見たような……。鳥の化け物の罫にまんまとかかった時だな。流石に今回はそんなことはないと思うが……。

その時、静かだった泉が大きく波立った。

「何だ……うわっ!?!」

直後に、水がまるで生きているかのように水面から飛び上がり、新子の両腕と首に巻き付いた。水のロープは巻き付く力を強め、どんどんと水の面積を広げていく。

泉の周りに点々と置かれて岩が少し持ち上がり、その下の暗がりから無数の鋭い目が覗いている。その直後、何もしゃべる暇もなく、新子は水に包まれた。

——く、苦し……

水は新子を包んだまま再び泉に戻る。泉の底に敷かれていた平らかな石がスライドして、人が一人入れるぐらいの大きさの穴が出現した。そしてどうにもできないまま、水と共に新子はその穴に吸い込まれた。

つるつるした水路を水と共に滑っていく。水が顔を埋めていて息もできない。

「うぶ……」

そして突然、水路が途切れ真つ逆さまに下に落下した。冷たい石の床に背中からぶつかった。あわてて息を吸い、当たりを見渡す。ここ

は何かの部屋のようだ。床の隅にある排水溝に一緒に落ちてきた水が流れている。壁に一つだけランタンのような灯りが吊るされていて、薄暗かった。

「何だっつてんだ、ここは…」

「…人間、ね」

反対側の部屋の隅から声が聞こえた。それに驚いた新子はビクツと体を震わせてそこに振り向く。

膝を曲げて座っていたのは、薄汚れた白いシャツの上に灰色の上着を羽織り、灰色のズボンを履いた女だった。伸びた金髪の間隙から鋭い目が新子を見つめている。

「うわあー！いつからそこにいた!？」

「2か月くらい前かしら。ずっとここにいます」

「2か月も…？それにお前、その服は…マガノ憲兵団か!? テメエがやったんか…ヘックション!!」

「落ち着きなさいって。お前も奴らに生け捕られたのよ…」

「生け捕られただと…?」

新子は鼻をこすりながら呟いた。

「風邪をひく、これを羽織ってな」

女憲兵は灰色の上着を新子の方へ差し出した。

そういえば、服も下着も全て泉に置いてきてしまったようだ。仕方なく、その灰色の上着を羽織る。汚れているので着心地は良いとは言えないが、何も着ないよりはいいだろう。

「…んで、なんで憲兵がここにいますんだよ?」

「もう2か月ほども前だ…私の隊は3人いて、丁度あの泉のほとりで一晩休むことにしたの。そしたら、突然泉の水が溢れて、私たちをここへと攫ってきた。まず初日に隊長がどこかへ連れていかれ、戻ってこなかった。一か月後に、もう一人のメンバーが連れていかれた。私一人が残ったんだ…」

「何の為に連れていくんだ?」

「さあ?」

女憲兵は肩をすくめてそう息をついた。

「とにかく、ここへ来たならもう助からないね。他のメンバーも多分もう既に死んでるよ」

「何でわかる?」

「憲兵の隊は兄妹のようなものでね。顔も似ていれば性格も似てる：そして隊のメンバーに何かあった時は、何となくだが感じ取れるんだ」

前々から、憲兵は隊ごとに顔や声が似通っていると思うことが有ったが、そういうことだったのか。きつと、憲兵は魔王に魔法か何かで生み出された兵隊なんだ。そして、憲兵自身はそれを知らない。

その時、女憲兵が寄りかかっていた壁が扉のように開いた。暗かった部屋に光が差し込んでくる。その光の中に、小さな無数の影がシルエットとして浮かんでいる。

「アメモエらか!アタシをここへ連れて来たのは!」

新子はそう叫んだ。影は一斉に部屋へと入り、女憲兵と新子を押しさえ込んだ。

「おとなしくしろ。おい、もうあつちの憲兵は古すぎる。さつき捕まえた憲兵を使うぞ」

ようやく、新子と女憲兵の目が光に慣れ始め、その影が鮮明になった。普通の人間よりも一回り小柄で、水色のツルツルした服に身を包んでいる。今、命令を下したりリーダー格らしき女も、その他も全員が怯えきったような表情をしている。

「おい、コラー!アタシらをどうするつもりだ!」

「黙れ、卑劣なマガノ国憲兵団め!お前たち憲兵団を、私たちがどう使おうが勝手だろう!憲兵などに慈悲は無いのだから」

「アタシは憲兵じゃねえ!」

「ふん、嘘をつくな。女の癖にそんな凶体と目つきをしたヤツが居るかア!」

どうやらコイツらはアタシまで憲兵だと思い込んでいるらしい。

早く誤解を解かないとヤバそうだな…

頭を床に押し付けられる。すると、床が微かに揺れているのが分かる。ガタガタと何かが打ち付けるような音も聞こえる。この連中の

仲間が向かってくる足音だろうか。

「お前たちは大事な、奴らの餌だ…」

「…餌だと…?」

「何だ、この揺れは…?」

リーダー格の女が天井を見上げながら呟いた。新子も、足音のようなガタガタ音が、何かを削るようなガリガリという変わっているのに気付いた。

「よそ見したな!」

新子はすぐに自分を押さえていた小柄な影を突き飛ばし、そこから脱する。さっきの女憲兵も立ち上がって影と奮闘している。リーダーの女だけは音のする天井をじっと見上げ、背中に背負った金属の箱のようなものから飛び出している機械の腕を向けている。

新子が自分に向かってきた最後の影を殴り飛ばしたとき、天井がひび割れた。

「新子…そこにいるの!?!」

「華扇!」

華扇が包帯の腕をドリルのような螺旋状に変形させ、天井の壁を削ってここまでやって来たのだ!だが、華扇がこの部屋へ降りたってまだまだ天井を削る音は聞こえる。不思議に思ったその時、見覚えのある赤いものがチラリと見えた。竜の爪だ!竜の爪が崩した天井の穴を広げようと掘っていた!

「起きたら泉に服を置きっぱなしで居なくなっていたから、竜を呼んで一緒に探してたの!」

「な、何だ…何が起こってるんだ!?!」

突然の光景に驚きを隠せないリーダー女。そのリーダー女の胸に、華扇の蹴りが命中した。

「うぐっ…!」

さらに華扇が振り下ろした螺旋状の包帯が、女のかぶっていた帽子のツバにかすり、帽子が飛ばされる。

「覚悟!」

包帯を回転させながら、後ろに倒れ込んだ女に先端を向ける。女も

もうダメかと思ったのか、ぐっと目を閉じた。

しかし、包帯は女の額に当たる寸前でとめられた。女が恐る恐る目を開ける。

「…あなた、もしかして…河童？」

「いや、何だ何だ！お前さんの身内だったのか、茨木華扇！」

さきほど、華扇が新子を助けに来てから3時間が経っていた。どうやら華扇はこの連中とえらく昔に絡んだことがあるらしい。

「悪かったなく、この河童のアジトに近づく憲兵は手当たり次第捕らえているんだ。そんな悪いツラしてる人間が来ちや憲兵と間違えてしまうよ」

「か、河童？今河童って言ったか？」

「ああ。私は河童の河城にとりさ。地上監視部の部長のね」

「河童…他の妖怪と共に絶滅したと聞いたぜ？それがこんな所で生き長らえていたとはなく」

新子が河童たちの差し出したきゆうりを齧りながらそう言った。

「…そうさ、私たちはもう150年近くも故郷の妖怪の山を離れてここで暮らしているのさ」

「でも、他の妖怪はもう幻想郷を捨て去ったのでしよう？何故河童たちは残ることにしたの？」

「当然だよ、愛する妖怪の山、そして幻想郷をそう簡単に捨てられないよ。他の者らが去りゆく中、私たちはマガノ国軍に抵抗し続けた。何十年も抗い続けた…ついに後が無くなり、妖怪の山を追い立てられた頃には、周りの妖怪は皆いなくなっていたのさ。だから仕方なく、山から随分離れたところに穴を掘り、この地下街を作った。でもこんなことになるなら、私たちも早くみんなと一緒に去っていれば…」

にとりと一緒に座っていた他の河童たちも暗い顔でうつむく。

河童は高い建築技術を持っているという。それでもここまで見事な地下街を作ったというなら、これはとんでもなく凄いと思う。まさに河童の技術のたまものだろう。

「でも諦めずに少しでも抵抗したのは凄いなと思うぜ、アタシは」

「そ、そうかい？」

「ああ。逆に他の野郎どもは腰抜けだ、マガノ国のクソ共に降参して逃げるなんてよ……」

「それにしても、まだ何かありそうだな。どうして憲兵を捕まえてる？そして憲兵を何に使ってる？」

後ろの方の壁に寄りかかって座っていた、さっきの女憲兵が口を開いた。まだその腕はロープで結ばれている。

「私たちはまだお前たち憲兵団を許したわけじゃないからね」

にとりは女憲兵を睨みつけた。それに対して、女憲兵は目を逸らしてため息をついた。

「…私たちはここに居住を置いてからしばらくして、山に帰ろうと思った。でもね、ここから山への道にある妖怪共が居座ってて通れないんだ」

「ある妖怪？」

「そう。その妖怪のなわばりに入って怒りを買っちゃってね」

「なるほど。それで脅されて私ら憲兵を捕まえてその妖怪共に渡しているのか」

確かに、さっきの河童たちが酷く怯えた表情をしていたのはそんなわけだったのか、と新子は思った。

「別に憲兵を渡せつて要求じゃないよ。人間でも河童でも誰でもいいから渡せばいいんだ。でも、丁度この上にある泉を利用して、そこに集まった憲兵を捕らえるのが一番簡単だからそうしているだけさ」

女憲兵は鼻を鳴らした。

河童たちが互いに不満の声を上げ始める。その時、華扇が新子の肩をちよんちよんと叩いた。

「ところで新子。私、すごく変な夢を見たの…まるで本当の出来事のようにとてもハッキリした夢。朝方に目を覚まして泉に水を飲みに行ってからまた寝た後だったわ…場所はあの泉、そこには新子が居て水に浸かっていた。すると突然水がうねって新子を引き込んでしまった。そこで目を覚まして、どうしても胸騒ぎがするから新子を捜しに行ったらどこにも居なくて…。その夢を見たからここが分かつ

たのよ」

「ハッキリした夢…?」

私も見た。鈴奈庵での父親の夢だ。

「何だアンタら、知らなかったのかね?」

部屋のドアが開き、奥からかなり年寄りと見える老婆が入ってきた。白く長い眉毛が垂れ、歩き方的に足腰はまだ元気なようだが杖を突いていた。

「あ、長!」

にとりがその老婆に振り向く。老婆は河童たちの長らしい。

「それは…本当の事なんだよ」

新子は思わず固まった。

「夢見の泉の水を飲んで普段思っていることを心に念じると、眠りについた時の夢の中で“魂のみ”が見たかったものや会いたい人の所へ行けるんだよ」

第14話 「ケチャルコチル兄弟」

鈴奈庵の娘、本居新子は両親から、禍王の“四人の歌姫計画”を知らされる。新子は仲間の茨木華扇と共に、歌姫計画を打ち破るために旅立った。

そこで一行は幻想郷から姿を消したと思っていた河童たちと出会った。山に還れない河童たちを苦しめている妖怪について聞かされるのだった。

第14話 「ケチャルコチル兄弟」

「ああ、私たちは毎晩、ふるさとの山を夢で見ているんだ。夢見の泉の水を飲むことで今の山の様子がわかって落ち着くの」

「今、山は荒れに荒れて、マガノ国の怪物たちの巣窟になっている。でもみんなで山に戻るし、それだけでも希望が湧いてくるんだ」

夢見の泉はもと湧き水でできた水溜まりで、そこを河童が整備拡張を施して泉にし、山への道を塞いでいる妖怪に差し出す人間をおびき寄せるのに使っているらしい。それに泉の水を飲むと眠っている間に魂だけが会いたい人のところや行きたい場所に行けるのだという。

つまり、アタシが見た父さんの夢は、その時実際に起こっていた出来事だったということ。あの男は何者なのだろう？父さんはあの後どうなったのだろうか？それに母さんの姿が見えなかったが、母さんは無事なのだろうか。

疑問がいくつも頭に浮かんできてめまいがする。

「大丈夫？顔色がすごく悪いわ」

華扇が心配そうに顔を覗き込んできた。

「いや…後で話す」

「何が妖怪の山よー」

大勢で座っている河童たちの中から子供らしき声が響いた。

「大人だけ良い思いしやがって！僕らだけ仲間外れなんてずるい！」

「わたしは行けない、妖怪の山なんて行ったことないから！わたしはこの地下街しか知らないの…」

「だから泉の水を飲んでも夢で見えるものが何もないんだ、ひどいぜ！」
「そうだそうだ！」

「こら、お前たち！」

にとりがその子供たちを怒鳴りつける。

「この通り、地下街で暮らすようになってから生まれた子供たちは妖怪の山を知らないのな…無理もない」

長がやれやれと言ったようにつぶやいた。

「あの…ケチャルコチル」さえ居なければなあ…」

「ケチャルコチル？そいつがその妖怪か？」

その名を聞いたとたん、河童たちがざわめき出す。

にとりが再び新子たちに歩み寄り、口を開いた。

「そう、ケチャルコチル兄弟さ。一月に一人、生け贄を捧げられなければ…ここまでやってきて河童を一人攫って行く…ケチャルは猿の妖怪、コチルはでかい蛇妖…アイツらさえ居なければ…！」

「じゃあいいわ、私たちがどうにかして見せましょう」

「ちよ、おい！」

華扇が急にそう宣言をした。それに対して新子が慌てた声を漏らす。

「まあいいじゃない、どうせ私たちも山へ行くんだしその通り道だわ」
「うくん、そうだけだよ…」

「本当かい？アンタらが何とかしてくれるのかい？でも、アイツは強力だよ…いくら技術水準が大きく衰えてるとはいえ、私たちが束になってもかかってもどうにもならなかったんだ…」

「今の私たちを舐めないほうがいいわ。私たちは幻想郷を救うために旅をしているんですもの」

「…幻想郷を…救う？」

「じゃあそうと決まれば、早速行こうぜ」

「待った！」

地下街を出る準備を始めた2人を誰かが呼び止めた。

「私も連れていけ」

呼び止めたのは、両腕を枷で拘束された女憲兵だった。

「お前！そう言っただけで逃げるつもりか……！」

「そんなつもりはない！」

女憲兵をとめようとする河童に向かって睨みながら怒鳴りつける。

「私も、隊長や三号の仇を討ちたいのでな。もし逃げようとしたら離反するようなことがある、すぐに殺してくれてかまわない。仙人、アンタなら私を殺すなど容易いだろう……」

「……ええ」

「河童、私の枷を外してくれ。それと武器は残っているか？」

にとりは女憲兵の枷を外し、仲間の河童が憲兵の武器を持ってきた。刃が大きく湾曲した短剣、火花棒、右半分が割れた小さな二本角の仮面。仮面は隊長がかぶっていたものだろう。その割れた仮面をつけ、その他の武器を装備する。

「アンタ、名前はあるのか？」

「……バン隊二号よ」

「バン、か」

それから10分もしないうちに3人の人影が、泉からたいぶ離れた地点から、地下通路を通って地上へ出てきた。隊長の仮面をかぶった女憲兵のバンに続いて、同じく河童たちが持っていた憲兵の制服を身にまとった新子と華扇だ。一見すれば、ただの憲兵団にしか見えないだろう。竿打は夢見の泉の場所へ残してきた。

そこは枯れ木が伸びる林の中で、真上に上った太陽が容赦なく照り付けてくる。

「にとりは山の麓にケチャルコチルは徘徊していると言っていたけど、ここからじゃたいぶ距離があるわね。日没までにたどり着けるかどうか……」

華扇がそう言った時、突然太陽の光が消えた。あの竜が3人の頭上をかすめたのだ。真紅の鱗が日光を反射し羽音が風のうねりをかき消す。

「あの影はガルルガか…!？」

バンが短剣を抜いて空に映し出されたシルエットを見上げる。

「待て、アタシらの仲間の竜だ」

「なに、竜だつて…?？」

竜は三人の前に降り立つと、悠々と居すまいを正した。

「ごきげんよう、予言の女よ。どうやら無事であったようだな。北へ向かうのだろうか?？」

「北へ向かうんだけど、その道中でちよつと用事があるんだ」

竜は頷いた。

「そうなのか。丁度いいな、私もいい運動になりそうだ」

「丁度いい?？」

と華扇が尋ねる。すると竜は歯を剥き出した。どうやら笑ったらしい。

「我が申し出がお気に召したかな?？」神の友“はいつも言っていた。竜の背に乗ることは、最高の楽しみであると”

眼下に木々がビュンビュンと流れていく。頭上では傾き始めた太陽がややオレンジ色に輝いている。

新子、華扇、バンの三人は竜の首にしがみ付いていた。初め、竜はバンを見て彼女だけを拒否したが、新子がバンの事情を説明すると竜はしぶしぶ背中に乗せた。

もう二時間はこうして飛んでいる。その時、新子は突然、お腹がヒヤツとする感覚を覚えた。

落ちているのか!？」

「うわあああああああー!？」

新子たちは真つ逆さまに落ちていた。どす黒い地面がどんどん迫ってくる。新子は叫びながら目をぎゅつとつぶった。

ふいに落下がとまった。風邪のうねりも止んでいる。今聞こえるのは、ゆっくりと一定のリズムを刻む音。竜の羽ばたきの音だ。

新子はゆっくりと目を開けた。

竜は、生垣に四角く囲まれた、空き地らしき場所の上空で止まって

いた。こんもりとした生垣の三辺は森に繋がっていた。森の向こうでは妖怪の山があり、その奥には幻想郷とマガノ国の国境である棘のような薄い山脈がそびえている。

竜は地面に降り立つと翼を閉じた。

「ここで降ろそう。確かにここらで妖怪の匂いを感じる。ついさつきまでここでウロウロしていたようだ」

3人は竜の首から滑り降りた。

「ありがとう」

「私が下手に動いて敵に見つかるとうけない。今は里の監視で忙しいようだからな…」

ここで竜が言った敵とはガルルガの事だろう。ガルルガは今も七羽で里の上空に居るらしい。

「さあ、行きましようか」

「うあああひあひあひあひー」ケチャル「アニキアニキアニキどうするするどうする!!来るよ竜が来る竜竜竜!見たよ赤い影を見たよ見たよ竜が居るよ!」

「落ち着け」コチル「!いつも言ってることを忘れたのか!?俺は猿、お前は蛇、種族は違えど俺達や魂のブラザー!ソウルブラザーってヤツだア!俺たちケチャルコチル兄弟が、誰にも負けるはずはねえんだ!」

森の木々の間を、首の上に何かを乗せた巨大な蛇のような妖怪が駆け抜ける。

「なんでだ、何で竜がいるんだ:いつもそうだ、ドイツもコイツも俺の邪魔しかしやがらねえ」

「そうだそうだねアニキ、なんでだよおお、山にはアイツが居るし向こうには竜が居たし、みんなオレ達を殺殺殺殺殺そうとよオオオオオ」

「しっかりしねえかコチル!」

「アニキく怖いよ怖い怖いよ怖い!恐恐恐、怖怖怖…」

「狼狽えるんじやねえ!お前を信じる俺を信じろ、俺が信じるお前を

信じる！俺達や無敵の兄弟だ！たかが絶滅した竜の生き残りだ、絶対に俺たちの方が強いぜ…！だけど、俺たちはこんなに強いのに…アイツらだけは別だった…」

200年近くも前、俺達は山に住むしがない妖怪だった。だがマガノ国の侵攻に伴って山に居られなくなり、山を下りた。

地底世界に続く穴ぼこの暗がり以身を潜め、たまに穴の外を彷徨って動物を捕まえて食べていただけだったのに…。

山を下りた俺たちは河童共から食べ物や奪っている。これからもそうだ、山が解放されるまでそうするつもりだった…

そのつもりだったのによ！

「…この感じは…」

「なかなか勘が鋭くなって来たわね。微かに残っている悪意を持った妖気…」

新子の能力が、近くにいらるであろうケチャルコチルの妖気に反応を示した。

「かなり強い、やっかいな感じだ…」

その時、向こうの方で木々がなぎ倒される音が聞こえた。音はどんなに近くなり、他にも地面を駆け回る足音も聞こえてくる。そしていよいよ、長くくねった身体の一部が木々の向こうに見えた。

「ギャエエエエエエ!!」

雄叫びを上げながら薄い緑色の胴体をくねらせ、工具のパンチのような形をした頭部にある丸いギョロ目を狂ったようにぎらつかせて3人に襲い掛かる。その首の上には茶色い毛を生やした、腕が異様に長く、象のように大きく広がった耳の猿が跨っていた。

ギザギザの牙が立ち並んだ口を大きく開き噛みつきこうとしてくるパンチ頭を新子が防ごうとする。

「うお…」

しかし、あまりの力にそのまま物凄いスピードで押されて行ってしまふ。

「正面からぶつかったのね…あのバカ！」

「アニキアニキアニキ、憲兵の服着てるけど匂いがしないよ憲兵の匂いがしないよ！この人間何だ人間人間人間！」

「俺にもわからねえ！こんな硬さと力を持つてる人間は初めてだア！」

コチルの頭の前で新子を押し森を突き進みながらそんな会話を
する。

「でもアニキこいつ全然怖くないよ怖くない怖怖……」

「そうだな、アイツに比べたらな」

「うんうんうん、アイツに比べたらね！」

コチルは頭を振るって新子を地面に向かって叩きつけるように投げ飛ばす。新子は受け身をとって着地し、そのまま起き上がって殴りかかる。

しかし、コチルは頭の付け根あたりから、折りたたんでいた4本の巨大な腕を伸ばし、逆に新子を殴って突き飛ばした。

「くっ……このオオ！」

「ケケケ……」

その時、コチルの頭の後ろからケチャルが姿を現した。象のように広がった耳、同じく象のような長い鼻、コチルとよく似た血走ったギョロ目。更に耳には大きな目玉模様が描かれており、それをゆつくりと揺らしている。

新子はそれを見たとき、足がすくんで動けなくなり、一瞬意識が飛ぶのを感じた。その隙を見逃さず、コチルの剛腕が新子を殴り飛ばした。

「アニキアニキこいつ弱いねえ弱弱弱弱いねえええええええ」

「ああ、こんな簡単に俺の術にかかっちゃうなあなあ！」

「喰っ、喰っていいかアニキ、コイツ喰っていいかい？コイツ喰うぜ喰うぜ」

「ああ、喰っていいぞ。ただしハラワタだけは俺にくれよ」

コチルは倒れた新子をつまみあげ、大口を開けて今にも噛みつきうとしてる。

しかし、それを阻止するが如く華扇がケチャルの頭上から飛びか

かった。竜巻のように回転する包帯の腕を振るい、コチルの頭部を吹っ飛ばす。

「痛痛痛痛てててええええ！」

「逃げるんだコチル、何か分からねえが、また憲兵の格好した憲兵じゃない奴がやってきやがった！…この匂いは仙人の類か!？」

身をひるがえして駆け出すケチャルコチル兄弟。しかし、その先で待ち構えていたのは…

「よう」

「…お前は憲兵かア！お前だけは本物の憲兵の匂いがするぜえ！」

「でも逃げ、逃げられないよアニキアニキ」

「そうだ、私はお前を逃がさない。隊長と、そして3号の仇を討つために、今一度力を振るうだけよ」

「このこのこの野郎アアア」

コチルは怒りの声を上げながら、バンに向かって突進していく。だが、突然爆発が起こりコチルの突進は止められた。

「それは…！」

バンが地上へ出る前に河童たちから受け取った、過去に捕まった憲兵団が所持していた爆弾と地雷だった。何十年経ってもまだ使えるようだ。

「ぎうええええええ」

コチルの頭部が爆発の衝撃で碎けて欠けてしまう。

「コチル、すっかりしろオー！こうなったら、この俺の幻術で…！」

兄のケチャルが、先ほどのように目玉模様の耳を大きく広げる。バンにも幻術をかけるつもりだ。

あの幻術は、ケチャルの両目と耳の目玉模様を見た対象の意識と動きを止めるものだ。

「おい、奴の目を見るな！」

「もう遅い！ソイツはもう動けな…！い!？」

しかし、バンは何ともないように駆け出し、コチルの頭を踏み跳躍してケチャルに短剣を向けた。ケチャルは両腕の長い鉤爪で短剣から身を守る。

「何イ!？」

「幻術、ね。今まで河童から渡された生け贄をその術で動けなくして仕留めていたのだらうけど、この仮面をナメないほうがいいわ。通常の視界からサーモグラフィ、エネルギー探知まで切り替えられるんだよ。熱でものを見ていれば、お前の目や模様は見えることはない…」

「アニキアニキ！」

コチルは身体をくねらせてバンを振り落とす。

「幻術が効かなくても、どっちにしろお前らに俺たちは倒せねえ！」

「げげげげげ、そうだねアニキアニキ！」

ケチャルコチルの身体から邪な妖気が溢れ始める。

「殺してやらア、雑魚共！」

ケチャルはコチルから飛び降り、新子に向かって跳躍した。自身の腕と同じほどの長さもある爪を広げ、今にもそれを振りかざそうとする。

それに対して、新子はギリギリまで動かなかった。ケチャルコチルから溢れ出す悪意ある妖気が、新子の能力に反応しているのだ。それによつて新子の力は今まで以上に上昇している。

そして次の瞬間、腕を振り下ろしたケチャルの視界から新子の姿が消えた。空を裂いた爪は地面にめり込み、そこがめくれ上がる。

「どっ!？」

当たりを見渡すが、横にも後ろにも居ない。もしやと思いつきを見上げた時には、もう遅かった。ケチャルの鼻っ柱に新子のパンチがめり込んだ。そのまま腕にしがみ付き、ケチャルのバランスを崩して見せ、地面に押しさえつけた。

そこにすかさずバンがワイヤーを取り出し、先端に短剣を結び付けて地面に伏しているケチャルを縛る。

「アニキ！」

それを見たコチルもケチャルのもとへ駆け寄ろうとするが、華扇が腕の包帯をほどき、それを頭部を固定するように巻きつけられたことによつてその場から動けなくなった。

「げえええ、動けねえええ…！」

しかし、頭の後ろにある4本の剛腕を使い、包帯を千切ろうとする。が、その瞬間、上から颯爽とあの竜が舞い降りたかと思うと4本の脚でコチルの上に降り立った。腕も頭も地面に押さえつけられたコチルは諦めるようにうめき声を上げながら動きを止めた。

第15話 「仮面の人」

鈴奈庵の娘、本居新子は両親から、禍王の“四人の歌姫計画”を知らされる。新子は仲間の茨木華扇と共に、歌姫計画を打ち破るために旅立った。

そこで一行は幻想郷から姿を消したと思っていた河童たちと出会った。その河童たちを苦しめているという妖怪兄弟、ケチャルコチルを見事に退治した新子たちだが…？

第15話 「仮面の人」

「まさか、本当にケチャルコチルを退治してしまうとは…」

新子たちがケチャルコチルを倒したとの知らせを聞いて、にとりと数名の河童がやってきた。おそらく、にとりが所属していた地上監視部の河童たちだろう。

当のケチャルコチルは特製の網でくるまれ、地面に押さえつけられたまま河童に囲まれている。

「コイツらはしばらくここに置いて見張らせておくよ。いいだろ？」

「ああ。ならば私が見張ろう」

バンは名乗り出ると、ケチャルコチルの横に座った。にとりの命令で、他の地上監視部の河童もそこに座る。

「一旦、アジトまで戻ろう。その服も着替えなくちやいけないし、他の荷物も置きっぱなしだ」

竜の背に乗って河童のアジトまで向かっている途中。

「ところで、お前さんらがさっき言っていた、幻想郷を救うつてのはどういうことだい？まさか、妖怪の山を越えてマガノ国にでも乗りこむつもりかい？」

にとりが二人にそう聞いた。

「そうね、言ってもいいかもね」

華扇は、にとりに自分たちが旅をしている目的、四人の歌姫計画を

話した。にとりは最初の内はまさかと言ったような顔で聞いていたが、次第に真剣な面持ちで聞き入り始めた。

「つまり、あのケチャルコチルが山から下りて来たのも、全部マガノ国の歌姫っていう連中の所為なの」

「そうだったのか…。危うく私はマガノ国に対する”反逆の引き金”を殺してしまう所だったのか」

「そういうこと」

竜の飛ぶ速度が遅くなった。すぐそこに例の夢見の泉が見えてきた。竜はゆっくりと降下し、泉近くの林の中に着地した。

「私はここで待っていていよう。用事を済ませてこい」

「ああ」

3人は林の中を歩き、夢見の泉の場所まで向かった。林の木々の隙間に、泉のほりにあった岩が見えてきた時、足を止めた。大鷲の竿打が木の上でじっと視線を下に向けている。新子たちもその視線を追うと、そこには子供の河童が木の棒を持って歩き回っていた。

どうやらさつき騒ぎ立ててにとりが叱った子供たちのうちの1人のようだ。

「アイツ…私らが居ない隙に外に出たんだな！」

にとりは林を出ようとしたが、すぐに足を止めた。

「こら、君！」

岩が横に動き、地下街へと通じる穴の中から女性の河童が現れた。

「あ…」

子供は咄嗟に違う岩の後ろに隠れ、その河童は子供を捜している。新子と華扇も気付いた。にとりが足を止めたのはこれが理由ではない。近くに、強烈な悪意を感じるのだ。とてつもなく恐ろしい、理解を超えた存在に鳥肌が立つ。

邪悪なものがそばにいる。すぐそばだ。それがどんどん近づいてくるのが分かる。新子は自分のすぐ横を形のない何かを通り過ぎたような気がして危うく大声を上げそうになった。

「ほら見つけたー！」

ようやく子供を見つけた女性の河童が、その子供に駆け寄る。

その時だった。その女性の甲高い悲鳴が響き渡った。恐怖の叫びを耳にして、にとりも叫んだ。そして木の影から悪夢が現れた。フードを被った、真つ黒な巨体が。

影よりも暗い化け物が女性の上にぼうつと浮かんでいる。女性は悲鳴を上げながらよろよろと後ずさる。化け物は動かない。

竿打が羽をばたつかせながらしきりに鳴く。

次の瞬間、何か白く細長いものが波のようにならぬ巨体から伸びてきた。手だ。獲物を捕らえようとする貪欲な長い指には、爪もしわもなかった。

その指は一瞬ぴくつと動いたかと思うと、するすると伸び始めた。白い指が蛇のように女性に絡みつき、首と全身を締め上げる。瞬きをする間に女性は宙づりにされていた。子供はその光景を前に声も出せないままへたりこんでいる。

猫が鼠を振り回すように、黒い化け物は女性の河童を揺さぶった。女性のうめき声がとまり、ぐったりとなる。化け物は女性をポイと投げ捨てた。フードの中には緑色に光る顔が有り、そしてあたりをチラリと一瞬見渡すと、影の中に消えた。

にとりが声を殺して言う。

「今のは何だったの…？」

新子たちに気付いた竿打がこちらに降り立った。

「あれは命あるものじゃないわ…。少なくとも生き物ではない…」

「だが妖怪を殺すことはできるわけだ」

華扇の推測に、新子が苦々しく言う。

にとりがようやく飛び出し、子供と動かない女性のもとへ近づいた。

「気を付けて…仮面の…人…」

ぼそりと小さな声で呟いた。女性の脈を調べるが、すでにもう死んでしまっていた。首と絞められた箇所には痣と凍傷のような傷があり、その身体は冷凍保存でもされていたかのように冷たかった。

「そんな事が…。何という事だ…」

河童の長が死んでしまった河童の前に座り込んで手をこすり合わせている。

さっきの子供は親らしき河童と手を繋いでそれを見ていたが、体はカタカタと震えていた。さっき話を聞いたが、今の隙に山に行つて山の様子を見れば、夢見の泉の水を飲んで大人たちと一緒に山へ行けると思つて外に出たらしい。それがまさかこんな事になるとは思つてもいかなかっただろう。

「絶対にマガノ国だ…ついにここがばれたのか…」

にとりが冷や汗をかきながら呟く。他の河童も不安そうにざわざわと声を漏らす。

既に以前の服装に着替え、荷物を持った新子と華扇はその様子を見ているしかなかった。一部の河童の視線が、明らかな疑いの念を持つて2人へと向けられていたからだ。

「今すぐここを出るんだ。後の処理は私と長で何とかする」
にとりはこつそりと新子に耳打ちした。

2人が外に出ると、大きな荷台に拘束されたケチャルとコチルが地上監視部の河童たちによつて運ばれてきていた。その最後尾には女憲兵のバンが居た。

その地上監視部たちは、さっきの事件を知らないんだ。ただケチャルコチルを退治した、その喜びに顔を輝かせている。2人はやはりすぐに山へ向かおうと思つた。

「待て。私も同行しよう」

「…バン」

「私は元憲兵…山を通つてこつちへ来たんだ…だから今の山は私の方が詳しい」

3人は再び竜の背に乗り、妖怪の山へと向かつた。

「なあ、アンタはアタシらを妖怪の山まで運んでくれるのか？山は確か麒麟のなわばりだったろ、何を言われるか…」

「麒麟とな？」

竜はあくびをした。

「ひよつとするともう死んでいるかもしれない。北の領域はもう以前のものではない：マガノ国の怪物の巣窟だ。眠っているうちにやられてしまったかもしれないな。それに、領域を犯して空を飛ぶのは竜の得意分野だ。その竜がここに居るのに、何をためらう」

竜に乗って飛んでいる間、新子と華扇はずつとさっきの黒い怪物の事を考えていた。黒いフードの中に見えた、緑色の顔。顔には白い眼と長い鷹鼻だけがあり、白い蛇のような指も思い出される。

その事をバンにも話したが、バンは知らないと言った。そもそも普通の憲兵には歌姫の存在は知らされておらず、今が初耳だったようだ。

「だが、ケチャルコチルが面白い事を言っていたわ」

「面白い事？」

『へへへ：何故俺らが山を降りてふもとに現れたのか分かるか：けけけ：。山にはもつと恐ろしい奴がウロウロしてるんだ：。怪物スラッグ』とかな：だがそれよりもつと得体の知れねえのがいる：影よりも暗くて氷より冷たい怒りの塊だ：だからそれに気を付けろ：絶対に手を出すな』

「怒りの塊：：どうやらそれが歌姫らしいな」

「それに怪物スラッグ：：良い感じはしないわね」

“ 気を付けて：：仮面の：：人 ”

新子の頭にはずつとその言葉がずつと頭にこだましていた。影よりも暗くて、氷より冷たい怒りの根源：。それが歌姫：？

まだ暗いうちに竜は降り立った。いつの間にか妖怪の山の中腹当たりまで来ていたらしい。ここは崖の底で、そこをうなるように吹く風が遠くの怪物や獣の声を運んでくる。

「今夜はここで休むとよい。ここだけは無事でよかった：昔に一度だけここで眠ったことが有る」

3人と竜はそこで一晩眠った。

目が覚めると、上に見える太陽は既に真上まで登っていた。まあ寝

付いたころにはすでに日が昇り始めていたからしようがないか。

新子は空を見上げた、上空で竿打が旋回している。少し遠くの窪んだところには目を覚ました竜が岩のように動かずにじっと空を見上げていた。いや、見ているのは空ではない、上の方の壁だ。そしてその壁には、無数の光る目や泡が流れてきている。壁は生き物の気配で満ちていた。

あちらの穴から尖った鼻がつきだしたかと思うと、こちらではカギ爪が壁を掻きむしる。岩の裂け目から灰色の泡が音もなく膨らみ、ずるずると下へ滑ってくる。

「起きたのか。あの怪物どもはお前たちを襲いたくてしようがないよ。うだが、私が居るので手が出せないらしい」

その時突然、岩壁を揺るがすような轟音が轟いた。光っていた目が一斉にすべて消えた。飛び出していた爪や尻尾も引っ込み、急にあたりが静まり返った。

今の轟音を聞いて、華扇とバンも飛び起きた。竿打が矢のようにさつと降りて来たかと思うと、突然暗くなつた。竜が崖の上まで舞い上がったのだ。そしてあわてふためいたように一声吠えた。

3人の視界から竜が消えた。代わりに現れたのは、緑色の巨体だった。牙を剥いては吠え、まるで空中に床があるかのように強靱な四肢を使つて空を駆けている。緑色の鱗の身体に、黄色い棘の列や黄金のたてがみ、馬のような毛の尻尾が生えている。正しく、それは北の領域に住まう3体目の神獣、麒麟だった。

竜が自分の領域に入っているのに勘づき、麒麟が目覚めたのだ。

「なわばりを破つたな!!コソドロめ!恥を知るがいい!」

雷のような声が響き渡る。空を舞う竜を追いかけ、背中に前足を叩きつけようと強靱な腕を振り下ろす。竜がもう一度吠えた。そして麒麟は竜を追いかけるように、空の彼方へ消えてしまった。

「あんなのが名誉と力の象徴、か…」

竜は麒麟は名誉と力の象徴だと言っていた。もつと気高い種族だとイメージしていたが、ただ怒りっぽいだけだった。

確かに昔からある領土の境界を被られれば怒るのもわかるが…。

「だけど、竜もいない、あの麒麟も協力してくれそうにない。どうするの？」

「3人で進むしかないということでしょう」

それがどういふことか、新子は分かっていた。今までの南の歌姫や西の歌姫を倒したときは、グリフォンと竜に手伝ってもらった。神獣と新子の力が合わさり、華扇がサポートをして初めて歌姫を倒しうるだけの力を発揮できるのだ。

だが、竜も居なくなり、北の歌姫戦での希望でもあった麒麟も、あの様子では手を貸してはくれないだろう。

「でも歌姫は妖怪の山のどこにあるのかしら？」

「普通に山の頂上とかか？だとしたら自力で登るのは無理かもしれないな」

「…憲兵が近づいてはいけない場所がある。ここより幾らか登ったところに、昔は天狗たちのアジトだったという敷地がある。そこからは邪悪な力が漏れ出していて、そこに近づきたくても、私たちがただの憲兵には近づくことが許されていない。もしかしたらその場所こそが…」

新子と華扇はハッと顔を見合わせた。そこしかない。

「やはりそこか。案内しよう」

壁に再び光る目やヌルヌルと光る泡が見え始めていた。邪魔をしていた竜が居なくなったので、再び顔を出し始めたのだ。3人はすぐに走ってそこを去った。

妖怪の山と言えば、とにかく高いことで有名だ。もちろん、里に住む人間の中で山まで行こうと思う者はいない。里からも地平線の先にポツンと見える程度だが、それでもどれほど大きい山かが分かる。

昔は天狗の長である天魔とかいう奴が治めていたらしいが、もうそいつらも山には居ない。華扇も昔は妖怪の山に住んでいて、沢山の動物を飼いながら暮らしていたそうだが、マガノ国の侵攻に伴って動物たちも居なくなり、山を出ることを余儀なくされたらしい。山に住んでいたすごい神様も居たようだが、その神様たちも山を捨てたそう

だ。代わりに山を支配しているのは、マガノ国の魔物どもだ。華扇の話だとかつては緑の木々に覆われ、遠くから見ると青く見えたらしいが、今ではかつての面影はほとんどなく、禿げた斜面を剥き出して不気味に聳えているだけだ。そして妖怪の山を越えればそこはもうマガノ国、禍王の目と鼻の先だ。また、マガノ憲兵団も妖怪の山からやってくるといわれている。

そして、北の歌姫も……。歌姫を倒せば、あの山は以前のような自然を取り戻すのだろうか。山を追われた妖怪は戻ってくるのだろうか。

どんな奴が番人で、どんな危険が待っているのだろうか。そして、あの仮面の人は何なのだろう。そんな疑問を心に浮かべながら、新子は目的地を目指して進んでいた。

第16話 「強襲、怪物スラッグ」

鈴奈庵の娘、本居新子は両親から、禍王の“四人の歌姫計画”を知らされる。新子は仲間の茨木華扇と共に、歌姫計画を打ち破るために旅立った。

元憲兵団のバンを仲間に加え、北の歌姫を目指して妖怪の山を上る一行。行く途中で不思議な洞穴と墓石を見つけ…？

謎が謎を呼ぶ…一体敵は誰で、ここで何が有ったというのだろうか？

第16話 「強襲、怪物スラッグ」

元天狗のアジトに隠されているであろう北の歌姫を目指して、妖怪の山を歩き続ける新子たち。気温がかなり下がり始め、細かい雪もパラパラと降ってくる。

しばらく歩いていると、目の前に滝が見えてきた。滝の前にしゃがんで水を飲もうとした華扇が、滝の奥に洞穴があるのを発見した。その洞穴の前には四角い石碑が建てられているようだ。

「これは…？」

華扇が石碑の前にしゃがみ込む。

「確か西の歌姫の時もそんな石碑が有ったような…まさかここに歌姫が…？」

「いや、違うはず…。歌姫がこの洞穴に居るとしたら、もっと気分が悪くなるはずだわ」

ここに居ても、山のどこかに居るはずの北の歌姫の魔力が凍える風に運ばれてピンピンと体に突き刺さって来る。だがこの洞穴には歌姫はいないだろう。もつとも、何かが中に棲んでいないとは限らないが…。

華扇は石碑に降り積もった雪とホコリを手で払う。すると、石碑に血で描かれ、黒く変色した文章が浮かび上がった。

“アマノジャク 鬼人正邪 ここに眠る”

「…はあ」

黙って石碑の前から立ち上がり、華扇がため息をつきながらそこから離れる。

鬼人正邪…変な名前の奴だな。

「これは…」

新子は墓石のすぐそばに泥で汚れた木の欠片のようなものが落ちているのを見つけた。何かと思って拾い上げてみると、どうやら本当に木のガラクタだったようだ。

何だよ、と悪態をつくると墓石に向かって軽く放り投げた。

「洞穴に入ってみましょう。流星にこのままじゃ凍えてしまうわ」
「私に任せて。中に何かいるかもしれないわ」

バンは鉄板で補強し、作り直した憲兵の仮面をかぶり、こめかみにあるスイッチのような部分を切った。バンが言うにはこれで視界を赤外線にすることができらしい。

3人は慎重に洞穴の中に足を踏み入れた。中は外に比べれば温かいが、ホコリでまみれていた。壁には布が垂れさがっており、盛り上がった土の上にはボロボロの毛布が置かれ、床には炭化した焚き木が置いたままだった。

「ここに誰かが住んでいたらしい。もう50年は前の事のようにけど…」

新子がふと部屋の隅に目をやると、下の方の壁に何か書かれているのが分かった。

“60年もマガノ国の闘技場で戦った スラッグの脱走の騒ぎに乗じて ここまで来た

私は怖い あの禍王が 知ってしまった 止めてくれ

4人の歌姫の声 止んだ時 永久の安らぎ 大地を満たす”

これも外に有った墓石と同じく、黒ずんだ血で描かれていた。

「どういふことだ…？」

バンがそう呟く。

「たぶん、ここに住んでいたヤツは昔マガノ国で暮らしていたんだ。そして、逃亡しこの洞窟にたどり着いた。その過程で禍王の4人の歌

姫計画を知ってしまった…だからここで追っ手に殺された…？」

「殺されたんだったら、わざわざ墓なんて立てるかしら？」

3人はしばらく黙った。歩きつかれていたし、少々ここは気味が悪い。憲兵のバンでさえも不安そうな表情を見せている。

「…見つけた」

青い毛並みの大きな犬のような動物に乗った5人ほどの集団が、滝の裏に入っていく新子たちを見ていた。

集団はすぐに滝の周りに近づいた。

「水でも持ってくるか…」

新子は以前香霖堂で買った水筒を持って、洞窟を出ようと歩き始める。洞窟の外に出て、滝の裏側から水筒に水を入れようと滝に近づく。

その時だった。ひよいっと滝の向こう側から何かが転がってきた。それは前にも見た、憲兵団の使う爆弾だった。

「な…！」

すぐに飛びのき、爆発の爆風で吹き飛ばされ、地面を転がる。間髪入れずにもう一つ、もう一つと爆弾が投入される。

「おい華扇、敵だ!!」

新子がそう叫ぶと、華扇とバンがすぐにやって来た。3人は同時に滝から飛び出ると、近くの岩の影に身を潜めた。

幸いにも、今隠れた時は憲兵はこちらを見ていなかった。このままあの洞窟の中を捜しに入るまで身を潜めるんだ…。

「今までの憲兵とは違うみたいだが…」

「私にもわからない」

新子の問いに、バンが少し間を置いてから呟いた。確かに、あの憲兵隊は灰色ではなく迷彩柄の軍服を着ており、首には赤いスカーフを巻いている。

「あ、アレは…」

しかし、遠くの空から竿打が飛んできた。しまった、このタイミング

グでは…。

「あの鳥は…間違いない、奴らの鳥だ。おい、洞窟の中を調べろ」

隊長らしき憲兵がハンドサインで何かを示す。すると2人の憲兵が滝をくぐって洞窟の方へ向かって行った。

—今だ！

3人は同時に岩の影から飛び出し、憲兵に襲い掛かった。

新子が隊長らしき憲兵に殴りかかるが、寸前のところでそれに気付いた憲兵が電気棒を振りかざし、新子を弾き飛ばした。

「お前たちか…大きな鳥を連れた2人の女…。ん？お前は何だ？禍王様からの情報には無かったが…」

隊長はバンを見てそう尋ねた。

「私は元バン隊に所属していた者だ…」

「何だと？貴様、寝返ったのか？」

「生憎だがそう言う事になるかな。だが私はもう憲兵ではないぞ、ただの“バン”という名の戦士だ」

「ふん、ボンクラ隊の役立たずだったか…。だが、このカーン隊は違うぞ、我々は禍王様より勅命を受けた精鋭部隊…！」

腰に下げた2本の刀を抜き、バンに斬りかかる。バンも短剣でそれを受け止め、蹴りを繰り出して距離を離す。しかし、もう一人の憲兵が電気棒で殴りかかり、バンが吹き飛ばされる。

電気で痺れる頭を押さえながら起き上がり、落とした短剣を再び手に取る。

「不可思議な行為だな、バン隊…本来禍王様に造られ禍王様に尽くすために生まれた同じ憲兵が、何故反旗を翻す？」

2本の刀でバンの短剣と打ち合う。バンもたった一本の短剣で相手と互角に渡り合い、その間の短い時の隙間に言った。

「だったら禍王に告げてやるがいい、お前の作品は欠陥だらけだったぞ、とな」

2か月間味わった屈辱、そのおかげで頭がおかしくなってしまったのかもしれない。ただ、あの2人を見ていたら…縛られたままでなく、自分のやりたいことがやりたいと思えるようになっただけだ。

「チイエストオオ!!」

バンの回し蹴りが、敵の手をかすめ、刀を一本取り落とす。すかさず胸元を短剣で切り裂いた。

「ナイスだバン!」

新子は憲兵の腕を掴み、そのまま足を踏みしめる。そしてその憲兵の身体を持ち上げ、勢いをつけて地面へ叩きつけた。そのまま勢いをつけて更に叩きつけ、さらに勢いをつけてもう一度叩きつける。

「ガンガンスマアツツシュ!!」

残り3人の憲兵が新子に飛びかかる。が、彼らは華扇が放った腕の包帯に足を巻かれ、宙ぶりにされてしまう。成す術もなく投げ飛ばされ、大きな岩に激突してずると崩れ落ちた。

「くそ…ッ」

これまでの死線をくぐってきた彼女らにしたら、今さら憲兵の精鋭隊が出てきたところで大した敵ではなかった。

予想外の痛手を負った精鋭隊はよろよろと立ち上がり、消散を凶つている。

「さあ、どうするつもりだコラ…」

落とされていた刀を拾い上げた新子が、その刃を向けながら脅すように声を上げる。

だが…突然、低い咆哮が轟いた。竜や麒麟、妖怪のものではない。人間がただ叫んだような、そんな不思議な咆哮だった。精鋭隊も何だ何だと辺りを見渡し始める。

「何なの…?」

華扇がそう呟いた時、滝の上で何かが動いた。滝に背を向けるように立っていた新子たちはその姿が見えなかったが、それを見た憲兵は驚きの声を上げた。

「怪物スラッグ!」

怪物スラッグは滝の上から飛び降りた。ドスン、と重たい音を立てて憲兵たちの目の前に着地した。

その姿は、まさに怪物と呼ぶにふさわしかった。鼻先の尖ったトカゲのような頭部には目と鼻は無く、首から下は猫背の人間そっくり

だった。身体は緑色の皮に覆われており、腹は白く、鼻先から背中、そして尻尾の先にかけては茶色い体毛が生えている。鋭い爪を持つ筋肉質な腕を地面に置き、蹄のある後ろ足で地面を踏み鳴らす。

再び咆哮をすると同時に、憲兵に向かって飛び跳ねる。刀で斬りかかろうとする憲兵を、筋肉質な巨体に見合わないスピードで避け、鞭のようにしなる尻尾を叩きつけた。

「ぐうッ…!!」

憲兵は地面に刀を突き立てて吹き飛ばされるのを防ぐ。

さらにスラッグはさつき新子たちが身を潜めていた大岩を持ち上げて見せる。そしてその大岩を思いきり投げつけた。

「なんて力だ…」

新子は目を見開きながら呟いた。そこで新子は、ハッと気付いた。この前里の近くまで行つたとき、杭に鎖でつながれていた緑色の怪物…あれと同じだ。

「スラッグはマガノ国の闘技場で飼われている戦闘生物だ…。山には闘技場から脱走した個体がウロウロしている…一度暴れ出したら誰も止めることはできない」

バンが説明を挟む。正にその通り、地面に当たって砕けた岩の破片すらも縦横無尽に投擲する。

スラッグが動きたびに、首と後ろ足に取り付けられた、千切れた鎖がジャラジャラと音を立てる。きつと、自分で千切つて逃げ出したに違いない。マガノ国の為に戦うこの生物も、鎖から解放されたことにより自分の好きな事をして生きていくのだろう。

「もういい、ここはスラッグに任せて退却だ。お前たちはここで死ぬまで闘うがいい…」

「あつ、コラ待て…」

憲兵たちが逃げた時には、スラッグの興味は新子たちへと向いていた。

「ゲゲゲゲ…」

低い唸り声と共に跳躍し、華扇に向けて腕を振り下ろした。華扇は刃のように形を変えた腕でガードする。スラッグはよだれを垂らし

ながら吠え、後ろへ飛びのいた。

そしてもう一度走り出し、掴みかかった。それを躲した華扇は、一瞬スラッグの口の中を覗いてしまった。

「コイツ…口の中に目が…」

顔に無いと思っていた目は、口の中に隠されていた。ギョロギョロとあたりを見渡し、目の近くに有る二つの鼻の穴がひくひくと動いている。

新子がスラッグの背中に飛びついた。驚いたスラッグは喚き散らしながら身体を振り回して新子を振り落とそうとする。負けじと首に手を回し、憲兵の刀で喉元を斬りつけた。

しかし、砕けたのは刀の方だった。スラッグの鱗と硬い筋肉は刀を通さなかった。そして折れた刀を掴み、それを後ろ手に新子へと突きつけた。新子の腕に刀が刺さり、スラッグの背から地面へと落ちてしまう。

—血の匂いだ。血の匂いがする。憲兵のクソ共とは違う、澄んだ血の匂いだ。たまたま鉢合わせた憲兵をいたぶってやるのはつまらない、妖怪と人間と戦う時が一番楽しい。憲兵みたく臭くないし、何より個体ごとに違った反応を見せてくれる。

あそこにいる変な憲兵はどうでもいい、闘いたいのはあの二人…！
新子に駆け寄った華扇のほうへ目を向け、再び吠える。

背中を逆立て、手を地面に付ける。

「アイツ、すごいパワーを持ってる…身体能力の高さだけじゃない、内に秘められた魔力だって、並大抵の魔物ってレベルじゃない…」

確かに、これなら河童を苦しめてきたケチャルコチルが、さらに死ぬほど恐れているのも分かる。

スラッグは走り出した。余りの脚力から繰り出される踏み込みに、地面がめくれ上がる。

その時だった。

新子たちの間を何か黒い影が通り抜けた。この感覚は…まさか…

！

影の中からゆっくりと姿を現したのは、黒いフードを被った巨体。

緑色に光る顔が、新子をじつと見つめている。空で竿打がけたたましく鳴いている。

黒いマントの隙間から、白い指が伸びる。白い蛇のようにスルスルと地面を這いながら、足がすくんでいる新子に向かう。

「コイツは何なんだ……！」

バンが短剣で白い指を斬りおとそうとする。白い指に剣がふれた瞬間、真っ赤な血がどばーっと噴き出す。しかし、その血しぶきは更に多くの指となって新子たちに襲い掛かった。華扇も腕をドリル状に変化させ、黒い化け物に向かおうとした瞬間。

丸太のような腕が3人を突き飛ばした。

スラッグだ。奴が新たな敵に目を付けたのだ。しかし、足を踏み鳴らして威嚇するスラッグも、明らかにおびえているのがわかる。頭を下に下げ、化物の巨体を見上げるように構えている。

だが運のいいことに、化け物の注意もスラッグへと向いた。白い指の方向を変え、スラッグへと向かわせる。尻尾で指を薙ぎ払い、噛みついて千切ろうとするが、スルスルと首筋に絡みつく指の前にはスラッグも苦しみの声を上げた。

河童の夢見の泉のほとりで出現した時とは明らかに力が増しているように見える。しかし不思議なことに、新子の能力が全く発動しない。

「くそっ……！」

新子が刀を持ち直し、背後から黒い化け物を両断する。マントが敗れ、緑色の顔をこちらへと振り向かせた。その時、これを待っていたかのようにスラッグが自身に絡みつく白い指を噛み千切り、化け物の頭部を殴った。

化け物の姿が揺らぎ、そのままくしゃつと地面の影と同化し、そこからどこかへと消えてしまった。

「ケエエエエエ……！」

スラッグはまだこちらを見ていた。今のコンディションでの勝算を押し量っているようだ。だが今では厳しいと考えたのは、スラッグは影が逃げた方向とは別の方へ走り去っていった。

「またやって来たのか、アイツ…」

「でも、あれは多分誰かが遠隔で操っている分身のような物じゃないかしら…例えば、北の番人とかの…」

「何はともあれ、天狗のアジトはもうすぐだ。進もうか？」

第17話 「反逆の引き金」

鈴奈庵の娘、本居新子は両親から、禍王の“四人の歌姫計画”を知らされる。新子は仲間の茨木華扇と共に、歌姫計画を打ち破るために旅立った。

元憲兵団のバンを仲間に加え、北の歌姫を目指して妖怪の山を上る一行。そしてついに、北の歌姫が隠されている天狗のアジトへとたどり着くのだった。

第17話 「反逆の引き金」

―誰もが問う

―己とは何か

―命とは何か

―幻想郷とは何か

―その答えを知らぬまま幻想の民は死ぬ。それこそが、幻想の宿命

かつて見た景色。ささやかな平穏、ささやかな希望。それを踏みにじられた時、私は立ち上がる。

その手にある希望、反逆の引き金。私は戦い、逃げ惑い、そして絶望を知った。

人は問う、何故戦う？何故妖怪は殺す？その答えを知らぬまま、人は死ぬ。それこそが、人と妖怪のサガ。

妖怪は愚かだ。だから、この地から去れ。決して4人の歌姫に触れるな。お前たち愚かな種族にはどうすることもできないのだから、無駄だ。おとなしく滅びを受け入れるがいい…

「ここから先が…」

新子、華扇、バンの3人はいよいよ天狗のアジトの目と鼻の先までたどり着いた。呆然と前を見つめる3人の前で、遠くの岩々が塔になり、断崖は高い壁となった。

やがて目の前に、巨大な城が現れた。城の中から邪悪がじわりじわりと悪臭のように漏れ出してくる。新子と華扇が息を呑んだ。

「あれが天狗のアジトか」

新子が若干かすれた声で言った。

「ええ」

「ああ」

華扇は重々しく、バンは何もないように言う。3人は横に並んで、石のタイルの道を歩き出した。

行く手を阻むものは何もなかった。襲い来る怪物も居ない。だが、城の前に近付くにつれ、邪悪な吹雪が激しさを増す。

「北の番人はあの中でアタシらを待ってるんだ。やつはアタシらがここに来たことを知ってながらまだ動かねえ。アタシらが出向いてくるのをじつと待ってやがるんだ」

「そのようね。番人は奴のご主人と同じ自惚れ屋ね。だがその自惚れが命取り……」

華扇は城の大きな扉を強くノックした。

「遠くから見張ってて、竿打」

華扇がささやく。竿打は不満そうに鳴いたが、3人の上から飛び立ち、暗闇に消えた。

新子は思った。アタシらは何の策もないまま。敵の罠に飛び込もうとしている。頼みは、アタシ達自身だ。新子は華扇を見た。華扇はにっこりと微笑みかけた。

いくしかないな……。新子は姿勢を正した。

扉の前で、3人は静かに待った。近づいてくる気配はない。華扇は腕をドリル状に変化させると、それを使って扉をぶち壊した。

「おいおい……」

「何も来ないって事は勝手に入ってもいいんでしょ？」

壊れた扉をくぐると、新子たちが通路を通るのに合わせて提灯が灯ってゆく。廊下の床は木できていて、若干坂道になって上に上っているような感じがする。外観から見た城とは随分変わっているが……

やがてゆるやかな坂は、気も遠くなるほど長い螺旋階段へと変わった。外から見えた中で一番高かった塔を上っているのだろう。

「敵はこの上に居るハズ。急いで登りましょう」

華扇はバンと新子の手を取ると、螺旋階段の手すりの上をピョンピョンと飛び跳ねながら上へと昇り始めた。ぐんぐんと階段の初めの場所が遠ざかっていく。時折点在している窓の外は霧でおおわれている。いや、雲か…？

どんどんと登り、ようやく螺旋階段の終わりが見え始めてきた。華扇が飛んでいくスピードを速めるのが分かった。

だがその時、階段の上から、何かを身を乗り出してこちらを見ているのに気が付いた。黒い長衣をまとった化け物の顔は緑色に輝いて、はつきりと鷹鼻の仮面を形作っている。仮面から炎のようにメラメラと燃える目が覗く。ふいに、長衣の袖から白く長い腕がすうっと現れた。そして指を目いっぱい広げ、向かってくる華扇たちを今にも迎え撃ち、叩き落とそうと構えている。

出たな、仮面の人。いや、北の番人の化身!!

「うおおおおおお!!」

番人の化身に臆することなく、こちらも化身ごと打ち破る勢いで飛んでいく。華扇は包帯の腕を巨大な拳の形へと変え、それを化身に振り下ろそうとする。

しかし、突然視界から番人の化身が消えた。その上、さらに続く階段が目の前に現れたのだ。

「なに…どういふこと!!」

バンが驚きの声を上げながら下を見る。新子もつられて下を見ると、なんと化身は自分たちの下に居た。勢い余って化身を通り過ぎてしまったのだろうか？

「いや、新子、違うわ!階段が出現したのでも、番人を越えたのでもない…! 私たちは落ちているんだ!」ひっくり返された”んだ…何らかの方法で、”進行方向を上下逆さまにひっくり返された”んだツ!!」

それを聞いた新子が階段の手すりに捕まろうと手を伸ばす。手す

りを掴むと、また方向を変え、もう一度番人の化身目がけて跳躍する。今度も同じだった。気が付けば、自分たちはいつの間にか逆を向いている。

「クソ…厄介だなー」

新子がそう悪態を付いた瞬間、突然、緑色の顔が目の前に現れた。燃える目がぐにやりと薄気味悪く笑う。直後、3人は巨大な腕によって叩きのめされた。3人は別々の方向に吹き飛び、螺旋階段に落ちた。

化身は前に出てきた時よりも格段に力を増していた。本当にこの近くに、奴の本体である北の番人が居る。敵がこんなに強いのに、新子の能力が発動しない。

奴はどんどん強くなる。こうなれば、本体を直接叩くしかない。

「テメエだろう、河童を殺して、スラッグを攻撃したのはよオ!! テメエは番人に遠隔操作されていたんだ、河童の時はあまりにも遠すぎて、アタシたちと河童を間違えて殺し、さっきもアタシらとスラッグを間違えて攻撃した」

緑色の仮面の目が、だから何だ、とでも言っているように新子を見る。

「だが今度はテメエは間違っちゃくれねえ。確実にアタシらをしとめるだろう。だから、もっと簡単なほうを叩くとするぜ!」

新子は螺旋階段を駆け下り、一番近いところにあつた窓をたたき割ろうと拳を打ち付けた。窓は砕け散り、外の冷たい突風が塔の中に吹き抜けて来る。

化身の頭がカタカタと震えた。どうやら嘲笑しているらしい。

確かに、窓を壊したはいいが、この塔をどうやって登っていけば…。その時、華扇が口笛を鳴らした。大きな音の口笛は窓の外まで響き、それは塔の下へ…城の外へ…どんどん響いていく。

「この化身は私たちが何とかするわ、新子は上へ!」

壊れた窓から、見慣れた顔が突き出てきた。黄色いクチバシ、鋭い目、白い羽毛…竿打だ!

「よし、行くぜ!」

新子は竿打の背中へと飛び乗り、竿打は塔の外をぐんぐん飛んで上へ昇っていく。そしてついに、当の最上部が見えた。壁は一面ガラスになっていて、中は薄暗い部屋になっている。

その部屋の中央には、上向きの矢印をかたどった玉座が佇んでいる。そしてその玉座に座り、肘を付いてこちらを見て不気味な笑みを浮かべているのは…。

「アイツが北の番人か…!!」

竿打はガラスへと突進し、バリーンと音を立てて部屋へと殴りこんだ。新子は竿打の背中から飛び降り、背中のバッグからバットを抜いて床へ着地した。そして、玉座の上でふんぞり返っている番人を睨みつける。

赤と白の混ざったメッシュの長いぼさぼさ髪に、その髪の間隙から飛び出ている2本の角。新子よりも高い位置に居るはずなのに、こちらを睨めあげてくる恨めしそうな目つき。

「何とかたどり着いたようだな、小娘…。この北の番人、鬼人正邪きじんせいじゃのもとへ」

「なに、鬼人正邪だと…!?!」

鬼人正邪…あの洞穴の前に有った墓石にかかれていた名前じゃないか!

「…アタシは見たぜ、アンタは死んだんじゃないのか? 墓を見たぜ」

「ほう、あそこに行ったのか。あれは私が死んだと思わせる罠だ。この通り、私は北の歌姫の番人となった。あそこに私の墓を立て、死んだように見せかければ、誰も番人が鬼人正邪だとは思えない。もつとも、ここまで来たのはお前が初めてだな」

「だったら何故、お前は歌姫の番人なんかになつたんだ? お前は昔マガノ国で無理やり戦わされてたんだろ、そのマガノ国に今更付くなんて…」

「ケケケ、ククツ、ハハハハハハハハハハ→無知とは恐ろしい事よ、お前は自分を正義と信じているのかもしれないが、この幻想郷を守っているのはこの私なのだ。この鬼人正邪こそ、お前たち人間の守護者

なのだよ」

「な、何を言っている!?!」

高笑いしながらそう言う正邪に、新子が戸惑いながら言い返そうとする。

「マガノ国に支配されることが、人が生き残る唯一の道なのだ。そこから外れたお前たちを、これ以上好きにさせる訳にはいかん。幻想郷の為に…死ぬが良い」

正邪が座っている玉座の横から、細長い矢印の形をした槍が突き出した。咄嗟にバットで槍を殴り、方向を変える。

「ははん、なかなかいい力を持っているな。その力がどんな力なのかも知らずに…」

正邪は玉座から立ち上がると、膝にかけていたマントを背中に羽織る。すると、玉座の影が蠢き出し、巨大な怪物へと形を変えた。黒い影のような化身の長衣の中に正邪が入り込むと、化身のフードの中の緑色の顔が現れた。

新子の2倍も3倍もある巨体が目の前に腕を組んで立ちふさがる。

「これが私の北の番人としての能力…『マスクドトレイラー仮面の反逆者』」

「出やがったな、仮面ヤロウ!今度こそ…なっ!?!」

正邪の化身が組んでいた腕を解くと、その白い手には…ぐったりとうなだれた、ボロボロの華扇とバンが握られていた。

「コイツらなど、取るに足らなかつたな」

仮面から正邪の声が響いた。

そして2人を長衣の中に押し込む。

「デメエ…ッ」

ここからは新子一人で戦わなければならない。この強大な影の塊と。だが、新子も丸腰ではない。今まで遠隔で使われていたこの化身相手には能力が発動しなかったが、今は違う。あの化身は今、本体である鬼人正邪と合体している…つまり、その鬼人正邪の妖力に反応して、新子は強くなる!

「それがお前の能力か、小娘」

正邪は一旦しゃがみ込むと、一気に部屋の天井まで跳躍した。そし

て勢いをつけ、その巨大な拳を振り下ろす。

物凄い速度で落ちて来る正邪をじつと見つめる新子。新子も負けじと飛び跳ね、正邪の拳に自分の拳をぶつけた。部屋に突風が巻き起こり、両者の間に稲妻が走る。

だが、このお互いの初撃は、落下の勢いがあつた正邪が勝つた。新子は地面へと吹き飛ばされ、そのままバウンドしてもう一度正邪の目の前まで来てしまった。すかさずもう一度殴り、壁に向かって突き飛ばす。

「ッラア!!」

新子は壁と垂直に上手く着地すると、壁を走り出す。そのまま降りて来る正邪へと近づき、手にしたバットを思いきり振り下ろした。バットの一撃は伸びてきた白い指に当たり、その指はへし折れると同時に粉々に消し飛ぶ。

そして、再び両者の拳がぶつかり合った。

今度はほぼ直角。仮面の顔と新子の額がぴったりとくつつく距離まで接近している。

「かつてお前のように、幻想郷のために歌姫と戦ったヤツがいたよ…その行いが逆に幻想郷を破滅に追い込むとも知らずにな…」

「何を言ってるのか、ゼンゼン分からねえんだよ!!」

「分かる必要はない→どうせすぐに死ぬのだ」

正邪は新子をはじき返すと、妖気の衝撃波を放ち、再び新子を壁へと吹き飛ばす。

そして白い指が赤と青の尖った矢印へと変わり、一直線に新子へと向かって行った。矢印は新子の足や肩、腕を貫通し、そのまま後ろにあったガラスの壁に縫い止めるように突き刺さった。

近くで竿打がけたましく鳴き、塔が揺れた。

「クソが…」

新子はバットを杖にしてよろよろと立ち上がる。傷口からは絶えず血が流れだしている。

「まだ戦う力が残っているのか。その反逆精神は誉めてやろう」

影の巨体が上から覆いかぶさるように襲い掛かって来る。新子は

立ち上がったまま動こうとしない。そしてついに、正邪はボディプレスをかまし、床に小さなクレーターが出来上がった。

「死んだか…。…ぬ」

化身の腹の下で何かが動くのを感じる。あの小娘か、これでは仕留めきれなかったか。まあいい、これでは息もできまい、いずれ死ぬ。

巨大な化身の身体に閃光が走った。爆発のような衝撃が襲う。

「何だと…。→？」

正邪の背中から、高速回転する何かが長衣を突き破って現れた。何かは3つに分裂し、空中に浮きあがった正邪の前に降り立つ。

一つは、右腕をドリルのように回転させている華扇だった。隣に居るのは、憲兵用の爆弾を手を持っているバン。その後ろに居るのは、勝ち誇った笑みを浮かべている新子…。

「小娘が…。→長衣の中をそいつを使ったのか」

「ああそうだ、お前をギタギタにするにや、これしか思いつかなかったんですよ」

「北の番人よ、覚悟しろ！」

バンが目にもとまらぬ速さで駆け出し、風でバサバサと揺れている長衣の袖に捕まった。纏わりつくバンを引きはがそうと伸びてきた白い指に捕まる前に、バンは身軽な身ごなしで長衣を上っていく。ついには緑色に光る大きな仮面の場所にまで上り詰めた。

そして、尖った鷹鼻の上、両目の間に、短剣を深く突き刺した。仮面の目が怒りに燃え、正邪ではなく化身の耳をつんざくような叫び声が響く。

「新子、あれをやるわ！」

「おう、やってやろうぜ！」

華扇の腕の包帯が解け、新子に巻き付いていく。そして空中へ飛びあがり、それを正邪へと狙いを定め、包帯をバネのようにして勢いよく新子を射出した。西の歌姫戦で使用した、あの技だ。

「邪魔だ」

正邪は仮面に貼りつくバンを自由自在に操れる矢印の槍で叩き落

とし、今だ空中に留まっている華扇を吹き飛ばした。

そして白い手を広げ、向かってくる新子を受け止める態勢をとる。他の奴はもういい、今のが最後の力と見た。先刻の戦いで散々痛めつけてやったし、残るはあの小娘を叩きのめせば終わりだ。

そして、鈍い音を立てながら、新子の拳が正邪の手の平に激突した。受け止めてやったぞ、不敵な笑みを浮かべる正邪だが、受け止めている腕が衝撃に耐えられず、グニャグニャと崩れていく。

白い手のしわの無い皮が破れ、緑色の邪悪な光が漏れ出す。その時、正邪は目を見張った。自分から漏れ出た魔力が、新子に吸い取られるようだ。魔力は新子の気となってその身体の周りに纏わられている。

「私の魔力を取り込むつもりか→」

正邪は自身の能力を使い、自分にかかる重力を反転させた。一瞬で天井に移動し、そのまま平然と天井に立って見せる。

「なるほど、伊達にここまでたどり着いたわけではないな。しかし悪あがきもこれまでだ：もうそこまでボロボロなお前たちでは、もはや一かけらの勝ち目もない→」

「ガタガタ言ってるじゃねえ！このアタシが、負ける訳はねえんだよ！イバラが、バンが、にとりたちが、このアタシを信じてる！誰にも信じられねえテメエに、負ける訳アねえんだぜ!!」

新子の周りに膨大な気の渦が発生した。高まりに高まった力を一気に使うつもりだ。

「ならば私は、全力でお前を潰そう——→→！」

正邪も負けじと力を込め、妖気と魔力の混じり合ったエネルギーの渦を発生させ、一気に塔の天上をぶち抜いた。

そして塔の上へと舞い上がり、長衣の袖から飛び出た何百本もの白い指が互いに重なり合い、一つの巨大な矢印を形作った。

「喰らうがいい、『リベリオントリガー』アアアアアアア→→→!!!」

上から襲い来る正邪の巨大な矢印を、新子が両腕で受け止める。大きな衝撃波が塔から妖怪の山全体にまで広がった。

第18話 「北の歌姫」

鈴奈庵の娘、本居新子は両親から、禍王の“四人の歌姫計画”を知らされる。新子は仲間の茨木華扇と共に、歌姫計画を打ち破るために旅立った。

元憲兵団のバンを仲間に加え、北の歌姫を目指して妖怪の山を上る一行。そしてついに、北の歌姫が隠されている天狗のアジトへとたどり着き、番人である鬼人正邪との戦いが始まった。

第18話 「北の歌姫」

「うおおおおお!!」

鬼人正邪の『リベリオントリガー』と、新子の全力を込めたパンチがぶつかり合う。

周囲には衝撃によって稲妻がほとぼしり、大気そのものが震えているようだ。

「はははは!!勝てるものか、人間如きが!!」
「く……!」

だが、やはり新子では押されてしまう。脚がズルズルと後ろへ滑り、床がバキリとひび割れる。もう片方の腕も使って押し返そうとするが、腕が痺れて来た。もうダメかと思ったその時…

後ろから、誰かが背中を押した。後ろを振り向くと、バンが自分の背中を両腕で支えていた。

さらに、自分の横から小さな竜巻が現れ、一緒に正邪の攻撃を受け止めてくれた。華扇だ、イバラが竜巻のように回転している腕をぶつけてともに突破しようとしている。

…バキン

「…ん?」

矢印の先端に大きなひびが入った。ひびは広がり、ついには矢印は砕け散ってしまう。砕ける矢印の中から姿を現したのは、拳を振り上

げてまっすぐこちらに向かってくる新子だった。

正邪が避ける間もなく、新子の拳が仮面の顔に深くめり込んだ。仮面がひび割れ、燃える炎のような赤い目がチカチカと点滅し、頭部がカタカタと壊れたおもちゃのようにふるえだす。

「ふん、所詮禍王から貰った魔力もこの程度か」

化身の背中から長衣を突き破って鬼人正邪本体が出て来る。崩れかけの化身の身体を、バランスも崩すことなく悠々と歩いてくる。そして、息を切らしている新子の顔面を、仕返しと言わんばかりに思い切り殴り抜けた。

容赦のない殴打が間髪無く新子を襲う。赤と青のオーラを放つ正邪の屈強な肉体が、新子をねじ伏せては起き上がらせ、一方的に痛めつけている。

「ハハハハハ!!」

新子も抵抗しようと正邪を殴る。正邪の鼻から血が流れ出すが、それすらも楽しんでるかのようには、攻撃の手を休めることはない。

正邪の中にある、かつての妖怪としての本能、天邪鬼として奮戦した時の血が騒いでいる。長らく押し込めていた戦いの楽しみを忘れてはいないのだ。

「ハア…ハア…」

ついに、新子は膝をついて倒れ込んだ。だが正邪は倒れる新子の頭を掴み、自分の顔へ近づける。

「久々に楽しめたよ、小娘。では…さっさと人間の吐き溜めに戻れー」

正邪がそう言った時、新子の鋭い目が睨んだ。一瞬の気迫に正邪は押され、ふと新子の頭を離してしまった。新子は少し後ろへフラフラと後ずさり、そこで真っすぐ立った。

「…それでどうするつもりだ？」

「さつき、お前の妖気を…アタシは吸い取った。覚えたぜ、お前の技…」

「何だと？」

「そして使えるんだぜ、テメエの技を…!!」

新子は身を掲げ、右腕の拳を後ろへ引く。左手でその右拳を覆い、

気を溜める。

拳が青いオーラを纏い、周囲にあった小石が浮き上がり、土煙が舞う。

「人間の小娘如きが、まさか…！」

「アタシは鈴奈庵の本居新子ってんだ、覚えておけや…。『リベリオン トリガー』…!!」

炸裂するエネルギーと共に新子は正邪の胸を渾身の力で殴り抜けた。まばゆいばかりの閃光が塔全体を覆い尽くす。

正邪の身体から紫色の光があふれ出し、やがて爆発を起こした。

閃光と爆発が収まった後には、新子と正邪は未だに向かう会うようにして立っていた。

しかし、正邪の胸元には大きな風穴が空き、その肉体は赤熱しながら粘土のように崩れかけている。

「ケケケ…私よりその技を上手く使いこなすとは。だがお前のその能力、知ってから後悔することになるぞ」

「鬼人正邪…」

「ふう。一つだけ予言してやろう。”4人の歌姫の声 止みし時 永

久の安らぎ 大地を満たす”」

「どういうことなの…？」

華扇が瓦礫の中から起き上がり、正邪に尋ねた。

「クククク…。本居新子、何故お前は邪悪を前にして力が増す？何故お前は、私のような歌姫の番人のように、歌姫に近づけば近づくほど、強くなる？」

「何だと…？」

その時、正邪の肉体がジュワつと蒸発するように溶けだした。溶けた液体は砂と成り、風に舞って消えてしまった。

正邪の遺した言葉の意味は何だったのだろうか？だが、今はそれを考える暇は無い。まだやるべきことが残っているのだ。

新子と華扇は今だ傷一つつかずに残っている、正邪が座っていた玉座に目を付けた。玉座に近づき、それを押してみる。玉座は移動し、その下には幅1メートルほどの窪みがあった。

窪みの穴の中には、生白くブヨブヨと太った物体が鎮座していた。毒々しい黄色の縞模様が走っている。それが、悪臭を放つじめじめした穴の壁に狂ったように体を打ち付けていた。

目も、舌も、牙もない。だが、まるで熱を発するように全体から邪悪な気を放っている。ぱっくりと空いた口から、ガヤガヤとした叫び声が轟いた。

—うるさい

あまりのうるささに、二人は耳を塞いで身をかがめた。やかましい叫び声がガンガン耳に入ってきて来る。まるで、何年も前に憲兵団が自慢げに里の通りの真ん中で演奏してた、エレキギターとかいう楽器のギャンギャンした騒音にそっくりだ。しかもそれが耳元で鳴らされているような感覚。

—早く止めてくれ！

止むことのない、もはや歌とは言えない叫び声。聞いているだけで、焦りややり場のない怒りが煮えたぎるようにこみあげて来る。今までの歌姫が聞く者に絶望や恐怖、倦怠を与えていたとしたら、この歌姫の声を聞く者に与えられるのは激しい負の怒りだろう。

—動くんだ、拳を上げろ！このやかましい物体を叩き潰すんだ

そう自分に言い聞かせても、身体が言う事を聞かない。邪悪な力に命を吸い取られていく。横に居る華扇も同じだろう。いや、元マガノ憲兵団のバンならば平気かもしれない。だがバンは今頃瓦礫の中で気絶しているだろう。

叫び声だけが耳を占領し、新子はがくりと倒れ込んだ。

指が言う事を聞かない。新子は訳も分からず、自分の手を見た。手が緑色に輝いている。指の間から緑色の光が筋となって現れ、周囲の暗闇を明るく照らし出した。

暗闇？　そういえば、なんでこんなに暗いんだ？　今は昼で、天井は全部吹っ飛んだはずなのに。

何がどうなっているんだ？

新子の鼓動は早鐘のように鳴っている。新子は上を見上げた。その瞬間、緑と黄色の巨体が空気を震わす咆哮を上げて新子目がけて

迫ってきた。

麒麟だ！

突然大きなカギ爪にすくわれて身体を持ち上げられる。赤子のように成す術もなく、新子は麒麟の爪のゆりかごの中で身体を丸めた。新子は今、空を飛んでいた。横を見ると、反対側の前足の爪の間に、新子と同じように華扇とバンが揺られていた。

見下ろすと、例の窪みが見える。

麒麟は何も言わない。緑の炎のように燃える目で、穴の中でのたうち回る物体を見つめている。

だが、何も話す必要はなかった。新子には麒麟の鼓動が聞こえていた。雷のように力強い鼓動が耳の中に響き渡り、淀んだ北の歌姫の声をかき消してくれる。新子は自分を包んでいるカギ爪に片手を置き、それを握りしめた。カミソリのような爪が手に食い込み、温かい血が流れだす。

それにもかまわずに、新子は握る力を強めた。

すると、麒麟が雄叫びを上げ、緑の炎を吐いた。穴の底で悍ましい物体が緑の炎に包まれ、のたうち回る。新子は歓びに震えた。

麒麟は何度も何度も炎を吐いた。塔のてっぺんは緑の炎渦巻くかまどと化した。ガラスが赤熱し、やがて溶け出すように壊れていく。焼け付くほどの熱が下から湧き上がってくる。新子は熱から逃れるために身体を丸めた。

それでも新子は、麒麟の爪を掴んで離さなかった。今この瞬間も、新子の力が麒麟の爪を通して流れこんでいく。麒麟はこれでもかと思えば、炎を吐き、穴が盛んに燃える。

その時だった。「北の歌姫」の叫び声が、諦めたようなむせび泣きに変わった。声はだんだん力を失い、ぴたっと止んだ。目もくらむような白い光が、緑色の炎の中で炸裂する。

一瞬、大地が息を呑んだように静まり返った。妖怪の山全体が、まるで目の上のたんこぶを取り去ってもらった歓びに打ちひしがれているようだ。

やがて、長く、低いうめき声が響き渡った。そして次の瞬間、辺り

はもうもうたる埃に包まれた。粉塵が風に吹かれて宙を舞い、目も開けられない。新子はせき込み、息も絶え絶えになった。

麒麟が、満足げにシューと音を立てた。次の瞬間、後ろ脚だけで空中を駆け、その後突然地面に向かって急降下を始めた。

新子の両耳を風が勢いよく吹き抜けていく。

目を開けた新子は、自分がまだ夢を見ているようだった。靄のかった青い空を背景に、二つのぼんやりとした影が見える。

優しい風が頬を撫で、誰かが自分の手を握っていた。

「新子！」

とつぜん名前を呼ばれて、新子は目をしばたいた。ゆっくりと目の焦点が合ってくる。二つの影は人の顔だ。うれしそうに笑っている…。

華扇とバンが新子の顔を覗いている。その後ろでは竿打が心配そうに首をかしげていた。

「あの塔は塵となつて消えたわ。跡には元の天狗のアジトの城だけが残った」

「私は気絶していてよくわからなかったのだが、本当に歌姫は倒せたのか…？」

バンがかすれた声で言った。

「ああ、北の歌姫は始末した。…そうだ、麒麟は何処へ行った…？」

「麒麟は私たちをここへ降ろした後、また遠くへ飛び去ったわよ。おそらく、もう二度と会う事はないでしょう。アレは、怒りに満ちた目をしてたから」

「恐ろしい顔になるのも無理ねえさ。名誉と力の象徴のあの麒麟は、なわばりに入り込んだ邪悪を退治するためにここへ来たんだから。きつと、今だになわばりに入った竜の事で頭がいつぱいなんだよ」

「怒らせておけばいいのさ」

新子は心の中でゆっくりと頷いた。

「あ、そうそう、さつき城の中でこんなものを見つけたんだけど」

華扇が取り出したのは、黒くて四角い機械だった。

「何だそりゃ？」

「知らないの？これはカメラと言って、写真を撮れる機械なのよ」

「これがあのカメラって奴か」

「写真って何よ？」

「いいからそこに立って！記念写真を撮るのよ」

華扇に腕を引かれるがまま、新子とバンは並んで立たされる。華扇はカメラのレンズの前で片目を閉じ、手でピースサインをつくる。そしてシャッターを押した。

カシャ

「これで本当にアタシらの写真が出て来るのか？」

「確かこれでいいはずだけど…ほら、出た出た」

カメラの下の方から、写真が出て来る。その写真には、山から一望できる幻想郷の美しい大地をバックに、共に戦い北の歌姫を倒した三人と竿打が映っていた。

その日の夜、妖怪の山から邪悪が消え去ったのを感じた河童たちは、大急ぎで山へと向かい、新子たちを迎えに行った。

そして今、河童のアジトでは宴が開かれていた。育てた野菜や、釣った大量の魚を振る舞い、妖怪の山を救った新子たちを英雄として歓迎した。

「本当に良かったよ、無事に帰って来てくれてさ」

まず迎えてくれたのはにとりだった。

昨日、河童のアジトを出発した時に、新子たちを非難の眼差しで見ている者たちも、今や完全に認めてくれている。ここまで多くの犠牲を払ってきた苦勞が報われたと喜んでいた。

「貴方たちは山に帰らないの？」

「それはまだだね。北の大地を腐らせていた歌姫が倒されても、まだ妖怪の山は荒れているし、危険な怪物もはびこってる。それに準備もしなくちゃいけないし、まだ時間はかかるね」

「そうなのか」

「ケチャルコチルなんだけど、奴はさつき大急ぎで山に戻ったよ。い

くらスラッグとか恐ろしい怪物が居たとしても、邪悪が消えただけで満足らしいわ」

「そうか」

「ところで、あの女憲兵はどこだい？彼女にも謝らなくちゃいけないし…」

「そういえばどこに行つたのかしら？」

河童のアジトの外、夢見の泉のほとり。そこにある岩の上にバンが座り、自身の仮面を見つめていた。

自分の隊の隊長が使っていた仮面。今は自分の手で補強ししっかりと機能するものに仕立てることができたが、これは憲兵団の仮面。だがもう自分は憲兵団ではない。さて、これはどうしようか…。

「どうしたの？」

バンの後ろから、新子と華扇が話しかけた。

「いや、この仮面をどうしようかと思つてね」

「好きにしたらいんじゃないかねーか？お前が必要とするならその仮面は存在し続けるし、お前がいらぬというならその仮面は自然と消えるさ。道具には魂みたいなモンが宿つてるんだと。それが、誰がどんな目的で作つた物でもな」

「…そうか。お前たちにはいろいろと助けられるな。私は…消えては欲しくないな、しばらくは持つているとしよう」

「それが良いわ。私だって、こんな意味の分からないガラクタと旅を共にしてるんだから」

華扇は地面にしゃがむと、ポケットから例の小箱を取り出し、弄り始めた。箱からは2本のツルツルした棒が突き出している。一本は南の歌姫を倒した後に出て、もう一本は西の歌姫を倒した後に現れた。だとすれば…。

「おお」

華扇の指が小箱の秘密の仕掛けに触れ、カチツという音と共にもう一本棒が突き出した。3人が固唾を呑んで見守るが、箱はまだ何も起こらなかつた。

「…もうこれ、ただ棒を出すだけの小箱なのでは…？」

「もうちよつと頑張ってみよう、まだ何かあるのかもかもしれないぞ」

新子はふと思った。次にこの小箱から棒が飛び出すときは来るのだろうか。残る歌姫は一人。もう一息という所だが、もう北の歌姫が倒されたことは既に禍王の耳にまで届いているはずだ。そうなれば、禍王は死に物狂いで最後の東の歌姫を守ろうとするだろう。

だが行く手にどんな危険が待ち受けていようとも、それから目を逸らしてはいけない。

考えなければいけないことも、山ほどある。今、人間の里の中はどうなっているのだろうか？父さんは？母さんは？

これ程慎重に旅をしているのに、どうしてアタシ達の動きは北の番人に筒抜けだったのか。番人だった鬼人正邪は何者で、彼女が遺したあの意味深な言葉たちはどういう意味なのだろうか？

考え出したらキリがない。でも今は、靄のかかった夜空の下では、先の事を心配するより、まずは喜ぼう。3人とも無事だったんだ。“北の歌姫”はもう二度と歌う事はない。ついに北の大地は死の仮面を投げ捨て、息を吹き返した。

残る歌姫はあと一人！ここまで来れば、誰が敵で誰が立ちふさがろうとも、負ける訳にはいかない。

第19話 「帰還」

鈴奈庵の娘、本居新子は両親から、禍王の“四人の歌姫計画”を知らされる。新子は仲間の茨木華扇と共に、歌姫計画を打ち破るために旅立った。

南、西、北の歌姫を倒し、残る博麗神社の東の歌姫を目指して、2人は行動を開始するのだった。

第19話 「帰還」

朝だ。部屋の外で、ドタドタと誰かの慌ただしい足音が聞こえる。こうして、この石の部屋で目を覚ますのも、5回目だ。

「朝ですよ、皆さん！」

子供の河童が部屋の戸を開け放ちながら叫んだ。横の布団から、華扇がむくりと起き上がり、大きくあくびをした。もう目を覚ましていたが、新子も一緒になって起き上がった。

あの子供は、例の仮面の化け物と鉢合わせしてしまった男の子だ。あの時のショックからもすっかり立ち直って、今は友達と一緒に元気に生活している。

「そんなうるさく言わなくてもわかるって…」

2人は朝食の席へと眠い体を引きずるようにして歩いていく。

「お。おはよう」

もう早々と席についていた、バンが2人に挨拶をした。元女憲兵で、ついこの間は新子と華扇と共に、北の歌姫を倒すのに奮闘した。彼女は河童に2か月間も牢に閉じ込められていたが、今や河童たちからも認められ、普通にここで生活をしている。

「ちやーっす…」

眠たげに席に着き、机に置かれたサラダや魚をもぐもぐと食べ始める。

朝食を終えた二人は、朝の陽を浴びに外へ出た。昨日までの雨が嘘

のように空は澄み渡っている。

さて、今日はいよいよ出発の日だ。十分に体も休めたし、怪我也良くなってきた。絶好の出発日よりだろう。

その日の午前11時ごろ、2人の人影が人間の里へ続く道を速足で歩いていった。2人とも憲兵団の灰色の軍服を着用している。背中に背負った荷物の中には、それぞれの衣服や道具など、必要な物が入っている。

一行は、いよいよ里の周りを囲っている外壁が見える位置まで近づいた。

「いよいよ、里に帰る時が来たわね」

帽子を深くかぶった華扇がそう呟いた。後ろに居た新子が軽く頷く。2人は憲兵団に扮装するため、河童のアジトにあった憲兵の制服を着ている。もう一度この制服を着ることになるとは思っていなかったが…。

河童の元を出発する際、にとりは言っていた。

『もしも最後の戦いが始まった時は、私たちもすぐにそっちへ向かうよ。私たちの故郷を解放してくれた恩はこれだけじゃ到底返せないと思うけど…』

だが、にとりたちの出番はないだろう。今回は新子と華扇の2人、そして東の領域で神の友の予言を受けて眠っている神獣の一匹、天狐に協力してもらって、残る最後の東の歌姫を倒すのだから。

天狐に関しては、少し不安が残る。今までの神獣は幸運にも一匹ずつ生き残っていたが、その幸運もここまで続くとは限らない。天狐も長い時の果てに、既に息絶えてしまっているかもしれない。

「止まれー！」

考え事をしているうちに、里の外壁のすぐそばまで来ていたらしい。憲兵の声が聞こえた。

「お前たち何隊だ？」

「私はバン隊よ。今山を下りてここまで来たの」

「バン隊、か。通っていいぞ」

「どうも」

2人は憲兵が開けた門を通って、いよいよ里の中へ踏み込もうとする。当初の予定では、竜の墓場の西の歌姫を倒した後にすぐ一旦里に戻る予定だったが、想定外の里の監視によりそれが出来なかった。だが、今は憲兵の制服を着こみ、憲兵に成りすますことで警部をくぐり、ようやく里に戻る事が出来た。

自宅である鈴奈庵に戻り、両親の安否を確認してから、いよいよ東の歌姫が隠されている博麗神社へと踏み込むのだ。

「あ、ちよつと待て。今工場は立ち入り禁止らしい。熱風のヤツが何か忙しいからな、近付かないほうがいいぞ」

「そうなのか」

熱風：あの背の高い色黒の男だ。夢見の泉の水を飲んで寝た夜、夢に出てきた男……。鈴奈庵に押し入り、仕事をしていた父さんを痛めつけた、あの禍王の手下の男。

拳を固め、怒りそうになるのを我慢しながら、新子は門をくぐった。その時、空気が変わった。家々の開いていた窓はピシヤリと閉じ、外に出ていた住民は素早く家に入った。ドアやカーテンの隙間からこちらを覗いてくる目には、明らかな恐怖、そして憎しみが込められていた。

—また、新たな憲兵が入ってきたぞ

頭上では1羽のみのガルガが旋回しているが、もう偵察に飽きてしまっているのか、幸いにもあまり下は見していない。

行くなら今しかない！

2人は前かがみになり、素早く家々の影に入った。そして速足で、なるべく音を立てないように進み始める。裏路地を通り、すれ違った人が何か行つて来るのも無視して、ただ一心に、鈴奈庵を目指す。

ある裏路地を過ぎた時、畑の横道へと出た。すぐそこには黒い柵があり、柵の中にはリンゴの木が立ち並んでいる。丁度両親から歌姫計画の事を告げられたあの日、帰り道に通った例の果樹園だ。

ということとは、すぐ近く……。

2人は、鈴奈庵の看板が見えるところまでやって来た。自分の鼓動

がはやくなるのが分かる。

店側の戸に手をかけ、音を立てないようにゆっくりと開いた。

店の中は、どんよりとした空気が漂っている。あの夢の中で倒された本棚はもう一度元の位置に並びなおされてはいるが、ほとんどの本はまだ地面に散らばったままだった。電気も付けられておらず、人の気配は感じられない。

嫌な予感がする。不安に駆られた新子は思わず華扇の顔を見た。華扇はゆつくりと、カウンターの奥、自宅へ続くドアを顎で指した。そうだ、まだ自宅の方が残っている。

新子は走ってカウンターの裏側に入り、勢いよくドアを押し開けた。

部屋に入ったとたん、その音を聞いた母親がびくつと大げさに振り向いた。机に突つ伏していたようで、おでこが赤くなっている。その顔は前よりも痩せて、髪はぼさぼさ、目の下には大きなクマが残っている。

「母さん！」

新子は憲兵の帽子を床に投げ捨て、母の元へ駆け寄る。

恐怖と不安がない交ぜになった顔が、今度は驚いた顔に変わる。

「…新子、新子なの…？」

「そうだ、アタシだよ！」

母は新子の胸に飛びつき、その中ですすり泣いた。その様子を、華扇が少し遠くから見ている。

「無事でよかった…帰ってこないから、すごく心配で…」

「ちよつと想定外の事態で遅れただけさ、もう歌姫は3人も倒したんだ。あとは博麗神社の東の歌姫だけ…」

新子はハツとして言葉をとめた。

「…父さんは？父さんはどこだ？」

「お父さんは…あの人は工場に連れていかれたわ…だから早く、早く助けないと…！」

「ああ、分かった…」

新子と華扇は顔を見合わせると、ゆつくりと頷いた。今度は裏口の

玄関から出て、里の中心にある工場へと向かう。華扇の口笛に呼び寄せられた竿打が舞い降り、2人を乗せて低いところを飛ぶ。

崩れた家々の残骸やテント、粗末に作られた小屋が並ぶスラム街だ。そこには人も居なければ憲兵も居ない。代わりに工場の嫌な煙の臭いが漂っている。

いよいよ工場が見えてきた。華扇が門の前に座って雑談をしていた憲兵団に上から襲い掛かり、すぐに叩きのめした。気絶した憲兵を適当に投げ捨て、門を壊して工場に入り込んだ。ドアは新子らが近くと自動で開き、中は白い壁に、色々な絵が額縁に入れて飾られていた。

工場の入り口ホールには、何か巨大な塊が待ち構えていた。二つの首を持つ犬が前足を組んでしゃがみながら、じつとこちらを見据えていた。群青色の毛並みに、強靱な四肢、2つの頭は歯を剥き出して威嚇している。

双頭の犬はすくりと立ち上がると、新子たちを睨みつける。コイツは竜の墓場のニセモノの竜や、鬼人正邪の『仮面の反逆者』のような、邪な魔力の産物だ。

この工場に居る熱風という男は、アタシらを待ち構えていた。今度もアタシらの動きは敵に知られていた。

その時、双頭の犬が2人に飛びかかった。涎をまき散らし、口の端から泡を吹きながら群青色の巨体が迫る。

新子の目の前で、信じられないことが起こった。犬の胴体から、先端が刃物状に尖った黒いスライムのような触手がシウルシウルと伸びたのだ。2人は最初の突進をかわすが、その黒い触手が鞭のように襲い掛かる。

華扇が刃へと変じさせた包帯の腕で触手を斬りおとす。パラパラと地面に落ちた触手がまだのたうち回っている。そして形を変え、もう一度スライムに戻ると犬の身体に再び吸収された。

「何だコイツは……」

「そいつは俺が魔力で作った魔獣だよ」

声が響いた。犬の背後にある階段の上に、背の高い影が立っている。

る。白い髪の色黒の男が、ニヤニヤ笑いながらこちらを見下ろしている。

「俺は熱風。禍王様から授かった名前だが、良く気に入っているよ」
「テメエか…父さんにあんなことをしたのは…！」

「如何にも、本居新子。お前の父は今頃地下牢で死んでいるんじゃないか？」

「クッ…！」

怒りに震える新子が、床を蹴って一気に熱風の元へと向かう。しかし、目の前に立ちふさがった双頭の犬が牙を剥き、新子に噛みつきかけた。肩の骨に牙が当たり、ガリガリという音が体内に響く。

犬の巨大な顔を殴るが、犬は苛つくだけで特に気にする様子はない。噛みついたまま新子の身体を振り回し、床に叩きつけた。

「新子！」

華扇が犬から新子を解放しようと、犬の頭に飛びかかる。犬は前足を振り上げ、華扇の攻撃から身を守った。

二つの首がカタカタと震え、涎をまき散らす。

華扇は心の中で迷っていた。この勝負、勝ち目はないと。私が全力を出したとて、あの熱風という男には敵わない。あの男は見た目こそ若い、邪悪さにおいてはかなり老成している。身から漏れだす魔力も並ならぬほど禍々しい。

なので、どうしようか…。さつきは、里の上空を見張っているガールガは1羽しかいなかった。ならば、このタイミングで、あの名を呼んでもいいだろうか。

双頭の犬と戦う新子を見て、口を開く。

そうだ、呼ぶしかない。そうしないと、あの新子が死ぬことになる。

—来てください、ロック！新子が危ないんです、お願いします…助けてください！

華扇はそう心の中で念じた。

「よし…」

呼吸を整え、再び犬へと向かって行く。

「ドラゴンズグロウル!!」

華扇の包帯の腕が、龍のような気迫と共に敵へと伸びる。そして包帯が竜巻のように回転することにより、龍が撃ちだされた。龍の顔が犬の顔面にぶち当たり、犬の身体が横に吹き飛ぶ。

犬は倒れ込み、噛みついてきた新子の身体を空中へと投げ出した。華扇が危うくそれをキャッチし、再び向き直る。

起き上がった犬は、身震いして後ずさる。怒りに燃える4つの目が、じつと華扇を睨みつけた。

工場の玄関ホールで戦いが繰り広げられている中、その工場の地下牢では、ある動きが有った。

地下牢では、憲兵団に捕まった人々が閉じ込められている。ここに居るほとんどが理不尽な理由で憲兵団に捕まり、連行されてきた人々だ。

その牢の一つに、新子の父親の姿が有った。虚ろな目で、食事にも手を付けずにじつと天井を見ている。

その時、見張りの憲兵が立ち上がった。

「な、何だお前たちは…!」

憲兵は腰から電気棒を抜くと、それを手にして奥へ走っていった。何事だ、と思つて新子の父親もそちらへ目を向ける。まさか、新子が来たのか? いや、それは無い。あの子が熱風を突破できるとは思えない。だと、すれば、何が有ったんだ…?

何かを殴る音と、むき苦しい怒声、そして憲兵のうめき声が響いた。他の牢に押し込められていた人たちも、何だ何だと騒ぎ始め、牢の外を何とか見ようと鉄格子に顔を押し付ける。

気を失った憲兵を引きずったガラの悪い集団が続々と押し入ってきた。そしてナイフやニッパなどを使って無理やり牢の南京錠を破壊しようとして取り掛かる。

「あんた方…ここへ入ってきたのか、どうやって?」

新子の父親が声をかける。

「アナタ、新子の親父さんだろ?」

赤いモヒカンの大男が、南京錠を弄りながらそう言ってきた。

「あ、ああ……もしかしてツムグくんか……？随分変わったねえ……」

「そういう話は後にしましょう。聞いてください、ついに帰って来たんだよ、本居新子がよ……反逆の引き金がよ!!」

ついに檻の錠が壊れ、牢が開けられた。他の檻の人達も牢から出た。何が起きたのか、これがどういことなのか理解できずに、ただポカンとしている。

「俺がゴロツキとかチンピラを集めたんだ。全員マガノ国へのうつぶん晴らしに来てくれたんだぜ」

ニット帽をかぶった男が牢から出た人たちに自慢げに話しているのを、新子の父親は聞いた。

なるほど、このガラの悪い連中は、いくら街で威張っていても、憲兵団には手が出せない。それも当然、逆らえばすぐに殺されてしまうのだから。

だから、この騒ぎを利用して、日頃の恨みを思いきりぶつけているのだ。だがそれも、ただの自己満足ではない。こうして正義の為に勇気を振り絞り、立ち上がってくれた。

「よし、皆は俺達が通ってきた地下通路から外へ出るんだ！誰かが来たら俺達が叩きのめす！」

「なあツムグくん」

「あ、親父さんもはやく皆について……」

「私は行かなくちゃいけないところがあるんだ……新子に、絶対伝えなければいけないことがある！」

そうだ、私は間違っていたのだ。それを伝えなければ、幻想郷は終わってしまう。早く新子に会わなければ!!

第20話 「哀しみに唾をかける」

鈴奈庵の娘、本居新子は両親から、禍王の“四人の歌姫計画”を知らされる。新子は仲間の茨木華扇と共に、歌姫計画を打ち破るために旅立った。

南、西、北の歌姫を倒し、里へと帰還した新子は、父親が連れ去られたという工場へ殴りこんでいったのだった。

第20話 「哀しみに唾をかける」

犬の顔が薄気味悪くにやりと笑った。次の瞬間、新子の心臓は飛び出そうになった。目の前の群青色の身体が2倍に膨れ上がり、さざ波立つスライムのようなになったのだ。気が付けば、新子はスライムの下敷きになっていた。

ブルブルと震えるねとねとの巨体に包まれて、息もできない。何も見えない。触手にしめつけられ、手足を絡めとられる。新子の身体に激痛が走った。死神の手に握りつぶされるようだ。

しかし、もつとおそろしいのは、音だった。ゼリーののように冷たい体の奥へ奥へと引き込まれるたびに、ピチャピチャ、ズズツつと身の毛もよだつ音が響く。あまりの不気味さに吐きそうになるが、悲鳴を上げようにもスライムの身体で口がふさがれている。

ゴウゴウと耳鳴りがする。胸が空気を求めてキリキリと痛む。閉じた瞼の裏で思い出が走馬灯のように浮かんでは赤い空に消える。

その時、まるで夢の中の出来事かのように、真紅の竜のささやきが新子の頭にこだました。

―諦めるのはまだ早い、本居新子に茨木華扇、私が居るぞ―

その瞬間、新子の体が大きく揺さぶられた。スライムがびくつと震えたようだ。続いて聞こえる、遠い雷鳴のような咆哮。あの声は！

スライムがまた震えた。ジュージュー、パチパチと脂身が燃えるような音がしたかと思うと、新子のかたい階段に放り出された。冷たいゼリー状の肉が身体からスルスルと離れていく。鼻と口が解放され、

手足が自由になった。

肺にどつと空気が流れ込み、新子は激しくせき込んだ。空気が熱く、焦げ臭い。吸うと胸が痛い、やつと息ができる。

新子はわき腹を下にして倒れたまま、眼を開けた。辺りに黒煙が立ち込め、吹き付ける強風に体が地面に押し付けられる。その時真つ赤な炎が上がり、雷鳴のような咆哮と共に熱波が吹きつけた。

「な、何事だ!？」

熱風という男の声が響いた。そうか、この階段は玄関ホールから二階へと続く、この双頭の犬が塞いでいた階段だ。ということは、このすぐ近くに熱風が居る!

だが、憎き敵が近くにいるというのに、新子はただ横たわっているだけだ。身体に付着していた細かいスライムが黒い筋となつて階段の下に居る犬と合体していく。新子はやつとのこと仰向けになり、天井を見た。煙の向こうに、赤く光るものが見える。この玄関ホールの丸い天井に穴が空き、そこから竜が首を突っ込んで炎を吐いていた。炎は膨れている犬のスライムの体を焦がし、蒸発させていく。犬はスライムから飛び出した2つの首を振り回し、必死に吠えている。

新子の頭に、再び竜の声が響いた。

「この醜い二面の犬は何だ?長く生きてきたが、こんなのは見たことが無い――」

竜は絶えず炎を吐いているが、真紅の目だけは新子を見つめていた。

新子は応えようとしたが、声が出ない。心で竜に話しかける。

「アイツは、すぐそこに居る男が作った魔獣だ――」

竜の目が、今度は新子の後ろの方へと向いた。熱風を見たのだ。

「竜、だと…大昔にガルルガが滅ぼしたはず…!」

「浅はかな、邪悪の男よ。私は友の言葉でここに来た。さもなければ、わざわざ里に降り立つことはない。ここは嫌いだ、空気は不味いし、私を見た群衆の声がやかましい。だが、それが友の呼びかけに答えない理由になろうか!？」

「黙れ!」

熱風は左手を天井から飛び出す竜の顔へかざし、紫色の魔力の波動を放った。波動が竜の額に直撃し、うめき声をあげる。一瞬、炎が弱まり、その隙について犬はその場から離れ、炎から脱した。

だが、その時、急に外が騒がしくなった。突然竜が目を見開き、首を天井の穴から抜いた。真紅の体と壁の隙間に見えるのは、紫色の甲殻、鋭いクチバシ、大きな足の指。ガルルガだ。

ガルルガが人間の手のように開いた足で、竜の首を掴んで工場の壁から引き剥がそうとしている。竜が細い炎をガルルガに向かって吐き、ガルルガが壊れた金管楽器のような金切り声を上げる。やがて竜は天井から飛び立ち、空の彼方へと消えていく。ガルルガもそれを追いかけるように空から消えた。

「竜が生きていただと…禍王様に報告しなければ…。最悪だ、これ以上失態をすれば、何といわれるか…」

その場で頭を抱える熱風。だが後ろにふと誰かの気配を感じ、ゆっくりと振り向いた。

「よオ…ここまで…来てやったぜ…」

「…貴様」

双頭の犬と戦い続けている華扇が、チラリと新子たちを見る。新子が夢見の泉の水で見たという夢の事は既に聞いていた。そこに出てきた背の高い男、ついに父親を痛めつけたその男の近くまでやってきた。

内に秘められたエネルギーは2人ともどっこいどっこい、ならば勝敗を分けるのは各々の戦いの技量だ。

だが新子は右半身を犬に噛みつかれ、その傷が深く残り、血が滴っている。

「テメエを、蹴りてえなあ」

「蹴るがいい。瞬時にお前の足を叩き割ってやる」

熱風の両手に紫色のオーラが纏われる。新子、貴女はどうするつもりなの…？

そして、新子の足が勢いよく熱風に向けて振り上げられた。宣言した通り、熱風は両腕を前にかざし足をへし折るつもりだ。

「馬鹿め！…!?!」

だが、熱風が攻撃しようとしたその時、新子の蹴りが寸前で止まった。熱風の動きがほんの一瞬停止する。そして、新子はこの一瞬を逃さなかった。

刹那、一撃。熱風の顔面に新子のパンチが命中したのだ。何が起こったのか分からない、とでも言うように熱風はよろよろと後ろへ後ずさる。

「そうか…!」

華扇は思った。先に蹴ると言つて、下半身に注意を集めてからパンチか！

更に繰り出されるパンチも当たる寸でのところで止まり、次は熱風の顎が蹴り上げられる。今度も熱風は対応しきれずにもろに喰らつてしまったようだ。マガノ国には、あそこまで喧嘩慣れしてるやつは居なかったか…。

さらにダメ押しと言わんばかりに新子のパンチが熱風の腹にめり込んだ。

「小癩な小娘が…!俺がしてやった恩を忘れたのか?」

「…何だど?」

熱風の腕が素早く伸び、新子の喉元を掴んだ。

と、その時だった。2階の奥の通路からドカドカと何者かが走る足音が聞こえる。そして飛び込んできたのは、大きな影と細い影。2つの影は熱風の体に覆いかぶさり、両手足を掴んだ。熱風の腕が新子の首から離れ、新子は後ろへ倒れ込んだ。

「父さん!それに、ツムグ…!?!なんでお前が…!」

「新子!お前に言うことがある!私は気付いてしまったのだ…!」

熱風は2人を振りほどこうともがいている。

『『四人の歌姫』…!魔法使い…!新子…!いますぐ止めろ…!』

必死に新子に何かを叫びかけるが、その時、何かが階段に当たり、階段が崩れ落ちた。双頭の犬が華扇に噛みついたまま階段に体当たりをしたのだ。崩れる音にかき消され、声が良く聞こえない。

「え、何だつて…!?!」

「線…地図…！邪悪…中心―」

ツムグは熱風の顔面を大きな拳で殴りつけた。熱風の目の下が切れ、血が流れる。

「いざかしいー」

熱風は大柄なツムグをいとも簡単にはね飛ばし、壁へと激突させた。そしてすぐに起き上がると、新子の父親の首を掴み、物凄い力で締め上げる。そして胸元に魔力を纏わせた手を近づけ、斬りつけた。鮮血が飛び、床が赤く塗れる。

「な…あ…！」

新子がうめき声をあげる。そして、ツムグと同じように、熱風は新子の父親を吹っ飛ばし、壁へと激突させた。

一瞬の出来事だった。華扇と戦っていた双頭の犬はスライムに変化してくしやつと潰れ、床や壁の隙間にスルスルと入り込み、消えてしまった。それと同時に、熱風も影のようにその場から消えた。

「…あ」

新子はおぼつかない足取りで父親の元へとかけより、そつと上体を膝の上に置いて肩を掴んだ。なんて軽いんだろう…。

父親は目を開けなかった。脈もない。即死だったのだ。熱風に掴まれた首は氷のように冷たく、真つ赤な痣になっていた。衣服ごと斬られた胸は骨まで傷つけられ、血が絶えず流れ続けている。

新子は泣きたくても泣けない、胸が張り裂けそうな思いをしながら、父親の亡骸を抱きかかえて自宅まで運んだ。父の部屋の布団の上に寝かせてやり、そつと毛布をかける。母親が亡骸の前にひざまづき、手を握って泣いている。新子はこの場に居る事が耐えられなくなり、わざと上を向きながら外へ出た。

「お父さんが死んでしまうなんて…その、何と声を掛ければいいのか…」

「なあに、イバラ…気にしないでいいさ」

新子は地面にぺつと唾を吐いた。

「すぐに博麗神社へ行こう。絶対に、何と少しでも歌姫は私が潰す」

横目で自分を見ながらそう言う新子の姿は、華扇には何か…別の存在のように感じた。恐ろしく熱い、怒りと哀しみに満ちた灼熱の気。それを纏う姿はまるで…鬼？

それから、2人は里の東へと向かった。途中で襲い掛かってくる憲兵团も、敵では無かった。先頭に行く新子は向かってくる憲兵を片っ端から殴り、振り回しては地面に叩きつけ、簡単にねじ伏せていく。その光景も、後ろからついていく華扇には、やはり今までの新子とは何かが違う、別人のように見えた。

いよいよ里の最東端まで来たようだ。目前にそびえる高い丘の上に、深い霧と木々に囲まれた博麗神社が見える。華扇にとっては、思えば深い場所だ。丘に出来た獣道を、2人はずんずんと登っていく。

新子はふと思った。そう言えば、東の領域に眠っているという神獣の一匹、天狐はどこだろう？もうとつくに東の領域には入っているのに、一向に現れる気配が無い。試しに呼んでみるか。

—天狐、お前はどこに居るんだ？

—私はここに居ります

綺麗で透き通るような声が聞こえた。新子は驚いて思わず飛び上がりそうになった。心の中でどこに居るかもわからない天狐に話しかけたら、即答で返事が返ってきたのだ。まるで、新子たちが来るのを今か今かと待っていたかのように。

正直、今すぐにでも東の歌姫の在り処を探し出してやりたいが、天狐は自分が来るのを待っている、少し捜してやろう。

新子は獣道から外れ、声が出た方へ走り出した。暗い林の中をくぐるように駆けていく。

「新子？」

華扇も走り出した新子の後をついていった。頭上の木から枯れた蔦がぶら下がり、2人の侵攻の邪魔してくる。新子は乱暴に蔦を千切り、どんとんと道を作っていく。不意に華扇が足を止めた。一か所だけ、蔦が密集しているところがある。

新子も蔦が酷く絡まっている場所の前で止まる。蔦の中に、何か

横たわっている。2人は絡まってドーム状になっている。鳶を退けようと斬り払っていく。華扇が変幻自在の腕で突風を吹かすと、斬った鳶が吹き飛び、隠れていたものが姿を現した。

枯れ葉と土に土にうずもれるように横たわっているのは、巨大な動物のミイラ。大きな頭部に鋭い牙。桁はずれに巨大な肋骨は高い柵のようだ。伸ばした前足の長い骨に、夢でも見るかのごとく頭をもたせ掛け、毛の薄くなった4本の長い尾で身体を優しく包み込んでいく。身体には無数の抉られたような傷跡が有り、所々骨がむき出しになっっていた。

抵抗することもできず、眠りについたこの場所で死んでしまったんだ…。

新子の喉はうずいた。そばに膝まずくと、肉が干からびてむき出しになった肋骨にそつと触れる。見つけた、東の神獣、天狐。

「眠っている間に、ガルルガに殺されたんだわ…」

2000年前、禍王に東の歌姫の配置を命じられたガルルガは、無事に博麗神社へと歌姫を隠す事が出来た。任務を全うし、いよいよ帰ろうと飛び立った時、目ざとく眼下に何かがあるのを見つけたんだ。そこには、魔法で眠る天狐の姿が。歌姫設置と共に神獣の絶滅も命じられていたガルルガは、ためらうことなくその嘴を天狐へ突き刺したのだろう。

新子は救い難い悲しみに襲われた。二度と目覚めることはないとも知らず、「神の友」の願いに応じて深い眠りへとついたこの天狐の事を思うと、胸が痛む。

きつと、さつき新子の呼びかけに答えてくれたのも、はやく自分を見つけてほしかったんだ。その一心で、返事をくれたに違いない。

でも、今は悲しみに暮れている場合ではない。最悪な事が続いても、決して負ける訳にはいかない。

華扇はまず、新子への心配で頭がいっぱいだった。今まで、新子は人前では泣きもしない強い女の子だった。小さいころの遊び相手は同じ年頃の男の子で、学校に入ってからはずっと一人だった。そして丁度2か月ほど前、ようやくの18歳の誕生日の日にその新子が突

然、両親と別れ、旅に出た。旅の間は私が親の代わりになる覚悟で接してきたが、一度里に帰ってきて親の顔を見た後では、新子の緊張の糸がプツンと切れてしまっても不思議ではない。

私は怖い、この度重なる出来事の影響で心を壊し、何か別のモノへ変貌してしまうのではないかと。

新子と華扇は、いたましい天狐の以外を迂回すると、ゆっくりと元来た道に戻り始めた。やがてさっきの獣道へと戻り、ひたすらに丘の上を目指して足を進める。進むにつれ、何かの音が聞こえてくる。新子は後ろを振り向いて華扇の方を見るが、彼女には何も聞こえていないらしい。この声は歌姫の声ではない、何か別の女の人の声だ。

目の前に、長い階段が現れた。階段の日陰になっている部分には緑色の苔が生えている。2人は黒い階段をダツシユで登っていく。気が付いたら、階段を昇りきっていたらしい。赤い鳥居が少し先にそびえており、その鳥居の周囲には真っ白い霧がかかっていた。これがいつも見ていた、博麗神社を取り囲う深い霧だ。

鳥居の向こうは、何故か光を発しているようで、良く見えない。そして、邪悪もだ。東の歌姫の魔力が鳥居の向こうから風のように吹きつけて来る。

2人は鳥居へ向けて、足を踏み出した。

第21話 「博麗神社」

鈴奈庵の娘、本居新子は両親から、禍王の“四人の歌姫計画”を知らされる。新子は仲間の茨木華扇と共に、歌姫計画を打ち破るために旅立った。

父親と東の神獣、天狐の死を悲しむ暇は無い。新子はどうしようもない怒りを胸に秘めながら、ついに博麗神社へとたどり着いた。

第21話 「博麗神社」

新子は鳥居をくぐった瞬間、その光景に目を疑った。

青く澄み渡った空、周囲に響くセミの声。後ろを振り向くと、幻想郷の景色が一望できた。ここから左手に見える魔法の森はまるで緑色の大きな海に見え、そこには砂漠なんて見当たらない。向かって右手の方角には、遠くに小さく妖怪の山が見える。これも深い緑に覆われ、木が枯れて岩山がむき出しになっているところも無ければ、醜く禿げた斜面もない。

神社の拝殿の前では、背中に羽のついた小さな女の子たちがはしやぎまわり、大きな木の下では色の薄い着物を着た女の人と紫色の服を着た女の人が談笑している。

そして、拝殿の向こうにある縁側では、自分と同年くらいの女の子たちが座り、お茶を飲んでいた。

これは昔の風景だ。何百年も昔、まだ平和の一途を歩んでいたころの幻想郷の姿。きつと、この風景の通りに、この博麗神社は賑やかだったに違いない。

ふと視線をずらすと、石畳の床の上に散らばった落ち葉を箒で掃いている少女が居た。一人で黙々と掃き掃除をしていた少女は、新子に気付いたのか、手をとめた。そしてゆっくりと顔をこちらへ向け、次に巫女服の袖を揺らしながら体をくるりと向ける。

そしてにこやかな笑顔で、新子にこう囁きかけた。

—博麗神社へようこそ

次に聞こえてきたのは、あの少女の囁き声。奇妙な言葉が、何度も何度も繰り返される。

—ロックワブルアーゴルカムナセトレーナ：

—ロックワブルアーゴルカムナセトレーナ：

竜のロックについて何か言っているようだ。だが、新子には何て言っているのかわからない。きっと、これは外国の言葉だろう。

「どうしたの？」

後ろから肩を揺さぶられて、新子はハッと気が付いた。どうやら自分には幻を見ていたようだ。

目の前の地面は背の高い雑草が伸び放題で、死の空気に満ちていた。そして博麗神社も、壁は薄汚れてひびが入り、壁の下から屋根のてっぺんまで蔦で覆われていた。

後ろを振り向いて、今来た鳥居の向こう側を見る。光を発していたように見えたのは、あの幻か……。さっきの幻の中と同じように、幻想郷の景色を一望しようとする。魔法の森にはぽっかりと丸い砂漠があり、妖怪の山は禿げてところどころ岩肌がむき出しになっていた。これが、今の幻想郷の姿。さっきの幻の面影はほとんどない。これこそが、現実。

「…見えなかったのか？」

「？…何が？」

華扇には何も見えなかったらしい。

「あの霧…。どうやら霧の外からだ、神社は綺麗に保たれているように見えるらしいわね。誰かが魔力で撒いたんだわ」

確かに、里から見える博麗神社はこんな有様ではなかった。まるで人が居て、誰かがきちんと管理でもしているような状態が保たれていた。

「でも何の為に？」

「…きつと、博麗神社の巫女への信頼を落とすため、とか？もともと神社への道は、昔から妖怪がけっこう出るから神社へ行く人自体が少なかつただけ、それを利用しようとしたんだわ。里から神社を見た

人に『自分たちがこんなに苦しい生活を強いられているのに、博麗の巫女は何もせずに神社に籠っている』なんて思わせればいいわけよ」
「神社に直接来られなければいいのか」

2人は、神社の本殿へと近づいた。ここだ、ここから邪悪な力が漏れ出しているのが分かる。ガラスが粉々に砕けている戸を開け、真っ暗な内部へと足を踏み入れる。中はほこりっぽく、物は散らかり、百年近くは誰も足を踏み入れていない事は確かだった。

暗い部屋を、足元に気を付けながら歩いていると、ふいにコンクリートの壁に当たった。変だ、この神社は木造だったのに、ここだけコンクリートの壁になっているだなんて。まるで、何かを隠しているような…。

「ここに歌姫が…」

一目でわかった。いや、見なくても分かる。敏感に感じ取れたのは、東の歌姫の甘く美しい歌声。

大地の荒廃と畑の不作に悩まされて、やつとの思いでこの神社にたどり着き、ここで神に拝んだ者も、博麗の巫女という希望にすがってここまで来た者も、ここで絶望を与えられたんだ。この中にある、東の歌姫によって。

今すぐにこの歌姫の歌声を悲鳴に変えてやりたい。他の3人のように、みつともないうめき声で命乞いをして見ろ。お前たちの所為で、父さんは死んだんだ。だから…

「退いていて」

華扇が数歩後ろへ下がった。包帯でおおわれた右腕を後ろへ引き、腕をドリルの形へ変化させる。

新子はよろよろと横へ退いた。

「上品なやり方じゃないけど、絡まった紐は解こうとするより切ってしまった方が簡単な場合もあるでしょ？」

ドリルの先端を壁へと向けて構えた。そして、華扇は勢いよく体を前に踏み込み、壁を殴った。

ガキン！という音の後、壁を削ろうとする耳障りな音を立てる。振動が床を伝い、新子の足まで響く。しかし、その直後、壁から発せら

れた謎の波動によって、華扇のドリルははじき返されてしまった。

「いたっ……どうやら不思議な魔力が壁を守っているらしいわ」

華扇は新子に話しかけた。

「お願い、力を貸して」

新子は華扇の肩に手を置き、神獣に力を貸すときのように、湧いてくる力を送り込んだ。壁にはちよびつとの穴と亀裂が入り、そこから感じる歌姫の魔力に反応して、新子の力も少しずつ高まってきている。

「これなら……！」

もう一度、ドリルを壁へぶつけた。物凄い音と共に、またドリルが弾かれた。石がパラパラと崩れ落ちる音がする。

うまくいったか？新子はうずうずして、華扇の後ろから首を伸ばした。壁はヒビだらけ、中心のあたりに小さなギザギザした穴が空いている。

「さあ、見えて来たわ！」

ドリルが真っすぐ亀裂に突っ込んだ。大きなコンクリートの破片が音を立てて地面に崩れ落ちる。

「よし、もう一度……」

2人はまた突進した。ガシャーン、という今までにない音が響く。うしろへ下がってみると、足元にはコンクリートの破片が山となり、あたりにはもうもうと粉塵が立ち込めている。2人が壊した壁の面はほとんど跡形もなく、代わりに真っ黒な穴が、大きな口を開けていた。

華扇が膝に手を付いて息を切らしている。新子の両手もぐっしよりに濡れていた。髪から滴る汗が目にも染みる。服の袖で額をぬぐった時、手が震えているのに気付いた。

漆黒の闇をたたえた穴が、墓穴のように目の前に口を開けている。奥に何があるのかは、全く見えない。

華扇が新子の手に、火をつけたロウソクを押しつけた。受け取って、穴にかがみこむ。ロウソクの炎が狂ったように燃えた。息をつめてロウソクを穴に差し入れた。

コンクリートの破片が散らばっているほかは、穴の中は空っぽだった。

「何もねえぞ」

新子の声がコンクリートの壁に不気味にこだまする。

ロウソクが震える新子の手から滑り落ち、コロコロと2回転して何も無い空間の床に転がった。揺れる炎が、がれきの下に横たわる灰色の床を照らし出す。

新子はハツとなった。小さくかがんで、今にも消えそうなロウソクを取り、床に散らばす破片を押しつける。

「これを見る…」

新子は小声で言った。華扇が新子の隣にひざまずいた。揺れる光の中、2人は床にはめこまれた石碑に刻まれた文字を読んだ。文字はついさつき刻まれたばかりのようにはつきり読める。

“負けて勝つのか 勝って負けるか

鈴奈庵のアバズレ女よ お前が選べ

逃げ出すがいい さもなくば

お前も幻想郷も 運の尽き”

新子は怒りに真っ赤になった。突然襲ってきた吐き気がおさまるのを、眼を閉じてじっと待つ。

この文の問題は、この禍王の言葉だ。人を嘲笑うような言葉が、アタシに、アタシだけに向けられていることだ。

「今までの碑文とは違うわね。西の歌姫の時は、竜の墓場の恐ろしさを説いていて、北の歌姫の時は鬼人正邪が何のあてもなく書いたものだった。でもこれは、一人に向けての言葉よ」

「そうだ！本居新子、お前に向けての言葉だ！」

背後から声が響いた。2人が驚いて振り向くと、拝殿の外から入り込んできた日の光を背に、両手を広げた男が立っていた。色黒の肌に白髪、新子よりも背の高い、黒服を纏った姿。にやりと歪んだ口元と、鋭い目が光の中に浮かび上がる。

2人は身構えた。熱風は両腕を広げたまま、目線を新子から後ろの壊れた壁へと移し、最後に華扇を見た。そして次の瞬間、恐ろしい言

葉が発せられた。

「ああ、さつきから誰かと思っていたら…。『茨歌仙』さんではありませんか…東の歌姫の番人である本居新子の護衛、お疲れさまでした」

場の空気が凍った。

「あ…え？」

新子は胸と頭が熱くなるのを感じた。心臓が早鐘のように動いている。思わず華扇の方を見た。華扇は表情一つ変えずに熱風を見ている。

「どうかしたか、東の番人？お前がいつまでたっても番人としての自覚を持たないから、茨歌仙と共に他の歌姫と番人を見させて番人としての能力を磨かせようとしていたのが、そんなに意外だったかな？」

嘘だろ？

「行く先行く先で、居場所を覚えてくれて感謝するよ茨歌仙さん…」

もう一度華扇の方を見る。

「違うわ、嘘を信じないで！」

新子の肩を掴み、体を揺さぶっている。だが、その華扇の必死の呼びかけも、もはや新子には届いてはいなかった。

確かに、いつも居場所が敵に知られていたのも、熱風の言う通りに華扇が敵と繋がっていたと考えれば辻褃が合う。それに、4つの歌姫の場所を調べ上げたのは華扇だった。これも元から知っていたとすれば…？

だが、本当に…？華扇は今までアタシと一緒に戦ってきた。マガノ国にとって歌姫が重要であるならば、アタシに協力など絶対にしないはず。ていうか歌姫の事なんて教えないはず。

「おい…アタシが東の歌姫の番人ってどういうことだ…寝言は寝てから言え！」

新子は熱風に向けて殴りかかる。だが、あっけなく受け流され、かすりもしない。

「寝言だって？ふふふ、違うな。お前は正真正銘東の歌姫の番人なんだよ。例えば、お前のその能力」

熱風の指が新子に向けられた。

「いつもそうだったろう、お前が歌姫と戦う時は、歌姫に近づけば近づくほど力が増す。それは番人としての能力だったんだぜ？歌姫を守る存在なんだから、歌姫から力を貰うのは当然の事だろう？違うか？」

“ お前のその能力、知ってから後悔することになるぞ”

“ 何故お前は邪悪を前にして力が増す？何故お前は、私のような歌姫の番人のように、歌姫に近づけば近づくほど、強くなる？”

鬼人正邪、その通りだ、知ってから後悔しているよ…。歌姫を倒す切り札だと思っていた力が、本当は歌姫を守るための力だったなんて。

「新子、アイツは混乱を誘おうとしているのよ？耳を貸しちゃダメ！」

—無駄だよ、茨歌仙

「ツ…!?頭の中に直接…！」

—その力は、使う者が一番よく知っている。だから本能的に察したのだ、自分が本当の番人だったと

「アンタは…アンタは一体、何者なの…？」

—初代東の歌姫の番人だよ。200年近く番人をやって来たが、生憎俺は人間だ。やはり限界というものがやってくる…そこで、俺は素質のある別の人間に番人の力を移し、ソイツに番人の座を譲ろうとした。そして見つけたのが…

「新子だったって訳ね…。私もてっきり、新子が自分で覚醒させた力とばかり思っていたけど…」

—禍王様は何でも計算づくだったのだ。新子を歌姫討伐の旅に向かせ、そこで死んでくれればもつと素質ある者に番人を譲れる。お前が歌姫の在り処を調べ上げたのも計算の内だったようだぞ、お前が居れば、こうして上手く新子の心に闇が付け入る隙を作れるからな。もし新子が死ななければ、いずれこの東の歌姫の場所にたどり着いた時、こうなるという計算もあった

「なるほどな」

冷めきった声が2人の耳に届いた。

「思い出したぜ、熱風…お前の事をな。ずっと昔の事だけだよ…」

「そうか。だったら、俺と一緒に来るのだ。共に邪悪の濁流に身をゆだね…」

「まあだ話は終わってねえんだよコノヤロウ!!…誰が、父さんを殺した相手と一緒に行くって?勘違いするなよ、アタシの生き方はアタシが決める!アタシはこの能力を何かのために使うつもりもねえ、今はタダ、この力でお前たちを倒す!」

「まさか…」

「ああ、どっちが本当か分からねえ、絡まった糸は解くよりもぶった切った方が早い…そうだろ、華扇?」

「だから、ソイツの言ってることは…」

「うるせえ!いつつもいつもくどくどと口うるさく言いやがって!!もうお前なんて知らねえよ!」

「ええ、そうね…もう、そんな奴の言い分を真に受ける新子なんて、もう知らない」

「…あばよ」

ああ、行ってしまった…。

華扇の心に、大きな穴が空いた。

新子は再び熱風へと向かった。腕を振り下ろし、一気に熱風の胸を貫いた。どうだ、とほくそ笑みながら熱風を見るが、不思議なことに傷口からは一滴も血が出ていない。

「禍王様は俺に不死身の身体を与えてくださった…お前ごときに俺が倒せるか!」

熱風は自身に刺さった腕を引き抜き、そのまま新子を投げ飛ばした。胸の傷は瞬く間にふさがり、傷跡も残らない。

「本当に不死身なのかよ…」

「そうだ、お前も来れば、同じような不死身を手に入れることができるぞ…」

「ふざけた事をおお…!!」

新子の身体から、邪気がプシューと噴き出した。それを見た熱風は思った。あともうひと押し…。

だがその時、熱風の顔面に新子の拳がぶち当たった。上体が後ろへ反れ、そのまま床へ叩きつけられる。

「何…!？」

「そんなモンかア…熱風!!」

さらに拳を何度も何度も叩きつけられ、その身体は原形をとどめないほどグチャグチャに潰されていた。

「馬鹿な…お前如きが、それまでのパワーを…。ならば!」

熱風は回復しかけた顔で、例の石碑に目を移した。そして右手を掲げると、床にはまっていた石碑が粉々に砕け散った。目もくらむばかりの白い閃光が炸裂した。

華扇が目を押さええて後ずさる。穴がぼつかりと口を開けた。邪悪な力がドロドロと、悪臭のように湧き上がってくる。新子はがつくりと膝をつき、目を見張った。涙があふれるが、目を逸らすことができない。

床下の暗闇の奥で、何かがきらりと光った。宝石のように美しいものが新子を招いている。

『東の歌姫』だ。

第22話 「女はそれを我慢できない」

鈴奈庵の娘、本居新子は両親から、禍王の“四人の歌姫計画”を知らされる。新子は仲間の茨木華扇と共に、歌姫計画を打ち破るために旅立った。

新子の前に現れた熱風に乗せられて、新子は怒りを爆発させる。そして、ついに姿を現した東の歌姫に手を伸ばすのだった…。

第22話 「女はそれを我慢できない」

「うあーん…うあーん」

遠い記憶。思い出した…あの時、アタシは友達と遊んでいるうちに、里の真ん中の工場の方まで来てしまったんだ。帰り道も分からない、見知らぬ荒れ果てた街。アタシは怖くなって、泥で汚れたボールを手にずっと泣きながら歩いていった。

日が落ち、空が深い青色に染まる。人っ子一人居ない通りで、アタシは話しかけられた。暗かったのと、その男の背が異様に高かったから顔は見えなかったが、アタシに手を差し伸べた。

「おにいちゃん、だれ？」

「私は魔法使いだよ」

男はそう言った。

「君、名前はなんて言うのかな？」

「…アタシ」

アタシが名前を言うと、男はアタシの額に手を置いた。気が付くと、空はもうすっかり真っ黒になり、星が輝き始めていた。

まるで何十分の間、意識が無かったかのようだ。アタシは男に手を引かれ、砂利の道を歩いていった。

家へ向かっている。そう思うと、安心感がどっと湧いてきて、もう一度わんわんと泣いた。鈴奈庵の看板が見える所までくる

と、男は手を離し、夜の闇へと消えた。

「新子…どこに行っていたの？」

鈴奈庵の入り口から母さんが出てきた。アタシを抱きかかえ、家へと入っていく。

思えば、このころだったかな。この能力を使えるようになったのは。

新子は穴の中にじっと目を凝らし、光る物体を見つめていた。今ならハッキリと見える。それは大きな宝石だった。真っ赤な、キラキラと光る美しい石。今までの歌姫とは違う、本当にきれいな外見だ。

宝石は新子に歌いかけていた。歌声は美しく、生き生きとして、恐ろしい力に満ちていた。あの宝石に触れる事が出来たら…、持ち出して自分のものにする事ができたら…。アタシは何だってできる。世界はアタシの思うがままになる。

新子は憑りつかれたように宝石を見つめた。こんなにも美しい偉大な歌姫を退治しようとしていたなんて、アタシはどうかしていた。いや、そうだ…これが有れば、アタシは絶対的な力を得る。これが有れば、アイツだって、簡単にひき肉に出来る。

ならば…

新子は迷わず、宝石に手を触れた。その瞬間、宝石がぐにやりと伸び、そのまま新子を包み込んだ。宝石は新子を取り込み、大きく膨れ上がり、やがて形をとり始める。

薄い青色の体に、竜のような両足。そして巨大で筋肉質な上半身。両腕は直立した状態で地に付くほど長く、腰よりも太く、拳は顔よりも大きい。肩からは太い棘が伸びている。

そして分厚い胸部の真ん中に根を張るようにはめ込まれている東の歌姫は、この新子に力を与えながら、邪悪を絶えず放ち続けていた。

「ギイイイ…！」

丸っこく厳つい頭部には牙が並び、両目を丸く見開いた顔は怒りと悲しみに歪んでいた。

これが、華扇が恐れていたことだ。新子の心の隙間に、歌姫の魔力が入り込んでしまった。

「ついに発現させたか…！」

熱風が立ち上がる。もう潰された体は元通りになっており、服に付いたほこりをはらっている。

「お前の能力は、敵が内包する妖気とか魔力とか邪気の度合いを測り、自身の霊力をそれに比例させて上昇させる能力だ。上昇した霊力は敵との戦闘を終えるなどすると元に戻るが、自身と最も相性の良い魔力放出源……つまり新子にとっては東の歌姫だな、それから力を得た場合は、霊力に変換されずに魔力としてそのまま形を持つ。それがお前の能力の真骨頂なのだ！」

「ギニニニ……！」

熱風は少し中に浮かび上がると、フワフワと後ろへ下がりはじめ。おぼつかない歩き方でゆっくりとそれを追う。据わらない首が歩くのに合わせてカクカクと揺れ、額から生えた2本の角が不気味に輝く。

そして熱風は拝殿から出ると、もつと高く飛び上がった。

「ガアア!!」

新子はそれを確認すると、短い雄叫びと共に強靱な脚力で飛び上がった。腰から長い尻尾が生え、先端が熱風へと向けられる。だが熱風は尻尾の攻撃を避ける。続いて人間一人分ほどの大きさもある巨大な拳を振り下ろした。しかしこれも避けられ、新子のパンチは地面に激突した。大きなクレーターが出来上がり、その中心に埋まった拳を乱暴に引き抜く。

「ギギギギ……」

怒りに目をギョロギョロさせ、熱風を探す。視界の端に捉えた。もう一度、剛腕を振り下ろす。一撃は空振りし、地面にめり込んだ。さらに熱風目がけて何度も腕を振り下ろすが、一向に当たる気配はない。

「新子ー！」

大声が頭に突き刺さる。新子はその方に顔を向けた。誰だ、邪魔をする奴は？

赤髪モヒカンの大男が一人、鳥居の奥でこつちを見ている。その顔は、怪物を見たような恐怖で引きつり、わなわたと震えている。あの

顔は、たぶん、知ってる。でも思い出せない。

間拔けな奴め、アタシが今お前の戯言に付き合っている暇は無いことぐらい、見て分かるだろう？この力を感じないのか？

太い指で、胸にはまった歌姫を撫でた。

「新子、お前…なのか？」

大男は喚きたてた。

「真紅の竜が、今里の空を飛んでる！吠えて炎を吐いてやがる、新子…」

ふいに耳障りな男の声が途切れた。真つ青な顔で戸惑ったように目を見開く。そのままガクツと膝をついて頭を抱え込んだ。

やっと感じたのか…。新子は歌姫から手を離し、再び熱風の方へ顔を向けた。

「ダメ、ここから…離れて！」

拜殿の中から震えるような力ない声が聞こえた。誰だっけ…思い出せない。確か、アタシにとって大事な人だったような気がする。でも、ぼんやりとしか頭に思い浮かべることができない。

まあ、いい。ただ、自分にとっての敵を叩き潰せばいい。この圧倒的な力で、憎いあの野郎を潰す…。でも…なんで憎いんだっけ？なんでアイツを殺そうとしてるんだ？分からない、何も思い出せない。記憶が濁流で流されてしまったかのようなだ。

「ギガア…ゲゲ…！」

また熱風に飛びかかる。熱風は反撃に出ない。ただ避けて、挑発するようになにやと笑う。それが、新子の怒りと憎しみを増幅させた。それを感じれば感じるほど、歌姫の邪悪な魔力が心を満たす。

と、その時、背中に何か刺さった。何だ、うっとおしい。

後ろを振り向くと、眼が少し隠れるほど長い金髪の女が立っていた。手には紫色の血に濡れた短剣を持ち、息を切らしてこちらを睨んでいる。

何だ、コイツもどこかで見た。だが、やはり思い出せない。

「ヌガア!!」

邪魔だ。邪魔なら、先に叩きつぶせばいい。

その女に向かって、拳を振り下ろす。女は衝撃で吹き飛び、神社の壁に激突した。

「新子、目を覚ませ！」

そんな言葉は届かない。何度言っても無駄だ…。

ヒラリ

「ガ…」

目の前に、何か紙切れのようなものが待っている。新子は自分でも意識しないうちに、その写真を太い指先でつまんでいた。

そして大きく見開いたままの目に近寄せ、紙をまじまじと見つめる。

「…？」

紙に写っていたのは、恥ずかしそうに視線を逸らしたのが一人に、直立したまま硬い表情のが一人、そして写真の右半分は顔が大きく映っているのが一人。何だ、コイツ等は…？

新子の心はぐらついた。何か、暗闇の奥に光が見える。とても見慣れた、懐かしい光だ。その光が何なのかを、確かめたい、光に駆け寄って、手で掴み、その正体を知りたい。

だが、歌姫の力が呼び戻そうとする。もう一度、胸に手を当ててあれに触りたい。あの美しさに見惚れて、不思議な力に身をゆだねたい。そして、ねつとりと柔らかい闇にすうっと滑り込んで、これをアタシのものにしたい。

自分の上に現れた熱風を見て、飛び跳ねる。空中で雄叫びを上げながらパンチを繰り出す。しかし、逆に新子の脳天に大きな衝撃が走った。熱風の魔力を纏った腕が振り下ろされたのだ。

そのまま落下し、大きな音と共に神社の屋根を貫通し、瓦礫に埋もれる。鉄材が背中に突き刺さり、ちくちくと痛む。

そうだ…：そうすればもう苦しまずに済む。何も恐れずに済む。できないことなど何もなくなるし、何でも手に入れられる。

しかし、新子は歌姫に手を触れなかった。胸の中の何かが、引き戻してくる。何だろう？ 答えを探す新子の頭に、ふっと何かが引っ掛かった。左手に握りしめられていたさっきの写真をもう一度見る。

…イバラ!!

アタシはさつき、イバラの存在を忘れていたのか？馬鹿な！…他にも何か、忘れていることが有るんじゃないか？

その時、雷のような雄叫びが響いた。ズシン、と大地を揺るがす音がした。神社の壁が揺れる。

外でさっきの大男が悲鳴を上げた。

『東の歌姫』の歌声に重なって、新子の頭にやさしい声がささやきかけてきた。

—私はお前と共にあるぞ、新子。わずかな土くれと岩が我らを隔ているが、なあと、すぐに片づけてやる—

竜のロツク！

新子はハツとした。ロツクがすぐそこに居る。壁の向こうの、神社の外に。自分が落ちた時に空いた天井の穴から、真つ青な空を仰ぎ見る。新子は旅の出発の時、初めて大鷲の竿打に乗った時の事を思い出した。あのころ、全てが始まったあのころ。アタシは自分自身の事を何でも分かっているつもりだった。喧嘩では誰にも負けない、憲兵だって怖くない。イバラからいろんなことを教えてもらって、いろんなことを手伝ってもらった。2人とも、この先にどんな運命が待っているか見当もついていなかった。南の歌姫の時はグリフォンと一緒に、東の歌姫の時はこの竜のロツクと一緒に。そして北の歌姫の時は麒麟が来てくれた。

新子はもう一度、胸にはめられた歌姫を握りしめた。だがこれは歌姫の力を得るためではない。

“誰にも負けない力をやろう。栄光を手にしたいか？もう何も失わずに済むぞ”

思わずくらくとするような約束を並べて、敵はアタシを取り込もうとした。だが、心までは完全に支配することはできなかった。

今アタシは、暗黒の力というものをこの身でしっかりと感じた。今なら、暗黒の力に魅了されて禍王に従った者たちの気持ちも分かるような気がする。魔法人形のゴリアテ。妖怪鬼のコト。天邪鬼の鬼人正邪。そして、あの熱風のことも。

—新子よ、邪悪の存在を感じるぞ。とても近い。時が来たぞ、ソイツに止めを刺してやろう—

…そうだ!

青い巨体ががばつと跳ね起きた。そして手で握っていた赤い宝石のような東の歌姫を力いっぱい引つ張った。体中に張り巡らされた歌姫の根っこがぶちぶちと引き剥がされ、ズキズキと痛む。

「死んでも手放さなきゃならねえんだよ!! そうしないと… そうしないと… アイツらの事を… 忘れちゃうじゃねえか!!」

ブシユツ。歌姫をはぎ取ったとたん、真つ黒な淀んだ魔力が噴き出した。それにも構わず、歌姫を床に叩きつけてやった。そして、胸の内にあつた光を、この手で掴んだ。光は大きくなり、やがて胸の中心を明るく照らし出した。

「ぶはあっ!!」

新子はようやく目を覚ました。汗が顎の先と髪からポタポタと流れる。ハアハアと息を切らす。

戻ってこれたんだ…。だが自分の下には、あの青い巨体が項垂れるように鎮座している。どうやら自分はこの青い巨体のうなじの部分から出て来たらしい。まだ手首から先と足首から先が巨体のうなじの肉に埋まつている。更によく見れば、自分は服すらも着ていないではないか。

だが竜の雄叫びがそんな考えも吹き飛ばした。神社の壁が透けて、外の草むらにしゃがんでいる竜の姿が見えるようだ。正義と友情を司る竜。

「そうだな、時は来た」

「新子—」

続いて聞こえたのは、イバラ…いや、華扇の声。アタシを呼んでいる。…

華扇は奥の壁によろよると向かって行く。壁にたどり着くと、片手で目を覆ったままグラグラ揺れる壁にもたれかかった。

「華扇…」

新子は華扇の方へ手を伸ばそうとした。その時、自分の下にある青い巨体の剛腕が突然上がった。

「な、何だア!？」

驚いて剛腕を見つめる。もしや…。

新子はさらに右腕を振り上げようとする。すると、右腕は肉に埋まって動かせない代わりに、青い巨体の剛腕がふり上がった。そのまま腕を上下に揺らすと、それに合わせて剛腕も同じ動きをとる。左腕も同じだった。動かそうと頭の中で念じた通りにこの巨体も動いてくれる。

「お前…」

怒りに見開いていた白い目が黒くなり、中心に赤い瞳が宿る。目は半分閉じ、三角形のような形に吊り上がる。牙だらけの開いていた口は引き結ばれた。その顔つきは新子にそっくりだった。

「そうか、今からお前がアタシの化身か。あのニセモノの竜とか、正邪の仮面の化身のような、アレかあ」

青い巨体はゆつくりと立ち上がり、両腕を前へ突き出した。

「鬼人正邪の『マスクドトレイラー仮面の反逆者』からとって、今からコイツは『イーストトレイラー東の反逆者』だ！」

剛腕でガッツポーズを取り、高らかに雄叫びを上げる。

とその時、ゴゴツ、ゴゴツと石の擦れ合う音が聞こえた。壁に大きな穴が空いた。そこから外の光が差し込んだかと思うと、巨大なカギ爪が次から次へと石と木片を掻き出していく。

「そうだ、華扇は…！」

新子は思い出したかのように華扇に目を走らせた。華扇は手探りで突き出した木片に掴まると、ゆつくりと振り返った。

「なんてことだ…。新子の胸は絞めつけられた。華扇は目が見えないんだ！石碑が砕かれた時に迸った、あの焼けるような光の所為だ。竜の声が再び聞こえて来た。」

「外は凄いことになっているぞ。あの男に連れられてここまでやってきた憲兵目がけて、何百もの人間が棍棒と武器を手に丘を上ってくる。ほうら、もうじきぶつかるとぞ！」

新子の心は踊った。いつの間にか神社周辺にやってきていた憲兵団と里の住人たちが戦おうとしている。里の皆が来てくれたんだ！

—もっと外の事を教えてやろう。空からは何か平べったいものがいくつも飛んできたぞ。そこから青い服を着た変な妖怪どもが飛び降りて、憲兵を次々に叩きのめしていく—

河童だ。にとりたち河童がここまでやって来た。彼女らも戦おうとしているのだ。

新子は立ち上がりようとしたが、できなかつた。自分が居るあたりの瓦礫の中のどこかに埋もれている東の歌姫の歌声にやられて、意識が朦朧とする。

だが、新子の化身、『東の反逆者』は動いた。それと同時に、視界の端に、バンが倒れているのを見つけた。自分が落ちた時に空いた天井の穴の縁で、手足をわなわなと震わせ、黒い血にまみれていた。

何だ？

新子がそう思ったとたん、バンが仰向けになった。身体から流れるのは黒い血だ。黒い血がトロトロと流れ出し、神社の内部へ滴る。新子はぞつとした。その場に凍り付いて、黒い血の流れを目で追う。すると、悪夢のような光景が飛び込んできた。

群青色の塊が身をくねらせ、のたくっている。塊は生き物のように蠢いていた。

もう一度天井の穴の縁を見ると、ツムグまでもがスライムに捉えられていた。太い腕で首に纏わりつく触手をほどこうとするが、いくら千切っても元通りになってしまう。

「何があつたの？くっ…目が見えない…」

華扇のうめき声が聞こえる。

新子は考えた。スライムの注意をアタシへ向かわせても、きつとあの2人を離しはしないだろう。だが、奴を一か所に引きつける方法がある。やつが無視できないモノがある。

「テメエを倒してやる…熱風—」

第23話 「東の歌姫」

鈴奈庵の娘、本居新子は両親から、禍王の“四人の歌姫計画”を知らされる。新子は仲間の茨木華扇と共に、歌姫計画を打ち破るために旅立った。

新子の前に現れた熱風に乗せられて、新子は怒りを爆発させる。そして、ついに姿を現した東の歌姫に手を伸ばすのだった…。

第23話 「東の歌姫」

「くくく…」

熱風は宙に浮かびながら下を見ていた。自分が放った化身である双頭の犬はスライムに変化し、近くに居た裏切者の女憲兵、そして邪魔くさい大男を絡めとり、締め上げている。そしてスライムの半分以上は穴から神社の内部へ流れ込み、同じように本居新子を始末してくれるだろう。俺が叩き落としてから何も動きが無い。

だが、さつきから何度もやってきて邪魔をしている竜が居る。あの竜は壁に向かって炎を吐き、爪で引っ掻き、壁を壊そうとしている。この神社には東の歌姫の魔力が働いており、いくら伝説の竜だろうと簡単に壊せる代物ではない。

が、その時、熱風は神社の中から猛烈な霊力を感じた。

新子と『東の叛逆者』は、天井の穴から飛び出し、屋根の上へ着地した。『東の叛逆者』の逆立った赤い髪が揺れる。そして熱風に鋭い視線を向ける。

「なに、本居新子…！その姿は…！馬鹿な、お前如きが、歌姫の支配から脱せられる訳がない…」

「ナメんじゃねえ！歌姫の力をも取り込んで、この化身は完全にアタシが支配した！それがこのアタシの『東の叛逆者』だ」

そう、新子は鬼人正邪と戦った時のように、敵の魔力を吸収し、それをコントロールすることに成功したのだ。

東の歌姫の魔力は、吸収してしまうと霊力に変換されずに魔力とし

て残り、それが暴走しだす。それは新子が東の番人としてまだ未熟だったから。だが今の新子はもう東の歌姫の番人などではない。溜まった歌姫の魔力、すなわちこの化身は霊力へと再変換され、こうして新子の意のままに、正に手足として使う事が出来る。

「くっ……小癩な女め！」

「散々好き勝手言ってくれたなあ……。このアタシの力……見せて……やるぜえ!!」

新子は熱風に向かってパンチを繰り出した。

「はやい……！」

熱風が避ける間もなく、巨大な拳が熱風を砕いた。身体がグシャグシャになった熱風は揺れながら下に落ちかけた。だが、すぐに身体が回復し始める。

神社の屋根の上に立ち、新子に向けて手をかざす。そして魔力の衝撃波を放ち、反撃した。

「効くかよー！」

剛腕を振り、衝撃波をいとも簡単にはじき返した。

「アタシはもう歌姫なんて守らねえ、今からぶっ壊してやる! そうしたらお前とご主人の計画は丸つぶれだ。お前の面目も立たねえぜ?」

新子は再び天井の穴から神社の中へと滑り込んだ。

「くそ……この俺が、立つことができないと……奴の強大な霊力をぶつけられて治癒が遅れ、立ち上がることができないだと……! 吐き気がする、目まいもだ……」

新子と『東の反逆者』は土煙を上げて地面に落ち、転がった。東の歌姫の歌声が頭に突き刺さる。ナイフで刺すような痛みにも新子はうめき、化身の巨体がドスンと前のめりに倒れ込む。

だが、じわじわと力が湧き上がってくる。東の歌姫の魔力を前に能力が発動し、新子に霊力が湧き上がってくる。心を静められ、勇気づけられ、何とかして目をこじ開けた。

すぐ横に壁があった。壁向こうから竜の咆哮と地面を搔く音が聞こえてくる。痛む頭を無理に動かして、横を向く。新子が落ちた時の

衝撃で退けられた瓦礫の上に、“東の歌姫”がすぐそこにあつた。

それは、幻想郷の景色と同じだった。赤色は緑へ、緑は夜のような青へと様々な色に変わり、さつき見た昔の幻想郷の風景とよく似ている。でも、これはそんなものではない。今ならわかる。人を馬鹿にした、紛い物だ。

表面こそ美しく磨き上げられているが、命あるもののように脈打つツルツルした赤い皮膚の下は、芯まで冷たく死に絶えた灰色だ。

新子は見たくないと思いつつも、惹きつけられた。こんなものを欲しがった自分が理解できない。それでも新子は、なかなか目を逸らすことができなかった。見上げると、天井の穴から日の光が差し込んでいる。だが、それもごくわずか。穴はじわじわと流れ込んでくる黒いスライムで塞がれていた。

思った通り、あの犬は熱風の意志に従ってアタシを追って来た。それも、あわてて。今度は向こうが新子の口車にまんまと乗せられたのだ。敵の思考力を落とすために、頭を潰しておいて良かった。

あとはやつがアタシの作戦に乗ってくれることを祈るしかない。東の歌姫を守ることに夢中になって、手遅れになる前にバンとツムグを手放してくれればいいんだが…。

『東の反逆者』はなんとか立ち上がった。新子と一緒にあって、歌姫の声による苦痛に顔を歪ませる。だが、それに屈せずには大きな腕で歌姫を掴み上げ、もう片方の腕で連続でパンチを浴びせた。容赦のない連打が歌姫に襲い掛かる。歌姫の歌声が不規則になり、宝石のような硬い表面にひびが入った。

だが歌姫の声の魔力は弱まらない。歌声で頭が割れそうだ。すぐ後ろで、竜の咆哮が聞こえた。壁に炎を吐いているんだ。もうすぐ、壁の魔力が炎に負ける。そうすればたちまち壁は燃えて弱くなり、竜が爪で壊してくれる。そうすれば歌姫の相手は竜に任せて、自分はそのスライム犬と戦う事が出来る。

—急いでくれ!

新子は心の中で念じた。だがそれに答えたのは、苦しげな唸り声だった。外で憲兵が竜に攻撃しているのだ。

しかし今は、天井のスライムから目を離せない。耐えてくれ…！
そういえば、おかしいぞ…。ヤツは確かにプルプルと震わせながら
下に向かって動いている。でも、一向に落ちてこない。なぜだ？

その時新子は背後に目をやって、ぞつとした。

へし折れられた天井の梁がスライムに覆われて真っ黒だった。ス
ライムは天井を張って新子のすぐそばまで来ていた。壁の向こうか
らは憲兵団の怒号と、竜の怒り狂った声が流れ込んでくる。

そのとき、ひととき大きな声が聞こえて、新子の心は踊った。

「やめなさい！この私が相手になるわ！」

華扇だ！どうにかして神社の外に出たんだ。華扇なら、竜に群がる
憲兵も一掃できる。だが今の華扇は目が見えない。永くはもたない
だろう…。

憲兵の怒号が悲鳴に変わる。つづく、何かが粉々になる音。その
時、壁に小さな穴が空いた。そこから竜の爪の先が入ってきて、壁の
穴を広げようとする。昼間の光が薄暗い内部に差し込み、ニセモノの
宝石の上で踊る。

東の歌姫の鑑の如き表面が光を受けて輝く。頭に響いていた歌声
が、耳をつんざく高音につりあがる。邪悪が全てを凍らせる風のように
吹き出してくる。壁の向こうで竜もふらつくのがわかる。

天井から流れ込んできた黒いスライムが、一つの青い塊になりかけ
ている。2つの突起が飛び出て、少しずつ大きくなり、双頭の犬の身
体を形作る。犬の顔は歯を剥き、音を立てて首を振りながら迫って
くる。

「ちようどいい、さっきの仕返しだ…喰らいやがれ！」

突進してくる犬の二つの顔を、両腕で受け止める。『東の反逆者』は
物凄いパワーを発揮した。顔を掴まれた犬は戸惑い、前足をバタバタ
させる。

…グシャ

そして指先にある短いが鋭い爪を喰い込ませ、そのまま犬の顔を握
りつぶした。

「フルパワー!!」

犬の胴体を思いきり殴りつける。

さらに追撃をしようとしたとき、大地を揺るがす轟音と共に壁が内側に向かって砕け散った。大きな石と木片がいくつも飛んできて、双頭の犬を押しつぶす。犬は潰れた頭で唸り声をあげ、足で床を引っ掻く。

新子の視界に真紅が飛び込んできたかと思うと、巨大な力ギ爪が見えた。『東の反逆者』の巨体を掴み、何が何だかわからないまま瓦礫と共に外へとかきだされた。

体が竜の胸に押し付けられている。竜の皮はぬるぬるとすべり、血の匂いがした。東の歌姫の歌声が耳を貫き、頭に響く。音はこれまでになく大きい。

でも、おかしいな。さつきよりも歌姫から遠ざかったはずなのに、なぜ…？

目をこじ開けた新子はぎよつとした。まだ神社の中にあると思っていた歌姫がすぐ近くの瓦礫の上に転がっているのだ。土埃の下で真っ赤な表面が炎のように燃えている。

わざとなのか偶然なのか、竜は新子と共に東の歌姫をも外で引っ張り出していった。余りに近くから発せられる邪悪な歌声にやられて、起き上がることもできない。

うちのめされているのは、新子だけではなかった。恐怖と絶望にすすり泣く声、叫び声やうめき声が聞こえ、新子は力を振りしぼって起き上がり、上を見た。

驚いた…。新子は竜とともに大きな穴の中に居た。竜は壁を削ると同時に、神社の壁の下の地面を掘っていたのだ。その穴の下に、壁の瓦礫と歌姫と共に新子が居た。よく見ると、穴の同じ深さまで神社の床下も掘っていた。

見上げると、穴の縁に何百もの顔があつた。憲兵団も多いが、一般市民も多かった。憲兵から神社と竜を守るために、勇気を奮い起こして里から駆け付けたのだ。だが今は皆、東の歌姫の邪悪な歌声に曝され、ひざについて耳を塞ぎ、うめき苦しんでいる。立っているのは3人だけ。神社の裏手に近い穴の縁に身を寄せ合っている。少し後ろ

に立つ人影はバン、その前に居る二人はツムグと華扇だ！華扇はツムグに手を取られ、髪は風でボサボサになり、月光のように青白い顔でふらついている。

よかった、3人とも無事だった！

他にも、河城にとりを初めとした河童の姿も見える。そこに混じっている一つのシルエットは見覚えがあるが、何だか思い出せない。

行く手に何が居ようと、仲間がいる。それが何よりもうれしかった。それに、あの犬は壁の下敷きになって息絶えた。あとは歌姫と、熱風を倒すのみ！

―随分と厳つい姿を手に入れたのだな、新子。さあ、今だ。私に力が残っているうちに―

竜の声はか細かったが、新子には聞こえた。そして、さとつた。竜は最後の力を振り絞って東の歌姫を破壊しようとしている。新子は『東の反逆者』の手で竜の前足を掴んだ。土埃を被る歌姫を、鋭い目で睨みつける。

こいつは200年もの間、神社の拝殿の奥に潜んで、はるばる神社に祈りにやって来た人々の心に悲しみを与え、大地にじわりじわりと毒を流し込んできた。その毒は、この神社がある丘に、竹林へ、そして人間の里に広がって善良な者の力を挫き、悪しき者の力を強めた。

だが、ヤツの天下もこれまでだ。

竜が力を溜めているのを感じとり、炎の熱から逃れるために巨体の影に隠れた。だが次の瞬間、信じられないものを見た。東の歌姫の向こう、竜が掘った神社の床下の穴の中に、黒いドロドロが詰まっていた。瓦礫で息の根をとめられたように思えた双頭の犬が再びスライムに変化し、がれきの下から滲み出してもう一度犬の体を形作ろうとしている。

犬はまだ生きていた！目の前で完全に元の双頭の犬の形になった。群青色のつやつやした毛を日光で光らせ、立ち上がる。巨体から先端が鎌のように高質化した触手が伸び、空を斬る。怪物は悍ましい雄叫びを上げると、触手を鞭のようにしならせてせまってきた。

竜は吠えると翼を広げ、後ろ足で立ち上がり、炎を吐いた。犬の体

を炎が焼き、犬は身を縮めて吠える。だが、今度は逃げない。再び迫りくると青白く柔らかい竜の首の下側を触手で切り裂いた。竜の鱗の筋を伝って、血が流れる。

竜は今にも襲い掛かろうと、輝く鋭い牙を剥きだした。

—やめろ、噛みついちゃだめだ！それじゃヤツの思うつぼなんだ、噛みつけば口に入り込んで喉を詰まらせてくるぞ

竜はたじろいだ。棘のある二股の尾が掘り進んできた穴の壁をイライラと叩く。そして一步下がると、再び吠えて炎を吐いた。ジューシューという不気味な音。犬が狂ったように吠え、無数の触手がしぼんで地面に落ちる。その下の犬本体の肉も固くなり、焼けただれた。そのとき何の前触れもなく、犬の体が伸びあがった。まるで青い大波のように、わつと竜に迫ったかと思うと、首に巻き付く。竜は逃れようともがき、纏わりつく敵に爪を立て、触手を掻き落とそうとした。だが、爪に引き裂かれた傷はみるみるうちに閉じた。触手は落ちるそばから生え変わり、他の触手に混ざって首を斬りつけ、しめつけていく。

竜が苦痛に吠え、前足を突いた。

「やめろー！」

新子はやつとのこととで一步踏み出し、『東の反逆者』とともに敵に飛びかかった。鋭い爪で怪物の首を切り裂き、胴体を殴る。片方の犬の首が新子に振り向き、狂おしく燃える目を向け、吠えた。唾の泡が飛び散る。双頭の犬と青い竜人が互いに向き合う。

もう片方の顔も血の凍るような勝どきの声をあげ、竜の首に噛みついた。

竜が苦しみの雄叫びを上げ、ぐったりと首を落とす。犬は竜の首に噛みついたまま、頭を揺らした。牙が首に食い込んでおり、血がドクドクと流れ出ている。

「テメエー！」

新子はもう一度犬に向かって突進した。竜に噛みつく犬の首を掴み、締め上げる。だが、今度は犬の首からも触手が何十本も飛び出し、青い巨体を斬りつけた。紫色の血が滲み、新子は眉間にしわを寄せ

た。

更に飛び出た触手が、化身の首の後ろにいる新子本体に向かってくる。あわてて化身を操作し、腕で触手を掴んで千切りとる。パラパラと地面に落ちた触手が他の触手と同化し、犬の胴体と合体する。

その時、頭上でまばゆい金色の光が炸裂し、穴の中まで光で満たされた。

第24話 「穴底の戦い」

鈴奈庵の娘、本居新子は両親から、禍王の“四人の歌姫計画”を知らされる。新子は仲間の茨木華扇と共に、歌姫計画を打ち破るために旅立った。

ついに、東の歌姫を追い詰める新子。まばゆい光と共に現れたものは…？

第24話 「穴底の戦い」

その時、頭上でまばゆい金色の光が炸裂し、穴の中まで光で満たされる。犬がぎよつとして頭を逸らした。口の端から竜の血がしたたり落ちる。

「新子、あぶねえー！」

ツムグの叫び声に続いて、穴の中の新子の後ろに、何か巨大な物が物凄い音を立てて降りて来た。何がどうなったんだ？身動きもできないうちに新子は、大きな固い手に押しつけられた。穴の斜面の中ほどにまでゆつくり引きずられ、新子は振り向いて穴底を見た。

長い金髪をなびかせ、青い服を着た巨人が双頭の犬と対峙している。腕で触手を切り裂き、もう片手に持った長いスピーアーで、ぶよぶよと揺れる犬の胴体に穴をあける。

「ゴリアテー！」

新子は息を呑んだ。凶暴な顔つきで犬と戦うゴリアテの足跡を追って、小さな人影が穴の斜面を下る姿がぼんやり見える。アリス・マーガトロイドだ！南の歌姫の番人だった巨大人形ゴリアテと、その中に気付かないうちに封印されていた人形遣い。きりつとした顔だち、すらりと綺麗な指からは糸が伸び、ゴリアテの各部位と繋がっている。

東の歌姫の力はゴリアテには効かないのかもしれない。だが、アリスは見るからに苦しそうだ。それでもアリスは暴れるように戦うゴリアテを制御しようと、必死に指を動かしている。

まさか、彼女が戦いに来てくれるなんて。

誰かが頭に触れ、新子は顔を上げた。ツムグがかがみこんでいた。

「逃げるぞ、上に行くんだ…登ってこい」

そのやつれた顔が大変な思いをしてここまで来たことを物語っている。だが、新子は首を振った。

「アタシはあの竜と一緒にいなくちゃならねえ。アタシの命の持つ限りな」

ツムグの手が新子の肩を掴んだ。

「アリスとゴリアテはあの犬を倒せねえよ。ゴリアテがどんなに頑張っても、あの犬はすぐに再生する。そしてゴリアテを破壊し、アリスを殺し、それから竜に取り掛かる。もしアタシがそばに居れば、竜は生き残るかもしれない。東の歌姫を倒せる可能性はまだあるんだ」

新子はボソツと言った。ツムグが新子の目をじつと見た。やがて頷くと、新子の腕に手を置く。

「テメエの事は嫌いだぜ、新子。だけど今回だけ…やってやらあ」

その言葉で新子は悟った。ツムグと一緒に歌姫と戦うつもりだ。…小さい時の事を思い出す。あの時とは随分状況が違うが、一緒に他のアホ共と喧嘩したことがあったっけ。

新子は何も言わなかった。そして『東の反逆者』でツムグを掴むと、穴底へと滑っていく。竜はまだ横腹を下にして横たわり、眼を閉じていた。真紅だった鱗が、淡いピンク色に色あせている。何とか巨大な竜の頭のそばまで行くと、しゃがんだ。

―戻ってきたのか、新子

―ああ

―隣の男は誰だ？

―…昔からの知り合い

ツムグが腕に手を置き、握る力を強めた。

「恐れずともよい…お前の仲間だろう、悪い奴ではない。ところで、あの怪物と戦っている、金髪の巨人は何なんだ？」

「アイツはつい最近まで南の番人だったやつで、後ろに居る魔法使いが作った人形だ」

「ああ、なるほど。自我を吹き込まれた人形は時として想像以上の力を発揮すると聞くからな」

竜は再び目を閉じた。

想像以上の力：新子は前にゴリアテが自分で話していたことを思い出した。ゴリアテは自我を持ってしまったがゆえに、心を持ってしまったがゆえに主人を裏切り、禍王の手下となった。だから人形が自我を持つという事は、それは制御ができなくなるということでもある。

今のゴリアテは、自我を持っているが、後ろで糸を駆使して操縦するアリスにそれを押し込められている。

「新子、見ろ」

ツムグの切羽詰まった声がした。新子は驚き、驚いて目を見張った。

ゴリアテはまだ双頭の犬と戦っていた。槍で突き、犬の顔を殴るが、ゴリアテの服と髪は泡と青いスライムの筋に塗れていた。手や足にはいくつもの損傷が見受けられる。足元には、くねくね動く触手の切れ端と、青い肉片が散らばっている。

ゴリアテは双頭による攻撃をかいくぐり、胴体に深く槍を突き刺した。

その時、新子は気付いた。何かが違うぞ。地面に落ちた触手が、とけて犬の身体に合流することなく、その場で干からびていく！

「どうなってやがる、体を再生できなくなったみてえだ。まるで…」

「まるで、魔力が弱まってる」

新子はゆっくりと言うと、東の歌姫を見た。土埃の下に見える赤い表面は色あせている。それに歌声も確かに力を失っていた。もう、耳をつんざくような鋭さはない。

「邪悪の力が弱まった。ふう、楽になった、随分楽になったぞ」

新子は竜を見た。真紅の目が再び開いている。鱗に光が戻っている。深い傷からの出血も止まった。新子の下で、まるで蘇る力を味わうかのように喉がごくごくくと鳴った。

東の歌姫が死にかけてる。でもどうしてだ？アタシの力のせい？

ゴリアテとアリスのおかげ？それとも、日の光？熱風が死にかけているから？

新子は戸惑いながら色あせていくニセモノの幻想郷を見つめ、それから怪物に目を戻した。

奇跡だ……。一卷の終わりだと思った瞬間、東の歌姫が急に力を失うなんて……。

双頭の犬も、魔力が引いていくのを感じていた。犬顔の残忍な目に戸惑いの色が浮かぶ。そして、ゴリアテの存在を忘れているかのよう
に口を大きく開き、闇雲にアリスに襲い掛かっている。

犬の牙に手をぎっくりと切り裂かれ、アリスがうめいた。よろめいて傷口を押さえ、指から伸びていた糸が切れた。犬が勝利の雄叫びを上げた。涎をまき散らして、歯をカタカタと鳴らす。

その時、大地を震わす叫び声を上げて、ゴリアテが襲い掛かった。胴体に刺さったままのスピーアーから手を離し、たくましい両腕で二つの犬の首を掴み、一瞬で引きちぎって見せた。

そのまま、時間がとまってしまったようだった。ゴリアテは目を赤く光らせて唸りながら、群青色の双頭を天に捧げるように空に掲げた。その前で、頭をなくした犬の胴体がスライムに戻り、ぶよぶよと震えている。

突然ゴリアテが、おぞましい戦利品を投げ捨てた。これでもかとはかりに踏みつける。青い顔がゼリーののように潰れた。その瞬間、頭をなくした青い肉の塊が、一気に土埃の中に崩れ落ちた。ゴリアテがはつと思い出したように、新子とツムグ、そして竜に向き直った。

赤い目は殺意に満ちていた。目の前の敵は全て殺す、頭はそれっきりのようだ。

「よしなさい、その人たちは仲間よ！」

アリスが叫んだ。だが、操り糸から解放されたゴリアテの耳には入らない。腰を下げ、飛びかかろうと身構える。竜が低く唸り、新子も『東の反逆者』に攻撃の構えを取らせる。ツムグも身を固くする。

「私は怪我をしているの、助けて。もどってきて」

アリスは静かにゴリアテに呼びかけた。ゴリアテの無表情な顔が

歪む。

もう充分だった。ゴリアテは踵を返し、二跨ぎでアリスの元に戻ると、傷ついた腕を大きな両手でやさしく包んだ。次の瞬間ゴリアテは、目もくらむような黄色い光に包まれた。

まぶしい！新子は思わず目を逸らした。振り向くとそこには巨大人形の姿は無く、小さな人形を持ったアリスが一人立っているだけだった。

「……危ない！」

アリスは上に目をやると、そう言った。穴の中に、何かの人影が降ってきた。見開かれた目は充血し、血が流れている頭を押さえてフラフラと立ち上がる。黒い神父のような服に身を包んだ、色黒の男。熱風だ。

「よくも、俺の作った犬を。俺は精一杯頑張った：あのお方のために200年も仕えて来たんだ……。この熱風が、貴様らなんぞにイイイイ!!」

熱風もさっきの双頭の犬と同じく、魔力を失っているようだった。頭の傷が完全に治っていないし、さっきまでのような禍々しい気迫が感じられない。ただの人間同然だ。

その熱風が、もう尽きかけの魔力で作った剣を手に、新子に飛びかかった。

「父さんの仇だ」

『東の反逆者』が、向かってくる熱風を手の甲で小突いた。それだけで良かった、もう熱風という男は新子の敵では無かった。熱風の体は砕かれた土塊のように吹き飛び、灰のように散った。そして、もう復活することは無かった。

— 終わった。仇はとったよ、父さん

竜が吠え、真つ赤な炎を吐いた。色あせた東の歌姫が炎に包まれてどす黒く光、燃える石炭のような明るいピンク色になった。歌声が、哀れっぽい声に変わる。石炭のようなピンクは真紅に変わり、そして鈍い茶色へと変わっていく。

竜がシューシューと音を立てて、白熱した細い炎を吐いた。東の歌姫がしばみ始める。あまりの熱さに、新子とツムグは顔を背けた。それでも、『東の反逆者』の腕は竜の手の指を掴んで離さない。

東の歌姫の声が、高く、高くなる。そして、ふいとまった。目まいのするような沈黙。ゆつくりと、新子は目を開けた。歌姫が有ったところには、風に散らされる白い灰の小さな山があるだけだった。

「さあ、すんだぞ。めでたしめでたしだ」

竜が満足そうに言った。

沈黙は頭上の大騒ぎに一気に破られた。見上げると、穴の縁に並んだ人々が歓声を上げ、小躍りして喜び合っている。同じくそこにいたはずの大量の憲兵団も、何故だが完全に消滅し、灰色の制服だけが舞っている。

その中で、元女憲兵のバンが両手を上げていた。華扇もバンに掴まって、そこに居た。にとりたち河童も、周りの人間たちと一緒に手を叩き合って喜んでいる。

新子が立ち上がると、アリスが弱弱しく微笑んで近づいてきた。

めでたしめでたし。今こそ安心して勝利を祝う時だと、新子は頭ではわかっていて。穴の縁の人々は有頂天になっている。だが、新子は何も感じなかった。

「まるで夢みてえだな。最後は呆気なかった」

ツムグが、新子の気持ちを代弁した。

「嘘なもんですか、危なかったわよ」

アリスが言う。

「お前と人形はよくやった。だが、あまりいい気にならないほうがいい。お前が怪物に止めを刺したときは、敵はひどく弱っていたのだから」

「そうなんですか、それなら私は運が良かったのね」

新子は話をほとんど聞いていなかった。干からびて袋のようにカサカサと揺れる青い塊も、今はどうでもいい。アリスの肩を支えるツムグを、じつと見つめていた。チツ、と小さく舌打ちすると、今度はもう一度穴の上を見た。視線の先には、華扇が居た。

「仲間の元へ戻れ、新子」

竜は新子の名前の部分だけ小声にして言った。

「人間たちはさつきは私を守るために戦ったようだが、私の役目が終わった今、どう出るか分からない。私はまだ戦えないし、飛ぶこともできないのだから」

新子は何も言い返さなかった。竜の言う通り、アタシの居場所は、上にある。

実のところ、アリスとゴリアテが双頭の犬と戦う場面を目撃した者はほとんど居なかった。みな、東の歌姫の恐ろしい力にやられていたのだ。竜が歌姫を焼き尽くすのを見た者も、数えるほどしかない。それでも、皆は分かっていた。ここで大変な戦いが有り、自分たちが勝った事、そして何か不思議な事が起こったという事も。うきうきして、体中によろこびがみなぎっている。

人々は、まるで耳に水でも入ったかのように耳を叩き、頭を振っている。いつも聞こえてきた音が、急に止んだからだ。人間の里にまで及び、何百年も響き続けていた気だるく絶望的な歌声が、今初めて全て止んだ。

気づくと、バンと河童たちの姿が見えない。人々を鳥居の先へとうながし始めているのだ。やがて、穴の縁に、華扇だけが残った。空を背に、堂々たるシルエットが浮かび上がる。その上には、竿打が心配そうな目を向けながらグルグルと旋回していた。

新子は迷わずに『東の反逆者』を使って穴から出ると、うなじと同化したままだった両手足を引き抜いた。司令塔が居なくなった青い巨体はがくりと崩れ落ち、蒸発しながら溶け始める。

そして新子は華扇に歩み寄り、昔からの友、いつもそばにいてくれた華扇の見えなくなった目を見ると、抱きしめた。華扇も新子をひしと抱きしめた。だが、気恥ずかしくなったのか、すぐに新子を押し返す。

「うへえ、竜の匂いがプンプンするわ。それに、あなた裸なの？服を着なさい服を！やっぱりそういう所が…」

そうそう、これこれ。この説教臭い小言。

その時ふと、華扇の顔から笑みが消えた。まだたきをして眉間にしわを寄せ、手を差し出す。

「私の手を取って」

新子は訳も分からず、差し出された手を取った。華扇がまた瞬きをした。その虚ろな目に少し光が戻ったようだ。

「新子の力よ。新子の力が、私の目を癒してくれている、感じるわー！」
華扇の手を強く握りしめる。

「そう…確かに新子が今まで使ってきた能力は、倒すはずだった歌姫を守るための番人の力かもしれない。でも、それを周りに伝達する…それを利用して他人を治癒したり、増した力を他人に分け与える！これは新子が発展させた、新子自身の能力なのよ！」

華扇は強く目を閉じた。十数秒閉じた後、もう一度目を開いた。完全に輝きが戻り、瞳は真っすぐに新子を見つめていた。

「これで、4つ全ての歌姫を倒したのね。私たちの旅も終わったのよ」
「…そうだな」

後ろから声が聞こえた。振り向くと、バンが自分の上着を持って新子に微笑みかけていた。バンはその上着を新子に着させると、拾って来た写真をポケットに入れた。

「これがあったから、新子…お前は戻ってこれたんだ」

確かに、その通りだ。これで、全部が終わったんだ。父さんも、きつと喜んでる。これでいいんだ。

その時、周りが暗くなった。何か巨大な物が、すぐ上で止まっている。ガルルガか？だが、違う。羽ばたきの音が聞こえない。穴の中から顔を出した竜が、驚きと警戒の色の顔で新子たちの上を見ている。

上を向くと、そこには純白の巨体が浮かんでいた。丸まった後ろ足と、長い指を持つほっそりとした前足、白い毛並みの引き締まった胴体、そして鼻先の尖がった、大きな鋭い目を持つ顔。腰からは4本のもさもさした尻尾が揺れている。

天狐だ。死んでいたはずの天狐が今、頭上に居る。

第25話 「箱の仕掛け」

鈴奈庵の娘、本居新子は両親から、禍王の“四人の歌姫計画”を知らされる。新子は仲間の茨木華扇と共に、歌姫計画を打ち破るために旅立った。

ついに、四人の歌姫全てを倒した新子。しかし、喜ぶ間もなく、彼女のもとに死んでいたはずの天狐が現れ…

第25話 「箱の仕掛け」

死んでいたはずの天狐が今、頭上に居る。信じられない、ということなんだ？確かに天狐は博麗神社に来る途中の森の中で息絶えていたはずだ。身は朽ち果て、もう復活の余地などなかったはず。

「私はずっと呼んでいたのですよ」

天狐が目を閉じながら、新子たちに語りかけて来た。透き通るように綺麗な女性の声だ。

「先ほどから何度も呼びかけていたのに、神社に住まう邪悪の歌声によつてかき消されてしまっていました。ですが、こうして邪悪が滅されたのを感じ取り、こうして直接やってきたのです」

「…じゃ、じゃあ、さっきアタシの頭に話しかけてきたのも、アンタだったのか？」

今度は目を輝かせながら口を開いた。

「そうです！」

「だったら、あの死体は何だったの？」

華扇がそう聞いた。すると天狐の笑みはふっと消え、一気に悲しそうな表情になった。何だか、今までの神獣と比べて感情の起伏が激しい奴だな、と新子は思った。

「…アレは私の兄です」

「兄だって？」

「300年ほど前、私たち兄妹は“神の友”に出会いました。近々、強大な敵が幻想郷に攻めて来ると伝え、私たちのもとへ邪悪に打ち勝て

る力を持つ女性が現れるまで眠って身を潜めろと言いました。兄と私はこの丘の洞窟で眠りにつきまりました。兄は洞窟の中で、私は洞窟の中の地面をさらに掘った穴の中で眠ったのですが…上に居た兄だけが死んでしまったのです」

「それは御気の毒に…」

華扇が静かに言った。天狐は深いため息をつく。

「眠りから覚めた時、兄が死んでいるのに気付きました。私は目覚めたばかりで自力で穴から出る事が出来ず、貴方に助けを求めたのです。ですが、今度は邪悪の力によって私の声までもかき消され、こうしてやっこの思いでここまで来たときには、すでに勝負は決していたなんて…！ああ、私は東の領土を治める天狐として恥ずかしいですわ！」

「おいおい、忙しいんだな…」

「ですが、西の領土のトカゲが、私の領土を救ってくれたことに変わりはありません。そこは感謝しますね」

「何だと、東の獣が。私の苦労も知らずによくもそんな軽々しくものが言えるのだな」

その日の夕暮れ時。ここ、博麗神社では200年ぶりの宴会が催された。ここで開こうと思ったのは、華扇のきつての頼みだ。どうやら華扇にはここがかなり思い出深いようで、どうしてもここが良かったらしい。

背の高い雑草を刈り取り、そこにブルーシートを敷いて、里で作られた料理や、河童たちが腕を振るって用意した御馳走がところせましと並べて用意されている。さらには、憲兵に奪われ、工場に保存されていた酒を大量に持ってきた。

だが新子だけは、少し時間が必要だった。今だに穴の中でぐったりしている竜の様子を見なければならぬし、天狐の話もゆっくり聞きたい。ようやく空が青みがかってきた時、新子は宴会の席へと向かった。

新子が顔を見せたたん、わっと歓声が上がった。新子が驚いて顔

を見上げると、シートの上に人々がひきめき、笑顔でこちらを見ている。

新子は、馴染みある顔をじっくりと眺めた。

こぼれんばかりの笑みを浮かべた華扇の横には、同じく旅を共にしてきた大鷲の竿打がとまっている。パンも微笑み、にとりは乾杯のかまえだ。歓声を上げるツムグに、満面の笑みを浮かべるアリス。他にも新子の知り合いや、戦いに大きく貢献してくれた里の人々も混じっている。

だが、やはり一人だけ居ない。新子は席に着くことなく、こつそりと鳥居をくぐり、丘を下った。それを華扇だけが見つめていた。

新子は丘を降りて里に戻り、鈴奈庵までの道を走った。憲兵団が居なくなった歓び、そして急に息を吹き返し始めた作物や川の魚を見ようと、住民のほとんどが家の外に居た。元は里の中心で暮らしていた家も持たない人々もそこに居て、一緒になって畑の整備をしていた。その様子はとても微笑ましいが、新子の心は少し沈んでいた。

鈴奈庵へとたどり着いた。店の入り口のドアには「閉店」の看板が掛けられている。裏の玄関から入ると、母親が椅子に座ってスープを飲んでいた。新子に気付くなり、無理に作ったような笑顔で笑いかけた。その顔の目の下には涙の跡が残り、眼は赤く腫れていた。

「ついにやったのね、新子」

「ああ、やったよ…母さん。今はみんなが博麗神社に集まって宴会をやってる。…父さんは？」

「店の方で安置されているわ。明日には葬儀屋さんに来て、お葬式を開くつもりよ。あの人が生まれ育った店で寝かせてあげるのが、あの人が喜ぶと思うから」

「その通りだな」

新子は店の方へ通じるドアに向かい、店に入った。

今では懐かしい、カウンターの裏。返されたまま、棚に戻していない本が積んであり、本のチェックリストの紙が置かれている。

そのカウンターの横に置かれた石の台の上に、白いシートと布をか

ぶせられた父親が寝かせられていた。

「安心して眠ってくれ、父さん」

布をかぶせられた父親の顔に触れ、そつと囁いた。

と、その時、カウンターの机の上で背中を丸め、物差しを使う父親の姿が見えた。やはり物差しで何をしていたのかはよく見えない。

―やはりそうなのか。間違いない…ああ…何て恐ろしい策略なんだ…もつと早く気づいていれば…もつと前に思い出しければ…くそつ、俺は馬鹿だ…！

新子が瞬きすると、その姿は消えていた。幻だったのか…。

その場を後にし、もう一度自宅の方へ戻る。

「母さんは行かないの？」

「…そうね、華扇さんもいるし、行ってみるのもいいかもしれないわね」

母さんはスープが入っていたカップを流しへ置き、机の上に置かれていた冊子のような紙束をわきに挟んだ。新子と一緒に家を出て、皆が居る博麗神社へと向かった。人が往来したことで通りやすくなった獣道だが、新子は母と手を繋いでそこを通った。父さんが居なくなった今、これからは2人で店をやっていかなければならない。それに、2人は生きていた、その親子の温もりを感じたかった。

2人が会場へたどり着くと、そこは大騒ぎになっていた。騒ぎの元は、どうやら華扇と竿打のようだ。華扇は竿打の傷がまだ開いているのを見つけて、不思議に思っただけで調べようとしたとき、傷口に何か詰まっているのを見つけたのだ。

「きつと奥に埋め込まれていたのがだんだん上がって来たのよ。魔法の森で竿打を襲って傷をつけたのも、熱風だったのね。そして傷口に、これを埋めたのよ」

華扇は詰まっていたものを手の平に乗せて差し出した。小さな灰色のガラス玉だ。内側に何本もの赤い筋が渦巻いている。新子は身震いしてそれをつまみ上げると、肉を焼いていたたき火の中に投げ入れた。ガラス玉はシューシューと音を立てて白熱したが、すぐにひび割れ、とけてしまった。

「私たちの居場所がなぜいつも敵に知られていたのか、これで分かったわね。竿打はずつと禍王の目を運んでいたのよ」

とその時、里の男たちが大きな荷物を運んできた。

「どうやら、幻想郷中の憲兵団はマガノ国へ戻っていったようだ。奴らの野営地にあったごちそうを全部運んでくる。これからぞくぞくと持ってくるぞ」

すべて、上手くいった。新子は自分に言い聞かせた。みな歓声を上げて、シートの上の皿にうずたかく積まれたおいしそうな食べ物にかじりついている。果物、チーズ、焼き魚にどんぶりに盛られた米、大きなパン。何だか胸騒ぎを感じるのは、疲れているからだろう。

それでも新子はくつろぐことができなかつた。引き絞った弓のように、神経がピリピリしている。

シートの席からまた歓声が上がった。力なく見やると、華扇が残念そうに、例の木の仕掛け箱を見せている。彫刻のある三つの面からツルツルした棒が飛び出しているというのに、ふたは頑として開かないのだ。

「きつと、もう一つカギがあるんだ。私にやらせてくれ、からくりは得意なんだ」

にとりが身を乗り出した。

「いや、私がやるわ。私は手先が器用なのよ」

アリスも話に加わった。

「ダメダメ、この箱は私が開ける。私に開けられなきゃ、もともと開かずの箱だったってことさ」

華扇は偉そうに言う、指で小箱を押した。その瞬間、かすかにカチツと音がして、4本目の棒が突き出た。華扇がぼかんと口を開ける。

すると、ポン！小箱の蓋が弾けるように開いた。笑うピエロの顔が飛び出し、ばねの先でビヨンビヨンと跳ねる。

「おおっー！」

華扇が小箱を落とした。みなも悲鳴を上げたが、すぐに涙が出るほど笑い出した。ビックリ箱が草の上に転がった。ピエロの顔がしき

りに揺れ、ぜんまい仕掛けの笑い声が小さくなっていく。新子は鳥肌が立った。

「こんなものを私は毎日せこせこ弄っていたのか！おまけにくだらな理由で寿命が縮んだ！」

華扇が声を荒げながら、ピエロを戻そうとしたが、入りきらない。突き出した4つの棒が邪魔をしているのだ。そして、この仕掛けは一度しか挑戦できないらしい。

「箱を捨てろ、壊しちゃえ！」

気が付けば、新子は叫んでいた。胸の鼓動が、太鼓をたたくように激しい。

「望むところよ」

華扇はむすつとして言うど、ドリルに変形させた右腕で小箱を粉々に砕いた。細かくなった木くずが舞い、草の上に散らばった。

新子は自分を責めた。アタシはどうしたっていうんだ？こんなおもちゃごときを怖がってどうする？

「いやあ、本当に素晴らしい仕掛けだったな！」

バンが涙を流して笑っている。

「4本の棒で蓋をとめて、ピエロを押さえていたんだわ。1本外れても、何も起きない。2本、3本と外れても、まだ何も起きない。そして4本目の棒が外れたとたんに、ボンッ！あの時のお前の顔ったら！お前にも見せてあげたかったよ！」

バンは我慢できないとばかりにまた笑い出した。皆もつられて笑いだす。

新子はなんだか息苦しくなって、急に立ち上がると、外に出た。建物の左側に周って、神社の縁側に座り、深呼吸をして冷たい空気を吸う。続いて、母親がやってきて、新子の横に座った。

「気持ち分かるわ。あんなことがあった後だもの、陽気に騒ぐなんて、ひどいことかもしれないね。でもお父さんも、皆の笑い声を聞いて喜んでるんじゃないかしら」

新子の頭にまた、机に覆いかぶさる父親の弱弱しい姿が浮かんだ。机の上を見ながら、何かぶつぶつ言っている。

ああ、どうしてこんなにモヤモヤするんだ！これ以上何があるって言うんだ？父さんは、何かを発見したんだ。何かとは何だろう？「俺が間違っていた」？それに、工場で熱風と戦っていた時も、何かを言おうとしていた。一体、何を言おうとしていたんだ？

母の咳払いに、新子は顔を上げた。母は新子の顔をじつと見つめ、さっきの冊子を差し出した。

「父さんが棚の奥で見つけたのよ。とても興味深いから、是非新子が返ってきたら読ませてあげたいって言ってたの。今渡すのがいいと思つて」

新子はそれを受け取ると、母を喜ばせるために、冊子を開いた。題名の描かれた最初のページをめくり、次のページに目を落とす。それは、目次でも前書きでもなかった。新子は体の芯まで冷たくなった。『四人の歌姫』　くやくモユカリの話より

何百年も昔、幻想郷の人間の里に、妖怪の4姉妹が住んでいた。清らかな心に甘い歌声の持ち主で、名を、セナ、フラ、コア、ミラといった。4人はいつからとも知れぬほど長いこと、里で暮らしていた。

姉妹は共に歌う事を愛し、その歌声は夜となく昼となく、温かいそよ風のように幻想郷中を流れた。時折外の世界からやってきた人間が通りかかったが、大抵の人々は姉妹の歌声を、葉の擦れ合う音や、草むらの動物たちが立てる音、砂の流れる音だと思つてしまう。ほんの一握りのものだけが、甘い歌声が聞こえると言つたが、みなから馬鹿にされるのがオチだった。だが、それが歌声だと知る者たちは、死するその日まで耳にした歌声を忘れることは無かつた。

ある日、妖怪姉妹の歌声を耳障りに感じた魔法使いは、四姉妹を捕らえ、幻想郷の東西南北の四隅べつべつに幽閉した。だが、四人の歌姫は引き離されても夜となく昼となく歌い合い、その歌声のおかげで、幻想郷に満ちる美しさと平和は保たれた。

魔法使いは怒り、黒い三角帽を頭にかぶり、魔法の箒に跨つた。そして東西南北を順番に襲い、歌姫をひとりひとり殺していった。はじめにセナの声がとまった。つぎに、フラ。そしてコア。ミラはしばらく一人で歌い続けた。しかし、ミラの歌声も止まった時、幻想郷は沈

黙に包まれた。

そのとき初めて、魔法使いは自分の失敗に気付いた。幻想郷の中心の空の果てに、姉妹の歌声に鎮められ、幾星霜の時を眠り続ける龍神が居たのだ。その龍神が、幻想郷に舞い降りた。全身に怒りをたぎらせて。

龍神は大声で吠えながら、空を舞った。森をなぎ倒し、妖怪を燃やし尽くし、地形すらも変えてしまった。恐れをなして、魔法使いは、箒に跨り、北の方角へと逃げ去った。

その日以来、龍神と四人の歌姫を目撃した者はいない。だが今でも、どこかから甘い歌声が聞こえるという人間は少なくない。風の音しか聞こえない者には笑われるのがオチだ。だがそれが歌声だと知る者たちは、死するその日まで耳にした歌声を忘れることは無かった。

第26話 「恐ろしい真実」

鈴奈庵の娘、本居新子は両親から、禍王の“四人の歌姫計画”を知らされる。新子は仲間の茨木華扇と共に、歌姫計画を打ち破るために旅立った。

ついに、四人の歌姫全てを倒した新子。しかし、禍王の恐ろしい最終計画が始動してしまうのだった。

第26話 「恐ろしい真実」

新子は震える手で、冊子を閉じた。

—『四人の歌姫』…魔法使い…新子…いますぐ止めろ…

とぎれとぎれの父の言葉が、前とは違う恐ろしい意味を持って新子の頭にこだまする。

「悲しすぎる話よね」

新子の肩越しに覗き込んでいた母が呟いた。これを読んで気付いた。父はこう言いたかったんだ。

—『四人の歌姫』を読め。「魔法使い」が「新子」だったんだ。「今すぐ止めろ」

「でもこれのどこが興味深いと思ったのかしらね？あの人も、よくわからないところがあつたから」

—もっと早く気づいていれば！もっと前に思い出していれば…くそつ、俺は馬鹿だ…！

「父さんはこの冊子を見つけて、この話が意味することに気付いた時には、もうアタシははるか彼方だったんだ」

「この話の意味すること？何を言っているの？」

新子は考えた。夢見の泉の水で見た夢で、熱風が鈴奈庵に押し入ってきた時、父さんは何をしていただろうか？『幻想郷縁起』は机の上の遠い位置にあつたし、ひもで束ねられていた紙束は、きつとこの冊子だろう。それに父さんは物差しを使っていたぞ。この冊子には、どこにも物差しを使った跡なんてない。

ということ、父さんは何か別の事をしていたはずだ。『四人の歌姫』の話で、父さんは何かにピンと来たのか。熱風が来たとき、父さんは重大な発見がさとられてしまう証拠を、身近なところに隠したんだ。

「…あー！」

新子は声を上げた。

そうだ、隠していたじゃないか！引き出しに、あのカウンターの引き出しに！幻想郷縁起で熱風の目をごまかし、その証拠を引き出しに隠していた。だとすれば、もう一つ、机の上に見えた、あの黄ばんだ紙きれ。もしそうだとすれば、あの紙切れは…！

新子は駆けだした。息せき切つて、また丘を下る獣道を走る。途中で何度も転んで怪我をしたが、今はそんなことを気にしている場合ではない。

そしてようやく、鈴奈庵にたどり着いた。胸がゼエゼエとなり、ズキズキと肺と心臓が痛む。

カウンターの引き出しを強引に開け、例の証拠を捜す。…あつた！黄ばんだ紙、そして定規。だが、肝心のアレが見当たらない。

どこだ？どこにある？

新子はカウンターの周辺を探った。どんなに物を引っ張り出しても、目当てのものは見当たらない。いや、待てよ。確か、引き出しにはさらに秘密の隠し場所があったはずだ！

引き出しの底板は、2重になっていた。板を一枚外すと、そこには手書きの幻想郷の地図が入っていた。そうだ、やはりそうだ。父さんは、この紙と定規で証拠をつかんだのだ。アタシにもわかる。父さんが何をしていたのか。

新子は黄ばんだ紙を机の上に広げた。確か、13代目の家田家当主の遺言書だ。

“禍王の恐ろしい計画を決して——はいけない。そうすればこの幻想郷に、もう一度——訪れるだろう。禍王の計画は——だ。だから”

これを、父さんはこうではないかと考えていた。…あつた、もう一

枚、比較的新しい白い紙が。

“ 禍王の恐ろしい計画は決して放置してはいけない。そうすればこの幻想郷に、もう一度美しい平和が訪れるだろう。禍王の計画は最悪だ。だから”

これが父さんが考えた文章だ。父さんは、13代目が伝えたかったことはこうではないかと考えていた。だが、実際は違う。

真逆の事だったんだ。白い紙の裏に、更に文章が書き足してあった。そのさらに下には、小さく「稗田の屋敷跡地で見つけた冊子」と記入されていた。

“ 禍王の恐ろしい計画を決して挫いてはいけない。そうすればこの幻想郷に、もう一度禍王が悪意を以って訪れるだろう。禍王の計画は罨だ。だから”

紙の上に汗が滴る。この13代目は、父さんよりも早くにこれに気が付いていたんだ。だが、知ってしまったがゆえに、殺されてしまった。このことを血で紙に書き、父さんに託したが、父さんは全く別の曲解をしていたんだ。

宴会の場に、新子が汗だくでげっそりした顔で現れ、シートの上に倒れ込んだときには、皆の楽しげな声がぴたりと止んだ。

華扇が驚いて飛び上がり、バンやツムグが眉をひそめる。

新子は、『四人の歌姫』の冊子、黄ばんだ遺言書と本当の意味が書かれた白い紙、定規、幻想郷の地図、鉛筆を全て目の前に広げた。そして冊子を、華扇の手に押し付けた。

「アタシたち、騙されてたんだ。禍王がこの話を真似たのは、『四人の歌姫』っていう名前だけじゃない。奴はその筋書きも取り入れて、それをもとに策略を練ったんだ。父さんがこの冊子を見つけてくれなかったら、誰もこのことに気付かないところだった」

新子は震える手で地図の上に定規を置いた。

「でも、父さんはこの話を読んだ。だから危険が迫っていることに気付いて、アタシに伝えようとしたんだ。最後は、熱風でさえも何か勘づいていたのかもしれない」

華扇、バン、ツムグ、にとりがその話を読み始めると、新子は定規を地図のある場所に当てた。

—線：地図…！邪悪…中心—

父の遺した言葉を一字一句思い出していく。

新子は、南の歌姫が隠されていた「赤い砂丘」の中心に点をつけ、西の歌姫が隠されていた「竜の墓場」、北の歌姫が隠されていた「妖怪の山」の丁度あの天狗の城があったあたりに、そして東の歌姫が隠されていた博麗神社の位置に点を書いた。そして定規を使い、「竜の墓場」と「博麗神社」を結ぶ線を引いた。続いて、「妖怪の山」の点と「赤い砂丘」の点を結ぶ線を引いた。

皆が、新子のもとに集まっていた。「四人の歌姫」の話が手から手へと渡り、読み終わった者は、新子の前に置かれた地図と、そこに引かれた線とまじまじと見つめている。2本の線は、幻想郷の中心であり、人間の里の中心でもある例の工場の場所で交わっていた。

「なぜ、里の真ん中が酷いありさまなのか、ずっと疑問に思ってたわ。里は幻想郷の真ん中にあつて、四方を歌姫で囲まれているなら、外側が腐って、内側は無事なはず。なのに、逆だったもの」

華扇が険しい顔で呟いた。

「やつは自分の計画に、ここが必要だったのか」

「これが、父さんがアタシに見せようとしていたものだ。父さんは、アタシを止めようとしてたんだ。もし最後の歌姫の声が止めば、飢餓とか荒廃とかよりもずっと恐ろしい何かが幻想郷に放たれるって、悟っていたんだぜ…」

「だから東の歌姫の最後がやけに呆気なかったんだ…。3つの歌姫が倒されて、大地の大部分は豊かな地に戻り、禍王の人間を飢えさせる遊びももう終わり。そうなたら今度は自分で仕掛けた罠を試したくて、我慢できなくなった。だから、最後の歌姫と熱風の魔力を取り上げたんだ。…ふん、アイツの考えそんなことね」

バンが静かに言った。新子は、さらに正邪の意味深な言葉たちを思い浮かべ、声に出す。

“この幻想郷を守っているのはこの私なのだ。この鬼人正邪こそ、

お前たち人間の守護者なのだよ”

“ 4人の歌姫の声 止みし時 永久の安らぎ 大地を満たす”

「永久の安らぎ……」

華扇も一緒になって復唱した。希望の色を称えていた言葉が、突然冷たく響いた。

そう、正邪はこのことを何らかの方法で知ってしまったんだ。だから、自分が死んだと見せかけ、歌姫の番人になった。すべては幻想郷を守るため。歌姫を倒されないように自分が守っていれば、幻想郷は滅ばないで済む。

確かに、お前の言う通り、無知とは恐ろしい。ここへ来て、お前にはぎやふんと言わされてばかりだ。

「はやく、何とかしなくちゃ……」

—私は速いぞ、新子。天狐はまだ体力が回復していない。だが私はもう平気だ、私に乗るがいい—

竜のロックは、新子と華扇を背中に乗せると、一気に空へ舞い上がった。眼下の人間の里に、ぽつりぽつりと家の明かりが灯り始めた。暖炉のそばで眠る人、子供を風呂に入れる人、粗末な食事の支度をする人。みな、外で何が起こっているかも知らずに安心しきっている。2人は竜の首にしがみ付いて、身を斬るような風に吹き飛ばされないようにしていた。

と、その時、華扇が声を上げた。何だと思って新子もそちらを見ると、同じものが目に映った。思わず息を呑む。人間の里の真ん中で、何か巨大な物が立ち上がりつつあった。まるで、水に映った黄金色の月のような、巨大な丸い物体だ。

「二体、アレは何？」

華扇の声がかすれる。竜は低く唸ると、どんどんスピードを上げていった。人間の里の中心、マガノ国の工場がすぐ目の前に見えて来た。その工場の下側から、巨大な、毒々しい黄色のドームのようなものがせり上がってくる。不気味な工場をおもちゃの家のように押しつけて。

新子は言葉を失い、どんどん膨らむドームに見入った。

“ひめやかに流れる川の如き歌声。その危うきは、暗きに潜む”
だが、歌姫の声はもう止んだ。そして、あの話のように、華扇の仕掛け箱のピエロのように、ずつと闇に身を潜めていた禍王の復讐の念が、頭をもたげた。押さえつけるものがなくなったのだ。

工場を破壊し、地面の中からのし上がってくるドームは、大地のおできのようにおぞましく膨れ上がっていく。

「どれくらいそばまで行こうか？」

竜の声はそこで途切れた。里の反対側のはるか空の上から、雷のような咆哮が聞こえたのだ。何か、恐ろしい速さでこちらに向かってくる。月の光を反射して、くねくねと身をくねらせる虹色が見えた。その瞬間、竜は身をひるがえして急降下した。地面がぐんぐん迫ってくる！

竜は凄い勢いで着地した。土埃が竜巻のように舞い、狭い小屋に身を寄せ合っていた人々が、何だ何だと外に出てくる。竜は爪で新子たちを背中から降ろすと、飛び立とうと再び翼を広げた。

「やめろ、闘うんじゃねえ！このままここにいろ！」

新子は叫んだ。

「アイツに臆病だと思われてたまるか！」

恐ろしく歯を剥いた口から蒸気が上がる。

「神の友の名において、頼む！」

すると、竜は不満げに唸ったが、翼を半分閉じ、動きを止めた。もう虹色の巨体は真上に迫っていた。蛇をそのまま大きくしたような姿だが、その大きさはけた違いで、今まで一番大きかった麒麟をも優に上回る。太いクチバシを引き結び、虹色の大きな目は怒りに満ちている。首まわりの棘と羽毛が逆立ち、胴体にくっついた翼は目いっぱい広がっている。

残る最後の神獣、幻想郷の中央領域に住む、ケツアールだ。

—ケツアールよ、襲わないでくれ！この竜はアタシの頼みでここに来たんだ—

新子は心で呼びかけた。だが、ケツアールの度を越えた怒りが、新

子の体を稲妻のように突き抜ける。新子は氣力を奮い立たせ、もう一度呼びかける。

「ケツアール、アンタは怒りの為に大切なことを見失っている。恐ろしい邪悪がアンタの領土に現れたんだ。なわばり破りの竜よりもずっと恐ろしいのが。目をしっかりと開け、よく見ろ！」神の友の名において……

ふたたび、神の友という言葉が威力を見せた。新子は緑を中心とした色合いの虹色のケツアールがためらっているのを感じた。そして、ケツアールは空中でぐるりと向きを変えた。新子は立ち上がり、前を見て、思わずうめく。ドームは一段と大きくなっていった。悍ましい塊が完全に工場を破壊し、風船のように盛り上がっている。新子は愕然として、ただ見つめた。ドームは、下の方こそ変わらぬ毒々しい黄色だったが、てつぺんのほうは淡く光って、張り詰めたようになっていく。まるで今にも……

メリメリ　ブチツ

そのとき、身の毛もよだつ音と共に、ドームのてつぺんがパツクリと裂けた。そこから、クリームのようになつとりとした悍ましい灰色の物体がドバーツと空にむけて噴き出した。

竜とケツアールが吠える。新子と華扇があつと叫ぶ。そして、もう一つの声。それは、彼方から響く、邪な笑い声だった。ほとぼしる液体はドームの殻を伝って地面に向かって流れだす。かなり粘度が高いようで、ゆっくりと溢れていくようだ。

「何なの、アレ」

華扇が恐怖に目を見開いて叫ぶ。

赤い目をした勇氣ある野良猫が、味見でもしようとしたのか、液体に向かって走り出した。だが、液体が身体に触れた瞬間、猫は硬直し足をぴくぴくさせて倒れた。灰色のねつとりとした液体は痙攣する猫を一瞬で飲み込むと、そのまま流れ続ける。

それを見た人々が恐怖に叫び、一目散に逃げだす。

「毒があるのか……それに、アイツは生きてる」

そう、あのねつとりとした灰色の液体は、育っている。大地と空気

を餌に、増殖しているんだ。

その時、咆哮と共に、一筋の炎が放たれた。ケツアールが急降下して、丸く広がる灰色の波を襲ったのだ。虹色の炎が丸い灰色の湖のすみに、大きな点を焼き付けた。そこは固まり、液体は動きを止めた。だが、それもつかの間。周りの液体が盛り上がったかと思うと、猫を飲み込んだようであつという間に焼けた場所を飲み込んでしまった。

ケツアールは旋回し、もう一度炎を吐いた。また同じことが起る。焼けた場所は瞬く間に飲み込まれ、灰色の縁は広がる一方だ。竜は我関せずという顔で、ケツアールの奮闘を見ている。

「我らは空に戻ろう、新子に華扇。ケツアールは忙しいようだ、すぐに我らを襲う事は無かろう。ここももうすぐ危なくなる」

竜の言う通りだ。2人は再び竜の背に乗った。竜は飛び立ったところで、くるりと振り向いた。

「手遅れにならず、よかったな」

ついさつきまで新子たちが居た場所は灰色に飲み込まれていた。幸いにも、中央の貧民街地域には人っ子一人残っていないかった。皆、里の外側の地域まで逃げたのだ。よかった、と胸をなで下ろした。

ケツアールは灰色の海の上空を旋回しながら、虹色の炎を吐き続けた。だが、灰色の液体は増殖を続け、刻一刻と速さを増して広がっていく。

第27話 「大切な名前」

鈴奈庵の娘、本居新子は両親から、禍王の“四人の歌姫計画”を知らされる。新子は仲間の茨木華扇と共に、歌姫計画を打ち破るために旅立った。

ついに、四人の歌姫全てを倒した新子。しかし、禍王の恐ろしい最終計画が始動してしまうのだった。七羽のガルルガに苦戦を強いられる新子たち。だが、そこに颯爽と現れたのは…？

第27話 「大切な名前」

「どうやっても止まらないよ」

気が付けば、新子はそう言っていた。竜が吠えて、鎌首をもたげた。牙を剥き、灰色の流れに向かって真紅の炎を吐く。だが、新子は黙ったままだった。振り返って、灰色の円の中心を見ている。崩れ落ちた黄色のドームは、灰色のごつごつに覆われて見えない。周りには工場の輪郭が見て取れる。だが、輪郭だけだ。崩れた建物、塔、ブロックや石に至るまでの全てが分厚い灰色の膜に覆われていた。そして、工場が有った場所の灰色の液体の中で、何かが立ち上がっていた。

5、60メートルに達しようかというほどの高さを持つ何かがいる。巨大な三角形の頭部に、3つの触手のような足。三角の頭部から前方に突き出た角から、更に細い腕が3本見える。

三角形の建物はフラフラと直立し、目のような2つの模様を光らせた。すると、邪悪な光が発生し、足元の液体を照らし始めた。光に照らされた液体はしばらくして完全に固まった。月の光に輝くこともない。

これは、アタシらが戦える相手ではない。灰色の波は広がり続けるだろう。この人間の里をまず最初に呑み込み、工場も家畜も覆い尽くす。谷も丘も埋め尽くされて一緒にたにされてしまう。

灰色の波が通るところ、誰も逃れられない。死は平等に訪れる。人間にも、わずかに生き残っている妖怪にも、魔法の森の大きな鳥にも、

赤い砂丘の獰猛な怪物にも。河童にも、妖怪の山のケチャルコチルも、元はマガノ国の怪物だったスラッグさえも取り込むだろう。マガノ国が全ての憲兵を含めた軍をすぐに引き上げた理由が分かった。

灰色の波は、あの三角形から発せられる光を受けて固まり、川をぬかるみに変え、家も作物も怪物も木々も人も皆、石の殻に閉じこもってしまう。そして波は進み続ける。山に登った者は、波が到達するのを頂上で震えながら待つことになる。

色々な生き物が息づき、様々な表情を持つ、幻想郷の大地。沢山の秘密も秘めていた。そのすべてを失って、幻想郷は冷たい灰色のただっ広い死んだ大地になってしまうのか。

これは禍王からの復讐に違いない。予言の女が立ち上がり、自分に反逆した事への。何年にもわたり抗い続けた幻想郷への復讐だ。

禍王は読んでいたのだ。必ず誰かが、大地の荒廃に異常を感じ、必ず歌姫の在り処を調べるだろうと。歌姫計画を知ったものが、これを踏みにじりに来るだろうと。敵の陰謀のピースが一つ一つはまっていく。新子は歯ぎしりした。

アタシらは考え無しに敵の餌に飛びついてしまった。これまでのことを考えると、いとも簡単に騙された自分が信じられなかった。

最後の歌姫を守る石碑の碑文は、警告ではなく、アタシへの挑戦状だった。あれはアタシに最後の致命的な一步を踏み出させるためのダメ押しだったんだ！

でも、今そんな事に気付いても、もう手遅れだ。禍王は最初からどう転んでも幻想郷を我が物に出来るように事を運んでいたんだ。幻想郷が灰色に覆われて固まったら、その上に自分の帝国を築けばいい。

新子の心に、手のつけようのない激しい怒りが燃え上がった。

禍王はアタシらがどうやって幻想郷を滅びへと誘うのか、見て楽しんでいたんだ。旅の途中で倒れれば、幻想郷は歌姫によってじわじわと死にいたる。歌姫を全部退治すれば、死はたちまちにして訪れる。どちらにせよ、敵の勝ちなんだ。

新子がそう思った時、不気味な雄叫びと共に、北の空に七羽のガル

ルガが現れた。そして、妖怪の山に巻き付くようにしがみついているのは、赤黒い渦を巻くような雲だった。その雲の中心に、二つの赤い目玉が光る。

新子の中で禍王への怒りが一瞬で恐怖に変わった。ケツアールがくるりと振り返り、雲から離れて猛スピードで向かってくるガルルガに向き直った。竜が身体を震わせると、赤い目で新子を見つめた。

「敵は我らの攻撃に気付いたな。見ろ、大将のお出ました。あのドロドロを守ろうと、敵の親玉自らが出向いてきたぞ」

まるで馬鹿にするような口調。虹色の炎に焼かれた灰色の焦げ目をチラリと見た。

「これくらい、大した痛手では無かろうに。敵は余程、我ら神獣が怖いようだな。たった二匹の神獣で手一杯のようだ。さて、お前たちを降ろさなければ。あの憎き鳥どもはケツアールを仕留めた後、こっちに来るぞ」

「だめだ！今ならまだに逃げられる……！」

真紅の瞳が揺れた。

「逃げるくらいなら、闘って死ぬ。もう、隠れる事にはうんざりだ」

「どっちみち、灰色の波が広がれば、隠れるところなんてない。私たちがから離れないで、新子が居れば、まだ戦える」

「そうだぜ！神の友なんかじゃない、このアタシたち、“友だち”のためと一緒に戦おう。今は空が一番安全なんだ」

竜の目が見開かれる。

「さあ、仲間と肩を並べて闘うのよ」

「……いいだろう、今はケツアールと肩を並べ、闘ってやる。そしてともに死ぬのだ。だが、命あるうちは、できる限り敵を痛めつけてやろうではないか。死にゆく我らの大地の為に。我らの祖先、そしてもう生まれることのない我らの子孫の為に」

竜はだつと飛び出すと灰色の海の上を全速力でガルルガに向かった。新子は拳を握り、目をつぶった。すると、瞼の裏に『幻想郷縁起』の一節が浮かんできた。

【禍王、狐の如く狡猾にして、諦めることを知らず。そのケダモノの怒

りと嫉妬においては、千年の時も一瞬に過ぎない」

『幻想郷縁起』は禍王の事をケダモノと呼んでいる。あれを書いた人は、アタシらが今まではつきりと理解していなかったことを分かっていたんだ。始まりはどうだったにせよ、禍王は今や、魔法を使える人知を超えた強大な独裁者以上の存在だ：いや、独裁者以下かもしれない。

遙か昔、奴は恐らく、黒い三角帽を頭にかぶり、箒に跨った、ただの魔法使いだったのだ。奴は恐怖というものを知り、苦い敗北を味わった。そして、自分にそんな感情を抱かせた幻想郷への復讐のために、山を越えて自分がモノにできる土地を捜したんだ。

禍王はその当時は人間だったかもしれない。だが、今はもう人ではない。奴の人間性は嫉妬と憎しみと悪意とに、とうの昔に焼き尽くされて灰になってしまった。残ったのは、思い出だけだ。

人がケダモノに変わった。魔力を糧として、目の前のものすべてを破壊し、墮落させる、悪の力に。決して枯れることのない力に。

どうしてアタシは禍王を倒せるだなんて思ったんだろう？ 奴は何百年もの間、目的に向かって突き進んできた。そしてアタシたちは、奴の網の中でもがいていた。何も知らず、祖先の犯した過ちを愚かにも繰り返してきたのだ。

二匹の神獣の咆哮が雷の如く轟いた。七羽のガルルガの、血も凍る叫び声が空を裂く。風に乗って焦げた毛の匂いや腐ったような悪臭が飛んでくる。だが新子は、音も匂いも感じなくなっていた。

そうだ、そうなんだ。かつて、この幻想郷で戦争があった。初めて攻めて来たマガノ国軍と、幻想郷の民たちの戦争が。戦いは総力戦となり、マガノ国は敗北した。それがたとえ、仮の敗北であったとしても、勝ったことには変わりない。祖先の犯した過ちはあっても、祖先が手にした栄光はある。

— 敵は余程、我ら神獣が怖いようだな。 たった二匹の神獣で手一杯のようだ—

そうか！ 禍王はあらゆる可能性を考えて、計画を立てた。でも、神獣の事は計算に無かったんだ。それもそのはず、禍王は神獣を一匹残

らず滅ぼしたつもりでいたのだから。

新子は顔をびしやりと叩いた。ガルルガはもうすぐそこだ。狂気に目をぎらつかせ、すぐにでも切りつけられるよう、かぎ爪を構えている。ガツと開いたクチバシの大きくせり出した下顎に、肉を抉る突起がのぞく。

「だから、ガルルガ…テメエらの力を借りるぜ！」

新子はそう言うのと、体に湧き上がる力を一気に体外に放出した。放出された霊力は形を取る。青い巨体にたくたくましい剛腕、敵を睨みつける鋭い顔つき、竜のような力強い後ろ足、長い尻尾。青い化身はガルルガに向かって気合の雄叫びを放つ。

旅の初め、アタシはガルルガに襲われた。あの時は“魔に対して力を発揮する程度の能力”を使っても、ガルルガには手も足も出なかった。でも今度は違う。あの時とは違うんだ。

『東の反逆者』!!」

『東の反逆者』のうなじに手足の先を突っ込んだ新子は、その化身を自分自身であるかのように操る。化身は竜の背から飛び跳ね、ガルルガに殴りかかる。

一発拳を振るうごとに、頭に言葉が浮かぶ。その言葉を、意識しないうちに叫んでいた。

「ロックー！」

すると、その竜の名前に導かれるように、次々と言葉が頭に浮かんできた。博麗神社で聞こえた、外国語のような奇妙な言葉だ。

—ロックワブルアーゴルカムナセトレーナ—

そうか、これは外国語なんかじゃない。名前だ！神の友が生涯で一番大切にしていた、5つの名前！

竜、麒麟、グリフォン、天狐、ケツアールの名前。新子はもう一度拳を握り、言葉を叫んだ。

「ロックー！ワブルー！アーゴル！カムナ！セトレーナ！助けてに来てくれ、幻想郷の為に、神の友のために!!」

竜のロックがびくつと震えた。ケツアールも振り返り、虹色の目を燃やしてじつとこちらを見ている。

だがその時、七羽のガルルガが頭上に現れた。ガルルガは新子たちを取り囲み、血に飢えた狼のように吠えて牙を剥く。カギ爪と歯が新子たちを八つ裂きにしようと襲い掛かってくる。

ガルルガは一団となって四方八方から襲って来た。半分が襲い掛かって敵の気を惹き、もう半分が翼の影から隙を突く。ガルルガは凶暴で何者をも恐れず、おまけに疲れを知らなかった。無数の戦いを勝ち抜いた傷を体に残し、狡猾さに満ちている。だが、歴戦のガルルガでも、一度に二匹の神獣と戦うことなど滅多にない。そればかりか、今度は竜の力を持った青い化身と、華扇も相手なのだ。

ロツクがカギ爪でガルルガに斬りつけ、炎を浴びせた。ガルルガが怒りに吠える。新子も再び竜の背中から飛び出し、ガルルガの耳を引つ掴んで殴りつける。華扇もドリルに変化させた右腕を振り回し、敵を寄せ付けない。その頭上から、負けじと恐れ知らずの竿打が舞い降り、ガルルガの首や頭をつついては怒りの火に油を注いだ。

その時、一羽のガルルガがよろめいた。ケツアールのクチバシの一振りに首を掻き切られ、身をよじりながら落ちていく。地面に叩きつけられたガルルガは、一瞬で灰色の波に飲み込まれてしまった。

二匹の竜は雄叫びを上げ、新子たちもわっと沸いた。だが、残りのガルルガが怒り狂い、奇声を上げて突進してきた。鋸のような歯と鋭いカギ爪がケツアールの喉元を突き刺す。ケツアールが痛みに吠えた。

翼や背中が緑色に変色している大きなガルルガが、巨大なコウモリのように逆さまになって首に食らいついている。クチバシから滴るケツアールの血の匂いに色めき立って、残りのガルルガが群がる。よろめくケツアールは頭から尻尾の先までをガルルガの紫色の甲殻と翼に覆い尽くされてしまった。

「アイツはもう終わりだ。奴らはこうやってトドメを刺す」

ロツクがぼそりと言った。

「だめだ、あの下に入ってる！」

新子がそう言うと、ロツクは旋回し、ガルルガとケツアールがもみ合っている下に入った。新子たちの頭のすぐそばで、緑色のガルルガ

がボロボロの翼でケツアールの首を抱き込み、気味の悪い体をぴたりと押し付けている。だめだ、今殴れば、この巨大な拳ではケツアールにまで当たってしまう。

だが、華扇はロツクの首の上に立ち上がると、いとも簡単にガルルガの首の上に飛び移り、バランスをとった。そして腕を変形させたドリルが回転し、切っ先が光る。そして、回転するドリルをガルルガの下顎の付け根に突き刺した。ゴロゴロ…と恐ろしい音が響き、ガルルガが悲鳴を上げた。顎の下には大きな穴が開き、首の内部が見えている。華扇はすぐにロツクの背中に戻ると、ロツクは凄く速さでその場を離れた。後ろで、緑色のガルルガが石ころのように落ちていった。

今度は勝利の声は上がらなかった。ケツアールが空中で身をよじり、襲い来るガルルガに向かって口を開いて頭を振り回し、炎を吐く。だが、動きがぎこちない。弱っているのだ。

ロツクも弱っていた。双頭の犬との戦闘で疲れた上に、無理な飛行を続けたことでさらに消耗していたのだ。閉じていた傷が開き、真紅の体のあちこちにどす黒い血がにじんでいる。

ガルルガたちはそれに気づいていた。ロツクの羽ばたきが不規則な事、血の匂い。ガルルガたちはもがくケツアールを捨て置いて、もう一匹を仕留めようと金切り声を上げて猛然と迫ってきた。数こそ五羽に減ったが、戦いの疲れなどみじんも感じさせぬに、血に飢えて凶暴だ。

五羽のガルルガは真紅の炎をいかくぐると、ロツクの脇腹に体当たりをした。ロツクはよろめき、落ちかけた。巨大な翼を懸命にはためかせ、棘のある二股の尾を振り回す。ガルルガが後を追いつ、取り囲んで再び攻撃をした。

「私はこれまでのようだ。だがせめて、私も一匹くらいは道連れにしたいな」

その時だった。空一面に大きな羽毛がぶわつと舞った。ガルルガが驚いて吠え、わつと散る。上空から颯爽と現れたのは、南の領域のグリフォン。茶色と白の巨大な翼。クチバシを大きく開いて吐く炎が黄金色に輝く。ガルルガはグリフォンに向き直った。クチバシを

大きく開けて怒りに吠える。その時突然、一羽のガールガがふつと消えた。

ボキボキ、バキツ

嫌な音がしたその先に、まるで雑巾を絞るかのようにガールガを前で振じりこんだ緑の巨体が見えた。息絶えたガールガの体をバラバラに引きちぎり、北の麒麟が神々しい雄叫びを上げる。残されたガールガも金切り声を上げ、猛然と襲い掛かる。すると、轟音と共に白銀の炎が煙を突き抜けて来た。三羽のガールガはさつと急降下したが、一羽だけ出遅れた。白い炎を受けて翼が燃え上がり、真つ逆さまに落ちていく。

その時、恐ろしい声が、北の空に広がる赤黒い雲から轟いた。

第28話 「無限の闇を光に変えて」

ついにその姿を現した禍王。新子はその絶対的禍に抗う事は出来るのか。

今、幻想郷の存亡をかけた戦いが始まった。

第28話 「無限の闇を光に変えて」

残るガルルガは三羽。その三羽が煙と炎の向こうに見たものは、牙を剥いた五つの口、無数のカギ爪に棘。ガルルガたちは挑戦的に鳴きながらも、その場をうごかず、勝算を推し量っている。

正義と友情の象徴の竜。力と名誉の象徴の麒麟。勇気と知識の象徴のグリフォン。愛と不屈の象徴の天狐。そして希望と純潔の象徴のケツアール。

五匹の神獣が一齐に吠えると、三羽のガルルガはくるりと向きを変えて逃げ出した。そして、自分たちがされた仕打ちを誰かに言いつけるように、わざとらしく悲壮感漂う声で鳴いた。

「愚か者共が…。この私に反逆したお前たちを、この禍王自らが始末してやろう」

妖怪の山にしがみ付いていた黒雲の一部が地上に降り立った。雲の中にギラギラと光る二つの目には瞳が何個もあり、雲から真っ黒い腕が突き出した。地面に付いた腕は力強く大地に食い込み、まるで地を這う昆虫のようだ。だが、その黒雲には今までの歌姫等では比べ物にならない程悪意に満ちた邪悪が込められている。

あれが、禍王…！

博麗神社のあった丘を降りた人間の里では、バンやツムグ達が遠くに現れた禍王を見つめていた。300メートルもあろうかという大きさで、巨大な目がギョロギョロと動き、幻想郷をぐるりと見渡す。

「幻想郷の愚民共が…。お前たちは何も理解していない、お前たちは自らの手で自らの進化の可能性を封じ、怠惰への道を歩む…！だから滅びなければならないのだ。だが、幻想郷そのものは美しい。あの妖

怪の山も、魔法の森も、お前たち愚民共の手にあるというのが許せない」

「な、何を言ってやがる！」

ロツクの背の上から新子が叫ぶ。

禍王の無数にある瞳の一つが新子を睨んだ。

「黙れ！この幻想郷は私のモノだ、もう灰色の海をとめることはできないぞ：クハハハハハ：」

高らかな笑い声が幻想郷中に轟く。それに呼応されるように、灰色の中心に居た三角形の怪物が動き出し、固まった灰色の上に立った。そして目玉模様から光を発し、液体の固まる範囲を拡大していく。ガールガが再び雲の中から現れ、神獣たちに向かって行く。突風が吹き、新子と華扇は竜の背中から落ちかけて宙づりになった。

「ロツク、ようやく敵が出て来たんだ：一発ぶちかまそうぜ」

「そう言うと思ったぞ、新子」

ロツクは前足で新子と華扇を抱え込むと、ガールガの猛攻をかいぐつて地面に降り立った黒雲へと向かって行く。

「小癩な神獣めが：」

禍王の目が光り、魔力の光線が放たれた。ロツクは空中で見事に回りながら光線を避け、確実に距離を詰めていく。当たりそうになる光線には特大の炎を吐きつけ、相殺する。

「ついに来たぜ、禍王！」

『東の反逆者』が力を溜める。禍王と言う最大最強の魔を前にして、新子の力も今までにないほど、限界を超えるほどに高まっている。禍王は巨大な腕を持ち上げ、新子たちを叩き潰そうと襲い掛かる。竜が禍王の腕の一振りを前足で押さえ込み、腕に炎を吐いた。黒い煙状の腕が炎の勢いに晒されてわつと散る。

「おのれ：ウラアア!!」

禍王が反対側の腕を振るうと、疾風と共に灰色や黒、紫や赤色の星型の光弾が無数に展開された。竜は咄嗟にそこから離れ、飛び交う光弾を避けようと宙を舞う。

「やられっぱなしってわけにやいかねえよ!!行くぜ、華扇！」

「ええー！」

新子と『東の反逆者』、そして華扇は竜の背から飛び降り、星の光弾を足場のようにして飛び跳ねながら禍王へと向かって行った。『東の反逆者』は空中で一回転すると、拳を天に掲げ、そこに靈力を集中させる。そして華扇が新子の肩に手を置くと、掲げた拳の周りに華扇のような包帯の帯が出現する。包帯は拳の周りを螺旋状に囲い、『東の反逆者』の右腕は巨大なドリルと化した。

「喰らええ…『リベリオオオオン…ドオリイルウ…フイストオオオオ』
!!」

『リベリオンドリルフイスト』。華扇と新子の力が合わさり、右腕に作った巨大なドリルを回転させながら、まるで青い流星の如く禍王へと突撃した。目の前を邪魔する光弾さえも粉々に砕きながら、一直線に。

しかし、禍王の煙の体の中から飛び出した、ワイヤーのような細長い触手が『東の反逆者』に突き刺さった。それによって勢いが落ちたのを皮切りに、次々と尖った触手が青い巨体に突き刺さる。靈力で作った巨体が崩れていく。だが新子は諦めない、崩れかけの化身の体で、禍王にまでたどり着こうと力を込める。

だがその時、禍王の巨大な手が、新子と華扇、そして崩れかけの『東の反逆者』を握りこんだ。

「そんなものかアアア？本居新子オオオオ!!」

そして新子らを握ったまま、その手を地面に何度も何度も叩きつける。地面がめくれ上がり、爆発のような衝撃が起こった。その後、禍王は手の中にある愚かな塵を、はるか遠くへと投げ飛ばした。

「いいか！私こそがこの世界の…支配者なのだ！」

幻想郷の空に、大地に、邪悪な笑い声が轟いた。

投げ飛ばされた新子たちは、物凄い勢いで空を飛んでいく。どうすることもできず、ただ投げられた時の勢いのままに飛ばされる。邪悪な光を放つ三角形の怪物が眼下に通り過ぎた。それでも止まることなく、人間の里の上を通過する。そして、彼女らがぶつかった場所は、

博麗神社だった。鳥居を破壊し、そのまま神社に突っ込む。衝撃で神社はガラガラと音を立てて崩壊する。その時、新子は華扇の腕を掴もうと手を伸ばすが、上から覆いかぶさってきた大量の瓦礫と粉塵によつて遮られた。

新子がやつとの思いで目を開けると、当たり一面は木片に覆われ、上からは大きな瓦礫に押しつぶされ、足を動かすこともできない。動かせるところといえば、目と口、そして左腕だけだった。

だが右腕と両足の先はまだ『東の叛逆者』と繋がっているようで、ロボロに崩れた青い巨体が自分の下に横たわっている。

「動いてくれ…ッ…動いて、この瓦礫を退かしてくれ…!」

しかし、動かそうとするが、巨体はカタカタと壊れたおもちやのようにならざるだけで、一向に動く気配はない。大きな顔の目の光が完全に消え失せ、辛うじてつながっていた手と両足も巨体のうなじから外れてしまった。『東の叛逆者』は芯を抜かれた達磨落としのようにバラバラになり、液体となって流れて消えてしまった。

くそ、どうすればいい…?

ふと視線を前にずらすと、目の前の瓦礫の奥に、ピンク色の髪の毛が見えた。華扇が目を閉じて、新子と同じく瓦礫の下敷きになっていた。

「華扇…!」

呼びかけても返事はない。

「華扇…おい!!」

もう一度呼ぶと、華扇の瞼がぴくつと動いた。そして目を開け、新子を見た。

「新子」

か細い声でそう呟いた。

「ああ、新子だ。アタシはここに居るぜ」

「…明るいわね」

そこで気付いた。この瓦礫の中が、ほんのりと明るい。上の瓦礫の隙間から、わずかに光が差し込んでいる。いや、この明るいのはそれだけではない。新子の体から、僅かではあるが光が発せられていた。

その時、瓦礫の上から音がした。何かを退かすような、ガタンと言
う音。上に誰かが居て、瓦礫を退かしているのか…。

ガラン

頭上にあつた瓦礫がボコンと下に落ちた。空いた穴の向こうに見
えたのは、こちらを覗き込む少女だった。さつき、博麗神社で見た幻
に映っていた、掃き掃除をしていた巫女の少女だ。その少女は穴の中
に、手を差し出した。新子よりもずっと細く小さいが、何故だかとて
も力強く見える。

新子は訳も分からないまま、その手を握り返した。

その時、沈黙が訪れた。中を照らしていた光はだんだんと小さくな
り、やがて消えた。何も聞こえない。華扇でさえも黙っている。

そのころ、戦いの場所では。やつと激戦地へたどり着いたバンやツ
ムグたちは巨大な雲を見上げていた。そのそばでは、五匹の神獣と三
羽のガルルガが戦っている。

「この地から去るがいい！」

麒麟が緑色の炎を吐く。だが、禍王から魔力を供給されたガルルガ
は以前よりも素早い身のこなしで炎を避け、麒麟の胸元に5本の指を
突き刺した。麒麟が前足でガルルガを掴もうとするが、触れられる前
に素早く脱出する。

「兄さんの仇…！」

天狐も白い炎を吐きながら飛び回る。4本の尻尾でガルルガを殴
り、炎を浴びせる。しかし、ガルルガは尻尾に噛みつき、下顎のクチ
バシの突起を突き刺した。フックのように逆立った突起は天狐の尻
尾に挟りこみ、ガルルガが頭を引くと尻尾は切り裂かれた。血が流
れ、天狐が悲鳴を上げる。

そこへすかさずグリフォンが舞い降り、ガルルガの背中に爪を立て
る。だが紫色の甲殻は異常に固く、爪も通さない。

もう一匹のガルルガがグリフォンの背後から蹴りを入れた。

もう神獣たちも満身創痍だ。その様子を禍王はじつと笑いながら
眺めていた。

「この暗黒のパワー…素晴らしいぞ。やはり力こそが全て…戦いはパワーなのだ!!」

その時だった。遠くの博麗神社の残骸の中から、一筋の光の柱が出現した。青い光は天に上り、幻想郷中を覆い尽くしていた赤い雲を貫いた。

「なに…、これは…?!」

青い光は炸裂し、そこへガルルガが近寄った。青い光の中から、大きな袖を纏った腕が現れた。腕は一瞬でガルルガを掴み、握りつぶすと、禍王の居る方角に向かって投げつけた。続いて、巫女服に身を包んだ巨大な女性が丘の上に現れた。女性の巨像は青く輝き、その大きさは禍王よりも頭一つ分ほど大きい。

青い巨像はゆっくりと足を踏み出した。禍王を睨みつける険しい表情をした頭の内部には、『東の叛逆者』が、更にその背後には新子が立っていた。巨像は歩く速度をだんだんと早め、ついには走り出し、そして人間の里の目の前で大きく飛び跳ねた。その拳を振り上げ、落ちぎまに禍王の煙のような体を殴りつけた。

「ぬおおあああ…!!」

殴られた禍王は、地面を転がった。

「あ、アレは…!」

竜のロツクが血の滴る口から声を発した。巨像から発せられる淡い光に曝されて、ガルルガが苦しそうに顔を背ける。

「あれは…、神の友…ではないか…!!」

戦いを見ていた河城にとりも、思わず目の前の光景に目を疑った。神社の瓦礫の中から立ち上がった茨木華扇は、にとりと同じ名前を口にした。

「博麗霊夢…」

転がる禍王を見ながら、博麗霊夢と同じ姿をした巨像は腕を組み、堂々と直立した。そして、その口から本居新子の声が聞こえた。

「英霊の想いをこの身に宿し、無限の闇を光に変える。威風堂々、英姿

颯爽！『新博麗幻影』!!」

「キエエエエ…くくくつ、何かと思えば博麗霊夢！貴様が本居新子に力を貸したというのか。だが、今やお前如きに負ける私ではない！一瞬で消し…」

禍王がそう言いかけた途中で、新子は拳を上げた。それに連動するように『新博麗幻影』も腕を振り上げる。そして一気に禍王との間合いを詰め、その脳天に拳を叩きつけた。

「があ…え」

禍王がうめく。だが間髪入れずに放たれたアッパーが禍王の体を上へと吹っ飛ばした。落下する禍王に、追撃として容赦のない拳の殴打をお見舞いする。

禍王は再び倒れ込む。だがすかさず新博麗幻影は禍王の体を掴み、妖怪の山に向かって投げ飛ばす。煙の体が山の斜面に激突し、ずるずると斜面をずり落ち、地面に叩きつけられる。

「ぬううう!!まさかこの私がここまでやられるとはな。だが、喰らうがいい!!」

禍王は態勢を立て直すと、無数の瞳が宿る縦に裂けたような赤い目が光り出した。そして次の瞬間、悪夢のような地を揺るがす轟音と共に、目から極太の光線が発射された。

『『ダークネススパーク』!!敵を焼き尽くせエエ!!』

それを避ける間もなく、新博麗幻影は光線をモロに受けてしまった。巨体が後ろへ倒れ込み、跳ねた光線が地面に流れ星のように降り注ぐ。

「ウラアアア!!」

禍王が勝ち誇った声を上げた。が、しかし、皆が見守る中、新博麗幻影の頭の中にいる新子だけは、倒れては居なかった。すぐに巨像は立ち上がった。そして、新子はいつの間にか手にしていたあの金属のバットを振り上げる。すると巨像の動きも新子と連動し、腕を振り上げた。その手には、巨大なお祓い棒が握られていた。

新子が力を溜めると、新博麗幻影も霊力を一気に放出した。

「…おお…」

神獣たちも巨像の周りを飛びながら歓声を上げた。だが禍王はそれをうるさいとでも言うように叫び声をあげると、再び目から極太の光線を発射した。

新博麗幻影もお祓い棒の切っ先を敵に向け、突っ込んでいく。そしてお祓い棒と光線がぶつかり合う瞬間……まばゆい閃光があたりを覆い尽くした。光線はお祓い棒の切っ先に当たると、まるで前に壁でもあるかのように弾かれた。

「な、何だと……!?!」

お祓い棒は光線を切り払い、その腕を高らかに挙げた。

「新博麗幻影奥義……『リベリオンエツジ』!!」

そして、お祓い棒を一気に禍王に向けて振り下ろす。お祓い棒が眉間に突き刺さり、雲の体が揺らぐ。赤い目が飛び出しそうなほど大きく見開かれ、禍王の苦痛にうめく声が轟く。

「ぎ、ぎえ……ぎやあああああ……」

脳天から真つ二つに両断された雲の体は崩れ、頭上を覆う赤黒い雲に取り込まれた。その赤黒い雲の中心に黒い人影が見えたが、すぐに赤黒い雲は転がるようにして一目散に妖怪の山を越えて、マガノ国へと逃げていった。残された二羽のガルルガも哀れっぽく鳴きながら退却していく。

役目を終えた博麗霊夢は、そつと新子の体から離れ、優しく微笑むと流れ星のように博麗神社へと戻って行ってしまった。

神獣たちも、新子も、後を追わない。黄金色に輝く月に照らされて、今にも広がりゆく灰色の波が眼下に見えるからだ。全てを死に至らせる冷気を感じて、何をすべきか分かっていった。

五匹の神獣は灰色の海を取り囲む輪となった。その後ろで、新子が固唾をのんで見守る。

次の瞬間、何の合図もなく、神獣たちが一斉に吠えた。口から炎が噴き出す。真紅、緑、黄金色、白銀の炎に、虹色の炎。

――敵は余程、我ら神獣が怖いようだ。たった二匹の神獣で手一杯のようだ――

新子は竜のロックの言葉を思い出した。二匹で手一杯なら、5匹な

らどうだ？

灰色の縁の縁が黒く焦げた。やがて、縁がドーナツ状にすっかり黒く焦げると、神獣たちは焦ることなく、ゆっくりとその輪を縮め始めた。

神獣たちはただひたすらに炎を吐いた。炎を浴びせた灰色の波は、焦げて動かなくなる。神獣たちは灰色の円を、外側から一分の隙も無く焼き尽くしながら、中央に向かってじりじりと進んだ。神獣はますます前進し、輪は縮まっていく。大きな月は空高く昇って青白い光を放ち、真つ黒な空には満天の星空が浮かぶ。

じわじわと黒こげの帯が太くなるにつれ、灰色の部分は狭まっていく。中央に居た三角形の怪物が困惑し始めるころには、黒が灰色に勝っていた。人間の里の住民たちがその光景を驚いて見つめている。

神獣の輪はいよいよ小さくなり、互いの体が触れ合うまでになった。五匹が一斉に炎を吐くと、炎の色が混じって、虹色になる。そして、ついに一本となった炎が止んだとき、禍王の恐ろしい計画は息絶えていた。そこには、ただ途方もなく大きな丸い焼け跡が黒々と広がるだけだ。

神獣たちは、まるでこの時が終わってしまうのを惜しむかのように、真つ黒な円の中心にとどまっていた。灰色の液体の魔力を動力源として光を発していた三角形の怪物は、赤い火花を散らしながら、ゆっくりと崩壊していった。

竜、麒麟、グリフォン、天狐、ケツアールは共に勝利を喜び、失われた物を嘆き、そして新しい幻想郷に未来を託していた。そして、この光景を見た人々は皆、喜びと驚きの波にのまれた。輪を成す五匹の神獣たちの体は輝いて、まるで空に浮かぶ幻想郷の縮図そのものだったのだ。

こうして、幻想郷最後の神獣たちの意志と本居新子によって、禍王の陰謀は大詰めで挫かれ、幻想郷には平和が訪れた。

やがて、この話は伝説となるだろう。この夜は“神の夜”と呼ばれ

て、幻想郷一番の祭りの“博麗神社例大祭”の日となり、人々はごちそうや酒、踊り、ゲームで祝う。僅かに幻想郷に残された妖怪たちが花火を作り、神獣の炎の輪を思わせる輪となって幻想郷の空を飾る。

子供たちは、色を塗った木に光る布を巻いて作った神獣や『東の叛逆者』を模した彫刻に跨る。そして真夜中になれば、人間の里の真ん中で大きな火が炊かれ、里中に人々の歓声が響き渡るのだ。

幸いにもあの“神の夜”の戦いでは、死人は出なかった。バンやツムグ、にとりとアリスたちが必死に住民を避難させたのだ。新子は、声もなく感謝の言葉を口にするぐらいしかできなかった。だが、黒こげの地面に降り立った時、神獣たちにまじまじと見つめられ、新子と華扇は何か話さなければならぬと思った。

「アタシの名前は本居新子だ。“神の友”が胸の内にはまっていた名前を使ったことをゆるしてくれ。アタシたちの、そして彼女を地を救う為だったんだ……」

神獣たちはその言葉を噛みしめ、やがて五匹とも頭を下げた。誇り高い麒麟まで、ぎこちないながらも会釈した。

「だが、謝って済むことか？」

麒麟が口を開いた。

「お前が我らの名前をまとめて呼んだために、今や我らはお前の名前だけでなく、互いの本当の名前を知ってしまった。どいつがどの名前かは馬鹿でもわかる。これは取り返しのつかない罪だぞ」

「取り返しはつかないわ。でも、それは本当に罪かしら？」

という華扇の言葉を聞いて、ケツアールがせせら笑う。

「本当の名前を知っていれば、ソイツを支配できるではないか！」

「つまり、我々はみな平等に互いを支配し、支配されることができるというわけさ」

グリフォンのアールが生意気な口を叩く。

「だが、私はもうお前に付きまとわれるのは嫌いだな、ワブルさんよ」
「だったら、しっかりと一言言ってからわが北の領域に入るがいい、ロック」

「私はカムナと申します。神の名前でカムナ……ふふっ、面白いでしょ

う。ちなみに兄はカミナといたのですよ」

「我はセトレーナ。こう見えても女だ。あの時は寝起きだったし、突然の事で気が立っていたんだ……」

神獣たちは互いに微笑みながら牙を剥いたが、それ以上何も言わなかった。

「おーいー！」

後ろから声がした。振り向くと、ツムグたちが息せき切って走ってきた。華扇のもとにはアリスやにとりがやってきて、バンは立ち止まって、その様子を見ている。

そして、ツムグはゆっくりと新子の前に歩み出た。拳を前に突き出す。

「…へっ」

新子は小さく笑うと、ツムグの拳をガン、と叩いた。これが二人なりの言葉の交わり方なのだ。

それを見た華扇が、ヒューッと口笛を吹いた。

「なるほど、新子とツムグ、ね」

「お前はどうするのだ？」

ロックがそつと華扇に囁いた。

「私はまた旅に出るわ。マガノ国の残党の始末をしたり、どんな妖怪がまだ幻想郷に残っているのか、調べなくちゃ」

戦いの後、華扇の調べにより、幻想郷の周囲に新しい結界が張られていることが分かった。200年前の禍王の襲撃時に、マガノ国との境目の博麗大結界が破壊されたそうなのだが、歌姫が全て破壊されたことにより、結界が復活したようなのだ。更に、この新しい結界は幻想郷内にマガノ国の者が立ち入るのを許さない。もう幻想郷に禍王がやって来る事はない。

二日後、里で新子の父親の葬儀が行われた。そして、里の共同墓地に墓を作り、そこに遺骨が埋められた。幻想郷の英雄にはすこし物足りないであろうが、彼はきつとこれで喜んでいるだろう。自分が命

を懸けて伝えようとしたことに気付き、それを実行してくれた。

そして、河童たちの高度な建築技術によつて博麗神社は再建された。元通りになったのだ。壁は真っ白く、屋根の瓦は規則正しく並び、居住区もきちんと整えられた。新しい博麗神社の巫女を決めるべきという提案が出され、その巫女の候補として新子の名が挙げられたが、新子はそれをきっぱりと否定した。

「博麗の巫女？ いやいや、そんなの今は必要はねえのさ。あの神社には、まだ幻想郷を守ってくれる要が居るんだぜ」

里の中心は焦げた灰色で埋め尽くされてしまったが、これはかえつて都合が良かった。禍王が無理に工場を建てた事によつて悪くなつた土壌の上に新しい地面が出来上がったことで、そこに家々を立てることができた。

里の畑は豊富な野菜で埋め尽くされ、狩人は毎日大量の肉を持つてくる。家畜はこれ以上増えたら困るといふほど肥えに肥えてきた。今まで貧相な暮らしをしてきた者も立派な家を持ち、家族と一緒に暮らしている。

妖怪の山の荒々しく禿げた斜面には新しく緑が植えられ、河童たちはようやく故郷へ帰る事が出来た。山のとつぺんで、麒麟が力強い咆哮を上げた。

赤い砂丘には背の高い草や小さな木が生え、虫や鳥たちでにぎわっている。今まで砂丘に巣くっていた怪物や恐竜たちはその環境でも住めるように適応し、もう赤い砂丘ではなくなっていた。いずれ、もつと緑が増え、再び森の一部と化すだろう。草の上で、動物たちと一緒に眠るグリフオンの姿が有った。

空では、しよつちゆう竜が舞っている。里の上空を飛び、たびたび竜の形をした大きな影を地面に落とす。竜は在りし日の事を思い出しながら、この青く澄み渡つた空を堪能するのだった。

竹林から飛び出した天狐は、大きなあくびをしながら丘へと飛んでいく。日の光を存分に浴びながら、ゆつくりと寝そべる。

人間の里のはずれの岩地では、ケツアールが巨大な身をくねらせな

がら地を這っていた。流れる川に身を浸し、泳いでいく魚たちと戯れている。

かくして、幻想郷からマガノ国を追放することに成功した新子たち。だが、敵は完全に滅んだわけではなく、今も国境の山脈の外は邪悪が巣くっていることを忘れてはいけない。

だが、幻想郷が元の表情を取り戻したことには変わらない。今はそれを喜べばいい。さあ、これからだ。これから、アタシ達の新しい未来へ向かって行くんだ。

第1部 四人の歌姫 〈Rebellion trigger
完

t o b e c o n t i n u e d . . .

外伝 幻想郷縁起

第一章 ヤクモユカリの話

第一章 ヤクモユカリの話

私が編纂したこの幻想郷縁起には、幻想郷の秘密の歴史がおさめられている。皆さんからすれば、奇想天外な話に聞こえるかもしれない。だが、事実である。

例えば、「ヤクモユカリの話」などは、一見するとちぐはぐな物語であるが、読む順番に注意し、幻想郷に実在した人物と照らし合わせるのと、なんとこの幻想郷の昔を物語っているのだ。今回は私とその正しい順番にあらかじめ入れ替えておいた。

どうか、実際に読んで、それぞれの目で確かめてほしい。

稗田家13代目当主

「幻想郷の歴史」→ヤクモユカリの話より

『東方の地の話』

ここは幻想郷。人間と妖怪、そして人ならざる者たちが絶妙なバランスで共存し合い、古き良き豊かな自然に囲まれた、まさに楽園と呼ぶべきの土地だ。幻想郷は、もとは日本の東にある山に囲まれた盆地であった。そこを、当時の人間たちは国の東にある人里離れた辺境の地として、「東方」と名付け、そう呼んでいた。そこには他の土地と比べて、恐ろしく、不思議な能力を持つ妖怪がたくさん住んでいたのだ。だが、そこに住む人間たちは、自分らの住む「東方」の外の世界を全く知らなかった。たまに訪れるは行商人、そして妖怪退治を目的としてやってくる人間だけだった。

そして自分らは、ただ大空の下に取り残されていることしかわからなかった。たまに、外の世界への想いを語る人間が居た。だが、その話を大半の人は笑い飛ばした。はなから外に行くなど無理と分かっていたからだ。それでもときどき、勇敢な者、いや、愚か者と言うべきか、そのような者がありつただけの武器や道具、食料を持って真実を

知るために外へ出た。しかし、戻ってきた者は数えるほどしかない。

行方不明になった者はどうなったのか。無事外に出て、そこでたくさん人間に囲まれ、豊かに幸せに暮らしているという希望にすがりつく者もいた。だが、山の妖怪の餌食になったのだろう、という見解がほとんどだった。苔生した木々の間に横たわる、白骨の夢を見た者も多い。

妖怪は恐ろしい。休みなく身をよじり、暴れ続ける。残酷で、いつも腹を空かせている。山の妖怪も、森の妖怪も、全てが恐ろしいのだ。このケダモノを怖れないのは、時折空に姿を見せる長大な龍だけだった。龍だけは、たまに地上へ降りてきて無数の妖怪を獲物として空へ連れ去っていった。

だが、妖怪にも、龍に匹敵するような巨大で、かつ強大な妖力を蓄えたものも多くいる。その中には、人間に化けて社会に溶け込む妖怪もいた。人々は、これらの妖怪に名前を付けた。玉藻前、酒吞童子、スキマ妖怪、花愛で女などがそれである。

これが、まだ幻想郷が若かったころの姿である。妖怪に支配され、それは決して終わりが無いと思われていた。人々は怯えながら、大地にしがみ付いて生きた。そして、東方の地は、運の訪れを待っていた。

『幻想郷の話』

数え切れない年月にわたり、日本の人々にとって、妖怪は何一つ変わらなかつた。相も変わらず人間に恐怖を振りまき続け、血を味わい、肉を攫って行く。だが人々の目には見えなかつたが、妖怪は人間に見られない所で、密かに計画を進めていた。

確かに、人間から見れば妖怪は変わらなかつた。しかし、妖怪から見た人間は明らかに変化していたのである。

まず、人口が圧倒的に増えた。この時代の人間の数は、最も妖怪が猛威を振るっていた平安時代の人口の約二倍にまで増加していたのである。それは、「東方」でも同じだった。中心にある人間の里は拡大し、人と建物、文化と食物でにぎわった。さらには妖怪に対抗する力

を持つ人間が大量に訪れ、里で暮らし始めた。結果、増加した人間とその技術によって、妖怪の勢力は押され気味になってしまっていたのだ。

これには東方の妖怪たちも黙ってはいなかった。ここで、東方の地とその外を特別な結界で遮断してしまおうという意見が出され、これに賛同するものは日に日に増えていった。

ついに、妖怪たちは進めていた計画を実行に移したのである。妖怪は“幻と実体の結界”で東方の地を囲い、これ以上人間が滅多にやってくることをないようにし、妖怪だけが自由に行き来できるようにした。

「幻想郷」の誕生である。それからしばらく時が経った時、人間は幻想郷誕生以来初めての大きな動きを見せる。妖怪の人間に対する暴挙はますます増え、ついに人間は不満を爆発させた。最も単純で、騙しやすい妖怪をターゲットに大量の妖怪退治を行ったのだ。

個々では人間よりもはるかに力の勝る妖怪だったが、個々は弱いが高い団結力と知恵を有する人間の前には手も足も出ず、妖怪は一匹ずつ確実に倒されて行った。このころ、妖怪の山での妖怪社会の頂点に立っていた鬼は、ついに幻想郷を見限り、人間が居ない新天地を求めて地底世界へと逃げ込んだ。

鬼達は、地底に残された元地獄の繁華街跡地に目を付け、ここに社会を築いた。鬼達は自分達以外にもこの社会に、地上で嫌われた妖怪を率先して受け入れた。その事に地上の妖怪は危険を感じ始める。そこで地上の妖怪の賢者達は、鬼達地底の妖怪に新しい地下都市を作る事を認める代わりに条件を出した。それは「地底の怨霊を封じる事」である。その代わりに地上の妖怪は「地上の妖怪の地底世界への不可侵」を約束した。あくまでも妖怪同士の条約なので、地上の人間の出入りは許されているらしい。こうして鬼達は地上との交流を断ち、地上の妖怪社会とは完全に違う新しい社会生活を楽園として楽しみながら営み続けることになる。

さて、それからさらに数百年の時が経った。幻想郷の外の世界では、明治維新という革命がおこり、科学が飛躍的に進歩した。それと

同時に、人間は妖怪や神、人ならざる存在のことを完全に否定するようになってしまった。

このままでは、外の世界の進んだ文化が幻想郷に入り込み、人間が力を持つのも時間の問題。そう判断した妖怪たちは、博麗の巫女の力を借り、博麗大结界を張った。これにより、妖怪でも外と幻想郷を行き来することができなくなってしまった。ただし抜け道がまったくないわけではなく、力のある大妖怪や、強力な神々は行き来を可能としている。

结界といつても、幻想郷をドーム状に包むような明確な壁があるわけではなく、境界の境界へ辿り着こうとしても同じ景色が延々と続き、逆に戻ろうとすると一瞬で元の場所に戻るのだという。

コアとなるのは、必須という訳ではないが博麗の巫女と博麗神社周辺の木々。神社そのものに直接的な力はない。

ちなみに博麗神社はその境界の境界の中にあるため、外の世界からでも「外の世界の博麗神社」へ行くことは可能。しかしそこに博麗大结界があるため、「幻想郷の博麗神社」へは结界を越えない限り辿り着くことはできない。

幻想郷ではこの時、空には龍神が姿を見せ、何週間も嵐が吹き荒れ土地は水浸しになってしまったという。

ここで、今と全く同じな幻想郷の体制が出来上がった。

しかし、幻想郷の空の果ての果て、誰にも分からない場所で、龍神は、もっと怒りを吐き出す準備を始めていた。

『結界決壊大異変の話』

人並み外れた身体能力、誰にも負けない霊力を持つ博麗神社の巫女、博麗霊夢は何かとてもおぞましいものがやっていると感じた。人間の里では、長者たちと占い師が占いを始めた。出現、火、水、死、破壊が同時に何度も起こると示された。だが、人々はどのように解釈すればいいかわからなかった。

妖怪たちも、変化の兆しに気付いていた、大地の揺れは知力で感じ取った。大気からも匂いがする。けれど、その変化の意味を考えよう

とはしなかった。ただ待ったのである。

そして、ある朝の事だった。美しく、静かな朝で、大気は青く澄み渡り、なめらかなガラスのように空を覆っていた。ふいに、鳥や虫の鳴き声がやみ、草原に居た動物が顔を上げた。妖怪たちは、時が来たと悟ると同時に、勢いよく棲み家から空へ飛び出した。山や岩石地帯、丘、森、平原、竹林、湖など、妖怪は幻想郷のいたる場所から舞い上がった。それは何百、何千という数だった。空の妖怪は様々な色合いで、虹の七色に輝き、日差しを遮った。

人々は恐ろしさのあまり、呆然とした。博麗霊夢でさえも、その場で立ち尽くした。空は妖怪に覆われ、真つ暗になった。だがたった数名ばかりの人間は、空を覆う妖怪の隙間から、何か巨大な物が身をくねらせながら暴れまわるのを目撃した。

幻想郷が震えた。大地には大きなひびが入り、丘が砕け散り、新たな丘がもりあがる。それと同時に、空から恐ろしい叫び声と轟音が轟く。妖怪の隙間から雨水が滝のように降り注ぎ、岩を砕くような爆音とともに放たれる雷を、妖怪はその身を以って幻想郷に襲い掛かるのを防いでいた。何十何百という妖怪の死骸が落ちてきて、だんだんと妖怪の向こう側の空が見えてきた。空がガラスのように砕け散り、そこから真つ黒なカーテンと規則的に並ぶ光が見える。

人々は泣きわめきながら、地面にしゃがみ込んで、耳を塞いだ。悍ましい音だった。見るに堪えない光景だった。誰もが、この幻想郷の終わりが来たと考えた。

ところが、幻想郷は終わらなかった。ただ、変わったただけだった。暴れ疲れた龍神がようやく幻想郷を見捨てて遥か世界の彼方へ飛び去ると、生き残ったものたちはゆっくりと立ち上がり、大きく息をついた。

地面に空いた穴に雨水がたまり、小さな湖が出来た。裂けた大地が谷となった。砕けた岩地の中から巨大なたくさんの塩岩がむき出しになった。そして、幻想郷そのものがより大きく、広くなった。西から北へ、北から東へかけて、薄く高い山脈も出来上がっていた。

たった一日の出来事だった。どんよりとした空気は死の匂いがす

る。だが次の日には豪雨が止み、新しい空が顔を出した。あたたかい光を有り難く浴びた。妖怪が地上に戻ってきた。

幻想郷の人々や妖怪は、この大革命を「結界決壊大異変」と呼ぶことにし、歴史の書物に記した。

だが、まず最初にもっと大きな変化に気付いたのは妖怪たちだけであつた。幻想郷の至る所に、見たこともない生き物が出現していた。その生き物は全部で5種族いて、それぞれが幻想郷の東西南北と中央に落ち着いていた。彼らは幻想郷の結界が崩れた時に、安全に生活できる土地を求めて入り込んだのだ。妖怪は、この生き物たちの強大な力を感じ取り、すぐさまこの地から出ていくように懇願した。だがその生き物たちは頑として断つた。

何日に渡る交渉の末、この生き物たちが龍神に変わる幻想郷の守り神として、神に等しき力を持つ獣、神獣と呼ばれ親しまれるようになった。西の領域には竜が住み、北の領域には麒麟が、南の領域にはグリフォンが、東には天狐、そして中央の領域にはケツアールが住むようになった。どの神獣も、外の世界での生きる場所を失い、幻想郷へやって来たのだ。

これが、新しい幻想郷の姿と成るのだった。

『四人の歌姫』　くやくモユカリの話より

何百年も昔、幻想郷の人間の里に、妖怪の4姉妹が住んでいた。清らかな心に甘い歌声の持ち主で、名を、セナ、フラ、コア、ミラといった。4人はいつからとも知れぬほど長いこと、里で暮らしていた。

姉妹は共に歌う事を愛し、その歌声は夜となく昼となく、温かいそよ風のように幻想郷中を流れた。時折外の世界からやってきた人間が通りかかったが、大抵の人々は姉妹の歌声を、葉の擦れ合う音や、草むらの動物たちが立てる音、砂の流れる音だと思つてしまう。ほんの一握りのものだけが、甘い歌声が聞こえると言つたが、みなから馬鹿にされるのがオチだった。だが、それが歌声だと知る者たちは、死するその日まで耳にした歌声を忘れることは無かつた。

ある日、妖怪姉妹の歌声を耳障りに感じた魔法使いは、四姉妹を捕

らえ、幻想郷の東西南北の四隅べつべつに幽閉した。だが、四人の歌姫は引き離されても夜となく昼となく歌い合い、その歌声のおかげで、幻想郷に満ちる美しさと平和は保たれた。

魔法使いは怒り、黒い三角帽を頭にかぶり、魔法の箒に跨った。そして東西南北を順番に襲い、歌姫をひとりひとり殺していった。はじめにセナの声がとまった。つぎに、フラ。そしてコア。ミラはしばらく一人で歌い続けた。しかし、ミラの歌声も止まった時、幻想郷は沈黙に包まれた。

そのとき初めて、魔法使いは自分の失敗に気付いた。幻想郷の中心の空の果てに、姉妹の歌声に鎮められ、幾星霜の時を眠り続ける龍神が居たのだ。その龍神が、幻想郷に舞い降りた。全身に怒りをたぎらせて。

龍神は大声で吠えながら、空を舞った。森をなぎ倒し、妖怪を燃やし尽くし、地形すらも変えてしまった。恐れをなして、魔法使いは、箒に跨り、北の方角へと逃げ去った。

その日以来、龍神と四人の歌姫を目撃した者はいない。だが今でも、どこかから甘い歌声が聞こえるという人間は少なくない。だが風の音しか聞こえない者には笑われるのがオチだ。だがそれが歌声だと知る者たちは、死するその日まで耳にした歌声を忘れることは無かった。

第二章 禍の引き金

『魔法使いの話』

結界決壊大異変が起こるよりも、少し前から話を始めようと思う。これは私の勝手な憶測ではあるが、前章で語った『四人の歌姫』の物語は、大きな力を持った妖怪によって捻じ曲げられねつ造された、偽りの物語なのではないかと思う。この話は、この憶測が正しかった場合の、私が真実に基づいて考えた物語である。

ごく普通の魔法使い、霧雨魔理沙は、魔法の森に構えた自宅から出て、人間の里に向かって箒を飛ばしていた。黒い三角帽をかぶり、黒いドレスの上に白いエプロンを身に着け、ポケットの中には自慢の武器であるミニ八卦炉がしまい込んである。

何故こうして箒に乗って急いでいるかというところ、彼女だけが、幻想郷の異変を感じていたからだ。このところ、ひよつこりと人間の里に現れた、おかしな4姉妹。あの4姉妹が人間の里で毎日歌を披露するようになってから、どうも周りの様子がおかしいのだ。最初の内は、その姉妹の歌を魔理沙も聞いていた。だが、いつもいつも同じ歌ばかりで、少し面白みに欠けるといふ事から聞くのを辞めたのだが、自分の知り合いたちは飽きもせず毎日聞いている。

「よく毎日同じ歌ばかり聞いていて飽きないな」

と言っても、

「何言ってるの、毎日違う歌じゃない」

と返されるばかりであった。

これはおかしい、何かがおかしいぞ…。

異変、である。魔理沙だけが気付いた異変。魔理沙は、レミリア・スカレットらの住む紅魔館へと向かっているのだ。そこにある図書館の行けば、何かこの異変について分かることがあるかもしれない。い。

異変解決の専門家である、博麗霊夢に頼めば、何とかなるかもしれない。だが、今回ばかりは彼女を頼らずに自分の力で何とかして見せ

る。幸いにも、霊夢はまだこの異変に気付いていないようだ。

紅魔館の図書館へと入った魔理沙は、まず驚いた。図書館には誰も見当たらないのだ。いつもは、図書館の主であるパチュリー・ノーレッジや、その召使である悪魔たちが仕事をしているはずなのでは…。

まさか…！

魔理沙が里に行くと、やっぱり歌の公演は開かれていた。いつにもまして集まった人は多く、そこには、紅魔館の住人も混じっていた。これはおかしい。滅多に人里になどいかない奴らが、食い入ったように歌を聞いている。

一般の人間の中にはもう何日も家に戻らず何も食べていないような、やつれた人もいる。

「これは異常だぞ…」

その日の講演が終わった直後、魔理沙は4姉妹を魔法で作った網に閉じ込め、連れ去った。

姉妹の末っ子だったミラを博麗神社に居た霊夢に事情を話して預からせ、三女のコアを妖怪の山に捨て、フラを無縁塚に置き去りにし、長女だったセナを魔法の森にある自宅へと幽閉した。

これで、もう四人の歌姫とまで呼ばれたこの妖怪四姉妹は、もう共に歌う事はない。これで、この異変も終わりだ。里の人間たちも元の暮らしに戻る。

「それでいいのか？」

鉄格子の扉から、セナが魔理沙に呼びかけて来た。正しく妖怪らしさを感じられる表情で、甘い声を使って魔理沙に話しかける。

「私たち姉妹が歌うことを辞めていいのか？人間どもは歌を聞いて満足しているし、私が歌うことを辞めればきつと大変なことになるぞ」「…勝手にしろ」

そう、魔理沙は四姉妹を東西南北別々に引き離す事が出来たのだが、それでも妖怪四姉妹は歌うことを辞めなかった。距離が離れてど

んなに障害があろうとも、四姉妹は共に歌い合った。

魔理沙はセナの歌声を聴いても、どこがいいのかわからない。むしろ不快だ。今すぐにも止めてほしい。だが、鉄格子の部屋の中で、セナは休むことなく歌い続けた。里は何事もなかったかのように以前のように戻ったが、魔理沙自身は精神をすり減らし、もう限界だった。

魔法でセナを葬り去ると、黒い三角帽をかぶりなおし、箒に跨って西へ向かった。無縁塚で一人ポツンと座り込み、歌っていたフラを、自慢のマスタースパークで跡形もなく消し去った。次に妖怪の山へ赴き、岩の上で歌っていたコアを殺した。

「霊夢は留守だな……」

最後に、霊夢に預けていたミラ。霊夢の留守を狙って彼女を襲ったが、ミラは妖術を使つて抵抗した。しばらく殺すのに手間がかかったが、最後は呆気なく始末できた。

しかし、魔理沙が自分の失敗に気付いた時には、もう遅かった。近いうちに、何か大変なことが起こる。

数日後、『結界決壊大異変』が起こった。

幻想郷自体は無事だったものの、自分が不用意に四人の歌姫を殺してしまったことで起こった大異変。ならばどうすればよかったのだ？その答えは…もう決して、人間の里で妙な動きをとる妖怪を見逃さぬことである。そう言った存在が出るのを防ぐのだ。

『夢の予言の話』

「結界決壊大異変」が終わり、幻想郷が新しく生まれ変わってから、2か月余りの時間が過ぎた。人々はもうすっかり四人の歌姫の事など最初からいなかったかのように忘れ、新しい幻想郷で優雅に生を謳歌していた。だが、魔理沙はその間、ずっと家に籠って魔法の研究に没頭していた。

愚かだったのは自分だった。あの四人の歌姫は、空の彼方で眠る龍神を、ずっと封印していたのだ。一人殺しても、何も起きない。2人、3人と殺してもまだ何も起きない。だが4人すべてを殺したとき、

ずっと歌で眠りについてた龍神が目覚め、怒りと共に幻想郷に天変地異をもたらした。

今回は結果として良い革命へと導かれたが、二度と、このようなことを起こす訳にはいかない。次に同じことが起こった時は、いい結果で終わるとは限らないからだ。

魔理沙は考えた。私が里の妖怪を監視するしかない。そのために、もっと魔法を学ばなければ。もっと、自分だけのしもべを作り出せるような…そんな魔法を研究するんだ。

ある日、博麗霊夢は里から謎の怪物退治の依頼を受けた。どうやら、里の中を見たこともない怪物が徘徊しているらしい。

「こ、これは…」

霊夢がその怪物が居るといふ場所へ向かうと、そこには驚きの光景があった。まるで粘土を雑に組み合わせで作ったような青い犬のような生物が、むやみやたらに吠え、大通りをパニックに陥らせていた。その風貌は正に魔獣と言った姿で、体に入ったヒビから緑色の液体を垂れ流し、肉に埋もれた小さな目は生気がまるでなく、牙はいびつで大小様々、まるで様々な生き物の骨から寄せ集めたようだった。その生き物が涎を垂らしながら吠え、左右で長さの違う足で右往左往している。

霊夢はお祓い棒の一振り、その青い魔獣を粉碎した。魔獣はバラバラに飛散し、息絶えた。その死体を片付けた霊夢は、不思議に思った。コイツは一体何だったのだろうか？生き物のようだが、こんなにも外見が不完全な生物など居るのだろうか？それに、ちぐはぐで不格好な姿。どう見ても、何者かが意図して人工的に造った生物のようにも見えなくはない。

「何だったのかしら」

そんな疑問を胸に、今日の仕事を終えた霊夢は神社へと帰っていった。

「ん」

自宅の研究室にて、浴槽のような培養カプセルの中をのぞき込んでいた魔理沙は、自分が造り上げた初めての魔獣が死んだのを感じ取った。誰がやった？いや、アイツしかいないかな。

魔理沙はより良い、もっと強く、頭が良い魔獣を作るために、研究をつづけるのだった。

また一週間もすると、里に2匹目の魔獣が現れた。前の奴よりも体のバランスがはつきりし、大きくなっている。さらに、間隔は不規則だが、たびたび魔獣は現れた。現れるたびに身体の一部を変え、以前は欠点だった部位や不格好な部位を直してやってくる。

そしてある時、また里に出現した魔獣を倒した霊夢。

「ふう、これでいいわね」

いつものようにその場に残る魔獣の死骸を片づけようとした霊夢の背中に、何かが走った。冷たい指で背中を撫でられたような、震えるような感覚。

「そうか…やっぱり霊夢だったのか」

そう物陰から呟いたのは、霧雨魔理沙だった。隈のできた目で、じつと霊夢を睨んでいる。

「魔理沙…。最近見ないと思ったら、そんなところで何してるの？」

「本当に…偶然なんだ。まだ、新しい魔法の研究をしていてな…それで生み出した魔獣が、逃げてしまっただから里にまで来てしまったのは、本当に偶然なんだ」

「…これを作ってるのはアンタなの？」

「ふん、そうだ。だが、私の研究をあまり邪魔するなよ」

魔理沙はそう言うと、影のように姿を消した。その時からだった。あんなに活発だった魔理沙はずっと家に引きこもるようになり、他者との交流も途切れた。始めの内は心配する者もいたが、だんだんと皆が魔理沙について触れなくなっていくた。

——更にそれから、10数年余りの時が過ぎた。

「ねえロック、もっと山の方へ寄ってみなさいよ」

「そうだな、霊夢よ」

真紅の竜の首の上に乗っている博麗霊夢、30歳。西の領域に生息する神獣、竜のロツクと共に、幻想郷の空を飛んでいた。

「私も空は飛べるけど、あなたに乗って飛ぶ空はもつといいわ」

竜は高度を高め、眼下に見える妖怪たちを追い越して妖怪の山の斜面を駆け上がるように飛び抜いた。雲の上まで登り、幻想郷を見渡す。霊夢は、幻想郷の神獣たちと交友関係を築いていた。彼女の誰にでも平等に接する態度と、豊富な知識、そしてその不思議な雰囲気から神獣を虜にしたのだ。

次の日、霊夢は人間の里の商店街に買い出しに出かけていた。

「今日は何にしようかしら？」

そんな事をいいながら歩いていると、里の人間の叫び声が聞こえた。何事だと思つてその場へ駆けつけると、あの魔獣が暴れていた。八百屋の看板を破壊し、人々に襲い掛かる。

ここ数年は現れなくなっていた魔獣が再び姿を現した。だが、ここで霊夢はその魔獣が今までやって来た奴らとは何かが違う事に気付いた。物を壊し、見境なく吠えるその姿は獣そのものではあるが、動きや体形が人間のそれと同じだったのだ。

魔獣は地面を蹴り、霊夢へと飛びかかる。しかし、いくら博麗の巫女を引退して戦いの力量は衰えたとはいえ、この魔獣を倒すには大したことではなかった。

「今の…まさか！」

「…何だ、久しいな」

霊夢は思い切つて魔理沙の家を訪ねた。ドアを叩くと、中から黒い人影が姿を現した。10年近くの間顔も見えていなかった友人の姿だ。歳は自分と変わらないはずなので、すっかり大人になっていたが、その目の色や風格はとも30歳近くには見えなかった。

「アンタ、人間使つたでしょ？」

「…アレか。アレは外の世界から来た人間の死体を使っただけだ、なにもとつて殺したわけじゃない。もつとも、殺したのは私のしもべだけだな」

「道を踏み外したのね。もうとんでもないところにまで踏み込んでるわ」

「ふん、何度でも言うがいい…」

「…どうなっても知らないわよ」

帰宅した霊夢は、一人考えていた。私の勘が言っている、この先、何か大変なことが起きる。霊夢は正座で座り込み、じっと考え込んでいたが、このままでは埒が明かないので、今晚はもう寝ることにした。

その日、霊夢は不思議な夢を見た。

霊夢は博麗神社の庭で、掃き掃除をしていた。自分の姿はまだ若かったころの姿で、一回りも小さい。

目の前で、最近住居を移してしまい、見かけなくなった三妖精が遊んでいる。幽々子と紫の姿もあり、縁側では早苗と、あの魔理沙が座ってお茶を飲んでいた。

そして、鳥居から誰かが敷地内に入ってきた。参拝客かしら？

入って来たのは女の人で、かなり背が高い。茶色い髪を汗で濡らし、その鋭い目は自分を見ていた。

「博麗神社へようこそ」

霊夢は、その夢の中で無意識にそう言っていた。その時、霊夢の視界は切り替わった。さつきまでであった博麗神社は全壊して瓦礫の山となっており、地面は草が伸び放題、クレーターののような跡まで無数についている。

空を見上げると、幻想郷中の空が赤黒い雲で覆い尽くされていた。そして、遙か北の方角に見えるのは、ひどく邪悪な塊だった。黒い煙のような物体に二つの赤い目が光り、虫のように伸びた足で地面を掴んでいる。その邪悪は高らかに笑い声を上げていた。

霊夢には、何故だがこの状況を理解することができた。夢の中では、結構なんでも有りな事が起こる。現実では有り得ないことが起こっても、不思議と納得できたり、疑問を抱いたりもしない。それと同じような感覚だった。

あの黒い塊は、北の山脈の向こうから来た帝王だ。帝王は何百年も

前から幻想郷を支配しようともくろんでおり、その執念はただならぬい。

帝王は、ある時突然山脈の彼方より現れて、幻想郷を攻撃した。その攻撃によって、神獣は滅ぼされた。幻想郷の守り神たる神獣が。神獣が滅びれば、幻想郷そのものが無くなってしまう。それだけは避けたい。

今も、こうしてあの帝王は幻想郷にやってきている。そして、崩れた神社の瓦礫の中から、微かな力を感じる。あの帝王のような、禍々しい邪悪な魔力に抗う事の出来る希望の力を。

霊夢は瓦礫を一つ一つどかし、力の源を捜した。一個の瓦礫を退かしたとき、中に人が倒れていた。この人は、さっきの背の高い女の人だ。霊夢は瓦礫の中に手を伸ばし、その女の人に手を差し出した。女の方は戸惑いながらも霊夢の腕を掴む。そして霊夢は、そつとその女性に、自分の体を重ねるのだった。

「…はっ」

翌朝、霊夢は跳ね起きた。まだ頭の中には、夢で見た光景がくつきりと残っている。赤い目を憎しみで燃やしながら幻想郷に攻め入る禍の軍隊、空を飛ぶ恐ろしい獣のこと。また、敵と戦う少女。圧倒的な強さで敵と戦う、邪悪に抵抗できる力を持った少女の事。

ぐしやぐしやの布団から飛び上がると、霊夢は朝食を食べ、急いで歯を磨き、靴を履いた。冷たい水で顔を洗い、お茶を飲む。

霊夢の出発は、まだ太陽が赤くきらめく朝だった。彼女自身も、まだ眠っている人々にも、これから幻想郷の運命を変える出来事の引き金になるとは、思ってもいなかった。

霊夢は空に舞い上がり、南へと向かった。南には、グリフォンという神獣が居る。自分らの領域を愛し、よそ者を歓迎する、気前のいい連中だ。だが、よそ者は歓迎するが、自分たちはよそへと赴かない。それは自分の領土の誇りに思っているからだ。神獣たちに、“神の友”と呼ばれ信頼される霊夢には、それが分かっていた。

『神の友の話』

霊夢が魔法の森の上空辺りまでやって来ると、森の中から続々とグリフォンたちがやって来た。白と茶色の羽毛に身を包み、大きな翼をはためかせている。鷹のような鋭い顔とカギ爪の付いた前足。下半身は獅子を彷彿とさせる強靱なもので、これで地をも自在に駆け回る。

「どうしたのだ。神の友よ」

「実は、折り入って聞いてほしいことがあるの」

「ほう、何かな？」

数匹のグリフォンが霊夢に近寄り、興味津々に首を傾げた。話すしかない……。霊夢は心の中でまとめてあったことを、ハッキリと話した。

「何十年もしたら、北の山の向こうから憎しみと支配に燃える赤い目をした邪悪が、大量の怪物の軍隊を率いてやって来るの。だから、その時には皆にも戦ってほしいの。戦えば、皆は死なないから」

霊夢の話聞いていたグリフォンは、いつもの陽気な調子で笑っていた。

「面白い事を言うではないか。だが、おかしいぞ。北の山の向こうには、何もなかったはずだ」

「で、でも……」

「だが仮に、北からその邪悪とやらが攻めてきたとしよう。しかし、北とは正反対のこの南の領域に住む我らグリフォンに關係が有ろうか？」

そのグリフォンがそう言っている間に、ほとんどのグリフォンはその場からいなくなっていた。霊夢が必死で呼びかけても、一匹、また一匹と消えていく。

霊夢の心はひどく沈んだ。しようがないと思えばいいのか、もつと怒ればいいのかわからない。どうしようもない気持ちを押殺して、その場を去ろうとしたとき、小さな囁くような声が聞こえた。

「私は信じようか、霊夢」

その声に驚いて振り向くと、一匹だけのグリフォンが佇んでいた。見たところ、若いグリフォンだ。黄色い目でじつと霊夢を見据えている。

る。

「アーゴルじゃない……信じてくれるの？」

霊夢は、各神獣の中で一匹だけとりわけ仲が良かった。その一匹以外は、霊夢をそこまで好まなかった。馴れ馴れしく接する態度は嫌いではないのだろうが、名前を知られることを怖れているのかもしれない。神獣にとって、名前は命よりも大切なもの、と竜のロツクから聞いた。神獣は名前を知った相手の事を支配することができるのだ。それは逆もまた然りで、神獣同士以外でもだ。

自身の名前を、すぐに教えてくれたグリフオンの目は真つすぐに霊夢を見つめ、信頼していた。

「もちろんだ。何故だろうな、信じてみる気になった」

「ありがとう！」

グリフオンがそう言い終わると同時に、霊夢はクチバシに触れた。グリフオンは目を閉じ、ゆっくりと降下した。それに合わせて、霊夢も降りていく。森の中に降り立つと、霊夢はさらに言った。

「じゃあ、信じてくれた貴方には、まだ話したいことがあるの」

グリフオンはしやがみ込み、体を丸めた。霊夢は全てを話した。

「その軍隊との戦いが終わっても、油断はしちやだめよ。きつと、敵の親玉は戦いにおいての敗因となった幻想郷の神獣を根絶やしにしようとするわ。だから、その時には……貴方だけでもいい、隠れて敵の攻撃から逃れてほしい。そして、いつしか、その邪悪に対抗できる力を持った人が現れるわ。その時にはその人に協力してあげて」

「それが、神の友の願いとあらば」

霊夢は、次に西へ向かった。西には、竜が住んでいる。竜は行動範囲が広く、誰とでも分け隔てなく接する。人間にも、妖怪にも。それに、ロツクという竜の一匹とは何年も前から名前前で呼び合えるほどの仲だ。私の呼びかけに答えてくれる可能性は高い。

霊夢は、無縁塚近くの岩場にある竜の巣に降り立った。その周囲にも、すり鉢状の窪みが沢山あり、竜の卵や餌などが並べられている。霊夢の前にある巣はロツクのものだ。

「ごきげんよう、霊夢」

岩の影からロックがのそりと出て来た。4つの足で動物のように地面を歩き、巨大な翼は折りたたんでいる。

「実はね、話があるの」

霊夢がそう言うのと、他の竜がぞくぞくとやってきた。グリフォンの時のように、霊夢の話を聞こうとじっとこちらを見つめている。竜は血筋や生息域によって体の色が異なる。虹のように輝く無数の竜に囲まれて、霊夢はさつきと同じ話を始めた。

霊夢が話をすべて終えた時には、10匹ほどの竜がその場に残っていた。赤や青、緑や黒など、いろんな色の竜が集っている。彼らは、霊夢の言葉を信じ、何としても戦いに勝ち、そして生き続けることを誓った。

それから霊夢は、同じように、各神獣の中でたった一匹だけの信頼のある友の元を訪ねた。他の神獣では絶対に聞いてくれないようなことを、皆熱心に聞いてくれた。北の麒麟も、中央部のケツァールも、そして東の住む仲の良かった天狐の兄妹も、霊夢の予言を聞き、霊夢の言葉にしたがってくれた。

よかった、これでいい。霊夢は時を待った。

第三章 煮えたぎる禍

『魔法使い追放の話』

霊夢が予言の夢を見てから、実に3年余りの時が経った。そしてこの日、博麗霊夢は息を引き取った。ここ数か月ほど寝たきりで、最後はたくさんの知り合いに看取られながら亡くなったという。急激な衰弱の原因は、若いころの霊力の酷使だったらしい。

葬儀には、古い知人らも多くやって来た。しばらく霊夢とはご無沙汰だった者も、突然の霊夢の死に驚き、悲しんでいた。そこには：霧雨魔理沙の姿もあった。一応の親友の葬儀という事もあって、しっかりと服装も整えていた。

「…あばよ、霊夢。これからは私が幻想郷を守っていくよ…」

魔理沙はそう呟くと、誰にも気づかれない事なく、葬儀の場を後にした。

魔理沙の研究はさらに激化した。もう幻想郷を脅かすような大異変は起こさせない。ただその一心で、邪法とまで言われた魔法にまで手を出し始めた。まだ自分が愚かだったころ、その愚かさゆえの昂ぶりで幻想郷を危機に陥れた。四人の歌姫の歌声で封じられていた龍神の怒りを解放してしまったのだ。幻想郷の守り神が、幻想郷を危機に陥れたのだ。

だがそれよりも、本当に妖怪とは必要な存在なのだろうか？あの四人の歌姫は、いつからああして歌っていたのだろうか？

魔理沙がそう考え始めた時には、幻想郷の重鎮の妖怪たちに戦慄が走っていた。幻想郷の賢者たちは一つ処に集まり、現れた危険因子を探った。薄暗い小屋で、妖怪の死骸の前に立って何かをしている魔法使い。

その日は大嵐で、その嵐は既に過ぎ去っていたが、この魔法使いがどんな嵐よりもはるかに自分らにとって危険だと賢者たちは悟った。はるか遠くの研究室の小屋では、魔理沙がうめき声をあげて悶えていた。追放の妖術に体を締め付けられ、怒りと共に、恐れ、驚く。手

足が震えだし、心臓が冷たくなる。魔理沙はこの苦しみから逃れようと、研究室を出て、自宅の外の森を歩き出した。魔理沙は今や幻想郷で最も力のある魔法使いと言われるまでになっていたが、追放の妖術は強力だった。あまり長く抵抗はできないだろう。この幻想郷の誰かが、魔理沙がこの地に留まることを許していない。

魔理沙が目を開けると、目の前には妖怪たちが壁のように立ちふさがっていた。追放の妖術を使ってもなかなか離れない魔理沙を、直接始末しようとしてきたのだ。

「お前は幻想郷に相応しくない。美しく残酷に、この地から去りなさい」

そう声を荒げたのは、八雲紫だった。

「何だ、私の魔法の研究がそんなに気に入らないのか」

魔理沙は黒い三角帽を被りなおすと、挑発するように言った。

「それもあるわね。まあこれから消えゆく貴方には教えてあげる、魔理沙。貴方は気付いてしまったからよ」

「私が…気付いただと?」

「あの四人の歌姫についてね。あの四姉妹は、私たちが作ったのよ。ある時、龍神が怒りを募らせていることに気付いた我々は、龍神を封じ込める力ギとなる妖怪姉妹を作った。そして龍神を、未来永劫空の果てに封じ込めようとした」

「何だと…アレはお前たちが…!」

「アレを貴方に全部殺された時は、とても焦って貴方をすぐ始末しようとしたけど、…結果、幻想郷としては良い方向に進んだので、その時は良しとしたわ」

「それで、今となって私を消すというのか?」

その時、無数の光弾の雨が降り注いだ。急いで手に持っていた箒に跨ると、それを回避する。

「もちろん」

妖怪たちが口々に喚いた。

その後、魔理沙への攻撃は三日三晩続いた。休む暇もなく弾幕が降り注ぎ、何処に隠れようと必ず見つけて追いかけて来る。ついに、魔

理沙は自宅へと戻って来てしまった。

どうすれば：何かないのか、奴らの目をごまかす方法は…！

魔理沙は自分の研究室へ足を運んだ。そこで、見つけた。いくつか作製中だった魔獣たちが培養液の入ったカプセルの中に浮かんでいる。まだ肉体が完成したばかりで、これから命を与えようとしていたところだった。その魔獣をカプセルから引っぱり出し、自分が今着ていた服を着させ、床に立たせる。

その時、上空から何か巨大な物が家に激突し、爆発を起こした。

「…あれは」

紫は、上から爆発の後を探っていた。すると、瓦礫の中に、黒い布きれを纏った肉塊が横たわっていた。

「よし、微かな気の跡も感じない…どうやら死んだようね」

紫がそう言うと、賢者たちはその場から離れ、やがて消えた。

魔理沙はそれを見届けると、地面の中から姿を現す。そして転がっていた大きな布をマントのように身体に纏うと、三角帽を拾って被った。魔法の箒は破壊され、もう少して命まで落とす所だった。魔理沙は目を閉じると、残る力を振り絞って自分を苦しめるこの地を離れ、北へと歩き始めた。

魔理沙が目を開けると、そこは岩場だった。上を見ると、巨大な妖怪の山、その後ろには高い山脈が聳えている。追放の妖術による苦しみはたんに弱まっただけでなく、すっかり消えていた。まるで、最初からなかったかのように。きつと、妖怪の賢者共は満足したのだろう。もう死んだ人間のことなど、興味が無い。

だが、これではつきりした。妖怪はこの世の癌だ。自分たちの勝手な都合で幻想郷を作り、人間を飼っている。そこに住む人間たちの文化、技術、そして進化の可能性を無理やり封じ込め、自分たちの都合のいいように支配する。

妖怪はなぜ殺す？それを知らないまま、人間は死んでいく。最後までみじめに管理されたまま。それこそが、人間の妖怪のサガ。

そもそも、妖怪とは世界に存在する生命体の進化の過程において絶対に生まれえないもの。本来は存在するはずのない者たちなのだ。

魔理沙はうつすらと笑うと、美しい幻想郷の大地を見渡した。何と美しい事か。妖怪は幻想郷自身の進化をも止めようとしていた。現に私がああ歌姫を殺さないで放置していれば、幻想郷はここまで広大で美しくはならなかった。

妖怪は、いずれ滅びなければならない。

目の前には、一匹の麒麟が身をかがめていた。とてつもない大きさで、恐ろしげだ。緑色の鱗と金色の体毛が月の光を浴びて輝いている。その目は大きくて滑らかな宝石のようで、口からは蒸気が上がり、涎が滴っている。魔理沙は麒麟に取引を持ち掛けた。

もし自分に仕えれば、私の魔法が生み出せる限りの宝を与えようというのだ。

「魔法使いよ、麒麟は人間にかしずいたりしない。我々は大地に仕えるものだ、失せよ！」

麒麟はうなり、目を細め、緑色の炎を吐いた。岩がじりじりと焦げ、魔理沙にも炎がかかり、マントから煙が上がり始めた。

魔理沙は麒麟から見えない、山の奥深くへと逃げ込んだ。

滝の裏側にあつた暗い洞窟の中で魔理沙は体を休め、だんだんと力を取り戻した。魔理沙は自分の今までの暮らしを全て捨て去った。

岩の間に潜むおぞましい生き物たちはおそるるに足らなかった。この生き物たちは魔法使いの邪悪な力に引き寄せられ、こびへつらつた。

今や危険が去つたが、それで満足する魔理沙ではなかった。内側から怒りが湧いてくる。たびたび、更に悍ましい妖怪と出会ったり、ボロ服の人間と出会うこともあつた。男も女もいたが、全て同じく故郷を追放された人間や、外の世界からやって来た人間である。

この人間たちは、魔理沙を見て歓び、彼女のもとに集まり、野望をかなえるべくしもべとなった。魔理沙はこの者らを蔑んだが、目的を果たすために利用した。

しもべたちに教えられた秘密の道を通って幻想郷へ戻ることも試みたが、どの道を通ろうと神獣たちは行く手に立ちふさがつた。

憤りながら、魔理沙は幻想郷に背を向け、しかるべき時まで待たなければならぬと、自分に言い聞かせた。もはや、魔理沙の怒りと憎しみは恐ろしく膨れ上がり、心臓が石炭と化して燃えているようだった。

自分を拒む土地は、必ずものにしてやる、と魔理沙は心に誓った。棒切れから石ころまですべて自分のものにしてやる。妖怪を全て追い出し、怠惰の道を歩んでいた幻想郷を、進化の軌道に乗せてやる。そして妖怪の支配から解放された人間たちに、自分を主人と呼ばせるのだ。

何年もの間、しもべたちは魔理沙に従った。彼らは今では、彼女の意のままに動く奴隷と成り、心も体も完全に支配されていた。魔理沙は、より高度な闇の魔法にのめり込み、計画を練った。

しもべたちは、獣のように地を這えと命じられても、誰一人として魔理沙から離れようとはしなかった。彼らは岩山に潜むいやしい怪物とともに、主人の命令に従う為だけに生きた。そして、魔理沙が力を増す様子を恐ろしがりながら見ていた。

『神獣の卵の話』

ある日、妖怪の山の魔法使い、元の名を霧雨魔理沙という魔女は、洞窟を出て、はるか上、雪の積もる山頂まで宙を飛んだ。そして、頭上に浮かび上がる満月を見て、にんまりと笑った。過去にも行ったことのある穢れなき地。その強さを学び、弱点も見つけた。いずれ来る時の計画を立て、まもなく実行に移すつもりだった。

今やこの魔法使いは強大な魔力を持っていた。その手は、生も死も思うがままに操った。さっと触れただけで、育ちゆくものを衰えさせることができる。骨と肉のかけらで、半死半生の生物を作り出す。その輝く月で、魔法使いの陰謀はさらに大きく膨らむだろう。

魔法使いは体の向きを変えると、薄ら笑いを浮かべて幻想郷を見下ろした。きつと、妖怪共は私が死んだと思っているだろう。勝手にそう思わせておけばいい。復讐は、急ぐことはない。待てば待つほど、達成した時の喜びは大きくなるものだ。ゆくゆくは、妖怪は全て滅

び、この大地は私のものとなる。あとは、手はずを整えるだけだ…。魔法使いの顔と両手に、氷が張り始めた。もはや、暑さも寒さも苦ではなくなった。それでも、魔法使いはまだ生身の人間だった。身体が完全に凍り付く前に洞窟へ戻らなければならない。帰り支度をした魔法使いが、歩き始めた時だった。雪の下にある、何か丸いものに足がふれた。不思議に思い、雪を掻きのける。なんとそこには卵が一つ、石の巣の上に置いてあった。

卵はとてつもなく大きく、まだら模様の殻は厚くてごつごつしていた。魔法使いの心臓は高鳴った。神獣の卵に違いない！

魔法使いはしゃがむと、両手で卵を持ち上げた。ひどく冷たく、まるで氷のようだ。しかし、生きている。まだら模様の殻越しに、脈打つ小さな心臓が見えるようだ。丸めた透明なカギ爪と、眠っている赤ん坊の体に巻き付く尖った尻尾も、手に取るように分かる。

これまでどのくらい、しもべどもが泣きじゃくるのにも構わず、神獣の卵を捜しに行かせただろうか？何度、手ぶらで戻ってきたしもべに、怒りの鉄拳を振り下ろしただろうか？そして今、ずつと探していたものが、妖怪共を滅ぼす鍵となるモノが手中にあるのだ。

「卵の中の神獣は、私を主人と思うだろう。きつとこの卵は麒麟のものだろうが、うろこから牙から血肉に至るまで、この私が新種の神獣を作ってやる。私のために戦い、私が命ずれば仲間をも殺す、神獣軍団だ。これで幻想郷は私のモノと成るぞ」

魔法使いは卵をマントの中にしまうと、洞窟に戻っていった。喜びのあまり、また、これからの計画に心を奪われ、麒麟が胎生であるということを知らずにいたのだ。

温かい隠れ家に戻ると、マントから卵を取り出し、机の上に置いた。しもべに火をたくように命令する。それから椅子に腰かけ、ひたすら待った。洞窟がさらに温まってきて、丸一日が経ったとき、卵が動いた。何かを叩くような鋭い音が聞こえる。

魔法使いが椅子から飛び上がった。巨大な卵の殻に黒っぽいひびが入る。じつと見ていると、ひびが大きく、長くなり、やがて卵が二つに割れた。

ところが、中から出て来た赤ん坊は：奇妙で無防備で、ずんぐりした翼をもち、長い不格好な首に、体の割に大きすぎる丸っこいクチバシを持つ生き物：は、神獣ではなかった。ただの鳥の一種のようだ。ひどくがっかりし、怒りに燃えた魔法使いは、拳を上げて頼りなく鳴いている幼鳥を叩き殺そうとした。

その時、何故か魔法使いは躊躇った。ひよつとしたら、クチバシをパチンと閉じる様が、罨のように見えたからかもしれない。いや、卵の殻の表面をひつかく太い指の先の爪のせいだろうか。もしくは、神獣が手に入らないのなら、あるもので間に合わせようと冷静に考え直したからかもしれない。

何にせよ、魔法使いが振り上げた手を降ろしたのは、憐みのためではない。生肉を掴み、引き裂き、血が滴る肉片を幼鳥に与えてじつと見つめる。

こいつは、もともと幻想郷に居た種ではない。このような鳥は、外の世界の伝説上の動物をまとめた書物でしか見たことが無い。おそらく、幻想郷にやってきてしまった母鳥が、山頂に卵を産んだのだろう。

そして魔法使いは、最初の侵略が始まる直前に卵を見つけた。幼鳥が肉片を喰い千切る様子から、訓練すれば殺し屋にできるのがわかる。クチバシやカギ爪の大ききからすると、成長すればかなり巨大になりそうだ。

その鳥の子供たちはさらに大きくなる。そう、より大きく、強く、残酷に。おそろしい改造を施せば、この鳥はクチバシに牙を持ち、背中に棘を生やし、無限にずる賢くなる。そして、非常に忠実なしもべと成り、命ずるがままに殺戮と破壊を行うだろう。

この改造には時間が居る。場所も必要だ。だが、場所なら間もなく手に入る。それに、いずれ私の野望が叶うのだから、時間が多少かかろうがかまわない。

魔法使いは血で汚れた手をぬぐった。計画を練る目が、見つめる先の月の光で、怪しく輝いた。

第四章 マガノ国

『月の都の話』

お月様には、兎が住んでいる、という話を聞いたことが有るだろう。それは間違いではない。実際に、月には兎が住んでいる。穢れなき高貴なる月の民という者たちもいる。

だが、彼らが住んでいるのは、月の裏側と呼ばれる場所である。世界には表と裏が存在し、表は外の世界、裏とは私たちの住む幻想郷のような異界の事をいう。表である外の世界からは何も無い表の月にしか行くことができず、幻想郷のような裏の世界からは裏の月に行くことができる。

さて、この裏の月には、月の都という場所が有った。そこは一種の浄土であり、穢れの無い土地である。穢れとは生命現象による生と死によるもので、月の民はこの穢れを嫌う。技術水準もはるかに高く、外の世界を優に上回る。本の文字や絵は拡大縮小自在で、見たところ木製の門は触れずに開く。

そんな月の都は、二人のリーダーによって守られていた。たびたび地上からやって来る愚かな侵略者も簡単に追い払える。おまけにプライドの高い月の民は、これに満足し、安心していた。

ある年の冬。この月の都にも、リーダーの代替わりの時がやってきた。二人のリーダーはその座を降り、新たな若者に未来を託すのだ。そして、リーダー候補に三人が選ばれた。月の民の兵一番の剛力使い、玉兎の出だが類いまれなる努力によってここまでの上昇が剣使い、空間同士をつなぐことのできる能力を継いだ参謀だ。

さて、誰をリーダーに選ぼうか。人々は迷いながらも投票を終えた。結果は三人同点。その後、何度投票を繰り返しても結果は変わらない。そしてそれぞれの候補者の元、月の民は三派分裂を始めた。皆が疲れ、苛立つてきたが、考えを変える者はいない。何日も過ぎて、ついに十三回目の投票を終えると、月の民は苛立ちに身を任せ、争い始めた。

その時、フードの付いたマントを着た女が進み出た。身長こそ高い

が、背を丸めて妙にぐったりしている。神聖なる月の都の大きさに、もう耐えられないといわんばかりのやつれようだった。この女は初めから三人の候補者のもとへかわるがわる現れては、「我らの候補者こそ、月の民のリーダーになるべきだ」と、人々を扇動していた。そのため、三派にわかれた人々は皆、この男が自分が推す候補者を支持しているとはかり思っていた。

「私が良い解決法を提案しましょう。三人とも一番にすればいい。三人を三人とも、リーダーにすればいいのです」

本当ならば、そんな事できるはずがない。前任の二人のリーダーを決めた時でさえも、かなり長い間揉めたのだ、それが三人になるなど、もつてのほかだろう。

しかし、疲れ切っていた人々は同意し、三人をリーダーとした。マントの女は満足そうに手を揉み合わせると、夜明け前に、影のように姿を消した。冷静になった人々が、リーダーが三人では月の都は機能しないと気付いた時には、もう遅かった。この時を待っていたかのように、禍々しい影が忍び寄っていた。穢れなき地は、瞬時にして穢れに満たされた。

そして、地上へ帰還した魔法使いの魔力は、以前とは比べ物にならない程だった。それこそ惑星すらも物理支配してしまえるような、余りにも大きすぎる悪の魔力。その魔力は、地球から遠く離れた月の都を地上に引きずり下ろすことなど容易かった。

魔法使いは引きずりおろした月の都を幻想郷の隣に置いた。住んでいた月の民は、存在そのものが穢れとなってしまう前に、地底深くへともぐりこんだ。

こうして、浄土とまで呼ばれた月の都は、現在のマガノ国となってしまったのである。

では、そこに住んでいた人たちは？それは、地底に住む者だけが知っている。穢れた地上で、自分たちの罪を償っているのだ。そして、今の空に輝く月には、二度とその都を復活させることはできないのだった。

『マガノ軍隊』

年月が経ち、幻想郷の北部に住む妖怪は、北に連なる薄く高い山脈の向こうからやって来るならず者たちの襲撃にも慣れた。

妖怪たちは山脈の向こうの地を「マガノ国」と呼ぶようになった。その地が禍々しい闇に包まれていたからだ。「マガノ国」内部を見て帰還し、話に語った者は居ない。

妖怪が観察していると、彼らを襲う者たちにはまるで家畜のように、「禍」という字の刻印がおされていた。そして、この刻印のある荒々しいケダモノたちは、敗北より死を選んだ。ケダモノは、低級妖怪を数の暴力で痛めつけることはできても、ある程度力のある妖怪には蹴散らされる。この者らが主人と崇める存在は、如何なる失敗も許さないのである。

そして、妖怪はあることに気付いた。ケダモノたちは捕虜をとることも目的としていた。打ち負かした妖怪を魔法で封じ込め、たまたま捕まえた猟師などの人間も「マガノ国」へ連れていく。それを見た妖怪は、彼らの不運を想像して震えあがった。

こうして襲撃はずっと続き、北部の妖怪にとっては日常の一部のようになっていた。「マガノ国」に潜む敵の親玉が恐ろしい計画を着々と進め、日に日に力を増していることに気付く者はほとんどいなかった。しかしついに、幻想郷の民が、マガノ国に潜む敵の怒りと嫉妬に満ちた真の力を実感するときがやって来た。山脈の向こうで赤い雲が湧きたち、強大な軍隊が北から流れ込んで、全ての生けるものを殺し、焼き尽くしながら進軍してきたのだ。

初めてその軍隊を見た人間は、皆悲鳴を上げた。指揮官は人間だったが、兵隊はよろよろとした死人のような生き物で、まるで小さい子供が粘土かパン生地で作った、いびつな人形のようなのだ。そして、無数の兵の頭上には長い時を生きてきた妖怪ですらも見つた事のない、ひどく恐ろしい鳥が飛んでいた。

その鳥をはじめ、怪鳥とだけ呼ばれていた。後に、外の世界出身の妖怪がこの鳥を見て、七羽のガルルガと名付けた。外の世界の神話に出て来るガルルダという神獣に似ていたため、それにちなんでガルル

ガと名付けられたのだ。

この七羽は明らかに野生ではなかった。まず、神話の挿絵で見たものよりもはるかに大きい。さらに、牙と棘を持ち、紫色の鋭い甲殻を持つ。殺しを目的に飼育され、あたかも山脈の向こうに居る主人と心がつながっているかのように誰も聞こえない命令に従う。

北部の妖怪は勇ましく闘った。麒麟と竜も闘った。ガルルガと戦い、空から舞い降りて炎を吐き、軍隊をなぎ倒した。ガルルガはまともまっぴかかってくる。可能なときは神獣を殺し、敵が多すぎるとみると安全な山脈の向こうへ逃げる。ずる賢く、並の妖怪では太刀打ちできない。

しかしすぐに、恐ろしい姿の兵隊も人間と同じように死ぬ事が分かった。兜と胸当ての甲斐もなく、何千という兵隊が妖怪によって殲滅された。だが、それだけ死んでもさらに代わりの何千という兵隊がまたやって来る。

妖怪はその兵隊を、マガノ兵と呼び、その名は幻想郷に知られわたった。マガノ兵は不器用で愚かな戦士だったが、あまりに数が多かったため、恐ろしい敵だった。限りなく残酷で、ひたすら暴力を振るうことが生きが이었다。

マガノ兵は退却という言葉を知らない。敵と戦うために倒れた仲間の山をよじ登る。身の安全など頭になく、指揮官ですらマガノ兵を怖れているようだった。

マガノ軍は強力だった。地上の妖怪はマガノ兵やその仲間の凶暴な魔獣によつて無数に滅ぼされ、空に逃げた妖怪はガルルガに殺される。人間の里の住民は、いずれマガノ軍が里にまで押し寄せるのではないかと、不安を隠しきれなかった。

マガノ国に潜む敵は、遂にその力と野望を露わにしたのだ。魔法で造り上げた生き物を送り込み、幻想郷の妖怪を滅ぼして土地を支配下に収めようともくろんでいる。野望が叶うまで、決して満足することはないだろう。

人々が「禍王」と呼び始めた存在は、奇跡が起こらなければ倒せない。

『レジスタンス』

マガノ国は本格的に幻想郷に攻撃を開始した。まず、これに異常を感じた一部の神獣が立ち上がった。これこそが、神の友が予言していたことだろう。予言を聞いた時から実に100年近くの時が経っていたが、神の友よりその話を聞いた神獣は忘れてはいなかった。

しかし、彼らだけでは空のガルルガに思うように対抗できなかった。奴らは集団で襲い掛かり、一匹ずつ神獣を殺していく。

ならば、こちらが一致団結し、大連合を組んで迎え撃たなければならぬ。

この時代、もう博麗の巫女は居なかった。最後の巫女であった博麗霊夢は生涯独身で子息無し、その後も博麗の巫女が誕生することは無かった。

そこで大連合を組むために立ち上がった中心組織が、「レジスタンス」である。レジスタンスは弱者が損をする幻想郷のシステムに対する、力の弱い妖怪たちで構成された組織だった。レジスタンスは対抗していた対象を幻想郷からマガノ国へ変更し、その名を各地に轟かせた。

そして、このレジスタンスに加わる者は、日に日に増えていった。妖怪の山の河童に天狗、妖怪狸や竹林の兎、果てには吸血鬼や山の神までもが名乗りを上げた。

幻想郷の勢力の半分ほどの結束が固まったところで、長い冬が終わりを告げた。それと同時に、以前よりもはるかに膨大で強大なマガノ国軍が攻め入ってきた。実のところ、妖怪たちがこんなにも仲間をあつめる余裕が有ったのも、冬の寒さによって軍隊の侵攻が遅れていたためである。

丁度真冬の時期、幻想郷中を駆け回っていた天邪鬼の鬼人正邪は、煙の匂いがするのに気付いて、さっと物陰に隠れた。彼女こそレジスタンス創始者であり、今はその中心メンバーに属している。

目の前に雪を被った土手が現れた。そこに静かに上り、身を低くし

て這うように進んだ。ここは河川敷の空き地のようで、ぎつに建てられた小屋が並んでいる。そのそばにある燃え上がる炎の周りには、何百人もの兵士が押し寄せていた。顔に血の気が無く、鈍い灰色をした巨大な金属製の兜と胸当てをしている。

それがマガノ兵だと、正邪はすぐにわかった。この唸り声と、醜い顔、粘土で作られたような毛髪の無い体は、誰も見間違うはずがなかった。正邪自身も、レジスタンスとしての活動として何回も相手をしたことがある。

マガノ兵は、何か食べ物らしき塊をしゃぶっていた。ほとんどの者が半裸で、寒空の下に震えている。ほんのわずかな者だけが、幸運にも古い毛布をぐっつい肩に巻き付けていた。

その時、すぐ近くで低い女の声が聞こえた。

「また今夜は雪になる。能無しの愚か者どもめ、どうせまた凍死した奴が出て、明日はもっと増えるだろうね」

「勝手に死なせておけばいい」

別の男の声がうなるように言った。

「ここでは喰って寝て、でなきやくだらん喧嘩するだけだ。それにあいつらの臭さとききたら胸糞悪くなる！この忌々しい冬が終われば、ご主人様は新しい兵をくださるだろうか」

声は正邪が隠れている場所のすぐ下から聞こえた。正邪は慎重に前に進み、土手の下を覗き込んだ。

そこには、女と男が立っていた。二人とも、毛皮のもこもこした上着をしつかりと着こんでいた。女は見たところ若く、片目に眼帯を付けていて、ノコギリのようにギザギザした歯が見える。男は顔が赤く、背が小さい。

この二人は人間だ、と正邪は思い、腹の底から怒りが込み上げてきた。この人間どもは禍王に跪いたのだ。いやしい手下を率いて、人間の癖に妖怪が死ぬのをただ見ていたのだ。

正邪は手袋をはめた手で雪を握りしめた。今すぐこの土手を降りて、あの愚かな人間を八つ裂きにしてやりたい。いや、だめだ。あの二人を殺せば、周りのマガノ兵が黙っていない。マガノ兵は目は悪い

が他の感覚が鋭く、わずかな妖気さえも辿ってくる。流石に正邪ひとりでは、あの数のマガノ兵を相手に逃げられるとは思えない。

「まあ、冬が終わればご主人様自らが総攻撃を仕掛けに来る。そうすれば幻想郷もあつという間に陥落さ」

「ねえ過熱。どうしてアタシ達はこんな荒れ地に居なきやならないんだらうね。何故本拠地に戻って他の隊と合流したりしちやいけないんだらう」

女は不満げに言った。それに、過熱と呼ばれた男はそっけなく答えた。

「それがご主人様の御意志だ」

「あんな胸糞悪いモノじゃなくて、ちゃんとした軍隊が欲しいよ。もつと素早くさっさと動いてくれりやあいいのに。大体、こんなに目が弱くちや話にならないよ。暗くなるとほとんど役立たずだ」

「でも強いじゃないか。戦い方を本能レベルで覚え込んでる」

「まあ、戦いしか知らないからね。でもさ、野獣だつてもうちよつとマシな頭を持つてるよ。ご主人様は少しばかりせっかちすぎるんじゃないかね？侵略を始める前にちゃんと仕上げてくださればよかったのに」

過熱は顔をしかめて小声で言った。

「気を付けろ、焦熱！ご主人様に背くような事を言うのは危険だぞ。こんなに離れていても、ご主人様は全てお見通しだ」

過熱は心配そうに空を見上げる。そして焦熱という名前らしい女は震えながら唇をかんだ。正邪は腹ばいのままじつとしていた。心に燃え上がった怒りの炎はとつくに消え去っていた。

さて、過熱と焦熱に気付かれずに引き返せるだろうか、とぼんやり考える。

「焦熱、まずいぞー」

いきなり過熱が大声で言った。焦熱は顔を上げて情けない悲鳴を出した。

正邪も上を見上げた。茶色がかった灰色の雪雲を背に、黒っぽくて恐ろしい影がくつきりと浮かび上がる。その影は、河川敷の上をグル

グル飛んでいる。鞭のような尻尾があり、巨大な翼を羽ばたかせている。

「ガルルガだ！」

焦熱の顔が恐怖でよじれる。

「焦熱！お前ってバカは！どうしてご主人様に背くようなことを言っただんだ？お前はもう終わりだぞ！」

過熱はそう吐き捨てるどきつきと向きを変えて雪の中を歩いて行ってしまった。

「いやだよーここにいておくれ！言い訳ができるように助けておくれよ！」

焦熱がよろよろと過熱の袖にしがみ付く。しかし、過熱は服が破けるのも構わず、焦熱を突き飛ばした。泥まじりの雪の中でもがきながら泣きわめく。のっそりとマガノ兵が振り向き、不思議そうに焦熱を見た。

頭を抱えながら焦熱が金切り声を上げる。

「アタシは背いてなんていません！本気で言ったんじゃないんです……」

正邪はチャンスだと思った。身体を持ち上げ、元来た道を這って進んだ。雪が降り出した。焦熱の鋭い悲鳴があたりに響き渡っている。そのうち、ガルルガの大きな足に捉えられ、死に突き落とされる焦熱の叫び声が聞こえてくるだろう、と正邪は思った。

だが、いつまでたっても叫び声は聞こえない。焦熱は相変わらず泣きじゃくっている。それから、驚いたような過熱の喚き声が上がった。

「アレはガルルガじゃない、竜だ！真紅の竜だぞ！」

マガノ兵が怒号を上げ、金属製の胸当てをガンガン手でたたく。その音を遠くに聞きながら、正邪は走り出した。

レジスタンスの新たな仲間を獲得できなかったが、いい情報を手に入れた。マガノ国軍は、冬が終わったら総力を持って幻想郷を攻撃してくる。こちらが迎え撃つ準備ができる期間は、この冬の間だけだ。その間に、もつと仲間を増やし、作戦を立てなければならぬ。

正邪は手で口を押さええて笑いながら、雪の中を走り去るのだった。

第五章 幻想郷の戦い

『幻想郷の戦い』

後に、「幻想郷の戦い」として知られることになる大戦争は、妖怪の山から人間の里までにかけて広がる平原で起こった。冬の間、マガノ軍隊は妖怪の山のすぐ麓に野営地の本部を構えていた。雪が解けたらすぐに、マガノ国からの援軍を待たずに一気に南へ進んでくるだろうとレジスタンスは考えていた。

河川敷で禍王の手下の二人が話していたことも偶然聞くことになって、正邪はとても役に立つ情報を得ていた。たとえば、こんな事だ。何十年もの間、悍ましい地で侵略の計画を練っていた禍王は、もう待ちきれなくなつた。野望をかなえるために作りだしたよたよた歩きマガノ兵はまだ不完全だ。それでもマガノ兵の力の強さと数から勝利できると計算し、大々的な攻撃を始めた。

確かに、凍てつく冬に足止めを喰らうまでは、マガノ兵は勝ち進んでいた。北部の妖怪は制圧された。抵抗できたのは力のある妖怪だけである。長い冬の間ずっと待たされ、苛立ちを募らせた禍王は一刻も早く侵略を完了したいと焦っているだろう。実際に凶らずも後れをとつてしまい、禍王は邪悪な野望をよりいっそう募らせていた。待つことが嫌いで、せっかち。これは禍王の弱点ともいえる。そしてもう一つ、より重要な弱点があった。

初期の攻撃による勝利で、禍王は多いにうぬぼれたはずだ。もう誰も自分に歯向かえる者はいないと極度に自信を付けているだろう。この冬の間、幻想郷に起きた大きな変化に、奴は気付いていない。禍王を迎え撃つために、今までバラバラだった幻想郷の民が結集したことを禍王はまだ知らない。焦りを募らせたばかりに、攻撃を再開した愚かなマガノ兵が相手をするのは以前のようにバラバラに単独で動く妖怪ではなく、幻想郷の大連合だとは知りもしなかった。

天狗から、彼らがこつそり見張っていたマガノ兵が居なくなつたという報告があった。さらに幻想郷を偵察しているようなガルルガも見かけたという。マガノ軍隊が活動を再開し、進軍の準備をしようと

しているのは明らかだ。幻想郷の命運をかけた戦いが始まろうとしている。

夜明けごろ、マガノ軍隊は動き出した。まだひたすらに南に進み、ただ前を見ていた。すると、盛り上がった丘の上に妖怪たちがぎっしりと列を組んで並んでいた。その数はたかが百程度だったかもしれない。といっても、敵の何十分の一ほどしかいなかった。強靱な体、細い体、剥き出した牙、前を見つめる鋭い目、キラキラと光る牙。獣のような妖怪、人型の妖怪、武器を持った妖怪と様々だ。

敵の指揮官が声を上げて笑った。法玄という名の堂々とした男だった。背の高い青い犬のような魔獣に跨っている。

「これがガルガが言っていた守備って奴か、焦熱」

法玄は別の犬に乗っている隣の女に言った。

「ふん、信じられるか？あの馬鹿どもは本気で俺達が里を通過するのをとめる気らしいぞ。マガノ兵共は思ったより早く血を味わえそうだな」

すると、焦熱が顔をしかめた。

「でも怪しいね。あのずっと後ろに浮かんでる変な形をした城、ガルガの報告でもあったけどアタシはどうもアレが怪しいと思う。今攻撃しても得より損の方が大きいよ！」

「焦熱、お前が決める事じゃない」

「でも、アタシも人間だから分かるんだ、妖怪は思っているよりずっとずる賢いんだよ」

「ならお前がご主人様にそう申し上げればいいだろう」

焦熱は怒ったような怯えたような顔になって、黙ってしまった。法玄は焦熱から顔を背けた。過熱の助言通り、焦熱をそばに置いておいて正解だった。今すぐにこの女を殺してしまってもいいが、あのマガノ兵共は焦熱に懐いている。もし目の前で焦熱を懲らしめれば、法玄に向かつてくるかもしれない。

だが、ここを制圧した後は…何とかした方がいいだろう。もし必要なら、焦熱のマガノ兵も始末してしまえばいい。

後ろに居るマガノ兵の弱い目が、ついに敵の姿をとらえた。彼らは

戦いに飢えていた。そもそも戦うために生まれて来たのだ。それがマガノ兵にとつて唯一の楽しみだった。

さて、そろそろここから安全な場所に移動しなければならぬ。マガノ兵はじきに命令を待たずに敵に突撃するだろう。彼らの前に居れば、踏みつぶされてしまう。

動かないように焦熱に命令したい気持ちに駆られたが、踏みとどまった。焦熱はあ見えて強力な戦士だ。生き延びたら、これからの戦いでうまく利用できるかもしれない。それに、女としても上玉だ。金だつていくらでも稼げるかもしれない。

法玄は焦熱と共にマガノ兵の前を突つ切つて安全な場所へ移った。

丘の上の妖怪たちは叫び、雄叫びを上げながら飛び跳ね、こちらを挑発している。いったいどういうつもりだ？ マガノ兵を煽つて何の得がある？ どんなに険しい丘だろうと、マガノ兵はあつという間に登ってしまう。敵は皆殺しだ、これは見ごたえがありそうだ！

マガノ兵が喚き、隊列が崩れたのを見て、法玄はにんまりと笑った。マガノ兵は激しい足音と共に、敵に向かって走り出した。妖怪たちは一歩も動かなかつた。顔をしっかりと上げたまま、向かってくる敵を正面から睨んでいる。相変わらず挑発的な行動を繰り返しながら。

大虐殺を楽しみにしながらも、思わず法玄は敵に感心してしまった。あんな軍隊を持てたら、どんなに鼻が高いだろうよ。頭もあり感情もありながら、じつと立って…

「ねえ、嫌な予感がする！ 兵をとめなくちゃ…」

「だまれ、もう遅い」

マガノ兵と妖怪の距離がどんどん縮まっっていく。それ、あと少しで激突だ…！

先頭のマガノ兵の一団が、勝利の雄叫びを上げて敵に襲い掛かった。だが次の瞬間、マガノ兵が消えた。何百人ものマガノ兵が文字通り、消えてしまった。

驚きのあまり、指揮官は目が飛び出そうになった。それから、ようやく何か起こったのかを悟った。

丘の手前の地面に、長く深い巨大な溝が掘られていた。布か何かで

おおわれ、土砂がかけてあったのだろう。

「とまれ、戻れ！」

そう呼びかけるも、マガノ兵は止まらなかった。何千ものマガノ兵が落とし穴に飲み込まれた。それだけ穴は大きく深かったのだ。

「そうか……！」

法玄は思った。ガルルガが気付かない時、つまり夜にあの穴を掘る作業は行われていたのだ。そして、あんな大規模な罠を短期間で作れる妖怪は奴らしかない。河童共だ！

穴の中に、灰色の塊が見えて、少しほつとした。穴にどんどんと落ちるマガノ兵たちで穴は塞がれつつあった。マガノ兵は落ちた衝撃で死んだのではない、上から落ちて来る仲間に潰されて死んだのだ。ひどく恐ろしい光景ではあったが、法玄の胸は躍った。

「すすめ！」

マガノ兵に命令を下す。更に数百の灰色の死体が積み重なり、溝がゆっくりと埋まっていくのを眺めながら、法玄は後ろに下がった。憎しみを込めて、丘の上に居る妖怪どもを睨んだ。

「逃げられないぞ……待っているがいい……！」

マガノ兵はついに落とし穴を越えた。穴の中は全て死体で埋め尽くされていた。マガノ兵と妖怪は、ついに本当に衝突する。だがその時、法玄はあんぐりと口を開けた。妖怪共の後ろから、更に妖怪が現れた。そこに居た妖怪よりも、妖力や魔力はけた違いに高い。数が膨れ上がった妖怪軍団はマガノ兵とぶつかった。吸血鬼が、手にしている魔力で作った巨大な槍でマガノ兵を薙ぎ払う。強力な怪力で、マガノ兵を吹っ飛ばす。さらに空からは細い槍のような物が降り注ぎ、マガノ兵を的確に貫いた。上を見上げると、何百もの天狗が空を埋め尽くしていた。

マガノ兵はそれでも敵と戦っていた。ほとんどは上空から攻撃されていることに気付かない。視力が非常に弱いため、分からないのだ。マガノ兵はいつも通り凶暴に戦ったが、今までにないペースで殲滅されていく。今までの戦いでは、敵より自分たちの数の方が多く、それに物を言わせてきた。だが今回は、敵が自分たちと同等かそれ以

上の数だった。物量で叩く戦法が通用しないのである。

相変わらず槍がふつてきて、さらに多くのマガノ兵が敵陣に付く前に息絶えた。

「何だと…」

「あははは、こりや参ったね！敵はアタシらの気付かない所で、こんな作戦を練っていたらしい。あそこには河童と天狗、あつちには獣と幽霊まで居る」

神々しい光を放つ集団が、まるで歯車のように息の合った動きで敵陣に斬りこんでいく。まるで歩くだけで、その身体から発せられる光でマガノ兵を殺しているようにも見えた。

「ありや妖怪の山の湖の神様だ。その後ろで矢を放ってるのは…永遠亭の奴らじゃないか。まんまとやられちゃったね、逃げようにも、後ろも塞がれちゃってる」

焦熱はそう言いながら、乗っていた犬の向きを変えた。

「何処に行く!?!」

法玄は声を荒げ、剣の先を焦熱に向ける。頭の中がぐちゃぐちゃだ。耳鳴りもする。

「アタシの兵は皆死んじゃった。最初に落とし穴にはまってね。ならアタシはもういらないだろう?」

法玄は怒りに叫ぶと剣で斬りかかり、焦熱の心臓を突き刺した。しかし、焦熱は笑っていた。

「ありがとうよ。禍王の手中で待ち受ける運命より、ここでさっさと死んじゃったほうがましだ」

焦熱は犬の首に崩れ、ずるずると地面に落ちた。主を失った犬は戸惑った表情を浮かべたが、すぐにその場を駆け去った。

空に浮かぶ輝針城の中から、鬼人正邪は丘での戦いを見ていた。隣には、巨大な落とし穴づくりを監督した河童の長が立っている。

「見ろ、あの男が眼帯の女に剣を向けたぞ。しかも殺してしまった。なぜあんなことを、仲間なのに」

「分からねえな。でも、もしかしたら怯えているのかも…」

正邪がそう呟くと、後ろから荒々しい笑い声が聞こえた。

「そりゃそうさ！この私、伊吹萃香が集めた荒くれ共が前線に居るんだ」

鬼の伊吹萃香が、大股でこちらに歩み寄った。小柄だが、自らを売り出すようにレジスタンスに入ってきた。実際、その実力はやはり目を見張るものが有った。流星は鬼だ。萃香は窓から身を乗り出した。

「だがどうした、天邪鬼。何が気に入らん？」

萃香は正邪に問いかける。

「…これから先、どうなるんだろうな？何かおかしい、ガルルガはどこに居るんだ？これまでの報告だといつもマガノ軍にくつついていたそうじゃないか」

「これから来るのかもしれないな。だが、この私がすぐにあの首へし折ってやる」

「じきにマガノ兵は降伏するだろう」

河童の長が戦いを見つめながらそう言った。だが、マガノ兵は決して降伏などしない、そのやり方さえも知らないだろう、と正邪と萃香は思った。

そして再び、戦いが繰り広げられている丘を見た。その時、空に灰色の雲が湧いているのに気付いた。その雲を目で辿って、正邪と萃香は戦慄した。雲は北に行くにつれて赤黒くなり、その中央には邪悪な塊が蠢いていた。塊は頭上の雲から分離し、妖怪の山の斜面にしがみ付いた。その雲の塊の中央に、一対の真っ赤な目が現れた。その目をしきりに動かして、戦場を見渡した。すると、今度は山の斜面から麓の地面に降り、物凄い速さでこちらに向かって流れて来る。その上には、七体の悍ましい影が旋回していた。

「ガルルガだー」

萃香がそう叫んだ。正邪は城の警鐘を鳴らし、丘の戦士たちに危険を知らせた。だが、退却の時間はない…逃げ切れない。雲塊は既に丘に向けて転がるように進んでいた。ガルルガは早くも、激しい戦闘が繰り広げられている上空を飛んでいる。

雲は丘の前で止まった。すると、雲から二本の長い腕が突き出し、

地面を掴んだ。そして二つの赤い目玉を光らせ、手の平を地面にくっつけた。手を退かすと、何もなかったはずの平原に七体の緑色の怪物が立っていた。

あつという間に新たな恐ろしい戦力を引き連れて、ついにこの場をやってきた禍王に、正邪は愕然とした。萃香でさえも窓から身を乗り出したまま凍り付いたかのように恐怖に固まっている。

ガルルガは急降下して丘を逃げ惑う妖怪に飛びかかり、引き裂くと勝利の金切り声を上げ、クチバシと爪から血を滴らせながら再び舞い上がった。禍王がもう片手を地面にかざした。するとそこには、何千人ものマガノ兵が座っていた。日差しを浴びてほんの一瞬だけまぶしそうに瞬きしたが、すぐに攻撃を開始する。また、緑色の筋肉質なトカゲ人間の怪物も一緒に飛び出し、薄ら笑いを浮かべたような悍ましい口で敵に食らいつく。

「お前は一人で抱え込みすぎる。レジスタンス創始者としての責任もあるかもしれないが、これはわしら皆の戦いだ。お前以外は誰も後悔していない」

河童の長が正邪にそう囁きかけた。その言葉を聞いて、正邪は体にくっつき力を込め、窓から離れた。

「萃香！ しっかりしろ、戦いはまだ終わってないぞ」

まるで夢から覚めたように、萃香は動いた。髪をかき上げ、後ろに居た妖怪部隊に大声で命令を出す。

「使うのか？ 私たちの、最終防衛システム……」

「ああ、起動する」

いよいよ、秘密裏に製作していた最終防衛システムを起動させる時が来た。正邪は空に浮かぶ輝針城の中心部へと向かって行く。そして、とある部屋に入り込み、壁にあった赤いボタンのような箇所を見つめた。そして、使い古したレプリカの打ち出の小槌を、そこに思い切りたたきつけた。

正邪の妖気はその部屋中に溢れ、部屋が赤く光り出す。さらにその妖気は膨大なエネルギーとなって輝針城全体に波のように伝わっていく。

その時、空に浮かぶ城が揺れた。まっつたつに割れたかと思えば、中から別の塔や屋根が飛び出してくる。空中で城は見る見るうちに變形し、巨大な人型の兵器となって戦場へ降り立った。

「これが最終防衛システム、『輝針城』――」

すると、至る所で歓声が上がった。戦っていた妖怪たちが鼓舞され、一丸となって恐ろしい軍勢と正面からぶつかり合った。

マガノ兵と緑の怪物は、打ち負かしたかに見えた敵が勢いを増して再び向かってくるのを見て怒号を上げた。妖怪の弾幕が当たり、ガルルガが怒り狂って叫ぶ。怪鳥ガルルガの鱗と甲殻で守られた皮膚にはその程度の攻撃は通らない。しかし、炎は翼を捕らえ、薄い羽毛から煙が上がり出す。

ガルルガの目が輝針城に向いた。群れに纏まり、突進してくる。

その時、大空を裂くような物凄い咆哮が響き渡った。きらめく長い巨体が空を飛んでいる。虹色に輝き、蛇のように空をうねりながら日差しを遮る。

幻想郷の中央領域に住む神獣、ケツアールがやってきた。続々と同じような虹色の巨体が空を埋め尽くすように飛び回り、炎を吐き、空の領土を侵したガルルガを攻撃した。ガルルガは直ちに旋回し、神獣に向かつて行った。飢えた狼の群れのようにケツアールをぐるりと囲んで攻撃する。

更に、北の方角から緑色の巨体が、東からは純白の獣が、南からは巨大な翼を羽ばたかせる巨体が、西からは様々な色合いを持つ竜の群れが飛んできた。妖怪たちはその攻撃を見て恐れ戦いたが、神獣たちは鬪志のままにこの場を集っていた。昔に神の友から教わった予言の時が来た、とこの場にやってきたのだ。

輝針城が歩き出した。つついて攻撃してくるガルルガなど目にもかけずに、一直線にゆつくりと歩く。その先には、ふんぞり返っている禍王がいる。禍王も、こちらに向かつてくる城を睨んでいた。邪な笑い声をあげ、ついに目の前まで迫ってきた輝針城を両腕で掴んだ。

二つの巨大な塊がつばぜり合いを繰り返す。殴り合い、押し合いをする。その上空では神獣とガルルガが戦い、他の神獣は下に降りて

マガノ兵や怪物を焼き尽くしている。丘にはそこら中に第一陣のマガノ兵の死体が転がっている。しかし、死体は他にも沢山あった。友人、兄弟、勇ましい妖怪の仲間が数多く命を落とした。

そして新たに到着したマガノ兵はどんどん進軍する。禍王に行動の一つ一つを指示されていた。ガルルガと同じように新しいマガノ兵は禍王と繋がっているようだった。どうやら、禍王は自ら造り上げた手下をさらに改良したらしい。

その時、禍王の裂けたような赤い目が光った。直後、まばゆい巨大な光線が目から放たれ、輝針城に直撃した。輝針城は後ろへ倒れ込み、大きな地震を起こした。

輝針城機関部にいた正邪は絶望した。幻想郷の連合軍も、もう勝つ見込みはないと分かっていた。しかし、諦めなかった。何が有っても諦めたりしない。

「お前はレジスタンスのリーダーだろ」

後ろから声が聞こえた。振り向くと、伊吹萃香が自分の肩を力強く握っていた。更にそこに続く、戦友たち。その戦友たちから聖なる妖気が電気のように伝わってくるようだ。

「そしてお前は何でもひっくり返す…この戦況でさえもだ！私たちと自分を信じる。そうすれば…」

もうそれだけで十分だった。皆から正邪に伝えられた妖力は機関部中を覆い尽くし、やがて輝針城全体に行き渡る。そして城のいたる部分から、巨大な矢印が何本も突き出す。矢印は高らかに掲げられた右腕に集まり、さらに巨大な矢印を作り出した。

「喰らえ…必殺！『リベリオン…トリガー』!!」

その矢印を正面に向け、前方の禍王に向かって飛ぶように突進を仕掛ける。赤と青の巨大な矢印が雲を裂く。断末魔の叫びに似た、耳をつんざく音が響き渡る。赤黒い雲の塊が震え、縮んだかに見えた。そして雲は、激しい風にあおられ、転がりながら北へ後退しやがて山脈を越えてマガノ国へ逃げ込んでしまった。

ガルルガも途方に暮れ、鳴き叫びながら雲についていった。神獣たちは傷つきながらも力を振り絞ってしばらく追いかけた。だが、その

うち戻った方が良いと思い、傷を舐めながらそれぞれの領域に帰り始めた。

後から送り込まれたマガノ兵は主人の力を失ったとたん、その場に倒れ込んで蒸発した。妖怪たちは訳も分からぬまま声をあげ、嬉し涙を流した。しかし、一部の凶暴な妖怪は胸を叩き、雄叫びを上げると、残っていた緑の怪物と戦いだした。

「勝った…」

かくして、幻想郷はマガノ国に初めて勝利をおさめた。妖怪は歡び、人間たちは唾然としたまま妖怪に感謝した。幻想郷中がお祭りムードに包まれたという。

しかし、敵は完全に滅んだわけではない。【禍王、狐の如く狡猾にして諦めることを知らず。そのケダモノの怒りと嫉妬においては、千年の時も一瞬に過ぎない】。やがて間もなく、幻想郷に新たな危機がふりかかることを、彼らは考えていなかった。

第六章 新たな危機

『幻想郷荒廃の話』

ようやく、最後の章へたどり着いた。この話を入れないほうが良かったと思う読者も多い事だろう。幻想郷の民が結集し、禍王を破り、勝利したところで歴史を終えてほしかったと望まれるかもしれない。

もちろん、それは私も理解できる。たいていの人は、幸せな結末を好むものだ。そして、この章の話は決して愉快な、あるいは心地よい内容ではない。

だが、私はどうしても語らなければならない。幸せな結末が永遠の安全を約束するわけではないという教訓として、私を取り組んだ大仕事の締めくくりになるからだ。

禍王は直接の攻撃に失敗した。しかし、奴は敗北を認めなかった。幻想郷制圧という目的を達成するために新たな手段を考え付いた。何百年もかけてゆつくりと実を結ぶ方法だ。だが、禍王は過去の過ちを経て、辛抱強くなり、よろこんで待つつもりだった。

さて、めでたくマガノ国軍に勝利し、敵を幻想郷から追い払うことに成功した妖怪たち。妖怪は人間と共に酒と御馳走で勝利を祝った。毎日のように祭が催され、幻想郷は正に有頂天だった。なので、幻想郷の民は、少しずつじわりじわりと新たな危機が幻想郷を蝕んでいることに気付かなかった。

まず最初に何かに気づいたのは、神獣たちである。彼らの領域に再びガルルガがうろつき始めた。しかもガルルガは七羽でまとまっただけで、本気で神獣を殺しつくしていた。こうして神獣が見る見るうちに数を減らしていった。

幻想郷の民がようやく異変に気付いたのは、祝勝ムードから覚め始めた頃である。まだ春が終わったばかりだというのに、木々が枯れた。川の水も減り、汚れてしまった。森は所々枯れ、毎年夏になれば緑に埋め尽くされるはずの妖怪の山の斜面は、醜く禿げてきた。

異変は人間の里でも起こった。今まで豊かに育っていた米や野菜、果物などの作物の育ちが悪くなった。しわの入ったリングゴが多く、米は不味い。猟師が里を離れて肉を獲りに行っても、手ぶらで帰ることが多くなった。

自然に依存する妖精は徐々にその姿を消した。それに合わせて、妖怪が一人、また一人と、幻想郷を去っていく。中には我々が愛するこの幻想郷を捨てる訳がない、と豪語していた者もいたが、結局彼らも幻想郷を離れ、どこかへ行ってしまった。やがて、幻想郷で妖怪を目にすること自体が珍しくなってしまった。かつては妖怪が自分たちの理想郷を目指して造り上げた幻想郷から、今度は妖怪が消えてしまった。もう、昔の面影はほぼない。

だが、一部の知性すらもない低級妖怪や、他の妖怪と関わりすら持たない妖怪は幻想郷に取り残された。神獣もめつきり姿を見せなくなった。この時を待っていたかのように、またマガノ国軍が幻想郷に踏み込んだ。

あれほど醜く、頭も悪かったマガノ兵は、今や均整の取れた体に、集団で行動し、戦闘以外での知性を得ていた。彼らは人間たちからマガノ憲兵団と呼ばれ、恐れられた。

やがて人間の里もマガノ国の手に落ちた。そしてついに、幻想郷はマガノ国に支配され、昔の面影は全く無い、暗黒の世界と成り果ててしまったのである。

では、幻想郷から去った妖怪たちは何処に行ったのだろうか？それは、多分私たちが知っているところ。かつて鬼も逃げ込んだ、ずっと地の底の世界。

『地底の妖怪の話』

幻想郷を去った妖怪は、地底へと逃げていた。何故幻想郷はあそこまで荒廃してしまったのだろうか？その原因すらつかめぬまま、妖怪は地底に向かったのだ。

昔起こった「結界決壊大異変」での幻想郷の規模拡大に伴って、地底もより広くなっていたので、幻想郷の妖怪が一気に流入してもまだ

余裕が有った。

そして、私たちが地底で暮らし始めて、50年の時が経った。

「皆の衆や、見ておくれ」

そう呼びかけているのは、八坂神奈子だ。背中の巨大なしめ縄が威圧感を醸し出している。地上では、妖怪の山の守矢神社に居たのだが、彼女らも神社ごと地底へとやってきていた。

地上を捨てたのは妖怪だけではない。神様や、命蓮寺や霊廟に住んでいた仙人や魔法使いも地底へとやってきていた。皆、地上の荒廃に耐えかねていたのだ。

神奈子の後ろには、巨大な物体が鎮座していた。

「30年前、この地底に君臨していた鬼たちは、マガノ国へ殴り込みを仕掛けた。地底へやって来た私たちの話を聞いたら、嬉々として敵地へ向かって行ったよ。だけど、帰って来た者は居なかった」

そう、地底の鬼たちは、自分たちだけで軍隊を作ってマガノ国へと乗り込んだ。地上の妖怪でも完全に倒しきることができなかったマガノ国軍を、自分たちならば倒せると踏んでいたのだ。さらに、敵が思っても居ないだろう、と直接敵地を襲撃した。しかし、神奈子の言う通り、帰って来た鬼は居なかった。敵地で全員滅んだのか、それともまだ戦っているのか。今はそれを確かめるすべはない。

「だが、じきにやって来る第二次敵地攻略戦に備えて、我々は兵器を作ることにした。我々では、どうしても鬼程の戦力を出すことはできない。だから兵器で実力を補うのだ。見よ…この戦艦の数を！」

何千隻もの戦艦が3列にまとめて格納されている。空中を航行する空中戦艦だ。

「そしてこれが、我が地底妖怪軍の旗艦となる。その全長2000メートル級！『特大超弩級戦艦“ダイヤサカ”』!!これが皆の衆を勝利へと導くであろう！」

目の前にそびえるのは、超巨大な戦艦だった。赤と青を基調とした鋼鉄のボディに、艦の前部には鬼のような荒々しい妖怪を現す顔が形造られている。さらに、ボディの両サイドから飛び出た主砲門が巨大なしめ縄で結ばれている。

「さて、この“ダイヤサカ”だが…動かすにはかなりの膨大なエネルギーが必要なんだ。機関部にコアと成る者がはまり、その者のエネルギーを動力源とするのだが、これは私でも十分なエネルギーを提供することができない。そこでだ！まずコアの動力源と成る者が、この“ヒソウテンソク”に乗り込む」

ダイヤサカの艦首の上に、銀色のボディをしたロボットが立っている。

「そしてこのヒソウテンソクが、かつての大戦で活躍した“輝針城”機関部に搭乗する」

ヒソウテンソクの後ろには、人型に変形した輝針城が悠然と聳えていた。だが、ダイヤサカに比べるとやはり小さく見える。

「更にこの輝針城が、“ダイヤサカ”の動力部に乗り込む！コアはエネルギーをヒソウテンソクへと流し、ヒソウテンソクはそのエネルギーを輝針城へと流し、輝針城はダイヤサカにエネルギーを送り込む。こうしてコアと成る者のエネルギーをギア伝達し、増幅させることで初めてダイヤサカを起動させることができる。ちなみに、このコアはある程度の妖力を備えた者なら誰でもいい」

集っていた妖怪たちは、一斉に歓声を上げた。だが、正邪だけはただ静かに戦の勝利を祈っていたのだ。出撃は1週間後、それまでに、できることは全てやっておこう。

かつて見た景色。ささやかな平穏、ささやかな希望。それを踏みにじられた時、私は立ち上がる。

その手にある希望、反逆の引き金。

「特大超弩級戦艦ダイヤサカ起動！出撃！！」

正邪のエネルギーをヒソウテンソク、輝針城へと伝達し、ダイヤサカが起動する。ダイヤサカは高く浮かび上がり、そのまま前進を始めた。天井の壁に激突する寸前まで接近した時、ふとダイヤサカと、そして無数の空中艦隊が消えた。

地上へとワープしたダイヤサカ艦隊は、妖怪の山とマガノ国の国境

である山脈との間に現れた。さらに前進を続け、国境の山脈を無理やり超えた。

そこに広がるのは、茶色い大地、紫色の森。いくつもの建物や町が点在するが、ひどく邪悪な気配に満ちていた。まさに、死に絶えた大地だった。

「ダイヤサカ全砲門開け！撃てー！！」

ダイヤサカから放たれた無数の砲撃がマガノ国を焼いていく。

その時、遠くに見えるマガノ国の都から、何千人もの兵士が現れた。他にも巨大な魔獣や、自分たちと同じような、大量の兵器も投入された。兵士や魔獣を向かえ撃とうと、ダイヤサカから妖怪たちが降りていき、戦いを繰り広げる。

敵の戦艦は、不思議な形状をしており、質感から近未来的な印象を受けた。魔力による光線を放ち、妖怪軍の戦艦と激しい撃ちあい始める。

「くくく、ダイヤサカ…主砲発射！」

ダイヤサカの前部にある巨大な顔の口が開き、超極太の波動を撃ちだした。波動は地上に群がるマガノ国軍を焼き尽くし、更に敵艦隊軍も、いとも簡単に破壊し、壊滅寸前にまで追い込んだ。妖怪たちの希望の象徴でもあるダイヤサカは強力だった。敵のどんな戦艦も魔獣も、このダイヤサカの前ではどうすることもできず、どんどんと倒されていく。

「トドメだ…！」

—勝てる…！！

「そこまでだ、愚かな妖怪共よ」

しかし、その時、渦をまく山のように盛り上がっている都から、邪悪な声が轟いた。地上で戦っていた妖怪たちは恐怖に頭を抱え、禍王の手下であるはずの兵士や魔獣たちでさえその場にひれ伏す。禍王は以前幻想郷に現れた時よりも、力を格段に増していた。

「お前たち妖怪は、自分たちの身勝手な都合で動こうとする。それこそが、お前たちの醜い業だ。その業ゆえに、滅びなければならぬのだ」

大地が大きく揺れた。茶色い地面が裂け、中から巨大な目玉が飛び出してきた。続いて現れた、影のような体。禍王だ。その姿は、まさにマガノ国そのものを体現していた。底知れぬ悪意を持った渦が巻いたような身体、肩から伸びる大きすぎる翼には巨大な目があり、いくつもの赤い瞳がはめ込まれている。そしてその大きさは、ダイヤモンドカさえもはるかに凌駕し、妖怪の山でさえも半分に満たないほど、途方もなく巨大だった。

禍王の攻撃により、妖怪軍は瞬く間に壊滅した。戦艦軍は撃ち落され、粉々に爆発される。妖怪たちも禍王の放つ極太のビーム光線により瞬時にして焼き払われた。

結果、惨敗。マガノ国襲撃妖怪軍第二軍は、敗北した。ダイヤモンドも陥落、敵に奪われた。ダイヤモンド最深部の動力室に居たこの私、鬼人正邪は偶然にも軽傷で済んだ。5割以上の妖怪が死亡、残りは行方不明か、マガノ国に捕らえられた。私を含めた、妖怪たちのこれからの運命は、想像に難くない。

『脱走』

マガノ国の闘技場。ここでは捕虜として捕らえられた人間や妖怪が、無理やり魔獣や怪物と闘わされる娯楽施設。もちろん戦いはデスマッチ方式で、観客はほとんどがマガノ国の兵士か、敵側に堕ちた人間、怪物たちである。

「さあ、今回も始まった死ぬか勝つかの大試合！皆さんお待ちかね！今日はあの言わずと知れた、この闘技場でいくつもの死闘を勝ち抜いた闘技王、“鬼人正邪”!!」

私はもう60年もこの闘技場で過ごしている。今までの幾多もの戦いで鍛え上げられた肉体と妖力は、もはや大妖怪と呼べるクラスにまでなっているだろう。戦いを勝ち抜けば、それなりの待遇が与えられる。繁華街にある、清潔感ある家に住めるし、美味しい食べ物も食い放題。だが、何度も死にかけてた事もあった。そのたびに、私の“ひっくり返す能力”のおかげで、さらに強くなって復活できる。

このやかましい歓声と司会の野郎は大嫌いだが、こうして闘ってい

れば今の暮らしは守ることができる。

…とても思っているのか？馬鹿どもが…。

かつては同胞だった妖怪の戦士と闘わされたこともあった。私に命乞いをする戦士を、涙を流しながら殺した。その憎しみやくやしき、やるせなさは、マガノ国の怪物との試合で発散する。

この生活を、誰が守つてやると言うのだ？私はいつでも反逆の機会をうかがっている。少しだ、奴らが少しでも隙を作ってくれば…。

「対するは…おっと、もうすでに危ない雰囲気立ち込めています！同じく幾多もの戦いを、その圧倒的な力と凶暴性で制覇してきた、怪物スラッグ!!」

怪物スラッグ。マガノ国で作られた最強の殺戮マシン。奴らはこの闘技場で戦いを魅せる事だけを目的としてつくられ、その闘争本能は凄まじい。

「おとなしく歩け!」

闘技場の入場口の中から血も凍るような雄叫びと、何かを壁に打ち付ける物凄い音が聞こえてくる。十人近くもの兵士に無理やり連れて来られたその怪物が観衆の前に姿を現した。涎をまき散らして吠えながら、鞭のように長い尾を振り回す。上からどつと歓声が湧き上がった。

その時、尻尾の一振りが兵士の足をかすめた。兵士は前に倒れ込むように転び、慌てて起き上がろうとする。しかし、スラッグはその兵士を見逃さなかった。腕の一振りで兵士の体をバラバラに引き裂いてしまった。血があたりを染め、観衆からはわずかな悲鳴と、大きな笑い声が響いた。

「凄まじい力と凶暴性ですね。ようやく入場を終えた両者、どんな戦いを魅せてくれるのでしょうか!？」

両手足と両首、尻尾につなげられた鎖を、地面に魔力で固定される。試合開始の合図と同時に、この鎖が解かれ、スラッグの殺戮ショーが始まるのだ。

それにしても、おかしいぞ。私も今まで何度もスラッグと戦ってきたが、あそこまで凶暴なスラッグは見たことが無い。身体の大きさ

も、今までのスラッグよりも一回りも二回りも大きい。

「それではいいよ始まります！皆さん、血を見る準備は良いですか？そう言うのが苦手な方はまさかこんなところにいらつしやらないですよ？…コホン、それでは…試合開始イイ!!」

スラッグの鎖が解かれ、正邪もぐつと構える。だが、スラッグはその場で吠え、足踏みをするばかりで正邪に向こうとしない。観客席をぐるりと見渡し、飛び跳ねて観客に襲い掛かろうとしているようだ。

魔獣の調教師が現れ、スラッグに棘の生えた鞭を振るう。しかし、スラッグはその鞭を啞え、思い切り引つ張る。流石の調教師も勢いに引き寄せられ、スラッグの足元に転がった。ためらうことなく片足を上げ、調教師の頭を踏みつけて潰した。観客席からは再び笑い声が溢れる。

だが、司会は笑っていないかった。焦ったように大声で指示を出し、何十人もの兵士がスラッグを取り囲う。観衆の視線もスラッグに釘付けだ。

ならば、今しかない…!

スラッグは鎖を掴む兵士を殺し、鎖を千切って走り出す。他の兵士も止めようと応戦するが、いまいち足止めにもならない。そしてスラッグが塀を飛び越えて観客席に乗り込んだ時、闘技場に正邪の姿は既になかった。

『絶望』

正邪は茶色い荒野と紫色の森をただひたすらに走っていた。後ろからは微かに怒号と振動が響いている。だが、正邪は決して捕まることは無かった。追われる事には、昔から慣れていたからだ。

まさか、こんな所で逃げ出すチャンスができるとは思ってもみなかった。60年待ち続けた甲斐が有ったというものだ。

その時、背後で物凄い音がした。正邪が振り返ると、巨大な赤黒い物体が立ち上がるようにしていた。人間の形をした巨大なロボットのようで、胸部に浮かび上がった巨大な顔には、何個もの瞳が詰まった一対の目が不気味に輝いている。あのボディの形状と、あの大きさに

は見覚えがあった。

かつての地底妖怪軍の旗艦であり希望の象徴だった、戦艦ダイヤサカ。陥落した希望は敵の手に落ち、改造を加えられていた。ああして巨大な悪魔のように変形する機構を持ち、妖怪の荒々しい顔を現していた顔面は無残に書き換えられた。

ダイヤサカの胸部の顔面から黒い星型の光弾が放たれた。無数に飛び散る光弾はあたりに落ち、爆発を起こす。そのうちの何個かが、まるで正邪の位置をわかつていたかのように墜落してきた。正邪は爆風にあおられながらも、立ち止まることなく逃げ続けた。

やがて、敵の攻撃も沈静化し始めた頃、正邪はようやく国境の山脈までたどり着いていた。国境の山脈はそれほど高いという訳ではないが、マガノ国と幻想郷の境全てにそびえたっており、これを越えれば幻想郷へと戻ることができる。

正邪は宙に浮かび上がると、山脈の斜面を飛び跳ねるようにぐんぐんと登っていった。その時、下から何かの唸り声が聞こえた。ふと下を見ると、例のスラッグも着いてきていた。後ろ足の強靱な筋力と蹄を駆使して物凄いスピードで斜面を登る。正邪は追いつかれないように、登るスピードを速めた。

山脈の中腹ほどに差し掛かった時、目の前に小さなトカゲがちよろちよろとこちらへ歩いてきた。トカゲは正邪の股下を潜り抜け、その場を右往左往し始める。正邪がそれを無視して進もうとすると、トカゲも今度は正邪を追い越して元来た道に戻ろうとする。しかし、トカゲは何かにつかつたように立ち上がり、そのまま腹を上にして倒れ込んでしまった。

そうか……。正邪は理解した。何故マガノ国から幻想郷へ帰還できた者はいないのか。ここには魔力の特別な結界が張られているんだ。この結界は幻想郷側からやって来るものは拒まないが、逆にマガノ国から幻想郷へ行こうとすると、この結界のせいで行くことができない。きつと、以前にも正邪のように脱出を試みた者は数多くいただろう。だが、この結界のおかげで断念せざるを得なかったのだ。

しかし、正邪はこの結界の秘密を知っても、特に驚くことは無かつ

た。自分には、“ひっくり返す能力”がある。

結界に作用する透過効果をひっくり返す！これで、逆にマガノ国から幻想郷へ行けるようになる。正邪はすぐに結界を越えた。その時、横をスラッグが鬼気迫る勢いで追い抜いた。結界を抜けた正邪が能力を解除しようとしたギリギリのところ、スラッグも通り抜けてしまった。

スラッグの戦意は既にほとんど失われており、正邪に対して威嚇を繰り返すだけで、襲ってくる気配はない。

正邪はようやく幻想郷の大地へと戻ってきたのだ。正邪が歩きだすとスラッグもそれに合わせてゆっくりと後をつけて来る。

幻想郷は酷い荒れようだった。ごつごつの岩肌、枯れた林。そこに立ち込める空気はどんよりとして、とても臭う。

山脈は妖怪の山の裏側へと繋がっていて、いつの間にか妖怪の山の中に居た。後ろを振り向くと、いつの間にかスラッグは消えていた。奴も、自分を縛るマガノ国から解放され、これから自由に生きていくんだろうな、と正邪は思った。

しばらく歩いていると、妖怪の山の正面の方まで来た。幻想郷の景色が一望できるが…ここから見える幻想郷は、正邪が地底へ行った時よりも、さらに荒れ果てていた。地底へ始めて逃げた時には、誰も深くは考えていなかったが、何故幻想郷は荒廃の道をたどり始めたのだろうか。あの戦争の直後からすぐだ、何かがあるはず…。

だんだんと空気が重くなってくる。ねっとりとした空気が身体に絡みつき、汗が出て来る。暑い…。

正邪は水を求めて水の音を辿り、川へと向かった。岩を越えると、そこには大きな滝があった。水は透き通っているが、ここは禍々しい邪気が充満していた。

しかし、水が欲しいのは事実。正邪は重い足を運んで滝まで近づいた。水を飲んだらすぐにここを離れればいい。そう思い、水を飲み始める。

その時、ごうごうと音を立てる滝の裏側で何かが光った。正邪がそ

れに気づいた時、滝から突き出したワイヤーのような針が自分の肩を貫いていた。思わずうめき、ワイヤーを掴む。

更に次々と突き出してくるワイヤーを避けながら、正邪は滝をくぐった。そこは、洞窟だった。中に、何かいる。辺りに漂っていた禍々しい邪気はここから出ているようだ。さらに奥に進むと、誰かが玉座に座ってこちらを見ていた。

それは人間の男だった。正邪を見るなり攻撃を仕掛け、襲い掛かる。しかし、今の正邪では、この程度の敵に苦戦はしなかった。すぐに懲らしめてやると、その男は自らで命を絶った。

その時だった。土を盛って固めた雑なベッドの上に、黒い影が座り込んでいた。顔も体も真っ黒だが、頭には巻き上がった金髪が見え、眼もあつた。だが、それ以外は虚無的な姿だった。赤い目が正邪をじつと見据える。

「そこまでだよ、鬼人正邪」

「貴様…まさか…!」

「そう、私は禍王。〃北の歌姫〃の番人が死んだのを感じてここまで来たのだ」

「〃北の歌姫〃…だと?」

正邪がそう尋ねると、禍王は少し間を置いてから喋り出した。

「…私は、以前幻想郷へ攻め込んだとき、いくら本気ではなかったとはいえ、負けた。敗因はお前たちが見立てた通り、私のせつかちさと自信過剰な所…。だから、私はそれを反省し、今度はじっくりと新たな策を練った。待てば必ず成果が得られる…それこそが、〃四人の歌姫計画〃だ」

その時、正邪の頭の中にどつと悪夢のような光景が流れ込んできた。荒廃し、腐りはてた大地には生き物一匹すら見当たらない。そして、洪水のように広がり続ける灰色の液体が幻想郷を飲み込み、上空ではガルルガが悍ましい金切り声をあげ…

「私は焦っていた。一刻も早く目的を果たそうと、充分に準備をしていなかった。それに加え、己惚れていたのだ。今度は焦らず、じっくりと待つて目的を果たそうとした。東西南北に配置した四人の歌姫

はいい仕事をするだろう。そして妖怪共は、愛する土地を捨てるままで、何故幻想郷が荒廃したのか気付きもしない」

「…何だと…退け、ならば私とその歌姫を全て滅ぼして…」

「お前に見せてやろう。この幻想郷の真実を、四人の歌姫の真価を…」
一瞬、打倒歌姫の闘志に燃えた正邪だったが、すぐにそれは消え去った。歌姫を倒してしまえば幻想郷がどうなるのか、それを禍王に教えられた。

「幻想郷を守りたくば、選ぶがいい。他の誰かが歌姫を全て倒すのを見ているか、お前が歌姫を守るのか…！時間はたっぷりある。焦るなよ…焦りは禁物だ、じっくりと考えるがいい」

そう言い残すと、禍王はまばたきををする間にその場から消えていた。

正邪は、それからしばらくこの洞窟で暮らし始めた。こういう生活は慣れていたし、ここから離れる気にはなれなかった。この洞窟の壁の奥に、何か邪悪が埋め込まれている。その邪悪こそが、ここら一帯を蝕んでいる魔の根源だという事は、既に気付いていた。しかし、初めてここに来たときは吐き気を催すほどに感じたこの邪気も、今では何も感じなくなっていた。

正邪の頭には、ずっとあの光景が流れていた。幻想郷が滅ぶ光景だ。

どうする…？正邪は何か月も悩み抜いた。気が付けば、自分でも意識しないうちに壁を掘っていた。どんどんと石と土が掻きだされ、穴が広がっていく。そして、ついに掘った穴から白い物体が現れた。生白い表面に、浮き上がった毒々しい黄色の縞模様が走っている。

その物体から発せられる魔力の歌声は、まるで怒っているかのよう
に、力強かった。北の歌姫は正邪に歌いかけていた。正邪は歌姫の誘惑に負け、その表面に手を触れた。

その瞬間、世界が変わった。歌姫の膨大な魔力は正邪にさらなる能力を与えた。さらに、元は天狗のアジトだった城を改造し、正邪だけの巨塔を作り上げた。

—人は問う、何故戦う？何故妖怪は殺す？何故妖怪は世界に誕生した？その答えを知らぬまま、人は死ぬ。それこそが、人と妖怪のサガ。妖怪は愚かだ。自分たちの勝手な都合で、関わった者の全ての可能性を封じてしまう。だから、この地から去れ。決して4人の歌姫に触れるな。お前たち愚かな種族にはどうすることもできないのだから、無駄だ。おとなしく滅びを受け入れるがいい。妖怪共、そして人間どもよ…恐怖せよ、愚かなる種よ。この…幻想郷の守護者、鬼人正邪を！—

外伝 幻想郷縁起 完

『幻想郷年表』

第118季 紅霧異変

第123季 東方紺珠伝

第124季 結界決壊大異変／龍神が幻想郷を捨てる／入れ違いに神獣が幻想郷に出現／妖怪たちと対談し、神獣が幻想郷で繁殖／博麗霊夢、18歳／霧雨魔理沙が誤まった魔術に手を染め始める

第136季 神獣が最も栄えた時期／博麗霊夢30歳、5種族の神獣に予言を告げる

予言の内容

・何十年か後に北の妖怪の山の彼方から邪悪な大王が現れ、幻想郷を襲撃する

・その時には、人間、妖怪、神獣、幻想郷の住民全てが結託しそれを迎え撃つこと

・敵の撃退に成功しても油断はするな。敗北を知った敵は、負けた原因となった妖怪や神獣を消そうとする

・だから、神獣が減んでしまう前に、一匹でも生き残るためにひたすら隠れて眠りについてほしい

・戦いから200年後、邪悪に立ち向かえる力を持つ女が現れる。その時に目覚め、力を貸してあげてほしい

- 第139季 博麗霊夢、33歳で死去／霊夢の死を皮切りに、魔理沙の魔術がエスカレート
- 第140季 霧雨魔理沙、幻想郷から追放される
- 第165季 月の都陥落／マガノ国誕生
- 第224季 山の彼方より禍王襲来／幻想郷の全ての民が結託し、撃退成功
- 第225季 ガルルガによる神獣の大量殺戮開始／霊夢の予言を信じた各種族の神獣の一匹が隠れて眠りにつく
- 第226季 幻想郷の東西南北に歌姫設置、四人の歌姫計画始動／妖怪たち、幻想郷を捨て地底へ避難開始
- 第230季 マガノ国の迫害を受け続けた妖怪たちは残ることを決めた少数を除いてほぼ全てが地底へ逃亡／人間の里陥落
- 第250季 地底の鬼で編成された第一軍マガノ国襲撃部隊出撃
- 第280季 第二軍マガノ国襲撃部隊出撃／敗北、ダイヤサカ陥落
- 第340季 鬼人正邪、マガノ国を脱出／そして北の歌姫の番人と成る
- 第374季 鬼人正邪、妖怪の山に残された天狗のアジトを本拠地とする
- 第406季 本居新子誕生／茨木華扇、鈴奈庵の玄関前に住み始める
- 第410季 熱風が東の番人引退／幼い本居新子に目をつけ、新子に自分の力を移して新たな東の番人にする
- 第424季 本居新子、茨木華扇、旅に出る

第二部 新たな幻想は禍に抗う 　　Last Re

bellion

第1話 「独白」

そろそろ、手と目が疲れて来た。12本あった部屋のロウソクも、最後の一本が尽きようとしている。それも当然だろう、私は3日も寝ずにずっとこうして机に向かっていたのだ。

私が幻想郷縁起を編纂し始めたのは、一代目の阿一の時で18歳くらいになった時の事だから、もう千二百年以上も昔の事である。この私が、めでたく十三代目として生まれ変わることが出来てから、もう40年は経つだろうか。私たち稗田の一族は代々短命だが、私だけは異例で、十二代目までと比べてかなり長生きをしてきた。もう、いつ私死んでしまってもおかしくないのだ。

実際のところ、本当ならば私は死んでいたはずだった。20年も前の事だ、私は禍王が支配する山の向こうにあるマガノ国からの使いに殺されかけた。私を痛めつけ、柱に縛り、その周りに本を積み重ねて火をつけた。炎が強くなり、火をつけた使いもその場を後にしたころ、縛っていた縄が焼き切れた。だが、私にはもうそこから逃げるほどの力は無かった。私が気付いてしまったこの幻想郷の真実を友人に知らせるために、自分の血を使って手紙を書いたりもした。そこで意識が途切れた。

しかし、目を覚ますと、私は生きていた。顔や腕に酷い火傷が出来ていたが、とにかく生きていたのだ。周りには、見知らぬ子供たちが居た。どうやらこの身寄りのない浮浪の子供たちが私を助けてくれたようなのだ。

私の住む屋敷には、私でさえも知らない秘密の地下通路が有ったらしい。炎で床が焼け落ち、私は瓦礫ごとその地下通路に落ちてきたようだった。私は子供たちに、自分がしなければいけない事、そして自分が今の上には出れない理由を伝えた。

今では、その子供たちのほとんどがそれぞれの道を歩んでいった。

こんな憶える事しか能のない私にここまでついてきてくれたのは、助手の迪郎だけだ。

さて、その助手の迪郎は、他の子どもたちと同じく、盗みや小売りで生計を立てていた。何度もパンや野菜を持ってきて、笑顔で私に差し出してくれたのを鮮明に覚えている。それが、盗んできた物や汚いお金で買ったものだとは分かっていても、私のために用意してくれたものを、笑顔で受け取っていた。私は迪郎を實の息子のように可愛がった。

迪郎によれば、3年前、地上では物凄い動きが有ったとか。何でも、本居の鈴奈庵の娘が、四人の歌姫を全て倒し、その後待ち受けていた禍王による幻想郷への復讐も退けて見せたらしい。その話を聞いた時、私はそれを成し遂げた本居新子に影ながら感謝し、泣く事しかできなかった。

私が彼女の父親の本居に託した言葉を信じ、ついにやってくれたのだ。そこまでするのには、かなりの苦労をしただろう。

そもそも、私が禍王の歌姫計画に気付いたのは、たまたま「四人の歌姫」の物語の冊子を見つけたところから始まった。その冊子は幻想郷縁起の一冊に付属していたもののようなのだが、どこかで抜け落ちてしまい、家具の裏側に入り込んでいた。それを見つけた時は、不思議に思っただけで特に何も考えなかったのだが、自分の記憶をたどり、先代が書き記した幻想郷縁起を見返すと、驚くべき事実気が付いた。200年前の大戦の直後、七羽のガルルガが東西南北四つの魔境の上を飛んでいたこと、そしてその範囲に荒廃が集中していたこと。それだけで十分だった。

後は、私のもとで働くとする使いの者がヒントをたくさん与えてくれた。私はそれを自分で発見した私だけの情報だと思っていた。その使いは禍王の手の者だった。それに気づいた時にはもう、その使いは全ての情報を私に教え、私は歌姫計画の全てを知ってしまった。

禍王は計算高く、狡猾なケダモノだ。無数の罫を貼り廻らせ、どう転んでも幻想郷を手玉に出来るように仕組んでいた。歌姫計画は、ま

ず東西南北に配置した四人の歌姫の魔力で、幻想郷を腐らせる。それを知った誰かが、歌姫を全て退治してしまえば、たちまちにして幻想郷は滅びる。

もしも私が後に述べた事を知らず、私自身が打倒歌姫を目指していたら、私が残りの人生を禍王の手の平の上で転がされるところだった。だが、知ってしまったがゆえに、殺されかけた。

私は恐れていた。私が本居に伝えた事を、彼は曲解してとらえてしまっているのではないか。だが、その心配は無用だったようだ。本居新子とその仲間、そして神獣の生き残りたちが歌姫計画を見事に最もいい形で打ち砕いてくれた。

しかし、まだ幻想郷には課題が残されている。マガノ国の滅亡はもちろんだが、もう一つやらなければいけないことがある。

そろそろ、助手の迪郎が帰って来る頃だろう。帰ってきたら、私は支度をして、いよいよ上に出ようと思う。

幻想郷、人間の里。

商店街は今日も大勢の人々にぎわっている。幻想郷を荒廃させ、飢餓をもたらしていた四人の歌姫が全て倒され、平和が訪れてから、3年の年月が流れていた。里の中央地区は丘のように盛り上がり、おり、新築の家々が立ち並び、中心には高く天を突くようにそびえる集会場の塔がある。ほとんどの家に水道管が通され、自転車が普及するなど、工業化も進んできた。妖怪も人間の里で暮らし、人間と協調している。

そして、人間の里の外でも注目すべき点はいくつもある。荒廃していた大地が以前のように息を吹き返した影響で、自然の化身である妖精がちらちらと誕生し始めた。

魔法の森へと続く公道が作られ、森の果物を採取、栽培できる。今までは未踏だった範囲にまで人の手が行き渡り、人間にとってより良い、暮らしやすい環境へと変化していった。

「よしっと…」

そう手記に書き記しながら、人間の里の門をくぐった、マントを着た旅人。旅人はマントのフードを外し、顔を上げた。ターバンのように頭に巻いた布で髪の毛を中にまとめ、手首に巻かれた鎖のようなアクセサリーが日の光を受けて光る。

旅人はさっさと歩き、人のにぎわう商店街をざっと見渡す。そして、目についた飯屋に足を踏み入れた。

「いらっしやい！」

机を拭いていた男が顔を上げた。この男はツムグ。新子の古くからの知り合いでもあり、3年前の戦いでは大いに勝利に貢献した人間だ。

実は、ツムグの家は細々と飯屋を営んでいて、里がマガノ国の支配から解放された後は見せも大きく改築し、飯時には寄っていく人も多い。カウンター席の奥ではツムグの両親が鍋に向かっていている。

「つて、華扇さんじゃないっすか」

ツムグは旅人を見るなり、そう言った。旅人もマントを脱ぎ去り、顔の汚れをぬぐった。

「久しぶりね」

旅人深い赤色の服に身を包んだ華扇だった。華扇は適当な席に座り、ツムグが置いた水をぐいっと飲んだ。

「新子とはどう？」

華扇が徐にそう尋ねた。

「あ、アイツとっすか？どうってというか、別に…」

「だってあれから付き合ってるんでしょ？」

「…アイツは最近になってずっと思いつめたような感じで機嫌が悪いんすよ。ていうか、今回はどこへ行ってたんすか？」

「竹林をぐるっと回ってきたけど…」

華扇は、旅から旅の日々を送っていた。一月ほどの旅に出て、帰って来ては三日も経たずに次の旅へ出る。旅の目的は、幻想郷の調査である。どの場所がどうなっていてどう変わっているのか、そこにどんな妖怪が住んでいるのかなどを記録しているのである。

「奥の方では、妖怪鬼が暮らしていたわ。でも、皆暗い顔をしてた」
「へえ…」

「他の妖怪もそうよ。皆不安そうな、悲しそうな表情をしているの。人間だってそうだわ、一見するとこの平和を謳歌しているように見えるけれど、瞳の奥底では悲しみを募らせている…何故だか分かる？」

「え？うくん…」

「分からない？」

「分かりますよ」

その時突然、後ろから別の声が聞こえた。2人が驚いて振り向くと、そこには本を抱えた少女が一人佇んでいた。紫と黄色をした着物を着て、髪には花の髪飾りを付けている。顔には痛々しい火傷の傷跡が有り、片目の色が灰色に濁っている。小柄な外見は少女のように見えるが、その雰囲気は並ならぬものを感じた。

「お客さんつつすか？こちらの席にします？」

「そうですね、そこで」

少女は華扇が座っているカウンター席の隣に座った。

「…ところで、誰かしら？分かりますって言ってたけど…」

「ええ、私は貴方の問いに答えることができますよ。私は稗田阿富ひえだのあとみと申します」

その名前を聞いた華扇があつと声を上げる。稗田阿富といえば、新子の父親から聞いた。彼の友人であり、マガノ国の手下に殺され、幻想郷縁起と遺言を託したという、稗田家13代目当主…！

「驚いているようね、茨木華扇さん。私がこうしてここに居るのは、話せば長くなるのでまた別の機会に。さて、本題にうつりますが…さっきの話の貴方の問いに答えると、ズバリ…」

—ろろん ろろん…—

まただ。この何かを振るような、聞き心地の良い音が頭に響いてくる。楽器とかの類ではない。美しい音が頭から離れない。

それに、声も聞こえてくる。

—さあ、私の願いを叶えろ！

この声は聞き覚えが有った。だが、誰なのか思い出すことができない。

本居新子、21歳。あの戦いの後、英雄としてたたえられた不良少女も、今ではただの一般人に過ぎない。母親と二人で鈴奈庵を営んでいる。

「よしつと…」

新子は新しい本が詰まった箱を床に降ろした。この箱に入っているのは全て妖魔本だ。妖魔本とは、主に妖怪が書いた本の事を指し、その種類には妖怪による古典書籍、人間宛に書いた書物、グリモワールなどが含まれる。特に妖怪の存在を記録した本が多い。

この妖魔本は鈴奈庵の物置小屋に眠っていたのを引っ張り出してきたもので、その他は森近霖之助が店主をしている香霖堂から買い取った。

「うーん、さっぱりわかんねえ」

本の一冊を手に取り、パラパラとめくる。ぶつきらぼうにそう言うのと、本を閉じた。これはただ単に難しい本が苦手なわけではない。新子は、これでも3年前に比べれば静かになり、貸本屋の経営者らしく多少は本を読むようになった。だが、妖魔本の妖怪の文字は一般に人間には読むことができない他、書物によつては現在の妖怪にも読むことのできない程の古い文字で書かれているものもある。

もう一冊ぬき出し、適当にページを開いた。すると、あるページに挟まっていた物が床にはらりと落ちた。新子が何かと思つて拾ってみると、それは木の葉だった。

「葉っぱ…？誰かがしおり代わりに挟んでたのか？」

そう口にしたとき、本のページとページとの隙間から白い煙が噴き出した。煙はあたりに漂い、更にモクモクと立ち込める。

視界が悪くなり、新子は目の前を手で払いながらせき込んだ。

「これは妖気…妖怪か!」

煙には妖気が混じっている。それも、今まで出会ってきた妖怪とも違うタイプだ。その時、新子は金縛りにでもかかったようにその場か

ら動けなくなった。飢えた獣のような気配を煙の中に感じて、眼を見開く。

「この儂を封印から解いたのはお主かの…?」

「確かに、華扇さん、貴女と本居新子はマガノ国軍を幻想郷から退けることに成功しました。あの博麗大結界が復活し、それがある限りは禍王は幻想郷へは二度と踏み込んで来れないでしょう。しかし、忘れてはいませんか？マガノ国には、捕虜として連れ去られた人間や妖怪が多く残されているのですよ」

稗田阿富と名乗った女性はそう言った。ツムグが動きを止め、確かにと言った顔で頷く。

「それは…そうね、私が言おうとしたことだわ。皆、哀しみを秘めてるのよ。もう禍王に怯えなくてもいい。だけど、愛人や友人、家族をマガノ国へ連行された人々は、まだ悲しみに沈んでいるわ。妖怪だって同じ…同族だった者や仲間、兄妹でさえ行方が分からない」

「そうですー!」

阿富はパアつと顔を輝かせた。

「それに、更に課題はあるのですよ。さつき、禍王は幻想郷へ二度と踏み込んでこれないといいましたが、それもつかの間の事です。いずれ禍王は再び博麗大結界を破って侵入してきます」

「何ですって?」

「ですがそれを防ぐ手段はありません。もう一度、この幻想郷を妖怪で満たすのです。もともと、幻想郷とは妖怪が妖怪の為に作った理想郷…いくら我々人間が進んだ文明を築こうが、妖怪が居なくては幻想郷は存在を保っていることが難しくなる…」

「つまり、アンタは何が言いてえんだ?」

ツムグが言った。阿富はコホンと咳をし、高らかに叫ぶ。

「…もう一度、幻想郷から離れた妖怪たちを連れ戻す!今度は我々がマガノ国へと踏み込み、囚われた人間も開放するのです!!」

「な、何でえテメエは!!」

煙の中で、黄色い目が光った。動物のような耳が角のようにシルエットを映し出し、巨大な尻尾が揺れている。長年閉じ込められていた妖気をむんむんに放ちながら、妖怪はゆっくりと新子に歩み寄り、手を伸ばす。

新子は咄嗟にその手を掴み、こちらへ引き寄せると同時に、固めた拳を素早く突き出した。しかし、パンチは難なく避けられ、逆に手を振り回され、地面に倒れ込んでしまう。

妖怪は再び手を伸ばし、新子の首元へと指を伸ばす。新子は目を瞑り、歯を食いしばる。

今、幻想郷だけではなく、マガノ国をも巻き込んだ、大きな戦いが幕を開けようとしていた。

第2話 「新たなる幕開け」

「今度は…私たちがマガノ国へ乗り込むですって!？」

華扇が声を荒げた。マガノ国へ行って戻ってきた者は、たった一人、あの鬼人正邪を除いて存在しない。

「そうです。そうしないで、どうやって連れ去られた者たちを救おうというの?」

「そんな簡単に言うけど…」

「マガノ国へ連行された妖怪を幻想郷へ連れ戻し、幻想郷を妖怪で満たさなければ、博麗大結界が破られ、再び禍王が再臨してしまうのですよ」

「でもねえ…」

「…実は、マガノ国へ乗り込み、彼らを救えるという道具があります。まずは本居新子さんの所へ案内していただけますか?」

新子の首元に、妖怪の爪の先が触れた。ほっそりとした指が新子の首筋をすうつと撫でる。そして、腕を掴み、ぐいっと引き上げた。

「ほっほっほ。ちと血の気が多すぎるのう。何も取って喰おうという訳ではないわい」

妖怪は新子に話しかけた。見る間に起き上がらせられた新子は困惑しながら目を開けた。既に妖気の煙はほとんど消えており、視界もはつきりとしている。

目の前に居たのは、確かに妖怪だったが、思っていたのと大分違った。獣の耳に、キリツとした顔だち、丸い眼鏡。頭の上に木の葉を乗せ、黄緑色の上等な着物を纏っている。背後には身丈よりも大きな縞模様の茶色い尻尾が生えている。

「あ、アンタは…?」

「儂は二ツ岩マミゾウ、というてな。昔は狸の頭領をやっていたわい」

狸…言われてみれば、尻尾とか耳とか、それっぽく見えて来る。新子が驚いた様子を見せると、マミゾウと名乗ったこの妖怪狸は不敵に微笑みながら眼鏡を上にあげた。

「狸だつて？…じゃあ本に化けてたつて言うのか？」

「化けてた、とな。それは違うの。話すと長くなるのじやが、直入に言えば、禍王の手下によつて、本に封印されていた…といったところかの？」

何と、このマミゾウは本に封印されていたらしい。そういえば、妖魔本には妖怪そのものが封印されている類いのものもあるらしい。妖怪が存在そのものを忘れられた時に消滅してしまうものであることから、ここに封印された妖怪等は本の中で力を蓄え、目覚めることのできる時を待っているのである。彼女もそう言ったような妖怪なのだろうか。

「禍王の手下？」

「そうじゃ。150年ほど前かの、とても悪い心を持った魔法使いと戦う事になつての…そこで封印されてしまい、今に至るといふ訳よ」

「新子ー？何かあつたの？」

カウンターの机の奥のドアからガチャリと音が聞こえた。自宅の方に居た新子の母親が騒ぎの音を聞いてこちらをのぞこうとしている。その時、マミゾウがびよんとジャンプした。身体が煙に包まれる。

「あら？」

しかし、母親がドアを開けると、そこには、新子と一人の女性が立っているだけだった。

「ちよつと…騒がせてしまったかの？」

「…お客さんでしたか！失礼しました、ごゆつくりどうぞ」

そう言うと、すぐに向こう側へ行つてしまった。

「人に変身したのか？」

「そうじゃて」

マミゾウは着物の袖に両手を入れて腕を組むと、ぐるりと鈴奈庵の店内を改めて見渡す。一度店の出入り口の外に出て、「鈴奈庵」と書かれた看板を確認し、今度は新子の元へ近寄り、まじまじと顔を眺める。

「何だよ？」

「ほっほっほ、お前さんがあの本居の血筋を引いてるのかい？」

「アンタ、妖怪の癖に鈴奈庵を知ってるのか？」

「知ってるとも。ここはずっと昔から知っておる、300年前のお主の祖先も知っておるぞ。だが、ソイツと比べて、随分荒っぽい気をしておるの」

その時、入り口のドアが音を立てて開いた。なじみ深い顔が慌てたように入ってきた。

「新子！」

「華扇じゃないか、帰って来たのか？どうだった今回の旅は…」

「それは後！それよりも…」

華扇が後ろを向いて指さした先に、稗田阿富が立っていた。火傷のある顔でじつと新子を見ている。

「あ？その人がどうかしたのか？」

それから、新子は阿富から全てを聞いた。歌姫の秘密を知った後、彼女が殺されかけた事、21年間も地下通路で生き延びていたこと、そして地下で暮らしていた時にある道具について調べていたこと。

「まさか、あの稗田が生きていたとはなく。父さんは転生も途絶えただって言ってたけど、まだ生きてるんだからそりや転生なんてできるわけないよな…」

「ええ、ですが、稗田家は幻想郷縁起に生きていた間の出来事を書き記し、次の転生先へそれを託するのが役目…なので代々短命なのですが、私はもうずっと長く生きています。いつ死んでもおかしくありません。なので、これから先、まだ貴方にはやるべきことが有るといふことを伝えに来たのです」

「やるべきこと？」

「今、幻想郷の人々は、今だマガノ国から帰らぬ家族や友人の事を思い、嘆き悲しんでいます。そして、幻想郷が妖怪で満たされない限り、いずれまた禍王はやってきます。そこで、新子さんには、もう一度…冒険に出ていただきたい」

「…何だど？」

「マガノ国から人間を救い出し、この地を捨て去った妖怪を連れ戻してくれるのは…新子さん、貴方しか居ません」

「いや、でもよ…そんな事できる保証はあるのか？これと言った切り札とか…。例えば三年前、歌姫を倒す旅に出た時は、幻想郷の神獣たちが協力してくれた。でも、今回は何を当てにすればいい？アタシだけの力じゃ、とてもじゃないが無理だぜ」

「実は、あるんですよ。名前くらいは聞いたことあるんじゃないでしょうか…その名も、『打ち出の小槌』!!」

「打ち出の小槌!?!」

華扇が声を漏らした。

「知ってるのか?」

「打ち出の小槌…何でも願いを叶えることができるという、鬼の秘宝よ…。それがあれば、マガノ国へ突入しても願いを叶えれば好き放題できるって訳ね。でも確か…」

「そう、打ち出の小槌は鬼の魔力が込められた道具…乱用すれば、それだけ使用者の身を滅ぼしてしまう。しかし、今回打ち出の小槌を使用する場所はマガノ国!マガノ国は禍王が支配する場所…そこでなら、打ち出の小槌の制約を受けることなく、何度でもどんな願いも叶えることができる!」

マガノ国に存在する物の全ての権利は禍王に委ねられている。しかし、マガノ国へ侵入した物体…例えば、打ち出の小槌を持ち込み、マガノ国の所有するものと成れば、打ち出の小槌本来の鬼の制約は無効となり、それを気にすることなくマガノ国の魔力を利用して無尽蔵に小槌を使う事が出来る、という訳だ。

「なるほどな…。それでも、どうやってマガノ国へ行くんだ?国境の山脈を越えていくのか?」

「それは危険だわ。今頃、禍王は国境を越えて幻想郷へ行ける方法を血眼で捜している頃でしょうから、国境付近には近づかないほうがいいと思うわ」

「だったら、どうやって…」

「それなら、儂が良い情報を提供してやろう」

本棚の影からマミゾウが姿を現した。その姿を見た華扇が驚いた声を上げる。

「アナタ、確か…」

「おお、久しいのう、山の仙人殿。お主がここにおるとは驚きじゃ…」
「知り合いなのか？」

「まあ、ね…」

「ゴホン、どうやってマガノ国へ侵入するかという問題じゃが…地底世界を通るといふのはどうじゃろう？」

「地底世界を通る…ですって？」

「その通り。地底の世界というのは、幻想郷よりもずっと広い。だから、マガノ国の地底にまでつながっている…という訳じゃ」

「でも、地底とマガノ国がつながっているとは限らないでしょう？」

華扇も負けじと反論する。何だか、切羽詰まったような、まるでその地底世界とやらに行きたくないような感じだ。

「それでもないかもしれません。いずれにせよ、打ち出の小槌を使えば地底からマガノ国へ突入することができるはずですよ」

「うぐぐ…」

「まあ仕方ねえよ、華扇、そうやって行こうじゃねえか。でもよ、その打ち出の小槌は何処にあるんだ？」

「打ち出の小槌は…地底にある！一寸法師が奪った宝は、鬼に返還されたと聞いておる」

「なるほど。偶然にしちや出来過ぎてる気がするな、私たちは地底を通ってマガノ国へ行く、地底にはマガノ国へ行くのに必要な道具がある…」

「そうと決まれば、私も行くわ。新子、貴方とはそういう付き合いじゃない？」

「確かにな。今回も骨が折れそうだ。だけどよ、三年前の旅立ちの時と比べて、恐怖は無え。むしろ、あるのはやる気と闘志だけだ」

「私も同じよ。マガノ国へ連れ去られた人間と妖怪を幻想郷へ連れ戻す。それが今回の旅の目的よ」

阿富は新子と華扇をじつと見ていた。これが、この方たちが、幻想

郷を禍王の手から救った者たち。この方たちならば、この最後の大事：最後の反逆も、無事成し遂げてしまいかもしれない。

そう、この者たちならば…。

二日後、新子たちは次なる旅に出発することになった。打ち出の小槌を手に入れ、それを駆使し、マガノ国から人間と妖怪を連れて幻想郷まで戻る。それが今回の旅。

長らく動かしていなかった体を動かし、押し入れに眠っていたかつての武器を引っ張り出す。華扇は出発のときまで家を空け、情報集めに出た。この旅は、他の誰にも知られてはいけない。知っているのは、母親、昔からの友と、マミゾウ、そして稗田阿富とその助手だという迪郎だけだ。

今ではほとんどそう言ったことはないが、新子は一時、幻想郷を救った英雄として称えられた。今回、新子が旅に出るという事が他の人間に知られれば、皆不安がるだろう。また何か起こるのではないかと。それは避けなくてはならない。

いよいよ、出発の日が来た。鈴奈庵には、二日前の時の面々とツムグが居た。

「新子ー？まだかしらー？」

向こうの方から自分をせかす華扇の声が聞こえた。新子は急いで引き出しからハサミを取り出すと、背中あたりまで伸ばしていた髪の毛をばっさり切った。これですっきりしたぞ。

新子が食料や武器の入ったバッグを背中に背負い、鈴奈庵の出入り口の方へ向かうと、皆が居た。新たな旅に出る新子を、期待を込めた、または不安そうな表情で見つめている。

「新子、あの能力はまだ使える？」

「ああー…どうだろうな、使えるは使えるんだが、前よりは弱くなってる気がするな」

“ 魔に対して力を発揮する能力 ”、敵の放つ邪悪な力に応じて自信を強化する能力。敵が邪悪であればあるほど効果を発揮し、3年前の歌姫退治では大いに役立った。実際には敵の邪気を測り、それに比例

させて自分の霊力を増幅させるというもの。

この能力の正体は、歌姫の番人としての能力だった。本来ならば東の歌姫の死と共に消えるはずの能力なのだが、新子はこの力を自分の力として取り込んでしまった。

応用として、この力で自分の傷の治癒を早めたり、それを他人に対して使い、力を分け与えることもできる。

「なあ、新子……」

ツムグが小さい声で新子に囁いた。

「これが終わって、お前が帰ってきたら……」

「……ん？」

「……いや、何でもねえ。無事に帰って来いよ」

「当たり前だ、アタシを誰だと思ってる？ 鈴奈庵の本居新子だぜ」
新子はニヤツと笑いかけた。ツムグも、それ以上は何も言わなかった。華扇はその様子を見て、一度目を閉じた後、切り出した。

「それじゃあ、行きましようか。これが、最後の反逆に……なればいけどね」

「いや、してみせるさ。連れ去られた奴らを救う……それに加えて、敵の親玉を倒せたら……それ以上にいいことはねえ」

2人は荷物を背負いなおすと、皆が見守る中、鈴奈庵を出て旅へと出発した。まだ朝方の人間の里を、誰にも見つからないように慎重に歩いていく。

今回の旅は、敵に絶対に知られてはいけない。何せ、今まではこちら側に取り込んでできた敵と戦うのみだったが、今度は直接敵地へ殴りこむのだ。それに、華扇の話によれば、現在張られている博麗大結界はマガノ国の憲兵団や怪物、魔獣たちの幻想郷入りを封じることではできて、禍王の手下となった人間を封じることができないのだ。そのため、華扇は残党狩りの旅にも何回か出ていたが、まだまだ手下は幻想郷中にはびこっているらしい。

実際に、そう言った者を里で何回も見たことが有る。まず最初に目立った者は、シンスケという若者だった。彼は3年前まで工場で無理やり働かされていて、過酷な労働によって足を悪くしていた。解放さ

れてからは家族と幸せに暮らしていたはずのシンスケがある日、夜中の鈴奈庵に忍び寄った。新子の枕元にサソリを放ち、殺害しようとした。しかし、寸でのところで新子に見つかり、その行動について問いただされた時、持っていたナイフで自分の首を斬って自殺した。

そして一年ほど前、口のきけないマイエという少女が、商店街を歩いていた新子を背後から剣で狙って来た。これも新子に止められると、その剣で自殺してしまった。

結局、この二名は何だったのか、マガノ国からのスパイという事で事件は終わったが、まだ同じような残党がそこら中に居るのだろう。

いよいよ、里の外門辺りへとたどり着いた。

「…お前は！」

その時、後ろから何者かの気配を感じた。2人が振り向くと、そこには二ツ岩マミゾウが立っていた。

「あら、何しに来たの？」

「ふむ、儂も少々マガノ国へは恨みがあつてな。儂も同行させてはくれないか」

マミゾウからのまさかの申し出だった。マミゾウは“化けさせる程度の能力”を持ち、これからの目的を達成するのに重要な役割と成るだろう。華扇は何か腑に落ちないようなところが有ったようだが、マミゾウを加え、3人は人間の里を出た。

まず目指すは、地底へと通じる道があるという妖怪の山だ。そして、この三人は、行く手にどんな運命が待ち構えているかなど、この時は知る由もなかった。

第3話 「破魔師シヤム」

ついにマガノ国の支配から解放された幻想郷。しかし、再び魔の手が忍び寄るのも時間の問題だ。

本居新子、茨木華扇、そして二ツ岩ミゾウの三人は、マガノ国に囚われた人間と妖怪を救い出すため、新たなる旅へと出るのだった。

第3話 「破魔師シヤム」

新たなる旅の最初の目的地は、地底への道が存在するという妖怪の山だ。人間の里の北門から出発した、本居新子、茨木華扇、二ツ岩ミゾウの三人は、妖怪の山を目指してひたすら歩いていった。

日差しが真上に達したころ、三人は緩やかな坂に差し掛かった。

「ここは『戦いの丘』と呼ばれている丘よ。かつてのマガノ国との戦いが行われたのよ」

華扇がぼそつと呟いた。

「ふーん…」

丘は緩やかだが、かなり高い。一番上まで昇りきると、今まで登ってきたのと反対側の斜面は、ごつごつした岩が点在し、急になっている。足でも滑らせれば、無傷では済まないだろう。

「危なっかしいのう、戦での傷跡がまだ残つとるわい」

ミゾウはびよんびよんと岩の上を飛び移りながら斜面を下っていった。下駄しか履いていないのに、よくあそこまで動けるものだ。それからも、三人は黙々と歩みを進めた。三年前までは枯れた林と干上がった川しかなかったこの平原も、今ではすっかり、見違えるほどに豊かになっていた。時々、巨大な足跡が残されているのが分かった。神獣の竜や、ケツアールが降り立ったあとだろうな、と新子は思った。彼らは、今はこの辺りは飛んでいないらしい。

「お、ありゃあ…」

新子は前方に、キラキラと光るモノを見た。どうやら、あそこには湖があるらしい。

「あれは『霧の湖』じゃな」

「へえ、あれが霧の湖か」

霧の湖という名前は、昔に幻想郷縁起で見たことが有った。何でも、悪魔の住む館、紅魔館のそばにある巨大な湖なそうな。

歩いてるうちに、そこまで来てしまっていたようだ。

三人は湖の近くで休憩をとることにした。湖に近づき、そこに座り込む。湖は大きく、反対側は霧で覆われていた。

「ふいふ、久々にこんな歩いたな」

「儂もじゃ：やはり疲れるのう」

「貴方は妖怪でしょ、この程度でくたびれるはずがないでしょうが」

華扇がそう言いながら、カバンから干し肉を取り出した。キセルを吹かすマミゾウの横で、新子は湖を縁取っている岩場を見ていた。僅かな波を立てる水が岩に当たって砕けちり、湖面には小さな魚の群れが見える。

その時、岩の近くで何かが動いた。さつきまで、岩と水しぶきしか見えなかったところに、細身で小柄な男がいた。おそらく折り畳み式の椅子に座り、本を読んでいる。

「あんなところに人が居るぜ。旅人か？」

「：いや、あんな奴は人ではないぞ」

横で、マミゾウが震えた声で言った。ピリピリと緊張した妖気が放たれ、新子は思わず驚いた。あの温厚そうだったマミゾウが、怒っている。あの男を見て、明らかに怒っていた。

「あの人がどうかしたの？」

と、華扇が尋ねる。

「新子や、この間：儂が話したことを覚えておるか？」

「話したこと：？」

「儂は、本に封印されておった。妖魔本となった儂を封印から解いたのはお主じゃ。では、儂を本に封じ込めた魔法使いとは：」

「まさか：！」

「そうじゃ：破魔師シャム：！面白半分に妖怪を退治し、人間から金を巻き上げる：魔法使いさ。奴は、昔は人間の里に居た。妖怪退

治の依頼を高額で引き受けていたんじや。そのうち、マガノ国の連中と組んで、自分で仲間を懲らしめる芝居を打って、そうして礼金を取り上げるようになった…そのあたりから、奴は禍王の手下になったのじやろう」

「アイツは禍王の仲間なのか？」

「そうじや。禍王は大戦の後、何とかして幻想郷の妖怪の数を減らすうとして、数々の刺客を放った。その一人が奴じや」

「でも、あんな奴里では見た事ないぞ」

「そうなのか？では、その間奴は一体何を…」

「大方、姿を隠す魔法でも使えるんでしょうね」

「奴は禍王の手下…きつと、新しい魔力を授かったんじやろうな…気を付けねば」

三人は岩の影に隠れた。

破魔師シヤムは、ちよつとしたごちそうを用意していた。椅子の横にある机には、パンとチーズとソーセイジの乗った皿が置かれており、食べ物に水がかからないよう、そして日陰になるように紅白のパラソルが置かれている。

気が付けば、新子は拳を固めていた。落ち着け、と自分に言い聞かせた。今大事なものは、どうこの場から立ち去るか。

シヤムは読んでいた本から顔を上げ、満足そうなため息をついてパンを齧った。そこで気付いたが、シヤムはサングラスをかけていた。あのパラソルといい、奴は優雅にバカンスでもしているつもりなのだろうか。

「儂に任せてもらおうかな？」

マミゾウは隠れたまま、人間の姿へと変化した。両手を袖の中にし、まっつ腕を組み、何気なく歩き出し、シヤムに声をかける。

「こんにちは、旦那。いい天気ですな」

シヤムがびくつとした。ゆっくりと声の方へ振り向く。

「驚かせてしまいましたか。いやすみません、私にもうお気づきかと思っていましたので…」

シヤムはじつとマミゾウを見つめている。マミゾウの演技は素晴

らしかった。マミゾウは感心したような顔でパラソルの周りを歩いた。

「私、今猟師をやってる主人の様子を見に行こうとしているのだけど、いやあ、道が険しくてね。あの人はこんな大変な思いをして狩場に向かっているものなんですね。日差しも強くて、あまり運動しない私には大変で……一緒にしてもいいかな？」

「あ、ああ……」

シヤムは椅子から立ち上がると、マミゾウに椅子を譲った。その時、初めて破魔師シヤムの全体像が見えた。短く刈り上げた頭に、小さい背丈。その小柄な体格にしては大きすぎる服を着て、サングラスをかけた顔は歪んでいた。

マミゾウは小さく礼を言って椅子に座り、シヤムは岩の上に腰かけた。

「いやあ、この湖の流れは最高だね。厄介な事なんて忘れてしまいうだね」

「厄介な事？」

シヤムが身を乗り出した。

「ええ、私と主人は肉売り屋をしているのですが、この景気の良い時でも、なかなか商売がうまくいかないんです。店もボロボロだけど、買替える余裕が無い。周りの人は叔父から貰った宝石を売れと言うのだけど、アレは一家に伝わる大事な物なんでね……」

「ほほうーそれはお困りだね、奥さん。でも、今日お会いできたのも、神のおぼしめし。あつしがお力になれるかもしれませんぜ」

どうやら、破魔師シヤムは金貸しもしているようだ。マミゾウは上手い事、シヤムを釘付けにした。

シヤムはいいカモが現れたと思っっているだろう。

「あつしは人助けのために生きてるような男でね。人を困らせる輩有れば行って懲らしめてやり、金が無いという人あれば恵みを与える。奥さんはその人助けにあたる人物と見た。ここはあつしが店を建て直せる金をお貸ししましょう。いかほどいるね？」

シヤムとマミゾウは金のやり取りを始めた。やがてマミゾウがわ

ざとらしく叫んだ。

「ええ、それだけあれば十分ですよ！」

「そりゃあけっこう！金はあつしの棲み家に腐るほどあるんでね」

シヤムは一枚の小さな紙と袋を取り出し、机の上に置いた。袋からはジャラジャラと音がし、硬貨やお札が入っているようだ。

「すまんの、私は見てのとおり、眼が悪くて小さい文字が見えないの……」

マミゾウが顔を紙に近づけ、シヤムが目を輝かせる。

「いや、大したものじゃないよ。シヤムがこの金を貸しましたと、ちよこつと書いてあるだけだね。奥さんがこの金を正当な手続きで手に入れたと証明するわけよ。まさか、盗んだなんて思われたくないでしょう？」

「もちろんだよ」

「さあ、ペンがここに」

シヤムは脇に置いていたバッグの中からペンを取り出した。奴は完全に注意がそれに行っている。この隙に、アタシらはここを去ればいい。マミゾウは変身できる能力があるから、どうとでもなる。

二人は、シヤムの死角を通ってその場から離れ始める。

「お名前は？」

シヤムはマミゾウに尋ねた。

「名前ですか……。『順平』と申すのじゃがな」

その瞬間、シヤムが真顔になった。

「もしかして儂の事を知っておるのかな？」

「お前何者や!？」

シヤムが怒鳴り、本を投げつけながら立ち上がった。机が倒され、食べ終わった皿やペンが宙を舞う。

ついに、破魔師シヤムが邪悪な本性を現した。サングラスの下からちらつと覗いた目が怒りに細められ、両手を広げる。

「アブラカダブラ!!」

その魔法の呪文と共に、シヤムの右手には炎、左手には冷気を纏った氷が生成された。その両腕を振るい、マミゾウに攻撃を仕掛ける。

マミゾウはぴよんと飛び跳ねると、空中でボンと煙を発生させ、元の妖怪の姿へと戻った。

妖気の壁でシャムの攻撃を防ぎ、バチツという音と共にはじき返す。

「お前、妖怪だったのか!」

「覚えてもおらんのか? そうじゃろうなア、150年も前の事だものなあ」

「アブラカダブラ!」

シャムは再び呪文を唱える。すると、何もなかったはずの空間から何本もの剣が現れ、マミゾウに向かって一直線に飛んでいった。

「何の!」

マミゾウは自身を大きな塀のような壁に変化させ、剣を防いだ。

「:思い出したぜ、お前は:ずっと昔に俺が本にしてやった狸だな!」
「当たり前じゃ。思い出してくれたようで:嬉しいわい」

両者は、同時に両腕の形を変えた。マミゾウは鋭い槍に、シャムは幾つもの突起のある棘へと変化させ、ぶつかり合う。

互いの肩に槍と棘が深く突き刺さり、妖気と魔力の爆発が起こった。

「あいこ、じゃな…」

「あいこだと? ドアホウが…」

マミゾウに突き刺さっていた棘が、突然、物凄い勢いで回転し始めた。回転に負けたマミゾウの体ははじけ飛ぶ。しかし、マミゾウは咄嗟に肉体を小さな分身へと分けて散らした。

「おーおー、小さいのがわらわらと…。でも、もうおせーよ!!」

シャムは両手を合わせ、それを離すと、巨大な炎で作られた馬を出現させた。馬は猛烈なスピードで飛び出し、分裂したマミゾウを引き潰そうと襲い掛かる。

これが、シャムの無限の魔力による魔法。魔力を以って魔をしとめる、そうして今まで妖怪を蹴散らしてきた。始めの頃は封印するのが精いっぱいだったが、今ではその魔法の威力は何倍にも膨れ上がっており、どんな奴だろうと粉碎できる。

「ま、間に合わん……！」

マミゾウがそう呟いたその時、強力な一撃が炎の馬を殴りつけた。顔面に攻撃を喰らった馬は、吹き飛びながら消滅していく。シヤムが驚いて、馬が消え去った場所に目をやった。

「お主ら……！」

そこには、包帯をドリル状に変形させた華扇と、新子が立っていた。新子は下に置いたカバンに刺してあった、金属のバットを取り出して構えた。3年前、香霖堂で購入し、多くの戦いを共にしてきた武器だ。「せっかくの新しい旅の仲間がやられてんだ、放っておくわけねえだろうがよ！」

新子はバットを振りかざしてシヤムへと迫り、渾身の力で叩きつけた。

「なんて力だ……！」

シヤムは魔法の壁で防ぐが、あまりの威力に後方へ吹き飛んでしまう。しかし、そこへすかさず華扇が忍び寄り、ドリルの腕で攻撃を繰り出した。シヤムは地面から氷の柱を出現させ、自身を上空へと押し上げた。

「だが俺の相手にはならねーな！アブラカダブラア!!」

シヤムが両手を合わせ、そこから極太のレーザーを発射する。物凄い閃光と共に放たれたレーザーは新子と華扇の体をかすめた。それによって新子は手に持っていたバットを落としてしまう。その間にも、シヤムのレーザーはどんどん範囲を増し、新子たちを巻き込もうとする。それを見て、サンガラスの下のシヤムの目が不気味に釣り上がった。

まずい……。新子が落ちてしまったバットに手を伸ばしたその時。何とバットがひとりでに浮き上がり、レーザーを突っ切りながらシヤムの方へと突進していった。

「何だと……！」

シヤムが驚きの声を上げる。その瞬間、バットの先端がシヤムの顔面にめり込んだ。レーザーははじけ飛び、消滅した。新子は何が起きたのか分からなかった。

しかし、このチャンスを逃さなかった。顔を押しやるシヤムを蹴り飛ばし、胸ぐらを掴み上げる。

「よくも俺を追い詰めてくれたな……。だが、ここで負ける俺じゃあない！」

新子の手に痛みが走った。シヤムがナイフを取り出し、新子の指を切り裂いたのだ。血が流れだし、思わずシヤムから手を離してしまふ。その瞬間、シヤムは両腕を地面に付き、まるで獣のようにその場から走り去った。

華扇とマミゾウが後を追うが、既にシヤムの姿は無かった。

「奴め…また姿を隠す魔法を使ったのじゃな」

三人はあたりを見渡し、シヤムを捜した。

「あそこか!？」

新子は地面の草に足跡が出来ていくのを発見した。足跡は目にもとまらぬスピードで、湖から離れていく。三人は追いかけた。しかし、辺りに立ち込めている濃い霧が目をくらましてくる。

「くっ、これが霧の湖って呼ばれてる所以か…！」

「いや、待って」

華扇が引き止めた。何やら、上を見上げて何かに驚いているようだ。

「いつの間にか、こんな所にまで来てしまっていたようね…！」

新子も一緒になって見上げると、そこには大きな建物が聳えていた。目の前にはボロボロの黒い門があり、塀の向こうには赤い外観の洋風の館がある。巨大な時計台の針が霧の隙間から射す日光に輝いた。

悪魔の館、『紅魔館』が目の前に現れた。

〈登場用語・人物紹介〉

・戦いの丘

かつて、「幻想郷の戦い」が起こった丘。戦いにより痛んだ地形がそのままの形と残っており、丘の地中深くには数多の戦士が眠っている

…とか。

・破魔師シヤム

マミゾウを本に封じ込めた張本人であり、謎の魔法使い。150年以上前、人間の里で霊能力を使って妖怪を退治し、多額の報酬金を巻き上げていた。その後、その妖怪退治の腕を禍王に買われ、マガノ国の手下となり、他の仲間と手を組んで自作自演をして金を奪うようにもなった。

第4話 「紅魔の呪い」

ついにマガノ国の支配から解放された幻想郷。しかし、再び魔の手が忍び寄るのも時間の問題だ。

本居新子、茨木華扇、そして二ツ岩マミゾウの三人は、マガノ国に囚われた人間と妖怪を救い出すため、新たなる旅へと出るのだった。

三人と交戦した破魔師シヤムは、悪魔の館・紅魔館へと逃げ込んだ。その紅魔館に導かれるがまま、中に入った新子たちが見たものとは…？

第4話 「紅魔の呪い」

霧の中から姿を現した、赤い建物。若干霧が晴れた今ならハッキリと分かるが、窓が少なく、蔦のような植物に覆われてこそいるが、その真つ赤な外観は、青い空と緑色の草むらからひどく浮いて見える。

その館に目を奪われていたが、突然、ギイという音が響いた。音の先を見ると、赤い門がわずかに開き、草の上の足跡が中に入っていた。シヤムが中に入ったようだ。

「アイツが入っていったぞ。中に誰か住んでいるのか？」

「ずっと昔は、吸血鬼とか…ヤバそうなのが住んでいたけど…今のこの様子じゃ誰も居ないわよね」

「今ではここが奴の棲み家という訳じゃな。ずっと姿を見られていなかったのは、ここで暮らしていたかららしいの」

「ここには結構旅人や探検家が訪れたりしてね。そういう者たちは、皆ありもしないものが見えたり、説明のつけられないものが見えたりしたらしいわ。ここは何かに呪われてるって言われてるのよ」

新子が鼻で笑った。

「まさか、幽霊とか？馬鹿か、どうせシヤムが人間脅かして遊んでるだけだぜ。この不気味さなのでそう感じるだけさ」

「紅魔館は昔から不思議な場所だったのよ。今じゃ誰もこの場所に近

づこうとしない」

「どうかな？少なくとも一人は、怖いもの知らずが居るようだぜ。彼女にシヤムを倒してもらうか？」

「誰の事じゃ？」

「マミゾウがあたりを見渡す。」

「門の前で立ってる女の人だ！じっとこっちを見てる……」

そう言いながら新子は門の方を振り返り、ぽかんと口を開けた。華扇とマミゾウも、訳も分からず新子の視線を追う。だが、そこには誰も居ない。

「確かに……確かに居たんだ、女の人が！長い赤毛で、緑色の服が風に揺れて……この目で見たんだ！あの人は何処だ？」

新子はせわしなく目を走らせた。だが、人影もなければ、地面にはシヤム以外の足跡は無い。

「アタシは見たんだ！」

新子が頑固に繰り返す。華扇は頷いた。

「ええ、信じるわ。だって昔、紅魔館には『紅美鈴』っていう門番が居たのよ」

新子が凍り付いた。何か言おうと口を開いた時、門が大きく揺れた。華扇が慎重に門を見つめる。

「……館が入れて言ってる……。この館の壁のレンガ一つ一つに魔力が息づいてる。だから、過去の記憶も失われることが無いわ」

「どっちにしろ、シヤムは悪人じゃ。儂は奴を懲らしめんと気が済まん」

華扇はゆっくりと門を開く。門は油を刺したばかりのように簡単に開いた。門をくぐると、そこは雑草で覆い尽くされていた。巨大な蔦が紅魔館を覆い尽くし、近くだと赤よりも緑の方が協調して見える。

「ここで何か悪いことが有ったのよ。感じるわ」

三人は歩き始めた。石のタイルの道を進んでいく。タイルの上には、シヤムのものと思われる血が垂れていた。血は紅魔館の入り口に近づくとつれ間隔が広くなり、やがて無くなった。シヤムはもう紅魔

館に入っている。

華扇が入り口の大きなドアを開けた。外の光に照らされて、館内の様子が見えた。掃除が行き届いてなく、汚れてはいるが、明らかに誰かが住んでいる跡はあった。しかし、とても寒く、死の冷たさをたたえている。

その時、後ろのドアがバタンと閉まった。新子がドアノブを回し、叩いて開けようとするが、扉はビクともしなかった。

「閉じ込められたようね」

「仕方ない、どっちにしろ…シヤムを倒さねば出られぬという事か」
「マジか…」

華扇がろうそくに火をともし、二人に渡す。それを手にすると、エントランスホールから二階へ続く階段を見上げた。赤いじゆうたんの床に三人分の影が揺らめく。新子は、一瞬小さな少女を見たような気がした。階段を上った先の二回の手すりから、こちらを見下ろしていた。

「今のは幻じゃな」

後ろからマミゾウが声をかけた。マミゾウにも同じ幻が見えたらしい。

階段を上りきった新子は、ふと、さっきの少女が佇んでいた場所に近づいてみた。その時、どこからかくぐもった声が聞こえてきて、新子は飛び上がった。

「お嬢様」

静かな声があたりにこだまする。

「お客様です。例の商人です」

「そう、通していいわ」

過去の記憶…幻…。

新子は歯を食いしばって足を踏み出すと、歩き出した。後に続く仲間の足音にだけ集中し、他の事は頭から締め出して、通路を進む。

「…危ない！」

マミゾウがそう叫んだ時だった。歩いてきた床がひび割れた。三人は別々の方向へ飛びのくと、丁度つい今まで居た場所から、刃物の

ような触手を振り回す巨大な大木が現れたのだ。横に裂けたウロが不気味に開けられた口のように見える。

大木はどんとんと伸びて広がり、通路を塞いでしまった。マミゾウは向こう側に、新子と華扇はこちら側へと分断されてしまったようだ。

「このツ…」

マミゾウが、どんなに壁のように道を塞ぐ大木に攻撃を加えても、ビクともしない。

その時、破魔師シャムの声が周囲にこだました。

「この館に入ったな！この館は、今や俺の魔法が支配してるんで、一度入ってしまえば決して抜け出せないぞ。俺を探しに来てもいい…だが、特に狸のお前！俺はお前だけは絶対に許さない…この館から決して出させてやるかよ！」

シャムの声はそう言い残すと、それからは何も聞こえなかった。大木が大きくなるギチギチという引き絞ったような音以外、静寂だけが周囲を覆っている。

「…儂は別のルートでシャムを捜そうかの」

マミゾウが切り出した。

「本気か？」

「本気じゃ。どうやら、シャムの奴は儂だけが目当てのようらしい。感じるのじゃ…奴の悪意と復讐心はこの儂だけに向けられている。二手に分かれるだけじゃ、いずれ合流しようぞ」

マミゾウは踵を返し、元来た道に戻っていった。

「さて、ここからは二人になるけど…」

「しようがないさ。アイツはすぐやられるようなタマじゃないだろう」

二人は少し歩くと、怪しい部屋を見つけた。部屋のドアの隙間からは光が差し込み、誰かの話し声が聞こえる。片方はシャムの声だが、もう一つは違う。若い女の声だ。

華扇がドアの隙間から中をのぞいた。しばらくして、ゆっくりと目

を離した。驚いたような表情で新子に手招きする。新子も一緒に
なつて、ドアの隙間から部屋の中をのぞいてみた。

丸い机を挟んで、男女が話している。一人は、背中に黒いコウモリ
のような翼を生やした女性だった。見た目こそ少女だが、その目には
何百年も生きて来た貫禄が見えている。向かいに座っているのは、灰
色の服を着たちんちくりんな男だった。猫背で椅子に座りながらお
茶を飲んでいいる。小さな目が余裕あり気に輝いて、足を組んでいる。
「もう勘弁してくれないかしら…いくら頼まれても無理よ」

「それを言うなら、禍王に言つてほしいな。知つてるんだぜ？この紅
魔館に、外の世界とのパイプがあるってこと。それがお気に召さない
らしい」

「でも、この館ごとマガノ国へ引越せなんて、承諾できる訳が無いわ」
「これはアンタの所為でもあるんだぜ？」紅美鈴”とか言つたっけ、
あの門番の人…。アイツをクビにしたのがいけないんだぜ」

「それはお前が…お前が仕組んだんだろう！」

「知らないなあ。でも、あまりの役立たずさに、アイツに暇を出したの
はお前だ。そして、この外の世界とつながりのある紅魔館をどうにか
して潰したいとしているのは禍王。あつしはその間に居る中間人だ」
今までヒソヒソ声だった男が、急に普通の調子で喋り出した。

「可愛そうに。門番がクビになつたおかげで簡単に侵入者を許し、今
や壊滅状態の紅魔館…そしてあの禍王にマガノ国へ連行されるなん
てねえ。でも、あつしなら…まだ手を回して何とかしてやれるかもし
れないね。あつしは人助けのために生きているような男でね。人を
困らせる輩有れば行つて懲らしめてやり、金が無いという人あれば恵
みを与える。アンタはその人助けにあたる人物と見た」

新子の背筋がぞつとした。今の言葉…それにこの声！華扇も隣で
ハツと息を呑む。華扇も気付いたらしい。どうして今まで気付かなか
ったんだ？この部屋に居る、過去の記憶のこの男は、破魔師シヤム
だ！

華扇が新子の肩を掴んで囁く。

「破魔師シヤムね！サングラスが無いから、声を聞くまでわからな

かった！」

「若いころのシヤムだな。きつと、金稼ぎの方法を妖怪退治から自演工作に変更したあたりのな。今見てるのは、150年くらい前、丁度マミゾウが封印されたあたりの出来事だ」

と、ここでドアの向こうの光景は消えてしまった。新子たちは唾然とした。そつとドアを開けて部屋の中を見渡しても、真つ暗で埃っぽく、カサカサと動く虫のようなものがロウソクに照らされるだけだった。

「これで、紅魔館から人が消えた原因が分かったな」

「でも、結局住民が消えただけで、紅魔館そのものはここへ残ってるじゃない」

「…うっ！」

「どうしたの？…まあ、考えても分からないものはわからないわ。この部屋は出ましょう」

二人は部屋のドアを閉めた。

華扇が自分の前をずんずん歩いていくが、新子はそれを追うので精いっぱいだった。新子だけが見てしまったのだ。さっきの部屋の壁際で、何か棒のような物が立っていた。一瞬、ロウソクの明かりに灯されて見えたのは…腐りかけた死体だった。心臓を一突きにされた、少女たちの亡骸。背中にはボロボロのコウモリのような翼が見え、牙を剥きだしている。他にも、色んな死体が有った。薄い紫色の服をまとっていたり、棒状の尖った翼を持っている者。

恐ろしい光景が目から離れない。ほんの一瞬の幻だったが、やはりこの館で血も凍るような恐ろしい出来事が有ったのは確かなようだ。

赤い廊下を先へと進んでいく。この紅魔館は外から見た時よりも、内部はずつと広く感じた。先に行く華扇が、発見した部屋のドアを一つ一つ開けて確認していく。ふと、華扇が一番奥にあった部屋のドアを開けた。すっぱい空気がふつと漏れ出て、靄に溶け込む。二人は、あつけにとられて立ち尽くした。予想もつかなかった光景が広がっている。後ろでドアが静かに閉まった。

目の前の広い部屋は、まるで今の今まで誰かが居たかのようにだった。うっとりするほど暖かい。厚く敷き詰められたじゅうたん、大理石の暖炉ではぜる炎。天井から下がったクリスタルの燭台には口ウソクがあかあかと燃えている。

埃一つない小さなテーブルがあちこちに置かれ、座り心地の良さそうな椅子がそれを取り囲んでいる。テーブルの上にはトランプ、サイコロ、ルーレットなど、様々な運試しと腕試しのゲームが並んでいた。新子たちの左手に、金が山盛りに入った宝箱があった。蓋の内側に、大きな看板がある。

“この部屋に入ったら最後 賭けるだけ
借りた金は返すもの 返せないなら屋上へ

悪魔の仲間になるが良い”

「幻よ…幻に決まってる！」

新子は嫌な予感を覚えて、おそるおそるドアの方向を見た。やっぱりだ、ドアのこちら側にはノブがない！

華扇は腰からナイフをとると、ドアの隙間に切っ先を刺し込もうとした。だがナイフは隙間に入っても、そこから少しも動かすことができな。驚いて、華扇は腕の包帯を変形させる。巨大な剣となった腕で、ドアを攻撃する。

ガキン！

やはりドアはビクともしない。新子も試したが、同じことだった。二人はドアを破ろうとあの手この手を尽くしたが、手足も剣もはじき返されるだけだった。

「何度やっても無駄ね」

華扇が息を切らしている。

「このドア、東の歌姫が隠されてたコンクリートの壁より頑丈よ」

「不思議ねえな、きつとこのドアに魔法をかけたのは同じ禍王だ。破魔師シヤムへの手柄の報酬だな」

新子が苦い顔で言う。

「ここがダメなら、他のドアを捜すまでよ」

そう言うと、華扇は部屋の壁に目を走らせた。新子も振り向いた

が、気乗りはしない。二人は立ち上がり、部屋の搜索に入った。壁に張られた姿鏡に映る二人の姿も一緒に歩く。まるで惨めな旅人が部屋にひしめいているように見えた。

新子は黙って部屋を探った。恐ろしい光景が頭から離れない。棒のような槍で貫かれた、少女たちの骸。忘れようと歩けば歩くほど、暖かい空気に流れ込んでくるすえた匂いが一段と気に成りだす。

いたずらに時が流れた。華扇がため息をつきながら新子の隣に座った。

「あの宝箱…。言葉の出だしは」この部屋に入ったら最後 賭けるだけ」だったわよね。つまり、私たちのどちらかがゲームをしない限り、この部屋から出られないんじゃないかしら」

新子が拳を固める。

「賭けなんてできるか！どのゲームも金を賭けなきゃいけないようだが、アタシらの金はマミゾウが持ってたはずだ」

答える代わりに、華扇は例の宝箱を振り返った。

「やめとけ！やめとけ！あんな罠に飛び込もうなんてどうかしてるぜ。負けたらどうする？金が返せなくなるぞ」

「返せないなら 屋上へ」

悪魔の仲間になるがいい」

それがどういう意味かは分からないが、きつと呪いの様な罰の事だ。

「待てないわ。どの道、私たちにはこの道しかない」

「…まあ、そうだな」

新子はぼそぼそと悪態を付いた。二人はもう一度立ち上がり、勝てそうなゲームを探した。

ほとんどが運が頼りのゲームだ。腕が頼りのゲームは元手が高いわりに賞金はわずかなのに、運だけのゲームはわずかな元手で勝てばがっばり稼げるようになってる。

「もともと、紅魔館にこういうゲームが有ったのか？」

「さあ？もしかして、シヤムがここで暮らすようになってから作ったのかも」

華扇はゲームを一つ一つ見定めていった。やがて、椅子が一つしかない机のそばへやって来た。お金入れと説明カードと共に、ハンカチ程の小さな布が置かれ、その下に何かが隠れている。

カードには短くこう書かれていた。

『時間内に答えられるかな？なぞかけの妖精と知恵比べ』

参加 一名のみ

1ゲーム 500円

勝てば2倍!!』

「これならできそうね」

新子の視線をひしひしと感じながら華扇はずんずんと宝箱に歩み寄った。500円分の硬貨を取って振り返った華扇は、手に妙な感覚を覚えた。みると、もつと高いお札や硬貨が何枚も指にくっついている。

一瞬、そのままお金を持っていきたい衝動にかられた。ゲームが一回で終わらなかつた時の為に、とっておこうか？

その時華扇は、自分が誘惑されていることに気付いた。指に付いたお金を払い落とし、500円分だけを取って足早にテーブルに戻る。

「このゲームはやめとけ。制限時間があるぞ」

「でも、二人で考えればきつと答えは見つかるわ」

華扇は椅子に座った。後ろを新子に見守ってもらいながら、お金を投入した。しかし、その瞬間、チンと小さな音が鳴った。カードの文字が点滅を始める。

参加一名のみ…参加一名のみ!？」

「新子、離れて。どうやら、一人でやらないといけないみたい」

舌打ちをして、新子が一步下がった。文字はまだ点滅している。新子がさらに遠くへ下がると、文字の点滅がとまった。

「ここからじゃ何も見えねえぞ」

新子が小声で呼びかける。

その時、机の向かい側に、誰かが座っていた。無表情な顔で、じつところちらを見つめている。華扇が驚いて、何か言おうとしたとき、硬く引き結ばれた口元が動いた。

「私はこのゲームの妖精です、ハイ。これより、私の出題するなぞかけに答えていただきます、ハイ」

第5話 「呪いの正体」

ついにマガノ国の支配から解放された幻想郷。しかし、再び魔の手が忍び寄るのも時間の問題だ。

本居新子、茨木華扇、そして二ツ岩マミゾウの三人は、マガノ国に囚われた人間と妖怪を救い出すため、新たなる旅へと出るのだった。

三人と交戦した破魔師シャムは、悪魔の館・紅魔館へと逃げ込んだ。その紅魔館に導かれるがまま、中に入った新子たちが見たものとは…？

第5話 「呪いの正体」

「私はこのゲームの妖精です、ハイ。これより、私の出題するなぞかけに答えていただきます、ハイ」

「ゲームの妖精だって？」

華扇が、突然現れた少女に思わずそう問いかけた。遠くから見える新子も驚いているようだ。妖精と名乗った少女は、大きな深い瞳の目でじつと華扇を見つめている。

「そうです。この部屋にあるゲームには、それぞれに妖精が宿っています。例えば、あちらにあるルーレットのゲーム。アレの場合は、そのゲームの妖精と勝負をするのです。そして、その妖精に勝てれば…ゲームも勝ち。それぞれの賞金を受け取ることができます」

「なるほどね…。じゃあ早速、なぞかけを出題して貰おうかしら？」
「分かりました。…では第一問、『あるところでは、四季が秋↓夏↓春↓冬の順になってます。そこはどこ？』」

妖精はたんたんとそう言うと、わきに置いてあった砂時計をひっくり返した。砂がさらさらと流れ始める。見たところ、30秒くらいか。

華扇はしばらく考えてから、静かに答えた。

「答えは、辞書…かしら？」

「…正解です。辞書だと、五十音順、つまり先に述べたような順番にな

ります」

「よっしー」

後ろで新子が声を上げた。しかし、喜ぶ間もなく、妖精は次の問題を出題した。

「第二問、『どんきくもいすかつげち』は暗号ですが最後の一字が足りません。あと一つ足りない文字は?』」

また砂時計をひっくり返す。

「…ヤバいわね…」

華扇が顎に手を当てて考え始める。

この文字列、どつかで見たことが有るわ。どってんちかもく…違うわね。

「…そうか、答えは『に』よ!後ろから読むと、日月火水木金土の一週間になるけど、最後の『に』が足りないもの!」

「正解です。では…これが次の問題です。よく聞いていてください」

「第三問、『かうもこんねすむなをせよむたおくも』。この暗号を読み解きなさい』」

「かうもこん…は?そんな暗号…無理に決まってるじゃない!」

「難しいというなら、ヒントを一つ、与えます。文字をひっくり返すのです」

「文字を…ひっくり返す…?」

砂時計の砂が落ちていく。前よりもゆっくりだ。見たところ、2分はありそうだ。心臓が早鐘のように鳴っている。どんなに頭の中で文字を思い浮かべても、答えが分からない。それに、ヒントも意味が分からない。ひっくり返す、反対から読む…も全然違うわね。文字そのものをひっくり返して見る…も違う。

このままでは、一生この部屋から出る事が出来なくなる。

時計の砂はどんどん落ちる。あと半分しかない。

「残り時間半分です」

分かっている、落ち着くのよ…。華扇は自分に言い聞かせた。待てよ、ひっくり返す…。「かうもこん」…この母音…まさか!

華扇は新たな目で文字を思い返した。「かうもこんねすむなをせよ

むたおくも」…ひっくり返すとは、こういうことだ。例えば、「か」の場合、母音は「あ」だ。その母音は最初にあるから、ひっくり返すと、子音は「お」となる。そうすると、「か」は「こ」という事になる。これを全てに当てはめていけば…。

砂時計を見る。残りわずかだ、時間が無い。

「答えは『紅魔館に住むのはシャムと悪魔』ね！」

妖精の深い目が細められる。華扇は、一瞬ドキツとした。

「…正解です」

「やったわ！」

「今の問題を正解してしまうとは…。ハイ、では最後の問題です」

そう言うと、妖精は机の上に五本の棒を置いた。細長い、鉛筆くらの棒だ。

— — — — —

「この棒は、五本あります。この五本の棒を、一つも取り去ることなく三にしてください」

後ろで、新子の息が荒くなるのが聞こえた。机の上は見えなくても、妖精が問題を出す声だけは聞こえる。

しかし、華扇はふっと笑うと、さつさと棒を動かした。

— ? — ? —

この形にして、それを上向きに正した。

「これでどう？」

妖精はじつと机の上に、「3」という数字の形に並べられた棒を見た。そして、顔を上げて華扇のほうを向く。机に置いていた手を退かすと、そこには元手の500円の倍、1000円分のお金が置かれていた。

「正解です。最後は呆気なかったですね。全問正解、私の負けです」

「やった！」

華扇はお金を手にすると、椅子から飛び上がった。新子がほっとして、ふうとため息をつく。振り返ると、拳を上げて叫んだ。

「勝ったわ！借金を返して、半分はお土産にしましょう」

「みやげだど!?こんな恐ろしい思い出なんてまっぴらだ。おかげで寿

命が10年は縮んだぜ」

新子が額の汗をぬぐいながら怒鳴った。華扇ははつと我に返った。ゲームに勝った喜びで、一瞬自分がどこに居るのか忘れていた。

「この牢獄から出ましよう」

華扇はすばやく宝箱のそばで戻った。そして、今も机に居る妖精に聞こえるように言った。

「借りたお金はここに返す」

高らかに宣言して、勝ち取った500円を、チャリンと宝箱に投げ入れた。

「お待ちなさい」

その時、妖精が二人を呼び止めた。

「何だ？まだ何かあるってのか？」

「破魔師シャムを…倒すつもりなのですか？」

二人は頷いた。

「そうですね。では、この紅魔館の屋上へ向かうといいです、ハイ。そこならば、この紅魔館で何が有ったのか、全ての謎を知ることができます」

「全ての謎…」

「では最後に一つ、問題を出します。『正しい真実』とは何か？」

二人は貴方の上にはてなマークを浮かべながら、顔を見合わせた。その様子を見た妖精が、ふふつと笑みをこぼした。

「答えは、『存在しない』です」

「ほう、それはどうして？」

「何故この答えなのか理解できるようになったとき…貴方たちは勝利を勝ち取ることができるようでしょう。おっと、時間を取り過ぎてしまいたね、ハイ。では、行ってらっしゃい」

こちらに手を振るゲームの妖精を後にし、二人は部屋のドアノブに手をかけた。さつきは決して開かなかったドアだが、今回はすんなりと、普通に開いた。ゲームに勝ち、その借金を返したことで、この部屋にかかる魔法は解けたのだ。

ドアを開けた瞬間、二人は暗闇の中に居た。振り返っても、あの部

屋のドアは無い。

「どういふこと？」

華扇が壁を探っても、ドアはおろか、切れ目すら見つからない。まるで、最初から何もなかったかのようだ。

二人は真つ暗な館内を、ひたすら上に向かって歩いた。ロウソクは尽き果ててしまい、たまにある閉ざされた窓を開けた時の光を頼りに進んでいくしかなかった。

「あの妖精といい、訳の分からん部屋だったな。それにしても、屋上へ向かえ、か」

「屋上へ行けば、全てが見られる…。マミゾウもそこに居るかもしれないわ」

「すべて…。何故、この住民が消えたのか、シヤムはここに住んでいるのか、それに…」

新子は、あの部屋で見た光景を思い出した。少女たちが無残に心臓を棒で貫かれ、亡骸が放置されている光景。黒い翼を持っている者：それはまるで、悪魔のようで…。

「見て、あそこから光が漏れてるわ」

長い螺旋階段を登っていると、華扇が上を指差した。新子も上を見ると、天井から四角形の薄い光が漏れていた。天井の扉だろうか。華扇がジャンプし、その扉を押し上げた。どつと光が溢れ出る。空は雲一つない晴天で、鳥たちが飛んでいるのが見える。

二人は天窓から這い出し、屋上へとやって来た。少し向こうに塔があり、そのさらに先には巨大な時計塔と鐘が見える。左右に塔が一つずつあり、真ん中に時計塔があるようだ。屋上は雨水と風による塵だらけだが、誰かが歩いた痕跡が有った。それを追って行くと、何者かが塔の壁に寄りかかるように座っていた。

「アンタ…マミゾウ！」

「おおーお主らもここへ連れて来られたのか？」

そこに居たのは、マミゾウだった。さつき二手に分かれたはずもマミゾウも、ここへ来ていた。

「連れて来られた？ 私たちは、自分たちでここへ来たのだけど…」

「何じゃと？ わしは、変な集団…多分ありや妖精じゃな。そやつらに捕まって、無理やりここへ連れて来られたわい。何があるのかと思えば、ここは何もない。ただ、おかしいものがあるとすれば…」

マミゾウは黙って向こうを指差した。時計塔の下にあるバルコニーに、何かが揺れていた。目を凝らすと、二人は目を疑った。それは、黒い槍のようなもので一突きにされ、床に縫い止められた、赤い髪の毛の女性だった。

「紅美鈴…」

華扇がボソツと呟いた。紅魔館の下からは見えなかったが、確かに、かつての紅魔館の門番だった、紅美鈴がそこに居た。新子はすぐに、再びあの光景を思い出した。しかし、あの紅美鈴は、眼を閉じたままピクリとも動かないが、とても死体だとは思えない程、綺麗だった。

「不思議じゃなあ。あんなところに、あんなものが…」

その時だった。周りの景色が変わった。空は曇天、雨が降っており、周囲は赤い霧が立ち込めている。雨音に混じって聞こえるのは、何かと何かがつかり合う、戦いの音。そう、この屋上では戦いが繰り広げられていた。破魔師シャムと、吸血鬼との戦いが。シャムと部屋で話していた、レミリア・スカーレット、それともう一人、似たような少女がいる。

だが、彼女らはボロボロで、血を流して痛々しい傷が残っている。対して、シャムは多少の傷はあるものの、ほぼ無傷。余裕あり気に深呼吸をしている。

「…マガノ国が、騒がしいな」

シャムがちらりと北の方角を見る。妖怪の山、そして国境の山脈の向こう側の空は赤黒い雲で覆い尽くされていた。それに、大きな爆発のような衝撃も伝わってくる。

「大方、また妖怪共がマガノ国へ侵攻してきたんだらうな。禍王が、そのの相手をしているのかな」

掠れるように小さいが、鋭い声が響いた。

「何を言っている、破魔師シヤム…」

「そう…私たちは決して負けない…お前のような奴を、野放しにしておく訳がないわ…!」

「ハツハツハツハツハ！ふん、そんなこと言っても、もうボロボロじゃんか。俺は破魔師だぜ、魔を以つて魔を制す、獲物の弱点は知り尽くしてる。吸血鬼にとても有効な魔法も数多く使える。その時点で、お前たちに勝ち目はないんだよ。そろそろ、この紅魔館を明け渡した方がいいと思うがね」

シヤムは右手に水流を、左手には炎を発生させる。まるで、彼女らを脅しているように。

「マガノ国なんかには、誰が屈するか…この私は誇り高き吸血鬼の末裔！お前のような悪の魔法使いに!!」

「なら、もう死ぬよオ!!来る日も来る日も盾つきやがって!」

炎と水流は互いに混ざり合い、炎と水の槍を形作った。シヤムはその槍を掲げ、二人の吸血鬼に突きつける。新子たちも、息を呑んでその光景を見つめる。降っている雨に当たっても、体が濡れることはない。当然、目の前で起こっている現象に干渉することはできないのだ。

その時、空で物凄い音がした。時計台の時計を覆っていたガラスが砕け散り、破片が降り注ぐ。颯爽と現れた影が槍を掴んだ。手が焼け、煙が出るのにも構わず、吸血鬼とシヤムの間に入り、攻撃をとめたのだ。シヤムが驚いて声を上げる。

「…美鈴！来てくれたのね!」

「何だと…お前ツ…!」

「お下がりにください!」

美鈴は槍をへし折ってみせた。シヤムはすぐに後ろへ飛びのき、ギリギリ光る小さな目で睨みつける。

「紅魔館から紅い霧が出ているのに気付いた…。だから、何か大変なことが起こっているのではないか…誰かにそれを伝えたいのではないか…そう思っただけでここまで駆けつけました」

「なるほどね。この紅い霧がメッセージになったって訳か。一度はク

ビになって紅魔館から締め出された奴が、わざわざねえ」

シヤムはそう言うと、地面に落ちていたガラスの破片を拾い上げた。それはシヤムの魔法を受けて形を変え、色が変わり、一つのサングラスとなった。そのサングラスをかけたシヤムが、今の面影とほぼそっくりになった。その顔は、まるで笑ったしやれこうべのようにも見える。

「だが、俺の魔法に敵う訳はねえ。たかが妖怪なんだからな！」アブラカダブラッ!!」

呪文と共に、鋼鉄の剣を無数に射出した。しかし、美鈴は驚くべき身のこなしで一本残らず剣を叩き落とし、一瞬でシヤムとの間合いを詰めた。直後、一撃。放ったパンチが、シヤムの防御壁を突き破って腹にめり込んだ。サングラスの下の目が苦痛に歪む。腹を押さえて後ずさり、ハアハアと息を荒げる。

「ぬぐぐ…」

実力の差は確かにあった。シヤムは魔法を使って敵の動きを封じ込め、叩くことはできても、単純な攻撃、純粹な力には弱かった。力の前には魔法の壁も簡単に破られ、もろいシヤム自身はそう何度も攻撃に耐えることはできない。

うずくまるシヤムの目の前に、勢いよく靴が振り下ろされた。見上げると、レミリア、そして紅美鈴がシヤムを見下ろしていた。

「形勢逆転、ですね。どうします？このまま帰るといふのなら、これ以上は手は出しません」

シヤムは少し唸り、恐怖と怒りの入り混じった凄惨な形相で一步下がると、上ずった声で叫んだ。

「待て！まあ、待て！取引しようじゃないか！」

「口車に乗るな、またお得意の嘘だ！」

レミリアの後ろに居た、金髪の吸血鬼が叫んだ。シヤムは神にでも祈るように手を組んだ。

「違うんだ！これまでお前たちにしてきたことは申し訳ないと思ってる！この通りだ」

「本当か？」

レミリアが静かに、だが棘のある声で尋ねる。

「本当に悪かったとは思ってる…だがな、もうこの紅魔館の移転魔法はもう始まっているんだ！」

「何だつて？」

「だから、俺が今から禍王の所へ行き、移転魔法を解除してくださいよう頼みに行く。だがその間、紅魔館が移転しないように押さえておかなきゃいけない。そこで取引だ、俺が戻ってくるまで、お前たちの魂を使ってこの紅魔館をこの場所に固定してほしい」

そう言うと、シヤムはつましやかに目を落とした。だが、新子は見ていた。シヤムは薄目で彼女らの様子を伺っている。

「魂を、使うですって？」

「そうだ、魂だ。なに、少しの間さ。俺は魔法で風のように速く駆けることができる。俺が戻ってきたら、元に戻ってくればいい。どうだ!? ももちろん、俺がせがんでいた金も宝も、一つも欲しがらねえ。もし金一円分でも自分のモノにしたら、俺が代わりに魂を差し出す! 己の魂に誓う!!」

「…いいわ、その取引、乗った」

シヤムの口元が薄くにやりと笑った。慌てて美鈴が止めに入る。

「正気ですか? この男の言っていることを聞いてはいけない。魂を使うなんて…コイツは私たちを契約で殺し、ここから逃げるつもり…!」

「だが、この紅魔館に移転魔法が働いているのは事実。禍王の魔法には、魂を使わなければ対抗できない」

その瞬間、紅魔館の屋上の様子ががらりと変わった。突然、二人の吸血鬼の背後から槍が飛び出し、心臓を一突きにした。うめく間もなく、今度は紅魔館の中へとゆっくり引きずり込まれていく。

それを見たシヤムは、今だと言わんばかりに走り出し、屋上から飛び降りようとした。

「馬鹿どもめ、お前らはもうお終いだ…。今に見ている、この紅魔館の宝全部奪ってやる…金も宝石も! ククク…」

その時だった。突然シヤムが首を押さえて伸びあがった。苦しげ

にのたうち回り、体中から血が流れる。

「お前がそうすることは分かっていたぞ、破魔師シヤム！」

引きずり込まれる途中の、レミリアが声高らかにそう叫んだ。

「お前のような奴を野放しにはしておけない。お前は危険だし、邪悪すぎるからな。だから、私たちの魂を使ってお前をこの紅魔館から出られないようにする。其の為なら…喜んで、魂でもなんでも使っておけるわ」

そして、屋上に立っているのは、シヤムと美鈴だけになった。紅魔館からは、色んな者らが苦痛にうめく声が恐ろし気に聞こえてくる。シヤムは呆気に取りられてその場に立ち尽くしていた。

美鈴が囁くような声で言う。

「…この館の者たちは、魂と引き換えに紅魔館をこの場所に留めて、かつお前を封じ込めた。だがお前も、じきにそうなる。さつきお前が誓った通り、この紅魔館のモノを一つでも自分のモノとすれば——」
突然、美鈴の声が途切れた。突然時計塔の時計の針が壊れて落下し、美鈴を背中から貫いた。シヤムが怒りに任せて魔法を使ったのだ。

新子は自分の悲鳴を聞いた。マミゾウが小さく舌打ちする。美鈴の血が滝のように流れ、屋上の床をさらに赤く染め上げる。

真つ赤な霧が一層濃くなり、視界を真紅が埋め尽くした。

目もくらむ閃光。轟く雷鳴。三人は腕を取り合い、よろめいて後ずさった。目も耳も働かない。

だが、三人が我に返ると、目の前は壁で覆われていた。いや、いつの間にか、紅魔館の門前に居たのだ。

「今の見てた…よな？」

新子たちは、今の光景が信じられないとばかりに顔を見合わせた。この目の前にそびえる紅魔館で、昔、あんな惨劇があったとは。

「…つまり、シヤムは紅魔の呪いによってずっとここに住まわされているという訳じゃな。通りで、目撃情報が無かったわけじゃ」

「ああ…住民が消えた理由もわかった」

「でも、シヤムは色々考えてるのね。さっきみたいに、紅魔館のお金を貸していたりしたのも、一旦貸してから返してもらえば、それはもう紅魔館のモノではなくなると考えたから…とか？それに、シヤムはどんどん力を増して、あの呪いをもつてしても完全に拘束はできないみたい。さっきだって、湖の方までは行けるようだったし」

三人がそう話していると、いつの間にか紅魔館の門の前に、紅美鈴の幻が立っていた。

第6話 「新レジスタンス」

ついにマガノ国の支配から解放された幻想郷。しかし、再び魔の手が忍び寄るのも時間の問題だ。

本居新子、茨木華扇、そしてニツ岩マミゾウの三人は、マガノ国に囚われた人間と妖怪を救い出すため、新たな旅へと出るのだった。

ひとまず紅魔館を後にした一行。河童たちのアジトに立ち寄り、いよいよ地底へと向かうのだが、道中で目にした人物とは…？

第6話 「新レジスタンス」

目の前に立ち、ずつとこちらを見つめている紅美鈴。分かっている、これは幻だ。本物の紅美鈴は、時計の針で貫かれ、今も屋上で揺れているはずだ。

「貴方たちには、まだやるべきことが有る。破魔師シヤムの相手をするのは、その後でもいい。信じて…自分たちの示す道を」

紅美鈴の幻は、一度まばたきする間に、その場から消えてしまっていた。

シヤムは、さつき一度は居れば決して抜け出せないと言っていた。だがしかし、紅魔館そのものと、かつてその魂を使ってシヤムを閉じ込めた住民たちは、新子たちを助けてくれたらしい。さつきのゲームの妖精も、自分たちに行き先を教えてくれた。

「しかし、胸の悪い話じゃ」

「そうね。確かに私たちには、もつと大切なことが有るわ。それが終わったなら、しっかりシヤムも懲らしめてやらないと」

「だな、あの野郎はただじゃおかねえ…」

三人はそんな話をしながら、妖怪の山を目指して歩き続けた。道中は険しかったが、足止めを喰らうほどの危険はなかった。

ようやく妖怪の山の麓にたどり着いた時には、すでに日が暮れようとしていた。

「そうだ、きつきは貴方に金を預けていたから、ひどい目に遭ったわ」
華扇はマミゾウから財布を受け取ると、金を三等分に分け、それぞれに渡した。ポケットに入れてあった、例のゲームの部屋で手に入れた金も自分の財布と一緒にしまおう。

「そんな汚い金なんて捨てちまえよ」

新子がボソツと悪態を付く。

「がめつい奴と思われるのは心外だけど、お金は多いに越したことはないわ。これから行く地底でも、どんなことが有るか分からないのだから」

「なあ、ところで地底ってどんなところなんだ？ やっぱあぶねえ妖怪とかが居るのか？」

マミゾウはちらつと華扇を見やった。華扇はため息をついてから話し始める。

「そもそも地底って言うのは、元は地獄の一部だったの。でもコスト削減の為に地獄から切り離されて、そこには跡地の繁華街だけが残った。そこへ、かつて幻想郷で暮らしていた鬼たちが目をつけ、住むようになった。その後も人からも妖怪からも嫌われるような者たちが地底へと逃げ、地底はどんどん賑やかになっていったわ。でも、それに危険を感じた地上の妖怪は、地底の妖怪たちと不可侵条約を結んだの。それきり、地底と地上が交流することは滅多になくなった」

「まあ、地底がマガノ国の手に落ちていないという証拠はないのじやがのう」

「その時はその時よ。やっぱり地底の妖怪は危険よ。あんな連中、相手にするもんじやないわ」

「ふーん」

新子とマミゾウは華扇に案内されて、河童のアジトを訪ねた。河童のアジトは麓からほど近い場所に作られていた。

「新子に華扇じゃないか！ よく来たねえ。それに、狸まで…」

まず迎えてくれたのは、河城にとりだった。

河童たちは、200年前のマガノ国軍の襲撃後、故郷であった妖怪

の山を追われ、山から離れた岩地に地下街を作っつとそこで暮らしていた。妖怪の山にはマガノ国の怪物が巣くつており、その怪物たち山に居られなくなった妖怪のケチャルコチルに苦しめられていたのだ。しかし、3年前、偶然にも出会った新子と華扇により、ケチャルコチルは倒され、妖怪の山も長い荒廃の時代から解放された。“神の夜”の戦いのあと、マガノ国軍が追放されてからは、こうして山に戻り、元のアジトを作り直して生活している。

「久しぶりじゃないか、新子」

にとりの横で、帽子を外しながら話しかけてきたのは、バンという女だった。このバンは、元はマガノ憲兵団の一人だった。しかし、マガノ国の在り方に疑問を持ち、新子たちと共に死線を潜り抜けた。今は河童と共に生活しているようだ。

「ああ、2年ぶりくらいか？」

「それくらいね。ところで、今回はどうした？」

「…そうね、大事な話があるわ」

三人は、にとりとバンと共に、少し離れた所へ移動した。沈む夕日が良く見える川原で、赤く染まった景色が神秘的な雰囲気を出している。

「大事な話って何だい？いつもの調査の旅とは違うの？」

にとりが切り出した。

「ええ、今回の旅はね、特別なよ。確かに、幻想郷はマガノ国の支配から解放されたけど、それは一時的な物に過ぎないらしいわ」

「そうなのか？」

「幻想郷とは、元は妖怪が作り出した世界。だから、結局は妖怪で幻想郷を満たさなければ、いずれ結界は破れて再びマガノ国の軍勢が入り込むことになるわ」

「それでな、マガノ国に沢山の人間や妖怪が囚われたままなのは知ってるか？」

「もちろん知っている」

バンが言った。

「マガノ国に居た頃、数多の妖怪を見たわ。ほとんどが奴隷として働

かされていたり、闘技場で娯楽の為に地獄のような目に遭っていた」
「そうだよ、私たちの河童の仲間だって、何十人も捕まっちゃった。彼らはどうしてるんだろう」

「そこでじゃ。儂らは地底を通って直接マガノ国へ赴き、囚われた者たちを幻想郷へ連れ戻す」

「…本当かい？」

にとりが呆気にとられた様子で呟いた。そして、華扇の手を握り、ブンブンと振り回す。

「じゃあ、囚われた河童の仲間たちも救い出してくれるって事かい？」

「え、ええ…」

「でも、どうやってそんな事を成し遂げるんだ？マガノ国へ行ったら、無事に帰還できる保証なんてないぞ」

バンが警告した。それもその通り、マガノ国へ行つて帰つて来た者は数えるほどしかない。それに、元はマガノ国関係者であるバンだからこそ、マガノ国の危険さが一番よく分かっている。

「それが、あるんだぜ。今は詳しくは言えないがな」

「…そうなのか」

「まあ今日は疲れただろう、休んでいきな！お前たちが来たってみんなに教えたら、きつと御馳走だつてたんまり出るだろうさ」

その晩、三人は河童が用意してくれた家の中で眠った。華扇はすぐに寝静まり、マミゾウはしばらくしてから眠りについた。

しかし、新子はしばらく眠ることができなかった。

頭の中に響くのは、ろろん、ろろんという甘い音。鈴とも、笛とも違う。数日前まではこの音の正体は分からなかったが、今ならばわかる。きつと、この音は打ち出の小槌の発する音。その音が、まるで新子に何かを訴えかけるように頭の中でこだまする。それは、妖怪の山に入ってからというものの、以前よりもっと大きく、はつきりと聞こえるようになっていた。

“ 打ち出の小槌よ、私の願いを叶えたまえ ”

声もだ。きつと、これは今まで打ち出の小槌に願いを叶えさせてき

た者たちの声だ。他愛もない、ささやかな希望を願う者、私利私欲の為に願う者。その中には、聞き覚えのある声も混じっていた。

“ 打ち出の小槌、私の願いを叶えて見せろ ”

だが、眠い。その覚えのある声の正体を探る間もなく、新子はようやくの眠りについた。既に、空は青みがかっていた。

“ 目を覚ませ 鈴奈庵の本居新子 ”

朝、その声で目を覚ました。部屋に日の光が差し込み、華扇とマミゾウは既にこの部屋には居なかった。

「誰だ!？」

“ 私の元へ来い 鈴奈庵の本居新子 ”

声は何度も新子の頭に呼びかけて来る。

「新子、起きたの?」

華扇が部屋のドアを開けて入ってきた。

「あ、ああ」

“ こつちへ来い ”

「ご飯が用意してあるから早く来てね」

その後、朝食を終えた三人は、いよいよ出発することにした。目指すは、妖怪の山の頂上付近にあるという地底世界への入り口。

「それじゃあ、健闘を祈ってるよ」

「もしもお前たちが必要とするならば、私たちもすぐにマガノ国へ向かう」

「その時は、ね」

にとりとバンに別れを告げ、河童たちの元を後にした。

「なあ、華扇」

新子は歩きながら、隣に居た華扇に話しかけた。

「昨日から、ずっと声が聞こえるんだ。今もずっと……こつちに来いって、妖怪の山に入ってからずっと」

「もしかして…禍王?」

「いや、違う。小槌の音に混じって、聞いたことのある声だが、禍王じゃない」

その時、新子は水の音をかすかに聞いた。歩くにつれ、水の音は大きくなる。

歩いていた獣道の横に、川が現れた。川底には魚の群れが集まっていて、周りに転がっている石の隙間にはサワガニも見られる。

「こっちへ来い 本居新子」

「…!?今のは…」

木々の向こう側から、か細い声が響いた。今度は、新子だけでなく華扇とマミゾウにも聞こえたようだ。新子は声のする方向へと走っていった。川沿いを上流へと向かって、険しい獣道を。

後ろを華扇とマミゾウも追いかける。

「そつちは確か…」

華扇は気付いた。この道には覚えがある。いや、もともと華扇は妖怪の山の道は知っているのだが、その時には知らなかった道だ。そう、多分三年前にもここを通ったことが有る。だとすれば、行きつく先は…。

獣道を抜けると、広まった場所へと出た。砂利の地面には点々と雑草が伸びている。目の前には大きな滝が有り、ごうごうと音を立てて水しぶきを飛ばしている。

ここは、前にも来たことが有った。三年前、北の歌姫の在り処へと向かっている途中、憲兵団と怪物スラッグに襲われた場所だ。そして、あの滝の裏側には…

「…よし」

新子は、いよいよ自分を呼ぶ声が大きくなっているのを感じていた。

“ここだ ここへ来い”

なるべく早く、滝をくぐる。多少は濡れたが、問題はないだろう。滝の奥には、洞窟が有ったはずだ。その方から声は聞こえてくる。

そこで、新子は驚きの光景を目にした。少し先にある洞窟の前に立っている、血で文字が書かれた墓石。あの墓石は、かつて北の歌姫

の番人であった、鬼人正邪という妖怪が立てた自分の墓だ。その墓の周りに、禍々しい紫色のオーラが渦巻いている。そして、新子への呼び声は、明らかにそこから発せられているものだった。

「ようやく来たな、ずっと待っていた…この時を」

紫色のオーラは赤色と青色に分かれ、どんどんと煙状に形作られていく。額から伸びる二本の角、赤と白が混じったメツシユの髪の毛の頭部が、墓石の上に現れた。

「テメエは…鬼人正邪！」

そう、その顔は、正しく鬼人正邪だった。こちらを睨めあげるような目が見開かれる。

「どういうこと？」

後から滝をくぐってきた華扇とマミゾウが思わず声を漏らした。

二人の視線も正邪へと向けられている。

「ククク…本居新子、茨木華扇…そしてニツ岩マミゾウか。私は待っていたのだ、お前たちが来るのをな」

「まだ死んでいなかったのか!?!しぶとい野郎だ、今度こそぶつ飛ばして…」

「まあ待て。少し私の話を聞いてもらおう。私は、死んだ。三年前、お前たちに敗れ、確かに死んで身も滅んだ。しかし、私の魂は風と成り、いつの間にかこの場所へと流れ着いた」

「幽霊ってこと？」

「そうだな、私はある物体を依代とする霊だ。私の、かつての戦士としての、天邪鬼の思念が、こうさせたのかもしれない」

「鬼人正邪…お主は、『幻想郷の戦い』で、レジスタンスの中枢として戦ったはずじゃ。それが、なぜこのような事に？」

「そう…私はレジスタンスの戦士として、かつてマガノ国と戦った。しかし、その後起こった飢餓と荒廃…これにより幻想郷に居る事が出来なくなった妖怪たちは、地底へと逃げ込んだ」

「何だって…妖怪が地底にじゃと？」

「知らなかったのか？ほとんどの妖怪は地底へ逃げたんだ。そして、今度はその妖怪たちを含めた地底の軍勢が、直接マガノ国へと殴り込

みを仕掛けた。だが結果は惨敗、私は捕らえられた。死ぬ思いで、十年もかけて脱走の機会を伺い、ついに幻想郷へと戻って来たんだが…そこで、私は“四人の歌姫”の計画の真実を知った。その後は…新子、お前が知っているとおりでだ」

「ああ…四人の歌姫が全て倒されれば、幻想郷そのものが灰色の海に覆われてしまう。それを防ぐために、お前は番人となったんだ。その墓を立て、自分を死んだ存在としてな」

「そうだ…。その様子では、歌姫も全て倒し、幻想郷の破滅も止めて見せたようだな」

「でも、貴方今聞き捨てならない事を言ったわね？幻想郷から消えた妖怪は、地底に居るですって？」

「お前も知らなかったのか、華扇よ。今はどうかは知らんが、私が居た頃はな」

「大体、状況は掴めたが…、なるほどのう。他の妖怪と関わりを持たない奴らは、他のほとんどの妖怪が地底へ行つたのに気付かなかつたって訳か」

マミゾウが苦い顔で言った。華扇もマミゾウも、その事については知らなかった。マミゾウは妖怪狸のグループだけで行動していたし、華扇は単身で幻想郷中を旅してまわっていたらしい。なので、周りで消えていく妖怪たちが、実は地底へ逃げているなど思いもしなかったのだろう。

「それにしても、正邪…お前さつきアタシらが来るのを待っていたと言ってたな…？」

「その通り。私も、元はマガノ国への叛逆組織、“レジスタンス”の戦士だった。しかし、四人の歌姫計画の真相を知り、絶望と暗黒の海に堕ちた。だがその時私は、ひそかに期待していたのかもしれない…この私を殴り、目を覚まさせてくれる奴が現れるのではないかと。そして私は死に、魂だけの霊となってしまったが、そのおかげで闇の支配から解放されたようだ。そうなれば、このレジスタンス創始者、天邪鬼としての血が騒ぐ…！どうだろうか、これからの旅…この私を連れて行ってはくれないか」

突然の申し出だった。以前は敵として、その余りある凶悪な力を向けた正邪。マミゾウからすれば、天邪鬼として暴れまわっていた時の正邪からは想像もできない程の、真摯な顔つき。

「…まあ、いいでしょう。私たちはこれからマガノ国へ行く…かつてマガノ国に居た貴方が居れば、多少は助かるかもしれないわ」

「何だと、マガノ国に？」

「ああそうだ。マガノ国に居る人間と妖怪を幻想郷へ連れ戻すんだ」

「なるほど…くくつ、面白い。そうなら、いずれ私の力が必要になる時がくるだろうな…」

「そりゃ頼もしい限りだ」

「では、今から私たちは反逆組織、レジスタンスだ。いや…」新レジスタンス”をここに結成する」

「新レジスタンス”…か。いいじゃあねえか」

今、ここに結成された“新レジスタンス”。かつてのレジスタンスの遺志を継ぐ戦士、鬼人正邪を仲間に加え、新子たちは旅を続けるのだった。

この先、どんな仲間や敵、戦い…そして運命が待ち構えているかなど、正邪も、新子も…想像すらしていなかった。

〈登場用語・人物紹介2〉

・新レジスタンス

鬼人正邪により結成された、新たな反マガノ国対抗組織。今のところのメンバーは、本居新子、茨木華扇、二ツ岩マミゾウ、そして鬼人正邪の4人。

・本居新子

鈴奈庵のヤンキーガール。「魔に対して力を発揮する程度の能力」を持つ。初登場時18歳、現在21歳。身長182cm。

・茨木華扇

新子の姉的立ち位置であり、親友の仙人。「右腕を変化させる程度の能力」を持つ（この小説内の設定では）。趣味は旅をすること。

・二ツ岩マミゾウ

破魔師シャムによって封印されていた妖怪狸たちの頭領。「化けさせる程度の能力」を持つ。実は、自分が統括していた狸たちがどこに行ってしまったのか調べるためというのも同行した理由の一つ。

・鬼人正邪

言わずと知れた天邪鬼。初代レジスタンスの創始者であり、リーダー。もつとも長くマガノ国と戦い続けてきた戦士でもある。一度は北の歌姫として新子に倒されたが、正邪の心の根底部分にあった反逆精神が霊体としてこの世に残った。「ひっくり返す程度の能力」を持つ。

第7話 「語られし怪力の末裔」

ついにマガノ国の支配から解放された幻想郷。しかし、再び魔の手が忍び寄るのも時間の問題だ。

本居新子、茨木華扇、そして二ツ岩マミゾウの三人は、マガノ国に囚われた人間と妖怪を救い出すため、新たなる旅へと出るのだった。道中、幽霊となっていた鬼人正邪を仲間に加え、新レジスタンスを結成した新子たち。新レジスタンスは、打ち出の小槌を求め、いよいよ地底世界へと足を踏み入れるのだった。

第7話 「語られし怪力の末裔」

「しかし、正邪や。お主は今や霊体の身…。新子を呼ぶことしかできなかつたことから、そこから移動できないと見える。どうやって同行するつもりじゃ？」

マミゾウがふと正邪に質問を投げかけた。正邪は半透明の煙状の上半身を移動させ、墓石の横を顎で指した。

「そう、私は霊体。自分一人では移動することもままならない。だが私はある物体に憑依している。その物体を持ち運んでくれれば、お前たちについていくことができる」

新子が正邪の指す方を見やると、地面の砂に埋もれるように、手のひらサイズの細長い木片が落ちていた。新子はそれを拾い上げ、砂をはらってマジマジと見つめた。恐らく、昔は紐でも通されていたであろう小さな穴があり、色こそすり減り、あせてしまっているが、美しい彫刻が施されている。

あれ、これって確か…。

そこで新子は気付いた。記憶に片隅に引つかかっていた記憶がよみがえった。三年前、ここへ来たとき、墓石の近くにあった木片を、新子は拾ってすぐに捨てた。これはあの時の木片だ！

「よし、これでお前たちについていくことができる」

新子が木片をズボンのポケットに入れた。すると正邪はふわふわ

と移動し、新子の背後に位置取る。

「それじゃあ、そろそろ行きましようか」

「そうじゃな」

新子たちは、その場を後にし、地底への入り口目指して歩き始めた。道中は、さほど危険はなかった。昔は危険な妖怪で溢れていたらしいが、今は妖怪も、マガノ国の魔物も居ない。現れるのはせいぜい獣くらいだった。

ついに、三人は華扇の案内のもと、地底へと続く穴にたどり着いた。

「これが…地底への道」

穴は、直径10メートルほどで、とても深そうだが、何かはずっと下の方で見える。そう、まるで穴を塞いでいるかのように、大きさもピッタリな大岩がはめ込まれているのだ。

「いつからかあの岩が道を塞いでいたから、誰も地底に妖怪が居ると気付かなかったのじゃな」

「でも、どうしてこんな岩が？」

新子が呟いた。

「…あれこそ、私が置いた岩…」

「何だつて？」

「私が北の歌姫の番人となったあと…地底から妖怪が出てこないように穴を塞いだのだ。かつての“四人の歌姫計画”とは、大地を毒し、妖怪を幻想郷から一匹残らず消し去る事…。幻想郷へ出てくれば、私はソイツを始末せねばならなかったから。それに、マガノ国の者が地底へと行けないようにとの配慮だ」

番人だった本人が明かした、四人の歌姫計画の本当の意味。妖怪は寂れた場所では存在することが難しくなる。だから歌姫を使って、幻想郷から妖怪を締め出し、そこへメスを入れる。

それと同時に、幻想郷そのものも手玉にとれるように仕組んでいたのだから、禍王の計画性はつくづく恐ろしいと再確認させられる。

「困ったのう。これでは地底には行けないぞ」

「…いや、私に任せて」

華扇が前に進み出る。

「旅のついでに修行して…成長したのは私もよ」

華扇は右腕の上に掲げ、巻かれていた包帯をほどいた。解かれた包帯は巨大な渦巻き状のドリルに組まれ、更に大きくなっていく。ついには、自身の身長の数倍はあろうかというドリルに変化させて見せた。

「さあ、これで一気にぶち抜くわ」

「流石だな、これならば突破できそうだ」

正邪が呟いた。華扇は新子とマミゾウをわきに抱えるようにして抱くと、穴の中に向かって飛び降りた。そして、大岩に激突しようかという瞬間…変化させた超巨大なドリルを高速回転させ、先端部を岩に突き刺した。

岩が破壊された。ドリルは岩を砕きながら、掘り進んでいく。

「うわああああ！」

振動と落下の勢いに驚いて、つい情けない叫び声を上げてしまう新子とマミゾウ。しかし、華扇はお構いなしに掘り進んでいく。

「この岩、円柱状になってるようね…大分深いわ」

そんな華扇の言葉も耳に入らない。だが、しばらくすると、岩を砕く音とギューイイイという回転の音が穏やかになった。新子とマミゾウが目を開けると、そこには神秘的な光景が広がっていた。

確かに、三人はまだ落下の途中だった。しかし、岩を掘り抜け、ドリル状の包帯の中で揺られている。そして周りの穴の壁は、なんと金色に輝いていた。

「すげえ…」

想わず新子が感嘆の声を漏らす。

「これは初めてだわ。前はこんなじゃなかった」

壁の色は金色から真紅へ、そして群青色、深緑、すみれ色へと変わっていく。やがてそれらの色が混ざり合い、虹のような七色を作り出した。

三人は、その景色を眺めながらただひたすらに、地底世界へと向け

て落下を続けていた。七色の景色が薄くなり、途切れた時、下に見える穴の先に幽かな光が見えた。

「やっど地底か!？」

「どうやらそのようね!？」

華扇は自分たちを囲っていたドリルを地面に激突させた。爆発のような音と共に土埃が舞い、解けた包帯の中から三人が姿を現した。「いてて…もうちよつと優しくぶつかってくれ…」

埃の中から新子がよろよろと出て来る。

靴の中が濡れている。どうやら、ここは丁度水溜まりか池だったようだ。新子は改めてあたりを見渡した。辺りは薄暗く、物音一つない。向こう側には、デコボコした街のような場所が見える。今居る場所の天上は低い、街の方だと天井は空と同じくらい高い。

「ここが、妖怪たちの…地底世界」

その時、視界のすみ提灯で飾られた一本の橋が見えた。

「アレを渡ると、旧都に行けるわ」

「旧都?？」

「地底にある都の事ね。地獄の繁華街跡地を、鬼たちが改築した場所よ」

そう話しながら、橋へ近づいていく。橋の下は、それほど大きくはないが流れのはやい川がある。幅は狭くても、川底が見えない。かなり深そうだ。

「何者だ」

その時、低いくぐもった声が響いた。声の方へ目を向けると、橋の横に、何者かが寄りかかり膝を立てて座っていた。その男の鋭く、真つ黒な目が三人を睨みつけた。

男の額からは、ツンツンに逆立った金髪をかき分けるように赤い一本角が伸び、黄色い星マークがついている。

「アンタ…まさか」

「おうおう!何者だとは言うじゃねえか!」

「なっ!?!」

突然、新子の背後に隠れていた正邪が、声を新子に似せながらそう

叫んだ。

「アタシ達は地上からやって来たレジスタンス！新たな目的を果たすため、鬼人正邪の名の下へ地底へやって来たア！」

「何…レジスタンス…？」

（おい、何言ってるやがるテメエ！）

（奴の知ってそうな言葉を混ぜて、反応を見ているだけだ）

「お前の問いに答えてやったんだ、お前も名乗りやがれ!!」

さらに正邪は続けた。すると、その男は立ち上がった。背丈は新子と同じくらい、青い着物を纏い、紫色の袴のようなズボンを履いている。考えていることの読めない真つ黒い瞳がじつと新子を見据える。その姿は、正に…

「…いいだろう。この俺は〃ほしくまゆうば星熊勇刃〃：怪力乱神を継ぐ鬼にして、この新都の守り手である」

「鬼…やはりのう」

マミゾウが呟いた。

「星熊って…やっぱりあなたは…」

「母の事を知っているのか？」

「ええ、まあ…」

「母の知り合い、か。ならば、ただの俗物じゃなさそうだ」

「私たちは、貴方たち地底の妖怪に頼みたいことが有ってここへ来たの。幻想郷の隣のマガノ国には、人間や妖怪が捕らえられている…彼らを救うために必要な道具、打ち出の小槌を貸してほしい」

華扇が、勇刃にそう申し出た。マガノ国という言葉聞いた勇刃の顔が、一瞬だけ悲しそうに歪んだ。しかし、すぐに元の表情へ戻ると、着物の上を脱ぎ始める。

「なるほど…マガノ国へ行くために、この地底を通るといふ訳か。だけど…母の知り合いをあんな場所へ送り出す訳にはいかない」

着物を脱ぎ捨てると、黒いシャツに包まれた筋肉質な肉体が露わになった。

「どうしてもマガノ国へ行きたいというのなら、この俺に強さを示してみる。もしも俺が認めてやれば、ここを通してやるし、打ち出の小

槌についての話も付けてやる」

「結局は力づくでつて訳か？話に聞く通り、鬼とかいう連中は荒っぽいねえ。だけど、嫌いじゃない」

勇刃の前へ新子が進み出た。ずんずんと歩み寄り、その顔をぐいと近づける。勇刃の赤い一本角が額にめり込む。

「お前が俺と戦うのか？人間なのに」

「舐めんなよ。アタシを誰だと思つてやがる？」

「面白い」

「新子：気を付けてよ、殺しはしないと思うけど…鬼は貴方が思つてる以上に化け物よ」

「らしいぞ。だから遠慮はするなよ」

両者の間に火花が散る。勇刃はゆっくりと両腕を広げ、胸を張る。明らかに新子を挑発していた。

「アメモエ…」

自分の臉が痙攣して、拳に力が入る。それを感じ取った新子は、すかさず勇刃の腹を殴りつけた。

バチン、という音が響き渡る。どうだ、と思つて勇刃の顔を見る。

勇刃の顔は少し驚いたようにこわばったが、またすぐに元の顔に戻った。

「今の本気か？」

「…半分くらい！」

「次は本気で来い」

「舐めやがつて…ラア!!」

もう一度、新子は拳を叩きつけた。今度は手ごたえが有った。勇刃の体は少し後ろに下がり、プルプルと震えている。

「ククク…」

しかし、その笑い声が聞こえたたん、新子は後ろへ飛びのいた。「今ので本気か？…しばらくは好きに打たせてやる。遠慮せずに頼むぞ？」

新子は、今度は勇刃の顔面を蹴りつけた。続いて胸を殴り、顔にも連続で殴打を浴びせる。しかし、勇刃はそれでも顔色一つ変えずに、

足すら一ミリも動かすことなく新子の攻撃を受け続ける。

新子が顔面にめがけてパンチを繰り出したとき、勇刃は拳に向かって額を突き出した。勇刃の眉間とぶつかった新子の拳がはじき返される。

「ぐお…いって…！」

腕がびりびりと痺れる。拳が赤くなっている。

「痛かったか？悪いことしたな」

「…全然！」

新子は急に飛び跳ねると、不意打ちで思い切り顔面を蹴りつけた。これには流石の勇刃も、よろよろと数歩後ろへ後ずさった。

「よしー！」

そのまま押し切りと言わんばかりに、腕を振り上げながら走り出す。勇刃は、ゆっくりと顔を上げた。そして、新子がこちらへ走ってきているのを確認すると、こちらと同じように走り出した。

それにぎよつとした新子が回避する暇もなく、勇刃のタツクルが新子に炸裂した。走っていたのにもかかわらず、逆方向へ吹っ飛ばされる。地面を転がり、そのまま仰向けに倒れ込んでしまう。

「新子ー！」

華扇が心配そうに呼びかける。勇刃がゆっくりとこちらに歩み寄っているのに気付いた新子は、フラフラと起き上がり、構えた。さつきは目線の高さが同じだったのに、今では新子が頭一つ分ほど見下されている。強烈な一撃をもらってしまった新子が、恐怖に腰を引いているのだ。

「攻守交代、だ」

手をクルリと回しながらそう呟いた瞬間、勇刃が殴りかかった。寸前でそれを回避し、足に蹴りを入れる。しかし、それを意に介している様子はなく、すぐにもう一度拳を振り下ろす。

新子が走ってその場を離れ、勇刃がゆっくりと目で追う。

「新子、能力は使えないの!？」

「駄目だ…アタシの力は、悪意とか邪気とかにしか反応しない…コイツの妖気には、そんなモノは含まれていねえ。もつと純粋な、ただ戦

うって意志しか感じられねえ！」

それに…たとえ能力が使えても、『東の反逆者』を生成できたとしても、コイツの前では、きつと無力…！短所を補って、余りあるタフネスとパワー。古来より人が恐れる強きもの…。これが、鬼…!!

あまりの実力差を前に、まるで自分が虫になってしまったかのように思える。奴が人間としたら、自分はハエだ。いくらうるさく飛び回っても、奴自身に有効打を与えることはできない。それに奴のやる気次第で、いつでも簡単に潰される。

だが、しかし…

「…おとなしく降参して帰ります、って顔じゃないわな」

「つたりまえだ」

新子は、もう一度拳を前に構えた。そして、軽くトントンとステツプを踏む。勇刃は上半身を大きく回しながらパンチを放った。

だが、勇刃の拳は空振りだった。目の前の新子が消えたように見えた。慌てて後ろを振り向くと、そこには軽やかにステツプを踏む新子が居た。少しだけ顔をしかめて、すかさず追撃に出る。しかし、何度攻撃しても、新子に思うように当たらない。

何か、戦い方と…そして雰囲気が変わったような気がする。

「そろそろテメエを、蹴りてえなあ」

「何だど？」

新子はそう呟くと、思い切り足を振り上げた。

「あら、アレは…」

「アレは何じゃ？」

「新子お得意の…フェイントよ」

新子の蹴りを受け止めようと、腕を構える勇刃。次の瞬間、見ていたはずの脚が、視界から消えた。代わりに飛び込んできたのは、死角からの拳。

バキッ

「ぐ…」

もろに喰らってしまった。さらに突き出されたパンチを避けようとするも、当たる寸前で引っ込み、今度は蹴りが飛んでくる。避けよ

うと思つても、最初の一撃を喰らっているため、どうしても意識してしまふ。

(今のは大分手ごたえがあつた…まだ態勢を立て直せていない！追撃できる…！)

顔を下に向けたままふらついている勇刃に、肘打ちで追撃を仕掛けようとする新子。

「ハア…」

その時、ほんの一瞬の間だけ、勇刃から悪の気を帯びた妖力が放たれた。あまりに気だるげな、赤黒いオーラに怯んでしまふ。その隙を突かれて、新子は両腕を掴まれた。抜け出そうとどんなに力を込めても、捕まれた手はビクともしない。今のに反応して、能力は発動しているはずなのに…。

「悪いな、新子とやら…」

勇刃はゆつくりと新子の耳元へ口を近づけた。そして静かに、こう言った。

「飽きた」

「え…？」

次の瞬間、新子はまるで布を広げるかのように宙を舞っていた。ふわふわと。

華扇やマミゾウが息を呑む顔がぼんやりと見える。突然体を物凄い力で引つ張られ、視界が真っ暗になった。

「新子…」

すぐに華扇が駆け寄り、ドリルに変化させた腕の切っ先を勇刃へ向ける。マミゾウが気を失つた新子を抱きかかえ、傷を確認している。

「これで、終わったな…。ふう、怖かった…」

「…って、怖かった？」

「そりや当然だ、この人、鬼みたいな形相で襲い掛かってくるんだ、ようやく倒れてくれてよかつた」

「か、変わった奴じやのう…」

先ほどまでの尊大な様子とは打って変わった態度に、思わず驚きの声を漏らしてしまう。

「人間という者がどういうのか、今初めて触れてみたが…人間とは皆このように強いのか？」

「いや、それぞれだと思う…」

「ではこの人だけが特別強いというんだな？よし、じゃあ守り手である俺が認めよう、新都へ入ることを許す」

第8話 「新地獄街道に行く」

ついにマガノ国の支配から解放された幻想郷。しかし、再び魔の手が忍び寄るのも時間の問題だ。

本居新子、茨木華扇、そしてニツ岩マミゾウの三人は、マガノ国に囚われた人間と妖怪を救い出すため、新たなる旅へと出るのだった。道中、幽霊となっていた鬼人正邪を仲間に加え、新レジスタンスを結成した新子たち。新レジスタンスは、打ち出の小槌を求め、いよいよ地底世界へと足を踏み入れるのだった。

第8話 「新地獄街道に行く」

「う、うくん…」

新子が、ぼやける視界の中、目を覚ました。明るい部屋で、ミントのような香りが漂っている。

「起きたのね」

「いって…」

「すまん、さつきは」

「あ、お前…」

新子が寝かされていたベッドの少し向こうで、勇刃が座り込んでいた。その横に華扇とマミゾウがいる。

「ここは俺の家だ。お前の強さを認め、新都へ入ることを許可した」

「負けたのにか？」

「勝ち負けが問題じゃない。俺が認めればいいんだ。まあ、戦ったのが君で良かったと思う…：後の二人だったら、きつとムキになって、こつちもただじゃすまなかつたと思うから」

「どういう意味だコラ」

「ねえ、さつきから新都って言ってるけど、ここは旧都じゃないの？」
華扇が勇刃に尋ねた。

「前は旧都だった。だが時代は移り変わっていくもの…：常に新しいモノを求めるが、古いモノは消えない…：新しいモノの礎となり、その中

で生き続けるのだ。…それが、母がいつも言っていたこと」

「その貴方のお母さんって…星熊勇儀でしょ？いないのかしら？」

勇刃はそれを聞いたとたん、目線を下に落とした。黒い瞳が、より深く沈んだようだ。

「そうか、母さんの知り合いらしいな。なら知ってるとは思うが、母さんは昔、山の四天王の一人でな…とても強かった。幼かった俺の憧れでもあった。だが…あの事件が起こった」

180年前。突如として起こった幻想郷の荒廃に耐えかねた地上の住民たちが、この地底へと流れ込んできた。当時は、俺たち鬼が地底を支配していた。元から地底には地上からやって来た妖怪も多かったし、まだ余裕があったから、率先して受け入れた。

鬼たちは、そこで初めて、噂に聞くマガノ国の力を知らされたんだ。地上でマガノ軍との戦争が有った事を聞いた鬼は、嬉々として軍隊を編成した。鬼を主力とした、強襲部隊だ。地上の仇を取るとの名目で、マガノ国へと乗り込んだ。

丁度、俺が物心ついたころだった。勿論、母さんも闘いに行った。残されたのは、俺達子供の鬼や、戦えない老いた鬼だけだ。戦いに勝たなくてもいい、生きて帰って来てくれるだけでいい。他の鬼と比べて内気だった俺は、ただひたすらにそう願っていた。

しかし、誰も一人として、帰っては来なかった。

俺は、ただ母さんの能力を継いでいただけなんだ。ただ強いというだけで、新都の守り手を任された。もしも地上からマガノ国が攻めてきた時の為に。

「俺は戦いが好きではない。臆病なんだ。『私と違ってお前は優しい、人の迷惑とか気持ちをよく理解できる』ってよく母さんに褒められたよ。だから、お前たちが来た時も、ずっと怖くて震えてた…昔会ったことのある強い鬼たちを真似してあんな態度だったんだが…。だからさつき、戦うのが君でよかった、って言ったんだ」

「…そんな事が…」

「それと、お前たちはさつき、レジスタンスと言ったな。まさか地上のレジスタンスの残党か？レジスタンスは、その30年後、地底で再編

成され鬼の後を追うようにマガノ国へ行つた。彼らも帰っては来なかつたんだ」

「だが、私は帰ってきた」

新子の頭の後ろから、正邪がふわふわと現れた。

「お前は……」

「私は鬼人正邪……第二次マガノ国強襲軍、旗艦長はこうして舞い戻つたぞ」

「驚いた……俺の記憶にある鬼人正邪とは、随分変わっているが……」

「それはそうだろうな、色々あつたから」

「もつとこう、天邪鬼と言えば人の神経を逆撫でするといふか……」

「もしよければ天邪鬼してやろうか？」

「いや、それはいい……」

「あ、そうだ。そういえば、マガノ国へ行くのに打ち出の小槌が必要だとか言っていたな。……本気か？」

三人は顔を見合わせた。どうする、本当の事を言ってしまうか？この勇刃は、信用に値する。だが、この情報が地底に漏れれば、どうなるか分からない。

「……いいでしょう、私たちの目的は、さつきも言った通り、マガノ国へ乗り込み、打ち出の小槌を使って囚われの人間や妖怪を幻想郷へと連れ戻す事。打ち出の小槌は、ずっと前に鬼に返されたと聞くわ。渡せとまでは言わないわ、少しだけ貸してくれるだけでもいいの」

勇刃の表情が再びこわばった。マガノ国、自分の母親が向かい、そして帰らなかつた場所。

「本気、のようだな。いいだろう、俺についてこい。小槌を貸してくれよう、話を付けてやる」

三人と正邪は、勇刃の家を出て、新地獄街道を歩いた。新子にとっては、この町並みそのものが新鮮だった。色鮮やかな繁華街、そこに並ぶ見たこともない食べ物。角のある妖怪、腕が何本もある妖怪、一つ目の妖怪。様々な妖怪が珍しげに新子を眺めている。

「勇刃、ソイツどうしたア？」

「まさか、モテないからって人間の女に手え出すつてののか？」

「いや、そうではない」

茶々を入れる妖怪たちを軽くあしらっていく勇刃。

「悪い奴らじゃないんだ。歳は俺とほぼ一緒…皆、親とか家族に取り残された幼子がそのまま成長したんだ。彼らが旧都を新都へ変えた。母さんの言っていた通り、時代は移り変わる」

と、その時、ふと勇刃が立ち止まった。横には巨大な門が開け放たれている。門の奥には、大きな寺と仏像があり、威厳を醸し出している。

「地底の街に寺があるとは驚きだ」

「…ここはまさか」

「こんにちわ」

門の前で掃き掃除をしていた尼さんが勇刃へ挨拶をした。

「あら、貴方たち…！」

新子たちの姿を見るなり、頭にかぶっていた白い布を外す。すると、紫と金のグラデーシヨンのかかったような長い髪が、ぶわっと広がる。袈裟の裾を持ち上げ、こちらへ走ってくる。

「茨木華扇に、ニツ岩マミゾウでしょ!？」

「そういうお前さんは…聖白蓮か!？」

マミゾウの手を握った女性は、驚きを隠せない表情で興奮気味に話している。

「知り合いか？」

「いや、ああ…古い知人じゃな…」

「おや、貴女は確か…」

その時、背後からも声が聞こえた。振り向くと、別の女性がこちらに歩いてきていた。ここで気付いたが、この寺の反対側に、何やら神々しい建物が聳えている。門が開いているので、この人はここから出て来たのだろうか。

「これはこれは…山の仙人様では？お久しぶりでございますな」

動物の耳かと思まがうほど二つに尖った薄い茶色の髪に、「和」という文字の入った耳当てをしている。紫色のスカートに、クリーム色の

服、その上から青いマントを羽織っている。

「華扇、お前の知り合いか？」

「ま、まあ…」

「あ、お前はマミゾウ！」

「あ、貴女は山の仙人殿！」

マミゾウや華扇の知り合いと思わしき人たちが続々と群がってくる。ざっと十人以上は居るぞ。沢山の女性の波にのまれた勇刃が居心地の悪そうな顔で新子に助けを求めている。

「こりや一体…どうなつてんだ〜!？」

「いやあ、どうもすみません。懐かしい顔で、ビックリしてしまいました…」

ここは、新都の集会場らしい。だが集会場とは名ばかりで、大体毎晩酒好きの妖怪や、騒ぎ好きの妖怪が集まって宴会を開いているそう。そして、今は夜らしい。そういえば、ここへ通じる穴に入った時は午後くらいだったか。多分、地上も夜なのだろうか。アタシ達は流れて飲まれて、その宴会とやらに参加させられていた。

この美人の尼さんは、聖白蓮というらしい。何でも、地上から寺と門下ごと引越してきたとか。それで、さっきのトンガリ髪の人は、聖さんの「命蓮寺」の向かい側の霊廟に住む仙人だと。名前は言いにくいけど豊聡耳神子。隣に居る物部布都、蘇我屠自古っていう人たちも一緒に暮らしてるらしい。

「全くだ。私たちがこの地底へ引越してから200年近くたつけど…ここで顔を見ない者はすっかり死んでしまった者だと…」

「だが、久々の地上からの客だ…今宵はパーツと歓迎してやろうじゃないか」

新子たちの席の杯には酒が並々とつがれた。華扇とマミゾウは、古くの仲間たちと談笑しながら、豪華な料理と酒を楽しんでいる。

「どうした人間、飲まないのかい？」

そう言っているのは、確か…そう、八坂神奈子。昔、妖怪の山にあった守矢神社の神様らしいのだが、今は神社と近くに有った湖ごと地底

へやって来たらしい。

「まあ、今日くらいはいいか…」

酒はあまり好きではない、嗜む程度だが…今日はいつもより飲んでもいいだろう…。そういえば、妖怪の酒って人間が飲んでも大丈夫なのだろうか？と、そんな事を考えながらぐいっと飲み込む。すると、案の定、一瞬だけ頭がくらつとした。やっぱり、いつも飲んでるのよりも大分強い気がする。

あれ…そういえば、何をしようとしていたんだっけ…？

「それにしても、どっちかといえば人間とかを大切にしてた貴方たちがこの地底へやって来るなど、不思議に思うのですが…」

華扇が徐に聞いた。それを聞いた神奈子、神子、聖白蓮は静まり返る。

「…仕方が無かったんだ…。折角マガノ国を追い払ったというのに、あの様だった…。私は神…信仰が無ければこの身も滅んでしまう。当時のマガノ軍によって人間の里から守矢神社への道は封鎖され、人間をあてにすることはできなくなった。だから、妖怪からの信仰を求めて地底へ逃げたのだ」

神奈子が静かに言う。

「私も同様ですね」

と、神子が呟いた。

「私は…救うべきは妖怪と判断したから。見ていれば、どうやらマガノ国の狙いは妖怪だけだった様子だから…」

他の者たちも黙り込んでいる。

「申し訳ないとは思っている。私や神子は、人間を救い、希望を与える立場でありながら、人間を見捨て、幻想郷を見捨て、この地底へみすみす逃げ込んだ…」

「だが、今度は彼女らが希望と成るかもしれないぞ、八坂殿」

勇刃がそう言った。神奈子たちはハツとしたように新子たちを見つめる。

「まずは話を聞いてみるといい」

「あ、ああ…アタシが話そう。まずどこから話せばいいのか…」

新子は、神奈子たちに全てを話した。幻想郷の荒廃の原因が禍王の“四人の歌姫計画”であり、それを阻止した事。今は幻想郷に結界が張っておりマガノ国の侵入を防いでいるが、それが破られるのも時間の問題。それを防ぐため、マガノ国へ連れ去られた人間と妖怪を救い出す事。

「…で、それをやるためには、打ち出の小槌っていう道具が必要なんだ。地底にあると聞いてやってきた、って訳だ」

「そうだったのか…」

神奈子たちは話を聞いた後、静かにそう言った。自分たちが地底へ逃げた原因は潰され、今、幻想郷は元の美しい大地へ戻っている。

「しかし、地底と地上には、古から結ばれる条約があるのです」

「そうなのだ。地上の妖怪による、地底への不可侵。昔、私たちはこれを破って地底へ来た。だが、それには代償が有った…。その代償とは、今度は地底から地上へは出ることができないというものだ」

「その古の条約があるから、私たちはもう地上へ出ることには許されない。これは、地上を…幻想郷を見捨てた我々へ課せられた罰なのです」

新子も、その場の全員が黙り込んでしまった。

何か言おうとした、その時だった。

「おうおうおう！聞いてりや辛気臭い話続けやがって！酒の席に招待したのはテメエらじゃねえか!!」

「あ、お前また…!!」

新子の背後から、また正邪が声を似せてそう叫んだ。全員の視線が新子に集中する。慌てて説明しようとするが、背後に居る正邪の声はさらに続ける。

「古い条約が何だっつてんだ？古いモノは新しいモノの礎となつて滅びる…それこそが、新都じゃなかったのか!?アタシ達”新レジスタンス”は、そうだつて聞いたぜ」

「新…レジスタンスだつて…?」

神奈子が驚きながらそう呟く。

「その通り！新たに結成されたこのレジスタンス、古いモノにや縛ら

れねえ！条約なんて蹴っ飛ばしちまうんだよ」

「蹴っ飛ばすって言っても、どうやって…」

「打ち出の小槌を使う！小槌ならば、その条約とやらも解除できるはずだ」

「小槌…それは考えた事が無かったな！」

と、神子。

「そうだ、だから、我々に打ち出の小槌を貸してくれ」

新子の背後から正邪が姿を現す。その姿を見た神奈子たちは、一斉に驚愕の渦に飲まれた。

「お前は…！天邪鬼の鬼人正邪…！」

「私はこの通り、魂だけの姿となったが、舞い戻ったぞ。これもコイツ等のおかげなんだ。コイツ等に不可能なことはない。だから…小槌を貸してほしい」

「そうか、そうだったのか…。この私、八坂神奈子はずっと後悔していたのだ。この地底から妖怪軍を送り出したとき、自らは決して戦いへ出向かなかった。怖れていたのだ、新しいモノを…「禍」を怖がつていた。だからこそ、私は他の者に、戦いを押し付けた。それがずっと気がかりだった…。しかし、今一度…何かを信じるのも良いかも知れない。皆の衆、この者たちに我々の明日を預けてみようではないか！」

神奈子の激の後、数秒の間を置いて、会場から喝采が上がった。豊聡耳神子や聖白蓮、彼女らについている者や、会場に来ていた数多の妖怪。彼らが声を上げ、新レジスタンスに希望を託している。

「よかろう、打ち出の小槌、お前たちに貸してやろう」

「本当か!？」

「ああ。小槌は、この新都の中心、地霊殿という場所に保管されている。今晚中に地霊殿にこの私が貸し出しを許可したうまを伝えておく。疲れているだろう、今日はゆっくり休んで、明日に地霊殿に行くといえ」

「感謝するぞー！」

マミゾウが神子や聖の手を握っている。華扇はゆつくりと新子の

肩に手を置き、正邪は腕を組んで目を瞑り、ゆつくりと頷いている。打ち出の小槌は手に入れた。これで、後はマガノ国への突入と、民たちの奪還だ。

「さあ、そうと決まれば、今日は飲み交わそうじゃないか！新たな英雄と旧友へ乾杯だ」

〈登場用語・人物紹介3〉

・バン

バン隊という憲兵団の小隊に所属していた、元女憲兵。今は禍王の支配から解放され、河童と共に妖怪の山で暮らしている。

・河城にとり

妖怪の山に住む河童の一人。新子たちを最も信頼する妖怪の一人で、たびたび旅で訪れる華扇とは仲がいい。

・ツムゲ

新子の昔からの知り合い。自営業の食堂の手伝いをしている。噂では、里で唯一タイムマンで新子を叩きのめした男らしい…。

・星熊勇刃

星熊勇儀の実の息子。母親の能力、「怪力乱神を持つ程度の能力」を受け継いでいるが、精神、実力ともに鬼としてはまだ未熟。しかし、現在の地底では五本の指に入る強さを誇り、新都の守り手を任されている。本人は戦いはあまり好きではないらしい。

・八坂神奈子

かつて妖怪の山の守矢神社の神様だった。しかし、マガノ国軍によって守矢神社への道を封鎖され、人間から信仰を得ることが難しくなったため、地底へとやって来た。

・豊聡耳神子

太古より蘇った尸解仙。マガノ国からの攻撃に耐えかねて従者と共に霊廟ごと地底へとやって来た。

・聖白蓮

命蓮寺の住職。多くの妖怪を救うため、寺ごと門下の妖怪と共に地

底へとやって来た。

・第一次マガノ国襲撃

地底の鬼たちが大部隊を編成し、マガノ国へ強襲を仕掛けた。戦えない子供や年寄りの鬼は老いていかれ、成長した子供が今の新都を作り上げた。

・第二次マガノ国襲撃

鬼たちの後、残された妖怪たちが大軍勢を率いてマガノ国へ強襲を仕掛けた。妖怪たちは兵器や武器を大量に投入したが、負けてしまった。鬼人正邪が軍の旗艦長を務めていた。

第9話 「打ち出の小槌」

ついにマガノ国の支配から解放された幻想郷。しかし、再び魔の手が忍び寄るのも時間の問題だ。

本居新子、茨木華扇、そして二ツ岩マミゾウの三人は、マガノ国に囚われた人間と妖怪を救い出すため、新たなる旅へと出るのだった。道中、幽霊となっていた鬼人正邪を仲間に加え、新レジスタンスを結成した新子たち。新レジスタンスは、打ち出の小槌を求め、いよいよ地底世界へと足を踏み入れるのだった。

第9話 「打ち出の小槌」

結局、その晩は夜中まで宴を楽しんでしまった。かくいう私も、久々の大宴会で舞い上がり、少し飲み過ぎてしまったかもしれない。「ふう…」

華扇は和風の部屋で一息ついていた。未だ酔っぱらっているのか、顔が赤く火照っている。この部屋は神奈子が貸してくれた部屋だ。ここならば安全で、明日までゆっくり休めるとのことだ。

コンコン

部屋の戸がノックされた、障子の向こう側には大きな人影が見える。

「誰かしら?」

「すまない、俺だ」

隙間から顔をのぞかせたのは、勇刃だった。さっきもあれだけ飲んでいただけあって、酔っぱらっているようだ。

「一体どうしたの?」

「実はな…」

勇刃は畳の上に腰を下ろすと、切り出した。

「母さんの事を教えてほしいんだ」

「…どうして?」

「前にも言った通り、母さんは俺が幼い時に居なくなってしまった。

話に聞けば、俺の母さんは凄いい人だったという。だが、俺は優しい母さんしか知らないんだ。だから、俺が産まれる前の母さんの事を教えてほしい」

—お前は優しいんだね。偉いねえ、こっちにおいで。私がお前を守ってあげるよ—

「うくん、短く言えば、曲がったモノが嫌い、素直で豪快な、正に“強さ”を具現化したような人だったわ」

「そう、か。ならば、今の俺とは真逆だな」

「真逆？」

「皆は俺を強い、あるいは頼もしいと言うが、自分はそうとは思えない。新都の守り手をやっていたのだって、簡単そうだったからしていただけで、多分ここが色んな奴から狙われるような場所だったら絶対やってない。前にも言ったが、君たちが来たとき、俺は内心、とても怯えていた。何せ、俺が経験した初めての来訪者だったんだ。何事もなく終わってくれとずっと願ってた。新子が進み出て俺と戦う事になった時、ホツとしたよ。一番弱そうだったから。この通り、俺は常に楽な方へと流れていく。だけど、母さんは俺を臆病だとか、意気地なしとは決して言わなかった。いつだって、『私と違ってお前は優しい、それを誇ればいい』って言ってた」

「そうなのね。…貴方の知らないあの人も居るし、私にも知らないアイツが居るって事か」

「そういえば、アンタの名前は…」

「私？私…茨木華扇よ」

「茨木…やっぱりな!!アンタは俺と同じ…」

「おっと、何を言っているのかしら？私は旅の行者…ただの仙人」

「…ふふ、確かにな」

勇刃はそう言いながら、肩の力を落とした。

「うわあ…何だか入りにくい状況になっちゃったぞ」

戸の隙間から部屋の様子をのぞいていた新子が呟いた。風呂に入ろうと部屋を開けて、上がってから戻ってきたらこの通りだ。何や

ら、入るのを戸惑ってしまうような雰囲気だ。

「まあ、ここは邪魔をせんでおこうではないか」

同じく、隙間から除いていたマミゾウがそう言った。二人はその場から立ち上がると、どこか暇をつぶせる場所を求めてフラフラと歩み去るのだった。

翌日。いよいよ、新都の中央にあるという地霊殿へ向かう時が来た。

3人の前にやって来た八坂神奈子が言った。

「私が車を手配しておいた。これで地霊殿まですぐに行ける」

目の前に停まっているのは、大きな人力車だった。普通の人間サイズの者なら5人は乗れそうなほど広く、赤と緑、金の豪華な装飾が成されている。と、その人力車に繋がれた柄を持った少女が居た。

「やあ、君たちかい？地霊殿に用があるつてのは」

黒を基調とし、緑色の刺繍の入ったドレス、三つ編みに縛った紅い髪の毛。と、ここまでならば人間とほとんど変わらないが、やはりここは地底。彼女の耳や目つき、尻尾は猫とよく似ていた。

「あら…貴方は」

「あたいは火焰猫燐。お燐って呼んでもいいよ。あたいが地霊殿まで送ってあげてあげるさね…って、おっと、久しぶりに見たね、山の仙人でしょ!？」

「おいおい、お前知り合い多いなあ」

三人は人力車に乗り込んだ。火焰猫燐という少女は凄く速さで車を走らせた。新都の町並みがどんどん過ぎていく。すると、二階や三階建ての建物の隙間の向こうに、大きな館が見えた。白い壁に青い屋根、色鮮やかなステンドグラスが見える。

その館の庭で、火焰猫燐は人力車を止めた。三人は車から降り、柔らかな草の上に降り立った。大きさは、前にも行った紅魔館と同じくらいだが、色も違うし外観も綺麗なのでかなり違った印象を受ける。

「さあ、あたいが案内してあげよう」

燐に連れられ、「地霊殿」へと入った。燐が重い扉を開け、中へと案

内する。

地霊殿の中は、明るい天井に、紫色のカーテンとじゅうたんに覆われていた。この今居る玄関ホールの正面には2階へと続く大きな階段がある。

「ここが地霊殿か…」

新子があたりを見渡しながらそう呟いた。よく目を凝らすと、壁の隅っこや階段の手すりの上などに猫や鳥がいる。

「お待ちしていましたよ」

ふと、階段の上を見ると、いつの間にかそこに誰かが立っていた。

誰だ？と新子は心の中で思う。すると、まるでその心の声が届いたかのように、影の暗がりから姿を現した。薄紫色の髪の毛に、ダルそうな目つき、その下にくつきりと残った隈。ゆったりした水色とピンク色を基調とした着物に身を包み、口にくわえたパイプをふかしている。

「ちよつと、さとり様！あたい達の前で、ソレはやめてくださいって言ってるじゃないですか！」

「あら、ごめんなさいね。つい忘れちゃって…」

そう言いながら、パイプを口から離し、フーツと煙を吐く。

頭に付けた金色の髪飾りから、何かコードのような飛び出しているのに気付いた。よく目を凝らすと、それは全身の服の隙間などからコードのような細長い物が伸び、横に浮かんでいる目玉のようなオプシヨンと繋がっていた。

変な奴だな、と新子は思った。

「変な奴でごめんなさいね」

「なっ…!?!」

新子はビクツとした。さつきもそうだったが、まるで考えていることが分かっているみたいだ。

「そう、私は古明地さと。名前サトリの通り…」
「覚」…っていう妖怪よ。
心が読めるの」

「だからか…」

「八坂神奈子から話は聞いているわ。打ち出の小槌を貸してほしいん

でしょ?」

「そうじゃ」

マミゾウが返事をした。

「ついてきてちょうだい」

さとりは再びパイプをふかすと、通路の奥へ足を進めていった。新子たちも、それに後をついていく。

「この地霊殿、動物が多いでしょ?」

廊下を歩く途中、さとりはそう切り出した。新子たちがそうだな、という間もなく、さとりは話を続ける。

「私自身の心を読む能力のせいで他の人に嫌われてしまうから、こうして地霊殿に引きこもっているのだけど…動物たちは言葉を話せないから、自然とここに集まって来るのよね」

「へえ…」

「この子たちは勝手に人間の怨霊とかを食べたりするから、人型妖怪に成長するのよ。さっきのお燐とかもそうかもね。年経た猫は火車になるから」

そうこう話しているうちに、ひときわ目立つ扉の前までたどり着いた。扉の前には番犬のような大きな犬が座っており、扉は鎖で撒かれ、いくつもの南京錠のようなもので閉ざされていた。

さとりは番犬に退くように指示を出し、扉に触れる。南京錠に手がかざすと、勝手に南京錠は外れていく。個人認証のシステムが組み込まれているのだ。きつと、この主であるさとりにしか反応しないのだろう。全ての南京錠を同じように外すと、今度は扉に巻き付けられた鎖がひとりでシウルシウルと解かれていく。その過程を経て、ようやく扉が姿を現した。

扉の鍵穴にカギを刺し込み、いよいよ扉が開けられる。重い金属の扉を開けると、中は真っ暗だった。その真っ暗な部屋の中に、うっすらと光を発している物が背の高い台の上に置かれている。

「ところで、打ち出の小槌が欲しいという目的は?」

さとりの横に浮かんでいた目玉が、じつと、順番に新子たちを見て

いく。

「なるほど、マガノ国の囚人の救出、ね。できるといいわね。…いや…
本当にできるの…?」

「え…?」

「私には妹がいたわ。ある日地上に出かけて行って、それきり一度も
帰ってきていない。どこに居るのかすら、今じゃ確かめようもない。
そこで…もしも、マガノ国に私の妹、古明地こいしが居たら…:連れて
帰らせてきてほしい」

「…」

「できる?」

そう質問したさとりは、今度は目玉を閉じていた。心は読まず、新
子たちの意志を口から直接聞こうとしているのだ。

「できる。やってみせるさ。アタシらを誰だと思つてやがる?」

「そう、そうなのね」

さとりはそれ以上何も言わなかった。

そして、いよいよ、光る物体が置かれている台へと歩き始めた。

「これこそが、貴方たちの求める打ち出の小槌」

曇ったガラスケースを外し、ついにその打ち出の小槌が目に触れ
た。さとりはそれを両手に持ち、ゆつくりと新子たちに歩み寄る。だ
が、両手で小槌を固く持ったまま、俯いている。

「どうしたの?」

華扇がそう聞いた。さとりは顔を上げると、申し訳なさそうな顔
で、衝撃の事実を物語った。

「これを見て…」

さとりは手の中の、打ち出の小槌を見せた。

小さな太鼓のような形で、緑や金色の美しい装飾が施されており、
銀色の毛の束が上部にくつつけられている。この薄暗い場所でも、ひ
とりに光を発しているようだ。しかし、よく見ると、この打ち出の
小槌には何か足りなかった。

「分かりましたか?この打ち出の小槌、持ち手の部分が存在しないの
です」

「持ち手が…?」

「はい。ずっと、昔…突然何者かによって、小槌の持ち手の部分だけが盗まれた。持ち手が無ければ、小槌を振ることもできない…二度とこの小槌は、願いを叶えることはできないのです」

衝撃が走った。マガノ国での目的を成功させる鍵、希望であった打ち出の小槌が使えないだって?一瞬、信じることができなかつた。このさとりがアタシらをからかおうと、嘘を言っているのではないかと思つた。

しかし、さとりの真剣な表情。うしろで、恐らく新子と同じ顔、同じ心境に居るであろう華扇とマミゾウを見て、それが本当だと悟つた。

何者かに盗まれただって?馬鹿な事をしてくれる…。お前のせいで今、自分たちは希望を断たれて…。

心臓の鼓動が早くなると同時に、だんだんと息苦しくなってくる。一瞬目まいがして、ドツと鉄の扉にもたれかかる。

： ブウン ブウン ブウン

その時だった。新子のズボンのポケットの中で、何かが震えている。ズボンの布が透けて、中にあるその何かが振動に合わせて淡い光を発しているようだ。

新子は震える指でポケットを探り、その物体の正体確かめようとした。指が物体に触れた瞬間、焼けるような熱さが伝わった。その物体は炎のように熱を発しているではないか。

熱いのをこらえながら、何とかポケットから物体を引っ張り出す。それは、丁度握りこめるくらいの大きさの、木片だった。ボロボロの彫刻が施され、小さな穴が開いている。そしてそれは、ポケットから出した途端、さらに熱くなり、震え始めた。

それと同時に、さとりも異変に気付く。彼女が持っている小槌も、熱を発しながら震えていたのだ。

「まさか…!!」

さとりは、持っている小槌と、新子が手にしている木片を、目を丸くしながら何度も交互に見る。そして小槌を木片に近づけると、互い

は火傷をしてしまうほどの高熱を発した。

「そう…そうなんだわ！その木片が、打ち出の小槌の持ち手部分…！昔に分割されたパーツ!!」

さらに二つのパーツを近づける。すると、まるでお互いがこの時を待ち望んでいたかのように、勝手にくつついた。木片の先端が小槌の窪みにはまり、すり減ってボロボロになっていた持ち手は、元のように輝きを取り戻した。

「これこそが、打ち出の小槌…これが本来の姿だったんだ!」

打ち出の小槌が、眩いばかりの光を放った。まるで生きているかのように脈打っている。

新子は打ち出の小槌を手渡された。それを受け取ると、小槌はだんだんと熱を冷まし、脈も止まっていた。光も淡く発光するだけになる。

「その持ち手はどこで手に入れたの?」

さとりが新子に聞いた。

「鬼人正邪。コイツが持ち手を持ち去った犯人」

新子はバツの悪そうに背中に隠れていた正邪を正面に引きずり出した。

「その通り、持ち手を盗んだのは私だ。当時は戦の前日、お守りとして小槌のパーツを持ち去った…。しかし、結果として持ち手はここへ戻ってきた」

「もうダメかと思って、寿命が10年は縮んだぞ…」

マミゾウが額の汗をぬぐいながらそう言った。

「これも運命というべきなのかしら…。かつて持ち去られたパーツを依代として正邪は新子に運ばれ、依代となっていたパーツも再び小槌と合体して元通りとなった…」

「私も、これは予想外だった。何せすっかり忘れていた…あの木片が、自分が持ち去ったパーツだったとは…今思い出したよ」

「まあ、何はともあれ…これで打ち出の小槌は手に入れた!!」

百数十年ぶりに元の姿を取り戻した打ち出の小槌が、新レジスタンスの手に収まった。これがあれば、マガノ国へ連れ去られた皆を救う

事が出来る！」

「何て言おうかとずっと考えていましたが…これで私の立場も守られたというものです。それは貴方達に貸し与えましょう。ただし、必ず目的を達成し、生きて小槌をここへ還しに来ること。いいですね？」

「おう！」

さどりの言葉に対し、新レジスタンスの四人は大きく頷いた。

「さて…小槌はこれでOK。ですが、マガノ国へ行くには、まだ準備は必要なのです」

「まだ何かあるってのか？」

「ええ。この新都の隣に住む、とっても関わりたくない連中とも、我々は話を付けなければならぬのですよ」

「どれぐらいかかるんだ？」

「短くて数日ってところですかね。どうぞそれまで、この新都をゆっくり満喫していただくさいな」

第10話 「迫りくる悪意」

ついにマガノ国の支配から解放された幻想郷。しかし、再び魔の手が忍び寄るのも時間の問題だ。

本居新子、茨木華扇、そしてニツ岩マミゾウの三人は、マガノ国に囚われた人間と妖怪を救い出すため、新たなる旅へと出るのだった。地底の旧都、地霊殿にて、打ち出の小槌を手に入れることに成功した新子たち。

しかし、一方そのころ、人間の里では…。

第10話 「迫りくる悪意」

新子たちが新都に滞在している頃、遠く離れた人間の里では。新子らが旅に出てから、実に4日が経過していた。当然、いつも旅に出るのは華扇だけだったのに今回は新子も同行していることは勘の良い里の住人にばれてしまったのだが、知り合いの河童たちの宴会に招待されたただけだ、と言い張って何とか誤魔化している。

「ふう」

昼下がりの午後。昼の飯時にやって来た客の皿などを片付けているツムグ。基本的に客が多く訪れるのは昼と晩飯時だけで、それ以外の時間はほとんどガラガラなのでゆっくりする時間もとれる。

「こんにちわ」

ツムグが皿を運んでいる途中、店のベルが鳴った。振り向くと、そこには小柄な少女が立っていた。片目は濁り、その周囲は痛々しい火傷の跡が残っている。

「今日も来たのか、稗田さん」

彼女は、稗田阿富。

「いいじゃないの、別に。私は本居さんの家に住まわせてもらっているのよ。毎日ご飯を御馳走してもらうのは悪いわ」

「そんな見た目して40越えてんだろ？無理するなって」

「やかましいわ。いつものちようだい」

「へいへい」

その時、もう一度店のベルが鳴った。店へ入って来たのは、青い毛糸の帽子を被った青年だった。ブカブカのズボン、そして銀色のネックレスといい、身なりだけだとかかなりガラの悪い印象を受ける。

「すまない、遅れてしまった」

「いいのよ」

「アンタもいつものか？」

「ああ、頼むよツムグ」

彼は、“ゆうろう 迪郎” という名前で、20年近くも阿富の助手として彼女を支えてきた。身なりこそ悪いが、その性格は誠実であった。

迪郎は阿富を母親のように慕い、阿富もまた迪郎を実の息子のように可愛がり、互いに信頼し合っていた。

「…新子たち、上手くやってるだろうか」

ツムグがふと口にした。

「大丈夫じゃないかしら？記憶によれば、地底には過去に何度も人間が入りしているわ。当時のその意識を持った妖怪が居れば、きっと最悪の事態は免れていると思うけど…」

「だどいいがな」

「…あつー！」

その時、阿富が声を上げた。

「財布を置いてきてしまったわ…。悪いけど迪郎、取って来てくれる？」

「えっ、俺がか？」

「そうだぜ、それぐらい自分で取り行って来いよ」

「こう見えて40越えてるから無理はできないわ」

「はいはい、取ってくるよ」

迪郎は席を立ち、一旦食堂から出ていった。

何分か歩き、阿富と迪郎が世話になっている鈴奈庵の場所までたど

り着いた。

財布を持つて戻る頃には、もう料理が運ばれてしまっているだろうか。だとしたら、冷めたものを食うのはちよつと嫌だな。取ってきたら、走つて戻ろう。

そんな事を考えながら、裏手の玄関口から中に入った。台所の机の横を通つて、阿富と迪郎が普段生活している部屋へ向かう。部屋に入り、ざつと辺りを見渡す。すると…あつた！机の下に阿富の財布が置かれていた。

迪郎はそれを手に取つてポケットに入れると、足早に部屋を出た。

「そうだ、本居さんに何か言つて行こう」

そう呟きながら、迪郎は台所から鈴奈庵の店の方へと繋がる廊下へ行こうと、机を回る。その時、迪郎は異変に気が付いた。

さつきは急いでいたので気付かなかつたが、机の上には何かのどんぶりが置きっぱなしだった。それも、半分くらい食べかけのまま、箸もほつぽりだして放置されている。一本は床に落ちていた。はて、あの本居さんはこんなだらしない人ではなかつたはずだが…。

一歩足を踏み出した瞬間、足が何か硬い物に触れた。何かと思つて下を見ると、信じられない光景がそこにはあつた。

「こ、これは…！も、本居さん！」

迪郎は大声で新子の母親を呼んだ。すると、すぐに母親は飛んできた。

「迪郎さん？どうしたつていうの？」

「ちよつと財布を忘れてしまったので取りに来たのですが…これは一体?!」

迪郎が指差す先を見て、母親もあつと息を呑んだ。

そこには、一人の若い男が胸を押さえて横たわっていた。靴を履いたまま、口の周りにぐ飯粒をつけ、いかにも悶えてましたと言う風だ。白目をむいたその顔は、苦しみに歪んでいる。

「…死んでる」

迪郎はその男の脈を調べながらそう言った。

時間は、1時間ほど前にさかのぼる。昼時、ツムグの食堂が混む時間帯の頃だった。新子の母親から出前を頼まれたツムグは、自転車で鈴奈庵へと運んでいた。

「ありがとうね」

「いえいえ、毎度つすよ」

ツムグは新子の母親に出前を渡すと、店の方も忙しいからと言って自転車を走らせた。それを見た新子の母親が自宅に入り、机の上に出前のどんぶりを置いた。

「まだ仕事があるから…終わってからゆつくり食べようかしら」

そう言つて、台所から鈴奈庵の店の方へと歩いていった。

時を同じくして、店の外では。物陰に隠れた不審な男は、ツムグが自転車で走り去るのを見て、にやりと笑みをこぼした。この男、最近民家に忍び込み食べ物や金品を盗んで回っている窃盗犯だった。色々な家をターゲットにしてきた。そして今回、この本居家に目を付けたのだ。

「この鈴奈庵、前から狙つてたんだ…。あの本居新子は留守で居ねえ…今しかチャンスはない…。キシキシ…」

壁の上の方に付いている窓は、換気の為に開けられていた。そこから目を覗かせ、中を見渡す。すると、新子の母親が店の方へ移動していくのが見えた。しめた、と言わんばかりに壁をよじ登り、大人一人がギリギリ通れそうな大きさの窓から侵入した。

「さて、この貸本屋はかなり儲かつてるはずだ…何かスゲエ宝石とかあつても不思議じゃあねえ」

男は、棚などを片っ端から開け、高価そうなもの、もしくは金庫でもないかと漁り始めた。しかし、何もないと分かると、小さく舌打ちをした。

「何にもねえじゃねえか…！俺の見立ては間違いだつたか？」

男が引き出しを開けようとしたとき、丁度ツムグが持ってきた出前のどんぶりが目に入った。

グウと腹の虫が鳴った。そういえば、少し腹も減ってきた。よし、先にこれをちようだいするでしょう。この程度の量、すぐに食べられ

る。腹が減っては戦もできぬというしな！

そう思いながら、男は置かれていた箸を手に取り、なるべく音を立てないように、すばやくどんぶりをかきこんだ。

その時だった。男の体に異変が走る。胸が苦しい!!男は箸を机の上に置き捨て、胸と喉を押さえた。胸がぎゅうぎゅうと締め付けられるように痛み、喉も焼けるように熱い。それに、腹も痛い:!!

「ハア…だ、誰…か…」

助けを求めろが、声も掠れて出ない。ジタバタと暴れまわり、足が机に当たった。カラン、と箸が机の上を転がり、床に落ちるころには、男は息絶えていた。

そして、少し時間が経ってから、ツムグは店へと戻り、そこへ阿富と迪郎がやってきて、今に至る。

「この男の人…盗みに入ったのかしら…?」

「最近、多発している空き巣の犯人なのだろうか…。まさかコイツ、これを食って死んだのか…?」

迪郎が半分食い散らかされたどんぶりを指差した。

「毒…とか?でも、一体誰が何のためにそんな事を…!ツムグ君がそんな事をするとは思えないし…」

「これは…確かめてみる必要があるそうだ」

場所は戻り、ツムグの食堂。ここには、里ではあまり見慣れない姿もあった。阿富の座っているテーブルに、バンが加わっていた。河童たちが着ているものと似たデザインの服に、長い金髪を後ろで一つにまとめている。

たまたま里に訪れたついでに、ここへ寄ったようだ。彼女が元憲兵団という事は、三年前、共に戦った仲間しか知らないため、自由に里で動くことができるらしい。

「明日は山で採れた猪の肉を持ってくるわ」

「おっ、猪か。うまいければ新しいメニューが作れそうだな」

そんな会話をしながら、お茶の入ったコップをカラカラと揺する。阿富は隣でお茶をすすりながら、ふと厨房の中の流し台の方に視線が

釘付けになっていた。

「ねえ、あのお婆さんは？」

阿富は、流し台の前で割烹着を着て、皿洗いを黙々と続けている老婆の背中を指差しながら言った。

「ああ…テルミさんか。あの婆さんがどうしてもここで働かせてくれって言うてきたから、今日から皿洗いをさせてるんだ」

と、ツムグ。

しかし、阿富は不思議に思った。これだけ、あの老婆について話をしても、彼女自身はこちらに気付く素振りさえ見せない。それほど仕事に熱中しているのだろうか。

試しに咳払いをしても、反応を示さない。その時、老婆は洗い終わった皿を運ぼうと、こちらに体を向けた。腰が曲がって背は低く、高い鼻がくつついた顔はしわくちやだった。

「あっ!!」

だが、阿富があつと声を上げた。あの、人当たりの良さそうな眉毛と口元を忘れるはずがない。

「テルミ！」

阿富が席から立ち上がりながら、婆さんの名前を呼ぶ。しかし、テルミという老婆はこちらに見向きもせず、黙々と皿洗いをしている。

「あれ…？」

「あ、その人は…」

ツムグが何か言おうとするのを無視して、阿富は駆け出し、カウンターのの上に身を乗り出した。それによく気付いたテルミが阿富に顔を向ける。老婆のしわくちやの顔、眼が驚きに見開かれる。引き結んでいた口元がパツと上がり、阿富の顔に手を触れる。

「貴方は…もしや稗田阿富さんでは!？」

「やつぱりそうなのね、テルミ！」

「どんなに傷が有ろうとも、変わらない貴方の顔を忘れるはずはありません」

「でも貴方、自分の果樹園はどうしたの？主人は？」

そう問いかける阿富の顔を見ながら、テルミは眉間にしわを寄せ、

申し訳なきように首を横に振った。

「すみません、稗田さん…。貴方は何か喋っているのは分かるのですが、生憎、私は耳が聞こえなくなっているのです」

阿富は胸が痛んだ。さつきからこちらの話を全く聞いていなかったのも、耳が聞こえないからだだったのだ。少なくとも阿富が地下通路で暮らし始める時まで、テルミは里の果樹園を夫と夫婦で経営していた。

テルミは、わきに置いてあった分厚いメモ帳を阿富に手渡した。

「悪いけど、これに書いてもらつていいですかね？」

阿富は、一緒に渡された鉛筆でさらさらと文字を書いた。

“果樹園はどうしたの？何故耳が聞こえない？”

それを見てから、テルミは口を開いた。

「…果樹園は3年ほど前に、マガノ憲兵団に乗っ取られました。私とお爺さんは工場で働かされ、丁度先週くらいにお爺さんは亡くなりました。あてが無くなった私は、ここで働かせていただいているのです。耳が聞こえないのは…そうですねえ、工場に居た時、動きがトロイからといって何度も殴られた所為、ですかね…」

それを聞いて、阿富は胸が痛む思いをした。テルミの手を取り、優しく握る。

「こつちに来て、少し話をしましょう？」

“こつちに来て、少し話をしましょう？”

「…すみません、今残っている分で最後ですので、これが終わってからにします」

“わかった”

そんなやり取りを終えた後、阿富は席に戻った。

「あの婆さんがあの果樹園の人だったとは驚いたぜ。果樹園の事は知ってたが、経営してる人までは知らなかった」

その時、店の戸が勢いよく開いた。そこには、息を切らして戻ってきた迪郎と、新子の母親が立っていた。

「あら、遅かったじゃない。財布はどこにあった？」

「それなら、机の下に…」

そう言いながら、迪郎は慎重に店内を見渡す。見知らぬ女が加わっている以外は、やはり特におかしいところはない。

「あれ、新子のお母さん…さつき出前を届けたはずじゃあ…」

「いや、それが、ね…ちよつと…」

迪郎は、今度は厨房に目をやった。丁度、ツムグの父親が皿に料理を盛っている。途中で、父親が鍋の方へと体を向けた。その瞬間、迪郎は驚くべき光景を見てしまった。

皿洗いをしていた老婆、テルミが、その老いた見た目からは信じられないように素早い動きで、ポケットから何かのチューブのような物を取り出し、中身を料理に垂らした。

「おーい、ツムグ！運んでくれー！」

「やつとできたのか」

ツムグが料理を運ぼうと立ち上がる。料理が机まで運ばれ、並べられる。

「もうお腹ペコペコだわ。早速いただくとするわ」

阿富が割り箸を割り、いよいよその料理に箸をつけようとする。

「やめろ!!それを食べるな!!」

迪郎は思い切って叫んでいた。その場の全員が、頭の上にハテナマークを浮かべながら、迪郎に視線を向ける。テルミが青ざめた顔で慌てて厨房から飛び出し、新子の母親の顔を見て、しわくちやの顔が引きつっていく。

「どうしたの?」

「そうだ、アンタが誰だか知らないが…何のつもりかしら!?!」

バンに詰め寄せられ、迪郎は一步たじろいだ。

「それを食べてはいけません」

「だから、どういう事なんだ?」

「俺が説明する」

迪郎はバンから離れ、そこで話し始める。

「ツムグ、君はさつき鈴奈庵へ出前を届けたな?」

「あ、ああ…1時間くらい前だ」

「君が届けた後、本居さんは今の仕事が片付いてから食べようと思っ

て、台所に出前を置いたままだった。そこで、最近多発していた空き巣の犯人が鈴奈庵へと忍び込んだ。きっと腹が減っていたんだろう、置かれていた出前を食べた空き巣犯は、死んでしまった。毒か何かが入っていたんだ。そして俺は見た…さつきその皿洗いの老婆が、その料理に何かを垂らしていた！」

「な…婆さんが…！」

「さつき、あの老婆は俺と一緒に来た本居さんを見て血相を変えていた…当然だ、出前に毒を混入させ、殺したつもりだったのに、それが別の奴に食べられたおかげで死ななかったんだからな！」

「だとしても、何が目的で…」

テルミがガタン、と音を立てて床にしゃがみ込む。今度は、全員の視線がテルミに向けられた。

「…くくく…本居、お前を殺し損ねるとはな…。やはりこのような老婆ではなく、別の者にやらせるべきだった」

テルミの口から、彼女のものとは思えない、低い声が響いた。その目の瞳の奥に、何か別の邪悪な者が渦巻いているようにも見える。

「シンスケも本居新子の暗殺に失敗し、マイエも返り討ちにあった。今度こそはこの老婆を使ったが、今度も失敗に終わった…」

「シンスケにマイエと言やあ…新子を殺そうとした、マガノ国と繋がっていたスパイの連中…！」

「テルミ…貴方は何が目的なの？」

阿富がそう問う。

「決まってる、本居新子と、その周辺の者の抹殺だ。今回、母親の殺しは失敗したが、一つだけ分かったことが有る。今、本居新子は人間の里に居ない!!どこか、茨木華扇と共に再び旅に出ているな!？」

「な…！」

「もうこのことはマガノ国へ伝わっている…。何が目的かは知らないが、対策を練られるのも時間の問題…くくくツ…」

そう言うと、テルミはポケットから透明なチューブを取り出した。中には、毒々しい黄色をした液体が入っている。そのチューブの蓋を開け、中身を一気に口にいれ、そして飲み込んだ。

「『転換計画』。これが禍王様の…新たなる計画、なのだ。人を意のままに操る事が出来る…」

テルミは目を見開き、腹を押さえながら床に倒れ込む。

「もうじき、禍の支配するときに再びやって来る…。転換計画が実用に移されれば、この幻想郷は終わりだ。その時まで、せいぜい怯えながら暮らすがいい…」

胸元をかきむしるように暴れた後、テルミは仰向けに転がった。その顔は白目をむき、苦しみに歪んでいる。

「テルミ…」

耳や口、鼻から、ねっとりとした黒い煙のようなものが立ち込める。重たい煙は床を這うように広がり、やがて一か所に纏まり、虫のように動き回る紅い目玉になった。

「何だこの虫は？」

バンが足で虫を踏みつぶす。上げた靴と床には、黒いシミが残っているだけだ。

「分かったわ…」

阿富が呟いた。

「この虫は、きつとマガノ国で作られた。人の中に入り込んで、その人を操ることができるのよ」

「だが、未完成なんだ」

ツムグが繋ぐ。

「シンスケは工場での過酷な労働によって足を悪くしたと言っていた。マイエは、ある日突然口がきけなくなっただけという。その婆さんの言う通り、二人も敵に操られていたとしたら…きつとあの虫はまだ未完成、調整中なんだ。だから操る代わりに、体のどこかを壊してしまおう。婆さんは耳、シンスケは足、マイエは口。三人は禍王の新たな研究の実験台に過ぎなかったってことさ」

三年前、里の中心に存在した例の工場では、きつとそのころから転換計画とやらの研究はされていたんだ。そして、そこで働いていた人たちが実験台にされた。虫を体内に入れられ、操られた人間は、しばらく工場で働きながら、普通に、今までと何ら変わりなく生活する。

そして工場が壊され、解放されてからは、体に障害を持ってしまったものの、かつての家族や兄弟、友人と暮らす。しかし、その頭の中には禍王と繋がった虫を飼い、家族が寝静まったころ、ポケットに詰め込まれた目玉の虫を家族の枕元へと放つのだ…。

そうして、禍王の操り人形はものの数日にして膨大な人数までに増える。そうならば…

「胸糞の悪い話だ、あのクソツタレもやってくれるね」

バンが怒りに顔をしかめながら言った。阿富は倒れて動けなくなったテルミに近づき、その身体を抱き上げようとした。

その時だった。テルミのしわくちなな手が、阿富の首に触れた。阿富がびくっとして振り向き、ツムグや迪郎たちが構えるが、それは必要ないとすぐにわかった。

テルミの顔は苦しみから解放され、眼には以前のような邪悪な影は無かった。

「テルミ…」

「稗田さん…私は今まで、悪い夢を見ていたようです…」

「ええ、そうね…悪い夢だったわ…。でも、もう大丈夫…」

阿富のその言葉を聞くと、テルミはもう一度ガクリと腕を垂れた。テルミは目を閉じ、安らかな顔で、息絶えていた。

「…転換計画、ね。覚えておきましょう」

「今から、昔からの仲間だけを信用した方がいいかもな」

「そうですね…。新子が目的を果たし、帰ってくるまで…」

明かされた、禍王による新たな策、“転換計画”は既に実験も終わり…いよいよ実用へと至ろうとしていた。

この悪夢がいずれ新レジスタンスにも襲い掛かるとは、彼女たちは考えてもいなかったのである。

第11話 「不死の少女」

ついにマガノ国の支配から解放された幻想郷。しかし、再び魔の手が忍び寄るのも時間の問題だ。

本居新子、茨木華扇、そして二ツ岩マミゾウの三人は、マガノ国に囚われた人間と妖怪を救い出すため、新たなる旅へと出るのだった。地底の旧都、地霊殿にて、打ち出の小槌を手に入れることに成功した新子たち。

マガノ国へと向かうまでの数日間、彼女らは新都で過ごすのだった。

第11話 「不死の少女」

場所は戻り、地底の新都。昨日、新子たちは古明地さとりから打ち出の小槌を貸りることができた。今は、まだマガノ国へ行くには旧都の隣に住む、さとり曰く“とつても関わりたくない連中”とも話を付ければならないらしい。それには少なくとも4日程はかかるそうで、それまではこの旧都に滞在することになる。

「腹も減ったし、道に迷ったなあ」

旧都の繁華街の裏路地で、新子は路頭に迷っていた。旧都には、勇刃の案内で少ししか歩いたことが無い。それに、通りから少し離れると急に道が入り組むようになり、自分がどこから歩いてきたのか分からなくなる。

「生憎、私にもどう行けば通りに出られるのか分からない…」

新子が人目のつかないところに立ち入ったとたん、背後から正邪が顔を出した。

「お前、元はここに居たんだろ？」

「記憶も曖昧、それに…私が居た頃は旧都。今は新都だ、町並みも大きく変わってしまったている」

「ていうか邪魔くさいんだよ！打ち出の小槌は宿で華扇が持っている筈だろ、そこに居なくていいのかよ？」

「私は小槌の持ち手部分だった木片を依代としていた。しかし、木片が小槌と再び融合したことによって、木片は膨大な妖力で満たされた。その妖力のおかげで、私はある程度離れていても活動できるようになったのだ」

「へいへいそうかい…つて」

新子はふと振り向くと、建物の影に複数の人影を見た。どれもじつと新子を睨み付けている。口の端から牙が見えていたり、額から短い角が生えていたりしている、変な集団だった。他にも、尖った長い耳を持った奴らも居る。

「こりゃ、ちと運動しなくちゃいけないかな」

新子がそう言うと、集団はのそりと立ち上がり、新子を囲い込んだ。

「お前が…地上から来たっていう人間かよ…」

「おう、それがどうした？」

新都のゴロツキの妖怪共か？

「せっかくマガノ国が日常から離れつつあったのによオ…お前のせいでまた俺達が危険にさらされるじゃねえか！」

「そうかい、このアタシに喧嘩売った今の方が危険だと思っけどな？」

…よし、能力は発動してる。

新子はこのゴロツキの妖怪たちの悪意を感じて、体に力が湧いてくるのを感じていた。地上で破魔師シャムや星熊勇刃と戦った時と比べれば微々たるものだが、充分だ。

新子が足を踏み出そうとした瞬間、背後から別の足音を感じた。ゴイツ等の仲間と思い、眼だけを後ろへ向ける。

その時だった。後ろに居た影がさつと自分の横から飛び出し、ゴロツキの一人の顔面に膝蹴りを浴びせた。ゴロツキは鼻血を出しながら後ろへ倒れ込む。

「な…テメエは…！」

それは、自分より少し年下くらいの見た目の少女だった。白いカットシャツを着て、赤いズボンをサスペンダーのようなもので吊っている。髪は真っ白く、腰ぐらいの位置まで長い。紅い瞳に映る光が動きに合わせて、一筋の炎のように尾を引いていた。

少女はズボンのポケットに手を入れたまま、ストーンと地面に着地する。

「アンタら、もう下がちなよ」

「クソ…お前は…藤原妹紅!」

どうやら、この少女は藤原妹紅というらしい。

ゴロツキは手の爪を鋭く伸ばし、それを素早く突き出した。妹紅という少女はにやりと笑い、余裕あり気な態度を取っているが、それを見た新子の体はすぐに動いた。

ザク

紙一重のところ、新子の手の平が妹紅の顔の前に広げられた。直後、肉を破る音と共に、ナイフのようにとがった爪が飛び出してきた。そう、爪を自らの手に貫通させ、妹紅に向かうのを防いだのだ。

「な…アンタ、何して…」

新子はそのまま敵の手を掴み、上体を後ろへ逸らす。

「オラア!!」

そして、一気に頭を振り下ろし、ゴロツキに強烈な頭突きをかまして見せた。石と石をぶつけたような音が周囲に響き渡り、ゴロツキは頭を押さえたままよろよろと後ずさった。

「くっ…引き上げだ!」

一人がそう叫ぶと、ゴロツキたちは四方八方へ逃げていった。

「いてて…」

「ああ、アンタ何してるんだ!」

妹紅がすかさず新子に駆け寄り、血の滴る手の具合を見ようとす
る。

「アンタこそ邪魔するなよなあ…」

「アンタが居なくても自分一人でぶっ飛ばせたのに!!」

顔を見合わせた二人は、お互いに同じことを怒鳴っていた。

そこで改めて、新子は妹紅の顔をまじまじと見つめる。整った色白な顔に、頑固そうに引き結ばれた唇、切れ長な目、釣り上がった短い眉毛…。

「アタシに似てないか?」

心なしか、妹紅の顔は鏡で見る自分の顔と似ているような気がした。

「お前こそ、私に似てないか？」

「私の名前は藤原妹紅っていうんだ」

妹紅は自分のシャツを千切って作った包帯で新子の手の傷を手当てしている。

「サンキュ。くっそ…後で華扇のお説教タイムだなこれは…」

「全く、お前さんがフラフラと路地裏へ入っていくのを見て後をつけていたからよかったものの…そうじゃなければただじゃ済んでなかったぞ」

「だから、アタシ一人でも十分だつての！ホラ、見なよ」

新子は自分の手の甲を指差した。包帯を巻いたばかりだというのに、大分血が染みている。しかし、妹紅はそれを見て目を見張った。手を刃物が貫通したというのに、血が染みているだけだったのだ。普通ならば、包帯の布を超えてドバドバ垂れて流れてもおかしくないのに。

「これは…まさか、お前さんも？」

「アタシのは、説明するとな…悪い奴と対峙すると、自分の能力が上がるんだ。治癒力もな」

「…なるほど、なかなか面白い力だ」

妹紅は続けた。

「八坂神奈子から聞いたよ、地上から来た御一行様つてアンタの事だろ？お近づきの印しだ、何か飯でも奢ってやるよ、来な」

入り組んだ路地裏から抜けた妹紅と新子は、スタスタと通りを歩いた。

しかし、ここは凄い場所だな。アタシらが泊まっている場所とは真反対の地域で、同じ新都でもあちらの方とは随分変わっている。こりや迷子にもなるわけだ。

ゴウゴウと黒煙を吐き出す、ガシヤガシヤした巨大な建物。鉄骨と

パイプだけで構成されているのかと思ってしまうような、近代的な景色が広がる。こんなところでちよつと大きい妖怪とかが暴れれば、一回新都が終わるのは簡単な事だろう。

「ここね」

妹紅に案内され、新子は一軒のこじんまりとした店に入った。ここが妹紅のおススメの店らしい。

入ったとたん、香ばしい匂いが鼻いっぱい広がる。

「焼肉さ。好きなだけ食べな」

新子は改めて空腹だったことを思い出す。店員に案内され、二人は席に着く。妹紅は渡された大きなメニュー表をパラパラとめくり、通りかかった店員に注文を言った。

妹紅が注文を終える。出された水を少し飲むと、新子も店内を見渡す余裕ができた。店はちよつと洋風で、天井には煙を吸い上げる大きな鉄管が何本も下がっている。他の席に座っているのは、当たり前だが妖怪ばかり。心なしか新子と妹紅が座っている席をチラチラ見ているような気がする。

そんな事を考えている間に、店員が肉を運んできた。新子は箸を取り、机に置かれた肉を見る。

「あれ？」

生肉じゃないか。どうということだろう？

「おいおい、何の為にここに網があると思ってるんだよ、自分で焼いて食べるのさ」

妹紅が小さめのトングで肉を取り、赤熱した木炭で熱せられた金網の上に置いた。

「ほう」

「な？」

なるほど、こういうことだったのか。焼肉と言えば、あらかじめ焼かれた生姜焼きみたいなものが出て来るのかと思ったが、これはいいな。

ジュウウウウ… ジュウウウウ…

「よく食べるなあ」

ガツガツと勢いよく肉を食べる新子を見て、妹紅が呟いた。

「こっっちゃ腹減ってるんだ」

「人間の里から来たんだろ？今の里にはこういうのは無いのか？」

「自分で焼いて食べるってのは無いな」

うん、コイツは中々良い肉だ。美味しい。いかにも肉って肉だ。あんまり料理もできないし食べ物についても詳しくないが、きつと上等な肉だろう。

「そういえば、さっきの連中も妖怪なのか？ていうかアンタは？」

新子が妹紅にそう聞いた。

「“ゴブリン”とか、“エルフ”って知ってるか？」

「ん、外来本でちよこつと見たことが有るぞ」

「妖怪とはちよつと違うかもしれないが、まあ似たようなモンだろう。私たちが地底へ引越したときと同じ時期に幻想郷に出没していてな、一緒になって来たって訳だ」

「へえ」

「言った通り、奴らは妖怪とは違う、西洋のモンスターだ。日本の妖怪とはウマが合わない…だからああやって新都のルールから外れていく。奴らが恐れるのは、勇刃とか神奈子とかと…マガノ国だけだな」

「そうなのか」
「そうなんだ。改めて自己紹介するよ…私は藤原妹紅。新都で暮らしているが、人間だよ」

「えっ、人間だったのか？テツキリ、アンタも妖怪かと…」

「まあ、あながち間違いでもないかな、半分は妖怪染みてるって自分でも思う。何せ、これだからさ」

妹紅は、おもむろにナイフを取り、自らの頬を斬りつけた。

「お、おいおい…」

血が、ツーンと垂れるが、一瞬にして傷口はふさがり、何事もなかったかのように元に戻った。

「不死身なんだ。アンタよりも、ずっと傷の治りも早いよ。それに、こんな事も出来る」

妹紅は片手の上に、ボツと炎を作り出す。

「凄いな…」

「私は、正直幻想郷で暮らすのは飽きてたんだ。そりゃあ妖怪だったら何百年居たって平気かもしれないけど、私の心は人間さ、流石に飽きて来る。だから地底へ来たんだ」

「でも、今まで新都の人間は妹紅一人だったんだろ？色々大丈夫だったのか？」

「元から妖怪は怖くないよ。それに、ここには仙人とか、人間の味方だった奴らも居るから平気さ」

「…そう言えば、アタシの名前言ってなかったな。本居新子ってんだ」「新子、か。お前とは気が合いそうだ」

「アタシもそう思ってた」

「よし、私もどんどん食べちゃおっかなー！ビールも頼んじやおーつと!!」

「ビ、ビール!?よく知らないが、アタシもそれ!」

旧都には焼肉が良く似合うという事が今日よくわかったよ。でも、早くご飯来ないかなあ。こう、肉ばかりだと、米とか野菜とかが恋しくなってくる。

「あちゃあ、ネギを焦がしちゃった。どうも野菜を焼くのは苦手なんだな」

妹紅は少し焦げたネギを口に押し込む。

「お待ちどうさま」

と、その時、店員が次の肉とご飯を運んできた。

「お…きたきた来ましたよ」

タレに漬けた肉をご飯の上に乗せ、一緒に食べる。くーっ、これですよ、これ。

まるでアタシの体は製鉄所。胃はその溶鉱炉のようだ。

二人はどんどんと注文した肉を平らげ、皿が山のように積み重ねられていく。それを見かねた店員が、2〜3人がかりで皿を厨房の方へ下げていく。

「このハラミっていうのも食べてみようかな」

網の上で焼き上がったハラミをお椀に乗せ、一気にかきこむ。そして、甘辛いタレで乾いた喉に丁度良くスツキリとビールが

通る。また少し肉を食べて、またビールを飲む。おお、これだな。

「うおオン、私はまるで人間火力発電所だ」

「あついな」

ようやく、一段落付いた。新子は箸をお椀の上に置いて、グイッとビールを飲む、最初はこれが酒か？と思ったが、飲んでみるとこれまた不思議と上手く感じる。このシユワシユワ感、何年も前、憲兵団が里で売っていたコーラって言う飲み物に似ているな。

「そういえば、今地上はどうなってるの？噂じゃあ、もう以前のように自然が元に戻ったそうじゃないか」

「確かに戻ったと言えば戻ったな。でも、またあと少し時間が必要かもな」

「そうか…。どうする？もうちょっと何かつまんでから帰ろうか？」

「そうしようかな」

「またお越しくださいませー」

二人は膨れた腹をさすりながら店を出た。

「いかん、いくらなんでも食い過ぎた」

妹紅が呟いた。

「でも美味かったぜ」

「…何日くらいここに居るんだ？」

「あと3日くらいじゃないか？そうだ、ところで、古明地さとりって奴が新都の隣に住む連中と話をつけるって言ってたがよ、どんな奴らなんだ？」

「酷く潔癖で、生きてるのか死んでるのか分からないような奴らさ。奴らと新都の連中はお互いに触れ合おうとしない。新都の端と奴らの街との間はわずからメートル、境には境界とかもない。だけどお互いに不可侵なのが暗黙の了解となってるのさ」

妹紅は地底の天上の岩壁を仰ぎ見ながらそう言った。その真紅の

瞳には、何かを懐かしむような色が込められていた。

「んで、あと3日…もしよければ私が他に美味しいところ連れてってやるよ」

「本当か!?じゃあその時は華扇とマミゾウも連れて行こう」

「おっ、いいねえ。大勢で行くのは私も初めてだよ」

この新都に滞在する間、新たに気を許せる知り合いができた。藤原妹紅、彼女とはうまくやっていけそうだ、と新子は心の中で考えていた。

第12話 「freedom」 From Hell

1」

ある時、男は言った。

“俺を自由にしてくれないか？”

“占術を通じて世界の外側を見たんだ。そうしたら急に妖怪に管理された人間生活が惨めに見えてな。人間を辞めようと思ったんだよ”

さらにある時、別の男は言った。

“お前の自由を奪ってやろう”

“魔術を通じて世界の外側を見たんだ。そうしたら急に人間を管理する妖怪生活が羨ましく見えてな。人間を辞めようと思ったんだよ”

一方は自らの自由を求めて、もう一方は他者の自由を抓む事を目的とした。本を通じてあの世から戻ってこれることを知った二人は妖怪になる術を作り上げて、自ら命を絶った。いつか、妖怪として蘇れる日を待ち望んで。

妖怪になる術とは、回りくどい方法であった。彼が書いた易書は二つのパートに分かれていた。誰でも実践できる作者不明の占術と話術のパート、もう一つは稚拙で子供だましの戯言のパート。戯言の部分を切り捨てて、それ以外を自分が編み出した占術だとして人に見せびらかす奴が現れたとき、嫉妬の心によって彼は復活できるのだ。

しかし…。

己の自由を求めた男は、妖怪として世に放たれる一歩手前で退治されてしまった。復活の力ギを握っていた易書も燃やされてしまった。

だが、彼は非常に回りくどく、計算高かった。易書は一冊だけではない、二冊存在したのだ。あの世で、彼は二冊目の易書が人の手に渡るのをひたすらに待ち続けた。

そして、一度目の復活から100年ほどの時が経ったとき、ようやく二冊目の易書が人目に付いた。易書を発見したのは、とある邪悪な男だった。男は野望を持っていた。

「俺は魔術師だ。しかし、俺の魔術を人間は決して理解せぬ。そんな愚かな人間どもを、占いで弄んでやろうか」

男は魔術を嗜んでいた。男自身こそ、心は邪悪であったが、彼の使う魔術は幼稚で子供だましな手品まがいのものばかりだった。

俺を馬鹿にする人間どもにギャフンと言わせてやる。その一心で、男は易書を読み、そこに書かれていた占術を自らのものとして他人に見せるようになった。

ある時だった。男の目の前に、妖が現れた。妖は言った。

「お前が俺の書いた仙術を自分のモノとしたために、俺は再び冥界より復活した」

男はひどく驚いた。しかし、驚いただけだったのだ。元より魔術を嗜むこの男は、目の前に妖が現れようとも余裕を保っていた。この妖が大した力も持たない“人妖”であると見抜いていたからだ。

「占術を通じて世界の外側を見たんだ。そうしたら急に妖怪に管理された人間生活が惨めに見えてな。人間を辞めようと思ったんだよ」

男は妖が去り際に言ったその言葉を頼りに、自分の魔術を磨き、やがて自分も同じ手順で妖怪になれる術を作り上げた。そして、男もまた、自らの手で命を絶つのだった…。

新子は部屋で暇をしていた。何も無い畳の上をゴロゴロと転がっても、ベッドの上に立ってみても、退屈はしのげない。マミゾウは早朝からフラフラと出かけ、華扇は勇刃と一緒にどこかへ行ってしまった。

10分ほどこうしていただろうか。重い腰を持ち上げると、新子は部屋を出た。

適当に暇をつぶそうと、旅館の前の通りを歩く。周りにはちらほらと妖怪が歩いており、他の宿屋や民家が立ち並んでいる。と、その時、ふと紫色の小さなテントが目に入った。何かやっているのだろうか。そう思い、横目でテントを見ながら前を通ろうとする。

テントの中には、小さな机が置いてあった。机の上には金色の杯と水晶玉が置かれており、杯の中には長い木の棒が何本か入っている。そして、机に奥には、一人の妖怪が座っていた。

袴の上に大きな襟を立てた外套を羽織り、頭には宗匠頭巾。肌は薄い青色か灰色で、目は落ちくぼんで真つ黒、耳がとがっている。それだけで、コイツは妖怪で、ここで占いをしている占い師だと分かった。「やあ、そこのお嬢さん。時間は取らないよ、どこかに行くというなら運勢を占ってあげようかね？」

妖怪はそう新子に呼びかけた。新子は怪しいと思いつつも、踏みとどまってしまった。

「君は人間かな？それに初めてだろう？初回の客からは代金は取らないようにしてるんだ、ささ、どうかな？」

「信ぴょう性はあるんだろうなあ？」

新子はズカズカとテントに歩み寄り、占い師に顔を近づけて言った。

「もちろん」

占い師は牙の覗く口を耳のあたりまで裂かせて、不敵な笑みを作るとそう言った。

まあ、タダっていうし、どうせ暇だったから別にいいか…。そう思いながら、机の前に立った。

「よし…名前は何？」

「新子」

「新子、ね」

「ていうかお前は何者だ」

「俺かい？俺は…そうだな、名前は無いが、易者…とでも呼んでもらおうか」

「易者…」

「いつの運勢を占う？ 今日か？ 明日か？」

「今日で」

易者は水晶玉の上に手をかざし始める。すると、水晶玉が赤、青、黄色と様々な色に変化し始める。そして金色の杯に入っていた棒を取り出し、自分の周囲に並べるように浮かばせる。これには、胡散臭いと思つて結構呑気してた新子も、れっきとした占術であると分かつた。

さらに、易者の周りを回転するように浮かんでいた木の棒たちが、突然動きを止めた。占い師の目の前で止まった一本の棒は、淡い光を放っていた。それとつかみ取ると、棒をまじまじと見つめる。そして、目にもとまらぬスピードで紙に何かを書き記し始めた。

「ふむ…」

その紙を見て、顎に手を当てる。

「…これから今日明日の間は運のめぐりが最悪となるだろう。想像もしていないことが起こるかもしれないので用心した方がいいぞ」

「そ、そうなのか？」

どうやら運勢は最悪だったらしい。軽い気持ちで占ってもらったが、これではやらなければよかったと心底思ってしまう。

「ま、当たるも八卦、当たらぬも八卦…だがね。信じるか信じないかは君次第だ」

「そうだよな、所詮占いだし…」

「居たぞー！」

その時だった。新子の背後から、荒々しい怒号が聞こえた。新子が振り向くと、そこには顔にガーゼや絆創膏を貼った数人の集団が立ちふさがっていた。

「テメエらは…」

昨日、裏路地で絡んできた、確か西洋のモンスターのごロツキ共。確か、エルフとかゴブリンって言ってたっけ？ 妹紅と一緒にのしてやったはずだが、懲りずにまたやってきた。

「今日は藤原妹紅は居ねえみたいだな」

「そうだが、昨日の仕返しをたつぷりとさせてもらおうじゃないか」

「な、なな何？どゆこと？」

易者は目を丸くしてキョロキョロとあたりを見渡している。今の状況が掴めていないらしい。

「アンタはそこに居ろ！コイツらはアタシがぶっ飛ばす！」

「言ってくれるな本居新子オ!!」

「え…？」

ちよつと待てよ…今、何て言った？本居新子…本居…なんだろう、記憶の底に押し込めた思い出が、こう…蘇ってくるような…。アツ!!
本居…鈴奈庵、鈴奈庵!!つてことは、この娘…まさか、まさかそんなそんな!!

「ヒツエエエエエ!!」

一人驚愕の渦に飲まれる易者をよそに、新子とゴロツキたちは喧嘩を繰り広げていく。新子は敵の腕を掴み、周りの連中と衝突させながら振り回していく。負けじとゴロツキたちも新子に飛びかかるが、首を掴まれ、次々と殴り倒される。

「コイツ、強い…!」

「だから言ったら、アタシ一人で十分だったってなア!!」

最後の一人の股間を蹴り上げ、さらに顔面にパンチをお見舞いしてやる。拳が深くめり込み、後ろへ倒れ、物凄い音と共に地面へと叩き伏せられた。

「けっ、雑魚共が…」

「っ、強い…」

その時、新子と易者の耳におかしな音が聞こえて来た。

ブオオオオン… ブオオオオン…

「…何の音だ？」

「あ！新子とやら、気を付けろ！」

「え？」

易者が新子の背後を指差す。だが、振り向く間もなく、新子の体はドンという大きなを立てながら空高く舞い上がった。新子を突き飛ばしたのは、2メートルほどの機械だった。黒いボディに、前後に付いた大きなタイヤ、上に乗る二人組。

「バ、バイクか…」

易者がテントの影に隠れながらそう呟く。

「ヒヤッハー！流石にこの一撃は効いたようだなあ！気を失ってやがるぜ」

今のゴロツキの仲間であろうエルフとゴブリンの二人組が、バイクで新子を轢き飛ばしたのだ。二人はバイクから降りると、倒れている他の仲間は無視して新子を担ぎ上げた。そしてそのまま再びバイクに乗り込み、通りの向こうへと走り去った。

「な、何だったんだ…」

「おい、何の騒ぎだ？」

易者の近くに現れたのは、豊聡耳神子の霊廟で暮らす亡霊、蘇我屠自古だった。

「あ、ああ…目つきの悪い人間がゴロツキに連れていかれてな…」

「何だって!?そいつは本居新子って奴か!？」

「そうだが…」

「どうしたのだ?二人とも」

その時、物部布都が団子の串を持ちながら歩いてきた。

「まずいことになったぞ、本居新子があの中に入れて誘拐された」

「なんと!!それではまず、華扇殿とマミゾウ殿に知らせなければ!」

布都は真つ先にその場を走り去った。

「お前も来い、目撃者だろ!」

「ちよ、えっ!？」

屠自古は易者の腕を掴み、布都を追いかけて行った。

新都極西街、通称“モンスターストリート”。新都の西部のさらに端っこにある、入り組んだ通りで、ここには多くのゴブリンやエルフのならず者が住むことから、モンスターストリートと呼ばれている。何も知らない者が入れれば迷ってしまうのは確実で、そうなればならず者の餌食になってしまう。たまに妹紅がフラフラと見張っているようだが、今日は居ないらしい…。

モンスターストリートの一角に、ある住宅があった。その庭に先

ほどのバイクが停められた。二人組のゴロツキはバイクから降り、気を失っている新子を担いで住宅へと入っていった。

「親分！連れてきましたぜ！」

「親分…一龍齋親分!!」

二人組がそう呼ぶと、スーツと部屋のふすまが開いた。ふすまの先は真っ暗で、何も見えない。しかし、暗闇の中に光る二つの白い目が、そこに何かが居ることを現していた。

「…誰？」

そう言いながら、光の主は部屋から現れた。肌は薄い灰色で、落ち窪んだ真っ黒な目には、点のように小さな白い瞳があるだけだ。口は裂けたように大きく、牙が口の端から覗いている。

「昨日の奴つす！あの妹紅と一緒に俺らボコしたっていう…」

「かかか、そうかそうか！」

現れたこの男は妖怪だった。太った巨体に、見たところ新子よりもずっと背も高い。

「おい、起きろ」

一龍齋と呼ばれた男は床に倒れる新子の肩を手で叩いた。すると新子はゆっくりと目を開け、男の顔を見た。

「大丈夫か？立てるのか？」

新子が慌てて立ち上がろうとすると、突然新子の後頭部に衝撃が走った。再び顔を床に押し付ける羽目になってしまう。

「ワシは立てるかって聞いたただけだぞ!!誰が立っていいって？」

「ぐっ…テメ…」

一龍齋が新子の頭を踏みつけたのだ。床に押し付け、グリグリと力を入れる。まださっきの痛みが残る新子は思うように抵抗できず、ただされるがままだった。

「お前の自由を奪ってやろう。魔術を通じて世界の外側を見たんだ。そうしたら急に人間を管理する妖怪生活が羨ましく見えてな。人間を辞めようと思ったんだよ」

「な、何を言ってやがる…ッ」

「ま、お前はいろいろと使えそうだ。しばらくは殺しはせんよ」

「何だ、二人とも居ないのか!？」

新子たちが泊まっている宿屋の部屋までたどり着いた屠自古、布都、そして易者。

「くそ…太子様と八坂も隣の都…勇刃も一緒にどっか行つた…」

「じゃがモタモタしてはおれんぞ。我々だけで新子を救いに行こうぞ」

バタバタと走っていく二人を黙って追いながら、易者は考えていた。

はあく、面倒なことに巻き込まれちゃつたなく。今日は俺の運勢も最悪だったようだな。ある意味で、俺の妖怪としての人生が始まった場所との因縁も続いていたようだし、これから行くのはあのゴロツキ共のアジトって訳か…。

「ここじゃな！極西部、“モンスターストリート”!!」

「なるほど、名前に違わない場所だな」

三人を出迎えたのは、どこからともなく現れたならず者の集団だった。ざつと100人くらいは居そうだな。手に武器を持っている者も多くいる。

「…当たるも八卦、当たらぬも八卦…あそこの路地に入ればおのずとあの娘のもとへたどり着けると出た」

手で占いの棒を広げた易者がそう呟いた。

「しかし…この数だ、あそこに入れるかが問題だな」

「やつちまええええええ！ヒヤツハアアアアア!!」

一斉に三人に向けて飛びかかろうとするゴロツキ集団。

「こうなれば仕方ない…我々が活路を開く！易者殿は先に！」

術を使い、エルフたちを弾き飛ばしながら布都がそう言った。

「お、俺がか!？」

「そうじゃ！お主ならば、占術で正しい道も導き出せるだろう！」

「むくくく、ならば仕方ない、俺が行こう！」

ハアアアア嫌だなあアアアアアアア!

「頼んだぞー！」

易者は布都と屠自古が開けた道を通り、自身の仙術を頼りに新子の場所を探した。時々火炎瓶や爆弾も投げ込まれ、そのたびにギリギリで回避しながら路地裏を駆け抜けていく。

爆発によつてモンスターストリートの建物にも火が燃え移り、どんな広がり、とんでもない騒ぎになろうとしていた。

「…当たるも八卦…、見えた！あの建物か！」

占術が示したのは、なんの変哲もないただの民家だった。しかし、庭に停められたバイク…間違いない、ここに新子は居る！

易者は走りながらその民家の敷地へ近づく。その瞬間、易者の肩に大きなナイフが突き刺さった。

「ぬぐ!!」

「ケケケ、誰だか知らんが、この家にや入らせねえ！」

「そうだけ、あの女は、俺達の一龍齋親分が新都を支配するのに必要なんぞでなア!!」

一龍齋…?どつかで聞いたことが有るような…?

易者が痛みにうずくまっている間に、さらに現れたゴロツキたちがざっと囲っていた。易者もさすがにヤバいと思い、再び仙術の道具に手を触れる。だがその時、一人が易者の顔を蹴りつけた。それを皮切りにゴロツキたちが易者を殴っては蹴り、痛めつけていく。

「ワシは、自由に楽しそうにしてる奴らが許せんのだ。よほど人間だった時に他人に恨みが有ったと見える」

「何言つてやがる…」

「草木から鼠の一匹まで、全てワシのものにしてやる。もうワシを蔑んだ愚かな他の妖怪共には自由すら与えん！そう思っていた時、お前が現れた。お前の能力は、ワシが全てを握りマガノ国をも退けるトリガーとなるやもしれん。どれ…」

一龍齋は壁に縄で磔にされた新子にゆっくりと近づいた。新子が着ていたシャツを掴み、一気に破り取る。

「テメー！何をする…うわあああああああ！」

「調べさせてもらおうよお…お前の体とその能力…」

新子の下着に手をかけ、もう片手の指を首には這わせ、ギリギリと締め付けていく。一龍齋の白く光る小さな瞳が輝きを増し、新子の目の色が薄くなっていく。

新子の意識も遠くなってきた。真つ暗な視界に、怪しく二つの光がぼうつと浮かんでいるだけだ。その光もやがて大きくなり、ぼやけて来る。だが、もう二つ、光が浮かんだぞ。近づいてくる…？

「ハア…ハア…」

「…ぬ？」

肩を触られた一龍齋が振り向くと、そこに居たのは、やせた顔の男だった。目や頭からは血が流れだし、帽子はボロボロに破れ、長い髪の毛が肩のあたりまで下がっている。

「あ！易者!!」

「何…？」

「なあおっさん…久々に見る人間だったんで、興奮したのかい？でもいけないねえ…その娘に何かあったら、俺が責められる。だから、大人しく去ってくれ、一龍齋」

「言うな、誰とも知らぬ男よ」

「俺は易者。昔、占術を通じて世界の外側を見たんだ。そうしたら急に妖怪に管理された人間生活が惨めに見えてな。人間を辞めようと思っただよ」

「奇遇だな。ワシも昔、魔術を通じて世界の外側を見たんだ。そうしたら急に人間を管理する妖怪生活が羨ましく見えてな。人間を辞めようと思っただよ」

「やっぱり。この一龍齋、200年前…俺が書いた二冊目の易書を使って俺を地獄から復活させたあの魔術師か！」

「あそこで復活してから俺は周りに流されてこの地底世界へとやって来たが…。まさかコイツも俺と同じ術を組んで人間を辞めていたとは…。」

「また会ったな」

「は？」

人間だったころの記憶は無くなっている。当然だ、ただ易書を読んで占術を見様見真似で覚えただけの奴が組んだ術、不完全に決まっている。俺は自由を求めて妖怪になった…それを忘れないように記憶も引き継げるようにしたが、コイツはそれをやっていない。きつと悪人だったのだろうな…その時の思想が色濃く反映されている。

「新子、俺が時間を稼ぐ。その隙に何とかして逃げるのだ」

「はっはあ…お前がこの一龍齋とやるというのか」

「あ、ああ…」

新子が縄を解こうと手を動かし始める。

しかし…その瞬間、易者は一龍齋が放ったパンチによって、一撃で叩き伏せられていた。

「が…こんなはずでは…」

「がはははは!!こんなヒョロ男がこの一龍齋に敵う訳が無かろう!」

大きな足で易者を踏みつける。

「易者!」

新子の呼びかけに答えようと易者が起き上がろうとするが、さらに腹を蹴られる。

「人間よ…コイツでは無理だ。こんな甘ちゃん野郎…妖怪モドキが。お仲間はこちらと選ぶべきだねえ」

まただ!何だよ、俺は自由になりたかっただけなのに…何でそんな事を言われなくちゃならないんだ。昔もそうだ、周りから外され、俺の意見など聞いてもらえずに…。妖怪になった直後だってそうだ…俺の話の真意も聞かず、博麗の巫女め、俺を殺してくれちゃって…

やはり俺は、妖怪になるべきでは無かつ…

「妖怪モドキだつて?だからいいんじゃないやねえか…」

「え…?」

「妖怪なのか人間なのかわかんねえ…どっちつかずの」訳の分からねえ」奴がいてもいいじゃないか…」

新子が一龍齋を睨みつけながらそう言った。

「人間が…」

一龍齋は未だ縛られている新子の元へと近寄り、その顔を殴りつけ

た。鼻血が飛び、床に垂れる。しかし、新子の目は俄然一龍齋を睨みつけたままだった。

それに怒りを覚えた一龍齋は、さらに何度も新子を殴り続ける。

俺は：まだ人間らしさを捨てきれていないらしい。人間を辞めて300年は経つというのに……。だが、俺に時間はまだまだある。これから強くなればいい：そうだ、もつと強くなれる！

ザク

「…ああん？」

一龍齋が自分の背中に違和感を感じて振り返ると、その背中に五本のナイフのようなものが刺さっていた。いや、それはナイフではない…

「テメエの爪か…！」

易者がナイフのように長く、鋭くなった爪で一龍齋の背中を一突きにしたのだ。しかし、一龍齋の太った身体を、その爪で貫くことはできなかった。

巨体から繰り出される強烈な肘打ちが易者の腹をとらえた。易者はあまりの衝撃に吹っ飛び、木製の壁に激突してしまう。

「ガハッ…！ウ…！」

「はいワシの勝ちー♪」

狂気さえも感じられる化け物染みた表情で易者を見下ろす一龍齋。

「弱いんだよテメーは！なんでだ？なんでワシと同じ、元は人間だというのに…：こうまで違う？そりゃテメーに妖怪の才能がねえからだ！そう言う奴は落ちこぼれっていうんだ…：死ぬんだよ、テメーは」

「じよ、冗談ではない…：今死ぬわけにはいかないのだ！もう二回も死んでるんだ俺は…：邪魔をするな！」

易者はフラフラと立ち上がった。

「俺はやらなくてはならない。新子を助け出す、それが俺に課せられたことだ」

「そうかあ、じゃあ本当に死にな。天国へ行けると良いな！」

「俺はやらなくてはならない。新子を助け出す、それが俺に…！」

「やかましいなテメーは！壊れたおもちゃか！早く死ぬか、ワシに敬

服しろ…」

「死ぬと言われると死にたくなくなるのが人間だ…。俺が弱いから：貴様のような奴の勝手な都合で人生は狂っていく。下位の者は上位へへりくだり、搾取されそれが繰り返される。いつになっても…。だから俺は人間を辞めたんだ！自由に成る為だ!!貴様のような調子乗ったクズ共に負けない為だ!!」

「な、何イ…乗ってなどいるものか…」

「いや乗ってる、ノリノリだ。寺子屋に居たいじめっこにそっくりだ」
「ダメレ!!」

一龍齋の全力を込めたパンチが、易者の顔面にめり込んだ。

「それが真実だ。お前と俺は人間を辞めた…それは真実だ。真実は一つしかない。だが、見る者によって真実とはいろいろな見方がある。今のように、お前が調子に乗っていないと思っても、俺は調子に乗ってると思う。人間を辞めたという結果は同じでも、俺とお前では動機が違う。他人の自由を奪う為と、己の自由を手にするため…」
「何を言って…!?!」

その時、天井の梁の一本がガランと崩れ落ちた。同時に、部屋に舞う火の粉…。梁は燃えていた。天井にも炎が湧き、箸から燃え移った炎が壁や床にも広がっていく。易者がここまで来る途中にならず者たちが投げた火炎瓶などの火がここまで到達してきたのだ。

「くっ…!」

新子は横目で、降りかかった火の粉が上手く縄についてくれたのを見ていた。もう少しで、縄が千切れるかもしれない。

「うおおおお!」

易者が、炎に狼狽える一龍齋に飛びかかり、その頬を思いきり殴った。勢いでぐらついた隙を見て、一気に床へ押し倒し、馬乗りになって顔を殴り続ける。

「ぐはあ…ワシは貴様らが許せん…自由を求めると?がはは…愚か者共め、ワシがお前の自由を奪ってやる!ワシは人間を支配する妖怪に憧れて人間を辞めたのだ!」

一龍齋はすぐさま易者を跳ね除けて起き上がり、易者の脚を掴み、

壁へ叩きつけた。

しかしその時、新子がようやく燃えた縄から脱出し、床へ降り立った。

「それが違うんだよ…。易者のおっさんは他に迷惑なんてかけてねえ。正直、妖怪になろうがどうでもいいよ。だけど、テメエは許せねえ！」

新子は右腕を上へ掲げた。すると、一龍齋のどす黒い妖気に反応して高まった新子の霊力が腕に集中していく。そして、右こぶしが眩いばかりの青い光を放ち始めた。

そして、青い霊力を纏った拳を振るい、一龍齋の胸を殴り抜けた。

「易者、アンタ意外と芯があるじゃないか。…『リベリオントリガー』!!」

新子の強力な一撃が直撃した一龍齋は口から血を吐き、全身からも妖気の混ざった血を吹き出しながら吹っ飛んだ。天井から落ちていた梁に激突し、燃え盛る炎の中に落ちていった。

「クソ…この傷じゃ、アタシ達も逃げられねえ…。やっぱり、アンタの占いは当たったな」

「そうだろう…俺の由緒正しい占術だ。俺の運も悪かったよ、こんな事に巻き込まれるとは」

二人とも、満身創痍だった。二人は火のついていない壁にゆっくりと寄りかかった。傷だらけで、もう歩くこともできない。焼け死ぬのを待つだけだろう。

ドン　ドン　ドン

何かを叩くような音が聞こえたと思ったその時、燃える天井が吹き飛んだ。何かと思つて上を見ると、無数の顔が覗きこんでいた。

「新子ー!」

華扇の声だ。華扇が腕の包帯をこちらへ伸ばしている。新子が包帯を掴むと、華扇はゆっくりと新子の体を引き上げた。引き上げられるとき、黒い煙をいっぱい吸ってしまい、大きくせき込んだ。涙も出て来る。

「あの易者は…」

新子が穴に目をやると、易者を抱えた布都が穴の中から飛び出してきた。同じくせき込む易者を隣に寝かせる。ここは一龍齋の家の屋根の上だ。ふと下を見ると、妹紅や勇刃もそこに居り、手錠をかけられたならず者たちも俯いてそこに座っていた。

「まずい、この家も崩れるわ。早く離れましょう」

新子は華扇におぶられ、その場を後にした。真つ赤に燃える一龍齋の家がガラガラと音を立てて炎に飲み込まれるのが、ぼんやりと見えていた。

「かはは…」

一龍齋は、がれきの隙間に倒れながら、自分に炎が燃え移っていくのを小さく笑いながら見ていた。

「ふう…そうか、思い出した、思い出したぞ。あの易者…かはは、そうか、あの時のか。ワシに妖怪になる術を教え、ワシに第二の人生を与えた、あの時の妖怪か。だが、お前によって第二の人生も終わるとは…」

その時、炎の塊と崩れた天井が一龍齋に覆いかぶさった。

ワシは間違っていたのか？ そうだ、間違っていた。ワシは間違った事の“黒”の中にいる。しかし、同じ方法で同じ妖怪になったアイツは、正しい“白”の中に居た。この世の不条理に抗って自由を手にするのか、不条理に属することによって自由と成るのか…。

「やらばだ」

この日、一龍齋という男は、炎の中で、その身を滅ぼした。

第13話 「湯煙と火光獣」

一面炎の海と化したモンスターストリートは、必死の消火作業が行われたものの、ストリート中の建物は崩壊して黒焦げだった。逃げ遅れた一龍齋いちりゅうさいの手下たちが数人行方不明だったものの、一日後には火は消された。

一龍齋は焼け跡から彼の血液と微かな妖気の跡が発見され、新子と易者の証言で死亡と断定された。モンスターストリートのならず者たちを束ねる男はこの世を去った。残された手下たちはけが人以外揃って逮捕、地霊殿地下の灼熱地獄、あるいは現在の地獄で強制労働を課せられることとなった…。

「部屋に置いてあった置手紙を見て、慌ててあそこへ行ったのよ」

モンスターストリートを後にして、新子たちは宿屋の自室へと戻ってきていた。新子は華扇に傷を手当てをしてもらっていた。部屋にある時計を見ると、どうやら一日は経っているらしい。

「そういえば、易者のおっさんは…?」

「ああ、あの人は一人でどこかに行ってしまったわ。傷の応急措置だけ受けてね」

「全く、もうじきマガノ国突入が控えておるというのに…無駄なこと
に首を突っ込んで欲しくないのう」

「新子は昔からそういう特性なのよ。だから私がついてないといけな
かったんだけど…」

華扇がやれやれと首を振りながらそう言った時、部屋の戸がガラツと開いた。そちらへ顔を向けると、八坂神奈子と豊聡耳神子の二人が立っていた。

「一龍齋の件、既に聞いたぞ。巻き込んでしまったてすまないな」

「しかし、あの一龍齋は我々も手を焼いていたのね。新子…君と易
者の男には感謝しているよ」

「うむ…。それでだ」

神奈子がその場で切り出した。

「今、隣の都の連中と話をしてきた。明日、お前たちをマガノ国へと送ってくれるそうだ」

「…皆して隣の奴って言うけどよ、一体何者なんだよ、そいつらは？」
新子が神奈子にそう聞いた。すると、神奈子は神子と顔を合わせてから、今までにない真剣な面持ちで口を開いた。

「この新都の北側に、“ミクトラン”という都があつてな。そこには、月から地上へ降りて来た月の民が住んでいるんだ」

「月の民…？」

いまいち分からない言葉に、新子が不思議そうに頭をかしげる。

「月の民は、その名の通り月に住んでいる種族。しかし、我々がここへ来るよりもずっと前…今よりも200年以上前か、この地底に突如として現れた。そしてあつという間にミクトランを築き、そこに住むようになった」

「まあ、滅多に交流など無いし、あちらも我々を嫌っているのです、何故月の民が地上に堕ちて来たのか…それは今となっては知ることにはできないのですがね」

神子がフツツと笑いながらそう言う。

「それはそうと、新子よ…。話によれば、お前は傷の治りが普通の人間よりも早まるそうだな」

「常に訳じゃあないがな。昨日の一龍齋で発動した能力がまだ残っているから…」

「ふむ。では温泉街の温泉に浸かると言い。特殊な効能で体の悪い箇所を一つ残らず直してくれるはずだぞ」

「温泉かあ…」

「いいんじゃない？仕事の前に疲れを取るのも」

温泉街。今、新子たちが泊まっている宿屋の通りを新都の真ん中の方向へ向かうと行くことができる、その名の通り、旅館や温泉施設などが密集した場所だ。この温泉街の地下は、地霊殿の灼熱地獄跡と繋がっており、常に高熱で満たされている。その熱を利用して、引いてきた水を温め、温泉街を発展させたいらしい。その温泉の湯は、外の世

界、そして幻想郷など世界中を巡り巡ってきた水なので、不思議な効能がいくつも働いているようだ。

さて、この温泉街にあるとある旅館の休憩所で、ソファ―に座る一人の男が居た。

「ふう〜〜…」

煙草を吸いながらくつろいでいるのは、あの易者だった。彼もまた、先日の事件での体の痛みを取ろうと、温泉街にやってきていたのだ。

休憩所は他人が居なければ喫煙OK。座ると体が沈んでしまうようなソファ―がいくつも並べられており、不思議な魚が入れられた水槽が壁際に置かれている。

「先日はひどい目に遭ったが…ここはやはり良い。休むならば絶好の場所だ。さて、そろそろ風呂の方へ行くとするかな…」

易者が腰を上げようとしたとき、とある一行が目に入った。

新子と華扇、そしてマミゾウだ。大きなカウンターに座っている番台に話しかけている。

「あいつらも来たのか…」

俺もさっさと風呂に浸かって帰るか…。

そう思っただち上がろうとした時。

「お、おっさん！」

目が合ってしまった。気付いた新子が手を振っている。

「ああ…何だこんな所で…」

自分はたった今呼ばれて気が付いた風を装ってそう呟く。新子は自分を指差しながら、後ろに居る連中と何か少しだけ話した。すると、後ろの仙人らしき者がぺこりと頭を下げた。自分も少しだけ会釈する。

「…前にあの新子にしてやった占いは、確か“今日明日”…だったかな」

ずばり、易者がそう自分が行った占いをゆつくりと思い起こしたとき、彼の勘は当たろうとしていた。温泉街の地下、灼熱地獄より物凄

い勢いで吹き荒れる熱波によって空けられた自然な洞窟のように入り組んだ空洞では、真つ白い塊が縦横無尽に駆け巡っていた。

これは、外の世界よりやってきた“火光獣”かこうじゆうという妖怪である。火山に生える不尽木ふじんぼくという木に生息する妖怪だが、ふと何かの手違いのようなものだろうか。この幻想郷の地底世界へと迷い込んでしまつたらしい。

火光獣は水が苦手だった。燃え盛る炎の体を消してしまうからだ。高熱の立ち込める地下空洞から、水の大量に沸く地下水路まで来てしまつていた。火光獣は水から逃れるため、上へ上へと進み始めるのだった…。

「はー、露天風呂だ」

そう言いながら、新子は腕を伸ばす。

「そうじゃな」

いつも頭に乗せている葉っぱの代わりにタオルを頭に乗せたマミゾウがそう呟いた。

新子は柵の向こうの景色に目を向ける。天井は遥か高いが、一面が岩盤に覆われ、薄い霧が膜のように覆っている。少し下を見れば、新都の町並み、そしてこの地底世界にも森や湖が多く点在している事が分かる。

「おや、皆さんは…」

そんな事を考えていた時、後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。振り返ると、体にタオルを巻いた聖白蓮が立っていた。その後ろには、前にも一度顔を合わせた事のある門下の妖怪が数名見える。

確か、雲居一輪、寅丸星、村紗水蜜…だったかな。

「おお、聖か。偶然じゃのう」

「本当に偶然ですね。たまたまみんなで行こうって話になつたんです」

「…はあ」

岩の壁の向こう側、男湯側の露天風呂では、同じく温泉へと足を運

んでいた星熊勇刃がくつろいでいた。傍らに置かれた酒の瓶をぐいっと飲み干す。

と、その時、壁向こうの女湯の方から楽し気な笑い声が聞こえて来た。新子や華扇の声だろう。他にも何人かいるようだが…。声が聞こえるばかりで、何を話しているのかはぼやけて聞き取れない。

勇刃はふと、頭に華扇の事を思い浮かべる。

「星熊殿、悩みかね?」

その時、自分が寄りかかっている場所の反対側に、あの易者がいつの間にか居り、同じく湯につかっていた。

「誰だ、お前は」

「俺は名もない易者。何か悩みがあるようだ、一つ俺が占いで解決の糸口を見出してあげよう」

すると、易者はどこからともなく水晶玉と占術で使用する棒を取り出し、湯に浮かべた。

「そんなものどこから…」

「易者として商売道具を常に持ち歩くのは必然。さア、まずは君の悩みを教えてもらおう」

湯に浮かんでいた棒の一本がひとりでに向きを変え、勇刃を指した。それを見た易者は、口元だけをにやりと曲げてゆつくりと言った。

「なるほど…恋愛、か」

「な…何故…」

「かー…ツッ!最強の鬼、新都の守り手、そうはいえどまだまだ青いもんだねえ!!安心しろ、この俺は君よりもずっと長く生きている…決して間違った助言はしない…」

スススーッと勇刃に近寄り、その肩をバシバシと叩く。

「そ、そうなのか…」

「どれ、診てやろう…えーと…。お、出てきた出てきた」

水晶玉に手をかざしながらそう言う。

「本当か!」

「ああ、では言うぞ…お」

ガタガタガタガタ：

「？何だ、揺れてるぞ」

その時、周囲がガタガタと揺れ始めた。揺れは細かく、地震などではない。その揺れを感じて、易者は占いの手をとめた。湯がぱしゃぱしゃと跳ね、置いていた酒瓶が倒れてしまう。

「一体何なんだ!？」

「星熊、見よー!」

易者が指差したのは、鬼の様な顔を形どられた、湯が沸いている源泉だった。その鬼の顔が震え、だんだんとひびが入り、広がっていく。そして次の瞬間、鬼の顔は粉々に砕け、中から眩い光を発する塊が勢いよく飛び出してきた。もうもうと立ち込める湯けむりを切り払うようにして、縦横無尽に辺りを駆け回る。

「キエエエエエエ!!」

「コイツは……!」

源泉の鬼の顔があった位置に、光の塊は降り立った。光がだんだんと弱まり、その正体が見えて来る。

岩に食い込む四肢の爪、燃え盛る炎と融合したような長い体毛、鋭い眼光を放つ顔。その姿は鼠のような獣であったが、人間一人分ほど大きく、その身体の芯は相変わらず白熱して光り輝いていた。

「地霊殿から妖獣が脱走したのか……?」

勇刃が呟く。

「いや、違うな。コイツは幻想郷に存在する妖怪ではない。最近、外の世界からやって来たな」

と易者が続ける。

「そうか、どちらにせよ捕らえるのみだ」

勇刃が火光獣に向かって走り出す。それを、じつと紅い眼光で見つめ返している。勇刃がお湯を足でバシヤバシヤと飛ばしながら駆け、火光獣に腕を伸ばす。

が、素早くそれを避け、更衣室の屋根の上へと登っていった。火光獣が居た場所には、跳ねた水がかかる。

「…奴、今…」

「何をしている！は、早く捕まえてよ〜!!」
「くっ！」

勇刃が動こうとするが、それよりも早く飛び跳ね、石の壁を越えて行った。

そのころ、女湯の新子たち。

「今、揺れたな…」

「ええ、男湯の方から声が聞こえるわ」

勇刃たちと同じように、ただならない気配を感じて立ち上がり、周囲を警戒する。

すると、岩壁の上に、例の火光獣がぴよんと現れた。燃え盛る炎のような体に、揺らめく紅い目が新子たちをじつと見下ろす。その光景は、まるでこの地底の世界に太陽が出来たようだった。

「鼠…なのか？」

新子の後ろで、一輪がそう呟く。

その時、岩壁の向こう側だが、すぐ近くから声が聞こえた。

「ソイツは地底へ迷い込んだ妖怪だ、捕まえてくれ！」

「その声は勇刃？」

「そうだ、頼む！俺はそちらへ行けない、そこで何としても捕らえてくれ」

「キエエエエエエ！」

火光獣が金切り声を上げた。その瞬間、目にもとまらぬ速さで飛んだ。ギュオン、と紅い残像を残しながら、当たりを駆け回る。

「うお…！」

その場にいる全員の一人一人をめぐけて、その灼熱の体で体当たりを仕掛ける。新子も華扇も、他の聖たちも避ける一方だ。

「ソイツの弱点は、恐らく水だ！温度は関係ないと思う、さつき近寄った時、ソイツは俺ではなく、その時に跳ねた水を避けていた！」

「なるほど、炎を消すにはやっぱり水か！」

それを聞くと、火光獣に向けて水を飛ばす。しかし、何度やっても、火光獣の速すぎる動きの前には一向に当たる気配が無い。それどこ

るか、さらに速度を速め、より正確に彼女らにぶつかろうとしているのだ。

「そんなこと言っても…無理…」

そう、本来、火光獣はここまで強くない。単独だと決して他の生き物や妖怪には手を出さないし、ここまで早く動き回ることもできない。しかし、この個体は灼熱地獄の熱を大量に取り込み、妖力に変えることで莫大な熱量と力を手にしていた。目に入った者すべてに襲い掛かる凶暴性を持ち、敵を煽りながら狩りを楽しむ。

限界を超えて燃え上がる炎は、肉体強化の魔法を施した聖白蓮さえも触れられない程だった。

「く…」

新子は思っていた。

このちよこまか動きまわる素早い奴に、どうにかして一発食らわして動きを止めてやりてえ…。そのためには、この熱をもものともしない武器…のようなものが必要だな。そうだ…コイツに一発食らわせられる武器…“アレ”みたいな、武器がここに有れば…！

新子が底石で足を滑らせ、バランスを崩した。

丁度この時、火光獣が進行方向から直角に向きを変え、新子に迫った。高熱の爪や牙が伸び、新子は目を瞑ろうとする。

ゴイイイイン…

瞬間、新子は細めていた目の隙間で確かに見た。大きな鉄の棒のよな物がどこからともなく飛んできて、この鼠の顔面に直撃した。鐘を叩いた時のような鈍い音がびりびりと響く。

「ピギャ…！」

火光獣は少し横に吹き飛び、鉄の棒は空中でクルクルと回転し、新子の目の前に立った。新子はここで気付いた。この鉄の棒は、新子が三年前から武器として使ってきた、香霖堂で購入した金属バットだった。

「叩き…てえなあ〜!!」

バットにギョロリとした大きな目が浮かび上がり、ギザギザした口をぱつくりと開け、そう言った。

「な…どういうことだ?」

「よっ、新子の姉御! ようやく姉御とこうして言葉を交わせる日が来たぜ!」

「なるほど…付喪神じゃな」

「マミゾウが新子に囁いた。」

「付喪神だつて?」

「そうさ! 俺は付喪神…。姉御、アンタと一緒に色んな奴と戦ううちに、俺の神性つてのが変化していったのさ。そしてさつき俺様を使いたいって願っただろう? それを聞いた俺はようやくこうして完全に覚醒し、ここまですっ飛んで来たって訳さ」

付喪神とは、元々は道具に宿る八百万の神の一種である。道具に宿る神は使用者の念を長らく受けると神性が変化し、意志を持ち、時には使用者に牙を剥くこともある。

このバットは、新子が何度も強大な敵との戦闘で武器として使用したことにより、念が蓄えられ、何年か放置していた間にその念が神性を変化させ、幼い付喪神にさせた。その段階では意志が有っても滅多に自分だけで動くこともできなかった。しかし、使用者である新子が危機に陥った時などには彼自身の意志によって動くことができる。地底へ向かう前、紅魔館の近くで破魔師シャムと交戦した時、このバットが独りでに敵に向かって行ったのはこれである。

そして今、完全に付喪神として覚醒し、こうして使用者の元へ駆けつけたのだ。

「ギイイイ…!」

「おっと、喋ってる暇はねえようだな」

火光獣が起き上がり、再び突進の構えを取っているのを見て、新子がバットを持って構えた。

その直後、火光獣は怒りに目を燃やしながら新子目がけて飛びかかった。逆上して、新子以外の者は眼中にないらしい。

「もうお前にや手こずらねえよ! 行くぜ!」

「おう!」

思い切りバットを振ると、火光獣はそれに歯を突き立てて噛みつ

き、防ごうとする。しかし、金属のバットが突然グニヤリと曲がり、巻き付いた。

「へへへ、その熱も俺には効かないんだぜ」

バットはそう言うと、火光獣ごと温泉の中に飛び込んだ。ジュワアアという炎が聞こえる音が上がリ、あたりが蒸気で真っ白になる。

蒸気が収まったところには、真っ黒いチリチリした毛の動物が、温泉から顔を出しているだけだった。

「終わったようだぞ」

岩壁に貼りついている易者が勇刃にそう言った。

「ああ…」

第14話 「月の民」

「とりあえずコイツはどうするんだ？」

新子が檻に入れられた火光獣を指差してそう言った。自らの弱点である水を被った火光獣の炎の体は消え、後には黒いチリ毛の大きなネズミだけが残った。蓄えてきた熱を失った火光獣は何をするでもなく、おとなしく檻の中でへたり込んでいる。

「さて、どうしましょう。とりあえず…地霊殿にでも持つていく？」

「そうだな、古明地さとりに何とかしてもらおう」

その後、火光獣は地霊殿に引き取られた。主の古明地さとりは新しいペットが増えて良かったと言っていたらしい。一度消えた火光獣の炎は二度と元には戻らないようで、再燃の心配はない。

さて、翌日。温泉の効果もあつてか、新子たちの体の具合はすこぶる良くなっていた。

新子は例の金属バットを腰に下げ、その他の荷物は新都へ置いていくことにした。マガノ国では、決して敵に存在を悟られる事なく、迅速に、隠密に任務を終えなければならない。そう、マガノ国へ囚われた妖怪と人間たちの救出、これを成功させるために。

「それでは、頼んだぞ。すまないな…ともに行けなくて」

新都の出口で、八坂神奈子がそう言った。新子たちの出発の際には、今まで新都で関わってきた色々な者たちが見送りに来てくれた。星熊勇刃、八坂神奈子、聖白蓮、豊聡耳神子、古明地さとり、藤原妹紅、そして易者までもがそこに居た。

「いいさ、もともとアタシ達だけの旅なんだ。無理に来る必要なんてねえよ」

「新子、これを」

神子が前に進み出た。その両手には、紫色の綺麗な布が覆いかぶさっている。心なしかわずかに発光しているように見え、何か神聖な雰囲気満ちている。

「私が力を注いで織ったマントです。強い意志を以ってこれを纏えば、必ず貴方たちを守る事でしょう」

「おっ、サンキュー」

新子がそれを受け取り、背中に羽織る。裏地は見る角度によって赤にも青にも見ることがができる。

「あら、似合ってるじゃない」

「へへ、そうか?」

「それでは、成功を祈っている」

「ああ!じゃあな!」

「達者でのーう!!」

新子、華扇、マミゾウはくるりと向きを変え、その場から歩きだした。教えられた月都ミクトランへ向けて。

「…あ」

どんどん小さくなる三人の背中を、勇刃はじつと見つめていた。「行ってきたもいいんだぞ」

神子が勇刃の肩を軽くたたきながらそう言った。勇刃は振り向き、周りの者たちを顔を見渡す。

「新都は私たちが守ります。勇刃は勇刃の道を往きなさい」

「お、俺は…」

「何を弱気になってる?」

「そう、だな…。アイツらを見てたら、自分も頑張れるんじゃないかって思う…。決めた、俺は母さんを探してくる!見つけたら、俺達が築いたこの新都に連れ帰る。それで…俺はこんなに頑張ったんだぞって、自慢してやる」

勇刃は神子の目を見つめ返した。その目は、新都の守り手の臆病な光ではない、一人の鬼として、かつての家族の行方を追い求める者としての覚悟が込められていた。

「しかし、アンタがああな仙人みたいなのがタイプだったとはな」

「な、何故それを…?」

からかうように肘でつついてくる妹紅に対して、目を丸くしながらそう尋ねる。

「気付いてないとしても思ってたのか？」

「…ふふ、そうか…」

勇刃は目を閉じ、少し笑った。

「じゃあ、行つて来る」

勇刃はそう言い残すと、新子たちを追いかけるように、速足でその場を後にした。

「くくくつ、昨日言いそびれた占い…アレ、全てにおいて絶好調だったぞ」

易者がぼそりとそう言うと、彼は影のようにその場から姿を消した。

本居新子、茨木華扇、二ツ岩マミゾウ、鬼人正邪の新レジスタンスは星熊勇刃を新たなメンバーに加え、いざマガノ国へと向かつて行く。

その様子を皆が期待を込めて見守る中、神奈子だけが、悲しげな表情で見つめるのだった…。

十分ほど歩いただろうか。林を抜けると、いよいよ街のようなものが見えてきた。銀色に輝き、背の高い塔や建物が多く見える。

「あれが…」

「月都ミクトラン…」

一行はいよいよミクトランへ近づいていく。いつの間にか足の下はタイルが敷き詰められた道になっており、チリ一つ見当たらない。よほど、月の民というのは潔癖らしい。

「おや？」

マミゾウが額に手を当て、目を細めて遠くを見た。新子たちもその方向を見ると、道の上に、まるで揺らめく陽炎のように何か立っていた。真っ白いタイルとは対照的に、その何かは真っ黒だ。影や光沢さえもない、闇のように真っ黒。

「待っていたぞ、地上の民よ」

明らかに、人間とも妖怪とも違っていた。虚無的で、どこから見

も平面的。その身体の輪郭と唯一特徴と言える目と口だけが白い。まるで切り絵が立っているようだ。

目は大きく丸く、口もパツクリと裂けた切れ込みのような形をしている。現実には存在するもので例えれば、顔文字のような顔だった。

「貴方は？」

華扇は聞いた。

「我々は月の都に住む月の民。八坂神奈子から話は聞いている」

自ら月の民と名乗ったその存在は淡々とそう話す。

「月の民…ミクトランに住むのは皆アンタみたいなのか？」

「口を慎め、地上の人間。我々が住むのは月の都、ミクトランと呼ぶのは愚かな新都の民だけだ」

それを聞いた新子は少しカチンと来て、思わず声を荒げる。

「月の都だつて？そりやおかしいぜ、あの都は月になんて無いじゃねえか！」

「ちよ、ちよつと新子…やめなさいって」

「ふん、お前たちには我々の事は決して理解できまい。いや、してもらふ必要はない。付いてくるがいい」

月の民は、ただ無感情にそう言うのとタイルの道を歩いていった。新子たちがそれに着いていく。ミクトランの入り口は、巨大なトンネルのようになっていた。そのトンネルの中に入ったとたん、新子たちは不思議な感覚に包まれた。

「ん、何だこれは…」

一番後ろに居た勇刃がそう声を漏らすのが聞こえる。

何だか、体が異常に軽くなつたような、あるいは裸にされたような気分だ。決して悪くはないのだが、自分が生きているのか死んでいるのか分からない、不気味な感覚。

「お前たちの体を覆う『穢れ』を、一時的に取り除いた。我が月の都に、穢れを侵入させることはできない」

「へえ、すごいな、何の術だ？」

「…教える必要はない」

「なっ！それくらいいいだろ別に!!」

「月の都の技術じゃ。儂らとも外の世界とも比べ物にならない高度な技術…じゃな？」

「その通りだ」

そう話しているうちに、入り口のトンネルを抜けた。その瞬間目に飛び込んできたのは、銀色の世界だった。床はさっきの道と同じく白いつルツルしたタイルで出来ていて、道のわきには美味しそうな実を付けた桃の木が街路樹のように立ち並んでいる。建物は中華風で緑っぽい銀色を基調とし、金や赤の装飾が施されている。

「…桃の木以外、生き物は居ないのか？それに、人の気配もしないぞ」
「他の月の民も、アンタみたいな格好してるのか？」

「この月の都には、我々しかない」

「我々って…アンタ一人しかないじゃない」

「そう…我々は一つしかない。しかし、我々は民の数だけ名前を持っている」

「???」

そう答えた月の民の言葉に、新子が首をかしげる。

「…いいだろう、教えてやる。お前たちは地上から来た。元より地底に住む者たちではない、我々の事を教えてやる価値はある」

月の民はくるりとこちらへ向き直り、新子たちを見渡す。すると、真っ黒い体に、白い四角形の模様が浮かび上がった。やがて白い模様には、何かの映像のような物が映し出された。

「我々月の民は、元はお前たちと同じ、地上に住む一族だった。しかし原始時代、地上は弱肉強食による生存競争が展開されたことによつて穢れが蔓延した。穢れとは、生命のエネルギーのようなものだ。本来、寿命というものを持たぬ我々もその穢れによつて寿命が生まれ、その寿命も短くなる一方であった。だがその時、これ以上穢れに侵され、寿命が短くなることを危惧した月夜見王が、当時全く穢れていなかった月への移住計画を提案した」

胸に映し出されたのは、月の民の歴史。何億年も昔に生き物が陸に進出した事、起こった生存競争により寿命ができた月の民は次々と滅んでいく様子。

「月への移住は成功。我々は月の都を興し、そこで暮らすようになった。しかし、今より200年以上前：奴が、お前たちが禍王と呼ぶ存在がやってきたのだ」

月の民から発せられた禍王という言葉。

「奴は狡猾だった。我らの月の都に侵入し、その機能を停止させ、月の都を奪い、乗っ取ったのだ。そして、奴は月の都を…この穢れない月の都を地上へと引きずりおろした。禍王の圧倒的な力を前に、我々は月の都を捨てて逃げた。逃げた先が、この地底世界。我々はこの場所に月の都と全くそっくりな街を作ったのだ」

「じゃ、じゃあ…今のマガノ国は、元は…月の都…？」

「その通りだ。奴は我々が安心して暮らせる唯一の居場所を滅茶苦茶に変えてしまった」

初めて、月の民の口調が変わった。どこか力強く、後悔や怒りを感じさせる。

「そして、我々は地上に戻ってきた事によりまた寿命が発生した。そこで我々は、技術を結集させて全ての月の民を仮死状態にし、肉体と精神の変化、すなわち寿命を封じ込めたのだ」

「なるほど、一人見当たらないのはそのためなのね」

「だ、だったら、アンタは一体…？」

「我々…いや、私は、仮死状態に陥った月の民たちの集合思念体。月の民そのものなのだ」

一行は何も言えなくなった。彼らが初めて明かした真実。

「同情はするな。これは我々が自らに与えた罰なのだ。我々の高慢さや無駄な自意識が引き起こした事。かつて月の都では、罪人を地上へと墮とす罰があった。こうして我々が地上へ墮ちたのも、罰として我々は受け入れたのだ」

「何を言ってる」

その時。新子が月の民に近寄り、目の前で腕を組んだ。

「アンタは悪くねえよ。話を聞いてりや、全部禍王が悪いんじゃないか」

「そんな事はない。我々も、何度か地上へ攻撃を行った。これは今、マ

ガノ国が幻想郷を攻撃しているのと同じ事だ」

「だったら、どーしてそれと同じように禍王と戦おうとしなかったんだよ？自分の居場所が取られちまったんだろ？」

「…それは…」

「アタシらは、幻想郷を禍王に目茶目茶にされても逃げなかった。自分の故郷を抗って奪われなくなかったからな。立ち向かって抗って、ようやくマガノ国を追放できた。さっきの映像を見てりや、アンタらはアタシ達地上の民よりもずっと強かったはずだ」

「我々は…」

「それにさっきからすました態度してやがるが、さっき少しだけ怒ってたじゃないか。それと同じように、禍王に対しても怒ってみろよ！」

「…それでも我々は、我々の罪を償わなければならない。他に出来ることは…お前たちに希望を託すことだけだ」

「アンタ…」

「して見れば、お前たちは中々の面構え。あと、我々はアンタではない。そうだな…我々には月の民の数だけ名前があるが、あえて唯一欠けている名を教えよう。カグヤ。我々の事は、カグヤと呼ぶがいい」
そう言うのと、くると振り向き、道を先に進んでいった。それを見て、華扇とマミゾウが顔を合わせて少し笑った。

「“点と点を瞬時に結び付ける能力”。かつて我々はこの力を使い、二度、妖怪をマガノ国へ送り込んだ」

「そうだ」

新子の背後から、にゅつと正邪が顔を出した。

「一度目は鬼、二度目は無数の艦隊を率いる妖怪軍」

「そうだった。しかし、その二つは、結局一人として帰ってこなかった。何千人の妖怪軍が戦いを挑んでもどうにもならなかったマガノ国を、お前たち数人がどうにかできるとは思えない。目的は何だ？」

月の都の中を歩きながら、カグヤがそう尋ねた。

「儂らの目的は、そのマガノ国に囚われている人間と妖怪の救出じゃ。

事は隠密に成さなければならぬのでな」

「なるほど、そういうことか。お前たちの中に、超高密度魔力内包源を発見した。“打ち出の小槌”、それを使うのだな」

そうこう話しているうちに、またさっきの入り口と同じようなトンネルが現れた。

「ここが出口だ。ここからさらに北へ向かう」

新子たちが出口だというトンネルに入ったとたん、またあの感覚が襲った。だが、今度は逆だ。どんどん体が重くなり、骨が軋んでいるようだ。身体に何かが纏わりつくような感覚もある。トンネルを抜けると、その感覚も、最初からあって当然だったように、何ともなくなった。

「本来あるべき穢れが戻った」

その後も、カグヤはどんどんと白いタイルの道を進んでいった。だが、先を行くほどに、道のタイルが汚れてくる。茶色い土を被り、隙間から雑草が生えている。

と、その時突然、あたりが真っ暗になった。

「うわ!？」

「ちようど今、マガノ国の領域に入った。暗いのはそのためだ」

しかし、カグヤの体だけは、同じく闇のように真っ黒なはずなのに、夜空に浮かぶ月のようにハッキリと形が分かった。

「この上にマガノ国が…」

ごくりと唾をのむ。

「よし、ここからお前たちを送り届けよう」

カグヤは両腕を上に向かって掲げた。白くて丸い目に、赤い小さな光が宿る。

「認識転移システム作動…座標特定中。座標特定終了、これより空間転移を行う」

「す、すごいわね…」

「我々が一度認識した場所へなら、その座標を特定し、飛ばす事が出来る。しかし、今のマガノ国は我々の知っている頃よりもずっと複雑に改変されているだろう。マガノ国のどこに飛ぶかは決める事ができ

ない」

その時、新子たちの体が勝手にふわりと浮かび上がった。

「任せな、いずれ本当の月の都も奪還して見せる」

「そんな事、できるはずがない。もうマガノ国は二度と月の都へと戻ることは敵わない。…だが、もしもお前たちなら可能だというなら：我々の希望を託そうではないか」

「…ああ！アタシ達：新レジスタンスに任せておきな」

「健闘を祈る」

その時、はつと息が止まった。物凄い勢いで天井に向かって押し上げられている。あまりの勢いに、息をすることもできない。

ぶつかる…！

そう思った瞬間、目の前が真っ暗になった。

ザザー… ザザー… ザザー…

ドン… ドン… ドン…

聞こえるのは、何かが流れるような音と、ドンドンと響く太鼓のよな音。少し目を開けると、一面は灰色の砂だった。起き上がろうとすると、頭がガンガン痛む。思わずうめき声を上げて、再び地面に突っ伏した。

少し経って気付いた。ドンドンという太鼓のような音は、自分の心臓の音だ。よかった、すっかり自分は生きている。では、ザザーという音は一体…？

新子がやつとの思いで顔を上げると、自分がいる場所は灰色の砂の上。その向こう側は、灰色ではなく紺色に埋め尽くされている。水：だろうか、大量の水が砂に押し寄せては引いていき、それを繰り返している。ザザーというのは、この音だ。

「海…」

新子は、初めて海というものを見た。当然だが、幻想郷に海は無い。そして、ここが…。

マガノ国。新子は、マガノ国へとたどり着いていた。

第15話 「叛逆爪」

ついにマガノ国の支配から解放された幻想郷。しかし、再び魔の手が忍び寄るのも時間の問題だ。

本居新子、茨木華扇、そして二ツ岩マミゾウの三人は、マガノ国に囚われた人間と妖怪を救い出すため、新たなる旅へと出るのだった。地底での滞在を終え、月の民の力を借りてついにマガノ国へと足を踏み入れた新子たち。この敵地の真ただ中には、当然のように危険が潜んでいるのだった。

第15話 「叛逆爪」

「やれやれ…まだ頭が痛むな」

勇刃が立ち上がりながら言った。しかし、いざ立ってから目線を周囲へ向けると、勇刃も押し黙った。他の仲間もそうだった。華扇もマミゾウも、この海岸の不気味だがどこか神秘的な光景に目を奪われている。

灰色の砂浜に、波打つ紺色の海。生き物の骨が散乱し、鴉のような鳥が歩いている浜辺を囲うように、紫色の森があたりを埋め尽くしている。

「マガノ国に海が有ったとは驚きじゃ」

「うおお、なんだこれ!?!」

新子が上空を指差して叫んだ。驚くのも無理はない、何と、空には無数の球体が浮かんでいるのだ。あれこそ、惑星だった。無数の小惑星が空に浮かんでいる。

「どういうこと…?」

「よく見ろ。アレは惑星ではない。五千〜六千メートルの球体が、上空一万メートル以上の地点に浮かんでいるだけだ」

「雲の代わりに、でっかい岩が浮かんでるな」

「それで、ここに出たはいいけど、これからどうするの?」

「まず、マガノ国の地理について説明しておこう。マガノ国の広さは

幻想郷と同程度、しかし、西から北、そして東にかけては海が広がり、東には国境からくる山脈が続いている。今居る場所は西海岸だ」

「最西端ってことか…」

「ここから東に向けて進めば禍王の居る王都、南に沿って行けば闘技場がある。囚われた者たちが居るのは、きつと王都か闘技場だ」

「人々を救い出すには、そこまで行かなければいけないという事ね。敵に気付かれる事なく…」

「そういうことになるだろう」

「でも、成功させなきゃならねえだろ」

新子がそう言った時、背後の茂みがガサガサと動いた。一瞬びくつとしてから、振り返る。すると、茂みから何かが顔をのぞかせていた。

「あんなところに…人が居るぞ…」

そう、茂みからこちらを覗いているのは人間の顔だった。目を丸くして、瞬きもせずじっとこつちを見つめている。彼は逃げ出した人間だろうか？それとも、ここに住んでいる憲兵団…？

「お前たち気を付けろ」

正邪がぼそりとそう言った。

「何だって言うんだ？憲兵団か？」

「いや…それよりも厄介だ」

その途端、茂みの中の人物が立ち上がった。新子はその姿を見て目を疑った。確かに背恰好こそ人間であるが、体は茶色い毛で覆われ、手には細長い爪を生やし、犬のような尻尾を持っていた。それを皮切りに、次々と茂みの中から獣人が現れた。鳥のような鱗に覆われた足を持つ者、魚のような顔を持つ者、昆虫のような腕を何本も持っている者…。明らかに異形と言える獣人がずらりと新子たちを囲っている。

「何だコイツらは…魔獣か何かか？」

「あの目つき、黙っていてくれそうにはないわね」

華扇の台詞も、案の定当たった。次の瞬間、獣人たちは一斉に奇声を発しながら飛び跳ね、新子たちに襲い掛かった。

「ガアアア！」

歯を剥き出し、唸り声を上げながら爪や腕を振り下ろす。新子は間一髪でそれを避け、獣人の脚に蹴りを入れる。獣人がよろけて転び、新子はその場から離れようとする。

しかし、その間にもどんだん獣人はここに集まってきていて、既に100人以上の獣人に囲まれていた。

「仕方ない…：切り崩していくしかなさそうね」

華扇はそう言うと、右腕を大きな拳へと変化させた。群がる獣人を殴り飛ばし、わずかな切り口を作る。すかさずそこに向かって駆け出し、無理やりにも獣人を吹き飛ばしていく。

しかし、それでもまだ平然としている残りの獣人たちが攻撃をしようとする。近寄ってくる。

「まだ諦めてくれねえか…！」

新子がふと、浜辺に転がる朽ちた丸太の上に足を置いた。その時、その丸太が大きく揺れた。新子は何かと思つて足元を見ると同時に、青ざめた。

丸太が地面からポコツと持ち上がり、その下から何本もの触手を覗かせている。触手は今にも新子の脚を掴もうとしていた。

新子は慌てて足を退かす。その瞬間、丸太が二つに裂け、大きな歯が現れた。口になった丸太はガチンと歯をかみ合わせ、今まで新子が足を置いていた場所の砂を吹き飛ばした。

「うわああー！」

情けない声を上げる新子。その声につられるように、砂の中から何匹もの同じような生物が這い出て来る。丸太を背負ったヤドカリのような生き物だが、丸太の下から黒い小さな目が飛び出し、口は丸太の部分にある。四本の触手のような腕で歩き、人間の何倍も大きい。

「大丈夫か？」

しかし、このヤドカリの魔獣も、勇刃の力の前では有象無象に過ぎなかった。勇刃は一撃でヤドカ리를殴り飛ばし、同時に襲い来る獣人を足で制している。

ヤドカリは勇刃たちには敵わないとみると、周りに居る獣人たちに目を向けた。触手の脚を伸ばして獣人を絡めとり、自分の元へ引き寄

せる。そして、丸太の口を開き、その獣人を丸呑みにした。

その時だった。空が突然サツと暗くなった。上を見上げると、すでに日は沈み、夜の闇が頭上を覆い隠していた。そして、空に浮かぶ惑星のような球体に、悍ましい顔面が浮かび上がった。

ヤドカリはそれを見て怯み、獣人たちは目を覆ってグダグダと地面に膝をついた。禍王の恐怖が、正にマガノ国を覆い尽くしていた。

「逃げるぞー」

勇刃は新子をわきに抱えると、思い切り飛び跳ねた。今度はヤドカリを標的として襲い掛かる獣人たちをまたぎ、紫色の森の中へ入っていった。

「奴ら、完全に俺達の事は忘れてしまったらしい」

「あ、ああ…」

後から、華扇とマミゾウもやって来る。

「この森に沿って東に行くのがいいかのう」

マミゾウがそう呟く。

「そうするかあ」

新子がそう言いながら足を踏み出す。だがその時、突然と地面に穴が開いた。新子の足は上手くその穴にはまってしまふ。短く悪態を付きながら足を抜こうとするが、何故か動かせない。穴に引つかかっているのかと思って覗き込むと、何と自分の足が穴の中から伸びる腕にガツチリと掴まれていた。腕には黄色い鱗が並び、太い指に湾曲したカギ爪が伸びている。

「うお、何だコイツ…!?!」

物凄い力で引つ張られる。抵抗しようとしても、余計に穴の中に滑り落ちてしまうばかりだ。

「どうしたの!?!」

「わからねえ、引つ張られる…!?!」

華扇とマミゾウ、勇刃が新子の腕を掴み、引つ張られまいと力を込める。しかし、そのカギ爪の力はさらに増し、一気に新子を穴の中へと引きずり込んだ。

ドスン

新子は土まみれになりながら、穴の中に落ちた。直後、周りを見る余裕もなく、新子は無理やり立たされ、首を何かで固定される。腕も足も。

「おい、バンキ、手荒な真似はよせ」

静かだがハッキリとした声がそう言った。

「知った事か、どうせコイツらはスパイだ！私たちレジスタンスの残党をあぶりだそうとしてやがるな！」

今度は、荒っぽいしわがれ声が強い口調で言い放つ。

「だが怪我はさせるな、人間だぞ」

「うるせえ！人間の格好した、奴の手下だろうが」

頭も動かせない。目だけを動かして、周りを見る。自分の少し前に、長い襟を立てた赤い上着を着た、赤髪の女が居る。その奥に、白い髪に犬のような耳を生やした女。赤髪の女は、怒ったような表情で新子を正面から睨みつけている。

「新子を離さない！」

その時、穴に飛び込んできた華扇が現れた。すぐさま赤髪の女に包帯を變形させたドリルを突きつける。

「何だお前は、コイツの仲間か？」

赤髪の女がそう言う。

「ああ、仲間じゃ」

続いて降りてきたマミゾウ。その後に勇刃が降りて来る。

「バンキ、やめろ。その人間を離せ」

バンキと呼ばれた赤髪の女は、不服そうに悪態を付くと、さつと後ろを向いた。すると、新子を押さえつけていた力もなくなった。解放された…、と思った時、新子の視界にとんでもないものが入ってきた。このバンキとそっくりな顔をした頭が何個も浮かんでいるのだ。五つはあるだろうか。その頭たちはバンキの本物の首と重なると、同化して消えた。

「手荒なマネをしてすまないな、人間」

白い髪の犬耳がそう言った。

「私は犬走権。そこの赤いのはバンキって呼ばれてる。お前さん、危

なかったんだぞ。あのまま進んでいたら、もつと危ない魔獣と鉢合わせしてた」

「魔獣だつて？アンタもだろ？その耳と、手…さっきの獣人とそっくりだぜ」

新子が憎らし気にそう言う。ついさっきの事で、少し機嫌を損ねている。

「失敬な！私は誇り高き白狼天狗の生き残りだぞ、耳は元からこういうのだ。この手は…そうだな…」

椀と名乗った白狼天狗は、目を下に向けて言葉を濁した。

と、その時、新子の背後から正邪が姿を現した。驚いた顔で、椀とバンキを見ている。それに気づいた二人も、正邪を見てアツと声を上げる。

「生きていたのか、我が戦友よ…」

「お前こそ…！随分雰囲気変わったな、気付かなかった」

「確か、闘技場から姿を消したというからてつきり死んじまったのかと思ってたぞ」

「色々あったがな」

正邪は新子たちに向き直る。

「かつてマガノ国へ挑んだ地底の妖怪軍、その時の仲間たちだ。どうやら…この洞窟ですつと身を潜めていたらしい」

「そうだ。軍が一気に壊滅させられた直後、私たちは敵に捕まった。仲間だった奴らはバラバラに散った。闘技場行き、処刑行き、そして私たち白狼天狗はその高い基礎能力と統率性を買われて、工場送りにされた。それで禍王は…その、何て言うか、何かを弄ったり手を加えるのが好きなんだな。白狼天狗は奴の遊び、改造の過程で命を落としたりした。だが私だけは、完全に改造が終えられてしまう前に脱走を図ったんだ。逃げた先で、この洞窟を掘った。しばらくして、王都から脱出してきたバンキと出会った」

と椀が続けた。

「まあ、そのおかげでこんな強力な腕が手に入ったがね。純粹な手の力なら、鬼と同等かそれ以上じゃないかね」

鳥のようなカギ爪の手で拳を握り、歯を見せてにやつと笑った。

「つて、ことは…さっきの獣人は…?」

新子がおそろおそろ口を開く。

「さっきの獣人は改造された白狼天狗の成れの果て…と言いたいところだが、実際はもつと胸が悪いぞ。禍王は改造に成功した妖怪は自分らの手下にする。だが、奴は人間も捕虜として捕らえていた。改造された人間は、所詮人間、彼らはマガノ国の荒れ地へ放たれる。私らはソイツらを、“改造人間”と呼んでるがね」

なんてこった…。あの獣人は、助けようとしていた幻想郷から連れ来られた人間たちだったのだ。

「誰か来たの?」

誰かの声が聞こえた。今度は洞窟の奥の方から、緑色の髪の毛をした女性が歩いてきた。手には骨の付いた肉が乗ったお盆を持っている。

「ああ、改造人間どもにやられそうなところを助けた」

「そうなんだ。私はリグルっていうんだ」

リグルと名乗った彼女はほつそりとしていて、頭からは虫を思わせる触角が二本伸びている。リグルは椀の座っている前に肉のお盆を置いた。

「リグルはつい10年ほど前にここに来てな。闘技場から逃げてきたらしい」

「運が良かったただけだけどね」

「お前たちも食うか? イノシシだぞ」

椀は肉を口に放り込みながら、お盆を新子たちの方へ寄せた。

「じゃ、じゃあ…」

「それで、聞かせてもらえないか。正邪と一緒に居るアンタ方は一体誰で、何故ここに?」

椀がそう聞いてくる。

「打ち出の小槌を使ってマガノ国に捕らわれた人間や妖怪を幻想郷へ連れ戻すために、地底世界を通じてやってきた」

新子たちはマガノ国へ侵入した目的、これまでの旅での出来事、地

底での様子を全て話した。この椀にバンキ、リグルの三人組は、信頼するに値したからだ。

「そりゃすごい。打ち出の小槌を使えば、全部できちゃうって訳か」

椀が、意味深な表情で顎に手を当てながらそう言う。

「そうだ。マガノ国の魔力を使い放題で可能な範囲ならば何でも願いを叶えられる」

「だがな、禍王がそれを許すかな」

「何を言ってるの、気付かれないようにこれから行動してくんじやない」

華扇が少しムツとしながらそう言った。壁に寄りかかって座っていたバンキがふつと笑いをこぼした。

「馬鹿が。さつき自分で言ってただろ、このマガノ国に入ったモノは全て禍王の所有物。つまり、禍王はマガノ国の隅から隅まで見る事ができるのさ」

「そういうことだ。つまり、絶対に秘密裏に行動するなんて不可能だぞ」

「でも、アンタらは100年以上もずっとこうしてるんだろ？」

「確かに、こういう地下洞窟とか森とか海岸とか、開拓されていない場所にまで目は届かないのかもしれない。でも、囚人を助けるのならば敵の本拠地へ赴くことは不可欠：そうなれば必ず見つかるぞ」

「じゃあ、どうすれば……」

皆が押し黙った。

「特大超弩級戦艦“ダイヤサカ”」

だが、正邪のその一言が沈黙を破った。

「特大……なんだって？」

新子が聞き返す。

「私は、かつて闘技場で活躍していた。勝ち進めば進むほど衣食住の待遇は良くなる。その時、私は普段は王都で生活していた。禍王に最も近き、マガノ国の王都。そこで暮らす者なら誰しも一度は目にするであろう、王宮の一部と化した巨大な構造物。あれこそが、我々レジスタンスの旗艦だった、戦艦ダイヤサカ」

「ダイヤサカ…か。確かに、敵に奪われたダイヤサカは王都の一部になつた。だが、それが何だというのだ？」

「敵に見つかるだど？上等だ、ならば見つかるつもりで行けばいい」「どういうことだ？」

「くつくつく…突入するんだよ、王都へ。そして我らが希望、ダイヤサカを奪還し、囚われの者たちも救い出す」

「何だど…敵地へ殴りこむというのか？馬鹿な！我々妖怪は、二度もそれを行い、失敗しているのだぞ。また同じ過ちを犯すというのか、鬼人正邪!!」

「馬鹿はお前たちだ。私たちを誰だと思っている？この新レジスタンスは、一度幻想郷を救っているのだぞ。かつての我々とは違う、新たな明日を担う者たちだ。コイツらに不可能は無い」

「ダイヤサカを…奪還する…？」

「ははは、そんな大胆なコト、考えてもみなかった…」

「いいだろう。我々三人は、新レジスタンスを全力でサポートしようではないか」

権がそう言いながら、改造されていない方の手を差し出した。新子は戸惑いながら、その手を握り返す。

今、新レジスタンスに再び新たなメンバーが加わつた。計八人の戦士は、その時へ向けて作戦を立て始める。しかし、その裏で、まるで人が寝てる間に廊下を這う百足ののように、禍が動き出そうとしていた。

〈登場用語・人物紹介4〉

・藤原妹紅

「老いることも死ぬこともない程度の能力」を持つ。そろそろ幻想郷にも飽きてきていたので流れに便乗して地底へやって来た。新子とはウマが合うようで、割と仲がいい。

・易者

お馴染の易者さん。「占術を使う程度の能力」を持ち、その占いは気

味が悪いほどよく当たるらしい。だが、なかなか占ってもらいに来る人が少ないのが悩ましい。

・一龍齋

易者と同じ方法で妖怪になった元人間。元が強かったためか、易者よりも妖怪としての力は高い。

・カグヤ

穢れから身を守るために自ら仮死状態となった月の民の集合思念体。一つになった月の民に欠けているという名前、“カグヤ”を名乗る。

・犬走椀

「千里先まで見通す程度の能力」を持ち、これにより敵に見つかることなく長い間暮らしてきた。右手は鳥のようなカギ爪に改造されており、本人曰く鬼と同等の力を発揮するという。

・バンキ

赤蛮奇。王都で奴隷として働かされていたが脱走し、椀の住む洞窟へたどり着いた。「頭を飛ばせる程度の能力」を持っているが、度重なる戦いによって半数近くの頭を失ってしまっている。

・リグル・ナイトバグ

「蟲を操る程度の能力」を持つ虫の妖怪。闘技場でそこそこ活躍していたが、つい10年ほど前に逃げてきた。マガノ国の蟲はあまりいう事を聞いてくれないらしい。

・マガノ国の空

空に雲は無く、代わりに無数の岩塊が浮遊している。さらに上には大きな惑星を模した巨大な物体が浮かんでおり、さながら宇宙空間に居るような感覚に陥る。夜になると惑星型の物体は魔力を発し、獣人や魔獣たちに禍王の恐怖を知らしめる。

第16話 「ワイルドバレット」

ついにマガノ国の支配から解放された幻想郷。しかし、再び魔の手が忍び寄るのも時間の問題だ。

本居新子、茨木華扇、そしてニツ岩マミゾウの三人は、マガノ国に囚われた人間と妖怪を救い出すため、新たなる旅へと出るのだった。地底での滞在を終え、月の民の力を借りてついにマガノ国へと足を踏み入れた新子たち。この敵地の真ただ中には、当然のように危険が潜んでいるのだった。

第16話 「ワイルドバレット」

マガノ国立研究工場。マガノ国の北西寄りの荒れ地に存在する、最大の工場だ。無数の煙突の塔から真っ黒い煙を吐き出し、オレンジ色の大地の上にポツンと建つ真っ白いこの建物はかえって不気味に見える。

この工場のとある一室。薄暗い部屋には赤い絨毯が敷かれ、大きな丸机に、四つの椅子が並べられている。そのうち三つの椅子に座る人影があった。

「集まったようねえ」

一人の女がドリンクの入ったグラスを揺らしながらそう言った。迷彩柄の軍服を、胸の谷間を強調するかのようにはき、小動物の頭骨のアクセサリーのついた帽子を被っている。額から目の周りにかけて紫色のペイントを施しており、その後ろには、黒い服を着た強面の男が一人控えている。

「でも…ゲムルルが居ないみたいね？」

「当たり前でしょ、アイツにここまで来れる“頭”があると思ってるの？」

足を机の上に乗せている少女が馬鹿にしたような口調でそう言った。煌めく長い銀髪を持ち、黒いボディースーツのような服を纏い、その上から金色の角ばった胸当てを付けている。前腕部と頭に同じよ

うなデザインの金色の飾りを着け、蛇のような赤い瞳が薄暗い部屋に光る。

「いつもの事だ、放っておけばいい」

と、別の男がナイフを磨きながら言った。白い軍服を着用し、顔には白い仮面を付けている。その仮面には、一般のマガノ憲兵団が付いている仮面にあるマークと同じマークが印されていた。

「あら、憲兵団長さんは優しいのね」

「黙れ」

静かにそう言いながら、湾曲したナイフの刃先を向ける。

「やめてやめて!」

迷彩軍服の女が手を叩く。

「ま、アイツには私が明日直接言っておくとして…。今日の本題は、どうやら西海岸で何かの動きがあったようね」

「また改造人間と魔獣の喧嘩?」

「それはそうなんだけど…衛星戦艦がとらえた動きが、何かいつもと違ったのよねえ」

「何かありそうだな。極西部はまだ未開拓の地だ、今後、メスを入れて整備していく必要があるだろう」

「確かにね。もし、西部にまだ存在を把握していない叛逆因子が隠れているとなれば…私に任せてよね」

銀髪の少女が、自らの金色の胸当てをさすりながらそう言った。心なしか、彼女の言葉に応えるかのように、胸当てがカタカタと震えたような気がした。

「ええ、任せるわ…。私たちマガノ国が造り上げた三大魔獣…」さんか三禍
“の貴女にね”

次の日の朝。マガノ国中央のおおよそ東寄りの位置に存在する、王都アスガルド。王都の名の通り、禍王が直接治めるマガノ国最大の都市で、主に手下の人間や憲兵団、闘技場で働く戦士が暮らし、中心には王宮が存在する。その王宮横の超巨大構造物はマガノ国軍が所有する戦艦や兵器を格納しており、軍の基地にもなっている。

アスガルドは高い壁に囲まれており、出る際は自由だが、入る際には憲兵団か、あるいは王都の守り手と呼ばれている門番に一言伝えなければならぬ。

王都アスガルドの正面門。門の横にある大きな切り株の上に、赤い影が腰かけていた。

「…」

ただ一人、ポツンと座り、ポーッと空を眺めている。全身が赤い体表で覆われ、ほっそりとした長い体躯に、三本指の両手足はまるで両生類を思わせる。肩の後ろからもう一对の大きな腕が虫の羽のようには折れたたまった状態で生えており、同じく三本の鋭い爪が肩を掴んでいる。

口からは鋭い牙が見え、鼻の無い顔は目が細く、耳は尖り、黄色い髪を後ろへ流している。

「ちよつと」

その時、横から声が聞こえた。

「ゲムルル、あんた話聞いてた？」

「…あ？」

ゲムルルという名前を呼ばれたその者は、声の主の方へ振り向いた。声の主は、工場の一室で集っていた、迷彩軍服の女だった。

「あんたねえ…本来は工場所長として仕事をしなくちゃいけないのに、わざわざ頭の悪いあんたのところに直接来て用件を伝えに来てるのよ？ 頭悪いのは知ってるけど、少しは理解する努力をしたどうなのよ?!」

「…ああ」

ただそう呟くとゲムルルはまた上へ向き直り、ポーッと空を眺め始める。その態度に腹が立った女は、持っていた何かの瓶を思い切りゲムルルの頭に叩きつけた。瓶は粉々に砕け散り、破片が舞う。しかし、当のゲムルルは傷一つなく、平気な顔で目を女に向ける。

ズキン

「いて…」

短くそう言うと、急に立ち上がり、目にもとまらぬ速さで蛇のよう

に腕を伸ばし、女の襟を掴んだ。

「な、何よ？ 私に手を出そうつての？」

実際、こうしてゲムルルを何かで殴りつけるのは、いつもの事だった。いつもは何度殴られようが、平然としているゲムルルだったのだが、今回はやけに反応してくる。そのせいで、女は少し焦っていた。

「いや…何でもない」

ゲムルルはパツと手を離し、元の切り株に座り、下に顔を向けた。

「…ふん。本当に気持ち悪いわね。何でアンタが、“三禍”最強の魔獣って言われてるのか理解できないわ」

女はそう吐き捨てる、開いた門の中へと消えていった。閉じる門の音を聞きつつ、ゲムルルはそれを目で追うことなく、ただ頭を押さえて下を向いていた。

頭が…痛い。

ゲムルル自身にも、己の体に痛みを伴ったのは初めての経験だった。実際、痛みという言葉と意味、その概念自体知りもしなかっただろう。だが、とにかく頭が痛むと同時に、痛みというものを理解したのだ。

しばらくすると、痛みも消えた。代わりに現れたのは、今まで見たこともない、感じた事もない光景だった。しかし、ゲムルルは、それが何かを考えようとはしなかった。自分がいくら考えようと、到底答えを導き出せはしないだろう。ただ、それに疑問を抱いていた。今はまだ、ただそれだけだった。

勇刃は、部屋の隅に座り込んでいた。近くで、新子たちが話し合っているのを黙って聞いている。

「だからさ、まず打ち出の小槌を試してみようよ。まだ一度も使っていないんでしょ？」

「でも、何に使うつてんだよ？」

「そりゃあ、作戦を立てる上での情報収集さ。敵を知らなきゃいけない」

そう話しているのは、新子とリグルだった。新子が持っている小槌

を眺めている。

「情報収集？」

「そう。流石に王都まで行くのは危険すぎるけどね」

「じゃあどこに。闘技場か？」

「そこも危ないね。行くんだったら、工場かな」

「工場？」

「工場だったら、ここに住み始めてから何回か近くまで行ったことあるし、大丈夫だと思うけど」

「何を言ってる、中に入った事は無いだろう」

後ろからやって来た椀がリグルにそう言った。

「まあそうだけどさ。でも、今回は打ち出の小槌のテストも兼ねてる。

それに小槌があれば、中にも入れるだろうさ」

「確かに」

「じゃあ早速行こうよ」

リグルがそう言いながら立ち上がる。椀と顔を見合わせると、椀は小さく頷いた。そして、この洞窟から地上への出入り口のある方へと歩いていく。

天井の岩を横へずらし、そこから頭を出す。椀は千里先まで見通す程度の能力を持っている。その名の通り千里眼の力だ。椀はこの能力を使い、常に周りを警戒しながら敵から逃れてきた。かつて、妖怪の山で白狼天狗として哨戒任務に就いていた時の察知能力がここでさらに磨かれ、それが今でも活きているのだ。

千里眼の目であたりを見渡す。周囲に敵の姿は無い。もつと遠くへと目を光らせる。荒れ地のど真ん中に建っている工場を見た。その周囲にも、警備がないかを確認する。

「今なら行けるぞ。この時間帯はもともと奴らは活発に動いていない」

「…よっ」

新子たちは、初日の段階で少しだけ作戦を考えた。“ダイヤサカ奪還戦”。王都アスガルドにある禍王の本拠地の一部と化している大

戦艦ダイヤサカを奪うのだ。

昨日の事。

「ダイヤサカを奪うには、王都に侵入しなければならぬ」

椀がそう言った。

「だが、王都に入るには、ヤツが居るだろう」

「ヤツ？」

「そうだ。王都の守り手、“ゲムルル”…。恐ろしい魔獣だ、如何なる妖怪も怪物も、ヤツの前では塵に等しく粉碎される。殺された仲間を、数多く見てきた」

「ゲムルルは年がら年中、王都の門の前に居る。だから、奴の目に触れずにダイヤサカの元まで行くには…」

「なるほど、小槌の力でワープすればいいのか」

「その通り。そのために、小槌のある程度の性能は把握しておかなければならない。テストが必要だろうな」

「それについて私から一つ言わせてもらおう」

正邪が話の乗りだした。

「かつて王都に行った事がある者にはわかるだろうが…王都内部は気の流れが複雑でな」

「気の流れ？」

「気の流れとは、すなわち力の流れる向きのことだ。どの空間にも、力の流れる道があるものだ。しかし、王都に諸悪の根源が居着いてる影響か、王都の内部だけ常に魔力の流れがグチャグチャになっている。小槌で瞬間移動を行う際は、まず目的地までの気の流れを読み取り、それに乗る。王都ではそれができない。だから、王都内部へ移動しようとなると、王都のどこへ移動するのかが決められなくなる」

「ここに来る時も同じようなこと言われたなあ」

「だったら、王都内部はそれでいいとして…他の場所ではきちんと使えるのかを試さなきゃ」

「そうだな」

新子がふと小槌を振り上げる。

「ちよ、ちよっと待って」

それを見た華扇がふと新子の手を止めた。

「何を願うつもり？」

「いや、とりあえず美味しい食べ物でも…」

「だめだめだめ！小槌をそんな事に使うもんじゃないわ！いくらここでは願い叶え放題だとしても、それは鬼の道具なのよ？危険だわ。使ったらちゃんとした場面で使わなきゃ」

「何だよ、ケチ…」

「少数で行った方がいいな。小槌を持つてる新子と、嫌でも同行しなければならぬ正邪…そしてあの場所に詳しい私とリグルで行こう」

「無事で帰って来れるのか？」

「頑張るよ」

新子はそう言うのと、壁にかけておいた、神子から貰ったマントを羽織った。椀とリグルが新子の肩を掴み、小槌から力を得ている正邪が傍らに近寄る。

「…じゃあ、打ち出の小槌よ…アタシ達を工場の近くへ連れていけー」

新子がそう叫びながら、小槌を床に叩きつけた。カンッ、という音と共にまばゆい光が放たれ、新子の視界も真っ白になっていく。その光と共に、新子たちの姿は消えた。

気が付くと、新子は見知らぬ場所に立っていた。茶色いひび割れた荒地で、わずかな雑草だけが生えている。地平線が広がり、その彼方には黒い塊と、国境の山脈が聳えているだけだ。きつと、あの黒い塊が王都だろう。丁度西日に曝されているはずなのに、まるで日陰のように闇に覆われている。あそこには、敵の親玉、禍王が…。

そして、少し近くにあるのは、白い建物。形や雰囲気はかつて人間の里に建てられたマガノ国の工場とそっくりだが、あれよりもっと大きい。塀に囲まれ、真っ黒い煙を煙突から吐き出し続けている。

「おい新子、何を突っ立ってる？こっちはだぞ」

「あ、ああ……！」

椀に肩を叩かれて、ふと我に返った。椀はさつと工場へ向けて駆けだした。土埃も、足跡も一つ立てることなく、素早くその場を速足で歩いていく。リグルは背中に羽織った黒いマントの内側から虫の羽を開き、滑空するように飛んでいる。

「おかしいな、ガルルガが居ないぞ」

椀が小さい声でそう口にした。

新子は、三年前の事を思い起こした。あの戦いするとき、全部で七羽いたガルルガの内、五匹は新子と神獣たちが倒した。残りの二羽だけになったガルルガは、今も以前と同じように空を飛んでいるのかは定かではない。

しかし、二人は既に自分が大声を出さないと声が届かない場所にまで行ってしまっていたので、新子はそれを言うのをやめた。

やがて、新子たちは工場のすぐそばまで来た。さつと塀の影に身を隠す。見張りは誰も居ない。

ここは工場の裏手側のようなのだ。辺りに鼻を突くような腐敗臭が漂い、壁際に大量のゴミの山が寄せられている。匂いはこのゴミの山から漂っている。

煙の匂いと相まって、口の中まで酸っぱくなる。

トツ トツ トツ トツ …

その時、軽快だがどこか重みのある音が小さく聞こえてきた。

「何の音だ……？」

新子がそう言うのと、椀とリグルも気づいたらしく、椀は耳を立て、クンクンと鼻を動かす。リグルは額から生える二本の触角を揺らす。

「まずい、隠れろ」

二人はそう言いながら、近くのゴミの山に向かって走り出した。新子は何が何だか分からないまま、地平線の方へ目を向けた。先に居るのは、一つの黒い影。黒い影が足音を立てながら、ゆっくりとこちらへ走ってきていた。

緑色の人間のような体に、ごつい筋肉。両腕にはナイフのような爪が伸び、蹄のある足で走る。鞭のようになる尾を地面に叩きつけ、

牙を剥きだしたトカゲのような顔がにやりと歪む。

怪物スラッグだ。かつて妖怪の山で戦った怪物スラッグが、こちらを目指して走っていた。

第17話 「カイブツと潜入」

ついにマガノ国の支配から解放された幻想郷。しかし、再び魔の手が忍び寄るのも時間の問題だ。

本居新子、茨木華扇、そして二ツ岩マミゾウの三人は、マガノ国に囚われた人間と妖怪を救い出すため、新たなる旅へと出るのだった。地底での滞在を終え、月の民の力を借りてついにマガノ国へと足を踏み入れた新子たち。ダイヤサカ奪還戦の作戦を立てるため、新子たちは情報収集に出るのだが…？

第17話 「カイブツと潜入」

スラッグは、雄叫びを上げて立ち止まった。一度、口の中にある眼球におさめた敵を探して、当たりを見渡す。蹄の後ろ脚で地面を蹴り、いらいらと尻尾を振り回す。

胸や腕、首にある痛々しい古傷が浮かび上がり、体についたままの千切れた鎖がジャラジャラと音を立てる。まず、先に逃げた椀とりグルは、このゴミの山の中に隠れた。それを見た新子は動揺し、思わず動きを止めてしまった。だが、これが彼女らがこのマガノ国で生きてきた手段なのだ。常に命が危険にさらされているこの地で生き延びる方法を、脳に刷り込んでいる。

新子は数秒迷ったのち、ええい、と思い切ってゴミの山の中に身を潜らせた。山の中は鼻が曲がり吐き気が催すほどの悪臭が充満していた。鼻をつまんでも、目が痛み口にも匂いが広がる。

だが、この異臭の塊でもあるゴミの山の中に潜り込んだことは、非常に感覚の鋭い怪物スラッグの目から逃れるには、この場において最も理にかなった手段だと言えるだろう。スラッグは、元は戦闘用に禍王が作った怪物だった。だがその後、闘技場でただ戦いを“魅せる”ためだけ、娯楽の為に改良を加えられた。その闘争心はあらゆる生き物を敵と認識し、肉体的能力は並の妖怪ならば相手にもならず、うちに込められた魔力はそれらを何倍にも膨れ上がらせる。血の匂いで

興奮し、一度敵と認識した獲物は何が何でも追いかける。

時には飼い主である憲兵団をも惨殺し、鎖を引きちぎって逃げる。彼の首や足から垂れる鎖は、彼にとつての自由の象徴だった。

スラッグは、隣にあるゴミの山を駆け上った。蹄がゴミの中に沈もうと、強引に昇りきる。そして、下を見渡した。

―臭う、臭うぞ。確かに、今誰か居た。前にも嗅いだことのある匂いだ…。この臭いゴミの中に混じってる

ある程度辺りを探ると、スラッグは山から下りようとした。その時だった。別の鳴き声が二つ聞こえ、こちらに走ってくる蹄の音が聞こえた。

「うそだろ…？」

そう思った新子の勘は正しく、隣のゴミの山の下に、別の二頭のスラッグが居る。最初に居たのと比べると大分小さいが、負けず劣らず恐ろし気な雰囲気を漂わせている。騒ぎを聞きつけてやって来たのだろうか。

最初に居たスラッグは他の二匹を無視し、ゴミの山を漁り始める。二匹はその態度に腹が立ったのか、唸り声を上げながら体当たりをしかけた。突然の攻撃によるめいたスラッグはすぐさま腕を振り下ろし、鋭い爪で背中を斬りつけた。背中を斬られたスラッグは顔をしかめ、ゴミの山から下りる。

その光景が、ゴミの隙間から見えた。隣の山に逃げ込んだ椀とリグルはどうしているだろうか。自分はどうやってやり過ごそう。

そんな事を考えているとき、かすれた低い声が、すぐ近くから耳元に聞こえた。

「敵がいるぞ、目を覚ませカーン隊…」

新子はビクツとして声の方へ目を向けた。そこで、新子は青ざめた。自分の顔のすぐ横に、白目をむいて半分溶けたような腐った顔が横たわっていた。顔は新子と目が合うと、不気味ににやりと笑った。

「そうだな、隊長…鈴奈庵の本居新子…鈴奈庵の本居新子…」

「馬鹿な、手柄は我々ロナ隊のものだぞ…。手柄を上げて、禍王様に認めてもらうのだ…俺達は、まだ使えると…」

一人が喋ったのを皮切りに、他の所からも口々にさざめきが起る。よく見ると、この灰色のゴミの山は、死体の山だったのだ。腐りかけの死体が乱雑に積み重ねられている。半身が溶けた者や、既に骨ばかりの者、バタバタと振り回される腕、破れた長靴から投げ出された膨らんだ足、様々な憲兵団の死体。

「オリ隊こそ、貴方たちポンコツ共とは違うのよおお…」

女の声が聞こえると同時に、新子の頬に何かねっとりとしたものが触れた。

「うわあああ!!」

新子は思わず悲鳴を上げ、体を動かした。

気付いた時には遅かった。スラッグの口の中にあるギョロ目が、こちらを見据える。スラッグは一跳びでここまでやって来ると、手で山をかき分け始める。爪に斬られた憲兵の死体が掻きだされていき、どんどん視界が明るくなっていく。唸り声が大きくなる。

やばい、アタシの姿を見られたら、抵抗する間もなく…殺されてしまう。

そしていよいよ、顔の上にあつた死体が退かされ、スラッグの頭部が目の前に現れた。ここまでか、と思い、持っている小槌だけでも無事でいてくれ、と願いながら小槌に指先を触れる。

…しかし、スラッグは新子を見ても、何もしない。ただ唸り声をあげるばかりだ。

一体どうしたんだ？まるで、アタシの事が見えていないみたいだ…。

気が付けば、背中に羽織っていたはずのマントが、仰向けの体の上から覆うように巻き付いていた。そこで、新子は理解した。このマントが守ってくれているんだ。豊聡耳神子から貰った不思議なマント、これは姿を完全に隠すことができるのかもしれない。きつと、小槌の魔力との連携で、姿はおろか、匂いや音すら認識することはできないだろう。

新子はひたすら息をひそめ、スラッグが諦めてここから離れるのを待った。相手は自分に気付くことができないと思うと、少しだけ落ち

着いてきた。冷静に見てみると、新子はあることに気付いた。このスラッグの胸にある、刀か何かで斬りつけられたような傷跡。思い出した、このスラッグは三年前に妖怪の山で戦ったやつと同じ個体だ。

三年前、禍王は幻想郷を灰色の海に静めようとした時、幻想郷に居る全ての手下を撤収させた、きつと、このスラッグも一緒になってマガノ国に帰ったに違いない。それから、今度は山ではなくこの荒れ地で暮らしているのだ。

スラッグはゆっくりと頭を上げると、丁度新子の顔の横に蹄を叩きつけた。そのまま今居る山の頂上へ登り、下を見渡す。その時、山の反対側で大きな音がした。スラッグはそちらに振り向き、視線が釘付けになる。一人の死に欠けの憲兵が大きく動いたのだ。

新子はゴミの山から飛び出すと、一気に物凄いスピードで駆け抜ける。向かう先は、工場の裏手の扉。後ろには、追ってくるスラッグ。

新子はスラッグの爪が背中当たるギリギリのところまで、扉の向こうへ滑り込んだ。頑丈な扉はいくらスラッグと言えど一筋縄では破壊できないらしく、吠えながらガンガン体当たりを食らわしている。「危なかった…」

新子が安堵のため息を漏らす。

向こう側にあるドアを開け、その先の通路へと入った。白い天井に木製の床、黄色い照明がつけられている。

「おいおい、何だってんだ?」

さっきの部屋の中で、憲兵団のものと思しき声が聞こえた。

「2号よ、どうせ改造人間だ。それに、丁度新しい剣を支給されたばかりだぜ、試し切りと行ってみようじゃねえか」

二人の憲兵は、へへへと笑いながら、扉をガチャガチャと弄る。そして、扉の向こうに居る敵を迎え撃とうと、剣を構えて扉を開ける。しかし、憲兵の笑い声は、すぐに驚きと恐怖の悲鳴に変わった。

「…スラッグだああああ!!」

憲兵は慌てて扉を閉め、金属の錠をかけた。相変わらずスラッグはドアに体当たりをし続けており、ドアが外側からの衝撃によつてベコベコへこんでいく。

「2号、増援を呼べ！コイツを捕らえろ…！」

それを聞いた2号は頷くと、新子たちが居る通路とは別の通路へ走っていった。

「二人とははぐれてしまったようだな」

正邪がそう言った。

「そうだな…。さっきの場所はきつと憲兵が集まってきて出られなくなるだろうから…。どうにかして別の出入り口を見つけるしかないなあ」

新子はそう言うと、静かに速足で通路を進んだ。通路の先に行き止まりのドアがあるのを見つけた。銀色のドアで、ドアの前には黒い文字で“憲兵団立ち入り禁止”と書かれた黄色い立て看板が置いてある。

「憲兵禁止…ここなら大丈夫だな」

新子はナイフと力ずくで錠を破壊すると、銀色のドアを静かに開け、中に入った。

中は、誰の気配もなく、消毒したようなほのかに鼻を突く薬のような匂いがした。部屋一面銀色で、天井の白い照明がやけにまぶしい。部屋には四角い浴槽のような箱が綺麗に並べられている。新子はふと箱に近づいた。箱には札のような物が貼りつけられており、札には“カーン隊”と書かれていた。

中を覗くと、新子は気分が悪くなった。灰色で、沸騰したようにコポポと泡を出す液体の中に、白っぽい塊が漬けられていた。若干、人の形のように見え、手足や頭部のような部位があるのがわかる。

「さっきの外に置いてあった死体を…溶かしてるのか…」

「これは私も初めて見たな」

正邪がふわふわと浮き上がり箱を覗きながらそう言った。

と、その時、反対側のドアの向こうからブーツが床を蹴る音が聞こえた。音からして二人は居るだろうか。新子と正邪は反射的に箱の影に身を隠した。それと同じタイミングで、ドアがガチャリと開いた。

「だから、時間が無いんだってば！」

「ですが、禍王様はもつとペースを上げろとおっしゃっております」

若い女の声と、しゃがれたような男の声。

「ペースを上げろですって？ 禍王様も無理が過ぎるわ、だって貴方も知ってるでしょう、法玄？」

「は、そうですが…」

「命令は絶対だつて？ 馬鹿ね、無理なものは無理なのよ。だって、ついこの前に完成させたバン隊だつて、耳が無かったわ。指だつて一本少なかったし、少し痩せてた。完全に不良品だったわ、製作期間を縮めろと言われたから縮めたのに、それで規定通りの個体ができなかったらすぐ折檻よ。もう嫌になっちゃうわ」

新子はハツとした。冷や汗が出て来る。今、バン隊と言ったか？

今では新子の知り合いであり、昔は共に戦ったバンは、元はバン隊という憲兵団の隊の一人だった。しかし、他のメンバーが死んでしまいい、残った彼女はバンと名乗り、自由に暮らすようになった。バンは憲兵には使用期限があると言っていた。期限が切れると、憲兵はマガノ国へ帰っていく。バン自身も知りもしなかったことを、新子は今ここで知ってしまった。

期限の切れた憲兵団はマガノ国へ帰ったあと、殺されるのだ。ただ特別な魔法で体を腐らせられ、捨てられる。この箱は死体を溶かしているのではない、憲兵団を造っているのだ。憲兵団が隊ごとに同じ背格好や顔をしているのは、この女の言う通り規定に沿って造られているからだろう。

憲兵は、使用期限が過ぎると帰投プログラムに従ってマガノ国へと帰る。しかし、バンは期限が切れた時、河童のアジトの牢獄に居たため、何か月も帰ることができなかった。それによる不具合で、本来は主である禍王や上官の命令に従うはずのバンはプログラムに異常を起こし、新子と共にマガノ国へ反旗を翻したのだ。

“故障”：バンはマガノ国から見れば、イレギュラー化した異常個体と言えるのだ。

しかし、憲兵もかわいそうなものだ。使うだけ使われて、期限が過ぎれば始末される。そして、代わりに生まれた顔も体も声もそっくり

な新たな隊が何食わぬ顔で仕事をする。そして、彼らもいずれ…。

「カーン隊はどうかしら？」

女の足音がこちらへ近づいてくる。まずい…、もう箱を一つ挟んだすぐ向こう側に女がいる。

新子は、丁度女の死角を縫って隣の箱の後ろへと移動した。幸い、二人とも気付かなかったようだ。移動するとき、二人の顔が見えた。女はいぶかしげに目を細め、男は厳つい顔をしており、背中で腕を組んだまま、静かに女を見つめている。

「やっぱダメね！こんな少ない魔力じゃロクなものがないわ。禍王様は最近急ぎ過ぎてる気がするね」

「アナト様…お言葉ですが、禍王様への口答えは…」

「いいのよ、別に」

どうやらアナトという名前らしい女は、素っ気なくそう言った。アナトは手下でありながら禍王に反感を持っているようだ。

「二日後には転換計画が始動するわ。それが成功すれば、後は結界を壊して、いよいよ本気で幻想郷を制圧する一大戦争になるわ。でも、ゲムルルは使えないから居残りでしょうね。やっぱり、禍王様はアイツをえらく気に入っているようだけど、私にはただのデクノボーにしか見えないわ。いくら戦闘が強くても、知能が無いんじや意味ないと思うの」

転換計画…？そして、結界を壊して幻想郷を制圧するだって？

えらい事を偶然に聞いてしまった。こりやグダグダしていられないな。二日後までに、妖怪と人間を幻想郷へ連れ戻し、結界をより強固にしなくてはならない。

だが、これは凄い情報かも知れないぞ…。このアナトがこの工場の偉い立場に居ることは間違いないだろう。禍王は幻想郷へ攻め込むために軍をより大きくするために急いでいるが、工場での生産スピードがそれに追いついていないということか。

残されたタイムリミットは二日だけか…。

「さ、隣の部屋はどうかしら」

アナトと法玄は、靴の音を響かせながら、隣の部屋へと消えていっ

た。

「正邪、聞いてたか？」

「もちろんだ。我々に残された時間は、そう多くはないようだな」

正邪はそう言いながら、かつての自分を思い起こしていた。雪の日、丁度禍王の手下の二人の人間が話をしているのを偶然聞いた。その時も、手下たちはそのうちやってくる幻想郷への侵攻の話をしていった。

どうも、新子の姿がかつての自分と重なる。

「そうと決まれば、ここを出るぜ。権たちと合流しなきゃ」

第18話 「疑問」

ついにマガノ国の支配から解放された幻想郷。しかし、再び魔の手が忍び寄るのも時間の問題だ。

本居新子、茨木華扇、そして二ツ岩マミゾウの三人は、マガノ国に囚われた人間と妖怪を救い出すため、新たなる旅へと出るのだった。地底での滞在を終え、月の民の力を借りてついにマガノ国へと足を踏み入れた新子たち。ダイヤサカ奪還戦の作戦を立てるため、新子たちは情報収集に出るのだが…？

第18話 「疑問」

そのころ、スラッグの襲撃から逃れた椀とリグルは、居なくなつた新子を探して工場内部に踏み込んでいた。二人は柱の陰に隠れ、周囲の様子を伺っている。

恐らく、この工場に居るのはわずかな憲兵団と、最小限の構成員のみ…。そのうち、恐らく全ての憲兵はスラッグ捕獲にやつきになっているだろう。動き回り、新子を探すには今しかない！

二人は柱の影から影へと慎重に移りながら、通路を通っていく。そして、突き当りの角から顔を出し、その先にある広間に誰も居ないか確認する。この広間の先には、二階へと続く中央階段がある。新子が二階へ行ってしまった可能性もあるので、そちらへと向かっている。

しかし、中央階段へと続く広間は真つ暗で、先が見えない。敵がいるのかも分からない。この工場の独特の匂いが、椀の鼻を鈍らせていた。リグルも同じだった。わずかな空気の動きや音さえも感知する触角も、不思議な電磁波により機能が悪くなっている。だが、この先にある扉を抜けると中央階段があるのは確実。そこまで一気に行くしかない。

二人は顔を見合わせると、一気に走り出した。しかしその瞬間、扉の向こうから、一人の憲兵が現れた。二人と憲兵は互いに顔を見合わせるや、驚きの表情を浮かべる。

だが、椀の肉体は敵に姿を見られたこの状況を打破すべく合理的に働いた。憲兵が腰の武器に手を置き、仲間を呼ぼうと声を上げるよりも前に、改造されたカギ爪の腕を伸ばした。本人曰く、鬼と同等かそれ以上の力を持つ腕は憲兵の頭を鷲掴みにし、いとも簡単に頭部をもぎ取った。

直後、すかさずリグルが憲兵の胴体を抱え込み、首に粘液と糸状の繊維を巻きつけ、血を止める。椀は頭部を抱えたまま、二人は後ろへ下がり、さつきいた通路の角まで戻った。

「はあ…はあ…」

「見られたか…!？」

息を切らしながら、この憲兵が出てきた扉の方を見やる。しかし…来ない…。一人で行動していたのか、助かった…。

「どうする？引き返すか？」

「いや、新子を置いてはいけないでしょ」

「その通りだ…。…!？」

椀がそう言いながら立ち上がろうとすると、足が何かで滑った。足元に目をやると、憲兵の頭部から滴る血液が靴にベツタリと付着していた。小さく舌打ちをすると、靴を脱ぎ、壁際に寄せる。

「行くぞ」

二人は憲兵の死体を持ったまま、扉へ向かって走った。

近くに誰も居ないのを確認し、扉の向こう側へ足を運ぶ。しかし、二人は何かの強い気配を感じ、慌てて中央階段の横へ身を潜める。

「これは何だ…」

椀は、階段の下の空いたスペースに、赤い文字で“開放厳禁”と書かれた分厚い金属の箱を発見した。二人はすぐにわかった。この箱には、途方もない悪意と魔力が込められている。だが、好奇心からか、または中身が二人を誘っているのか、蓋に手をかけた。

蓋を少しだけずらし、中を見る。中からわずかに重たいねつとりとした赤い霧が漏れ出し、徐々に薄くなっていく。霧の下に入れられていたのは、小さなたくさんの球体だった。灰色の液体の中に、赤い球体が沈んでいる。

次の瞬間、全ての赤い球体がぐるりと回転した。その球体は、目玉だった。虫のような脚を付けた目玉のような虫が一斉にこつちを向いた。権とリグルを認識するなり、ねちよねちよと動き回る。

「何なんだコイツは…気味が悪い」

権はそう言い、蓋を閉めようとするが、リグルが食い入ったように虫を見つめているのに気付いた。

「どうした、いくら虫とはいえ、お前まさかこんなモノを…」

いや、様子がおかしい。うっとりとしたような、呆けたような顔でゆつくりと箱の中に手を伸ばそうとしている。権がそれを止めようとしたとき、階段の上から何かを感じ取った。あの扉をくぐった時と、同じ気配だ。

権は恐る恐る階段の上の方を見上げた。

無理だ…。

階段の上に立っているのは、少女だった。黒いぴっちりとした服に、金色の装飾を付けている。いつからあそこにいるのかは知らないが、その気配は少女からもたらされていたモノだった。

少女からは、並々ならぬ金色のオーラが煙のように発せられている。匂いがだんだんと広がっていくように、そのオーラはだんだんと階段を伝い、権の元へ迫ってくる。今までの経験上、白狼天狗として山の哨戒任務に従事していたころにも、マガノ国に来てからも、あそこまで凶悪な気は見たことが無かった。アレに見つかれば必ず殺される…。そう確信できるほどだった。

権は無意識のうちにリグルの手を握っていた。幸い、あの少女はこちらに気付いてない。ただ、何か飲み物を飲んでいただけのようだ。

シユン

と、その時、何者かが権の肩を掴んだ。

「!？」

「アタシだ、戻るぜ」

現れたのは新子だった。新子は権とリグルの肩に触れたまま、小槌を振るった。三人は光に包まれ、次の瞬間にはその場から消え去っていた。

「…ん？」

少女は何かに気づいたのか、階段の手すりから身を乗り出して下を見る。

「…気のせいかしら」

シユン

「新子！」

樵たちの洞窟に戻ってくるやいなや、華扇が真っ先に駆け寄ってきた。

「私が寝てる間に情報収集に出かけたって言うから心配してたのよ！」

「わ、悪いって…」

「それで？危険に見合うほどの情報は手に入れられたかのう？」

「ああ、バツチリだ。奴ら、ドエレえ事…考えてやがるぜ」

「二日後に幻想郷を!？」

新子の話を聞いた者全員が思わずそう声を上げた。

「アタシらが囚人を救出し出す目的が、幻想郷の結界をより強固なものへとするためだ。三年前、新たな結界が張られたのだが、本来幻想郷は妖怪の住処。妖怪が居なくては、結界はいずれ壊れる。そうなれば、再び幻想郷はマガノ国の脅威にさらされることになる。結界が壊れる日は近々訪れると聞いていたが、まさか二日後だとは思わなかった。敵はこのことを既に知っていたらしい」

「じゃあ、俺達に残された時間はあと二日って事か？」

「そうなるな。それまでに作戦を開始したい」

「作戦か…。とりあえず、あのゲムルルとの戦闘を避けるために王都の中に移動するというのは決まっていたが…そこからどうするつもりだ？例えゲムルルを避けられたとしても、私たちが王都に侵入したとなれば、奴ら本気で私たちを始末しに来るぞ」

バンキがそう言った。

「そこを狙うのだ」

正邪が話に割り込む。

「敵は全ての総力を以って幻想郷を攻撃する。だからこそ、敵の全ての力が露出する…狙うのはそこだ」

「どういうこと？」

「簡単な事だ。恐らく、敵はダイヤサカを旗艦とした大艦隊を組むはずだろう。ここで私の能力を使い、敵の戦艦を奪い取る」

「そんなことができるのか？」

「できる。戦艦を奪い取り、それを使って敵陣に切りこむ。そしてもつと大きな戦艦を奪い…それを繰り返して、ダイヤサカへとたどり着く。ダイヤサカを奪えば、敵の軍など全て一網打尽にできる」
「なるほど…。逆に敵の軍隊を奪っちゃうって訳か！」

「それと、そこで打ち出の小槌を使うのだ。小槌で、敵がマガノ国から出られないように願ってしまえばいい」

新子たちは、その日は遅くまで話し合った。決戦の日は二日後に迫る。

場所は移り変わり、王都アスガルド正面門。

「…」

門前の切り株の上に、あのゲムルルが座っていた。ボーッと空を眺めていると、肩に赤っぽい色をした小鳥がとまってきた。ゲムルルはその小鳥をしばらく不思議そうに見つめた後、爪の無い長い指を小鳥に触れた。小鳥は嬉しそうにチチチ、と鳴くと、指に身をすりよせる。

だがその時、遠くから咆哮が轟いた。それに気づいたゲムルルが、そちらに目を向ける。そこには、二頭の怪物スラッグがこちらへ猛スピードで走ってきていた。ゲムルルは小鳥を逃がすと、すぐに立ち上がった。目線は前方のスラッグから離さない。

二匹のスラッグもゲムルルに気付いた。顔を見合わせ、叫び声をあげる。この二匹は、先刻工場裏に現れたスラッグだった。

傷を負った二匹は、あてもなくここへとやって来た。そうしたら、敵を発見した。スラッグは敵の力量を計る能力に長けている。敵の

レベルに合わせて戦い方を変え、あまりに差が大きすぎる相手にはヒットアンドアウェイの戦法を取ったりもする。彼らから見たゲムルルの実力は、自らの闘争心を刺激した。

「我は…この王都を守りし者…」

しかし、どちらかが死ぬまで決して戦いを辞めないとされるスラッグが、足を止めた。ゲムルルは冷たい目で二匹を見つめながら、目にもとまらぬスピードで攻撃を繰り出した。

四散する片方のスラッグ。もう一方は、何が起こったのか分からなかった。何かが、相方を一瞬で引き裂いたのだ。ついさっきまでの、ただずっと呆け、動物に手を触れていたゲムルルとは到底思えないほどの凶悪な魔力。まるで、この世の不吉を全て混ぜ合わせたような…。

スラッグが踵を返してその場から立ち去ろうとした瞬間には、彼もまた、既に肉片と化していた。

「王都に近づく賊は…殺す」

そう静かに吐き捨てる、再び切り株の上に腰かけた。

気が付くと目の前にさっきの小鳥が現れ、顔の前で羽ばたいている。それを見ると、さっきと同じように手を伸ばしてみる。

が、小鳥は慌てて飛び去ってしまった。

ゲムルルは手を差し出したまま、遠くへ消えていく小鳥をただ眺めていた。

その時、ゲムルルの脳裏に、ある疑問が浮かび上がった。

―我は今、何を…？

ゲムルルは、禍王から王都の守り手を任されている。それが主人から命ぜられた役目。許可なく王都へ近寄るあの魔獣を仕留めたのは、守り手として当然の行動であるだろう。しかし、それを行った事により、あの小鳥は自分から離れていってしまった。それにより、ゲムルルの心に芽生えたのは、寂しさであった。

―我があの敵を殺したから…あの鳥は我から逃げた…。だとしたら、我の“力”とは一体、何なのだろうか…？

王都を守るための力。だがその力は、心の拠り所を一つ消してし

まった。力は王都を守ったが、あの小鳥にもう一度触れることはできなくなった。

だとすれば、自分の力は何に使うべきだったのだろうか？

ゲムルルは知能が低い。それはゲムルルが禍王が作った魔獣として生を受けた時、王都を守るには余計な思考は必要ないと判断されたからだ。ただあらかじめプログラムされた本能のままに行動すればいい。

しかし、その頭には、初めて感じる疑問が浮かんでは消える。まだ、その時は、先日より続く頭の痛みを感じながら、それに疑問を抱くだけであった。

ゲムルルが己の力に関して疑問を感じ始めた頃、王都アスガルド中心部に位置する王宮では。その中のある広い講堂に、千人近くもの憲兵团や兵士、そしてマガノ国側に堕ちた妖怪や人間たちが集まっていた。

王宮とは、文字通り、王…禍王が住んでいる宮殿だ。外から見ると渦巻き状のうず高い塔のように見えるが、実際内部は見た目以上に広く、そのほとんどを禍王だけが自由に使用できる。一般の手下や部下は王宮一階のこの講堂しか知らないの、二階より上がどのようなになっているのか知る術もなければ、禍王の姿も見ることとはできない。「これより、二日後に迫る幻想郷出征に先立ち、マガノ国謁軍の儀を執り行う」

そう静かに喋るのは、工場長助手の法玄であった。彼は200年も前からマガノ国に仕える人間だ。彼の後ろには、工場所長のアナトが静かに佇んでいる。

「憲兵团長、バアル。前へ」

バアルと呼ばれた男が、上段の大きな椅子から立ち上がり、正面に躍り出た。顔に仮面を付け、緑色の地に金の装飾の付いた軍服を身に纏っている。

「禍王様より、憲兵团長だけに伴し、憲兵团長だけがその強大な力を御せる、御宝輝剣“マガツキ”を渡御される」

その時、部屋が暗くなった。兵士たちにざわめきが起こり、雷が落ちる直前のようなゴロゴロという不気味が音があたりに響き渡る。すると、天井の隙間から赤黒い煙が漏れ出した。やがて煙は密集し渦巻き始め、まるで二つの目玉の如く大きく膨れる。

「時は来た。私は、三年間も待った。あの忌まわしい幻想郷を覆う境界が破れるこの時をな…。そして、バアルよ」

「はー！」

「かの剣、"マガツキ"と共に必ずや敵を打ち滅ぼし、幻想郷を屈服させるや否や?。」

「勝利することを誓おう!必ずやこの剣を揮いて、幻想郷を制圧して見せましょう」

集った憲兵団たちから歓声が轟いた。

「バアル、お前は旗艦ダイマガノの艦長でもある。軍の指揮もお前に任せる…」

「心得ております」

「続いて三禍が一人、メンドーサ。前へ」

「はい」

法玄に言葉にメンドーサと呼ばれた、銀髪の少女が前に進み出て跪く。

「お前はクリユサオルを繰り、中規模艦隊の要としてその任に当たることがいい」

「はい」

「期待しているぞ。時は二日後だ。すべては…この私の野望の為に」

暗黒の瘴気渦巻く王都に、禍王の血も凍るような笑い声が響き渡った。

第19話 「思惑」

ついにマガノ国の支配から解放された幻想郷。しかし、再び魔の手が忍び寄るのも時間の問題だ。

本居新子、茨木華扇、そしてニツ岩マミゾウの三人は、マガノ国に囚われた人間と妖怪を救い出すため、新たなる旅へと出るのだった。地底での滞在を終え、月の民の力を借りてついにマガノ国へと足を踏み入れた新子たち。囚人たちを救うためのダイヤサカを奪うための作戦決行は、もう間近に迫っているのだった。

第19話 「思惑」

転換計画始動まで、残り24時間。新子たちの作戦決行まで、あと20時間。

「よし、じゃあ作戦を整理しよう」

そこには、新レジスタンスのメンバー全員が集まっていた。新子、華扇、マミゾウ、正邪、勇刃、椀、バンキ、リグルの計8名。

「今から24時間後、転換計画が始動する。それよりも早い20時間後に小槌で『マガノ国軍が幻想郷へ行けなくなれ』と願うと同時に、王都へ侵入。そのまま上空へ、敵の戦艦を奪いつつダイヤサカへと近づき、最終的にそれを奪い取る。ダイヤサカで敵軍を壊滅させ、小槌で全ての囚人をダイヤサカへ収容…地底世界へと移動する。でいいわね?」

これが、新子たちが話し合った結果だった。

「その通りじゃ。敵は転換計画とやらを終えてから幻想郷へ行くようだが、その転換計画の4時間前と言えばもう出撃の準備はできているはず。儂らが空で暴れてやれば、敵はすぐに戦艦で迎え撃とうとしてくるじゃろうな…そうなれば、正邪よ、お前さんの力でそれを奪えるのじゃな?」

「じゃあ?」

「決まりだな」

新子たちがそう話していたころ、あの工場では。

「なに、至急見せたいものが？」

王宮での謁軍の儀を追い、自らの住み場所でもある工場へと帰ってきたアナトは、早速待機していた憲兵団からの報告を受けていた。

「は、謎の血痕と、見知らぬ靴が……」

アナトは憲兵に案内され、ある場所へと向かった。そこは、一階の中央階段へと続く柱のある通路だった。床の上に、血に濡れた下駄のような靴と、べったりついた血痕があるのが分かった。

「これは……？」

アナトは血痕に手を触れ、その匂いを嗅ぐ。

「アナト様が留守の間、我々バク隊が発見しました。三号が行方不明となっていましたので、恐らくこの血痕は三号のものだと……」

確かに、既に固まってこそいるが、この血の匂いや色は間違いなく憲兵団のもの。憲兵の隊はその隊ごとに何か繋がるものを感じられるみたいだから、たぶんこれはバク隊三号のもので確定ね。そして、この工場に侵入者が入った。足跡が残るのを懸念してここで靴を脱いだのだとすると、侵入者は工場のさらに内部に居る。

靴を処分しなかったのは任務遂行を優先し時間のロスを避けた……

？コイツに三号が消されたのはまず間違いない。

「おかしいと思ってたんだ、三号が消えるなんて！俺と隊長が捕らえたあのスラッグに殺されたという訳でもなさそうだったし……と思つてたら三号の血だ！」

「落ち着け二号……」

半分泣いたような顔で嘆く二号をなだめる隊長。

くそつ……ここに来てイレギュラーが発生するなんて……。この侵入者は、恐らく前々から極西部に潜伏していたと思われる妖怪の一味だと思う……コイツが私の計画の思いもよらぬ場所でトラブルを発生させることにならなければいいけど……。

……しかし、それならば三号を処分、あるいは連れ去ったのに靴だけ

を残したことになる。周囲に血痕は無い……この場で何かにくるまれて移動したとするとあらかじめ道具を準備してたつて事になる。憲兵誘拐が任務？ならばその狙いは？……だめね、わからないわ。

更に同刻。アナトが一人、そう疑問に頭を働かせていたころ、ゲムルルは王宮にまで足を運んでいた。

普段、ゲムルルに任されているのは、“王都の外壁より内に許可ない者を入れない事”であり、それを遂行するには王都の外に居なければならぬのだが、この鳴りやまない頭痛と、どうしても答えを導きだせない胸の疑問について、主であり自分の創造主である禍王に助言を乞いてみようと思ひ、ここまで来ていたのだ。

ゲムルルが王宮へ入るのは初めてだった。正確には、出ることは初めてではないが入ることは初めて、だろう。ゲムルルやメンドーサ、バルなど主に三禍を初めとする量産型ではない魔獣や手下は、禍王自らが製作や研究を行ったため、この王宮が産まれたの故郷といえる。

「禍王様」

淡い光で満たされた謁見の間で、ゲムルルはそう呟いた。すると、先日の謁軍式の間での時と同じように、突如として赤い霧が漏れ出し、それは二つの目玉を形作った。

「ゲムルル、か。久しいな……何事だ」

「我が門番の仕事を中断し、ここまで足を運んだことをお許しく下さい。実は、最近頭が酷く痛むのです。我では到底、この原因が突き止められませぬ。禍王様から直接、助言をいただこうと思ひ……」

「なるほど。お前の痛みの原因、それはお前が進化しようとしている証拠だ」

「進化、ですか……？」

「その通りだ。お前が私の僕としてより高みへと進化する際、高まる知性や力によって頭痛を伴う。しかし、それはじきに慣れ、やがて消えゆくもの……お前が案ずる必要はないのだ」

「は……そうなのでございませうか」

そこで、ゲムルルはハツと思い出したように、下げていた頭を上げた。

「それと、もう一つ……。私の力は、禍王様より授かったという事は重々承知しております……しかし、我はその“力”が何なのか分かりませぬ。何かを守る事と引き換えに、何かを失う……この“力”とは一体、何なのでしようか？」

ゲムルルが頭を回転させ、ようやく言葉にして絞り出した疑問。それ故、ひどく漠然とはしていたが、禍王の目は何かを察したかのようになくなった。

「……力とは、この世界の全てだ。世界では、新しいモノが産まれるたび、古いモノは滅び去る……それこそがこの世界の摂理であり全てなのだ。それと同じように力を振りかざせばその分失うものもある。だが、幻想郷は古いモノだけをいつまでも残し、新しいモノを無理やり封じ込めた」

「は……」

「ゲムルル、バアル、メンドーサ……私が作った魔獣で指折りの実力を持つ三名を、下々の者は“三禍”と呼ぶらしいな。ゲムルルよ、その中でもお前は私が心血を注いで完成させた究極の魔獣だ。素の戦闘能力はもちろんの事、お前には様々な生物の特性……そして妖怪の能力を組み込んである」

「は……そうなのですか……」

——本来、私が作った魔獣に妖怪の能力をキメラが如く組み込むことは、すなわち身の一部と化した妖怪の念に存在そのものをいずれ支配される可能性を孕んでいる。だから、コイツの知能をあえて低くした。物を考えるために脳を過剰に働かせれば、それ故に潜在的に眠る妖怪の意識が蘇るのだ。だがソレを奪ってしまえば、妖怪の念が生まれる可能性は限りなくゼロに等しくなる。

「お前の力は私が与えたお前の力であり、お前はただ任された任務を全うすればいい。ただそれだけだ」

それと同時に、私は怖れているのかもしれない。ゲムルル、お前が妖怪としての本能の支配されてしまうのを……いや、お前が成長してい

行くのを、な。何がきっかけとなったのかは分からないが、お前に訪れたその変化が私にとって有意義なものとなればいいのだが…。

「侵入者の体に付着していた憲兵の腐臭…それを辿ってみただけ、匂いはさっぱりここで消えてるわね」

アナトは中央階段の間へと訪れていた。

侵入者のルートは、裏手の第一扉から侵入し、そのまま通路へ…。そしてこの中央階段の間へと向かった。恐らくここで身を隠して二階を伺い、結局上へも奥へも行かず外へ出た…。何かあって侵入を諦めたのかしら？それとも目的は達成したのか？いや、何か能力を使つたのかも…。

「あら、アナト…こんなところで何してるの？」

そこへ、メンドーサの声が響いた。アナトが上を見上げると、階段の手すりから彼女が身を乗り出していた。

「いや、ちよつとね…」

いや、侵入者が空を飛んでいたとしたら？あの靴と血痕は罨！宙に浮いて二階へ向かう事は十分可能…。やはり敵は工場内！

…いやいやいや、だったら何故階段下までわざわざ歩いてきた？罨など残さず、初めから飛べばいいはずよね…。

「ねえ、メンドーサ」

「何？」

「貴方がこの階段付近に来た事はある？謁軍の儀の前、一昨日くらいよ」

「一昨日…そうね、丁度ここを通ったわよ。ビールとか飲みたくなつて、冷蔵庫から持ってきて、それを飲みながらね」

一致する…。侵入者は、丁度ここへ来たタイミングで、階段を上つたあたりに居るメンドーサを見た。そこで、彼女の力に恐れをなして二階へ行くのを諦めた…！

だが問題は、侵入者の目的、そしてまだ近辺に潜伏しているのかの二点！ここでメンドーサに話すべきか？いやそれはない。

転換計画が十数時間後に迫っているこの状況で彼女に教えれば、それが禍王様にまで伝わる可能性が高い。そうならば、私の計画がばれてしまう可能性もある…それだけは避けたい。

「はっ…」

転換計画：忘れていた！あの完成させた虫が入ったメタルボックスは…!? 侵入者がここまで来たというなら、アレの存在を知られていくかもしれないわ…。

「ちよつとどうしたの？」

アナトはさつと速足で、階段横へと向かう。そして、その階段の下スペースに入り込み、そこに置かれた三つのあの銀色の箱を見た。蓋を開き、中を確認する。

「ふう…」

良かった…手を加えられた形跡は無さそうね。私の計画には、これが必要なよね。私の目的…そう、いずれ禍王様に代わり、私がこのマガノ国の支配者であり女王になること！

そのために、この虫たちにはある細工を施したわ。この虫は体内に入るとその者の意識を仮想空間に閉じ込め、肉体をフリーな状態にさせる。そうなれば、魂の抜けた肉体は虫の思い通りに動かせるようになる。ここまでは、禍王様の発注通り。だけど、この工場長が貴方に反旗を翻すチャンスを伺っていたことが誤算だったわね。

本来、肉体を動かす虫は禍王様にしか操ることができない。だけど、私が作ったあの虫たちは私の言う事しか聞かないよう設定させてもらったわ…！これで禍王様が転換計画を発動した直後、私が虫に命令を出せばいい。共に禍王様に槍を向ける、とね…。

築いて見せるわ、私だけの王国を…!!

転換計画始動まで、あと14時間。新子たちの作戦決行まで、あと10時間を切った。

「よし…」

椀は、洞窟の天上から顔を出し、千里眼の能力を使い王都を監視し

ていた。

「ダイヤサカの内部に次々と敵軍の戦艦が格納されていく。やはり敵は艦隊を使ってくる」

「これで、戦艦を奪う作戦はほぼ有効になったわけだな」

正邪がそう言った。

「ほぼ…まだ確定じゃないのか」

「当然だ。本番ではいつどんなイレギュラーが発生するか分からない。その場合に気持ちを備えていなければ体が動かなくなるからな」

正邪は自分でそう言いながら考える。

どうしても何か引つかかる。小槌での移動では王都のどこに飛ぶのか分からない。だが、ダイヤサカのある王宮は王都の中心部…どこに出ようとそこを目指せばいい。それはいい…決めた事だ。考えなければいけないのは想定外の状況、イレギュラー…それが事前にどんな事が分かれば、これ以上のことは無い。

「ふああ…一日寝てなかったな…」

新子が後ろへどつと倒れ込みながらそう呟く。そう、新子たちは24時間以上こうして話し合い、敵の動向を探り続けていた。故に、他の者は妖怪であるので多少は平気だとしても、人間である新子は睡魔の限界が近づいてきていた。

「いいのよ、寝ても。あと10時間はあるし、ちゃんと起こすから。ゆっくり休みなさい」

華扇がそう言いながら、新子の顔を見る。すると、そう言い終わる前に新子は既に眠りに入っていた。

「あらら」

「ほっほっほ、いいではないか」

マミゾウは、ふと自分の傍らに転がっている木の棒きれを手に取った。それを指でなぞると、棒切れは煙に包まれる。煙の中から現れたのは、竜の鱗や棘で作ったのかと見紛うほどの、いかにも強力な雰囲気醸し出した弓矢だった。

「武器はこれで良し…。これと同じ要領で、儂ならば他の物でも応用が利く」

一方、リグルは少し離れたところで、周囲に大きな虫を展開させていた。巨大な毒々しい模様を持った蝶、虫の低級妖怪である虫怪…自分の能力で操ることのできる虫を確認している。

「お前たちも作戦決行まで休め」

正邪がそう言った。

「突入開始一時間前になったら知らせる」

「急げ。第九艦隊、はやくダイマガノ格納庫へ入れ」

王都と一体化したように佇んでいる、超巨大な戦艦、ダイマガノ。かつて禍王が妖怪軍から奪ったダイヤサカそのものであり、名前を変えられ、艦体前部にあつた妖怪を模した荒々しい顔は苦しみに歪むドクロのような顔面へと改造された。

そのダイヤサカの内部へ、憲兵団長の指示に従って小型の駆逐艦隊が次々と入っていく。

「禍王様、艦隊の準備は上々でございます」

憲兵団長のバアルは、王都の上空に渦巻く赤黒い雲に向かって跪き、そう言った。

それを聞き、雲の中に現れた二つの目が不気味に吊り上がる。

禍王、ゲムルル、アナト、そして新子たち…。それぞれの思惑が交差する中、運命の訪れは刻一刻と迫っているのだった。

第20話 「究極の魔獣」

ついにマガノ国の支配から解放された幻想郷。しかし、再び魔の手が忍び寄るのも時間の問題だ。

本居新子、茨木華扇、そして二ツ岩マミゾウの三人は、マガノ国に囚われた人間と妖怪を救い出すため、新たなる旅へと出るのだった。地底での滞在を終え、月の民の力を借りてついにマガノ国へと足を踏み入れた新子たち。囚人たちを救うためのダイヤサカを奪うための作戦は開始された。

しかし、王都へ突入した新子たちの前に現れたのは、本来そこに居る筈のない者であった…。

第20話 「究極の魔獣」

転換計画始動まで、あと5時間。新子たちの作戦決行まで、あと1時間を切った。

「皆、準備はいいか？」

「ああ…」

正邪の問いに、新子がそう呟きながら頷く。他の者も準備万端、と言った表情で返事をする。

「お前ら…腹くくれよ!!」

正邪の檄とおよそ同刻、謁見の間を後にしたゲムルルは、王宮の出入り口で立ち止まり、頭を掻いていた。上空では絶えず戦艦の動力音が響いており、赤黒い雲が頭上を覆っている。いつもの建物の一部が如く暗く佇んでいるダイヤマガノに明るく光が灯されている。

ゲムルルは、幻想郷へ軍隊が向かう事を知らされてはいなかった。本人は先日アナトが言っていた通り、作戦を把握できるほどの知能が無いために、いくら力があっても役に立たないだろうと他の三禍のメンバーと同じように軍に編成されることは無かった。

ゲムルルはただそれを不思議に想いつつも、自らの持ち場である正

面門の外まで歩いて向かう事にした。

「くそっ…」

まだ頭の痛みが取れない。ゲムルルはそれがうっとおしいとでも言うように、顔をしかめながらこめかみを押さえた。

禍王に言われた答えは、正直釈然としない部分もあった。だがゲムルルは、それを受け入れようとしていた。

「突入一分前。集まってくれ」

全員が立ち上がり、正邪の近くへ集まった。

転換計画始動まで、あと四時間一分。新子たちの作戦決行まで、あと一分を切った。

その日は、幻想郷のほとんどの人々にとってはいつもと変わらない夏の夜の入り口。しかし、その隣のマガノ国では、敵の本拠地である王都から、幻想郷を制圧するための大艦隊が出撃しようとして準備を進めていた。

幻想郷とマガノ国の戦いの歴史上、最大級の戦いの火蓋が落とされようとしている。敵の戦艦の数300隻以上、兵士1000人、戦闘魔獣200匹。それを止めるために立ちはだかるのは…

犬走権、リグル・ナイトバグ、赤蛮奇、星熊勇刃、二ツ岩マミゾウ、茨木華扇、そして鬼人正邪と本居新子の計八名。

「新子、頼むぞ」

「おう」

新子は小槌を手に持ち、それを振った。

『『マガノ国軍が幻想郷へ行けなくなりそうですよ』』

「これで、ひとまず幻想郷は無事だ」

「ああ、ダイヤサカを奪えれば、マガノ国に閉じ込められた的戦力を全て壊滅できるからな」

「突入10秒前」

その会話の直後、正邪の声が響いた。

「9」「8」「7」

アタシが持つてるのは、このバットに、神子から貰ったマント、そして打ち出の小槌。それに、こんな頼もしい仲間たちも居る。それだけあれば十分だ！

「6」「5」「4」「3」「2」…「1」

『アタシ達を、王都の中へ連れていけ』!!』

新子はそう高らかに叫ぶとともに、手にしていた打ち出の小槌を勢いよく振り下ろした。小槌は地面に当たり、直後眩いばかりの閃光を発する。その閃光は新子たちの体を包み込み、王都へと瞬間移動させた。

「いかん…」

道は…どっちだったか。知らない場所にきてしまったぞ。

ゲムルルは王都の町並みを歩きながら、来たことのない場所へ迷い込んでしまっていた。

「ええい、どっちだったかな…」

あたりをキョロキョロと見渡すゲムルルの10メートルほど前方の地面の上に、光の紋章のようなものが浮かび上がる。

「ふわあ…眠くなってきた」

欠伸をするゲムルルをよそに、その場所から次々と新レジスタンスのメンバーが姿を現した。神子のマントの能力で姿を隠した新子、そして華扇、勇刃…。

その全員がほぼ同時に、前方に立ち尽くすゲムルルの存在に気付く。椀、リグル、バンキ、そして正邪以外はゲムルルを目にするのは初めてであったが、シロウトでも咄嗟に理解できるほどの余りある魔力を目にして、これがあのゲムルルだと気付いた。作戦検討時には一度も上がることが無かった、本来王都の正面門の前に位置取り、決してその場から離れない筈のゲムルルが王都内部に居るといふ状況。

「…ん？」

そこで、ゲムルルも彼女たちの存在に気が付く。

正邪がここへ来た途端に思った事は「やっぱりな」であった。この有り得ない場面に直面しても、正邪は平静を保つ事が出来た。

―何だコイツらは、どこから湧いた…？

“ありえない場面”はゲムルルにとつても同じであったが、ゲムルルはすぐに考えるのを辞めた。

表情に力が入り、細かった目が大きく見開かれ、顔に対して垂直に釣りあがっていく。そして足を開いて正邪らの行く手を阻むように立ちふさがる。普段は背中に折りたたんでいる、太く長い肩から伸びるもう一对の腕、通称“背脚”はしきやくを目いっぱい展開した。

―我ハ盾：身ヲ以テ、王都ヲ守ル…

マガノ国の魔獣や三禍の中で、唯一複数の妖怪との混成。その身に組み込まれたありとあらゆる妖怪の特性を使用することができる。しかし、まだこの段階では本来のゲムルル自身の力しか出しておらず、この形態は“警戒形態”と呼ばれ、主に侵入者や敵を発見した時、それらに警告を与え時にはその場で始末するための形態である。

「スウウウ…」

ゲムルルが形態変化と共に好戦的な笑みを浮かべた時、前に居た勇刃は動きを止めた。しかし、それは勇刃が精神的に後れをとったからではない。「自分がこれ以上接近するとゲムルルはそれを迎え撃つ」、その攻撃が万が一にも姿を認識できないようにして前に居るはずの新子に命中することを防ぐため」である。

ゲムルルの注意をさらに自分に向けるため、勇刃が格闘の構えを取ろうとしたとき、それはきた。

今、大きく息を吸ったゲムルルの顎の下から胸にかけてが、まるで風船を思わせるように膨らんでいく。ゲムルルの身長の数倍ほどの大きさに風船が巨大化した瞬間…ゲムルルは息を吸っていた口を一度閉じ、また大きく開いた。

「オオオオオオオオオオオオオオ!!!」

轟く咆哮。あまりにも大きすぎ、周囲の建築物にひびを入れ、街路樹を揺らす程の大音量。鼓膜に響く衝撃によって、勇刃が思わず固ま

る。他の者も同様だった。この大咆哮は、いわゆるサイレンのような役割を持っており、音は王宮にまで届いているだろう。すなわち、軍隊に侵入者の存在を伝えたのである。

その中でただ二名、華扇と、ゲムルルが、敵だけを見ていた。

—馬鹿な!?

—暴走!?

—作戦では一番厄介なゲムルルとの戦闘を避けることが重要なポイントだったはずじゃ……いや、違う!

やや遅れてマミゾウが、さらにコンマ数秒遅れて他の者が理解する。

—あの華扇、この状況で……なんてことに気付くんだ……!

他の者は耳を塞ぐなりしてダメージが入ることは避けれたが、新子は先頭に居たはず、近くに居たはず。“万が一”、新子が姿を消すマントを発動したまま、今の爆音をもろに喰らい死んでしまっていたら? 能力は解除されるのか? それとも、このまま誰にも認識されないうまま朽ちるのか? 答えは分からない。仮に後者が正解ならば、今新子の無事を確かめるすべはない。

そして、ゲムルルが目の前に立ちほだかっているという状況。ならば、誰かがゲムルルをこの場に足止めし、他のメンバーを空へと無事に飛ばさなければならぬ者がいる。

—本来ならば、新子の次にいて、かつ先に構えを取った俺の役目……! 華扇……!

青ざめ、その場がっくりと肩を落とす勇刃。

—自分を責めるな勇刃……! 私たちですら気付くのはマミゾウより遅かった。この間に、新子の無事を確認しゲムルルを避けるんだ!

そう胸中で勇刃に呼びかける椀。しかしこの時、勇刃の胸中には、全く別の感情が湧いていた。そう、号泣し絶叫したいほどの……感動!!

—茨木華扇……! できるならば世界中の人々に叫びたい……アレが華扇だ……俺の恩人だと!

危険や好機に全力で向き合う事を恐れ逃げて、安全な檻の中で自分の言葉すら隠し何者からも傷つけられまいとしていた。お前は出来

損ないの鬼だ、そう言われるのが怖かった。そんな自分が嫌だった。でも直せなかった。新都の仲間の言葉すら、気を遣っているだけと本当には聞いていなかった。

―けど、なのに！華扇、そして新子…お前たちが俺の心の檻を壊してくれた！生きてお前たちに言う、ありがとう、と！

確かに勇刃は、豪快な性格として知られる鬼としては、内気で穏やかな心を持っていた。だが逆境時には独特の思考展開や戦術によって、本領発揮することに本人すら気付いていない。

「…」

その時、ゲムルルへと向かう華扇の真剣な表情がほんの少しだけ緩んだ。そのわずかな変化に気付いたゲムルルも、一瞬だけ好戦的な笑みを失った。

直後、ゲムルルの脇腹が、何かがめり込むようにへこんだ。直後、ズンという重い音と共に、ゲムルルの体が1メートルほど横へずれた。

「!!？」

神子のマントによって姿を隠していた新子が、渾身のパンチをゲムルルへと食らわしていた。

―新子は生きてる！

華扇や勇刃、マミゾウの顔に安堵の笑みがこぼれる。

―何だア!? 誰に攻撃された? 見えなかったぞ!! 飛び道具? 死角からか?

ゲムルルは三本指の脚を地面に食い込ませ、それ以上吹き飛ぶのを防いだ。その間にも、次々と華扇、マミゾウたちが横をすり抜けていく。

―ダメージや異変は無い…ならば、今はそれより

ゲムルルが疑問を棚上げし、押し寄せる敵に意識を集中せんとしたのは至極当然の流れである。ここまでは新レジスタンスの思惑通りであった。しかし、見事初撃を撃ちこんだはずの新子と後ろに居たメンバーに、戦慄走る。

「ぐっ…まじかよ…」

ゲムルルの頭部がスライムのようにぐにやりと形を崩し、無数に

入った切れ込みのような線が開き、丸いギョロ目が無数に浮かび上がる。

異形。ただそう呼ぶにふさわしかった。首も髪もない頭部には牙の並んだ涎だらけの口、そして無数に開いた目玉。大きく展開した背脚は見る見るうちに分裂し、もともとの通常の腕と合わせて、計6本の長く鋭い腕となった。足は鳥のように大きく湾曲した構造となり、まるであのスラッグを連想させるような蹄へと変化した。

“殲滅形態”。 “警戒形態”を以ってしてもなお引き下がらない、あるいは戦闘の意志を見せた敵に対して使用する形態であり、この状態になるとゲムルルは多くの妖怪の特性を引き出すようになる。実のところ、ゲムルルがこの殲滅形態へと移行するのは初めての事である。今までの敵は全て警戒形態でどうとでもなった。しかし、この殲滅形態を見せたという事は、すなわち、ゲムルルが初めて脅威を感じた相手が新子たちであるという事に他ならない。

「鬼」の怪力を宿し、合計八本の手足は「土蜘蛛」の特性を引いており、「二つ目小僧」のような大きな目玉を「百目」の能力で無数に増殖している。このようにあらゆる妖怪の混合でありその力を使いこなす、禍王が心血を注いで完成させた^{アルティメット・クリーチャー}“究極の魔獣”、それこそがゲムルルなのだ。

「魔力の底が見えねえ…！」

思わずそう口に出した新子の声すらも、もちろんゲムルルには聞こえない。新子は今までの戦いで、自分よりも強い者と出会う事はそう珍しくはなかった。しかし、過去最高に自分の力が高まった敵を据えてすら天秤の対として軽すぎるほどの力を持つ敵！遙か膨大な魔力を内包する怪物！

「どこまで上がるんだ…!?!」

その魔力に反応して、新子も自分の能力によつて霊力を高めていた。しかし、ゲムルルの魔力は先ほど新子が言ったように、底が無かった。際限を知らず、新子の力はぐんぐんと高まりに高まり続ける。

新子は恐怖を感じた。このままアタシ自身の力が膨れていけば、ア

タシ自身が耐えられねえ……！このままじゃあ……破裂して死に……！！

およそ数秒後の自分の姿を想像した新子は、意図的に能力にブレーキを掛けた。このままでは自分自身の体がもたない。

恐怖を感じたのは、他の者たちも同様だった。禍々しい暗黒の魔力が、新レジスタンスのメンバーの全身を包み込んだ。その強張りをゲムルルは見逃さなかった。

計三本の右腕を一つにまとめ、自分の胴体の何倍も太い巨大な腕へと変貌させる。その先に付いた鉄球の如き拳を、地面へと叩きつけた。爆発のような衝撃が起こると同時に、大量の粉塵が舞い上がる。華扇たちの視界は何も見えなくなった。

突入開始より 七点五七秒^{7.57}が経過していた。

ヒュン ヒュン

ゲムルルが鞭状に変化させた腕が、舞い上がる粉塵を切り裂く。

先ほどまでタイルが敷かれ、脇に街路樹が植えられたこの道は、今や巨大なクレーターが出来上がっていた。もちろん、今のゲムルルの一撃によるものである。そしてこの一撃により、新レジスタンスは分断されていた。

この通りを完全に破壊し、なお動く者を迎え撃つ構えのゲムルル。その背後に、マントの能力を発動したままの新子と華扇。

瓦礫の中に、最も間近で攻撃にさらされた勇刃の姿が。

「く、足をやられたか……!?」

その勇刃の背後からゲムルルに迫る、マミゾウ。

舞い上がる粉塵ではない、マミゾウが発生させた立ち込める煙にゲムルルが異様を感じ取った時、何体ものマミゾウの分身と、バンキの全部で五つ存在し自由に動かせる頭部たちが襲い掛かった。

「しやらくせエ……！」

ゲムルルは鞭状の六本の腕をさらに枝分かれさせ、十二本以上にも増やした腕を振り回し、マミゾウの分身を迎え撃った。ゲムルルの攻撃で瞬く間に破壊された分身だが、マミゾウに“そうしやすい様”巧みに配置されたものだった。

「葉っぱ…!？」

ゲムルルは破壊された分身が葉っぱに戻り、それを見るまでこれが分身だとは気付かなかった。

出来た死角から、バンキの飛び回る頭部がゲムルルの胴体に向けて突撃していく。

—アイツらは囷か…？

そう思いつつ、腰辺りから新たに生やした腕でバンキの頭部を押しさえ込む。

—いや、これは煙じゃない

そう理解すると同時に、その腕でバンキの頭部の一つを粉々に粉砕した。しかし、その頭部に気を取られた一瞬の隙で、マミゾウが発生させた煙の中に居たマミゾウやバンキ、楯とりグルがゲムルルの横を通過しようとする。

「馬鹿が、逃がすか!」

もはや彼女らには走る以外の術は残されていなかった。ゲムルルは狂気染みた笑みを浮かべながら、先端を槍のように尖らせた触手状の腕を振り回し、マミゾウたちを木っ端みじんに切り刻もうと襲い掛かった。これで王都に仇なす侵入者たちを始末できる。ゲムルルは殲滅形態へ移行したことによって、性格もより好戦的に、残酷に変化していた。

ドゴオ

しかし、新子は言われなくとも分かっていた。新子の二度目のパンチがゲムルルの脇腹に突き刺さり、下卑た笑みを浮かべたままゲムルルは横へとよろめいた。

第21話 「空へ」

ついにマガノ国の支配から解放された幻想郷。しかし、再び魔の手が忍び寄るのも時間の問題だ。

本居新子、茨木華扇、そして二ツ岩マミゾウの三人は、マガノ国に囚われた人間と妖怪を救い出すため、新たなる旅へと出るのだった。地底での滞在を終え、月の民の力を借りてついにマガノ国へと足を踏み入れた新子たち。囚人たちを救うためのダイヤサカ奪還作戦は開始された。

予定通り、空へと舞いがった新レジスタンスは、敵の戦艦軍を目の当たりにするのだった。

第21話 「空へ」

「チィイ、地平線の彼方までぶっ飛ばす気合で殴ってんのに…!!」

先ほどから二発の渾身の攻撃をゲムルルへ見事命中させた新子。しかし、二発とも敵へ響いている様子は感じられない。自分へ対して無防備の状態の敵にも係わらず。

「ヌウウー」

ゲムルルは唸ると同時に慌てて辺りを見渡した。しかし、煙の中には先ほどまで居た侵入者の姿は既になかった。

「おのれエエエ!!…!」

沸騰しかけたゲムルルを冷静に戻したのは、増殖した眼が捉えた影。煙の中に、上着を脱ぎ去った勇刃が立っていた。右足がほとんど動かなくなるうが、左腕を後ろへ引き、腰を落として闘志を称えた目でこちらを睨みつけている。

単独での戦いに加え、右足の負傷。ただ当人は追い込まれるほど力がみなぎってくるのをこの状況で楽しんでいた。逆境を糧に、勇刃は翔んだのだ。

その凄まじい気迫とスピードは、ゲムルルの全神経をコンマ数秒防御へ集中させることに成功した。

「コイツとは俺が闘る！お前たちは空へ！」

勇刃はそう叫びながら、ゲムルルの触手の一本を掴む。

「…ええー！」

華扇はそう言うと、建物の屋根に上り、さらに空中へと舞い上がった。新子は咄嗟に打ち出の小槌を取り出し、願うを言う。

『アタシ達を空に飛ばせ！！』

すると、新子たちの体は一人で浮かび上がり、上空へと押し上げられていく。すると、遠くに位置する王宮と巨大なダイヤサカの方角から、無数の敵軍隊がこちらへと迫りつつあった。

「地上から何かはこちらへ向かって飛び上がりました！」

「うふふ、あのサイレンは本当だったようね。相手になってあげるわ、このメンドーサ率いる…」 マグツヒ艦隊「がね！」

ゲムルルからの咆哮による知らせを受け、三禍の一人であるメンドーサは自らが持つ艦隊と共に侵入者の排除へとその力を振るおうとしていた。堂々と腕を組みながら、こちらへ近づいてくる新子たちを見つめる黄色い目が蛇の如く輝いた。

「ふう」

神子のマントによる能力を解除した新子が華扇達の前に姿を現した。

「新子…やっぱり無事だったのね！」

「当たり前だ」

新子は、ふと下を見た。正邪やバンキの話では、王都には憲兵団の他に敵の手下に成り下がった妖怪や、闘技場メンバーに属している妖怪も住んでいるらしい。だが、それらしい気配は全くしない。憲兵は徴兵されているから居ないのはわかるとしても、妖怪すらいないのは何故だ…？

「さて、あれが奴らの艦隊か…」

これも新子たちの予想通りだった。敵は自分たちの存在に気付けば、すぐに軍隊をけしかけ、始末しに来るだろうと。それがこのよう

にして現実となったのならば…

「正邪、あの戦艦を奪えるのじやな!？」

マミゾウが正邪に問いただす。

「できる。私の使う“矢印”があれば容易い」

正邪の背後から先端が矢印の形になった触手が何本も出現する。

「矢印とは、すなわち“力の向き”を示している。私の能力を使い矢印を突き刺すことで、敵固有の力の向きを無理やりひっくり返す。こうして敵戦艦の力の向きは我々と同じになり、乗っ取りが可能となる」

「なるほど！じゃあ、まず向かってくるアイツらを何とかしねえとな！」

敵の戦艦から出撃した憲兵団たち。彼らは銀色の“せんとうがい戦闘鎧”と呼ばれる鎧を身にまとう事で、空中での戦闘を可能とするほか、その能力を大幅に拡大することができていた。

三角形の頭部に、しわの無いツルツルした蛇のような外見、そこから伸びる二本の腕には鋭利な剣が装備されている。

「こんな風になア！」

新子は向かい来る憲兵団を次々と殴り飛ばす。戦闘鎧を破壊された憲兵団は、次々と眼下に広がる都の町並みへと墜落していく。

「馬鹿めが、いつまでも避けていられるか！我らの剣で同時に斬りかかられて、無事でいられるものかア！」

十人以上もの憲兵団が同時に襲い来る。新子もさすがにまずいと思ひ、小さく舌打ちをした。

しかし、その時、ガキンという金属と金属がぶつかり合う音と共に、何かが憲兵たちの剣による攻撃をはじき返した。憲兵は後方へ仰け反りながら、自分の剣と、その攻撃を弾いた何かを交互に見つめる。「新子の姉御オ、あまり無理はしねえでくれい。姉御が香霖堂で手に入れしこの“バット”も、使ってやってくだせえ!!」

新子を守ったのは、付喪神化したバットであった。新子を姉御と呼び付き従うバットは独りで新子の手に収まった。新子もそれを手にすると、敵を攻撃する構えを取った。

「つけあがるな、たかが金属が…!!」

それでもなお、新子へ剣を向ける憲兵。それに向けて、新子はバットを振り下ろした。バットは浮かび上がった顔にある口を開き、剣を噛んで受け止めると同時に、その剣を粉々に砕いてしまった。

「あ、ああ…信じられない、我らの剣が…」

さらに剣を失った憲兵を殴り、下へと叩き落とす。

「私たちも…」

華扇はドリル状に変化させた右腕を使い、憲兵をまとめて吹き飛ばした。

「まだまだ敵は来ますぜ、新子の姉御〜!」

「見苦しいわねえ。あの憲兵共じゃ足止めにもならないわ!もうマグツビ艦隊出しちゃって」

メンドーサがそう指示を出すと、隊列を組んで飛行していた戦艦たちが動き出した。銀色の鋭利な形状をした、近未来的な印象を受ける戦艦が主砲門を展開しながら、新子たちの元へと向かって行く。

「来たようだ」

遠くを見ていた権がそう言った。新子たちも権が見つめる先を見ると、戦艦がこちらへと向かってきていた。

「もつと艦を引きつけろ…その時アレを奪える」

新子たちが敵艦隊を引き付けるために各々で行動を起こそうとしたとき、正邪の表情に焦りが浮かんた。なんと、敵戦艦はあれ以上こちらへ近寄る気配が無い。主砲門横の無数の小窓のような穴から槍を突き出し、それをこちらへ向けていた。

「奴らは我々に近寄ることなく遠距離からのミサイルで攻撃してくる…。あれを奪うにはもつと近寄らなければならぬが…」

「そのミサイルとやらが近づけてはくれないという訳か…」

バンキが苦い表情を浮かべる。

「“マグツヒヤ” 発射!!」

その呼び声と共に、敵艦隊から無数のミサイルが飛ばされた。全て

のミサイルが綺麗に一直線に新子たちをめがけて来る。防御壁等を使う術を持たない新子以外のメンバーが、自分らを取り囲う球体状の妖力によるバリアーを形成する。

ドガアアン

敵のマグツヒヤはバリアーに着弾し、とてつもない爆発を起こした。爆炎があたりを覆い尽くし、燃えた鉄片などが下へ落ちていく。煙が収まった後、かろうじて無事だったバリアーの中に新子たちの姿があった。

「ぐ…そう何度も防げないわ…!」

「…良いことを思いついた」

新子が呟いた。

「良いこと?」

正邪が聞き返す。新子は正邪の耳元へ口を近づけた。

「正邪、お前」ひっくり返す程度の能力”があるって言ってたな? だったら、だったらよ…アタシらとあの戦艦を動かしてる連中の位置を…ひっくり返してやることって…できるのか?」

それを聞いた正邪が笑みを浮かべた。

「…面白い、やってやろう!!」

「敵は妖力による防御壁でマグツヒヤから身を守った模様!」

「命中するまで撃ち続けなさい! 今度は一隻だけじゃなく、全部の艦に積ませたマグツヒヤを撃ち尽くすのよ!」

玉座のような椅子に腰かけ、腕を組んだままイライラとヒールで床を蹴る。

「は、はいい!!」

「来るぜ!」

遠くですらりと並んだ戦艦から、先ほどの同じようなマグツヒヤの発射台が展開されたのを見つけた新子がそう叫ぶ。正邪が狙いを定めたのは、自分たちから見て一番近くに居るあの戦艦だ。

次の瞬間、全艦に装填されたマグツヒヤが一齐に発射された。艦隊

は新子たちを半円状に囲っており、故に撃ちだされたミサイルも決して逃げ場を作らせることなく迫るのだった。

「今だ」

正邪のその静かなつぶやきと共に、一行はその場から姿を消した。ミサイルが当たると直前だった。代わりにそこへ現れたのは、緑色の軍服を纏った憲兵の上官。

「へ？」

彼らは、この状況を掴むことができなかった。戦艦を操縦していたはずの自分と乗組員が、突然外に放り出され、気が付けば自分で発射したはずのマグツヒヤに四方を囲まれているこの状況を。

「なんで？」

ただ短い時の間にそう言うとともに、マグツヒヤが直撃し、彼らは瞬時に爆死した。

「よっしゃー！」

一方、爆死した憲兵が乗っていた戦艦内部へと移動していた新子たち。正邪がすかさず操縦室に自分が出した矢印型のワイヤーを突き刺し、戦艦のハッキングを完了させた。椀とリグル、そしてバンキがコクピット席に座り、そのハンドルを握る。

すると戦艦は動きを止めた。新子たちはこの戦艦を奪い取ることに成功したのだ。

「ふう、上手くいったな。敵のミサイルが直撃する瞬間に私の能力を使い、私たちと乗組員の位置をひっくり返すとは…」

「これで、この戦艦は私たちのものだ」

「それなら…ドンパチ始めようかい」

椀とバンキが、コクピット席のモニターのボタンを押した。

「何だ？」「ドウルジ」の動きが止まったぞ？」

新子たちが奪った戦艦はドウルジという名前が付けれられている。そして、そのドウルジとは別の艦の乗員が異変に気付いた。マグツヒヤを撃ち爆発を確認したとたん、味方の一隻の動きが急に止まったの

だ。

「どうした、ドウルジ…応答をしろ」

そう呼びかけると、ドウルジは動き出した。だがどうも様子がおかしい。主砲門、そしてマグツヒヤの発射台をこちらへに向けたのだ。

「何をするつもりだ、まさか…!」

直後、発射された砲撃がこの戦艦を貫いた。砲撃は魔力をレーザーのように発射し、貫かれた戦艦は黒煙を吹き上げながら下へ墜落していく。

「ようし、まずは一隻撃破!」

「すげえな、よく動かせる」

敵に砲撃を喰らわせた楯を見て、新子が思わず関心の声を上げる。

「初めてだな」

「え?」

「マグツヒ艦隊、イルシアス墜落!何と…ドウルジが暴走!ドウルジの砲撃によって墜落しました!」

「何ですって…?」

メンドーサの顔に戸惑いの色が浮かんだ。

「ぐぬぬぬ…!もう、何が起こってるのって言うのよ!?もういい、ドウルジを破壊しなさい!」

「続いて食らわしてやる、マグツヒヤ全弾発射く〜く!!」

乗っ取ったドウルジから発射された大量のマグツヒヤは残りの敵戦艦に突き刺さり、爆発によるダメージを与えていく。中破しバランスを崩す艦もあれば、運よくそれを回避した艦。

しかし、敵たちもドウルジの様子がおかしい事、乗員からの反応が無い事により、ついにドウルジに砲門を向けた。そして、敵の砲撃が一斉にドウルジに向かう。

「そおれえええ!!」

バンキは思い切りハンドルを引く。するとドウルジは物凄いス

ピードで動き出し、グルグルと回転しながら滅茶苦茶に空を飛び回った。

「うわあああああー！」

揺れる艦内。しかし、バンキの無茶苦茶な操縦が、かえって功を成した。予想外の動きにより砲撃は全て回避され、さらにドウルジは他の艦に衝突するとその艦を貫いて次々と破壊していくのだ。これにより、メンドーサ指揮するマグツヒ艦隊は壊滅にまで追い込まれた。そして、敵艦を全て薙ぎ払うと、まるでそれらの影に隠れていたかのような敵の司令塔の存在が露わになった。

「ありや何だ？」

新子がそう問いかける。

「…アレは…アレは…」

それを目で見た正邪が思わず言葉を失う。

目の前にそびえるのは、超巨大な逆さまの城だった。城が逆さまにひっくり返ったまま浮かんでいるではないか。城からは大砲のようなものが飛び出し、その大きさはドウルジの三倍近くもある。

「輝針城か…!!」

「一体どうなっているの…!?!」

「分かりません…暴走したドウルジが…我がマグツヒ艦隊を壊滅させてしまいました…!」

「…ならば、この巨大要塞型戦艦“クリユサオル”をドウルジへぶつけないさい。そこから私がドウルジの中に入って、何が起こっているのか確認するわ」

メンドーサはそう言うのと玉座から立ち上がり、部屋の外へと出た。

「輝針城じゃって…!?!」

マミゾウが驚いた声を上げる。

「きしんじょう?」

「私も知ってるわ…。私は参加していなかったけれど、200年前の「幻想郷の戦い」の時に見事マガノ国軍を打ち破ったって言う、逆さ城

の事よ」

「ダイヤサカの他に、輝針城までもが奪われていたとは…！」

「だが、好都合だ。忘れるはずがない、アレはこの私の城だ。丁度城はこちらへ突っ込んでくる。アレも奪い返すぞ」

正邪が目の前の輝針城を睨みつける。

大砲を撃ちながらこちらへ突っ込んでくる輝針城を迎え撃つために、こちらもドウルジを最大出力で飛行させる。そして、物凄い衝撃と共に、ドウルジの艦首が輝針城へ突き刺さった。

第22話 「蛇の試練」

ついにマガノ国の支配から解放された幻想郷。しかし、再び魔の手が忍び寄るのも時間の問題だ。

本居新子、茨木華扇、そして二ツ岩マミゾウの三人は、マガノ国に囚われた人間と妖怪を救い出すため、新たなる旅へと出るのだった。地底での滞在を終え、月の民の力を借りてついにマガノ国へと足を踏み入れた新子たち。囚人たちを救うためのダイヤサカ奪還作戦は開始された。

敵に奪われていた輝針城へ乗り込んだ一行の前に、三禍の一人であるメンドーサが立ちふさがるのであった。

第22話 「蛇の試練」

「よし、突き刺さった艦首から城内部へ移動するのだ」

正邪は、コクピット内の壁に矢印を突き刺したままそう言った。その声にくたえた華扇やマミゾウ、椀たちが輝針城へと乗り込んでいく。

崩れた壁の穴をくぐり、城内部へ潜入する。薄暗いが、壁は赤く、障子や屏風が金色に輝き、畳には白く光る灯籠が置かれていて、豪華そうな内装をしている。しかし、外からの外見と同様に内装までも逆さまになっており、床は上にある。静かな城内に、ダメージを負ったドウルジが唸る音のみが響いていた。

「機関部へ行きましょう」

一行は正邪に教えてもらった、輝針城の天守閣中央部にあるという機関室目指して進み出した。少し進むと、一行は少し広い部屋へと出た。部屋の一部が段になっており、見事に煌めく風神・雷神や、龍と虎の屏風が飾られている。

その時だった。その部屋に、不気味な少女の声が響き渡った。

「なるほどね、そういう事だったの。お前たち侵入者が、ドウルジを奪い、私のマグツヒ艦隊を壊滅させたのね」

部屋の衾の奥からこちらへゆつくりと歩み寄ってくるのは、三禍の一人、メンドーサ本人であった。その姿を見た途端、楯とリグルは思わず固く身構え、数歩後ろへ下がった。先日、工場に潜入した時に中央階段で感じ取り、この目で見たアイツ！

他の者も、この二人ほどではないにせよ、思わず恐怖の念を抱いた。ゲムルルのただただ途方もない膨大な魔力とはまた違った、それに比べればまだ理解できる範疇であるがその非常に洗練された濃い魔力は、明らかに彼女がこの上ない強敵であるということを示していた。「丁度、このクリュサオルからドウルジへ移動する手間が省けたよね」

「クリュサオル、じゃと？」

「そうよ、この要塞型戦艦の名前よ」

かつてダイヤサカを敵に奪われたのと同時に、ダイヤサカの動力エネルギーを増幅させるためのギアの役割を果たしていた輝針城も、同じく敵に奪われ、敵の艦隊に加えられていた。クリュサオルと名を改められた輝針城がメンドーサに与えられ、この場に現れたことは、偶然か否か。

「わざわざ侵入者排除の為に艦隊まで使ったのに、それを壊滅させられたら、私の立場が無いじゃない…。だからここで、お前たちを完全に殺す!!」

メンドーサが立っていた床がゆつくりと開いていく。それと同時に、開いた床の下から巨大な頭部が出現した。続いて胸、胴体、足…。黒と金色を基調とした、巨大なロボットが床下から姿を現した。兜をかぶったような角のある顔、そしてその胸部には巨大な顔があり、鋭い目と牙は蛇を思わせるようである。

「くくく…」

メンドーサは不敵な笑みを見せるとともに、空中に浮かび上がった。背後のロボの胸部の顔の口が開き、コクピット室が露わになる。そのコクピット内に座り、腕を組むと、胸部の口がガシャンと音を立てて閉じた。

ロボットの頭部の目が怪しく光を放ち、動き出した。

「で、でっか…！」

リグルも思わずそう呟く。正に、“魔人”と呼ぶにふさわしいその風貌は、巨大ながらもメンドーサの特徴を反映したような圧倒的な威圧感が感じられた。

「この“メドウシアナ”で、お前たちを始末する！」

メンドーサ専用大型戦闘鎧“メドウシアナ”、と彼女はこのロボットの呼んでいる。先刻、飛行中の一行を襲った憲兵団が装備していた戦闘鎧と同系統であり、メンドーサだけが操りメンドーサだけがその力を制御することのできる特別性である。

メドウシアナは巨体に見合わぬほどのスピードで、その拳を一行へ向けて振り下ろした。華扇が咄嗟に右腕の包帯をシールド状に展開し、それが直撃することを防ごうとするが、やはりというべきの圧倒的なパワーを前にシールドごと吹き飛ばされた。

「ぐ…!!」

「あはははは…メドウシアナの昂ぶりを感ずるわ！」

華扇のシールドの裏側から飛び出したマミゾウや椀たちが、メドウシアナの装甲に攻撃を加えていく。

「かゆいわね」

しかし、目立って効いている手ごたえは無かった。

「私を阻む者は誰であろうと許しはしない！死になさい!!」

メドウシアナの頭部と胸部、計四つの目が怪しい光を放ち始める。直後、目から紫色の閃光と共に鋭いレーザーのような光線が放たれた。

光線は一直線に華扇たちへと向かって行く。

―避けられない…!

メドウシアナが最初に発した光には魔力が込められており、それを直視してかつ浴びてしまった者は体の自由を奪われる。だから思うように動けず、避けられなかったのだ。

が、しかし。その時、周囲を揺るがす咆哮と共に、何か巨大な塊が目の前に降り立ち、光線を弾き飛ばして見せた。直後に吹いた突風が止み、その方向を見た。

まず目に飛び込んだのは、視界一色の群青色であった。青い巨体がこちらに背を向けるようにして立っている。竜のような短い脚、長い尻尾、筋肉質な上半身…太くたくましい腕は地に付くほど長く、勇ましく目つきを釣り上げた顔は真つすぐ敵を見つめている。

「馬鹿な！メドウシアナの攻撃をはじき返すなんて…！何者よ!？」

驚きながら、そう叫ぶメンドーサ。

「あ、あれはまさか…！」

華扇には見覚えがあった。いや、忘れられるはずはない。

天に向けて拳を突き上げ、高らかに雄叫びを上げるのは…

『東の反逆者』…!!」

三年前、新子は東の歌姫の魔力を吸収し、それを使いこなすことに成功した際に発現した化身。その時よりも大きくなっているような気がするが、それは正しく『東の反逆者』であった。

「お前らア！アタシがこのメカの相手をする、今のうちに機関部へ行け！」

化身のうなじ部分に手足の先を同化させた新子がそう言った。

「…わかったわ」

化身の股下をくぐって、華扇たちが城の奥へと向かおうとする。しかし、メンドーサがそれを許すはずもなく、行く手を阻もうと腕を伸ばした。

「行かせないわ!!」

「おっと、行かせてやろうぜ」

しかし、東の反逆者はメドウシアナの腕を掴み、ギリギリと握力で締め付けながら上へと上げた。

「チィイ、お前…噂の本居新子か！」

「それがどうしたよ？」

メドウシアナは化身の手を振り払い、踏み込むとともに拳を向けた。しかし、新子も負けじと化身を動かし、拳と拳を衝突させる。両手で互いに押し合い、熾烈な鏝迫り合いを繰り広げた。

「うわ~~~~！」

天井からパラパラと崩れる瓦礫から頭を守りながら、リグルが情け

ない声を上げる。一行は間一髪、メドウシアナの股下をくぐり、機関部目指して叢の奥へと駆けて行った。

「オラア!!」

東の反逆者がメドウシアナの腕を思いきり引き、地面に引きずりながら壁へと投げ飛ばした。

「三年ぶりだが、なかなか衰えないモンだな…」

新子は、このメンドーサとメドウシアナの魔力を糧に化身を生成していた。自分自身、三年前から今までに至るまでこの化身を使う機会など無かった。しかし、今回の旅に出発してから、充分に『東の反逆者』を使用できるチャンスはあったはずだ。破魔師シヤム戦や一龍齋等…。だがその時にも化身を使わなかったのは、新子に一縷の不安があったから。

三年という時は、何かを忘れ去るのにちょうどよい期間であり、その間、新子は闘う事はなかった。それ故に、新子はこの化身をきちんと使えるのだろうか、熱風と戦った時のように暴走してしまわないだろうか…。と考えていた。

だがそんな心配は無用だった…。この化身は不備無く生成され、かつ以前よりもパワーを増していた…

「キエエエエ…舐めた事言ってくれるじゃないの…」

メドウシアナは立ち上がり、クラウチングスタートのような姿勢を取り、構えた。そして、床が崩れ落ちるほどの勢いで地を蹴り、新子へ向かう。

『東の反逆者』もそれを迎え撃つ構えを取り、両者は同時に拳を振り上げる。そして互いにぶつかり合う距離まで接近した瞬間、同時に顔面を殴りつけた。

「ク、クロスカウンター…か!」

両者の頬に拳がめり込む。

「しかし、パンチだけしか能のないお前に、負けるはずはないのよ…!」

メドウシアナは化身の顔にめり込ませていた拳を開き、手の平にある孔を向けた。直後、孔より射出された刃が如きレーザーが、まるで

獲物の首に食らいつく蛇のように、『東の反逆者』の首を貫いた。

「うおっ…!?!」

『東の反逆者』の首の後ろの位置に居る新子の顔の横を、レーザーがすすめた。頬に血が滲み、髪の毛が少し焦げる。

まずい…今の一撃で化身が崩れる…!

そう思った新子は、化身の崩壊が始める前に、メドウシアナの顔に当たっている拳を下へと移動させ、その胴体に思い切り腕を突き刺した。

「ああ、殴る事しかできねえから、そうさせてもらう!」

「こ、コイツ…!!」

結果、メドウシアナの胴体に有った顔は破壊され、中のコクピット室、そしてそこに座っていたメンドーサの姿が露わになる。その間にも、新子の『東の反逆者』は崩壊を初め、遂にメドウシアナも機能停止にまで追い込まれた。

「クソ、メドウシアナが…」

コクピットのハンドルを動かすが、やはりメドウシアナは動いてはくれない。

新子は崩れかけの化身から両手足を分離させ、メドウシアナの上まで歩いていき、メンドーサを見下ろした。

「まだ…やるかい?」

メンドーサはキツと新子を睨みつけ、やがて目を閉じた。

しかし、その直後、急にコクピットから身を乗り出したメンドーサは新子の首を掴み、後ろへ押し倒す。

「当り前よ!」

「そうか…だったら!」

新子はメンドーサを押しのと、右腕を後ろへ引き、その拳へ力を溜める。周囲に赤と青のオーラが渦巻き、その渦はメンドーサの身から放出される魔力すら巻き込んで右拳へと集約されていく。

「ここてぶっ倒してやるぜ、『リベリオントリガー』!!」

新子の一撃が、一直線にメンドーサへと向かって行く。『東の反逆者』がメドウシアナの胸部を破壊した時のように、メンドーサの胸を

目がけて。

一撃はメンドーサの金色の胸当てに当たると同時にそれを粉々に粉碎し、守る物が無くなった胸に命中した。周囲の粉塵を巻き上げるほどの衝撃が起こる。

ガキン

「な……！」

砕けた胸当ての破片が全て落とされ、メンドーサの胸に当たっているであろう拳が見えた。が、しかし、それを見た新子は思わず言葉を失った。何と、自分の拳が、真っ白く鋭い牙のある大きな口によって受け止められていたのである。釘のように並んだ牙が新子の拳にガツチリと食い込み、血が流れだす。

メンドーサの胸にも、別の顔が存在していた。今まで胸当てに隠されていた“セカンド・フェイス第二の顔”がついに解き放たれ、文字通りその牙を新子へと向けていた。

「これからお前に与えるのは蛇の試練よ！私が可愛いだけじゃないって事……その体に教えてあげる！」

メンドーサの目が黒く塗りつぶされ、黄色い瞳が輝きを増す。銀色の長い髪の毛は、四本の触手状に纏まり、まるで蛇のように自在に動き出し、見様によっては蛇の口に並ぶ四本の牙のようにも見えた。

メンドーサの先端が刃状になった髪が新子に襲い掛かり、その肩を斬りつける。

「きゃはははは!!」

拳が未だ第二の顔に噛みつかれたままで、離れることのできない新子に一方的に攻撃を加えていくメンドーサ。笑い声をあげ、蛇のような髪を振るい続ける。

「クツソオ……顔が二つたあ生意気な……!!」

「ぶっ飛びなさい!!」

拳のような塊を作ったメンドーサの髪が新子の顔面を殴りつけた。その勢いで新子の手は第二の顔から外れ、新子は地面を転がりながら吹っ飛んでいく。

床のヒビのある個所で引っ掛かり、そこで止まった。

「クソオ…」

「…もう終わりなの？本居新子ちゃん？」

メンドーサは新子の目の前にしゃがみ込み、顔を覗き込む。

「三年前、禍王様が幻想郷へ行って、負けて帰ってきた時があったわ。その時の話を聞いて、幻想郷の人里で生まれたとある人間に興味を持ったの。その人間って…もう分かったでしょ？でも結局、お前は別に何の力もない、フツウの人間だったようだけどね…」

「そうかい…だったら本当に、アタシが普通の人間か…もつと確かめてみないかい？」

「え？」

その瞬間、目にもとまらぬ速さで飛び上がった新子の不意打ちの飛び蹴りがメンドーサの顔面に直撃した。後ろへ仰け反るメンドーサに追撃を加えようと新子が前に身を乗り出したとき、メンドーサはそのままの勢いでさらに後ろへと下がった。

「今のは油断したわ！切断してやる！」

剣のように鋭くなつた髪を伸ばし、新子を切断しようと襲い掛かる。が、新子はその場をうごかなかつた。その顔には好機を見出した表情が浮かんでいる。

「新子の姉御オオオ!!」

二人の間に現れたのは、あのバットであった。バットはメンドーサの髪を口で受け止めている。

「よく来たな、待ってたぜ！」

新子はバットを手にすると、それを上へと振り上げた。バットはメンドーサの髪の一部を喰い千切ると、髪は溶けてオーラののような気へと変わり、新子の体に吸い込まれるように消えていった。

「一度ならず、二度までも私の力を吸収するとは…」

「これで、バットを合わせてこつちも顔が二つだ。対等に…やろうじゃねえか」

「人間がア!!」

逆上して襲い掛かるメンドーサの一撃をバットで押さえ込む。そのまま、体を回転させ威力を殺し、その回転の力を利用してバットを

スイングさせた。

一撃はメンドーサの胴体に命中した。が、彼女は先ほどように第二の顔でバットに噛みついた。牙がバットに食い込み、ミシミシと音を上げる。しかし…その時だった。

バキン

「ふん…」

メンドーサの顔に余裕の笑みが浮かぶ。

ところが、砕けたのは…第二の顔の牙だった。真っ白い牙がバットを噛み砕くことなく、逆にへし折られてしまった。第二の顔は叫び声をあげ、メンドーサの表情が苦痛に歪む。

「せエのオ!!」

次の瞬間には、もう一度振りかざしたバットによる攻撃が、メンドーサの頭部を捉えていた。

第23話 「誤算」

ついにマガノ国の支配から解放された幻想郷。しかし、再び魔の手が忍び寄るのも時間の問題だ。

本居新子、茨木華扇、そして二ツ岩マミゾウの三人は、マガノ国に囚われた人間と妖怪を救い出すため、新たなる旅へと出るのだった。地底での滞在を終え、月の民の力を借りてついにマガノ国へと足を踏み入れた新子たち。囚人たちを救うためのダイヤサカ奪還作戦は開始された。

三禍の一人、メンドーサを見事倒した新子たち。一方そのころ、単身でゲムルルと戦う事を選んだ勇刃は…

第23話 「誤算」

バットによる攻撃を頭部に受け、気を失ったメンドーサが、地面に音を立てて倒れ伏すころには、既にこのクリユサオルもとい輝針城のハッキングは完了していた。

「やったわ、輝針城を乗っ取れた！」

空中に浮かぶ城は、見る見るうちに配色が変わり、込められた魔力を全て妖力へと変換した。

「やっと、輝針城が私たち新レジスタンスの元に…」

機関部に移動した正邪は、壁の赤丸の印が描かれている部分に矢印を突き刺す。すると、輝針城はわずかに震え、その直後に動き始めた。城の窓から五本ほどの先端が矢印状に尖ったワイヤーが飛び出し、壁に突き刺さっていた戦艦ドウルジに巻き付いた。そしてドウルジを引っこ抜くと、大きな穴の開いた箇所が瞬時にして修復される。さらにワイヤーを引き寄せてドウルジを城と合体させ、さながら天守閣に銀色に輝く角が現れたようなデザインへと変った。

「さて、これを使いダイヤサカまで向かうぞ」

「そうね、早く増援が来る前に…」

「待てよ」

輝針城を王都の中心に向けて移動させようとしたとき、機関部の部屋に誰かが入ってきた。振り向くと、そこにはメンドーサとの戦いで傷を負った新子が立っていた。

「新子！大丈夫だった!?!」

「ああ…アイツはもう倒したぜ、下で寝てる」

「そう…」

「それでな、今から…ダイヤサカへ向かうのか？だったらよ、一人だけ…忘れてる奴がいるぜ」

「…あ!!」

その言葉に、華扇が何かを思い出したかのようにハッと口に手を当てる。

忘れてる奴…!

「アタシが、ソイツを助けて来る。だから、正邪…お前はこの城で先に行っててくれ…すぐに戻る」

「…了解した」

その時と、およそ同刻、王都の一角。

縦横無尽に軽いフットワークでその場を駆け、無数に放たれる拳の乱打。それと相見えるのは、十二本の鞭のような触手。致命傷すら恐れぬ無謀な突進が、逆に勇刃を生き長らえさせていた。

他にあるとすれば、かつて地底にて勇刃が新子と戦った時、彼の攻撃を避けて避けた新子の動き。それを真似することにより、さらにゲムルルの攻撃を回避することに成功していた。が、それでも勇刃は傷だらけ、最初に動かなくなつた右足の他に、今や身体中から血が流れ出し、既にボロボロであった。

ドギユ

ゲムルルの触手が勇刃の胸に直撃した。今までに蓄積されたダメージとあと一寸で即死を免れぬほどの深手と引き換えに勇刃が上げた功績と言えば、肩に有つた複眼一つ潰したことのみ。ゲムルルが

少し体の形を変えてしまえば無くなってしまいう傷なので、肉体的なダメージは無いに等しい。

だが、ゲムルルは攻めきれずにいた。

—何だ？コイツと戦い始めた途端、私の頭痛が更に悪化した…何でだ？痛みで…全神経を集中させることが出来んツ…！

ゲムルルの殺意をわずかにかき回すその念と、先ほどの透明化した新子から貰った二発のパンチが精神に与えた影響は大きい。ゲムルルは一步退き…

—コイツをこれ以上王都内部に近づける訳にはいかない！

—コイツを仲間近づける訳にはいかない！

双方の利害が、一致した。

しかし、ゲムルルの攻撃は徐々に勇刃の命を削っていた。血に染まりながら、もう10分近く猛攻を受け続けている。

「面倒クセエ…」

—何か来る！

ゲムルルの小さな悪態を聞き取った勇刃は、すぐに何かを感じ取った。腕を腹の前に丸め、背を見せたゲムルルの背中から無数の針が飛び出した。

—速い…避けきれない！

「串刺しの肉、一丁上がりだ…」

針は勇刃に迫る。左足の踵を返し、その場から離れようとした勇刃は、自らが流して地面に垂れた血により足を滑らせ、後方へ倒れ込んだ。

—転んで、上手い具合に回避したか…まあいい！

圧倒的な力を誇りながらも、勇刃を攻めきれない理由の一つに、歴然とした力の差があるといえるだろう。「いつでも勝てる」という確かな手ごたえが、もともと策略を練るタイプではないゲムルルの無策に拍車をかけた。

ゲムルルの読みは概ね正しい。いつかはゲムルルに軍配が上がる勝負、それは正しい。誤算があるとすれば、勇刃がそれでいいと思えば、ゲムルルがそれに気づいていない事だろう。

—まだ闘れる！俺は…また翔べる…まだ!!
しかし、それでも確実に、まるで、端っこだけを水に浸したタオルにもいずれ全体に水が染み渡っていくように、勇刃の命の限界は、刻一刻と近づいていた。

* * * *

「テメエ、ゴルアアアアアアア!!!」

「な…!」

その怒号に、勇刃とゲムルルは思わずそちらに目を向ける。そこに立っていたのは、血にまみれた右拳と、顔や胸に大きな傷を作った新子だった。

—上等、今度はアタシが奴を引きつけければ、その分勇刃への注意が散漫になって助かるに決まってる!

「お前もさつききの奴らの仲間か？人間!」

「その通り！来いやあ!!」

「ぬう…」

ゲムルルは触手の腕を新子へ向けて叩きつけようとする。新子は寸前でそれを避け、触手は地面を抉り取る。少し離れたところに立ち、高らかに叫ぶ。

「テメエの相手はこのアタシだ、来いよ単細胞!!」

「けえああア!!」

新子はさらに遠くへ逃げ、ゲムルルはそれを追いかけていく。その音を聞きながら、よろよろと歩いていた勇刃は、何かがこと切れたようにドツと地面に倒れ込んだ。

—気を失う訳にはいかない…このまま気絶すれば、そのまま…

「俺…は、まだ…やれる…」

地面を這うようにして、なお自分もまだ新子に加勢しようとしている。しかし、体の痛みが、気力が、文字通りの限界であった。

そして勇刃が額を流れる血を手で拭いた時、新子は宙に居た。建物の屋根の上から上へと渡る新子を、同じく後を追ってくるゲムルルが触手で撃ち落そうとしている。

新子が自分が思う最大の長所は、逃げる事であった。里で、初めて憲兵団を殴り倒し、30人近くもの追っ手から逃げおおせたのが14の時。勇刃のためこの場に参じ、ヒットアンドアウェイのかく乱戦法を選択した新子は概ね正しい。誤算があるとすれば…意識の違いである。

「あれ…？」

ふと後ろを振り返った新子は、ゲムルルが隣の建物の屋根の上で立ったまま、自分を追ってきていない事に気付いた。伸ばしていた触手を全てひっこめ、展開した背脚を元の位置へ折り畳み、背を向け、屋根から飛び降りる。

「追って来ねえ…！勇刃がやべえ…！」

新子や勇刃にとってゲムルルは警戒するべき重要な敵であるが、ゲムルルにとつての二人はそうではない。ゲムルルの任務は王都を守る事であり、主に敵を近づけない事を念頭に置いている。自分が“敵の排除”ではなく“王都の守り手”を任されている以上、こうしてゲムルルが王都の外側に向けて移動を始めたのは当然の行動であると言えるだろう。逃げた敵も瀕死の敵も警戒の範疇外なのである。

新子がさっきの場所までたどり着くと、勇刃は生きていた。位置から考えて踵を返したゲムルルの目に触れたのは明らかである。

「払って終いか、手前にとっちゃ…アタシも勇刃も、ただの蠅かよ!」
ゲムルルにとつて勇刃の死は全くの関心外。それは全身全霊をかけて戦っていた二人にかつてない屈辱を与えた。

「くくく…馬鹿野郎が、そうやってずっと王都の前でバカ面こいてやがれッ！アタシは勇刃を連れて、さっさと輝針城へ戻るぜ。ホラ」

新子が勇刃の腕を取り、肩を貸す。下を俯いていた勇刃は、よく耳を澄まさないと言えない程の、雨水が滴るがごとく小さな声で、た

だ一言、こう言った。

「チクショウ…」

新子が誤算に気付いた時、新たな誤算は生まれていた。

—勇刃とゲムルルは目が合った…！その時、勇刃は死を覚悟しただろう。アタシ達はそういう闘いに臨んだ！

ついさつき自分で語った冷静な言葉とは裏腹に、新子の臍腑は生涯最高の怒りで沸き立っていた。血まみれの勇刃をただ一瞥し、ここを通り過ぎたであろうゲムルルの表情を想像し、新たに生まれた誤算に新子自身が気付いた。

—その勇刃を、あの野郎は黙ってシカトしたあ？仲間を侮辱されたまま、黙って見過ごす？何のため？幻想郷のため？妖怪のため？人間のため？それで仮に任務を果たして、勇刃と握手を交わす？やったな、と…お互いに肩を叩きながら讚える!?仲間を侮辱…されたまま!!できるわけがねえ。

「有りえねエ…」

勇刃を支えている力を解いてしまった新子の肩から、勇刃が崩れ落ち、地面に顔をぶつける。

「お…前な…」

「あ、ワリイ。そのワリイついだ、ここでもう少し我慢してくれ。まだ面と向かって野郎の顔面に、パンチ一発も入れてねえからよ…。必ずお前の分もぶち込んでくるからよ!!」

—ここで冷静に新子を止めるのが俺の役目…。「正気か?」「よせよ、黙って他の仲間と合流しろ」「お前が俺に敵わなかったように、俺も奴には敵わなかった」…それが、俺の…!!

心ではそう思っているも…

「頼む新子…ッ!チクショウ、あの野郎…俺を…ゴミみたいな目で見やがった!!あのクソ野郎に、俺の分も…ッ!!」

「おう!!任せろ…」

新たな誤算、それは大切な物の重さ…。

「くそつ、頭痛が酷くなった…!」

ゲムルルは王都の外を指して、道なりに歩いていた。既に“通常形態”にまで戻っており、手で頭を押さええている。

—さっきの奴と戦ってからだ、頭痛が酷くなったのは…何か術でも掛けられたのか？それにどうなっているんだ、空ではさっきから大きな爆発の音が鳴り響いてる…。しまった、さっきのカスを殺しておけば頭痛は治まったかもしれないねえのに。しかし早く正面門まで行かなければ

「イライラするぜエ…!!」

そう言いながら、ガシガシと頭を搔きむしる。その瞬間。ゲムルルが視界の端に何かを捉えた。ゆっくりとそちらへ振り向くと、そこには新子が立っていた。

「よオ」

ズン

「何なんだよオ、ドイツもコイツもよオオオオ!!」

一度のジャンプで新子の目前にまで飛んできたゲムルルは、足を踏み鳴らし、腕を広げ、咆哮と同時に形を変えた。それは腹を括り身構えたはずの新子が一瞬にして態勢を回避に向けるほどの変貌であり、邪悪を具現化したかのような巨大な姿は、明らかに…破壊のみを求めていた。

ドゴオ

ギリギリその場を離れていた新子は、ゲムルルが叩きつけた巨大な拳を避け、それによる暴風や衝撃波も間一髪で回避した。

飛んでくる建物の瓦礫を潜り抜け、地面に倒れ伏していた勇刃を抱えてさらにこの場から離れようと走り出す。

「入れた…のか…？俺の分…」

「まだまだよ！必ず入れるから待ってる！その前に死なれちゃ困るからさっさと逃げ…」

直後、背後から刺した赤い閃光。振り向いた新子が目にしたのは、原形をとどめないほどに膨れ上がったゲムルルの姿だった。その身体は沸き立つ雲のように不定で、しかも周囲の建物よりも倍近く巨大であった。

ゲムルルは、生まれて初めて精神に過大なストレスを受けることにより、自身の本当の能力が実は王都を守る事とは著しくかけ離れた所であり、激しい怒りを糧にして体積と魔力の総量が急速に増大していくのを自覚した。

巨大化した直後に起こす大爆発は半径100メートル以上を跡形も無く消し去り、新レジスタンスの王都突入時に拳を叩きつけて作ったクレーターよりも遥かに大きな焼け跡を形成した。

爆発には大きな快感が伴い、その直後に体積の減少と強い喪失感に襲われた。

ゲムルルの主な能力は、“状況に合わせて体の形を変える事”で、今の“感情を糧に爆発を起こす”能力は、本人さえも知りもせず、今まで自覚できなかった隠された能力なのである。そして爆発の際に膨れ上がった時、ゲムルルは自身に組み込まれた「全ての妖怪の力」を引き出していた。

「とんでもねえ破壊力……あれを故意に引き出させ、無傷でいようつてのは虫が良すぎるか？しかし、それでもあの隙は……でけえな……」

間一髪、建物が壁になり爆発の衝撃から逃れていた新子は、崩れた壁の下から焼野原を見渡していた。あの爆発は王都の南区を壊滅させていた。

「怒らせて爆発させる……その瞬間の『タメ』はアタシが一撃入れるのにちょうどいい」

新子が描いた作戦は忘我したゲムルルの状況を含めてほぼ満点と言えるだろう。だが、ゲムルルの真価は爆発の後に有った。

快感の余韻と虚脱感のはざままで、この利己的な能力を如何に王都の守りに役立てるかを考えそのみに没頭しようとしていた。

—感情に流される事なく、この能力を使い王都を守る……すなわち、あの侵入者の排除に直結する！

禍王は、ゲムルルがいずれその身に組み込まれた妖怪の念に意識を左右されてしまうのではないと考えていた。ここ数十分の戦いで、ゲムルルは何度も何種類もの妖怪の特性を使用しており、その禍王の考えは現実に近いモノとなろうとしている。今の爆発で妖怪の特性を

過剰に使用したことによりゲムルルの頭は冴え、以前よりも知能も、成長を果たしていたのだ。

冷静さと知性を手に入れたゲムルルに対して、新子が負うリスクはあまりに高い。

第24話 「成長」

ついにマガノ国の支配から解放された幻想郷。しかし、再び魔の手が忍び寄るのも時間の問題だ。

本居新子、茨木華扇、そして二ツ岩マミゾウの三人は、マガノ国に囚われた人間と妖怪を救い出すため、新たな旅へと出るのだった。地底での滞在を終え、月の民の力を借りてついにマガノ国へと足を踏み入れた新子たち。囚人たちを救うためのダイヤサカ奪還作戦は開始された。

勇刃と新子と戦うゲムルルは、新たな能力を会得しようとしていた。それが、己を信じられない選択へと導くとは知らずに…

第24話 「成長」

王都南区は、大爆発の衝撃と魔力の波動により壊滅状態となっていた。傍らで、焼け野原の中央、大きな窪みのクレーターの底には、ゲムルル。

—怒りで我を忘れ、獲物を求めて徘徊する愚かな怪物…そう思えばいい、思わせるのだ

「ああああああああ!!どこへ隠れやがった、出て来いイイイ!!
あああ!!」

—必ず奴はまた現れる。爆発寸前の我の隙を突くために…!

「うらああああああああ!!」
ゲムルルは偽りを怒りに身をゆだね、新子を誘い込もうと気炎を上げていた。

クレーターの端から50メートルほど離れた地点には、半壊した家屋の壁に勇刃がよりかかり、目を閉じていた。そしてゲムルルの怒りの声を聞いている新子。

「そうだな、勇刃…お前に、奴に一発入れるって約束したもんな…。
今がチャンス、だからな!」

新子は走り出した。

クレーターの中に居たゲムルルは、上で何かの気配を感じ取り、振り向いた。

「元氣だな、バケモン」

その声をかけてきたのは新子だった。

「会いたかったぜえ…ゴキブリ野郎」

― かなかった、私の罫に…偽りの怒りの演技に！

「降りて来いイイ、オラア!!」

「いちいち声がでええなア」

「うるツツツツ…せえあああ!」

― さあ、いつでも爆発してやるぜ。正確には爆発のフリだがな…。我が爆発する寸前の膨張…奴は必ずその隙を突いてくる。だが!“冷静”に“平常”に怒れば膨張は必ずコントロールできる! 奴が我の隙を突こうとしてできる隙を、我が突く!!

「殺す!! テメエも仲間も、跡形もなく消すぞ!!」

「お前、馬鹿だろ。そりや無理だぜデクノボー、テメエはさつさと外行って、いつも通りバカ面しながら星の数でも数えてな」

「フ フフフ フ フフフフフフフフフ」

直後、ゲムルルは再び膨張した。その巨大に膨れる身体には、様々な妖怪の顔が浮かんでは消え、牙や角、細い腕や太い腕、髪の毛や体毛が全身に見え隠れする。

それを見た新子は、一気にクレーターの斜面を駆け下りた。

― いける! このタイミングなら確実に一発! いや二発!! 奴の顔面に渾身のパンチぶち込んで爆発前に回避できる! 喰らえ豚野郎!! まずは勇刃の分!! その後も勇刃の分だ!!

しかしおかしいなアタシ、アイツの事そんなに好きじゃねーのに、むしろいけ好かねー根暗野郎とか思ってたのにいつの間にかアタシの中で仲間にならなくて、なんでこんなムキになって仇討としてんだろ?

仇つっ―か多分アイツ死んでねえけど。ま、やっぱ一緒にここまで来たのがでけえな。命懸けで何かやれる奴なんて無条件で友だちだ

ろ、ってツムグも言ってたしな。

なのにこのクソツタレ、そんな勇刃の覚悟を足蹴にしやがって。死ぬ気で戦って殺される事すら覚悟している相手をシカト!?有りえねえだろ、グチャグチャ曖昧野郎がアア…!

それに、華扇だよ、華扇。勇刃と二人でちよつといい感じになっただら、そう思うと華扇の分も一発入れなきゃだめだな。

あくくマジますますムカついてきたぜ!アタシの分も合わせて四発入れる!

…ってアタシスゲエな、今人生で一番頭回転してんじやね?まだ拳振り上げてる途中?おそらく四百文字以上考えてるけど…

アレ?アレアレ?

これってアレじやね?時間がゆっくり…今まで出会ってきた奴ら…ツムグとか華扇とかの顔が浮かんで、周りがスゲースローになるって…

死ぬ前の…

ズツ

—膨張を、途中で…止めたア!?

新子が見たのは、膨張を止めて元の大きさにまで戻り、にやりと不気味な笑みを浮かべるゲムルルだった。

—やられた、コイツ…クールだった!!止め…られねえ…勇刃、ワリイ、しくじった…!!

目の前に迫る、超巨大な、血のように真っ赤な拳。

—こりや、終わったな…。華扇、マミゾウ、正邪…後は頼んだ…

ビギヤアア

その時だった。雷鳴と共に上空より降ってきた雷が、ゲムルルの脳天に直撃し、全身に流れた。ゲムルルは完全に硬直し、体に電気を纏わせたままプルプルと震えている。

「ツ…ツ…」

それを見た新子は目を開け、真つすぐにゲムルルを見つめると同時に、振りかぶっていた拳を、その顔面へ叩きつけた。

―雷…？硬直してる？チャンス!!

「うおおおお!!」

更に、二発、三発、四発、それを越え五発、六発、七発…

「膨らんでなきやあ、テメエなんざああああ!!何発でもオオオオ!!!」

ドグシャアア

最後にゲムルルの顔面に強力な蹴りを入れると、そのままの勢いでクレーターの斜面を全速力で登り始めた。自分でも何をしたのかよくわからないまま頭がフワフワし、心臓がかつてないほどにバクバクと脈打っている。

「やったーやった!!やった!!無理、もー無理!やっべえアタシ完全に死にかけて!三途の川見えたア!さっさと勇刃を連れて戻らねえと…」

新子は斜面を登り切ると、感極まって言葉にならない叫びを上げながら、拳を空へ振り上げた。

「ひゃあああつはアアアアアアアアア!!フウウウウ!!」

―…何が起きた?決まってる、別方向からの攻撃に、気付かなかったのだ…。誰だ?仲間か?だとすれば…

ゲムルルは口の端に付いた血を舐めとると、大股で強引に斜面を登った。そして、当たりを見渡すが、既にその場には誰も居なかった。

―もう居ねえ?馬鹿な…こんな短時間で、このまっ平らな焼野原から出られるか?さつき奴らがわらわら出てきた時もそうだった…何もない場所から、いきなり攻撃を喰らった。つまり、奴らの仲間に、自由に出たり消えたりできる奴が居るな…

正確には、誰も居ないと思っ込んでいた。新子はまだゲムルルの目の届く範囲を走っていた。だが、神子のマントの能力で姿を隠していたため、気付かれなかっただけなのだ。

しかし、先ほどの雷はこのマントを使ったわけではない。その点では、ゲムルルの憶測は間違っている。では誰が、あの雷を使い、新子を死の窮地から救ったのだろうか?

「やったぜ勇刃！奴に八発もぶち込めたぜ、感謝しな」

「そ…そうか…八発、丁度新レジスタンスのメンバー分、だな…」

勇刃の元へと戻ってきた新子は、自分の体験を聞かせていた。

「喋るな。待ってる」

新子は自らの手を勇刃の体へ触れた。その手から溢れた光が、勇刃の傷を癒していた。新子の能力による、自分の高まった治癒力を他人に分ける力である。ここに居ても感じるゲムルルの魔力は、容易に勇刃を治療できるだけの力を新子に与えてくれていた。

「おお…痛みが引いて…」

「完全にや無理だがな。アタシに触れながら、仲間の元へ急ごう」

新子はもう一度勇刃に肩を貸した。少し回復した勇刃は、何とか自分の足も使おうとしている。これを見て、新子は少し微笑むのだった。

同刻。勇刃を助けるため、新子を追ってこの場所までやってきていた華扇。華扇はこの焼野原を見て、言葉を失っていた。

「何があったのよ、ここは…」

まさか、勇刃も、それに新子もすでにやられてしまったんじゃ…！最悪の予想を思い浮かべながら、焼け野原に点々と残る半壊した家屋の影から影へと移動する。

「ゲムルルは…戦っているのなら、奴も近くに居るハズ…」

そう呟きながら、慎重に速足で歩く。

「よオ、テメエか？エスパ―は」

そこに現れる、“警戒形態”のゲムルル。華扇は冷や汗をかきながら、ゆっくりと振り返る。

直後、一瞬にして“殲滅形態”へ移行したゲムルルは、鞭の触手を華扇へと叩きつけた。血をまき散らす華扇、追撃を加えようとするゲムルル。

と、そこに…。

ビシヤアア

「ぬあああああー！」

—またか!?

再びゲムルルを正確に射抜く落雷。電流により硬直し、動きが止まる。

「何なんだア、今のは…?」

そう呟くと同時に、ゲムルルは膨れた。先ほども見せた、あの膨張だ。今度はコントロールなどできない。できる精神状態ではなかった。受ければ動きが止まる落雷を続けて受け、流石のゲムルルの肉体にもかなりの痛みとダメージが蓄積されていた。それによる怒りは、以前のような冷静な怒りではなかったのだ。

「殺す!!」

怒りによる明確な殺意を胸に膨張したゲムルルは、華扇へと腕を伸ばす。華扇を捕まえ、自分から逃れられない状態で爆発する、という手段を無意識に取ろうとしていたのである。

ドムン

しかし、膨張するゲムルルの顔を、咄嗟に現れた新子が殴った。新子はマントにより姿を隠しており、ゲムルルは「殴られた」という感覚だけを、華扇はきつと姿を隠した新子が攻撃をしたのだとすぐに理解した。

それを喰らったゲムルルは最大にまで膨らみ、大爆発を起こした。

再び爆心地となった南区はもはや原型を残していない程変わり果てていた。焼け跡には今度こそ何もなくなり、建物の残骸も、燃える木も、全てが木っ端みじんに吹き飛ばされていた。

—…掴んだ!今の感覚だ、爆発を操作する…。もう一度、もう一度やれば完全にモノにできる…!!

ゲムルルは虚無感の中、自分の手を見つめていた。

—怒りだ、忘れる前に怒りを溜める…

「三度だ!!いきなり攻撃を喰らったのは!!クソ、ムカつくぜ!ゴミカス共がアアアア!!」

ゲムルルはまだ気づいていない。

―冷静に怒り狂え！それを肉体で、力で表現するのだ！

何故、相反する感情が同時に成り立つか。そして、己の現状に。

展開した背脚は形を変え、コウモリのような翼へと変形し、額からは黒い一本角が伸び、その表情は以前よりも知的で人間に近いものとなった。

「今分かった：力とは何かに向ける物なんだ」

―私の力は妖怪の力：ならばその力を使い、奴らを排除する！

クレーターの中から飛び出したゲムルル。その前方に、姿を隠した新子と勇刃が居た。新子はマントを勇刃と二人で被り、二人同時に能力を発動することができていた。しかし、流石に三人はマントの大きさ敵に考えて不可能。防壁で爆発の威力を殺し、致命傷を避けた華扇にもマントを被らせ、敵に認識されなくするのは…。

「オラア!!」

ゲムルルは翼で飛び、宙を自在に飛び回る。「吸血鬼」の翼と、「鴉天狗」の飛行能力をも身につけていたのだ。

そして滑空で勢いをつけ、華扇にタツクルを食らわした。更に、追撃と言わんばかりに触手のような鞭に変えた腕で、華扇を撃った。

「ぐうう…い」

その場にうずくまる華扇。

「なんて楽…：さっきの二人に比べれば、追いつめるがなんて楽なんだ」
勇刃と華扇は、総合的な戦闘能力で言えば、ほとんど差は無いといえる。それを、ゲムルルが勇刃より華扇と戦う方が楽と思うのは、すなわち、ゲムルル自身が戦闘において勇刃と戦った時よりも成長しているからだと言えるだろう。先ほどまではただ殺意や怒りのままに攻撃していたゲムルルが、今や一手二手先の相手の行動を読み、敵の気の流れを敏感に察知し、自分が行える最善の攻撃を行う。

「はあ…はあ…」

初撃のタツクルが直撃したことにより、華扇の行動選択の余地と戦う意志を大きく削いだゲムルルは有利な状況に立っていた。今もお、ゲムルルの鞭が華扇の体力と精神力を奪い続ける。

最早、なけなしの気力を振り絞っても立ち上がる事すらできない限

界に、たった数秒で追い込まれてしまった。

「…良いことを思いついた」

ゲムルルは口の端をにやりと曲げると、膝を立てる華扇の襟元を掴み上げ、剣のような刃に変化させた腕を突きつける。

「おい、さっきの奴と人間。その近くに居るんだろ？出て来いよ、さもないと…コイツを殺すぞ」

この場でゲムルルは、人質を取るという手段を考え付くまでになっていた。

—最初に、喰らった二発…。今考えれば、簡単な事。見えないのに攻撃が当たる、攻撃が当たるのに見えない…つまり透明なだけ！奴らの仲間に自分だけじゃなく他人も透明化できる奴、もしくは透明になれる道具か何かを所持してるって事だ。最初はこのピンク髪がそれではないかと思ったが、それが使えるなら今使っているはず。やはりあの二人のどちらか…！

「いいのか？本当に殺すぞ」

ゲムルルと華扇には認識することもできないが、そのすぐ近くに新子と勇刃は居た。

—どうする…!?ここは華扇を置き、すぐにでも輝針城と合流するのが筋…！しかし…

—彼女を置いて、行けるはずがない…!!

「そこに居るのなら…私はいいいから、構わず…はやく仲間の元へ…!!」

新子と勇刃では、いくらか的に姿が見えない状態でどんな攻撃を繰り出そうとも、ゲムルルを倒す術はない。つまり、このままここを去るか姿を見せるか、その二択しかないのだ。

結果…二人が取った行動は…

「ほう、そこに居たのか」

姿を見せる事であった。

「これでいいだろ…早く華扇から手を離せ…！」

「まだまだ、お前がつけてるそのマントだろ？姿を隠す道具…怪しいもんな」

「な…！」

「それを外して前に置け」

そう言いながら、もう一本腕を生やし、その腕の刃も華扇に突きつけた。新子はマントを外し、自分の前に置いた。その瞬間、目にもとまらぬ速さで伸びた触手が、瞬時にマントを微塵に破り去った。

「これでよし。このピンクは解放してやる…ただし、お前らだけは殺す」

「何だと…」

「馬鹿が、これで王都に仇なす連中を逃がしてやるわけねえだろ。残るお前らをここで排除する」

「テメエ、ハメたのか!？」

「そうだ。お前らの次にこのピンクも殺して、仲良くあの世へ送ってやる」

ゲムルルはゆっくりと、二人の元へ歩み寄る。

「…ふん、どう見ても実力は我の十分の一以下…だ」

怒りのエネルギーを更なる形態へ変化するために使用する術を覚えたゲムルルの頭は冴えていた。戦闘の最中に驚異的な速さで進化した、新子たちとの実力差を更に大きく引き離れたはずのゲムルルが抱いていた感情は、敗者への賞賛であった。

「なのに、スゲエな、お前ら…」

彼女らがゲムルルに持つ印象から考えればおそらくこの場に最もそぐわない言葉だったことで、逆に偽りないゲムルルの本心が出たのだろうと、素直に受け入れることができた。

「スゲエって思ったからこそ、キツチリやらなきやな。ケジメ…というのか?ま、全員一撃で楽にしてやるから、動くなよっ…」

「ゲームオーバー、ね…。今のコイツになら、殺されてもいいか、っ
て思っちゃってる…」

「じゃあな」

「殺してはダメ」

「…!?誰だ?」

突然、ゲムルルの頭に響いた、明らかに自分のモノではない声。その声が聞こえた途端、ゲムルルは動く事が出来なくなつた。殺せるのに、これでコイツらを始末できるのに、この声に動きを止められる。

—また、頭痛が酷く…

「…クソツ」

ゲムルルは腕を引っ込めると、くるりと反対側を向く。

「待て、殺さないのか?」

勇刃が問う。

「…殺す気も失せちまつた…」

「だったら…もう一度勝負!!俺と闘え!!」

勇刃がそう叫んだのは、さっきのゲムルルの言葉に己を揺さぶられたのと、華扇を危険にさらした自分を戒めるため。

しかし、ゲムルルは…

「やなこつた」

その身体を見る見るうちに巨大化させ、恐竜を思わせるような巨体な姿の竜へと自らを変じさせた。そして勇刃を跨ぎ、超える。

「な、待て…何処に行く気だ!」

「王宮だよ。お前も一緒に来るか?我はゆつくりと行くぜ」

「…ツ!」

最早、侵入者を多く王都へ入れてしまった事で、ゲムルルは開き直っていた。これ以上王都を守っていても無意味、ならば王都の中心である王宮を、そして主である禍王を守るのが自分の役目だと。

そしてそれを最優先とするなら、この場で三人とも殺すべき。理解しながらそれを実行できない自分に怒りとは異質の苛立ちを覚えていた。

「もしも、次に王宮で出会った時は、いつでもいいぜ。その時は我と対等だと思つてやる。今は殺すまでもねえ、つて事だ」

戦いの中で敵から教わった戦いの深遠。それは乏しかったゲムルルの知性を大きく刺激し、冷えた感情は逆に物事を単純に考えられなくさせていた。

これが成長なのか、ゲムルルには分からなかった。

ゲムルルが竜に変身しゆつくりとその場から飛び去った後、新子と勇刃は華扇の元へと駆け寄った。華扇に肩を貸し、立ち上がらせようとする。

パアン

「な…」

しかし、華扇は新子の頬を引つ叩く。

「馬鹿者…私に構うなって、言ったでしよ…」

「無理に…決まってるだろ。アタシも勇刃も、お前が居なくなる選択をする筈がねえ…だろ」

「…でもいいわ、奴は『いつでも』と言った…ならば今は追うべきじゃない。今すぐ、私たちは仲間の元へ戻って…」

新子の治癒の力を借りて、何とか立ち上がる華扇。自分たちは一刻も早く輝針城へ戻り、正邪やマミゾウたちと合流することが必要と考えた。

「無事だったようだな」

その時、背後から聞き覚えのある声があった。まさか、と思い振り向くと、そこに居たのは、赤い服に紫色の髪をした…そう、八坂神奈子だった。

「アンタ、八坂神奈子…なんで…」

「詳しい事は後だけ…なあに、私も行くべきか…と思ってね。遠距離から雷だけを落としてお前たちを援護してた」

二度落ちたあの雷は神奈子が降らせたものだったのか、と理解する。乾を創造する程度の能力を持つ神奈子は森羅万象の天を司る。大雨を降らせようが台風を起こそうが、果ては雷を落とすも自由自在である。

「どうやら、アンタらの仲間は今大変なことになってるよ。急いだ方がいい」

第25話 「ダイヤサカ奪還戦」

ついにマガノ国の支配から解放された幻想郷。しかし、再び魔の手が忍び寄るのも時間の問題だ。

本居新子、茨木華扇、そして二ツ岩マミゾウの三人は、マガノ国に囚われた人間と妖怪を救い出すため、新たなる旅へと出るのだった。地底での滞在を終え、月の民の力を借りてついにマガノ国へと足を踏み入れた新子たち。囚人たちを救うためのダイヤサカ奪還作戦は開始された。

新子たちがゲムルルと奮戦している頃、三禍の一人、バアルが指揮する大艦隊が輝針城の前へ現れていた。

第25話 「ダイヤサカ奪還戦」

八坂神奈子が新子の前に現れた時から、時間は20分ほど前、新子が降り、その数分後に華扇が降りた後の輝針城。その前方には、マガノ国の艦隊が結集し密集しつつあった。

「なんて数だ…空が見えねえ…」

「敵は今度こそ本気で私たちを倒すつもりらしいな」

敵の艦隊は、空が見えなくなり、その向こう側も全く視認できない程の夥しい数であった。その艦隊を指示するのは、三禍の一人であり、憲兵団長兼マガノ国軍旗艦長、バアルであった。

「メンドーサめ、哀れな奴だ。意気揚々と侵入者退治に赴いた方がいいが、自分の城を奪われるとはな。だが取るに足らない小さな城だ、この…『ダイヤマガノ』に比べればな!!」

既に輝針城は、王都の中心、王宮の近くにまで接近していた。王宮を守るかのように密集する敵艦隊、その奥には、あのダイヤサカが鎮座していた。今や“ダイヤマガノ”という名に改名され、その艦橋最上階で、バアルは高らかに声を上げた。

「そしてこのバアルが指揮する限り、必ずやあの愚か者たちも滅されるだろう。全艦、主砲門展開せよ」

バルの指示に応え、戦艦軍の主砲が開き、キュルキュルと音を立てながら輝針城一点に向けられる。およそ二百隻近くある戦艦の砲撃、放たれれば輝針城は一たまりもないどころか、瞬時にして破壊されてしまうだろう。それを想像した正邪は命令を下す。

「輝針城、砲撃を撃ちつつ正面を向いたまま上昇」

元々、敵の奪われてしまう前の輝針城は砲門等の遠距離攻撃機能は持たなかったが、恐らくメンドーサが付けたしたのであろう武装はそのまま残しておいていた。

腹を見せずに、被弾面積を最小にして何とか避難しようとしている。

「妖怪共が、どう足掻こうが絶対に逃げられるものか。消し飛ぶがいい、一斉発射!!」

その時、敵の二百隻全ての戦艦が、魔力による砲撃を放った。雨のように降り注ぐ光線を前に、正邪も焦りの表情を浮かべ、マミゾウや権たちも、もうダメかと目を瞑る。

カツ ドゴア

しかし、突然当たりがサツと暗くなった。そして、正邪は見た。何か巨大な塊が輝針城の目前に現れ、敵の砲撃を防いだのを。

「な、何だ…何が起きたんだ…!?!」

バルが思わず声を上げる。

「な、何かが…私たちを守った…アレは土塊? 岩か?」

「その通り! 今投げたのは、かつて天手力雄命が持ち上げ投げ捨てたという岩戸さ」

「お前は…八坂神奈子」

正邪は驚きの声を漏らす。

「そうさ。アンタらが心配で、私も地底からやって来たんだ。さア、まだまだ行くよ!!」

神奈子は自らが掴んでいた二本の注連縄を思い切り引っ張った。

一本は先ほどの岩戸に繋がっており、もう一本は…

「大昔に引き抜かれて天界に成ったっていう要石!!」

その二つの超巨大な岩塊を、神奈子は鉄球でも振り回すかのよう

に、敵艦隊に向けて投げつけた。岩塊は敵戦艦たちを粉々に破壊し、なおも勢いを落とすことなく敵の戦力を瞬く間に削いでいく。「ふん、群れてる分当たりやすいな」

「と、突然現れた敵の援軍が土塊を振り回しぶつけて…兵力の損耗甚大！回避しろーッ!!」

「駄目です！密集陣形を取っていたため、互いに衝突して…土塊に向けての闇雲の砲撃が同士討ちを招いて收拾が…！」

「そ、そんなバカな…」

バアルは小さくつぶやく。

マガノ国艦隊軍は、自分たちの高度な軍隊を見ただけで侵入者の妖怪共は恐れをなすと思っていた。自分たちは安全に遊び半分で敵を狩るつもりだったのだ。

しかし、その油断と慢心から、作戦を立案しなかった。通常であれば、挟撃や包囲をするべき「対輝針城戦」をそうしなかったことにより、今、彼らは混乱に陥っていた。巨大な質量を有する岩と土塊に、彼らは陣形する保ち得なかった。

そして、無事な戦艦から出撃した戦闘鎧を纏った憲兵団は、ある者らと出会う事に成る。

そう、新レジスタンス、である。

「ようやく使う時が来たかの」

マミゾウは腰に挟んでいた気の棒きれを取り出し、それを妖術で大きな弓矢へと変化させた。その弓矢を構え、流星の如き射撃を放つ。矢の通り道には何者の憲兵をも残さず、敵兵を薙ぎ払う。

その軌道から逃れた者は、犬走椀の振るう改造された腕により八つ裂きにされ、バンキの操る四つの頭によって倒される。そしてその間にも、神奈子が降りまわす二つの塊により、どんどん戦艦が破壊されていった。

「やるな、八坂神奈子」

「だろう？今更、私も戻れないんでね」

「…何と言った？」

「おっと、何でもない」

「では一つ、頼まれてくれるかのう」

「何だ、マミゾウ」

神奈子の元へやって来たマミゾウに話しかけられ、神奈子は手を止めた。

「お主のおかげで、見てくれ…敵陣の中に十分な通り道が出来た。これより、儂はあそこでふんぞり返っている大将の元へ向かう」

マミゾウは目で、ダイヤサカの艦橋の上に立ち、仮面の顔でじっと空を見ているバアルを指した。

「だがそれも、時間を稼ぐためじゃ。だから、お主はその間に新子と華扇を…ここへ連れてきてくれい。それまで儂らが粘って見せよう」

それから、神奈子は新子たちの元を目指す間に、強力な魔力を察知した。ゲムルルのものだ。ゲムルルと新子らが戦っている気配を感じ取った神奈子は、二度雷を使い助けた。

その後、ゲムルルが去り、神奈子が新子と勇刃、そして華扇の元へやって来て、今に至る。

「そう、か…じゃあ、皆アタシらを待ってるって事か」

「ならば、行くしかないだろう、今すぐに」

「ええ、急ぎましょう。ダイヤサカは、もう目の前よ」

新子たちが神奈子と共に輝針城へ戻り始めたのと同刻。

マミゾウは、敵艦隊をほぼ壊滅させて露わになった、ダイヤサカ：その艦橋の上に立つ、憲兵団長バアルに戦いを挑もうとしていた。

「ふん、わが軍の艦隊を、八割方壊滅させてしまうとは…。だが、このダイマガノが…突破できるかな？」

バアルがパチンと指を鳴らすと、ダイマガノに異変が起こる。王都に連結していた部分がガラガラと崩れ去り、ダイマガノは宙に浮かび上がる。

前部にある髑髏のような顔が、悲鳴とも雄叫びともつかない轟音を上げる。すると、ダイマガノの真っ黒な船体の装甲に、ピシリと赤い

切れ込みが入った。切れ込みはどんどん広がり、徐々にそこから割れていく。

ダイマガノはどんどん形を変え、ついには人型へと変形を遂げた。細い手足、肩から伸びる翼のような部位、そして前部の顔は胸部に移動し、本来頭部がある場所には第一艦橋が聳える。

結果、ダイマガノは全長二千メートルを超える超巨大ロボットへと変形したのである。

「な……こんな……！」

「奴らめ、私たちのダイヤサカにも、あんな劣悪な改造を加えていたとは……!!」

輝針城内の樯がそう言った。

「だが……喰らえ、砲撃発射……!!」

樯が輝針城の砲撃を発射した。砲弾が真つすぐに飛び、変形したダイマガノ、そしてその頂点でこちらを見下ろすバアルへ向かって行く。

直後、砲弾はダイマガノの頭部の艦橋へ直撃した。もちろん、バアルにも命中しているだろう。が、晴れた黒煙の中に見えたのは、服に付いた煤を払い落とすバアルの姿であった。

「ま、そうだろうとは思ってたけど……そこまで余裕そうだと流石にムカつくなあ」

「……マミゾウよ、聞こえるか?」

「何じゃ?」

ダイマガノの変形を前に、完全にその姿に目を奪われていたマミゾウが正邪の言葉に我に返る。

「アレの胸部の奥に高エネルギー反応を確認した。それが恐らく、アレの動力源だろう。それを破壊し、できた空洞にこの輝針城をハメこんでしまえば、ダイヤサカの機能を奪えるだろう……」

「そうか、では僕は……あの者の相手をしてくれよう!」

マミゾウの見つめる先は、ダイマガノの頭部の艦橋……今だその頂上で腕を組みこちらを見下ろす、バアル。

「お主が大将か? 僕と一戦交えてくれんかのう」

そう言いながら、バアルへ向けて一気に五本もの矢を放つ。

「愚かな妖怪が、また一匹やって来たな…」

バアルは自身の手の平から大きく湾曲した、不思議な形状の剣を飛び出させ、五本の矢を一瞬で叩き落として見せた。

「憲兵団長、バアルだ。我が剣技の前に葬ってやろう」

その時、横から現れたもう一つの影がバアルに迫る。しかし、バアルはそちらに顔すら向けずに、もう片手から飛び出させた剣でその影の攻撃を受け止める。

「椀か！」

その影は椀であった。

「私だって、お前たちに殺されたかつての仲間のために戦う！」

椀は、今度は改造された右腕を使い、バアルの剣を破壊しようと思ひかかる。だが、バアルの腕と一体化したかのような剣は傷つく様子すらなかった。

「それは…！」

「『輝剣マガツキ』だ。私だけが使う事の出来る、私の体と同化させられる最強の剣だ」

「御託はいい!!」

椀とマミゾウは、バアルの両サイドから怒涛の攻撃を繰り出す。だが、バアルは二人をそれぞれ片腕のみで全て攻撃を受け切つて見せる。

攻撃を弾かれた反動により、マミゾウは大きく後ろへ下がり、バアルと同じく艦橋の上に着地した。が、バアルはそれを見ると、仮面の下の顔の血相を変え、マミゾウの腹を蹴り上げた。

「このダイマガノに、妖怪如きが土足で立つことは許さん」

椀が再び右腕を振るい、バアルに飛びかかる。

「『伸剣』」

その声と共に、バアルは自身の体と同化していたマガツキを手に取り、マミゾウへと向ける。すると、剣は素早く伸び、椀の腕を切り裂いた。

「うぐ…!?!」

「素直に禍王様から賜りし魔力に身をゆだねれば、こんな事も出来る」
今度は分割した二本のマガツキを両手に取り、それを高速で回転させる。

“回転剣”

その回転する剣で、楯を斬りつけた。その背後から、態勢を立て直したマミゾウが迫る。

「さらに極めつけの…」 発射剣”だ！」

マガツキを頭上に掲げると、無数の剣に分離し、それらが全て一斉にマミゾウに襲い掛かった。回避しようとすると共に何本かの剣を叩き落とすが、残った剣が肩や胸に突き刺さった。

「ぬあ…！」

「全く物分かりの悪いケダモノ共だ…。いくら逆らおうと幻想郷に住む者どもは我らマガノ国に支配されるべき存在に過ぎないのに」

「そんな事は無い!!」

「その通りじゃ、だからと言って、おとなしく従う訳にはいかない!造られたお主らと違って、我々には生きる意志があるのだから!」

「何もできない愚かな獣風情が生意気な!その意志もすぐに潰えるというのに」

バアルの実力は、圧倒的であった。マミゾウと楯が本気でかかって、そのマガツキと剣技の前には文字通り手も足も出ない。マガツキはバアルの肉体のあらゆる箇所と同化させ収納することができ、出すも入れるも、形を変えるも自由自在。ゲムルルが”状況に合わせて体の形を変える能力”で、メンドーサが”第二の顔を持つ能力”であるならば、これがバアルの”マガツキを自在に操る能力”である。

「マミゾウ」

楯が小さく耳打ちをする。

「…、…、…」

「…分かった」

マミゾウがそれを聞いて小さく頷いたのを確認すると、楯が一気にバアルへ距離を詰める。

「何もできないかどうかは…見せてやる!!」

楯は右腕に渾身の力を込める。筋肉が膨張し、そこを中心に妖力が練られていく。そして、バアルの顔面へとそのカギ爪を振るった。

バアルの仮面に真つすぐな亀裂が入り、やがて砕け散った。現れたバアルの素顔は、傷があるのを除いて、新子にそっくりだった。しかし、顔つきは邪悪に歪み、彼が正真正銘、所詮禍王に作られた魔獣の一種に過ぎないという事を再確認させられる。そして、バアルの頬は少し切れ、血が垂れる。が、それきりだった。

バアルはすぐに笑みを浮かべ、楯の腹部にマガツキを貫通させていた。

「か…は…!」

「死ね」

マガツキを一気に引き、楯の体を両断した。楯は宙を舞い、はるか下の地面へと落下していった。

「貴様…!!」

マミゾウはバアルに近寄り、矢を変化させて生み出した刀で斬りかかる。が、やはりマガツキに受け止められ、ビクともしない。

「己の器も知らない愚かな妖怪よ…」

バアルは刀をへし折ると、マミゾウの顔を掴み、握りつぶすかのようにつぶすかのように締め付ける。

「お前に出来るのは、ここで泣いて命乞いをするくらいだ…。そうすれば痛くないように殺してやるぞ」

「ほっほっほ」

「何がおかしい?」

「馬鹿な奴じゃ、儂は今笑ったのじゃぞ。そしてな…」笑うべきだと分かった時は、泣くべきじゃあ無い」のじゃぞ…!」

「何…?」

「儂に出来るのは…時間稼ぎじゃ」

その時だった。はるか遠くから雷の如くこちらへ迫る、二つの影が見えた。一つは赤と青のオーラを纏い、一つは巨大なドリルを前へ向けている。

「…まさか!」

バアルがそう言った時にはもう遅かった。ドリルはダイマガノの胸部装甲を破り、内部へと侵入していた。

「時間稼ぎ……そういう事か……！お前の妖術でさっきの白狼天狗そっくりな分身を作り、私にそれを斬らせ、白狼天狗をあのか城へ帰したのだな……その隙に、あの者たちをダイマガノへ……」

「その通り！全ては、あの二人がこのデカブツにたどり着くまでの時間稼ぎ。囷である儂に偉そうな能書きを語っていたお主の姿はお笑いだったぜい。ふおつふおつふお……」

「この……塵共がアア!!」

バアルは逆上し、後ろへ飛んで距離を置くマミゾウを追う。

そのころ、輝針城。ダイマガノを初め、残りの戦艦から発射されるマグツヒヤや砲撃が集中して襲い掛かっていた。砲撃が命中し、城は空中で大きく揺れ、ダメージを受けていく。

「これ以上は防げないぞ」

正邪と共に機関部に居たりグルが苦い表情を浮かべながらそう言った。

「だが、ここで逆転して見せるのが天邪鬼、それが新レジスタンスだ」

「新レジスタンスよ、城内へ戻れ」

「何だって？まさか……アレをやるつもりか!?!」

城の外で憲兵団や魔獣たちと戦っていたバンキは、あらかた敵を一掃するとそれに従って城内へ戻っていく。

「そのまさかだ」

正邪は機関部に突き刺していた矢印に妖力を送り込む。すると、輝針城が真っ二つに割れ、そこからさらに別の塔が出現し、見る見るうちに城が変形していく。

「レジスタンス最終防衛システム……」輝針城——

内部に格納されていた角の生えた頭部が出現し、輝針城は巨大な人型へと変形を遂げた。そう、200年前、妖怪とマガノ国軍との“幻想郷の戦い”において、最終的に敵軍を打ち破った、あの形態である。

輝針城が正邪の手に戻り、その機能を取り戻したことで、かつてこの形態への変形を可能としていたのだ。右腕には、壊れかけの戦艦ドウルジを剣でも持つかのように握りしめている。

「何てこと…なの」

その時、機関部へ何者かが現れた。

「メンドーサ…」

「お前…何故ここに！」

リグルが、フラフラと頭を押さえながらこちらへ歩み寄ってくるメンドーサに対して攻撃の構えを取る。

「アンタ、鬼人正邪でしょ？知ってるわ、闘技場で何回か見た…。それにしてもこのクリュサオル、悔しいけど…私が乗ってた頃より、めちゃくちゃかっこいいじゃない…」

「クリュサオルではない。輝針城と呼べ」

「ま、どっちでもいいけどさ…。ねえ、聞きたいんだけどさ、もしも、アンタらがあのクツソダサイダイマガノを奪えたら、アレも…今よりずっと…カツコよくなるのかしら？」

「なるー！」

正邪はメンドーサの目を見ながら、即答で断言した。その正邪の言葉を聞いたメンドーサは、何かを決意するように一度目を閉じた。

「そう…そう言われたら気になるじゃない…。しょうがないから、手伝ってあげるわ」

「では共に行こうぞ。我々の希望を…取り返すのだ!!」

一方、ダイマガノ内部の動力部へとたどり着いた新子と華扇。マミゾウたちの時間稼ぎの甲斐あって、ようやく仲間たちが戦っている戦場へと戻ってきた。

「アレが中心の動力源ね！」

二人の目の前には、赤黒く輝く血管のようなものが浮き出た大きな球体がはめ込まれていた。生命あるモノのように脈打つそれは、不気味な印象を与える。

「行くぜえ！『ダブル・リベリオンドリル』!!」

華扇の包帯が新子の両腕を覆い、それは巨大なドリルの形へと変わる。その二つの回転するドリルを動力源の球体にぶつけ、破壊しようと力を込める。

「うおおおおお!!」

ダイマガノと戦艦から発射される砲撃は、人型に変形し奮戦する輝針城に徐々にダメージを与え、爆発を起こす。城内が大きく揺れ、機関部のリグルが倒れそうになる。

「損害状況は？」

正邪の問いは、輝針城の動力室にまで届いていた。

「第一、第三動力ギア大破。残る第二動力ギアの歯車も限界…壊れかけてるわ」

動力部の歯車を見ながら、メンドーサが正邪にそう伝えた。

「クソ…私一人での力ではここまでか…!」

自身のエネルギーで輝針城を動かし続けていた正邪だが、ついにそれにも限界が来ようとしていた。目の前には巨大なダイマガノ。その髑髏が、動きが鈍る輝針城をあざ笑うかのように見下ろしてくる。

「うおおおお…ぐぬぬぬ!!コイツ、硬すぎるぜ…!!」

新子の両腕のドリルは今もなおダイマガノの動力源に向けられ火花を散らしているが、一向に球体が壊れてくれる気配はない。それほどまでにこの動力源の魔力は強大だった。

「新子…!」

華扇が心配そうに呼びかける。

「でも、やるしかねえだろ…!!」

その時、そう言いながら動力室に現れたのは、赤いズボンに、白い髪の毛の女。

「この城は、かつてのレジスタンスの故郷だ。今のアイツにとってもきつとそう。だって、アイツはこの私に教えてくれた。だから!この城は…」

「…鬼人正邪、見えてるか!?第二動力ギアの歯車が物凄い勢いで回転してる!妖力ゲージもどんどん上がってる…」

メンドーサがそう叫ぶ。

「新子、待ってるよ、今私も…追いつくからよオ!!」

歯車の上で走り、強引に歯車を回転させ、ギアを動かしているのは、新子が地底で知り合った藤原妹紅であった。

その結果として起こった事は、動力ゲージが振り切れ、輝針城は膨大な妖力に動かされるがまま猛スピードで前方へ突っ込んでいく。その方向には…ダイマガノ。

そしてそのダイマガノ内部では、今だ動力源破壊に格闘する新子と華扇。その背後の壁を強引に突破してそこへやって来たのは、輝針城。その右腕に持っていたドウルジの尖った艦首を、新子たちが壊そうとしている動力源に突き刺した。

「な、何だア!？」

「新子!!」

誰かが、アタシを呼んでいる。まさか、まさかこの声は…

「お前、妹紅か!？」

「新子オオオオ!!」

「妹紅なんだな?妹紅オ!!」

その声の主が妹紅だと気付いた新子が、思わず笑みを浮かべる。

「ああ、妹紅だ!そしてな、アタシの後ろにや、皆も居るんだぜ!!」

妹紅と同じく、猛スピードで走って歯車を回転させているのは、新子をここまで連れてきた八坂神奈子、バンキと椀に勇刃、その後ろには、なんと地底で世話になった聖白蓮と豊聡耳神子、そしてあの易者までもがここに居た。

妹紅たちが一丸となって歯車を回している。

「新子、感じるわ、貴方の血の滾りを!!」

「ああ、やろうぜ華扇!!」

「ええー!」

そしてついに、動力源は限界突破した輝針城と新子の力により破壊

された。

丁度ダイマガノの背中あたりに居たバアルの目の前に、ドウルジの剣のような艦首が現れた。その舳先には新子と華扇が構えており、マミゾウとの戦いに夢中だったバアルはそれを咄嗟に回避する術を持たなかった。

「ば、馬鹿な…私のダイマガノが、こんな事で…!!」

「ダイマガノじゃねえよ!!こいつは、ダイヤサカってんだ…覚えておけや!!」

新子の腕のドリルが、飛び出したドウルジの勢いにより、バアルの肉体を貫いた。そのままドウルジに押しつぶされ、バアルは妖力による爆発を起こした。

「うぎゃあああああ!!」

動力源の球体があった場所に、輝針城がすっぽりとハマリ、手から外れたドウルジはバアルを粉々に吹き飛ばし、王宮へと突き刺さったのだった。

第26話 「知らない言葉」

ついにマガノ国の支配から解放された幻想郷。しかし、再び魔の手が忍び寄るのも時間の問題だ。

本居新子、茨木華扇、そして二ツ岩マミゾウの三人は、マガノ国に囚われた人間と妖怪を救い出すため、新たなる旅へと出るのだった。地底での滞在を終え、月の民の力を借りてついにマガノ国へと足を踏み入れた新子たち。囚人たちを救うためのダイヤサカ奪還作戦は開始された。

地底から駆け付けた仲間たちの協力有って、ついにダイヤサカを奪う事に成功した新レジスタンス。しかし、禍王はまだ諦めてはいなかった…。

第26話 「知らない言葉」

「…爆発!？」

ゆっくりと王宮へ向けて空を飛びながら移動していたゲムルルは、王宮の方角から聞こえた爆発のような大きな音を耳にする。すぐに竜の形態から、警戒形態へ変化し、生やした翼で一気に王宮へと向かった。

王宮に突き刺さり、その役目を終えた戦艦ドウルジが、爆発を起こしながらバラバラに崩れ去っていく。

そして、動力源を失い、変形を解除していくダイマガノ。元に戻ると、それは赤と青の配色に変わり、前部にあった髑髏の顔は元の妖怪の荒々しさを表現した顔に戻される。

そう、動力に輝針城がハマった事により、ついにダイマガノ…いや、ダイヤサカは正邪たち新レジスタンスの元へと戻ってきた。

「よくやったお前たち。これにて、ダイヤサカ奪還作戦は成功だ」

権たちの歓声が聞こえる。新子は、その場に聳える山のように巨大

なダイヤサカを見上げた。全長2000メートル、かつてマガノ国を攻めた地底妖怪軍の旗艦…。

「ところで、妹紅たち…お前ら、なんでここに…?」

新レジスタンスは、ダイヤサカ艦橋部の操縦室へ集まっていた。それに加え、神奈子、妹紅、聖、神子、易者までもが揃っているのだ。「君たちが旅立ってから、我々は考えたのだ。200年前、地底の妖怪はマガノ国へと向かった。しかし、その時…我々は戦いへ参加しなかった。何故だと思うかね?」

と、神奈子が言った。

「マガノ国が、怖かったからです」

それに聖が続けた。

「その通り。だが、怖がっているだけではダメなのだ。力を持っているはずの我々が、力を持たない者に総てを任せて、ただ待つばかり…。それじゃダメだよなあ…」

「ただ見てるだけなのは、嫌だからね」

神子がそう言う。

「私も、居ても立ってもいられなくなって来ちゃったんだ」

「妹紅…さっきは助かったぜ。あと、易者のおっさん、アンタまで来てるなんて驚いた」

「お、俺は来たかったわけじゃないぞ!俺の占いが道を示せるから、だから無理やり同行させられただけなんだ!!」

その時だった。王宮の上に渦巻いていた黒雲の一部が、ダイヤサカの甲板上に降り立った。悪意に満ちた赤黒い雲の塊から手足が生え、甲板に指を喰い込ませる。雲の一部に裂け目が出来、そこに無数の瞳が埋め込まれたような眼が浮かび上がる。

「ウラアアアア!!その戦艦は渡さんぞ、ムシケラ共!!」

王都中に、禍王の恐ろしい声が轟き渡った。酷く怒りに満ちた声がダイヤサカの内部にまで響いた。

「禍王か!」

「ついに、奴のお出ましか…!」

「それだけではない、見よ…」

正邪が、はるか上空を目で指した。そこには、五つの巨大な惑星が集まっている。その惑星の表面に、徐々に黒い顔が浮かび上がり、ダイヤサカを睨みつける。“衛星型戦艦プロメテウス級”、マガノ国が誇る最大の兵器であり、その直径は五千メートルを優に超え、普段は夜になるとマガノ国の領域を監視する役目を担っている。しかし、もしもの場合…そう、今のような時には戦艦としての力を使い、圧倒的な大きさと破壊力を持つ巨大な兵器と成るのだ。

「あの惑星も、でっかい戦艦だったのかよ…」

プロメテウス級の五隻は顔の目から光線を放ち、ダイヤサカを攻撃する。艦内は揺れ、ダイヤサカはダメージを受けていく。

「おい、このダイヤサカは動かせないのか!?!」

「無理だね!」

勇刃の問いに、神奈子が言い放つ。

「もともと、私が作ったこのダイヤサカは、動かすのに膨大なエネルギーが必要なんだ。本来は、動力源となる者が”ヒソウテンソク”というメカに乗り、そのヒソウテンソクに伝えたエネルギーを輝針城へ、その輝針城へ渡ったエネルギーはギア伝達により増幅され、それを通してようやくダイヤサカは動く…」

「それじゃどれぐらいかかるんだ?」

「分からない。輝針城はあっても、ヒソウテンソクが無けりゃあ…」

「でも、そのヒソウテンソクとやらの代わりになるモンなら、アタシが持つてるぜ」

新子が名乗りを上げた。

戦艦ダイヤサカ動力室。高さ五百メートルほどの立方体の動力室の壁に出来ている穴に、人型に変形した輝針城が両手足を突っ込み、エネルギーを送り続けている。

更に輝針城機関室。まだダイヤサカ内部に残る敵の魔力を糧として、新子が生成した『東の反逆者』が、壁から伸びるワイヤーを両腕で掴み、そこへ霊力を送り続ける。その『東の反逆者』の霊力も、う

なじ部分にくつついている新子が送られるものであり、新子のエネルギーはどんどん大きくなるギアを経由することで何倍にも強大な霊力へ、妖力へと成るのだ。そしてダイヤサカの艦内に未だ充滿している魔力が残っている限り、新子は力を送り続けることができる。

「新子、お前にこんな才能があつたとはな」

「正邪に見せるの、ア初めてだったな。吸収した東の歌姫の魔力を形にしたんだ、名前はお前がかつて使ってた『仮面の反逆者』からとつてる」

「それでも、まだ時間はかかるようだな」

「だったら、私たちがやることは、敵の処理……って訳か」

妹紅たちが、ダイヤサカに群がる残りの敵戦艦や兵士たちとの戦いに向かおうとする。

「お願いするわ。こっちの調整は私に任せて」

メンドーサが胸を張り、そう言った。その傍らには、修理しかけのメドウシアナが置かれている。

「ほう、愚か者共が死にに來たか」

ダイヤサカの甲板上に立っていた禍王は、艦橋からやって來た妹紅や聖、神子の姿を見てそう呟く。禍王の赤い目が光を放つと、それに呼応されるように戦闘鎧を纏った憲兵や、残った小型戦艦などが動き出す。

「喝!!」

聖が顔の前に手を合わせ、念を送ると、憲兵たちは戦闘鎧ごと見えない法力に押しつぶされ、墜落していく。

「おお、これがマガノ国の戦艦なのだね。大きな君には特別に、赤と青……両方選ばせてあげよう」

神子の羽織っていたマントが赤と青に光り、点にまで伸びる光の柱が敵の戦艦を貫いた。その時に溢れ出た兵士たちを、妹紅が次々と特大の火力を放ち、焼き払って行く。

「喰らえい!!」

が、妹紅の死角から迫っていた憲兵が、劍の腕を妹紅の背中に突き

刺した。更に深く剣を押し込むと、妹紅は血を吐き出す。

「くはは、どうだ…。…!?!」

「…くくく、ザンネーン、私はそれじゃあ、死なないんだな」

妹紅は背中に刺さった剣を引き抜いてそのまま腕を掴み、憲兵を自分の前へと投げ飛ばす。そしてその顔面を蹴りつけた。戦闘鎧が破壊された憲兵がその場でもがき、それをもう一度蹴って地面へ落す。

「ちよつと待て、アレは何だ?」

神子がダイマガノの背後を指差した。その先にあるのは、敵の本拠地でもある王宮であった。王宮は縦に長いタワー状になっており、その形はまるで渦を巻いているようにも見える。そして、よく見ると、その渦は動いて回転し、周囲のエネルギーを魔力として吸い上げているようだった。

「アレは…?」

同じく、ダイヤサカ内に居た正邪たちもそれに気づいたようだ。

「200年以上にもわたる我々マガノ国と幻想郷の戦いの中では、お前たちもまたちっぽけな存在にすぎないのだぞ」

直後、響く禍王の声。

「何だと…!?!」

機関室でエネルギーを送り続ける新子がそう呟く。

「見るがいい、妖怪共の敗北の歴史を」

各々の頭の中に突然流れた映像は、マガノ国軍に壊滅させられる妖怪軍、そして滅ぼされる妖怪たちの姿だった。憲兵団の祖ともいえる歪なマガノ兵が斧で妖怪の首を叩き落とす様、怪物スラッグのような緑色の魔獣に殺される妖怪、そして艦隊戦を繰り広げる妖怪軍の戦艦…。

槍に貫かれ、魔法で木っ端みじんにはじけ飛び、砲撃で撃ち抜かれる。そうしてできた死骸や武器が積み重なっている、まさに“妖怪の山”…その頂上で下を見下ろす、ひどく邪悪な存在。

「…あ、大変だ…せっかく溜めていたダイヤサカのエネルギーが…あの螺旋状の王宮に吸い寄せられていく…」

「このマガノ国が…妖怪の墓場って事…か」

「こじやれた事言ってる場合かよ！こうしてる間にも、溜めてるエネルギーが吸い取られてしまっただぞ」

易者がそう言った。

「そうだ、易者の言う通りだぜ…」

艦橋内部に、動力室に居る新子の声が届く。

「今の妖怪たちも…みんな、アタシらと同じようにマガノ国に抗っていた…だから、アイツらの遺志を無駄にはできない!!」

新子の叫びに呼応して、東の反逆者が雄叫びを上げ、一気に膨大な霊力を放出する。

「霊力ゲージが上がってる!」

リグルが安堵の声を上げる。

「ぬおおおおおッ…!!」

そのまま、更にエネルギーを放出する新子と東の反逆者。が、しかし…その直後、流れる霊力のあまりの勢いに耐えきれずに、東の反逆者の右腕が千切れ、破壊されてしまった。

「ぐあああああ!」

叫び声と共に、地面に落ちた腕は消滅してしまう。

「片腕が壊れたのか…」

「…大丈夫、私に任せて…」

消滅しゆく腕を見つめながら、苦い表情を浮かべる正邪。その正邪の元へ、メンドーサがふらりと現れる。

メンドーサは、俯く東の反逆者の体をヒョイと登り、千切れた右腕のあった所に立った。そして自らの銀色の髪の毛を伸ばし、天井から垂れさがるワイヤーを掴む。結果、無事に東の反逆者のエネルギーを送るための伝導体としての役割を果たし、再び霊力ゲージは安定する。

「安定はしたけど…一向に上昇する気配が無いわね…」

「プラスマイナスゼロという事か…。頑張ってくれ、新子…」

「…クソ、見てられねえよ…」

壁に座っていた勇刃が立ち上がる。

「待て、勇刃…お前はまだ足と怪我が…」

同じく機関室に居た神奈子が、勇刃を呼び止める。勇刃は新子の治療力を貰った事により、辛うじて走れるレベルにまでは足のケガも回復していた。しかし、また無理に動かしたり、戦ったりすれば、前より悪化してしまうかもしれない。

「さつき…新子は死にかけの俺を助けて、かつ俺の願いを聞いてくれた…。だから今度は、俺の番だ」

勇刃はそう言うと、さつきとダイヤサカの甲板上へと移動した。甲板に出ると、艦首に近い方に禍王が居座っており、その他の戦艦や兵士たちは艦橋の周囲に集まっていた。その兵士や戦艦と戦うのは、妹紅や聖、そして神子の三人。

「オラア!!」

勇刃は飛び上がり、兵士たちを殴りつける。戦闘鎧が破壊され、次々と甲板から叩き落とされていく。

「貴様〜!!」

さらにやって来た憲兵が大きな剣を振りかざし、勇刃に斬りかかった。しかし、勇刃の鋼鉄の体は剣による攻撃すら通さず、僅かに切り傷ができる程度であった。

その剣を素手で掴み、振り回しつつ他の憲兵を攻撃しながら遥か遠方へ投げ飛ばした。

すると、直線状に投げ飛ばされた憲兵が、何かにはじき返される。

勇刃が驚いてそちらを見ると、そこに居たのは…。

「よオ、さつきぶりだな…死にぞこない」

「お前は…ゲムルル…ッ!」

ゲムルルであった。腕を組み、コウモリのような翼を羽ばたかせ、上から勇刃を挑発的に見つめている。両者が再び相まみえる。ゲムルルは一瞬にして“殲滅形態”へ移行し、腕を六本に増殖させ、更に翼を駆使して物凄いスピードで滑空してくる。

先ほどの戦いでゲムルルは戦闘力と共に精神力までも多大な成長を遂げており、それに勇刃一人が立ち向かうには、あまりに分が悪すぎる。

が…

「な……！」

勇刃はゲムルルが滑空と同時に振るった六本の触手の腕をすぐさま見切つて潜り抜け、ゲムルルの腹に見事拳を命中させる。すぐさまゲムルルも勇刃へ攻撃を加えようと、腹から鋭い棘を生やすが、それすらも予測していたかのように勇刃はすぐに距離を置いた。

そう、成長していたのは勇刃もまた同じであつた。

「少しはやるようになったな」

「今度は…俺がお前に一発ぶち込んだ」

しかし、それでも実力の差は埋まらない。勇刃の一撃も、ゲムルルには何のダメージも入っていないだろう。

「ふん……！」

ゲムルルは触手を振り回し、勇刃へ攻撃を加えようとする。

二人が因縁の戦いを繰り広げようとしている頃、螺旋王宮はさらに回転の勢いを増し、外に居る妹紅や神子たちの力すらも吸い取つてしまわんとしていた。

「力が抜ける……」

「体が重くなるようだ……」

そんな彼女らの上空に、艦隊が迫る。

「標的を確認！ですが、その側に何故かゲムルルらしき姿が……」

「構わん、あのゲムルルがこの程度で死ぬものか。主砲門発射用意!!」

戦艦軍の主砲が妹紅たちや勇刃へ向けられた。

「まずい……！」

妹紅たちはすぐに退避しようとするが、勇刃はゲムルルと交戦中であつたがゆえにその場を離れることもできずにいた。

「奴ら、ゲムルルごと撃つつもりなのか!!」

ゲムルルもそれに気づき、攻撃の手を少し休め、戦艦の方へ顔を向ける。

ズキン

—また頭痛が……!!

「撃てーッ!!」

その時、敵艦隊から一斉に砲撃が放たれた。砲撃は真つすぐにそし

て勇刃を狙っていた。

ゲムルルは、心臓の鼓動が早くなるのを感じていた。それと同時に、脳裏には自分の知りもしない、体験したこともない光景や、知らない人物の顔が次々と浮かび上がり、弾けて脳内に浸透した。

「勇刃アー！」

既に砲撃の着弾地点からは退避していた妹紅がそう叫ぶ。

が、その時、勇刃をその場に残してその場から離れるだろうと思っていたが、ゲムルルは砲撃が当たる直前に、自身の体をアメーバが如く広く伸ばし、砲弾を遮る壁となった。

それに驚いた勇刃が、一瞬身構える。その時にゲムルルが発した言葉は、ゲムルル自身も、そして勇刃にも、到底、想像しえない言葉であった。

「―こつちにおいで。私がお前を守ってあげるよ―」

「え…？」

「あ…？」

直後にゲムルルに砲撃が無数に命中し、その爆発の音で、それ以上は聞こえなかった。

やがて爆発がおさまり、辺りも静かになる。

「お前、今…何て言った？」

「我は…」

「お前、それは…俺の…」

勇刃が次に続く言葉を言おうとした瞬間、彼の体を妹紅が攫った。そして甲板上を飛ぶように移動し、艦橋の方へと移動していく。

己でさえも知らない言葉が浮かび、それを発したゲムルルは、先刻の戦いで二度起こした爆発を起こした際の虚脱感よりも、更に大きな虚無感へと陥っていた。

「我は…何を…」

本来、敵であり侵入者であり王都に仇なす者である勇刃を咄嗟に助けた。それは明らかにゲムルル本人の意志による行動ではなかった。

頭の中に響く頭痛が声と成り、咄嗟にその声に従ってしまったのだ。
つまり、ゲムルルに組み込まれた妖怪の念が、ついに意識を掌握しよ
うとしている証拠でもあるといえるだろう…。

第27話 「アンタの遺志は受け取った」

マガノ国の支配から解放された幻想郷。しかし、再び魔の手が忍び寄るのも時間の問題だ。

本居新子、茨木華扇、そして二ツ岩マミゾウの三人は、マガノ国に囚われた人間と妖怪を救い出すため、新たなる旅へと出るのだった。ついに、ダイヤサカ奪還作戦を成功させた新子たち。しかし、ダイヤサカのエネルギーを吸い取ろうとする禍王に対し、ある人物が立ち上がろうとしていた。

第27話 「アンタの遺志は受け取った」

「敵の戦艦は大分片付いた。だが、肝心の禍王と衛星戦艦が厄介だな……」

「ああ、また動きを見せれば動き出しますね」

艦内へ戻ってきた妹紅たち。通常の戦艦や兵士たちは機能停止レベルにまで壊滅させることができたが、それでもこのダイヤサカよりも巨大なプロメテウス級の衛星戦艦に動きを封じられてしまっている。

「だが、このダイヤサカは今我々のものだ。先ほど、ダイヤサカは人型へ変形して見せた。あれをもう一度我々が行えれば、あんな衛星戦艦など目ではないであろう」

「くうっ……！」

ダイヤサカへエネルギーを送り続ける『東の反逆者』の腕の代わりになっているメンドーサの体にも、限界が近づこうとしていた。それもそのはず、マガノ国の生物や兵士には魔力が宿っており、今新子が送っているのは霊力。魔力は霊力に弱いため、魔力で生きるメンドーサの体には負担がかかり続けていた。

「大丈夫か？」

「もう少し……」

新子の問いに答えるメンドーサ。しかし：

「ぐああ…!!」

その直後、メンドーサの髪が溶けるようにして千切れてしまった。彼女の“第二の顔”の口から霊力があふれ出し、苦しそうな悲鳴を上げる。

「もういい、少し休め…」

「ええ、そうさせてもらおうわ…」

「新子、腕はもう一度作れそうか？」

動力室に居た神奈子がそう尋ねる。

「ああ、後一分くらいあれば…」

「ごめんなさいね、私が魔獣なばかりに」

「気にするな…しようがないさ」

メンドーサが不甲斐なさそうに目を下へ向ける。悔しげに唸り、床に拳を叩きつける。

その時だった。メンドーサは自身の肉体に異変が訪れているのを感じ取った。身体の痛みやダメージが引いていき、自身が感じた事のない力が湧き上がってくる。

「こ、これは…!?!」

「まさか、霊力に覚醒したのか？」

神奈子がそう判断する。

その通り、メンドーサは先ほどの新子との戦いで霊力を使用した攻撃を受けており、その影響で体内の魔力が中和されかけていた。そして、東の反逆者の一部となり輝針城へ霊力を送る伝導体となったことで、魔力は打ち消され、代わりに霊力が生成できるようになったのだ。「これなら行けるわ!!」

メンドーサが力を込めると、一騎に霊力を放出した。すると、再び霊力ゲージが上がり、その霊力を受けて、東の反逆者の消えた腕がもう一度再生された。

「いいぞ、メンドーサ！アンタも立派な新レジスタンスだ！」

「霊力ゲージが上昇してる！動力室で何かあったか？」

「これなら好都合。『超妖怪弾頭』を発射するのだ」

超妖怪弾頭とは、このダイヤサカに装備されていたミサイルの事である。ダイヤサカが再び戻ってきた上で、その装備も復活し、霊力から変換された妖力を使って撃ちだすことが可能だろう。

「よし、発射!!」

バンキがモニターのボタンを押した。

すると甲板上に主砲門が出現し、螺旋王宮へ向けて座標を固定する。そして炎を吹きながら、三発の超妖怪弾頭を発射した。

弾頭は真つすぐに螺旋王宮へ向かって行く。が、しかし、それに気づいた禍王と衛星戦艦が光線を放ち、超妖怪弾頭を潰すように破壊してしまった。

「そんな…!」

「禍王が居る限り、王宮への攻撃は届かんという訳か」

「ははははは!!無駄だアアア!!」

禍王が邪な笑い声をあげる。

「クソツ、ダメだったか…」

新子がそう呟く。機関室には妹紅、神子、聖、易者が集まっていた。

「聖、魔法で超妖怪弾頭の強度を強くしてくれ」

「分かりました!」

その様子を見ていたメンドーサが、意を決して言った。

「本居新子、私が…」

「おっと、それは私の仕事だぞ」

それを遮る、神奈子。

「お前が使っていた、あのロボット…アレはもともと、私が作った『ヒソウテンソク』なんだ。さつき気付いたよ」

神奈子は、壁際に横たわる巨大ロボットを見やる。

「お前さんがあれを使うよりも、私が使った方が上手く動けるぞ」

「特攻か…」

易者が呟く。

「そんな、死ぬのが怖くないのか？」

「阿呆か、お前は!!」

神奈子にそう言った神子に対し、大声で怒鳴りつける。神子もかつて尸解仙に成る際、死を恐怖している。

「死ぬのが怖いのは、人間だって神様だって同じだよ。ただ、満足して死ぬか、後悔するのか…その違いさね。もちろん私は、滅ぶなら満足して滅びたい。きつと今がその時なんだ」

「だったら、私たちだって…!!」

「いや、ダメだね。私はお前たちよりもずっとずっと長く生きてるんだ。だから…もうこれ以上見て待ってるだけってのは嫌なんだよ。それにね…本当にやりたいときってのは、理由なんて必要ないんだよ」

神奈子は横たわるメドウシアナに触れる。すると、メドウシアナは独りでに起き上がり、故障した箇所が瞬時に修復され、配色や頭部のデザインと表情が変わった。

「でも、神奈子…。アンタが行こうって言ったから、私たちはここに来れたんだ。アンタが闘う気になってくれなきゃあ、私たちもずっとあのくらい地底世界で、ただ怯えながら暮らしていたよ」

妹紅の言葉に、神子たちもうなずく。

「お前たち…」

約五分後、ダイヤサカの艦橋上部から、一つの巨大な塊が飛び出した。元は核熱をエネルギーとして動くのだが、200年前の第二次マガノ国襲撃においてその際に核熱ではなく搭乗者の妖力で動くように改造を施された。名を“ヒソウテンソク”といい、搭乗者は八坂神奈子。作り手である彼女の神力により、ヒソウテンソクは最大級の性能を引き出せていた。

「行くよー」

ヒソウテンソクは行く手を阻む戦艦を圧倒的なパワーで破壊し、活路を開いてゆく。

—そうさ、アタシはずっと後悔してたんだ。妖怪の山を捨てて地底へ逃げた事、そして自分だけ戦わず妖怪たちに戦いを押し付けた事、そして、何も新子たちの力になれなかったこと…。だが、その後悔を、今こそ変えてみせる!!

「頼む…」

機関室のメンドーサが小さくつぶやいた。

「ぬおおお!!」

右腕が巨大な御柱へと変わり、それを向けながら、王宮へと一直線に迫る。

「やらせるかアア!!」

それに気づいた禍王が、雲の目の隙間から尖った触手状のワイヤーを伸ばし、ヒソウテンソクを攻撃する。そのワイヤーを、ヒソウテンソクはなんとか避けるが、さらに襲い来る第二波のワイヤーにかすり、それを皮切りに次々とワイヤーが機体を貫通していく。

「くっ、ここまでか…!!」

直後、ヒソウテンソクは破壊され、爆発してしまった。

「神奈子…」

「犬死かよ、バカヤロウ…!!」

勇刃が拳を握りしめて声をあげる。

「待って、アレは—」

「あのサイズ…ヒソウテンソクの中に居た、神奈子だ!!」

「まあだこの私が残ってるぜええ!!」

爆発の中から飛び出してきた神奈子。その腕には、ヒソウテンソクのものであった御柱が装備されている。

「何だと…!!」

「禍王、たかが二、三百年生きてただけのクソガキが…支配者を気取りやがって!! 私たちの、妖怪の、いや…幻想郷のドデカい怒り…存分に喰

「らうが良いイイイイ!!」

右手に携えた御柱がさらに巨大化し、その先端が矢印状に鋭利になる。結果、そこに出現したのは長さ五百メートルを越える超巨大な御柱。その先を禍王へと向け、ドリルの如く高速回転させる。

「行くよ!!『リベリオン・オンバシラ』アアアアアアアアアア!!」

そのまま禍王の雲のような体へ突っ込み、貫くかのように勢いを込める。禍王の脚が甲板上から離れ、御柱の回転に巻き込まれて散っていく。

「ぬぎゃあああ!!」

禍王を破ると同時に神奈子と御柱はなおも前方へ突き進み、そしてついに、螺旋王宮に直撃した。

「見ているか、お前たち…私は満足だ…」

言う通り、満足そうな笑みを浮かべ、神奈子は眩い光に包まれた。

* * *

王宮は爆発し、真つ赤な閃光を放出している。神奈子は自らの存在、命と引き換えに、ダイヤサカのエネルギーを吸い取っている螺旋王宮の破壊に成功したのだ。

「…見て、膨大な…とてつもなく膨大な妖力だ!!」

「うむ…螺旋王宮が破壊されたことにより、今まで吸い取ったエネルギーが全て妖力としてあふれ出した。当然の帰結と言える」

「らしいわ、新子…いけるわよ!」

「神奈子…アンタの遺志は受け取った。行くぞ皆…ダイヤサカ、変形だ」

「その言葉、待っていた」

ダイヤサカの船体に亀裂が入り、真つ二つに割れる。装甲が纏まって腕と成り、脚を形成し、前部にあった妖怪の顔面は胸部に移動した。そして艦橋が内部に引っ込み、代わりに一本角の頭部が出現する。

衛星戦艦の顔が見つめる先で変形を終えたダイヤサカが堂々と腕を組んだままその姿を現す。神奈子の意匠を取り込んだ赤と紫色のボディに、両肩に備えた巨大な矢印、胸には妖怪の顔面がはめ込まれ、背中には輪つか状の注連縄を背負い、巨大な御柱を装備している。先ほどのダイマガノの時のようなほっそりとした姿ではなく、ガツシリとした威圧感漂う姿へと変貌を遂げていた。

「仲間の想いをこの身に宿し、八百万の意志が全てを照らす。特大超弩級戦艦超絶形態：『新ダイヤサカ』アアアッ!!」

気迫と共に衛星戦艦の顔を睨みつける。

八坂神奈子
「古の神の力…見せて…やるぜえッ…!!」

そう叫び、ダイヤサカの腕を伸ばし、衛星戦艦の顔に指を突っ込み、そのまま握りつぶす。戦艦の顔面は爆発するが、ダイヤサカはその爆風に曝されようともビクともしない。

「すっげえ…い…」

その時、衛星戦艦の顔がさらに凶悪になったかのように深みを増し、大きく開いた口から魔力を極太のレーザーとして放出した。戦艦自身も反動で後ろへ下がってしまったほどの威力。それを正面から受けるダイヤサカ。

更に別の衛星戦艦からは、虫のように細長い手足が伸び、周囲を飛行する戦艦や、浮かんでいた岩塊を掴み、それをダイヤサカへ向けて投げつけた。だが仁王立ちしたまま、やはりそれすらも受ける。

「そんなモンが…効いてたまるかよオ!!」

ダイヤサカは両腕を振り上げる。するとその身体から膨大な妖力が放出され、波動となって敵へ襲い掛かる。吹っ飛ばされた敵の戦艦軍が消滅し、ついに一隻残らず始末されてしまう。

「何だと…ッ!!」

その光景をただ見上げるゲムルルが声を漏らす。

「一気にトドメだ、行くぜ!!」

両肩に装備されていた矢印と、背中に背負っていた四本の御柱が合体し、超巨大な矢印を形成した。その矢印を前に向け、高速回転させながら妖力を噴射し敵へと突っ込んだ。

『リベリオントリガー』アアア!!!」

ダイヤサカは敵衛星戦艦を貫き、さらにもう四隻の戦艦を次々と破壊した。戦艦はバラバラに砕け、爆発を起こし、その爆炎は流星群が如く王都に降り注いだ。

変形したダイヤサカの圧倒的な力によって、マガノ国軍は幻想郷へ出撃する前に、全て滅ぼされた。それほど、妖怪たちが希望を託し、八坂神奈子の意匠を取り込んだダイヤサカの真の力は強大だったのだ。

「こんな事が…」

もう一度雲状の体で形を取ろうとしている禍王が、信じられないと言ったような風でそう呟く。

「禍王様、転換計画の準備完了で御座います」

「…そうか。これで奴らも終わりという訳か」

「よし、敵は蹴散らした。後は最終目的である、囚人の救出だ。王都に居ないとすれば、工場か闘技場か…」

「そうだな…行くぜ、ダイヤサカ!」

ダイヤサカの超巨大操縦席に輝針城が座り、輝針城の巨大操縦席に『東の反逆者』が座り、それを新子が操縦する。そしてまず闘技場目指してダイヤサカを発進させようとしたその瞬間…

「そこまでだ。愚かな幻想郷の民共よ」

「ぬあッ!!」

その声を聞いた途端、新子の体がまるで金縛りにでも遭ったかのようになり硬直し動かなくなる。

「本来、死とは疎み、悲しむものであるのに仲間の命を懸けた犠牲を美しいと感じる。それこそが幻想郷の愚か者共の宿業だな」

再び新レジスタンスに、禍王の声が響き渡った。

「だがそれも、何度も繰り返された行為に過ぎない。見るがいい、幻想郷の“真実”を…」

新子の脳内に、また知らない光景が映し出される。

人間を殺し、貪り、暴虐の限りを尽くす妖怪。人に化け、ありつた

けの食料や金品をだまし取る妖怪。それにより人里の人間は怯えて暮らす。その生活に不満を持ち、幻想郷の存在について意義を問う人間も居たが、力ある妖怪に封殺され、闇に葬り去られる。そうして幻想郷は事実を隠蔽し、“真実”を隠し続けてきた。

その光景は、現在の妖怪が滅多に存在しない人里で生きてきた新子にとって、酷く衝撃的な物であった。

「これこそが幻想郷の背負う業だ。それ故に妖怪は滅ぼされ、怠惰の道を歩んでいた幻想郷は正しい有るべき姿へと変わらなければならない。そしてこの私が、それを施したのだ。近代化を嫌っていた妖怪を駆逐し、里に電気と水道を通してやったのは誰だ？新しい食文化や服を伝えたのは誰だ？この私だ」

「あ……あ……」

「どうしたの新子、そんな念に惑わされては……」

「残念ながらそれは確かに真実だ、華扇。禍王は人間にとって恐怖の対象である妖怪を駆逐する代わりに、人間に新しい文化を興させたのだ」

正邪が華扇に対してそう言った。

その時、新子の腕の影から、赤い小さな塊が這い出してきた。細い足をせっせと動かし、腕を上ってくる。

「む、虫か……!!」

目玉のような虫が何匹もその場に現れ、払い落とそうにも金縛りで動けない新子の体を這いあがる。

「『転換計画』」

頭に響いたその言葉を聞きながら、ただ新子は自分の頭の中に虫が侵入してくる感覚を感じていた。

第28話 「転換計画」

本居新子は走っていた。

「母さん、行って来るよ！」

自宅の鈴奈庵の玄関から、学校の制服を着た新子が元気よく飛び出す。今日は夏休み明けの新学期初日で、天気もすこぶる良い。しかも午前の始業式が終わったらすぐに帰れるから気分も良い。

「よう、新子」

道を歩く新子の前に現れたのは、赤いモヒカンの男、ツムグだった。

「ツムグか、おはよう」

「お前、夏休み中どこか行ったか？」

「いんや、別にイ。どこ行っても暑いし、人は多そうだからよ、しかも本屋の手伝いもあるし…」

「そうだったのか」

他愛もない会話をしながら、学校を目指して田んぼのあぜ道を二人で歩く。

「ああ、始業式終わったあ…」

「ねえ新子、今日のお祭り行くでしょ？」

教室で帰り支度をする新子の所へ、クラスメイトが話しかけてきた。

「え、ああ…行くが…」

「だったら一緒に行こうよ」

「あ…ワリイ、アタシ他の人と行くから…」

「分かった、ツムグ君でしょ？」

「当たり前、何で分かった？」

「だって、ねえ？」

「二人とも昔から仲良いじゃない」

「…、まあともかくそういう訳だから、じゃあな!!」

新子は慌ててカバンを手に取り、教室を飛び出した。

「体を動かさずに、気を練って…そうそう、ただそれだけに没頭して…それにより自分が真に求めるものを思い浮かべるのです。仙道を学べば、人生が楽になる。それによって生まれた余裕で、さらに人生を楽しく送ってゆくのです」

山に構えた道場に静かな声が響き渡る。大広間に弟子たちが座禅を組み、一心に己の師の言葉を聞いている。彼らの前で同じく座禅を組んでいるのは、茨木華扇であった。

「はい、師匠」

「うふふ、その心意気です」

いよいよ日が落ち始め、里中に太鼓の音が響いてくる。通学時にも通った田んぼのあぜ道で、ツムグが新子と待ち合わせをしながら、水面に浮かぶアメンボを眺めていた。

「お、お待ちせ…」

「ああ、やつと来た…のか…」

後ろから聞こえた新子の声に振り向くツムグ。目に飛び込んだのは、華やかな浴衣姿の新子であった。いつものガサツで乱暴な雰囲気とは打って変わった可愛らしい姿に、思わず見惚れてしまう。

「何ジロジロ見てんだよ!!」

「お…す、スマン…じゃあ、行こうぜ」

新子は手を引かれ、明かりの灯された祭りの場所へと向かう。

「これは…? どういうことだ?」

ダイヤサカ艦橋内の正邪は、同じ部屋に居た華扇やマミゾウ、勇刃や妹紅たちの全員が、虚ろな顔で座り尽くしているのを見て不思議に

思った。更に皆、まるで霧の中にもいるのかのように、その姿がぼやけてしまっている。

「一体何が起こっているというのだ?...まさか」

「その通りだよ、鬼人正邪」

何もなかったはずの部屋の一角から、真つ黒い影がスタスタと歩いてくる。

「君の思った通りだ。ここに居る者は全員、私の考えた“転換計画”の餌食になったんだ。私の意志で動く目玉の蟲は、対象者の頭の中に入り込み、その者にとつて都合のよい幻覚を魅せる。彼女らはそれに囚われている」

「貴様、禍王か...」

「ああ、そうだ。この姿で君と会うのは、何十年ぶりかな?」

全身が真つ黒い影のようだが、頭部には三角帽子のような形に巻き上がった金髪、顔には目しかない。目は大きく、中には無数の目玉が並んでいるようだ。その姿を見て、正邪は真つ先に、カグヤと名乗った月の民を連想した。この光すら通さない影のような体こそ似ているが、明らかにその本質は異なっていた。

まず、月の民は仕方が無く肉体を捨て、その思念体が集まった姿であったが、この禍王は自らが進んで闇の力に身をゆだね、変貌を遂げたかのような姿であったのだ。

「かつて妖怪軍の戦士として戦い、闘技場でも最も人気の高い闘技王の地位に輝き、北の歌姫の番人にも成り上がった天邪鬼が、今やただの霊体とはな。そしてこの連中も、手段を択ばないのだな」

「そう、私はお前の元へ下った...間違った方法で幻想郷を守るためにな。だがこの仲間たちが居なければ、こうして再び貴様と相まみえることも叶わなかった」

「ほう、止めを刺されるために、わざわざここまで来たのか」

禍王は腕を上げ、その手の平に刻まれた八卦の模様には赤い光を迸らせ、正邪へと向けた。

「しかし随分ご丁寧な事だな。むしろ丁寧過ぎではないか?」

「...ん?」

「何故ここまで回りくどいやり方をする？ 貴様が本気でかかれれば、我々を消滅させることも造作もないだろう」

確かに、かつてのように、ダイヤサカよりも何倍も大きな姿を使い、このダイヤサカを滅ぼすこともできたはずだ。

「正体不明の霊力放出源を感じてね。計画に穴があつては台無しだ」

その時だった。物陰に隠れていたメンドーサが飛び出し、防御壁を作り禍王が手の平から放った光線をはじき返した。

「おお？ お前がイレギュラーの正体か…メンドーサ」

「禍王…様…。私はこの者…そして正邪のおかげで、このマガノ国はおかしいという事に気付きました」

「私の…おかげ？」

「ああ、正邪の“ひっくり返す”能力が…無意識の内に私の根底をも変えてしまったのよ」

「く、くくくく…」

その様子を見た禍王が、肩をすくめて笑った。

「だから禍王様、お覚悟を!!」

刃状に変化させた髪の毛を振るい、禍王に攻撃をする。その攻撃は影のような禍王の体を引き裂き、宙へ散らした。

「よし…!」

「なかなか面白いな、メンドーサ。本来、私に造られ私に絶対の恐怖と忠誠を誓うはずのお前が、敵の一撃により機能を狂わされたのか」

しかし、禍王はさっきの部屋の何もない一角から、何もなかったかのように姿を現した。もう一度メンドーサの前へと歩き、腕を組んで壁に寄りかかる。

「残念ながら、お前には既に蟲が埋め込まれているため転換計画は意味がないようだ。だから…」

禍王は目にもとまらず速さでメンドーサと距離を詰め、メンドーサが回避をする間もなく、一撃で気絶させた。

「直接眠ってもらおう」

禍王がふと、正邪の方を振り向くと、既に正邪でさえも虚ろな目で霧に包まれており、転換計画に捕らわれてしまっていた。

その様子をゆっくりと見つめた後、禍王は動かないメンドーサを肩に抱き、そのまま姿を消した。

「これですべての穴は塞がった。お前たちも、もう終わりだ」

転換計画始動から、12時間後。空に浮かぶ惑星がほとんどなくなり、さっぱりとしたマガノ国の空に、太陽の光がさんと降り注ぐ。王都は壊滅し、もうマガノ国南方に存在する闘技場には、マガノ国に居る妖怪と人間を全て集めるため、彼らの列が長く続いていた。

「列を乱さず、きびきび歩け!!」

そう指示され、彼らは歩くスピードを速めた。その列に紛れ込んでいるのは、他の囚人と同じく白いダボダボの囚人服に身を包んだ易者だった。

「はあく、何で俺はいつつも面倒ごと巻き込まれてしまうんだろうなあ」

「そこ！無駄口を叩くな！」

「は、はいい!!」

時は、禍王の転換計画が発動した直後に遡る。新子や正邪らと同じく、転換計画の術中にハマってしまった易者。

「ぎやははは!!もつと持つてくるがいい!!」

豪勢な屋敷の一角で、召使たちの運んでくる料理を手あたり次第食い散らかす易者。その両脇には、数名の花魁姿の女性が彼に酒を注いでいる。

「ここは天国だな！」

「伽藍様、伽藍様!!」

男性の召使の一人が、慌てた様子で「伽藍」という易者の本名を呼ぶ。

「何事かな？」

「この屋敷に侵入者がおります！」

「ほう、ではこの俺に任せるが良い!!」

易者は意気揚々と部屋を出て、報告を受けた侵入者とやらの元へと

向かった。部屋の障子を開けた途端、如何にもな雰囲気の凶悪な顔をした集団が、ナイフや斧を手に押し入っていた。

しかし、易者は彼らを見渡すと、両手を合わせ、妖力の波動を放った。侵入者たちに波動は直撃し、彼らはいとも簡単に地面に倒れ伏してしまった。

「伽藍様かつこいいゝゝ!!」

「がははは!!もう少し骨のあるやつは居ないのかね?」

その時、障子の先の真つ暗な空間に、一つの人影を発見した。

「次は君かな?」

その影はゆつくりと、ゆらゆら揺れながらこちらへ近づいてくる。ふと気づけば、周りを囲っていた召使や、先ほど倒した侵入者たちの姿が一人残らず消えていた。それに不安を持ちながら、もう一度人影に目を向ける。

少し目を離れた隙に、人影はかなり近くまで寄っていた。

「な…お、お前は…」

紅い巫女服に、頭の大きなリボン、大幣を高く振り上げるその姿は、顔こそ凶悪に歪んでこそいるが、あの博麗霊夢そのものであった。

「なんでお前が…! そうか、これは俺に課せられた試練…過去のトラウマを克服せよと…! それならば、消えろ、俺の心の弱さよ!!」

次の瞬間、霊夢の振り下ろした大幣の一撃により、易者は数多から真つ二つに両断されていた。そして、割れた頭の中から、目玉のような形をした蟲が何匹も這い出て来るのを感じ取った。

「うわあああゝゝゝ!!」

そこで我に返った易者。汗をぐっしよりとかきながら、慌てて辺りを見渡した。正邪や華扇、妹紅や神子に至るまでが、生気の抜けたような顔でじつと座り尽くしており、その身体は霧のような物に覆われていた。

「お、おいお前たち…どうしたというのだ?」

すると、何かの気配を感じた易者は部屋の隅をじつと見つめた。何

か強大などす黒い悪意の塊が、この場を侵食してくる。波のようにじわじわと押し寄せる悪意の水は、易者の足元まで迫っていた。

恐怖に駆られた易者はダイヤサカから強引に飛び出し、地面に転がるように飛び降り、そのまま全速力で走った。

「はあ…はあ…何がどうなっている？」

易者は半壊した家屋の中に入り込み、そこへ身を隠した。

「俺は夢を見ていたのか？夢に巫女が現れたと思ったなら目が覚め、仲間は皆死んだように動かなかった…！」

「動くな。動けば撃つ」

その時だった。背後から、女の声が聞こえた。

「!?」

後頭部に、何か硬い物が当たる感触がする。

「対妖怪用のライフル銃よ、貴方程度、一発で死ぬわ。貴方には聞きたくないことが山ほどあるけど、おかしな素振りを見せれば殺す」

—誰だ？もちろん敵か…！聞きたい事…仲間の数、能力、目的…どんな手を使つても聞き出そうとするか？

「聞きたい事…とは？」

そう言うのと易者は意を決し、即座に振り返った。そこに居たのは、頭にターバンのような布を巻き、軍服を着崩した女だった。顔に紫色のペイントを施してあり、その顔は銃を突きつけたのに反抗の意思を見せた易者への驚きに歪んでいる。

「な…」

「せーの！」

ライフルの銃身を掴み、下へ向けた。そのまま銃を引つ張つて無理やり奪い取り、腕を背中で組み絞めた。

「いたたたた!!」

「さあくお嬢さん…これで逆に何もできないねえ…」

「分かった、分かったから許してちょうだい！」

だが易者は、背中へ回した腕の力を緩めない。

「くそお…いつかこうなると思つたのよ…いくら工場長つていう大役についていても、私自身の戦闘力はちよつと強い人間と同じくらい

なんでもの…でも、こんなに自分が弱いなんて…」

易者は、俯きながらそう呟く女に、いつか何処かで見かけた人物と同じ面影を見た。そう考えているうちに、無意識に力が緩んでしまった。女はスルリと抜け出し壁際に寄った。

「お前は誰だ？」

銃を向けながら、易者がそう問う。

「私は…アナト。このマガノ国の工場長をやってるわ」

―嘘は言っていない…

易者は占術の特殊な能力により、嘘をつくことで乱れる感情の僅かな起伏を読み取る“眼”を持っていた。その能力によると、このアナトの今の言葉は嘘ではなかった。

「もう一つ聞く。アナトよ、お前は…昔は何だった？」

「昔は何だった…？いや、何でもないと思うけど…」

易者から見えるアナトの周りのオーラが赤くなった。

「嘘だな。正直に話さないと撃つ」

アナトは俯きながら易者を睨みつけ、やがて口を開いた。

「最初に思った事は…」まだ覚えていたのね”だった…。たまたま迷い込んでしまったマガノ国で禍王に捕らわれて、あの蟲を入れられて心も体も新しく生まれ変わったはずなのに…一番忘れたかった事は、しつかり覚えてた…。私を罵倒する声と、吹雪のように自分へ向けられる並ならぬ嫌悪心…」

―嘘ではない…

「…今、思い出した…！お姉ちゃんだ!!」

「お姉ちゃん？」

「バーカ、“覚”よ…。それをどうしても忘れなくて、周りから嫌われるのが怖くて心を閉ざした私とも、唯一以前と変わらさず接してくれたのは…。覚同士、何も隠さずいられるのはお姉ちゃんだけだった…誰からも認識されない私を見ていてくれたものよ…」

―やっぱりこいつ、古明地さとの…！

「お姉ちゃん、何してるんだろ…。もう一度、会いたいなア…」

その表情を見た易者は、ゆっくりと銃を降ろし、床へ捨てた。

「お前に似た奴を知ってるよ。それに、俺は元人間だ、元妖怪のお前の気持ちもよく理解できる」

「うふふ…元妖怪、ね…。確かにそうね…ゲムルルもメンドーサも、皆最初は妖怪と人間だったのよね…。私も同じだったって、今気付いた…」

「それで、さっき言ってたお前が俺に聞きたい事とは何なんだ？」

「ああ、肝心なこと忘れてたわね…。貴方、騒ぎを起こした侵入者の一味でしょ？」

「そうだが…」

「だったら、私のお願ひ、聞いてもらえないかしら？」

第29話 「遠く群衆を離れて」

その後、その場所へある者たちがやって来た。一人の体格の良い男と、他は二人の憲兵団だった。

「私は法玄ほうげんという。昔は兵隊を率いて幻想郷を攻撃していたが、今やアナト様の助手を務めている」

法玄は礼儀正しく易者にそう名乗った。

「俺はバク隊一号」

「同じくバク隊二号」

「三人とも、三年以上私と行動を共にしてきた信頼できる連中よ」

このバク隊の二人は一般の憲兵団であり、本来は使用期限である二か月を過ぎれば廃棄されてしまう。しかし、新子の知り合いのバンが使用期限を過ぎても破棄されなかったことでイレギュラー化したことを聞いたアナトは、最寄りの憲兵を廃棄せずに実験のために自分の直属の隊に任命した。結果、禍王に反感を持つアナトや法玄に忠誠を誓うようになった。

「私の計画に協力してほしい。ずばり、私の計画は…打倒禍王よ」

「何だつて？」

「さつき貴方と仲間には、“転換計画”に使われる蟲が体内に入れたの。“転換計画”っていうのは、その蟲が体内に入ることによって対象者にとって都合のよい幻覚を魅せ、それにより意志を奪い、肉体をフリーにさせる。そのフリーになった肉体を蟲が操作することで、禍王の手下を一気に増やすっていう計画よ」

「そんな計画が…。では、俺の仲間は既に…」

「でもね、その蟲は私が造ったの、だから細工が施してあるのよ。禍王の命令じゃなく、私の命令だけを聞くようにね」

「…それでどうするつもりなのだ？」

「今頃、転換計画を施される全ての妖怪と人間が、闘技場に集まっている頃かしらね。禍王は、その闘技場で転換計画を行うつもり…全員に蟲が入れられた段階で、私が命令を出すの。“禍王を倒せ”つてね。そこで貴方には、貴方の仲間にごこのことを伝えてほしいの。貴方の仲間

は、すぐに蟲を解除してあげるから」

「よし…分かった。引き受けようじゃないか」

「うふふ、ふふふ…あははは…」

「何がおかしいんだ？」

「いやあ、ね…正直に話すのって、楽だなあ…って思ってたね」

己の過去のせいで他人を信用できなくなり、そして禍王の手下となって自分をも偽り続けてきたアナト。しかし、今の心は、実に清々しいものであった。

「これが終わったら…会いに行けよ、お前のお姉ちゃんに」

「…何ですって？会いに行け…？今更こんな格好で会いに行ける訳ないでしょ!？」

しかし、その後の易者の一言を聞き、先ほどとは打って変わって一気に怒りを露わにするアナト。

「さつきも、理解できるって言ってたけどサア…人間から妖怪になったアナトと、妖怪から何にも属さない異形になった私…アナトに私の何が分かるって言うのよ!？」

「分かるさ、『古明地こいし』」

「な…いなん、で…私の…前の名前…いまだ、誰にも言っていないのに…まさか、最初から気付いて…その名前を言うタイミングを作って…」

「当然だ。知ってたかい？占い師っていうのは、感情を操る職業なんだよ奴らは敵だろ？俺達、妖怪の…」

「チツ…一人逃げてきた貴方に、組しやすしと思っただけ近づいたらとんだ食わせ物だったとは…トホホ」

そして、現在に至る。易者は囚人の隊列に混じり、闘技場へ並ばされていた。

前方には大きなステージがあり、頭上は赤い雲が渦巻いている。易者は周りの囚人たちの顔を見渡して、胸を引き裂かれるような気分になった。どの妖怪も人間も、この世の全てに絶望しきり、疲れ果てたような表情をしていた。しかし、その顔にも、ほんの少しだけの僅か

な希望の色が浮かんでいる。この囚人たちは、恐らく今日、自分たちが一斉に処刑されるためにここまで連れてこられたのだと思っている。なのでこの地獄のような日々ももう終わり、これからはもう苦しまなくていいんだ…と。

占いにより多くの者の内面を察する事に長けていた易者は、それが痛いほどに分かっていた。

少し離れたところには、数日前に工場を襲撃した、例のスラッグが鎖で雁字搦めにされた状態で檻に入れられており、その近くに足と首に重しを付けられた二羽の怪鳥ガルガがぐったりと佇んでいた。二羽ともまるで目に生気が無く、死にかけていることは名目だった。三年前の決戦で七羽いたうちの五羽が倒され、ガルガは完全に禍王からの信頼を失っていた。それにより、地下に監禁され、それきり空を飛んだことは無いのだろう。そして、これからも…。

そのさらに向こう側には、模様の付いた鉄板に磔にされた、ボロボロのメンドーサの姿があった。その横には、びしつと指先すら動かずに直立しているアナト、法玄、そしてバク隊の二名が居た。

―頼むぞ、お前たち…

易者はそう念じながら、服の中に隠した打ち出の小槌を握りしめた。

一方、同刻、闘技場室内の王の間。

「何かな？ゲムルル」

王の間に居た禍王の元へ、ゲムルルが訪れていた。背を向ける禍王に対し、膝を曲げて跪いている。

「この短期間で随分変わったな」

「は…不本意ながら、敵の妖怪共との戦闘の中で、我はより高みへと上がってしまったが故…。そこで、我は思ったのです。妖怪とは、そして人間とは…一体、何なのでしょうか？」

「…ほう？」

「禍王様は、妖怪は無知な人間を飼い利用していると申しとおりましたが、我にはとてもそうは見えませぬ。先刻の侵入者共は、人間と妖

怪が手を取り合い、互いに心のような物で繋がっているような気がしました。利用する、されるのような立場ではなく、対等な存在として…」

禍王は振り向き、そのゲムルルの顔を見た。以前よりも深みの増した顔。両者はしばし見つめ合ったのち、禍王はもう一度後ろを向いた。

「妖怪とは、そして人間とは何かを知ることが…幻想郷を知るという事だ。それを知るには、お前はまだ浅すぎる。知りたければ見続ける事だ、幻想郷の闇をこの身で受け、体験する。そうしなければ…私が見たり着いた真理を知ることができないのだから」

禍王は思っていた。

どうやら、ゲムルルは敵との戦いで戦闘力や精神面においてもかなりの成長を遂げたようだ。が、通常状態のゲムルルの外見にもあらわれている、角や翼の身体的特徴は明らかに妖怪の物。どうやら、今の質問は妖怪の念に意識を侵された故のものだったのか…。

「まあ、いい。今日で奴らも生まれ変わる。同時に、幻想郷が私のものと成る日だ」

「集められた人妖共よ、こちらを見よ！」

前のステージで、アナトが声を張り上げた。その横には、転換計画の眼の蟲が詰め込まれたメタルボックスが五台、置かれている。易者の周りの妖怪たちが、のそりと顔を上げる。

「これより、禍王様直々に、お前たちに転換計画を実行していただく！」

隊列に、わずかにざわめきが起こった。

「『転換計画』とは、お前たちの体内に蟲を侵入させ、身も心も生まれ変わる魔法のような物だ。これで、お前たちの地獄のような苦しみが終わるんだ。なあと、蟲が入る時はちよつとヌルツとして気持ち悪いけど、たった一秒だけの辛抱さ」

その時、ステージにかけられていたカーテンがパツと開かれた。するとそこに居たのは、新子たち、新レジスタンスのメンバーであった。

やはり、皆生気の抜けたような顔で、ただ俯いているばかりだ。

ステージ上に晒された彼女らを見て、見知っていた者は気の毒そうな顔になる。

「この者らは愚かにも禍王様に反旗を企てた侵入者だ。見よ、お前たちもこやつらのように、何も考えなくて済むのだ」

「新子……！」

易者は思わず小さな声を漏らした。

「さア、禍王様……今こそお出ましく下さい！」

アナトの呼び声に応えるかのように、頭上に沸き立っていた赤黒い雲から、小さく何かが分離した。その姿は真つ黒な人影で、巻き上がった金髪、眼の中の無数の瞳が群衆を睨みつける。

空を引き裂くような轟音と共に突風が吹き荒れ、群衆は悲鳴を上げ、頭を押さえてその場にうずくまる。

その直後、風に吹かれたメタルボックスが倒れてひっくり返る。正に蟲の軍隊のようにブワツと湧きだした眼の蟲が群衆目がけてカサカサと走り出す。波のように押し寄せる蟲は、うずくまる群衆の体によじ登り、その耳や鼻を目指している。

蟲は再び易者の足元を上ろうとするが、どういう訳だか、何かを避けるかのように上るのに大分手こずっているように思えた。

「まさか……」

易者は服の袖の中から打ち出の小槌を取り出した。この突風と闇の中でも、淡い光を放つ打ち出の小槌の聖なる魔力が蟲の侵攻を阻んでいた。

やがて、群衆の悲鳴もなくなった。辺りには、再び静寂が訪れた。

「これでお終いだ」

「そうでございますね、禍王様」

アナトが手を叩きながら、ゆっくりとそう言った。

「お終いですね……」

「……キサマ」

何かに感づき、アナトを睨む禍王。

「さア、私の蟲を植えられた人妖たちよ！今こそ私の命により、禍王を

討つよ!!」

アナトは高らかにそう叫ぶ。

…が、しかし、アナトの命令しか聞かないハズの蟲を入れられた群衆も、そして新子たちも、一向に動き出す気配が無い。何も変わらずに、ただ虚ろな顔で空を眺めているばかりだ。

「あ…れ…?」

アナトは固まりながら、恐る恐る禍王へ目を向けた。

「フ、フフフ…お馬鹿さんなアナト。私がお前の企みに気付かないと、ちよいとでも思ったのか? よつてお前が改造を加えた虫を、さらに私が改造するなど造作もない事」

—何だと…! 失敗したのかアナト…!!

易者は心の中で叫んだ。

「くつ…だったら、法玄…そしてバク隊!」

アナトの声に答えた法玄とバク隊の一号と二号がステージ横から飛び出した。剣や槍を手に、禍王へと襲い掛かった。

が、禍王は立ったまま動かず、魔力の波動を体から放った。

ゴパア

それを喰らった三名は、吹き飛ばされると同時に、圧倒的密度と威力を誇る波動により、その肉体がバラバラに碎け散った。

「ひ…そ、そんなア…!!」

「私へ向けられる苛立ちと憎悪…それに気づかないとでも?」

アナトは、自分の周りに落ちる部下の骸を見ながら考えていた。

—この場をどう乗り切る!? どうすれば逃げ切れる? コイツから…! チクシヨウ…知っていたはずなのに、こんな馬鹿げた化け物だつて知ってたはずなのに!! 魔が刺したんだ、クソオ…だつてあの侵入者どもがいとも簡単に軍隊を壊滅させるものだから、禍王を破ったものだから、何か私にもやれるんじゃないかって、思い上がってしまった、イキってしまったんだ!

そうだ、馬鹿だ私は…いろいろいっぺんに起きて、お姉ちゃんの事思い出して…パニックになってセンチになって、ヒロイズムに酔ってしまった! チクシヨウ、あの占い師の男の所為だ! アイツが私のペー

スを狂わせた、感情を狂わせやがった…私のレールを変えてしまったんだ！何とかしないと…何が残ってる？私の手ごまに？侵入者、お姉ちゃん、転換計画、これを総動員して一体何をすれば、私が助かるんだ!?

しかし…禍王がアナトへ向けて腕を伸ばした時。

「ひい…!!」

アナトは、即座に理解した。

—私は…死ぬより酷い苦痛と絶望を与えられてから…死ぬ!!

着用していた軍服の胸元からコードのような細い管が伸び、その先端が丸く膨れ上がり、閉ざされた“第三の目”が姿を現し、真つすぐだった紫色の髪の毛は銀に近い白髪に変わり、クシヤリと癖が入る。己の未来を知ったアナトは、彼女が妖怪であった時の特徴を著しく蘇らせたような風貌へと変わっていた。

—生きたい

その間、脳裏では、過去の一切が高速で雑然と流れ、その直後に弾け散り、現在と混ざり合った。生への執着と、不可避の死との境界の中、無意識に生きたいと願い、死を回避するための言葉がいくつ浮かんだが、それとは裏腹に口から飛び出た言葉は…

「お前らマガノ国は、私の、妖怪の…敵だ!! 私たちの!」

「そうか、死ね」

アナトの死期を速める言葉であった。自分の胸の内の想いを、その対象である禍王へ言い放ったことにより、アナトは先ほどとは打って変わり、自分の運命を甘んじて受け入れようとしていた。

ただし、それを見ていた易者だけは…

—頼む、もう誰でもいい、この際なら博麗の巫女でもいい…助けてくれ!!

密かに打ち出の小槌を降るのだった。

「ここは…どこだ? おーい、皆…何処に行ったんだ…?」

里の祭りの会場へと向かっていた新子は、いつの間にか薄暗い不気

味な場所へと迷い込んでしまっていた。松井の屋台の明かりもなければ、空には月も星も瞬いてはいない。

「お」

と、その時、向こう側に何か動くものを発見した。

「ははは、こんな所で喧嘩してら…」

どうやらもみ合っている様子の二人の元へ、速足で駆け寄ろうとする。

「いや、ありやあ…!!」

二人とも、見覚えがあつた。一人は黒い服を着た背の高い色黒の男で、もう一人は眼鏡をかけており、緑色のエプロンを着用している。

「父さんと…熱風!!」

新子が駆け寄ろうとしたその時、目の前で熱風は右腕に紫色の魔力の剣を生成し、父親の胸に突き刺した。

「父さん!!」

「…何故…」

「え?」

「何故、私を助けなかった…? 何故! 私が殺されるのを黙って見ていたのだアアア!!」

そう言った父親は口を大きく開き、そこからまるで水死体のようにブクブクと膨らんだ姿の父親が現れ、新子の首を掴んだ。そのまま力を込め、ギリギリと締め上げて来る。

「う…うわあああああ!!」

自分を覗き込む目は底なしの深淵のように真っ黒で、吸い込まれてしまうような闇をたたえていた。それに対し、新子が恐怖を感じ、叫び声を上げた瞬間、その父親の姿をした闇は口や耳、鼻から体内へ侵入してくる。

“ 転換計画 ” の眼の蟲は、まず対象者の体内に入ると、その者にとって都合のよい夢を魅せる。それにより絶頂の幸福や満足感を感じた瞬間の直後に絶望する、あるいは恐怖するようなトラウマを見せつけ、それにより心の隙が生まれてしまうと、蟲はそこから完全に心を破壊し、肉体を乗っ取れるようになるのだ。

— そうだ… アタシは父さんを助けられなかった… 怒られて当然だよなあ…

「そうなのよねえ。確かにアナタの所為よねえ、父親が死んだのは。アナタが間に合わなかった… あるいは弱かったから」

声は続ける。

「だから、アナタがやるのは、自分自身を許してやる事だつてね…」

その言葉を聞いたとたん、怪物と化した父親が縮こまったような気がした。

「人間っていうのは弱いモンでね、そう自分を責めて思いつめちゃうモンなのよ。でもそれだけじゃあ心が壊れちゃう。そういう時は… 誰かに殴って怒ってもらえばいい。自分を責める必要なんて無いわ」

新子は、首を絞める手を掴み、さらに強い力で引き剥がした。

「アナタは… どうしたいの？ 鈴奈庵の本居新子」

「アタシは… テメエなんかにかけてられねえよなあ…。だってよ、過去に死んだ人つてのは、必ず何かを残すのさ。それが残ってるから、生き返る必要も化けて出る必要もない。もしそんなヤツが居たら、ソイツは何も残せなかった能無しバカヤローつて事だ。だからテメエは… クソバカヤローだ!!」

ニセモノの父親の腕を放し、その膨れ上がった顔面に膝蹴りを叩きつけた。ニセモノは金切り声を上げながらスルスルと縮まり、煙と成って消えた。

「あ、アンタは…?」

振り返った新子は、声の主に対してそう聞いた。声の主は自分より一回り年下の少女で、赤い巫女服に、頭には大きなリボンをつけていた。

「覚えてない？ 会うのは初めてじゃないと思うけど」

「もしかして… 博麗霊夢か？」

「ええ、何も残せなかったから化けて出た、能無しクソバカヤローのね」

「あ、いや！ アレはどういう意味じゃ…」

「いいっていいって。私もね、生前に友人を止められなかったのよ。」

だから今でもこの世に留まってるわ…。そうして残せなかった物を必死で残そうとしてるの」

「友人…」

「新子…アナタが戦いに行くのなら、私も残したい…だから、手伝わせて」

「…ああ、いいぜ」

その時、辺りを覆っていた闇が晴れた。朝焼けのような空に、頬を撫でる風、揺れる木の葉がこすれる音。

霊夢は宙へ浮かび上がると、その身体を青いオーラに変え、新子の体を覆った。新子はその力を感じると、ゆっくりと空を見上げた。

「行くぜ、霊夢」

そして勢い良く飛び上がり、空を飛んでいく。

「ご、ごめんなさい、私は…」

華扇の目の前には、巨大な鬼が立ちはだかっていた。

「何故、お前は私を助けずにこのうとうと生き延びた!？」

「許して…」

が、その時、鬼を何かが貫いた。

「…新子！」

華扇は空を飛んでいく新子の元へ、同じく飛び上がっていった。

空を飛ぶ青い光は、沢山の狸に囲まれていたマミゾウを取り込み、家族に看取られ今にも死にそうだった妹紅を取り込み、かつての仲間と不自由なく過ごす椀、バンキ、リグルを取り込み、自分の理想の世界で生を送る聖と神子を取り込み、山の中で強い妖怪と戦闘を繰り広げていた正邪を取り込んだ。

「行つてらっしゃい、勇刃」

自分に荷物と手作りを弁当を持たせるかつての母親の前に立つ勇刃。後ろを向きながら手を振ろうとした瞬間、空に青く輝く一筋の光が見えた。

「…そうか、俺も、甘い夢を見たものだな…」

荷物を降ろし、手を握ると、その光目がけて飛んでいく。

「妖怪共の邪気に侵されて、愚かな自意識を持つてしまったようだな」
その場に崩れるアナトへ向けて手を伸ばそうとしていた禍王は、何かを感じ取ったように後ろを向いた。アナトと易者もそれに釣られ、禍王と同じ方向を見る。

「…ん？」

そこには、虚ろな顔で座っていた新子たちが居た。しかし、新子の体の周りに青いオーラが出現した直後、新子たちは目に輝きを取り戻し、パツと起き上がる。

「もう負けねえぜ、禍王!!」

第30話 「イミテーションズゴールド」

「妖怪共の邪気に侵されて、愚かな自意識を持ってしまったようだな」
その場に崩れるアナトへ向けて手を伸ばそうとしていた禍王。

「させるか!!」

が、それを見ていた易者が我慢できずに飛び出し、ステージ上の禍王に飛びかかる。

「ここまで妖怪共が抗うというのは珍しい事例なのでな。元人間であるお前を解析できれば、一気に妖怪共を滅ぼせる鍵が見つかるかもしれない」

今度は、禍王から伸びた無数の触手が易者へと向かう。あまりの威圧と圧迫感に易者ももうダメかと身構えた瞬間、禍王が何かを感じ取ったように後ろを向いた。アナトと易者もそれに釣られ、禍王と同じ方向を見る。

「…ん？」

そこには、虚ろな顔で座っていた新子たちが居た。しかし、新子の体の周りに青いオーラが出現した直後、新子たちは目に輝きを取り戻し、パツと起き上がる。

「もう負けねえぜ、禍王!!」

「新子、これを!!」

易者は立ち上がった新子へ向けて、手に持っていた打ち出の小槌を投げる。それを受け取った新子は、地面へ小槌を叩きつけ、こう願った。

『全ての転換計画の蟲を滅ぼせ!!』

新子たちの頭の中から追い出されるように這い出て来る蟲たち。それは闘技場へ集められた群衆たちも同じで、彼らは小槌が発する聖なる光と頭から出てきた直後に干からびていく蟲を交互に見ていた。

そして、禍王の前に、新子、華扇、マミゾウ、正邪、勇刃、椀、バンキ、リグル、易者、妹紅、神子、聖の十二名が立ちふさがる。

「馬鹿な…！お前達如きが、転換計画から脱せられる訳が無い！」

「舐めんじゃねえ！」

新子は強く言い放つ。

「そんなモン、知ったこっちゃねえんだよ。己が決めた道に禍が壁と
なって現れればそれさえ壊して突き進む！それがアタシ達、新レジス
タンスだ!!」

―打ち出の小槌よ、最後の願いだ…

新子がもう一度小槌を振る瞬間、全員が口をそろえて叫んだ。

―『禍王を倒せるだけの力を与えよ』―

直後、『東の反逆者』を生成する新子。そしてその背後に『新博麗幻
影』が出現し、有無を言わさぬ慈愛の両手でそれを包み込む。さらに
姿を現した『新ダイヤサカ』が、口内にそれを格納する。

願いによって生まれた小槌から溢れ出る魔力がダイヤサカを覆い、
魔力を使い果たした小槌は粉々に壊れてしまう。

しかし、小槌の最後の魔力を吸収したダイヤサカは内部の新博麗幻
影、そして東の反逆者と混ざり合って融合し、さらに巨大化していく。

結果、闘技場の中に、超巨大な霊力の塊が出現した。その巨軀はダ
イヤサカのような赤と紫色のボディを持っており、通常の頭部、そし
て胸や肩、腕や足に計十二個の妖怪のような荒々しい顔が出現し、そ
れぞれに新レジスタンスメンバーが搭乗している。

「因果も運命も突破して!」

「命の叫びがこの地に響く!」

「仲間の力をこの身に宿し…」

「示した道突き進む!! 『超ダイヤサカ』アツ!!」

「アタシ達を、誰だと思つてやがる!!?」

…これは、現世とは隔離され、戦闘因果に支配された幻想の地で戦
う戦士たちが、新たな力と理想を掲げ、禍に抗う物語である。

そして今、戦士たちの前に…その禍と運命が姿を現そうとしていた
のだった。

「…ほう、驚いたな、ここまで来た幻想郷の民は初めてだ。まさか、道具の魔力を利用しお前たち専用の“戦闘鎧”を生み出してしまおうは」

『超ダイヤサカ』の体躯は妖怪の山を優に越え、その二倍以上はある。「いいだろう。お前たちの投げり所とするその姿と、同じ地平で戦つてやろう」

マガノ国の大地が割れ、その地下から超ダイヤサカと同程度に巨大な化身が姿を現す。肩から外側へ向かつて伸びる翼には巨大な目玉がいくつも埋め込まれており、その翼の先端からはもう一対の長い腕が確認できる。灰色の体に、頭部には大きな角が伸び、その姿はさながら悪魔のようにも見えた。

禍王はその中に入り込むと、その化身の眼が光り、超ダイヤサカに向き直った。

「アレは…どういうことだ？」

「妖怪に絶対的絶望を与える、禍王専用超巨大戦闘鎧“ベヒーモス”。これが奴の切り札だ。かつての大戦で、ダイヤサカはアレに敗れた」「正邪、その身体は…!？」

新子が搭乗している超ダイヤサカの頭部に、モニターのような物を通じて姿を見せた正邪がそう言った。その正邪は、生前のような肉体を持つており、新子は驚いた。

「小槌の魔力で得た付け焼刃の肉体だが、今はお前たちと共に戦わせてくれ」

「心強いな」

ベヒーモスとダイヤサカは、同時にゆっくりと歩きだした。両者は互いににらみ合いながら、徐々に歩く速度を速め、ついには走り出す。

そして互いの顔と顔が触れる距離まで接近した瞬間、同時に拳を顔面へ喰らわせた。

両者は後ろへ吹き飛ぶが、ダイヤサカは態勢を整えると同時にベヒーモスへ蹴りを繰り出した。しかし、ベヒーモスはそれを腕で受け止め、カウンターとして殴りつけた。

「うお!？」

さらに、倒れようとするダイヤサカの脚を掴み、振り回しつつ何度も地面へ叩きつける。

「そんなものかア…本居新子オオオオオオ!!」

肩から伸びる長い腕を振りかぶり、もう一度渾身の力で殴り抜けた。ダイヤサカは勢い余って地面を転がり、例の工場にぶつかって空中へ跳ね上がる。

「ふはははは!!」

肩の目玉からレーザー光線を発射するベヒーモス。ダイヤサカはそれを避けながら、空中に浮かぶ衛星戦艦を盾にするように後ろへ隠れる。

「任せるのじゃ」

マミゾウが、ダイヤサカの生成した弓矢を取り、狙いを定める。スコープで敵を覗いているとき、先ほど禍王が頭部に入り込んだのを思い出し、頭部の中に居る禍王の本体目がけて矢を放った。

ズキユン

ベヒーモスの頭部は損傷し、同時に本体の禍王の顔半分を焼き払った。

「な…アレは!？」

吹き飛んだはずの禍王の顔半分は、肌色の肌を見せており、人間と同じ顔になっていた。

「まさか…、禍王は…」

「その通りだ。この私も、元はお前たちと同じ、幻想郷に住む人間だった。が、妖怪の存在が幻想郷に滅びをもたらすと気付いた私は故郷を去り人間であることを辞め、このマガノ国を作り上げた!」

ベヒーモスは空中に浮かんでいた岩塊を手に取り、それを手裏剣のように投げつけた。ダイヤサカも衛星戦艦を抱えるようにして移動させ、飛んでくる岩塊を防いだ。

「妖怪を滅ぼすために妖怪を超えた存在となったこの醜き姿こそ、私の決意の印!!」

「そこまでして幻想郷の妖怪に執着するのか!？」

椀とバンキがそう言い、ダイヤサカの右腕をカギ爪の生えたような構造へ変え、それでベヒーモスへ飛びかかる。

「無駄な事だ。このマガノ国は完全に私が支配している。ここでお前たちが勝つ可能性は、ゼロだ!」

カギ爪の攻撃をもいとも簡単に受け流し、刃状の長い腕を振り回して攻撃を加える。ダイヤサカも右腕でそれをガードし、地面に着地する。

「可能性は自分で決める!!」

勇刃はベヒーモスへ向かい、ダイヤサカの拳による乱打を浴びせた。

「無駄だア!ぬううう!!」

が、ダイヤサカの顎にアツパーを喰らわせ、その身体を空高く突き上げる。

「この程度の、真理も理解せずに、闇雲に進む!それがお前たちの姿だ!人間としてのささやかな暮らしすら妖怪に奪われ、この地の支配者となり、元は故郷だった幻想郷に住む妖怪たちと闘い続けるほどの覚悟が、紛い物であるお前たちにあるか!？」

そう言い放ちながら、空中でダイヤサカの腹を蹴り、そのまま落下させて地面へ激突させる。そして、そのまま動くことのできないダイヤサカの頭部に拳を叩きつけた。

「否ア!否否否否否否否:断じて、否アア!!」

成す術もないまま、劣勢のダイヤサカは、ただ殴られ続ける。そして極め付けと言わんばかりに巨大化させた拳に潰され、霊力が血のように真つ赤な液体となって噴き出した。

「決意も無く、覚悟もなく、道理もなく!妖怪共は歴史を都合の良いように改竄し、何も知らない人間たちを利用する!少しでも自分たちの意にそぐわない人間が現れば、それすらも黙殺し、何ともないような顔で人間を飼いつける!それが妖怪たちの愚かな行為であり、真実

だ!!」

ダイヤサカの肉体を引き裂き、千切り、潰しながら痛めつけていく。霊力の血を噴出し、ボロ雑巾のようになったダイヤサカの首を掴み、顔を近づける。

「だからこそ、滅びなければならぬのだア!!!」

ダイヤサカを天に掲げるようにして上へ持ち上げ、そして思い切りバラバラに破壊した。

同程度の大きさを誇っていた両者だったが、わずかに禍王が実力を上回り、そして勝った。壊れたダイヤサカから、搭乗していた新子たちが投げ出される。

「幻想郷、か…」

ベヒーモスはゆっくりとマガノ国と幻想郷の境界面に向けて歩き出した。そして、幻想郷へ向けて、長く巨大な腕を伸ばすのだった…。

そのころ、人間の里では。

道を歩いていた阿富が、人々が騒がしいのに気付いた。人々の視線は、北の空を向いていた。自分も一緒になって見上げると、阿富は青ざめた。

「本居さん本居さん本居さーんーん!!」

阿富は猛スピードで走りながら鈴奈庵に戻り、カウンターで本を読んでいた新子の母親の手を引っ張った。

「ちよっ…稗田さん!?!どうしたってどういうの?」

「いいからいいから、ホラ、見て!!」

半ば無理やりに外へ出された新子の母親は、阿富が指で指す方向を見て、ぎよっとした。

北の空に、巨大な一対の目玉が浮かんでいる。とてつもなく巨大だ。

「何なんだ…あの化け物は…!」

同じく、空を見ているツムグが驚愕の声を上げた。

「あそこはマガノ国…という事は、禍王か…!」

迪郎がそう呟く。そう言っている間にも、禍王の伸ばした巨大な手

が人間の里の上空を覆い尽くし、さつと暗くなった。

「くははは…本居新子よ、お前が守ろうとする人間どもが滅ぶ様を、高みの場所から見物させてやろう」

ベヒーモスはダイヤサカの瓦礫の中から、東の反逆者を探り出し、自分よりも高い位置へと持ち上げた。東の反逆者は既に半壊して崩れかけであり、ぐったりとしている。

「あ…新子の『東の反逆者』が…!!」

ツムグが見つめる先で、いよいよベヒーモスの手が人間の里を叩き潰そうと、ゆっくりと振り下ろされる。

「最後の抛り所と成る心とやらも折れたようだな、本居新子！潔く散れ…」

「心が折れただと…？誰がそんな事を言った…！」

その時だった。高速回転する巨大なドリルが、東の反逆者を持ち上げていた腕に突き刺さった。腕ははじかれ、持っていた東の反逆者を取り落としてしまう。その前に立ちはだかったのは…。

桃色の淡い光を放つ、茨模様の服をまとった、いかつい顔をした巨人。その頭部の両サイドからは、ヤギのように巻き上がった巨大な角が生えている。

「その通り。新子、そして私たちの心は、決して折れたりしない」

— 『新・茨木幻影』 —

茨木華扇が発現させた幻影。大ききこそベヒーモスやダイヤサカには遠く及ばないが、右手に作ったドリルを向け闘う意志を見せている。

「茨木華扇。お前如きが、この私に齒向かうか!?!」

「それもその通り。私たちは禍に抗い続ける…やってみせる！うおおお!!」

飛び跳ね、ベヒーモスの両腕による猛攻を潜り抜けながら、何とか敵の肩まで上り詰めた。そして、ドリルの先端を巨大な目へと突き刺

した。

しかし、ベヒーモスはそれに臆することなく、細長い触手を無数に放った。触手は茨木幻影を捕らえ、再び地面へと叩き伏せる。

「ははははは!! 紛い物共が、一斉に塵と成るがいい!!」

トドメと言わんばかりに、目玉の瞳から紫色をしたレーザー光線を放った。もうダメかと歯を食いしばる華扇だが、寸前でレーザー光線は消し飛ばされた。

光線は巨大な腕で遮られ、弾かれていた。真つ赤なオーラを放つ、筋肉質な巨体。額から伸びる巨大な一本角。

「お前の相手はこつちだ!!」

——『新・星熊幻影』——

「下がっていきな、華扇!」

「ありがとう、勇刃!」

「この暗黒の地で、大切な人を守れるとはな…。感謝するよ…流転の運命に!!」

拳を握りしめ、パンチの連打を放つ。それに対抗して、ヘビーモスもパンチの連打で応戦する。お互いの強烈なラッシュが続く、勇刃は一步後ろへ下がった。

「その程度、効かんわ…!!」

「どうかな!? 奥義…『新三步必殺』!!」

新・星熊幻影が足を踏み鳴らすと、津波と見まがうほどの妖気の波が発生する。三つの波はベヒーモスを飲み込み、ヘビーモスは腰を突いて倒れ込んでしまう。

ビシユン

次の瞬間、追いつき打ちをかけるように、光の筋がベヒーモスの胸部を貫いた。頭に大きな獣の耳を持ち、目の周りに隈取のある顔を向け、肩に赤い布をかけた細身の影が、巨大な弓で矢を放ったのだ。

「これはどうじゃろうなア!」

——『新・二ツ岩幻影』——

マミゾウがさらに間髪入れずに何度も矢を放つ。しかし、ベヒーモスは矢の間のわずかなスキを縫って、腕を地面に突っ込んだ。腕は地

面の中を掘り進みながらマミゾウの下から飛び出し、奇襲をかける。
「ぬぐ…ッ！」

すかさず、ベヒーモスは頭上に浮かんでいた岩塊を掴み、独楽のよう
に回転させながら投げつけた。

だが、無数の“顔”が突如現れ、岩塊に噛みついた。

— 『新・飛頭幻影』 —

胸、肩、足、腕…体中の至る所に勇ましい頭部が浮き上がった巨体。
幻影を操るのは赤蛮奇。

「妖怪に絶対的絶望を与える戦闘鎧だつて…？そんなものよりこの私
の頭たちの方が…強いわ!!ふん！」

噛みついた岩塊を粉々に砕き、両こぶしを天へ突き上げた。

その時、背後から二つの影が飛び出した。影はベヒーモスを囲うよ
うに周囲を回転し、敵へ向けて妖力の光弾を放った。

「ぬううう!!」

苛立ちの声を上げる禍王に向けて、影の一つが飛びかかり、腕にし
がみ付いた。それにより現れたベヒーモスの急所でもある頭部へ、別
の影が手に持っていた剣を突き刺した。

「白狼天狗、犬走権！」

— 『新・白狼幻影』 —

犬の顔を持つ巨大な白狼天狗の姿をした、巨大な影。

「リグル・ナイトバグ…覚えておいてもらおうか！」

— 『新・夜蛍幻影』 —

と、蟲のような眼を持った、黒い姿の幻影が地面に着地する。しか
し、禍王は二人へ拳を叩きつけ、それを掴み、握りつぶそうと力を込
める。

「小賢しいわ！」

だが、片方の握り拳にどこからか放たれた法力が浴びせられる。

「摩訶般若波羅蜜多心経…『喝』!!」

結果、握り拳は強制的に解かれ、中から権が救い出される。

「七星剣『神靈大宇宙斬』!!」

さらに飛んできた斬撃がもう片手の指を切断し、リグルが抜け出し

た。

— 『新・命蓮幻影』 —

— 『新・聖徳幻影』 —

二人を救ったのは袈裟を纏い、金と紫のグラデーシヨンのかかった髪を持つ聖にそっくりな化身と、巨大な長剣を携えた神子にそっくりな化身だった。

「油断大敵、ですな」

「気を抜くなよ、藤原妹紅」

「ああ、任せておきな！」

さらに禍王の目の前に現れたのは、平安時代の貴族を彷彿とさせるような着物に身を包んだ藤原妹紅の化身であった。

— 『新・藤原幻影』 —

化身は炎で生成した翼を展開し、禍王の攻撃を避けつつ空へ舞い上がる。翼から無数の炎による弾幕を放ち、そのまま同じように弾幕を撃ち続ける仲間と合流する。

「おのれえ…！無駄な事だと、言っている…ツぬう!？」

喋っている禍王とベヒーモスに攻撃を加え、態勢を大きく崩したのは、戦艦形態のダイヤサカであった。超妖怪弾頭を放ち、ベヒーモスを吹き飛ばす。

「はははは、喰らえい禍王！」

艦橋内でそう高らかに叫ぶのは易者。それだけでは無かった、ダイヤサカには、新子たちが地底の新都で知り合った蘇我屠自古、物部布都、寅丸星、雲居一輪、村紗水蜜らも搭乗していた。

「太子サマ！我らが推参しましたぞ!!」

「布都!？」

神子が驚きの声を上げた。

「私らも我慢できなくて来ちまったんだ！」

「貴方たち…!」

「塵共が、私に勝てると思っっているのか!？」

態勢を立て直した禍王が、ダイヤサカへと手を伸ばす。

が、目の前に出現した何かが手を受け止め、それ以上力を込めても

前へ腕を動かすことができない。

「何イ!？」

目を凝らすと、腕を押さえ込んでいたのは、幻想郷の東西南北、そして中央部にそれぞれ生息する、五匹の神獣たちであった。その背には、河城にとりを筆頭とした河童とバン、更には妖怪の山のケチャルコチル兄弟までもが確認できた。神獣はこのベヒーモスに比べれば虫のように小さかったが、その力はまさに無限の如く発揮された。

「させはしないぞ、禍王」

「その通り! 私だって負けてられないわ」

神獣たちの背後から飛び出したのは、人型へ変形した輝針城だった。それを操るのはメンドーサ。

「これからアンタに与えるのは蛇の試練よ!」新クリュサオル”の力、見せてあげるわ!」

「チイイイ!!」

細長いワイヤーのような触手を放ち、クリュサオルを貫こうと襲い掛かる。が、メンドーサはその攻撃をすぐに見切ると、クリュサオルを操り、ワイヤーを掴んで見せ、直後に引き千切った。

「幻想郷へ手は出させるもんかア!!」

その時、ベヒーモスの脚を何かが掴んだ。禍王がそちらへ目を向けると、さらに以前の十倍以上にまで巨大化した群青色の『東の反逆者』が、大きな腕で足を持ち上げようとしていた。禍王も負けじと踏ん張ろうとするが、その長い剛腕による圧倒的な力はベヒーモスをいとも簡単に持ち上げ、渾身の力で振り回す。

「ガンガンスマッシュ!!」

そのまま左右の地面に何度も叩きつけ、遠くへと投げ飛ばした。その様子を見ていた幻想郷の人里の面々は、一斉に歓声を上げた。

「新子…お前が居たから、我らもこうしてここまで来れた」

横で羽ばたいている神獣の竜であるロックが、新子にそう囁いた。「そうだ、妖怪だけでは今まで同様、禍王は討てなかっただろう。だがお前の不思議な波動が、こうして絶対に混じり合う事のない異種族を結び付けたのだ。すなわち、それは…お前たちの旅は、無駄ではな

かったという事だ」

新子たちと関わり合ってきた者たちがこの暗黒の地で、互いの種族や間柄など気にすることなく、ただ一丸となって戦いに臨んでいる。

「ああ、そうだな……。見たか、禍王！これがお前が嘲笑った、イミテイションズゴールド紛い物達の輝きだ!!何度でも言う、アタシ達を：誰だと思ってる!?!」

第31話 「東方新抗禍」

「ああ、そうだな…。見たか、禍王！これがお前が嘲笑った、“紛い物達の輝き”だ!!何度でも言う、アタシ達を…誰だと思ってやがる!?”」
新子たち新レジスタンス、地底から参戦した妖怪たち、幻想郷からやってきた神獣や妖怪…。各々が一丸となり、声を張り上げる。

しかし、禍王はそれが気に入らないとばかりに、怒りの声を上げながら再び彼女らの前へ立ちふさがる。

「この私の作ったマガノ国で、霊力や妖力を具現化するとはな！なるほど、転換計画から抜け出しただけの事はある。だが、まだだ…!!」
禍王の操るベヒーモスは、両肩から伸びる二本の腕を伸ばし、マガノ国の空に浮かぶ全ての衛星と岩塊をかき集め、超高密度に圧縮する。

「所詮は私にねじ伏せられるだけの哀れな存在！その思い上がり…後悔させて…やろう!!」

「物凄いエネルギーだ…」

「まるで…隕流星…」
メテオバーン

「そいつをぶつけようってのか…!」

『「スター…ダストオ…レヴアリエ」 エエエエエエ!!』

巨大な質量を有する衛星と岩塊を砕きながら圧縮して手の平に込め、それにより生まれた爆発的な魔力は見立て通りの隕石の勢いに匹敵するほどの力を秘めていた。その爆発的な魔力を、禍王は新子たちへ向けて一気に放出したのだ。

「永劫に続く創世界滅の劫火に焼かれ、DNAの一片まで…完全消滅するがいい!!」

「ぐああ…」

あまりの威力に、新子たちは吹っ飛ばされそうになる。地面を掴み、または手を取り合い、やっと踏みとどまれているような状態。

「やばいな、流星にこのままじゃ持たないね…!」

「新子…」

その様子を眺める、人里の鈴奈庵の前に居る…新子の母親と稗田阿富。

そしてその近くでは、同じくツムグと迪郎。

「だが、奴らがこれで終わるはずがねえ！」

ツムグの言う通り、皆もまだ諦めてはいなかった。それは人間だけにとどまらず、魔法の森の湖に生息する鳥も、かつて赤い砂丘が有った森に棲む蟲の怪物や恐竜も、竹林に住む妖怪兎たちも、諦めていない。

その願いが届いたのか、新子も拳を握りしめ、顔を上げる。

「まだまだ！まだやれる！」

「新子オー…ここは任せて…貫おうかア!!」

悠々と新子の目の前に現れたのは、鬼人正邪だった。禍王の攻撃にも臆することなく前へ歩いていき、腕を組む。すると、どこからが現れた鷹鼻の仮面が現れ、正邪を包み込む。黒い長衣を纏い、緑色の妖気を放ちながら、敵へと突っ込んだ。

『マスクドトレイラー仮面の反逆者』…リミットブレイク限界突破!!』

正邪が化身として生み出した仮面の反逆者の腕と指が無数の矢印状の触手に変わり、禍王のスターダストレヴアリエをその身で受け止めた。

「正邪！」

「嘆くな、お前たち。一度は絶望と倦怠の闇に沈んだ魂が、ここまで来れた。小槌の魔力で得た偽りの体だが、幻想の明日を紡ぐのなら、本望だ！」

正邪は笑みを浮かべ、そう豪語した。

「所詮は犬死にだ、消えろオ!!」

しかし、禍王はスターダストレヴアリエの威力を更に高め、仮面の反逆者ごと正邪を消滅させんとする。

「仮面の反逆者が消滅する…!!」

「それを…待っていた!!」

正邪は自らの体を超巨大な矢印へと変え、スターダストレヴアリエ

のエネルギーを全て吸収し、それを新子へと向けた。

「新子！受け取れえ!!」

そのまま矢印は新子の体へ浸透し、膨大な霊力を与えた。

「このエネルギーは…鬼人正邪の遺志…。よし、正邪…一緒に行くぜ」
その膨大すぎるエネルギーは、とても新子の器に収まり切れなかった。しかし、その溢れるエネルギーは、周りの者たちへと伝達され、結果として起こった事は、正邪のエネルギーを糸のようにして繋がった全員が、まるで引き寄せ合うようにくつつき、次々と融合していく。「まさか、新子がたびたび敵の力を吸収してきたのは…この時の為だった…?」

華扇がその声を漏らす。

そう、南の歌姫の番人であったゴリアテ人形と戦った時も、初めて鬼人正邪と戦った時も、熱風と戦った時も、東の歌姫の力を取り込んだ時も、メンドーサと戦った時も、新子が敵のエネルギーを吸収してきたのは、この無限の吸収能力を育てるためだったのだ。

そして、闘技場に取り残されていた囚人たちをも一部として取り込み、誕生した一つの莫大な霊力の塊は巨大に膨れ上がると同時に形を変えた。

「何だと…?」

妖怪の山の倍以上大きかった超ダイヤモンドと同じ大きさであった禍王のベヒーモスですら、そのくるぶし程にしか満たない程に巨大な霊力は、人の形へと変化する。片足をマガノ国に、もう片足を幻想郷へ置き、紫色のマントを羽織ったその姿は巨大な本居新子そのものであり、虹色に光り輝く身体はまるで幻想郷をそのまま写したかのように見えた。

「お前たち如きが、これほどまでに巨大なエネルギーを支配したのか…！信じられん！」

ただそれを見上げるばかりの禍王が驚きの声を漏らす。

「アタシ達は、人間であり、妖怪であり、全てであり！何だかよくわからないモンが混ざってできてる。それが、アタシ達って事だア!!」

—『超新子』—

「何を訳の分からない事を言っている!? それこそが滅びへの道! 幻想郷の限界に: 何故、気付かん!」

禍王も負けじとマガノ国中の魔力を吸い上げ、一気にベヒーモスを巨大化させた。全長十万メートルにも及ぶ『超新子』と、同じ大きさにまで膨れ上がる。

そして『超ベヒーモス』は、右腕を振り上げ、『超新子』へと殴りかかる。巨大な拳が飛び、それを超新子の拳が受け止める。

「それはテメエの限界だ! この閉ざされた世界で、王様気分で他の生命を踏みにじった: テメエ自身の、限界に過ぎない!」

「人の大きさは無限! その可能性に、私も賭けた!」

新子と華扇がそう叫ぶ。

拳と拳は反発し合い、互いに距離を取る。が、両者はともに宙へ飛び跳ね、大気圏を越えようかという地点での激しい戦いを繰り広げる。それはわずか一分にも満たない戦いであったが、両者の想いが、決意が、そして精神の高揚と相まって、数千を超える拳のやり取りとなつて間に火花を散らした。『超新子』の撃ちだす拳が破壊されようと、その巨体を構成している新子の仲間が次の拳を作り出し、それを繰り返した。

やがて、『超新子』はほぼ宇宙に近い高度へと向けて跳んだ。

「喰らえ: 必殺! 『超: リベリオン: トオリイガア』アアアア!!」

拳の最大級の霊力を込め、その腕をそのまま下に居る『超ベヒーモス』へと向けて、ロケットが如き勢いで突撃する。

「ほう、面白い! ならば: 必殺! 『ファイナルウ: マスタア: スパーク』ウウウウ!!」

両手から放たれた、赤、黒、青、紫など数々の色に輝く超極太のレーザーが超リベリオントリガーを迎え撃つべく飛んでいく。二つの強大なエネルギーは衝突し、ほぼ直角の鏝迫り合いを繰り広げながら、無数の衝撃波を産んだ。

∞

だがしかし。衝突した二つのエネルギーの拮抗はやがて破られ、『超新子』の拳がファイナルマスタースパークの火力に耐えきれずに、

粉々に砕け散る。

が、その内部から出現したダイヤサカが光線を受け止めようとする。そのダイヤサカの両腕も壊れようとした時、輝針城が巨大な矢印を使い光線に向かった。

その輝針城も破れた時、五匹の神獣たちが炎を吐きながら瓦礫の中から現れた。だが神獣たちも勢いに消滅されようとした瞬間、囚人として捕らえられていた妖怪たちが一斉に飛び出し、攻撃を防ごうとする。

妖怪たちも限界が近づいた時、その背後から現れた聖白蓮、寅丸星、雲居一輪、村紗水蜜の四名が光線を受け止める。さらに背後から豊聡耳神子、物部布都、蘇我屠自古の三名がそれを受け止める。

彼女らも破られると、無数の河童の集団が代わりに受け止める。それも破られ、飛び出したケチャルコチルが受け止める。

ケチャルコチルが破られ、その後ろから犬走椋、赤蛮奇、リグル・ナイトバグ、藤原妹紅、易者、メンドーサが順番に飛び出し、次々と光線に立ち向かっていき、やがて限界が訪れると、後ろからやって来た星熊勇刃が受け止めた。

勇刃は少し長く持ちこたえたが、限界を迎えると背後から現れたニツ岩マミゾウが剣と刀を使い、光線を止めようと奮戦する。

「あとは頼んだぞい…二人とも！」

吹っ飛ばされるマミゾウの背後に、堂々と腕を組んで立っていたのは、『東の反逆者』。背中には本居新子と茨木華扇がともに肩を組んで敵を睨んでいた。

そしてファイナルマスタースパークが自身に衝突しようかという時、腕を振り上げた。

ガキン

「んん…!?!」

異変を感じた禍王は、思わず声を上げる。見つめる先では、『東の反逆者』が華扇の包帯を使い腕にドリルを形成し、そのドリルを高速回転させた腕でファイナルマスタースパークを完全に受け止めていた。

「馬鹿な…今まで何者をも突破してきた今の私の力で、砕けないものはないはずだ！」

「覚えておけ、滅び去った古いモノは、新しいモノの中で生き続ける」
『東の反逆者』は一步踏み出し、徐々に光線をかき消しながら進んでいく。

「そうして古いモノは新しいモノへ教えてくれる。倒れていった者の願いと、後から続く者の希望！二つの想いをこの身に刻み、明日へと続く道を示す！それが、げんそうきよう“幻想郷”…それがとうほうしんこうか“東方新抗禍”!!このアタシの力は、禍へ抗うための道しるべだ!!」

ついに、『東の反逆者』はファイナルマスタースパークを完全に打ち消して消滅させた。両腕に装備したドリルを回転させ、ベヒーモスへ向かって飛んでいく。

『超ベヒーモス』の頭部の中に格納されていた『ベヒーモス』は、こちらへと一直線に向かってくる新子の化身に向けて先端の尖ったワイヤーを伸ばした。ワイヤーは『東の反逆者』の体に何本も突き刺さり、その肉体を崩壊させる。

しかし、新子と華扇は肩を組んだまま、崩れゆく化身を踏み台にしてなお突き進もうとする。

更に、ベヒーモスの内部から這い出してきた、赤黒い雲状の体の禍王が、眼からもう一度ワイヤーを無数に放った。

「新子!!」

華扇は腕の包帯をバネのように巻き、そこに新子を設置させ、そのままバネの勢いでミサイルのように新子を射出した。

『超新子』から続いて攻撃を受け続けてきた者たちの列は、まるで禍王へと続く道のようにもあった。そして腕を前に掲げる新子の姿は、その道を進みながら方向を指し示す矢印のようだった。

華扇の本気の力で撃ちだされた新子は真つすぐに禍王へと向かって行く。いよいよ、禍王の本体の元へとたどり着こうとしていた。

「無駄な足掻きだ！マスタースパーク!!」

禍王は右手をかざし、手に刻まれた八卦の紋様から黄色いエネルギーの光線を新子へ向けて発射した。

「新子の姉御オ、アブねえ！」

勢いのままに向かっていた新子は、それを回避する術を持たなかった。が、新子の腰に収まっていたバットがひとりでに新子の前に飛び出し、マスタースパークからその身を以って守って見せた。

「へへへ…姉御が奴を倒すトコが見れねえのが、残念でさア…」

バットはそう言い残すと、粉々に砕け、消滅してしまふ。

「バット…！」

バットが開いてくれた活路を無駄にしないために、新子は拳を振り上げ、禍王へと向かう。禍王は腕を五本ほどの触手に変化させ、それで迎え撃つ。

「うぐ…！」

触手の刃状の先端が新子の脚や肩をかすめ、血が飛んでいく。それにより勢いが殺され、後ろへと飛ばされる。

せっかく、皆の力あつて禍王の元へとたどり着こうとしていたのに、最後の最後で…！

ポン

その時、背中に何かが触れ、前へと押した。

「え…？」

後ろを振り向くと、そこには、淡い光に包まれた新子の父親と、八坂神奈子、そして鬼人正邪…今まで命を落としてきた戦士たちが自分の背中を押していた。

—倒れていった者の願い…

新子は自分の言った言葉を思い出していた。父親は少し微笑みながらガッツポーズをとる。

「うおおおおおお!!」

再び勢いと闘志を手に入れた新子は、一気に禍王との距離を詰め、落下と同時にその首元を手で掴む。新子と禍王は互いに組み合いながら地面を転がり、新子が上の馬乗りの状態で顔面を殴りつける。

「ぬおお…」

だが、禍王も自分を殴る新子の腕を掴み、そのままひっくり返す。地面に叩きつけられた新子の腹を思いきり蹴り上げた。起き上がつ

た新子は再び向かってくる禍王の顔をもう一度殴り、脇腹に肘を入れる。

「ぐはあ……！」

「ぬうううう!!」

両者はしばらくの間こうして、戦いではない、殴り合いの喧嘩を繰り広げた。

「本居新子、どうして私を倒したいのだな」

「当たり前だ……。お前は妖怪を倒すだけならまだしも……歌姫計画とか何とか言って、人間をも苦しめ続けてきたんだからな」

「それがどうした、幻想郷は私の物だ！自分のモノをどうしようとする私の勝手だ！死ね!!」

禍王の手の平に魔力が集中し、無数の星型の光弾となって新子へと降り注いだ。しかし、走り出した新子に光弾は全く刺さらず、逆にそれを粉碎しながら、新子は高くジャンプした。

「何だとー！」

「あのな、禍王……このアタシがな、ずっと前、何年も前からずっと……テメエに言いたかったコトがある」

「……く……くそ……何故だ……。何故、コイツは“こう”なのだ!?なんでコイツは“こう”なんだ……！」

拳を振りかぶる新子。

「クッソオオオ、やっぱりかアアア!!」

新子のパンチが、それを見上げる禍王の顔面に、深く……深くめり込んだ。

「幻想郷はテメエのじゃねえよ」

本居新子、キサマは凄い奴だ。

第32話 「私達の真実」

「幻想郷はテメエのじゃねえよ！分かったかゴルア!!」

禍王の顔面にめり込む拳に力を込め、そのまま後頭部を地面へ叩きつける。禍王は後ろへ倒れ込み、動かなくなる。

「く……くはは……はははは……」

が、しかし、禍王は独りでに笑い声を立て、ゆつくりと起き上がる。

「お前は凄いな、鈴奈庵の本居新子。そんなお前にも、見せる価値はありそうだな……」

「何だって?」

その瞬間、立っていた地面が消え、周囲は真っ暗な闇に包まれた。遠くには小さな光が無数に輝き、上を見れば銀色の太玉、眼下に広がるのは青い太玉。

「うわっ!」

足元に何もないので落ちると思い、その場でもがくが、どうやら見えぬ床のような物が足元にあるようだ。

「お前は、宇宙……というものを知っているか?」

同じく自分の前に立つ禍王がそう言った。

「宇宙?本で読んだことはあるが、詳しい事ア知らねえな……」

「見るがいい。この下にある青い星が、我々の住む“地球”。そして、あの遠くにあるのが“月”だ。地球を見てみる……美しいだろう。妖怪の姿や気配など全くない。そもそも、妖怪とはこの地球上の生命の進化の過程に置いて絶対に誕生するはずのない存在なのだ。だが幻想郷はどうだ……妖怪で満たされ、その悪意に汚染された醜い世界……妖怪は進化を嫌い、意地でも新しいモノを拒む。だから、私が妖怪を全て滅ぼし、幻想郷を正しい進化の軌道へと乗せてやるのだ」

パシン

目を輝かせながら、まるで自分の夢を語る子供のように夢中で話す禍王の頬を、新子が引っ叩いた。その音が何も無い宇宙空間に響き渡り、やがて静寂が訪れる。

「テメエのやり方は……間違ってる!」

「…なん…だと?」

「アンタは間違ってるんだ…そりや、それが正しくて、一番いいやり方で、妖怪は全員死ぬべきかもしれねえ…だけど、アンタは何の関係もない人間も巻き込んだんだ!」

「人間を…?」

「さつき、アンタは元は人間だったって言ってたよな? だったら思い出してみろよ、自分が人間だった時を。自分より強くて大きい何かに大切な物を奪われる気持ちを…。アンタがやってたのは、結局は幻想郷の支配者だった妖怪と何ら変わらねえんだよ!」

「私が…妖怪と変わらない…だと…」

「アンタにや、殴って道を正しくしてくれる友達とか仲間は居なかったのかよ!?!」

新子の言葉を聞いて、禍王の顔が見る見るうちに怒りの表情へと変わっていく。

「友達や仲間…だと!?!居なかったさ、ずっと前に死んじまったよ!!キ Sama、さつきから説教垂れやがって…この私の本当の気も知らないで…私が妖怪共にどんな事をされたか、分かっているのかア!?!」

禍王は新子の首元を掴み、そのまま殴りかかる。

「分からんさ」

禍王の拳が新子の顔面に直撃した。血が垂れ、鈍い音が響く。が、新子は倒れもせず、それでも話を続ける。

「でもそうだな…妖怪がアンタにひどい仕打ちを与えて、妖怪が滅ぶべき害悪な存在ってのも…まあ分かるぜ」

「ほう、私の教えた“真実”を理解したか!ならば何故私に齒向かう!?!人間を妖怪の恐怖から解放し、進んだ衣食住の文化も与えた…それが正しい“真実”だろう!」

「そう考えてえんだな、禍王!アンタの中じやそれが真実だもんな!でもなあ、アンタは今『正しい真実』って言葉を口にしたな!?!」

「…!?!」

「アタシもアンタとこうして殴り合って、やっと分かったぜ…。教えてやらア! 事実是一個…だが“真実”は受け取る奴によって色々な

んでえ！」

「な…何だと？」

「例えばな、星熊勇刃って奴がいたさ。ソイツは自分の事を鬼の癖に意気地がなくて臆病だっけって言うけど、他人から見れば鬼なのに優しくしてイイ奴って思われてたんだ！それと同じように、アンタは正義の名の下に今まで闘ってきたのかもしれないねえが、アタシら人間にとっちゃただのありがた迷惑なんだよ!!」

新子は禍王の顎を思いきり蹴り上げた。が、禍王もやり返そうと蹴りを繰り返して来る。

「だから正しい真実なんて有りはしねえんだ」

「そう…か…」

その瞬間だった。眼下に広がる青い地球から、何かがこちらへ向かってくる。ギラギラと黒い太陽のように燃え盛る二つの眼に、長大な胴体。遠くに居た時には分からなかったが、その何かは酷く巨大で、恐ろしげだった。

「グゲエエエエエエ!!」

「な、何だアありやあ…!」

悪意と破壊をその身で体現したような怪物が新子と禍王の元へと迫る。

「ついに来たか… 龍神”!!」

「りゆう…何だっけ？」

「龍神だ。これなのだ…私はこれを怖れていたんだ…コイツから幻想郷を守り続けていたんだツ!!」

「な…」

禍王の口から明かされた事実には、新子は開いた口がふさがらなかつた。

目の前の巨体は龍で、その大きさは先刻、新子が発現させた『超新子』と同等か、あるいはそれ以上であった。

「300年も昔、幻想郷を” 結界決壊大異変” という未曾有の異変が襲った。それは幻想郷の妖怪に愛想を尽かし、怒り狂った龍神が幻想郷を捨て去る際に幻想郷を崩壊させかけた、最大の異変だ…。私は、

その原因となった妖怪を歌姫計画で滅ぼし、龍神の代わりに幻想郷へやって来た神獣たちもいずれ幻想郷を破壊するのではと危惧して神獣たちを殺し、私が幻想郷を管理することで龍神の再来を抑えようとしていたのだ」

「その通り…その通りだ…愚昧で矮小な者どもよ」

龍は声を発した。

「もう充分だろう。もう充分幻想郷は存在し続けただろう。だからもういいのだ…己が滅ぼしてやるのだ！」

巨大で真つ赤な口を開き、二人へと襲い掛かる。火山の河口の中に落ちていくような感覚に陥った。

「これで満足だろう、もはや真実がどうたらとのたまっている場合ではない。新子、お前だけでも地上へ戻れ」

しかし、新子はその場で少し考えたから、口を開く。

「…なるほどねえ、コレが全ての元凶って訳か…。よく分からないが、コイツがムカつくって事だけは分かった」

「…キサマ」

新子と禍王は見つめ合う。そして、新子は手を禍王の肩にそつと置く。今、長年にわたり反発し合い、闘い続け、憎しみ合ってきた幻想郷とマガノ国が…

「やってやろうぜ、アンタとアタシなら、いけるさ」

互いに手を取り、最大の脅威に立ち向かおうとしていた。

龍神は二人を一気に口の中におさめ、丸呑みにしようとする。

「むぐ…!?!」

が、異変を感じ取った龍の眼が大きく見開かれた。その身体をよじり、暴れまわる。そして、その目が飛び出してしまいそうなほど大きくなり、金色の毛におおわれた後頭部がメキメキと盛り上がる。

その直後、膨らんだ後頭部が裂け、その部分から目もくらむ恒星の如き極物のレーザーが突き出した。先端が矢印状に尖ったマスタースパークは龍神の頭部を完全に破壊し、なおも残りの胴体を焼き払おうと長時間にわたって放たれていた。

「ゲバァ…この己が…！禍王、貴様如きに…」

断末魔の叫びと共に、竜の身が裂け始める。その裂け目から、拳を前に突き出し、禍王の『マスタースパーク』の威力に乗った新子が姿を現す。

「禍王だけじゃねえさ」

新子の言葉を聞いた龍神は、この宇宙空間で粉々になり、やがて消滅していった。

「…新子、戻るぞ。時間が無い」

「あ？」

禍王は新子の手を掴み、物凄い勢いで地球へと向かって降下する。「今は私の魔力により宇宙空間での活動が可能となっていたが、その私も…今ので尽きようとしているのだからな」

よく見ると、禍王の体が、糸のほつれた布のように少し崩れかけているのに気付いた。きつと、先ほどの龍にやられたのだろうか。

二人は共に地球へと向かい、ようやく重力に捕らわれ、落下を始める。大気圏に突入し、断熱圧縮による空力過熱現象による膨大な摩擦熱で、二人の体に灼熱の波が襲う。

「ぐぬぬ…熱すぎる…ぜ…！」

「…新子、お前が居なければ私はあの龍神には決して勝てなかっただろう。そして、幻想郷を守るといふ私の悲願は達成された」

「まさか…テメ、勝手にまとめようとするんじゃない!!」

「だがな、まだ安息の時は訪れないぞ。幻想郷に妖怪が存在する限り、何百、何千何万の時の果てに私と同じ真理に辿りついた者が誕生するかもしれない。そうなってもお前たちは…それに抗い続ける気か？」

「ああ、そんなヤツ出さねえさ。妖怪も今回の件で懲りただろうよ…これからは人間と妖怪が対等に折り合ってやっていけるように、幻想郷を変えて見せる」

「ならば、私の愛した幻想郷…必ず守れよ」

「当然だ。アンタも信じてくれ、アタシ達を…」

「ふふふ…人間とは、私が今お前を守っているように、他人の手を借りなければ生きてゆけないのだな。いくら年を経ても赤子のように弱くて夢くて…。ああ、何と愛しいのだろう。人間という生命は…」

「アンタ馬鹿だぜ…今まで自分は人間じゃないような顔して…今になつて自分が人間だつたつて気づくんだ…」

禍王は大気圏の熱から新子を庇い、その身体がボロボロになるまで熱に耐え続けた。そして、ついに腕がボロボロに崩れ、熱が収まる頃には、禍王は炎のような光に包まれながら空へと舞い上がった。新子の背後からも、今まで新子に力を貸していた博麗霊夢の幻影が現れ、禍王と共に新子の体から離れていく。

禍王と霊夢は互いに手を握り、見つめ合いながら、炎に散らされて消滅していく。

「霊夢…」

霊夢は禍王の消滅しゆく身体を抱きしめた。禍王の顔と体はかつての人間であつた時の姿へと思つており、禍王は一人の人間である霧雨魔理沙として、最期にこう呟いた。

「…私が、間違つていたぜ」

落ちていく。新子は無事に大気圏に突入し、地球表面へ向けてひたすらに落下していく。雲を突き抜け、落ちる先は日本の内陸部…そして一つの開けた空間。

「新子！」

「…はっ!!」

微かな力強い呼び声を聞き、新子は我に返つた。下を見ると、どうやら自分はマガノ国の闘技場へ向けて落ちているようだった。その場でもがいても、もう打ち出の小槌も霊夢の力もなく、飛ぶこともできずに、ただ落下という他に選択肢のない状況に立たされていた。

このままじゃ、激突して…!!

「しっかりしろ、新子!!」

しかし、華扇は闘技場の地面を猛スピードで走り、新子を受け止めようと高くジャンプした。上手く新子をキャッチするが、華扇もその勢いにより地面へと向かう。

「新子！」

が、勇刃とマミゾウを初めとする新レジスタンスがその下から飛び

跳ね、新子を抱える華扇を受け止めた。他にも神獣たちやにとりやバン、地底の妖怪を初めてとする集団がその下に入り、何とか激突の衝撃を最小限に抑え込んだ。

治まった煙の中で、華扇は新子を抱き上げる。

「おかえり、新子」

「…ただいま」

その場の全員にも安堵の表情が漏れる。その笑顔と共に辺りを照らし始めた太陽の光は、ついにマガノ国との長年にわたる戦いが終結したことを現しているようだった。

「…まずいぞ、お前たち」

前に進み出た椀がそう口にした。

「何だ、どうしたっていうんだ？」

「どうやら、このマガノ国も崩壊して完全に消滅するらしい。現に、私の千里眼が見つめる先で崩壊が始まっている」

「マジかよ、もう少し早く言ってくれ！」

「でも、どうすれば…」

地面が揺れ、空がひび割れ、真っ黒なカーテンのように闇が漏れ出してくる。物凄い爆音とともに、闘技場の地面が割れた。

新子たちは思わずその場に倒れ、頭を抑える。そうしているうちに、新子たちの体は淡い黄色い光に包まれた。

気が付くと、そこに広がるのは一面の茶色い空と、銀色の床と町並み。そこに新子たちは寝転がっていた。

「ここは…何が起こったんだ？」

「新子さぁん!!」

その時、目の前に何かが飛び出してきた。自分に飛びつくように抱き付き、その顔を胸に押し付ける。桃のような甘い香りが鼻を突き、ふわふわとした衣服の感触が分かる。

「無事でいらしたんですねー」

そう言いながら顔を離らしたのは、華やかな青い衣装に身を包んだ、金髪の女性だった。輝かしい笑顔で、新子の顔を見つめている。

その後ろにも、同じような格好をした人々の集団がこちらを見ている。

「だ、誰でエアアンタ…?」

「あ、申し遅れました。私は綿月豊姫…月の民で御座います!!」

「月の民…だつて?」

新子がふと辺りを見渡すと、銀色の床の上に、仲間たちが座っていた。皆、今起こった出来事が信じられないと言ったような様子で頭を手を当て、新子と同じく困惑している様子だった。更に、マガノ国の囚人服を纏った妖怪たち以外にも、普通の服を着たり普通の格好をした妖怪がひしめき合い、互いに手を握り合っている。

「こりやどういうことだ?」

「落ち着いて、私の話を聞いてください。貴方達が旅立つてからしばらくして、私達月の民は新都の妖怪と話し合いました。そして、私たちも彼らも間違っていたことに気付いたのです。我々月の民は自らが犯した罪に対して自らで罰を課せていました。ですが、その必要はないのですね!道を間違えてしまったら、誰かに殴って正してもらえばいい。すぐ隣に、私たちを殴ってくれる方々は居たのですよ!」

豊姫と名乗った女性はパツと後ろを指差した。その先には、ゆっくりと歩く古明地さとりの姿があった。

「あ、古明地さとり…サン…」

さとりはぺこりと頭を下げた。

「私たちは、新都の方々に殴られました。いつまで自分自身を縛るつもりだと。そこで、私達月の民は集合思念体を解除し、冷凍睡眠コールドスリープさせていた肉体へと戻ったのです。そして、新都の方々と協力し、貴方たちをこの月の都へ移動させたのです」

「新子さん、よく無事に帰ってきてくれました。どうやら、任務の遂行し、マガノ国も完全に撃ち滅ぼした様子で…」

さとりが新子のそばへ駆け寄り、手を握る。

「いやあ、アタシだけの力じゃないさ。仲間の力があつたから、こそだ」

新子は周りの仲間たちを見渡した。華扇はまだ自分の横で寝てい

るが、マミゾウはかつて自分の子分だった狸たちに囲まれ、楯とバンキトリグルはかつての仲間たちと泣きながら勝利を喜びあい、神子や聖、妹紅や易者もその場で飛び跳ねている。

その横ではメンドーサが疲れ果てたように座り込み、その横では工場長のアナトが誰かを探しているようにフラフラと歩きながら辺りをキョロキョロしている。

「おいおい、あんな奴らまで連れてきちゃったのか……?」

新子は恐る恐る遠くを指差した。その先には、おとなしくその場で立ち尽くす例の個体の怪物スラッグに、鎖から解放された二羽の怪鳥ガルルガ、そして背中を向けているゲムルル……。

「すみません、なるべく妖怪と人間だけに絞ったつもりなのですが、あまりに混雑していたため彼らも連れてきてしまったようです」

豊姫がそう言った。

「ですが、いいではないですか」

さとりがそちらへ目を向けながらそう言った。

「あのガルルガと緑色の生き物は、私が飼ってみます。それに、貴方は私の頼み事もこなしてくれましたので」

さとりは、涙を浮かべる目で、遠くに居るアナトを見つめていた。

「お前は、これからどうするんだ」

勇刃は、新都の方を向いたまま立ち尽くしているゲムルルに話しかけた。ゲムルルは数秒黙り、勇刃の顔を見て少し笑みを浮かべてから、もう一度新都を見渡した。

「我はもう昔の事、思い出せないけど……ここは、何だか懐かしいんだ」

それを聞いた勇刃は、ふふつと微笑んだ。

「あの都、俺達若い妖怪が発展させたんだよ」

勇刃の望みが叶った瞬間であった。

最終話 「これからと未来」

「さて、そろそろ人間たちを地上へと返して差し上げましょうか」

豊姫は未だ状況が掴めていないか、または眠っている人々を見ながらそう言った。

「そうだな…。その、ありがとな」

「いえ、当然のことをしたままでです。それに、貴方たちは我々の恩人です。我ら月の民も、この新都の皆さんと協力して、折り合って暮らしていくことを誓います」

「ああ、それが一番いい」

ふと、新子の体がふわりと浮かんだ。新子と華扇、マミゾウ、そして妹紅と神子と聖も同じく浮かび上がる。後者の彼女らは人間に近い存在であり、今の人里をよりよくしていくには、彼女らの存在が不可欠であろう。地底ではなく、幻想郷で暮らしていた妖怪も、いずれは地上へと戻るだろう。今は、人間を一刻も早く故郷へ帰すことが先決との判断である。

「じゃあなー!!」

「さようなら」

「どうかお元気で…」

次の瞬間、視界が真っ暗になった。

新子たちが気が付くと、彼女らが居たのは小高い丘の上であった。一か月ほどぶりに見た純粋な青空と、さんさんと照る太陽の光。はるか遠くの北にある山脈の向こう側には、もう以前のような禍々しい影は見えなかった。

この場は大混乱であった。月の民からの、「戦いの丘の上に人間を送る」という通達を貰った人里の人間たちは、全員でこの場所に集まっていたのだ。そこへ囚われていた人々が戻ったとくれば、家族や友人、恋人との再会を喜ぶ声で混乱に陥らないわけがないだろう。

その後、一通り喜び合った人々は河童たちの支持と誘導により、無事に里へと戻っていった。

「新子！全て終わったのね！」

全ての人々が返っても、この場に残り新子の元へ駆け寄って来たのは、新子の母親だった。娘との再会に思わず抱き合った。その後ろには、ツムグと稗田阿富とその助手の迪郎が揃っていた。さらにその近くには、新子たちと一緒に地底からやってきた竜のロックがしゃがんでいる。

「よく…帰って来たな」

ツムグが新子に声をかけた。

「うん…帰ったよ」

「さてと！これで新レジスタンスの仕事もお終いじゃ」

「そうね、残りの後処理は、私たちの仕事ね」

マミゾウと華扇がそう話しているのを聞き、丘を降りて里へと戻っていく母親とツムグ達を見ながら、新子は心の隅に何か引掛かっているのを疑問に思っていた。食事の後の歯に挟まった野菜の筋のように、気にしないようにしてもそれがしつこく引掛かる。

竜のロックも巢へと帰ろうとしており、華扇とマミゾウとアタシも、後は帰るだけ。それだけなのに、自分は何が気に入らないって言うんだ？この幻想郷を守り、マガノ国も倒した。これ以上、何を…
「あ…」

新子は丘の上からざつと景色を見渡したとき、ある建物が目に入った。緑色の草が生い茂る大地に、ぽつかりと存在する薄い霧に包まれた青い湖、そのほとりに建つ、紅魔館。

その方角から、物凄いスピードでこちらに走ってくる馬がいる。いや…あれは普通の馬じゃない…炎でできた馬だ！そして、その馬の背に乗っているのは、身の丈に合わないぶかぶかの服に、骸骨のような顔を怒りと苦痛に歪ませている男。

「は…破魔師シャム!!」

マミゾウを本に封じ込め、紅魔館に住んでいた吸血鬼たちを卑劣な手で討った、魔法使い…!!

「何ですって?」

華扇とマミゾウが振り向く。

「テンメエエエエ等アアア!!よくも…よくもマガノ国をやってくれたなア〜!!」

三人は咄嗟に身構えるが、破魔師シヤムは炎の馬から飛び降りると同時に物凄いスピードでミサイルが如くこちらへと突っ込んできた。そして、地面に足を付けると、まるで蛇を思わせるような身のこなしで華扇の首を掴み、宙づりにした。

「下がれ…さもななくばコイツの命は無いぞ」

片腕を剣に変じさせ、その切っ先を華扇の喉元へ突きつける。

先日も、マガノ国で華扇がゲムルルに人質に取られた際には、神奈子の助けがあった。しかし、今回は助けの綱は無い。アタシとマミゾウで何とかするしか…。

シヤムは焦りのあまり、玉のような汗をかいていた。シヤムは怯えており、何をしでかすかわからない。

「シヤム、華扇を放しな。アタシ達はテメエより何倍も恐ろしい奴らの相手をしてきた。あの禍王もだ。だがテメエは逃がしてやる、どこへでも去るが良い」

「黙れ!」

シヤムは怒鳴った。

「もう、俺には何も無いんだよオ…魔力を貰い続けてた禍王もマガノ国も消えて…あとは残ってる魔力が尽きたら俺は終いなんだア、何処へ行っても意味はねえんだア」

「そして、お主には勝ち目もないのう、順平」

「俺をその名で呼ぶな」

少したじろいだ様子を見せた。

「紅魔館での教訓を思い出すと良い。誇り高い者は、どのような脅しにも屈しない、とのう。例え、財布に入れた一円を…」

シヤムはしばらくマミゾウを見ていたが、ペツと唾を吐いた。

その時、シヤムに掴まれていた華扇が急に暴れ出した。武器でも探っているのか、ポケットやカバンを無茶苦茶に引っ張る。

カバンから、色々な物がこぼれ落ちた。使い古した短剣に、地図の紙切れ、大きな鳥の羽根や傷薬。お金の入った財布も、チャリンと小

さな音を立てて地面に落ちる。

「おや」

シヤムは財布を拾うと、満面の笑みを浮かべた。

コイツ、自分の先が無いと分かっているにも、金を欲しがるのか、と新子は呆れた。シヤムへ向かって行こうとする新子を、マミゾウが制止した。

「迷惑料として受け取ってやる。この金は全て、俺が貰う。全部俺のものだ」

その時突然、時間が止まったかのように全てが静まり返った。新子が息を呑む。華扇の眼が勝ち誇ったように燃えている。

破魔師シヤムの笑みが凍り付いた。その時、紅魔館の方角から声が聞こえてきた。遙かな時を越えて漂ってくる、シヤム自身の声だ。

「もちろん、俺がせがんでいた金も宝も、一つも欲しがらねえ。もし金一円分でも自分のモノにしたら、俺が代わりに魂を差し出す！己の魂に誓う!!」

信じられないとばかりに、シヤムの顔はみるみる恐怖に歪んだ。手にした財布を見つめる。そして悲鳴を上げた。紅魔館の方角から無数の白い腕が伸び、シヤムは半狂乱で逃げ惑う。が、腕はシヤムの体が見えなくなるほど絡みつき、紅魔館へと引き寄せていく。

結果、シヤムの肉体は土塊のように崩れ、湖に落ちると、やがて溶けて消えた。

「あ、アレは…」

遠くに見える紅魔館の門の前で、紅美鈴が上を見上げていた。その先にはシヤムの取引により紅魔館をその場に留めるために魂を使っていた吸血鬼の二人が、昼の日差しの中を羽ばたいている。美鈴はそちらへスーツと上ると、吸血鬼やゲームの部屋に居た妖精たちもろとも、天へと昇っていく。心なしか、美鈴は恥ずかしそうに新子へ笑いかけていたように見えた。

「これで…本当に全て終わったって訳か…」

「全く、もう首を掴まれるのは御免だわ」

華扇が服を払いながら、落としたものを拾う。

「でも、マミゾウのおかげで気付いたのよね。私もすっかり忘れてたわ、紅魔館で手に入れたお金を財布に入れてたなんて」
「さあ、帰ろうか」

三日後、同じく「戦いの丘」の上では、そこから人里を一望する松葉杖をついたメンドーサの姿があった。包帯で腹部にある“第二の顔”を隠しており、腕や足にも包帯が巻かれている。

「アンタはどうするの?」

アナトが腕を組みながら、そう尋ねた。

「ああ、私はここで生きていくわ。私は昔の事、全然思い出せないけど…何でか、ここは懐かしいのよ」

「懐かしい、ね…」

「何て言うのかしらね、私と貴女、同じマガノ国の住民でも、ゲムルルにしてもアナトみたいに昔の事を思い出した奴って言うのは眼の光がキラキラしてるのよね。何が何でも生きてやるっていう野心みたいなものを感じるのよ。それを時々本能的に怖いつて思ったり敏感に察知できる私は多分、妖怪じゃなく…この人間の里に住んで人間だったって事ね」

「…だったら、無理強いはしないけど」

「にしても、一番死にかけた私ら二人が生き残っちゃうとはね」

「ホントにね」

二人は少しだけ笑いあった。

「さて、もう会う事は無いと思うけど…元気でね」

アナトがそう言いながら手を振った。こうしてメンドーサは人里へ行き、アナトは地底の新都へ向かう。そうなれば、今までの地底と地上の不可侵条約により、再び会う事は無くなってしまっただろう。

しかし、メンドーサは手を振り返さずに、アナトへ近づくとその手を握りしめた。

「馬鹿…それは今までの幻想郷でしょ?今、私たちのいる新しい幻想

郷は皆平等：妖怪も人間も違いはあれどその存在価値に違いは無いのよ、だから、いつかまた会いましょう！」

「ええ、必ずー！」

アナトは振り返り、ゆつくりと妖怪の山目指して歩いていった。

「さて…」

メンドーサも戦いの丘を下り始め、里へと向かって行く。

どんどんと里の外壁と、その北門が近づくにつれ、彼女の鼓動は早くなっている。

—：人間たちは、この私の異形の姿を見ても：驚かないでくれるだろうか？ 私の事を：迎え入れてくれるだろうか？

いよいよ、北門は目の前に聳えていた。意を決して深呼吸をすると、門に手を掛けようとす。

が、触れる前に門は勝手に開き、メンドーサは少し驚いた。開け放たれた門の向こうから光が差したかと思うと、そこには大勢の人々が立っていたのだ。

「え…？」

思わず、その場で松葉杖を取り落とし、固まってしまふ。きっと自分を見て怖がるだろうと思っていた人間たちは、そのような様子もなく、笑顔で自分を見つめている。

「おかえり」

そのうちの一人だった阿富が進み出て、メンドーサにそう言った。新子たちから元は里の人間だった奴が帰ってくる、とあらかじめ話を聞いていたのだ。

そしてその言葉を聞いたとたん、メンドーサが目頭が熱くなるのを感じ、あふれ出る涙を止められずにいた。

「アレ？なんでだろう…：私は涙なんて流せないはずなのに…：おかしいな」

そう呟きながら、もう一度上を向いた。

「…ただいま」

—メンドーサ、故郷へ帰る。

こうして、長きに渡る幻想郷とマガノ国の戦いは幕を下ろした。偶然か必然だったのか、マガノ国との決着が付いた日は三年前の“神の夜”と同じ日であり、その時と同じように幻想郷中の民が戦いを目撃していたのだ。

禍王の真意を知っている新子や華扇、そしてマミゾウを初めとした元新レジスタンスの面々によって、幻想郷は滅びの道から逸れたのだ。妖怪と人間のお互いへの認識と意識の違いから生まれてしまった今回の惨劇を二度と引き起こさぬよう、再び幻想郷で暮らし始めた妖怪たちは、自らを人間と対等の存在として、互いに平等として生き、そしてこれからは折り合って生きていくことを誓った。それが、“新しい幻想郷”となるのだろうか。

その後、茨木華扇の調査により、残る一匹ずつとなってしまった神獣たちも絶滅を逃れたそうなの。というのも、マガノ国からやってきた二羽の怪鳥ガルルガは野生へと戻り、神獣たちとともに空を飛ぶようになった。そのガルルガも元は幻想郷に訪れていた新種の神獣であつたらしく、そこに肉体への改造を受け入れられるように禍王の手により与えられた“万能遺伝子”なるものが存在し、それのおかげで神獣たちとの子孫を残すことが可能なのだそう。神獣たちも、人間と妖怪が認め合う限り、この幻想の大地を裏切るようなことはしないと誓っていた。

確かに、幻想郷は多大な犠牲を払ってしまった。死んだ者は決して蘇らないし、起こってしまった事実を変えられない。だからこそ、これから先をどうしていくかが問題なのだ。未来は、気の持ちようだけでなく良い方向へと変えることができるのだから。それができるのは、新しい世代の者たちだ。だから、私も彼女らにそれを託してみようと思う。

私も、もう先は長くないのだから。

稗田家十三代目当主 稗田阿富

翌年の春の、ある晴れた日の朝。幻想郷は花盛りだ。ハチたちは蜜に酔いしれ、あたりは鳥の歌声に満ちている。

髪に花を差し、上等な着物に身を包んだ新子が待つ鈴奈庵へ、ツムグがやって来た。二人は鈴奈庵の中で手を取り合い、その日結婚をした。新子の母親と華扇がその場に立ち、様々な事を思い返していた。それから、二人は華扇に連れられるがまま共に戦いの丘へ向かうと、そこに待っていたのは今までに見たこともないほど大きな宴であった。

にとりを筆頭とした河童たちと、マミゾウに連れられた狸たち、そしてバンと阿富、迪郎が静かに手を叩いている。アリス・マーガトロイドにメンドーサと、地上に出て迷いの竹林で暮らし始めた藤原妹紅に、里で占いを始めた易者、霊廟で暮らす豊聡耳神子たちと、新しく移動させた命蓮寺に住む聖白蓮たちの姿も見える。

妖怪の山で暮らし始めた犬走椀とリグル・ナイトバグと赤蛮奇、地底の新都からは星熊勇刃に古明地さとりと火焰猫燐、そして新たに新都の住民となったアナトとゲムルルが。月都ミクトランからは綿月豊姫を初めとする月の民が地上の大地を踏みしめてそこに立っていた。

香霖堂の森近霖之助までもが、わざわざこの日の為に訪れていた。空では竜のロック、グリフォンのアーゴル、ケツアールのセトレーナ、天狐のカムナ、麒麟のワブルと二羽のガルルガが飛び回っており、その側には竿打もいた。

それから、しばらくして。新子に、双子の女の子が生まれた。

旅から旅の生活の華扇はたまに里を訪れて、鈴奈庵の庭で走り回る二人の子供を眺めていた。かつて、自分が出会った二人の少女の姿を重ねて思い出し、微笑みながら。

稗田の屋敷の中では、部屋で迪郎が一人机に向かっていた。その机には阿富の遺影が置かれており、線香の煙が立ち上っている。阿富から幻想郷縁起に書き損ねた歴史を書き終えてくれと頼まれた迪郎は稗田の名を継ぎ、幻想郷縁起の編纂を行うのだった。

「いよいよ、幻想郷と同時期に誕生した姉妹世界との初邂逅の場となる。新異界会議」へ向けて、ダイヤサカが飛び立ちます。伽藍艦長はこの出発に当たり……」

里で、人で賑わう大通りを歩く一人の背の高い老婆が、掲示板に張られた紙をじつと眺め、書かれている内容を読んでいる。

すると、隣に一人の若者がふらりとやってきた。

「ああ、クソう……ダメだなあ、ああもう……」

「どうか……したのかい、アンタさ」

下を向きながらブツブツと悪態を付く若者に、老婆は話しかける。

「いや、ちよつとな……俺、自分の事がダメだなあって思ってたさ。小さい時から何やってもてんでダメでさ……頭も悪いし、喧嘩も弱いし……今だって、仕事クビにされたところなんだぜ……」

「……へえ」

「ダメだなあ……負け続けててさ。ま、それが現実って奴なのかな。負け続けて、よほどの幸運が無きや成功しないって……」

「そりゃあ、違うと思うね。アンタ、友だちとか仲間は居たのかい？」
「え……うい、一部のモノ好きな連中がよく俺を遊びに誘ってくれるさ。でもさ、こんな俺なんかあの輪に加わったところで、悪いもん……きつと、俺の事知ったら……」

それを聞いた老婆は、少し経ってからもう一度口を開いた。

「人間は、弱くてすぐに死んじまう生き物さ。アタシだって一人じゃ食べ物も集められないし、服も住むトコだって……ちゃんと作れないダメな奴さ。だから、人間は群れるんだよ。皆、お互いに出来ないことをやってもらつて、お互いに助け合わなきゃすぐ死んじやうから、群れたがるのさ。そしてね、たぶん人間は頭だっと思ってるほど良くないんだ。何が良くって何が良くないか、いつつもフラフラしちゃう……だからお互いにそばで見てもらわなきゃ。だから、アンタもその連中の輪の中に入って見たらどうかね？そして……自分が道を間違えた時、殴って道を正してくれる人を見つけてみてはどうかね？」

「……やべえな……こんな婆さんの言葉で、泣きそうになっちゃった……。良い事言うなア。……そうだ、よかつたら、名前を覚えてくれないか？」

老婆は顔を上げ、姿勢を正した。

「なアに、アタシはもうただの何でもない婆さんさ。でも、あえて名乗るとすれば…」

「伽藍艦長、そろそろ結界脱出領域へ入ります」

同刻、幻想郷のはるか上空を飛行する戦艦ダイヤサカ。その艦橋内のコクピット室で、乗員としてその場にいた金髪の女性がそう言った。

「うむ、了解したぞ、バン。よし、目指すは幻想郷の外側だ！」

—そう、かつて俺が目指し…憧れた…外側の世界…！

「師匠は…仙人ではなかったというのですか!？」

一方、妖怪の山に構えられた道場の敷地内では、頭にターバンのように布を巻き、さらに右腕が包帯で覆われた女性と対峙する男の姿があった。

「ええ、そうですよ」

「では、何故そんな事を…何故、仙人のフリなどを？俺は決めました…納得のいく答えを聞けるまで、師匠、貴方と闘います」

両手を前に構え、腰を引き、戦闘の構えを取る。しかし、対する女性は今全く動じずに、肩にとまらせていた鷲を空へ飛ばした。そして頭のターバンを解き、右腕の包帯をばらして見せた。

「この服は人間が考えて作った…おいしいごはんも、建物も…村も、町も…人間は作った物を全部次の人間に手渡して、渡された人間はそれを工夫して、繰り返し暮らしてきた。もちろんこの幻想郷にも悪い歴史もきつといっぱいあった。でも私たちは今も地球の上の幻想郷に生きてる！それはきつと人間がなんとかやっていこうと思ってるから…」

「何を言ってる!?俺が聞きたいのはそんな事じゃ…」

「次にこの世界を手渡す者たちに…人と人が作った輪の中に新しく入って来る者たちに…何とかやってほしいと思うのが人間なのです。その輪の中に、私も入ろうと思うのは…そんなに悪い事でしょうか？」

貴方が戦うのは何のため？人ならざる私を慕ってきた自分を戒めるため？」

弟子の男はぐつと言葉を詰まらせた。

「ですが、そんな必要は無いのよ。さア、来なさい！私が貴方をぶん殴って見せましょう！」

—古いモノは滅び去る…妖怪が人間を支配するという幻想郷の体制も滅び、幻想郷は新しくなった。今度は人間と妖怪、人間と人ならざる者たちが互いに手を取り合っていかなければならない。その輪は、如何なる禍にも屈せず抗い続けられるのだから…

そうよね、新子…

「あえて名乗るとすれば、鈴奈庵の本居新子ってんだがね…」

〈東方新抗禍 fin〉